

オリ主と衛宮士郎との友情ルート

コガイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは新たな可能性の物語。

少年、古崖創太ふるがけそうたは魔術師であった。生まれも育ちも冬木市であり、間接的ではあるものの、過去に冬木の大災害の被害を受けていた。それが故に、心には少年の知らぬ恐怖が潜んでいたが、二度と悲しみを生まないようと誓いを立て、マスターでは無いにも関わらず第五次聖杯戦争へとその身を投じる。

降って湧いてきた力など無く、ある条件下で強くなれるはずも無く、はたまた特定の者に対して強いわけでもない。けれども、少年は戦う。その体がどれだけ傷だらけになろうと。

果たして彼の存在が吉とでるのか凶とでるのか。そして、彼の誓いは守られるのだろうか。

この聖杯戦争は少し違っている。

どうもはじめまして、コガイです。

この作品は3つのルートを足して4で割って+ α という感じになっております。原作主人公は誰とも恋人にはなりません。あしからず。

オリ主には作るけど。

この作品にはクソしようもないネタが散りばめられています。読む際にはご注意ください。

目次

日常	1
サーヴァント	5
乱入者	13
情報整理	22
教会と神父	28
初戦・VSバーサーカー	38
戦いの後	43
事実と真実1	47
真実と事実2	53
事実と真実3	59
魔術	65
朝の騒動	72
魔術講座	80
過去の記憶	86
各々のマスター	92
偽・VSセイバー	99
柳洞寺・魔女のいる神殿	107
救助・アーチャーVSキャスター	113
夢・あの頃のグラウンドで	119
鮮血神殿	124
無自覚	131
反論	138
決着・VSライダー	147
魔力不足・嫌な再会	156

秘剣返し	381
前哨戦	373
決戦に向けて	362
相違点	353
固有結界	343
過去と恩人と友と	333
本当の正解	325
復帰戦・VSランサー	317
覚悟の覚醒	307
命懸けの抵抗	299
解決すべき要因	293
平行と交差の道	287
中身のない意地	280
反発する心体	270
棄権の合図	260
逃走、その後	253
奪取と後退	244
協定の期限	234
舞い込む問題	225
黄金剣	216
三度目の	206
戦闘準備	200
力の魔術・真の詳細	189
力の魔術・再びのバーサーカー戦	175
潜入、アインツベルン城	162

設定・資料集	534
True end epilogue 正義の味方と	521
True end 後編 戦争終結	500
True end 前編 真・VSセイバー	477
462	
Normal end 救われた現実の中で	equilogue
Hell end この世全ての破壊	epilogue
454	442
変化の時期	431
黒き者	421
反転化	409
喪失	394
VSギルガメッシュ・後編	386
VSギルガメッシュ・前編	

日常

朝、目が覚める。
服を着替えて出かける用意をする。
朝飯を食いながら、テレビのニュースを見る。
靴を履き、家を出る。
ゆつくりと通学路を歩く。
部活の朝練に参加する。
授業を受けて、時々居眠りをする。
休み時間に友人と喋る。
放課後の部活に参加する。
部活が終わり家に帰る。
風呂に入って晩飯を食う。
そして、寝る。
これだけならば、ただの日常だと思うだろう。
だけでも、俺は知っている。

聖杯戦争が始まろうとしていることが。

――1月31日――

朝方、寒いこの冬は特に地獄と化す。布団から出られず、起きると言われても先延ばしにしようとし、強制的に起こされ、床が冷たい廊下を歩き、暖房の前で朝飯を取る。それがここ最近では、我が家のリビングの風景だ。

朝飯を取り終わったら、さっさと出かける支度をして、玄関へ向かう。

「そんじゃ、いってきます。」

「いってらっしゃい。」

そう言いながら家をでる。この時間からであれば、学校に着く頃

には、ホームルームまで十分程の余裕がある。俺は部活に入っている訳でも無いし、早めに出る必要なんかは無かった。むしろ、その方が俺にとって都合が良い。放課後とかは特に時間を空けて置きたかった。

通学路の途中は別に誰と会うわけでもなかった。

「ふあゝ、今日も暇……って言ってる場合じゃあないよな。」

呑気な事を言ってもらえない理由、それはこの地、冬木に起きる儀式。

通称、聖杯戦争が始まろうとしているからだ。放っておけば、十年前のようなことになりかねない。

学校にもすでに結界が張られており、その犯人は戦う気満々といったところだ。

そろそろ自己紹介をしておこう。俺の名前は古崖ふるがけ 創太そうた。穂群原学園の二年生であり、魔術師でもある。厳密に言えば魔術使いなのだが、その理由は家系にある。

古崖家は根源を目指そうという考え方ではなく『魔術の力つてすげー!!?』というものであり、それぞれの代が好き勝手に魔術を開発している。そうなったのは、古崖家の魔術が少し特殊なものであるからだが、そこはあとでだ。

俺の容姿に関して話すとすれば、短くぼさぼさの茶髪と平凡な顔、それが唯一の特徴である。身長と体重は平均より低く、だいたいの人に見下ろされる。

「……着いた。」

ということの説明していたら、目の前に見慣れた学校が現れる。だがしかし、見慣れない部分もある。さつきも言った結界の事だ。嫌な空気が肌に触れるような感覚が伝わってくる。

早くそれを壊したいが、派手な行動は自身に返ってくる。今は我慢だ。

校門をくぐり、周囲を警戒する。誰が犯人かは分からない。だから、全てを疑わなくてはならない。例え誰であっても。

—————

校舎へと入り自分の教室に向かう。階段を上がり、廊下に足を踏み入れる。あとは右が教室の方向だが、ふと左を見る。すると

「よう、生徒会長。」

「むっ？おはよう、古崖ではないか。」

柳洞一成と出会った。こいつとは、ある人物が共通の友人として、知り合っていた。

「おう、おはよう。……お前、また衛宮に手伝ってもらってんのか。」
柳洞が美術室の扉の前に立っていたのでそう予測する。こいつがどこかの扉の前にいるという事は、大抵は衛宮に修理を頼んでいるという事だ。

あいつは作業をする時に、中には誰にも入らせないようにする。多分、アレをやっているからだろう。全く、柳洞が魔術師だったら一発アウトだぞ。……いや、あえて見逃しているのか？

「そうだ。費用が足りず、新しい物を買う余裕がないので仕方なくな。」

「ふくん、生徒会長……いや、衛宮もたいへんだな。」

生徒会長は何もしていない気がする。

「そうなのだ。運動部に費用を持っていかれ、文化部の備品はいつも修理をして、ツギハギで持ち堪えている。だというのに何故いつも……」

ブツブツと文句を言い始める柳洞。生徒会長はいつも気苦労してそうだ。

終わりの無い八つ当たりを二、三分ほど受けていたら、美術室の扉が開いた。あいつの作業が終わったのだろう。

「一成、修理終わったぞ……あれ？創太じゃないか。」

「よう、衛宮。」

「おはよう、創太。」

「終わったか衛宮、助かったぞ。」

「いいって、いつものことだろ。それよりもなんで創太がここに？」

「いやなに、偶々出会っただけだ。」

「偶々会った相手に、愚痴をこぼしてただけだよな。」

「そ、それは……」

言つとくけど、八つ当たりをされて腹立ってんだからなこっちは。あ、柳洞君、衛宮君、それに古崖君、おはようございます。」

とかなんとか思っていると学校のアイドル、遠坂凛がやってきた。

一応、横目で柳洞の顔を見てみる。うっわあ、嫌そうな顔してるな。

柳洞にとって、遠坂は目の敵らしい。理由を聞いても、女狐だからとか。訳が分からん。

「よう、遠坂」

そんな事、御構い無しに挨拶をする。けれども、知っている。この遠坂凛が魔術師だと言うことは。だが相手は俺が魔術師だということに気づいてないだろう。俺はあることをしているからな。

「おはよう、遠坂」

続いて衛宮が挨拶をする。こいつが魔術師だということも知っている。いや、魔術師だろうという予測だが。こいつは遠坂のように、常に魔力を生成していない。だから、遠坂は衛宮が魔術師だということとは知らないだろう。でも、俺は別の理由で確証を持っている。

「それじゃ私はこれで、教室に戻らないといけないので。」

そう言つて彼女は自分の教室へ立ち去っていく。柳洞は女狐めとか言っているが俺は知らない。

予鈴が鳴る。ホームルームまでの時間がない知らせだ。

「さて、俺達もそろそろ教室にいきましょう。」

「そうだな。遅刻をすると、藤村先生が何をするか分からないからな。」

「ふむ、では戻るとするか。」

それからというもののタイガーがH Rホームルームでずっこけたことを含めて普通の日常であった。しかし、この日常が一瞬で地獄に変わるかもしれないという恐怖を抱きながら、俺はそれを必死に抵抗して、日常を守り抜くと俺はひっそりと誓った。

サーヴァント

——2月2日——

あれから二日経った。昨日は特に変わったことはなく、強いて言えばクラスメイトの後藤がスパイ映画に影響された事と遠坂が休んだことぐらいだ。

そして今俺は、部活の奴らが練習を終えた時間帯を見計らって、夜の学校に一人でいる。別に七不思議や怪談の正体を確かめている訳ではない。冬だし。……いや、見方を変えればそうなのかもしれないが。

本当の理由は学校に張られてある結界にある。おそらく聖杯戦争の参加者が用意したものだろう。人が集まりやすい所に結界を置き、魂を吸って奴隷に喰わせる。反吐がでるくらい合理的なやり方だ。

しかし、妙だ。ここまで明からさまとなると困だという可能性がでてくる。魔術師キャスターがやったのか、それとも他の奴がやったのか……。

何にせよ、誰が何の目的でこんな事したのかを分かっても、俺は半人前だ。一人では何もできない。だから、今回は一旦帰ることにする。

彼女を連れて来れば、結界も止められるかもしれないし、結界の犯人もわかるかもしれない。そうでなくとも、俺の他に結界を止めようとしている奴もいるみたいだし。

ちなみに、そいつは遠坂だ。あいつも聖杯戦争の参加者らしく、サーヴァントを使役しているのも確認している。何度か出くわしそうになったが、ギリギリの所で隠密をしている。サーヴァントの方にも気づかれておらず、運が良かったとしか言いようがない。

他にも学校に残っている奴がいる。そいつはきつと、ワカメに思うようにされて、掃除を行い、ついでに他のこともやっておこうというブラウニー妖精に違いない。

さて、今から帰るということを家に居る同居人に連絡するか。

そうとなれば、ズボンのポケットから携帯を取り出し電話をする。

「もしもし、オレオレ、オレだよオレ。」

はたから見れば、いきなり詐欺を実行したかのような言い方。電話の相手は自分の息子ならアイ○スにでてくるキャラクター全部言えるよね？とか言い出す。俺はそんなもん覚えてねーよ。

「悪い、悪かった。だから、その返しはやめてください。」

……ああ、結界は一通り調べたから一旦帰る。……わかってる、無茶はしないから。今までしたことないだろ？はいはい、気をつけて帰るよ。じゃ、切るぞ。」

電話を終えたその直後だった。

外から無数の金属音が聞こえ、俺はすぐさま外を見る。

それは、普段では見れない光景だった。

ぶつかり合う双剣と槍。対峙する赤と青。それは試合なんていう綺麗なものではない。互いが生を賭けて戦う殺し合いだ。

次元が違う。それは、このことを指しているのだろう。

本来ならば、俺はこのまま帰るべきなのだろう。だが、嫌な予感がしていた。今いるのは三階。状況を知る為に降りてもう少し近くに寄るべきだろう。

そう思い、階段から下に降りて、物陰から二人を観察する。

とにかく情報を一つでも多く見つけなくては。見た所、赤い方は遠坂のサーヴァントで青タイツは単独行動みたいだ。

次に、戦う二人の得物を視る。今から行うのは古崖家特有の魔術。高速で動いているが、それは関係ない。あくまでもそれがどういう形をしているのかではなく、どういう性質なのかを判断するためだ。

青タイツが持っているのは因果を反転させるものだろう。真名を解放すると同時に結果を作り出し、過程がそれに向かつて動いている。さらに、治癒阻害まで持っているという呪いおまけ付きで非常に厄介だ。それを避けるには運命を捻じ曲げる力が必要だろう。

だが、本当に厄介なのは赤い方だと感じてしまう。あの双剣は互いに引き合う性質がある。それはかなり扱いづらいものだ。しかし、あ

それはそれだけではいいはずだ。なにかこう、赤い奴と一体化している
と言うか……

「……誰だ！」

そんなことを熟考していると青タイツがいきなり叫びだした。一
瞬、こちらに気づいたかと思っただが、別の場所を向いていた。そして、
そのまま、校舎の中へ入っていった。

目撃者は殺すと言うのが魔術師の常識なのだから、抹殺しに行った
のだらう。そして、この学校には今、三人しか（四……五人？）いな
いはずだ。俺はここにいて、遠坂は赤い奴と一緒にだ。ということは
……

まずい！

そう思いながら、走って校舎へと戻る。

頼む、頼むから生きていてくれよ……！

「と言うかなんで校舎に逃げ込んだんだ!?!？」

学校の廊下は真っ直ぐで、そうなるとスピードで絶対に追いつかれ
る。そうなるぐらいなら学校の外に出て多少分かれ道がある住宅街
の方がマシだろう。

そんなことを考えながら、青タイツが追っている奴を探す。

「見つけた。」

制服姿のあいつは尻餅をついており、敵に睨まれている。青タイツ
は今にも心臓に槍を突き刺そうとしていた。

このままだと殺される……だけど、策はある！

親の形見を使うことになるし、その策が成功するかは分からない。
あいつは確実に生き残るが、下手をすれば俺は死んでしまうだろう。
しかし、もう考える余裕はない。

一か八かだがやるしかない!!

そう決心すると青タイツはあいつの心臓に向かって槍を突く。そ
のままだとあいつは確実に死ぬ。

だがそれは俺が許さなかった。

「えっ?」

誰の声だろうか。驚きに満ちた声。それは当たり前だろう。槍が心臓に穴を開けることは確定したことだった。しかし、それは

俺の腹が空いたことに創り変えられた。

「うっ!くっ!……!」

腹に激痛が走るがそんなもん知ったこっちゃやない。俺はすぐに槍を体全体を使い抱え込むように掴む!

「なっ!……!チイツ!」

青タイツが舌打ちをして睨みつけてくる。悪いがすぐ引き抜かれて後ろのやつに襲いかかられると困るんでな。

「衛宮!」

「そ、創太?お前、創太か!?」

どうやら声を掛けられるまで俺が誰だか分からなかったらしい。こんな状況なら仕方がないと言えば仕方がない気もするが……まあ、いい。

「早く……逃げろ!」

「お前を見捨てて、か?そんなことできない!」

「いいから早く!何の為に庇ったのかわからなくなっちまうだろうが!」

「けど……!」

こんな時に衛宮の悪い癖が出てきちゃったか。しょうがねえ。ちよつと卑怯だが、言い方を変えてみるか。

「そんなこと言っつてんじゃねーよ!お前が生き残らなきゃ俺が救われねえんだよ!」

「ッ!!」

この言葉は効果覿面だったらしい。鳩が豆鉄砲食らったような顔をしている。こいつは『救う』という単語を異常に気にしているからな。

「大丈夫だ。俺は死なない。だって俺も……魔法使いだからな。」

「えっ、お前……分かった。絶対に死ぬなよ。」

「あつたりめえだ。」

俺が青タイツを抑え、衛宮が逃げたのを確認して、前に意識を向ける。

……あの時、あそこにいたのをバラしちまったな。

「話し合いはもう終わりか？」

「ああ、最後まで待つててくれてありがとな。」

「あれを邪魔するほど無粋な真似はしねーよ。」

そう、こいつは衛宮が逃げるまで何もしなかった。俺から無理矢理得物を引き抜いて、衛宮にもう一度突き刺すことができる實力を持つていながらも。

「さつき死なないって言っちゃまったけど、もうそろそろ限界かな……。さつきの奴は殺さないでくれよ？」

「へッ、そうしたいがマスターの命令なんぞでな。そいつはできねえ相談だ。」

やはりそうか。ちよつと期待したんだがな。

俺の指から力が抜ける。体から槍が抜ける。もう意識が保たない……と見せかける。実は、俺は魔力を生命力に変えて存命している。青タイツはそれに気づいていないのか、自身が来たであろう方向を見ると、別の方向に走っていった。赤い奴が来たのだろう。

まずい、本格的に意識が保たなくなってきた……。魔力が底をつきかけていく。あれを発動するのにも魔力がいるっていうのに。

俺、死ぬのか？ああ、死ぬってこんな感じなのかな。でも、でも……

死にたくない。しにたくない。シニタくない……！

「顔を見ないと。それぐらいはしなくちゃ……。」

誰かの声が聞こえ、足音が近づいてくる。その二つの主は、同じ奴だろう。顔を見ると遠坂だった。当たり前か。さつきの青タイツを追っかけてくるのなら、ここにくるのは当然だ。

「とお、さか……」

「っ！あなた古崖くん!?？」

「たの……む。」

「ごめんなさい、あなたはもう……」

違う、そうじゃないんだ。遠坂。俺の言葉を聞いてくれ。さもないと、手遅れになる！」

「まりよ、く。」

「えっ？」

「いいからはやくまりよくを……」

「あなた、まさか！」

ああ、そうだ俺は魔術師だ。だが、

「え、みやを、衛宮を、助けなくちゃ……いけないんだ！」

「……ええ、分かった。魔力をあげるわ。だけど、後で状況をちゃんと説明しなさいよ。」

分かってる。分かってるから早く！

「首のペンダント……そこに」

「そこに魔力を込めればいいのね。」

話が早くて助かる。遠坂は、首にかかっているペンダントに手を当てて魔力を込める。すると、たちまち俺の腹の風穴がみるみる塞がっていく。

「嘘……少ししか流していないのに……！」

そういうものだからな。傷が治ると同時に、段々と意識も回復してくる。そして、腹の傷は完全に塞がる。それと同時にペンダントは弾け、粉々になっていく。

「親の形見だったんだけどな。」

少し惜しい気もしたが、過ぎたものはしょうがない。一時的だが、あいつは助かったんだ。

しかし、まだ少し吐き気がする。

「さて、状況を説明してもらいましょうか？」

そうだった。確かそんな事言ってたな。

「ああ、分かっている。といっても、俺は衛宮をかばって、そしてあいつは逃げた。ただそれだけだ。」

「もっと他に言うことあるでしょ……ってちよつと待って。と言うことはつまり……」

「また、あの青タイツに追われるだろうな。」

「やっぱり話は後！衛宮くんの元に行くわよ！」

「初めからそのつもりだ!!」

学校を後にして、俺たちは衛宮の家へ向かう。

走りながらだが、遠坂と少し話をした。青タイツの方がランサーで、遠坂が従えている方はアーチャーらしい。ランサーのほうは当然っちな当然だが、アーチャーのほうは意外だ。双剣を使う^{アーチャー}弓兵とはこれいかに。

今向かっているのは、衛宮邸。普通の人なら交番とかに行くが、あいつはなんだかんだ言つて魔術師だ。そうだとすれば、自分の工房に戻った方が安全だ。遠坂はそんな事考えていないだろうが、自宅に帰っているという推測は賛同してくれた。

途中では、アーチャーと合流した。ランサーは見失つたらしい。

「状況は分かつてるよな？」

「もちろんだとも。」

良かった。ここで俺を敵だと判断されたら為す術がない。

そろそろ、衛宮邸の近くだ。そう思っていたら、

一瞬、周りが白に包まれた。

「これってまさか……」

遠坂がそう呟く。それに対して俺は

「その考えは後だ。真相を確かめに行くぞ。」

そう言い返した。

確かにあれは召喚される時の光だ。だが真実は分からない。そう

思いながら衛宮邸の扉の近くについた。

そういや、あいつの家はこんな武家屋敷だったな……

「つ……アーチャー、来るぞ!!?」

「解っている!!?」

そう言ったアーチャーだったが、扉の向こうからの奇襲に何を驚いたのか、完全に攻撃を受けてしまっている。

「この馬鹿野郎!!?」

アーチャーがよろける。相手はそんな隙を見逃すはずはなく、二撃目を繰り出そうとしている。俺はそんなことさせまいと、地面に手を

置き、学校からここに来るまでに急ピッチで創った魔力を地面に通して敵の下から壁を出す。

狙い通り、相手はそれを防ぎ、ダメージは通らなかつたものの、アーチャーとの距離を開けられた。

ハ○レンみたいだと思ふかもしれないが、実際にそれを参考にさせてもらった。

「しつかりなさい、アーチャー!!?」

まずい、非常にまずい。セイバーは何かしらの影響で弱まっているようだが、地力ではアーチャーを上回っている。しかも、こつちは一発入ってしまったている。何か策を……

と思えば誰かがやってくる。

「待ってくれ、セイバー!!?」

「シロウ!!?何故ここに来たのです!」

どうやら、目的の人物が現れたようだ。

「聖杯戦争がどうか、マスターがどうか、こつちは点で解らないんだ。」

衛宮とセイバーと呼ばれた少女は、なにやら言い合っているようだ。

そんな状況を見越したように遠坂が相手方二人に話しかける。

「貴女のマスターもそんな事を言ってるんだし、そろそろ、剣を下げてもらえるかしら?」

「敵である貴女達に下げる剣などない。」

「あら、そつちの主がそう言っているのに?へえ、セイバーのサーヴァントはマスターに逆らうクラスだったのね。」

おお、煽ってる煽ってる。

それを聞いたセイバーは悔しそうに殺気を解いた。だが敵意はそのままだ。

「さて、こんばんは衛宮くん。」

「えっ、お、お前遠坂!!?」

戦いはとりあえず避けられた。今夜はまだまだ長引きそうだ。

乱入者

遠坂のおかげで戦闘が中断された訳だが二人のサーヴァントには敵意がまだあるようだ。

けれども、そんな事は御構い無しに遠坂は話を続ける。

「さて、衛宮くん。一応、確認しておくけど、貴方は魔術師なのよね？」

「えっ、魔術師って!?!じゃあまさか、遠坂、お前も……!」

えっ?衛宮、まさか、そんな事を今まで知らずにいたのか?

「あ……。違う、今のはそういう意味じゃなくてだな、」

衛宮よ、そうやって言い繕っても、もう遅いぞ。遠坂のほうはみるみる不機嫌な顔になっている。

「……そう、納得いったわ。要するにそういうコトなワケね、貴方。」
うわー、怖えよ遠坂。スッゲー怖い。そして、その顔でこっち見ないでください。

「古崖くん、貴方は私が魔術師だつていうこと知ってたわよね?」

「古崖?!?……つまり、創太もここに居るのか?!?」

「ああ、衛宮。ちゃんと死なずに済んだぜ。それで遠坂の問いに対してだが、答えはイエスだ。もちろん、遠坂がこの地の管理セカンドオーナー者だつていうことも知ってる。」

「衛宮くん、あれが冬木市トウキに住む魔術師の一般的な回答よ。」

……もつとも、彼自身にも怪しい部分はあるけれど。」

おいおい、そんな事言わないでくれよ。確かに魔術師として色々おかしい部分はあるけどさ。

「話を戻すけど、今貴方の置かれている状況を解つてないでしょう?だから、その事について話すつもりよ。そっちのセイバーもいいでしょう?」

「ええ、貴女がマスターの助けとなるかぎりは控えます。」

「それじゃ中に入りましょう。」

そう言うのと遠坂が衛宮邸の中に入ろうとする。

「ちよつと待ってくれ遠坂。中つてどうい……」

「あら、中つていうのはもちろん衛宮くんの家の中よ。長話になるだ

ろうし、外で話したって寒いだけでしょ。それと、古崖くんからも話を聞かないといけないし。衛宮くんも聖杯戦争以外にそっちの話も聞きたいわよね?」

「むっ、確かにそうだけど……」

「なら、決まりね。アーチャーは屋根の上で見張っててちょうだい。貴方がいたらセイバーも警戒するでしょうし。」

「了解したが、君は余計なことをしているぞ。」

そう言うときアーチャーはひとつ飛びで屋根の上に登った。

なんだか、黙っていたら勝手に話が進んでいくんだが……。

話し合いをするために俺たちは衛宮の家に入る。とりわけ遠坂は我が物顔で奥へとずんずん進んでいた。

家主である衛宮のほうは微妙な顔をしている。まあ、あの学園のアイドルが勝手に押し入ってきたら俺だって戸惑う。

「へえ、結構広いのね。和風っていうのも新鮮だなあ。あ、衛宮くん、そこが居間?」

遠坂はそんなことをつゆも感じていないようだ。これは一種のマイペースだな。

居間に入り、衛宮が電気をつける。

「うわっ、寒っ!!?こんな時期に冷房つけるなよ!!?」

「違うわよ、古崖くん。窓ガラスが全壊してるのよ。」

あ、本当だ。見事に窓ガラスがぶつ壊れている。

「衛宮、なんでこんなことになったんだ?」

なんとなくわかる気がするがしてくるが。

「いや、いきなりランサーってやつに襲われてな。なりふりかまっていられなかったんだ。」

やっぱり。

「あら、そういう事。じゃあセイバーを呼び出すまでアイツとやりあってたの?」

「やりあってなんかない。ただ一方的にやられただけだ。」

「ふうん、変な見栄張らないんだ。……そつかそつか、ホント見た目通りなんだ、衛宮くんって。」

そう言って、遠坂は嬉しそうにする。そして、俺はそれにつられて笑う。衛宮のほうは俺たちが何故笑ってるのか解らないようだ。

その後、遠坂は落ちていたガラスの破片を取ると指先を少し切って血を垂らし呪文を詠唱した。すると、バラバラになっていた窓ガラスはひとりりで組み合わせあって、元通りになっていった。

「遠坂、いまの……」

「ちよつとしたデモンストレーションよ。」

衛宮が驚いている。おい、お前まさか、

「ま、私がやらなくてもそつちが直したでしょうけど。」

「いや、俺はそんなことできないぞ。」

「はっ?」

マジか。マジでそうだったかー。

「そんなことないでしょ、ガラスの扱いなんて初歩の初歩だもの。」

こんなもの、そこらへんの入学試験みたいなものよ?」

「いや、俺は親父にしか教わったことがないから初歩とかそういうのは知らないんだ。」

あの人、本気で魔術師にさせたくはなかったみたいだな。

「じゃあ、衛宮、お前が使える魔術ってなんだ?」

これで何も使えないとかって言われたら反応に困る。

「一応、強化の魔術ぐらいは。」

「またなんとも半端な魔術をつかうのね。」

遠坂の反応はごもつともだ。

「それ以外は、からつきしつていう訳?」

「まあ、多分そうだな……」

なんとも煮え切らないご解答を衛宮は出す。

「遠坂、そろそろ話を進めよう。」

「ええ、解ってるわよ。……なんでこんな奴にセイバーが召喚できたのよ……。」

なんか、ぶつぶつ言っているが気にしないでおう。

そこから、遠坂は衛宮に状況がちゃんと解っていないことを確認してから、聖杯戦争のマスターに選ばれた事を説明して、詳細を省いてはいるが、ちゃんとルールが解るようには説明している。

「言葉の上でなら解った。だけど、誰が何の為にそんなことをしたんだ？」

一応、理解はできたが、その理由が分からないらしい。

「そんなこと、私には知らないわ。いずれ、聖杯戦争の監督者に聞きなさい。」

俺は知ってるけどな。だがそれを言えば後々、疑われるかもしれないので、敢えて黙っておく。

「さて、今度はあなたよ、古崖くん。」

遠坂がそういうと一齐に視線がこつちを向く。やばい、なぜか緊張する。

「衛宮くんは何も分からない素人同然だったけれど、貴方はちゃんと魔法も使ったし、知識もある。けれど、私は貴方が魔法師だったなんて知らなかったし、魔力も感じ取れなかった。管理者である私^{セカンドオーナー}がね。他にも色々聞きたいことはあるけど、まずそれを一体、どう説明するのかしら？」

ああ、やっぱりそれを聞いてくるか。

「ちよつと待ってくれ遠坂。さつき、創太も言っただけでそのセカンドオーナーって何なんだ？」

「その名の通りだよ、衛宮」

遠坂の代わりに俺が答える。

「簡単に言うとセカンドオーナー、つまり管理者はその地の霊脈を管理したり、他の魔法師が工房を作る為の許可をしたりするものだ。だから、魔法師がここで根を下ろす時や、代替わりをするときに遠坂家に挨拶をしなくちゃならないんだ。」

「ふーん、そうか。」

「そうなのよ、衛宮くん。さて古崖くん、さつきの質問に答えてくれるかしら？」

「ああ、いいぜ。だけど、どこから話していいやら。あ、一応言っておくけど、俺の父親はそっちに挨拶だけはしてるからな。」

「えっ、嘘でしょ?」

いや、本当だ。

「そっちがどういう風に情報を整理しているのかは知らないが、先代の人にはちゃんと工房の許可は貰ってるからな。」

「出鱈目を言わないでちょうだい。家にはそんな報告があつたなんてどこにもないわ。」

「どうせ、そっちのうつかりじゃねえの? こっちにはちゃんと許可証があるぜ。聞きたきや当人に聞け。まあ、その当人はそっちにはいないみたいだがな。言つとくがこっちにもいないぜ。居るのはそれより後に来た……」

後に来た同居人だけだ。そんな事を言おうとしたら、ある事を思い出した。そしてそれは非常にまずい事であった。

「……? どうしたんだ創太。急に、黙って。」

「いや、あのー。」

「何、アーチャー? ……えっ、敵襲?！」

遠坂が何か言っている。あいつが来たんだろう。全員が警戒する。だが俺は

「衛宮、お前に謝らなくちやいけないことがある。」

「な、なんだよ、こんな時に」

「悪い、衛宮。もう一度……」

謝罪をしようとする、その瞬間。

あいつが飛び蹴りで窓ガラスを割る。

「窓ガラスが割れる。」

ってもう遅かったか。

窓ガラスを割ったあいつは、金髪ショートの外国人女性だ。肌は白

くて胸が大きく、白のダウンジャケットを着ていても分かるぐらいだ。

さらには、ミニスカにニーソという冬に着るもんじやない服装をしている。だが、スタイルがめちやくちや良いので、あまり文句は言えない。目の保_Yゲフンゲフン

「っ！まさか、サーヴァント！」

空気になりかけていたセイバーが叫ぶ。違うんだ、そいつはサーヴァントじゃない。なぜなら、

「大丈夫ですか、ソウタ!？」

俺の同居人だから。

「大丈夫だから落ち着け。」

「何を言っているんですか！貴方は捕らわれていたのでしょうか！」

「いや、ちが」

「貴様、まさかマスターだったのか！」

「……。」

さらに状況が悪化した。さつき、戦闘が中断されたばかりだということ。

「ええ、そうですよ^{セイバー}剣士。私はランサーのクラスを持って現界しました。」

おい、さらつと嘘をつくな。これ以上、状況をかき乱さないでくれ。バカな!?!ランサーは先の奴では……」

「それは、偽のランサーでしょう。本物のランサーは私ですよ。」

はてさてこの始末、どうなることやら。

……ふざけた事を思ったが、本当にどうしよう。とりあえず、この同居人がヘタなこと言わなきやいいが。

「さて、マスターに怪我などさせてないでしょうね?もし、させていたらこの槍で完膚なきまで叩きのめします。」

そういうとそいつは、どこからともなく槍を出した。

おい!思ってたそばから煽りやがったよこいつ!!

「マスター、無事か?」

そんなことをやっていたら、アーチャーが屋根から降りて、遠坂の

そばまで来ていた。

「ええ、心配いらないわ。それよりも、問題は向こうのあいつよ。」

アーチャーの殺気がこつちに向けられる。まずい、いつの間にか二対四になってしまった。誰かこの状況から助けてくれ（涙）

「ジアナ!!」

「ええ、大丈夫です。すぐに片付けますから。」

違う、そうじゃない。だが、その俺の言葉によって、意外な人物から助け舟が出される。

「古崖……ジアナ……偽のランサー……そして、その顔……なるほど、そういう事でしたか。」

セイバーからの殺気が解かれる。どういう事だ？

「おい、どうしたんだよセイバー?」

衛宮がそう聞く。

「シロウ、私達は勘違いしていたようです。」

お?なんか、いい感じになってきた?

「何のつもりですか、セイバー?」

おい、お前は黙っててくれ。ややこしくなる。

「とぼけないでください。貴女も私を知ってる筈です。」

「……はあっ!?!」

えっ、今なんて言った?

「思い出したようですね、セイバー。てっきり、座に戻って記憶が無くなったのかと考えてましたよ。」

「……えっと、ジアナ?」

「はい。何ですか、創太?」

「状況説明プリーズ?」

動転していて、最後がなぜか英語になってしまった。

「そうですね。私とセイバーとの関係を説明しなくてははいけません。」

こつちからも聞きたいことがありますし。」

そう言ったジアナは満面の笑みをつくる。だが、怖い。笑っているのに恐怖を感じるのはこれいかに。

「アーチャーとそのマスターも警戒を解いてください。大丈夫です。」

彼女らは少なくともサーヴァントとマスターではありません。」

セイバーが遠坂とアーチャーに説得している。だがアーチャーは、「そう言われてもだな、セイバー。奴は私が認識してから僅か二秒足らずで接近したのだぞ。それでサーヴァントではないと言われても信じることはできません。」

アーチャーの視認範囲というのは非常に広い。にも、関わらずその距離から二秒という時間で走ってくるのは、お前人間じゃねえ！（CV：うえ○ゆうじ）って思うよな。俺はそう思った。というか、下手なサーヴァントは倒せんじゃね？

「彼女らの魔術はそういうものです。前に彼女と行動していた魔術師メイガスも似たような魔術を行使していました。そこにいるソウタも同じ魔術を使うでしょう。」

俺はアーチャーが言ったような事は出来ないけどな。

「もし仮にそれが本当だとしても、マスターではないとどう言いきれる？」

まだ、反論するのか。仕方ない一肌脱ぐか。

「だったら調べればいいじゃないか。マスターの証である聖痕令呪をさ。」

「何？」

本当に脱ぐのは服だがな。

「そうすれば、本当にマスターかどうか判るだろ？」

「ふむ、なるほど、それが一番手っ取り早いな。だが、実際に調べるのはその小僧だ。」

「なんでさ。お前も来ればいいじゃないか。」

衛宮の言うことはごもつともだ。だがアーチャーは、

「そうすれば、そのジアナという女性が暴れ出した時、マスターが身を守るという保証がない。セイバーは他のマスターを守る義理はないだろうしな。」

そして、遠坂も

「今回はアーチャーの言う通りね。彼女の力は未知数だし、私が身を守るかと言われれば、正直言って不安ね。だから、令呪調べは衛宮くんがやってちょうだい。」

二人がそう言うのと、衛宮が黙りこくってしまった。

「俺はお前達が納得するなら別に構わないぜ。だけど、やっぱさつき
の無しつていうのは止めてくれよ?」

「ああ、もちろんだとも。どうせ、その小僧は嘘をつけん性格だろう
しな。」

「おいそれどういふ……フガツ!」

「はいはい、それじゃ俺のだらしない体を女性に見せてはいけない
から、他の部屋に行こうね。」

俺は衛宮の口を塞いで居間を出ていく。さつさと話を進めたいん
でな。喧嘩して長引いても困る。

情報整理

シロウがソウタという者に連れさられ、残された私達ですが、
「また窓ガラスが割れたわね。」

「す、すみません。焦っていたもので。怪我はありませんか?」

「別にどこにも無いわ。あと、窓ガラスに関してはここの家主に言った方がいいわよ。」

「はい、そうすることにします。」

ジアナがアーチャーのマスターに謝っていました。

「さつき直したばかりだけど、仕方ない。もう一度直すしかないわね。」

「それは原因である私にやらせてください。」

「そう?それじゃあお願いするわ。」

どうやら、ジアナが窓ガラスの修理を行うそうだ。彼女は自身が入ってきた壊れた窓ガラスの方へと歩く。そして、それを右手で触れ、反対側の手を部屋の中心に向ける。

「Materialomagic.
物質を魔力。」

この詠唱をするという事はつまり、彼女は古崖家の魔術を使用するということ。彼女の言葉によって部屋に散らばっていた窓ガラスの破片が左手に集まり吸収されていきます。

「ほう……これは……」

「まさか、物体を魔力に変換しているの!?!」

彼女が驚くのも無理はありません。私は魔術に関しては知識があまり多いほうとは言えません。ですが、これが異常なのは解ります。前のマスターとその妻も、古崖家の魔術を見て驚いていました。きつと生前……は厳密に言うとは違いますが、ともかく知り合いの魔術師もこれを見たら驚いた事でしょう。

「Magictomaterial.
魔力を物質に。」

もう一度唱えると、今度はジアナが割った窓ガラスが何かの生き物のように元の形へ還元されていきます。魔術とは本来、現象を起こすモノ。ですが、物体を生成することは基本的にあり得ません。

「貴女、一体なにを……?」

「話はソウタ達が戻ってからにしましょう。えっと、確か……」

「遠坂凛よ、ジアナさん。とりあえず、貴女の言う通り、古崖くん達が戻るまでその話は不問にしましょう。別の話の途中だったしね。」

アーチャーのマスターの疑問がまた増えたようですね。しかし、私にも一つ疑問が増えた。

「良いのですか、ジアナ。古崖家の魔術を使ってしまったも。」

古崖家の魔術はかなり珍しく、それ故に他の魔術師に狙われやすいものだ。以前、私と前のマスター、そしてその妻は信頼に値するものだだと判断され、その詳細を教えてくださいました。

「私なりの誠意ですよ、セイバー。それに、この聖杯戦争は必ず激しいものになります。遅かれ早かれ、いずれ彼女達には見られることになるでしょう。けれど、古崖家の魔術はあれだけではありません。貴女も解っているはずですよ。」

ええ、解っています。彼女らの魔術の真髄はそれよりももっと恐ろしいモノだ。私ですら敵に回したくないほどです。

「ただいま、衛宮に令呪を調べさせてきたぞ。」

話をしていたら、シロウとソウタが帰ってきたようです。前はありませんでしたし、きっと今回も大丈夫でしょう。

|| || || ||

「ただいま、衛宮に令呪を調べさせてきたぞ。」

俺達は令呪調べについて報告する為に居間に帰ってきた。いや、帰ってきたという表現はおかしい気がするが……

「おかえりなさい、マスター、創太。」

「2人ともおかえり。それでどうだった、衛宮くん?」

「ただいま。創太の体を調べたけど令呪みたいなのはなかったぞ。」

「という訳だ。アーチャー、俺が聖杯戦争の参加者じゃないってことは判ったな?」

これで、そんなもん嘘だと言われれば、ジアナに倒させるつもりだ。

「ああ、少なくとも聖杯絡みでお前達と戦う事はなさそうだ。」

「理解してくれて、助かるぜ。これで話が進む。」

よかった。よろしい、ならば戦争だ。とかつていうセリフは言わなくて済みそうだ。

そういえばだがさつきジアナが割った窓ガラスが直っているな。……まさかとは思うが一応ジアナに小声で聞いてみるか。

「ジアナ、窓ガラスが直ってんだけどさ……。」

「はい、私が直しました。あの魔術を使いましたが。」

「やっぱりそうか。」

「遠坂には何か言われなかったのか？」

「ええ、その魔術については聞かれましたよ。しかし、貴方もシロウ君もいませんでしたし、二度手間になってはいけないと思い、後で聞くようにと言っておきました。」

「また話す内容が増えたよ。」

「何で、そんなことをしたんだ？」

「セイバーにも聞かれましたが、私なりの誠意です。それに、原因は貴方にもあるんですよ。」

「うっ……まあ、確かにそうだな。」

「古崖くん、話してもらって大丈夫かしら？」

「大丈夫だ、問題無い。」

「問題だらけだがな。一番いい省略法を頼みたい。」

「話を再開したいんだが、その前にジアナの紹介をさせてくれ。こいつの名前はジアナ・ドラナリク。俺の師匠兼保護者兼うちの居候だ。」
保護者というのは、もう俺には父親も母親もないのだ。その代わりがジアナだ。俺としては、姉の方が近い気もする。

「紹介に預かりました、ジアナ・ドラナリクです。先程は皆さんを勘違いしていたこと、大変申し訳ありませんでした。」

ジアナは土下座をした。外国人がそれをするのと違和感があるね。こいつ、見た目だけは超絶美少女なんだが……うん、年がね。

「そして、土郎君。そのせいで貴方の家を壊してしまったこと、申し訳ありませんでした。」

その原因の半分……というか全部俺のせいなのだが、今更謝ることができなくなっていた。

「いや、いいですよ、ジアナさん。知り合いが誘拐されたと思っ
ていたんですよね？なら仕方ないですよ。」

衛宮が敬語を使ってる。そういえば、ジアナが衛宮に会ったついでに話を聞いたことがあったな。

「衛宮くん、もしかしてドラナリクさんと知り合い？」

ジアナが衛宮の名前を知っていた事を不思議に思ったのか遠坂が質問する。

「ああ、商店街で買い物しているとよく出会うんだ。」

確かジアナもそんな風に話してたな。

「それじゃあ、話を再開しようか。……で、どこまで話したっけ？」

「工房の許可証がってという話よ。あんたのところにはあって、こっちのところにはないからどういいう事になってるのかで中断させられたはずよ。」

「あつ、その許可証は私が盗みました。」

っ!?なんかさらつと凄い事をいったぞ!?

「ついでに言うと、遠坂家にある古崖家に関する書類も全部です。」

「ちよつと、それどういいう事よ!?!?」

遠坂が叫ぶ。俺もびっくりだ。

「ちやんと理由はあります。それは……」

ジアナが俺に目配せをしてくる。俺に関する言いづらい事をだろ
う。だが、大丈夫だ。あれはもう克服した。そう思い領く。

「……それは十年前、冬木の大災害が起こった日です。」

衛宮の顔も歪む。こいつにとつても色々な意味での転機だったか
らだ。

「私達が住んでいる場所は被災地にはなりませんでしたが。運悪く、
ソウタの両親はそれに鉢合わせ、巻き込まれてしまいました。」

居間を取り巻く空気が一気に重くなる。

それは俺にとって最大のトラウマであった。俺の心の半分以上を
占めていた両親が亡くなり、引きこもり状態であった。今でこそジ
アのお陰で立ち直ってはいるものの、まだどこか気にしている部分も
ある。

だが遠坂は、

「横槍を入れるようで悪いんだけど、貴方の両親は巻き込まれたんじゃないくて、自ら巻き込まれに入ったんじゃないの？」

「遠坂お前……！」

「いいんだ、衛宮！遠坂の言う通りだ。」

やっぱり誤魔化せなかったか。そっちの方が都合が良かったんだが。

「さつき、セイバーはドラナリクさんの名前と古崖と言ってた。つまり、古崖君の両親とドラナリクさんは前回の聖杯戦争に少なくとも関わっていた。そして、セイバーも。」

今回のように、参加者でもないのにでしゃばっているのか、それとも正規の参加者として聖杯を求めたのかは判らないけど。そこどころどうなのかしら、セイバー？」

的確な推理ですよ遠坂さん。質問されたセイバーは答える。

「はい、ソウタの両親とジアナは聖杯戦争に関わっていましたが。しかし、今回と同じようにマスターとしてではありませんでしたが。」

「ということは親子二代揃ってでしゃばっているのね。」

ズバズバと言う遠坂。人によっちゃ傷つくぞ、それ。

「話を戻しますね、ソウタはその事実を知って、引き籠もってしまいました。それを見た私は思いました。この子は魔術師になろうとはしないでしょうと。だから私は遠坂家にある古崖家の資料を盗みました。」

遠坂が持っていないって言ったのはそういう訳か。いや、確かに前々からおかしいと思ってたよ？いくら誤魔化せたとしても、セカンドオーダー管理者がこっちの情報を持っていないはずかないって。でも、それをジアナに訊くといつもはぐらかされちゃうんだよな。主に殺気で。

「……解った。どう盗みだしたのかは聞かないとして、何故、古崖くんはそれでも魔術を使っているのかしら？そして、どうして古崖くんから魔力を感じ取れないのかしら？」

「二つ目の質問の返答は、ソウタが1年前に魔術を習いたいと言った

からです。そして二つ目の質問の返答は、私は彼が魔術を恐れてやめるかもしれないと思い、古崖家の魔術で周りの魔術師に気づかせないようにさせてきました。

そうすれば、もし魔術をやめたいと言った時、古崖創太が魔術師だったということは誰にも勘付かれず、魔術師の世界に関わることはならないと思いました。」

なるほど、最初のころ隠蔽の魔術の猛特訓させられたり、魔力隠しの道具を持たせてたりしたのはそういうことか。隠蔽の魔術に関しては厳密に言えば違うものだが。

「はあーっ。」

遠坂が深い溜息をついた。

「なるほど。細かいところは省いているようだけれど、こっちの質問にはちゃんと答えているわね。魔力に関しては完璧に隠せるなんていう魔術は聞いた事はないけど、とりあえず信じてあげるわ。」

「そうか、じゃあ次の話は？」

「いや、もうそれはいいわ。貴方達が聖杯戦争の参加者じゃないのなら、ここで情報を聞き出しても、今、それは必要ないわ。」

そうしてくれ。段々、眠くなってきた。

「それじゃ、話も終わったし、そろそろ行きましようか。」

「?行くって、こんな時間にどこにだよ。」

やめて、寝たいからやめて。

「衛宮くんの疑問を答えてくれる場所、教会よ。」

ほんとに今何時だと思ってるんだよ。

教会と神父

「はあっ、はあっ、はあっ……。」

「ごらごら、話を止めてはいけませんし、スピードも緩めないでください。」

「いやっふあ!? 解りました!! だから、電撃は止めてください!!」

俺は走っていた。並走しているジアナに今までの状況を説明しながら。

「そこで……衛宮を庇って……ペンダントを……使って……はあっ、はあっ……」

「なるほど、だから魔力増幅回復装置がないのですね。あの人達の形見でしたが友達を救うという目的の為なら仕方ありませんね。あ、そこは右に曲がりましたよ」

目的地の家の方向は左なんですけど!?

……こんな事になった説明をしよう。遠坂が教会に行くと言った所まで戻る。俺もそれに同行すると言い、ジアナもそれについては異論は無かったのだが、ジアナは家に晩飯を置いたままだから、それを食べてから追いつくと言ったのだ。それは教会に言った後でもいいんじゃないかと言ったのだが、料理が冷めてしまふとかなり強引に押し切られてしまったのだ。

そして今、俺は魔力を俊敏力に創り変えて全力で走らされている。スピードを落とすと電撃を打ち込まれるというスパルタ条件下で。そして、家への最短ルートからわざと遠回りをするように。多分、説明を終えるまで家につかないようにしてるなこれ。

「また、足が遅くなってますよ。」

「はむなぶとらっ!?!」

これ絶対怒ってるよ。帰るって言ったのに道草食って連絡もしなかったことを怒ってらっしやるよ。俺は電気ネズミを狙う二人と一匹並みにタフじゃないんだよ。もう嫌だ、帰りたい。

「ぜえ……ぜえ……」

説明を終えてやっと家に帰れた。寝たい。ちなみに家は普通の一軒家で他の家と違うところは地下室がある事ぐらいだ。その地下室は工房になっており、今はほぼ使われていない。

父さんはここを一括払いで買ったようでローンが俺の代までこなくて良かったと思っっている。

「家に着きましたね。それじゃあ、晩御飯を食べましょう。」

「いや……無理……食べたら吐く……。」

「吐いたら、それを食べさせるだけですよ。」

なにそれ鬼畜。さっきの特訓まがいの拷問の時も思ったが、あれだろお前絶対に前世はスパルタ教育を最初に作った人だろ。

「前世が何ですか、ソウタ？」

「いや、なにも……。」

心を読むな!!

—————

ふざけた事をやりながらも、俺たちは家に入り、作り置きされていた飯を食っていた。そして、その途中でジアナに質問をされる。

「しかし、良かったのですか？」

「ああ、あのペンダントは両親の形見だったが、あの時の状況じゃ使わざるをえなかった。友達の命とどっちが大事かなんて考えなくても分かるだろ？」

「いえ、それではありません。」

「じゃあ、なんなんだ？」

「彼らが教会に行くことです。」

そっちのことか。

「以前にも私たちはこの聖杯戦争調べていました。そして、その時に死にかけていた女性がいたことを覚えていますか？」

そう、俺たちは前からこの戦争のことを調べていて、ジアナが言った女性、バゼット・フラガ・マクレミッツを発見した。彼女は死んで

はいなかったものの、後一步遅れていたら死体と化していただろう。「ああ、覚えている。つまり、ジアナはあのバゼットっていう人が言った言葉が気になるんだろ？」

「はい、簡潔に言うそうですね。」

バゼットを見つけた時、俺たちはすぐにそいつを助けた。そして、話を聞いていく中で彼女が聖杯戦争の参加者でランサーのマスターだった事、ある知り合いに騙し討ちをくらい左腕と共に令呪を奪われた事、そいつに殺された事、その知り合いは衛宮達が向かっている教会にいる神父、言峰綺礼だという事が判った。

「あの人は少し前からの知り合いだったんだがな。嫌な所はあると思っただけ、まさかあそこまで堕ちてたとは。」

「だから言っていたでしょう、あの神父は歪んでいる。私も同じ神の子を敬う者として信じてはいましたが……」

知り合いで歪んでいるのもう一人いるけどな。

「でもジアナは聖堂教会には所属してないんだろ？」

「ええ、私の信じているものとはかけ離れているので。と、話が逸れてしまいましたね。」

「そうだった。まあ、今から俺たちも同行するし、もしやばかったらセイバーとアーチャー、それにジアナが応戦すればランサーがいても倒せるだろ。何が起こるのかわからないが、それだけ充分な戦力がいれば何が起きても大丈夫だ。バゼットさんが嘘をついている可能性もあるし。」

「まあ……そうですね。まず行動が一番です。」

別に、楽観視している訳ではない。もしかしたら、衛宮はないが遠坂が裏切る可能性だってある。……いや、もしそんなことがあるなら学校で俺を助けるなんてするはずがないか。

ちなみにそのバゼットさんから助けた報酬としておじさんのきんもの……黒い球をなんとか譲ってもらった。その球は宝具でフラガ家しか使えないが俺はちよつとしたズルで使えるようにするつもりだ。だけど、複製できるかもしれないので今は工房に置いてある。

その後は親戚の家、古崖家の当主こと叔父の家に行かせた。叔父に

は許可を取ってある。他にどんな協力者が綺礼さんにいるのか判らないし、そのままほつといてまた倒されちゃったなんていうのはごめんだ。

そういえばバゼットっていう人、封印指定の執行者だったけ。古崖家も半分封印指定に浸かってるけど大丈夫だよ。叔父さんの魔術を前にも見たけど、あの人も人間じゃなかったしね。

「先に着いちまったみたいだな。」

「そのようですね。」

食事を終えて俺たちは教会の外壁の門前にいた。ここに来る途中、吐きそうになった。食事のあとの運動はだめだね。

「あれ、創太!？」

「何言ってるのよ衛宮くん、古崖くんが先に来てるはず……本当にいた……」

「よっ、三人とも。」

衛宮、遠坂、セイバーが遅れて来る。アーチャーは霊体化しているのだろう。セイバーは……ノーコメント。笑ったら負けだ。というか最悪殺される。

「……プツ。」

おい、ジアナ。笑って差し上げるな。いくら鎧の上に黄色い雨合羽を被せたからと言ってシニールすぎるとか思うな。俺も我慢してんだからさあ。霊体化できないとジアナから聞いていたがそれをこう隠すとはな。

「飯食って来たんだろ?なのになんで先に?」

「ドラナリクさんにおぶってもらったんじゃないかしら?かなりの超人だし。」

「いやー、あっはっはっ……。」

やべえ。乾いた笑いしか出てこねえ。本当はその人にスパルタ特

訓されてたとか言えねー。

「ま、まあいいじゃないかそんなこと。それよりもさつきと教会に入っちまおうぜ。」

少し強引に話を進めるが、二人ともそれに賛成してくれるようだ。だがセイバーはここに残る事を主張。衛宮はしようがないと思ったのかそれを承諾した。

「ジアナはどうする?」

綺礼さんは前回の戦争の参加者だったというのはジアナから聞いている。昔、どういう関係だったかはこいつの口振りから大体察することはできる。

「私は一緒に行きます。」

「解った。」

セイバーは顔を合わせたくないだけだろうが、ジアナは本気で警戒している。本当に何があったんだろう。

教会の扉を開け中に入る。

「遠坂、この神父さんってどんな人なんだ?」

「エセ神父です。」

「お、おう……。」

衛宮は遠坂に質問をしたはずなのに、ジアナから即答で返ってきたので少し困惑している。

「え、ええそうね。一言で言ってしまうえばそんな感じかしら。ドラナリクさん、綺礼とも知り合いだった?」

「ええ、まあ。」

うわ、明らかに不機嫌そうだ。

「俺も知ってるぜ。泰山でよく会ってるからな。」

「えっ!?!」

泰山というワードに二人とも驚いている。

「古崖くん、泰山つてまさかあの麻婆豆腐で有名なあの……」

「その通りだ凜。彼とはそこでよく遭遇するのだ。」

噂をすればなんとやらだ。

「再三の呼び出しにも応じぬと思えば、変わった客達を連れてきたな。」

「あつ、言峰さんじゃないっすか。」

「誰かと思えば、創太か。君からは魔力を感じられなかったがこちら側の人間であつたか。」

「まあ、事情がありましてね。でも、本題があるのは俺じゃなくてあつちのほうですよ。」

そう言つて俺は衛宮のほうを指差す。

「ふむ、彼が七人目のマスターということか、凜。」

そこからは本当に眠かつたので衛宮たちが話している途中は椅子に座つて仮眠をさせてもらった。さつきまでずっと走つてたからなしかたないね。

「ソウタ、ソウタ、起きてくださいソウタ。」

「んあ？今日は日曜だろ……ムニヤムニヤ」

「確かに日付を越えて日曜になっていますが……仕方ありませんね。」

「やなかんじ!?なんだかんだ、敵襲か!?!」

なんか電気ネズミの十万ボルトを食らつた気がした!

「本当に敵襲ならあんたはとつくに死んでるんじゃない?」

「へっ?……ああそうか、仮眠しようとしたら本気で寝ちまつたんだ。」

「そうみたいね。話は終わったから帰るわよ。」

「ああ、そうみたいだな。ふあ……」

まだ眠い、もう少し寝たいが帰るまでの辛抱だ。

俺はふと、衛宮の顔を見る。どうやら決心はしたみたいだ。

「衛宮、お前はこれからどうすんだ？聖杯戦争がどんなものかは改めて知ったんだろ。」

「ああ、その上で俺はこの聖杯戦争に参加する。もう十年前の繰り返しはさせない。創太もそうだろう？お前も十年前に失った。だから、こんな下らない事聖杯戦争に関わっている。」

「まあな。」

こいつは戦う事を決めたようだ。さて、衛宮の心を聞いたところで帰ろう。ここはなんか居心地が悪いし。

だが俺は聞いた。後ろで綺礼さんが

「衛宮士郎、お前の願いはようやく叶う。」

と言ったことを。

意地悪っ。あの意味を理解した上での感想だ。

俺、あの人に敬語を使うの止めようかな。

教会から出てきた俺たち。

「シロウ、話は終わりましたか。」

「……ああ、事情は知った。」

外に居たセイバーが衛宮に話しかける。この聖杯戦争に参加する意思を聞きたいんだろう。衛宮は俺に伝えたことをセイバーにも喋る。

「そうですね。なら、今まで通り貴方の剣であることを誓いましょう。」

「ああ、未熟なマスターだけどこれからもよろしくな、セイバー。」

そういうと衛宮は握手を差し出す。セイバーは戸惑いながらもそれに応じる。

二人ともいい相方パートナーになりそうだ。

「ふうん、その分じゃほつといてもよさそうね。」

「っ!？」

おい遠坂、いいところで邪魔するなよ。

「仲いいじゃない。さっきまでは話もしなかったのに、大した変わり様ね。セイバーの事は完全に信頼した訳?」

「え、そんなことは……いや、そうなるのかな?まだセイバーの事はよく分からないけど、これから一緒にやっていくんだから。」

「そつ。なら覚悟しなさい貴方達がそうなった以上、こつちも容赦しないから。」

「?」

遠坂はさらつと戦線布告をしたが、衛宮のほうはよく解っていない様だ。俺はそれを見かねて衛宮に話しておく。

「衛宮、遠坂は今までは素人だからという理由で情けをかけてきたけど、お前がはつきりとその戦争に参加するって言ったから、同じ参加者として敵同士だと言いたいんだよ。」

「あ……、む?なんでさ、遠坂と戦う気なんて俺にはないぞ?」

そうきたか。衛宮の目的は勝つことではなく聖杯戦争での被害を出さないことだ。だが、結局遠坂は勝つために自分以外の参加者を蹴落とす。その主張の食い違いが起きているのだろう。

「凜。」

「なによアーチャー。」

「このままでは埒があくまい。なら、ここで叩き潰すまでだ。」

「おつと、そうなれば、俺たちは衛宮の味方をするぜ。そうなれば不利になるのはお前達だ。このまま、おとなしくするんだつたらこつちも攻撃はしないが?」

衛宮以外は戦闘態勢に入っている。

「数が多いからといって勝敗が決まるわけではない。何より私はアーチャーだ。手札の多さには自信がある。」

「ちよつとアーチャーいい加減にしなさい。」

煽るアーチャーを遠坂が止める。

「今ここで戦っても勝ち目はないわ。セイバーとドラナリクさんは一

緒に戦ったことがあるみたいだし。歪みあっている隙を突くなんてできそうにないわ。」

「そういうことならここでの戦闘は控えておこう。」

「どうやら、今は戦わなくてすみそうだな。」

「戦闘は無しってことでいいんだな。なら、さっさと帰ろう。眠くて眠くて仕方がない。」

俺がそういうと、皆もそう思っていたのか、こぞって帰ろうとしていく。

深山町まで戻ってきた俺たち。交差点に着き、遠坂と衛宮の家はそこから別の方向に分かれる。俺とジアナの家の方向は衛宮のとはまだ同じだ。

「それじゃあ、一緒に行動するのはここまでね。明日からは敵同士になるから、覚悟しておきなさい。」

「いやでも、俺、遠坂と戦う気はないぞ?」

「まだそんな事言ってる。俺、お前の味方すんのやめるぞ?」

「だからさあ、えみ……っ!?!」

寒気がする。誰かがこちらを見ているからだ。ここにいる全員が気づいていた。強大なその存在に。

「……ねえ、話は終わり?」

声のするほうへ向く。そこには黒い巨漢と肌も髪も白い雪のような少女が立っていた。その二人の外見は全く違うモノであった。だが、それであるが故に恐怖を感じてしまう。

俺達はいつを前に戦えるのか。いや、そもそも戦闘になったところで三秒後の未来で果たして生存できているのか。まず、戦うというのがそもそも間違いで逃走すらも危ういではないのか。家に一度帰った時、このメンバーならなんとかなると思っていたがそれはただの間違いだった。自己嫌悪に陥りそうだな。

「……バーサーカー。」

遠坂がそう呟く。ああそうだ。あれはそれ以外の何物でもない。寧ろ他に何かあるのだろうか。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして、会うのは二度目だね。」

お兄ちゃんとは衛宮に言ったモノだろう。妹か何かかと思っただが衛宮も恐怖で震えているから、多分違うのだろう。

「初めまして、リン、それにジアナと……そこにいる彼はだれかしら？ まあ、私が知らないくらいだからそこら辺にいるただの魔術師でしょうけど。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょう？」

「アインツベルン……」

アインツベルン、始まりの御三家のうちのひとつだ。まさか、そんなやつといきなり出会うなんて。運が悪過ぎる。

「それじゃあ、やつちやえ、バーサーカー。」

そんな無垢な少女の声によって俺にとつての初戦の幕が切つて落とされた。

初戦・VSバーサーカー

「セイバー、迎え撃て!!ジアナはそれを主体に援護!!アーチャーは遠方から狙撃だ!!」

バーサーカー戦闘開始直後、俺はそんな事を叫んでいた。セイバーとアーチャーの実力は詳細には知らないが、クラス名から判断した指しだ。普通、セイバーが白兵戦、アーチャーが狙撃は得意なはずだ。ジアナの身体能力はかなりのものだが、一点特化にしか出来ないもので、正面で戦おうとしてもやられるだけだ。

セイバーとアーチャーは俺がマスターじゃ無いにも関わらず、指示に従ってくれる。セイバーは俺がジアナの知り合いという事で信じてくれているのだろうが、アーチャーは何か言ってくるのかと思っただ。敵である衛宮にも殺意を向けていたし。

「■■■■バーー!!」

「くっ……!!」

「はあっ!!」

セイバーが見えない剣で、バーサーカーの大振りです早い攻撃を逸らし、ジアナがその攻撃の隙を槍で突き、すぐさま離れる。バーサーカーに力負けしているがこちらはダメージを受けてはいない。ただし、相手もダメージを受けていない。というよりも、

「あいつ、攻撃が効かない!?!」

そう、遠坂の言う通りの事が起きていた。あのバーサーカーは体の表面で攻撃を弾いている。鎧でそうなっていたり、単にダメージが通りにくいのならまだしも、攻撃を無効化しているのなら勝ち目なんてない。ジアナに援護しろと言ったがあれでは無意味だ。

そして、なにかセイバーの動きがおかしい。ぎこちないというか、キレが無い。確か衛宮はセイバーを召喚する前にランサーに襲われたと言っていた。多分あの槍をセイバーは受けてしまったのだろう。あれをくれば治癒が効きにくくなる。

「創太、セイバーの様子がおかしいです!今はなんとか拮抗していますが直にそれも崩れます!」

解っている。この状況を有利に持っていけるのはアーチャーだけだろう。

「どうする、遠坂。お前のアーチャーで対抗できそうなものあるか？」
手札が多いと言っていたあいつの事だ。それがブラフではないと信じたい。

「ちよつと待つて……」

アーチャーに念話をしているのだろう。そもそも手札が多いとは言え、相手が何故攻撃を無効化できるのかが解らなければ意味がないのだが。早くしてくれ、セイバーが押されている!!

「……二秒も隙を作ればなんとかなるって言ってたわ。」

「解った。俺が隙を作る。合図を送るからそれま」

俺が作戦を伝えようとした時、鈍い音が聞こえた。セイバーとバーサーカーの距離が離れており、彼女の腹から血が見える。

まずい。モロに攻撃を食らったのだろう。完全に力負けをしたか。こうなる前に反撃をしたかったが……!

バーサーカーは追撃と言わんばかりにセイバーへ一直線に走る。ジアナもセイバーを助けようと走るが間に合わない。だがこれはチャンスだ。ここまで一直線なら隙も作りやすい。

「今だ、遠坂!アーチャーに……」

「セイバー!」

「なっ!」

衛宮はその叫び声と同時にセイバーへと駆け寄ろうとする。

あの馬鹿ブラウニー!セイバーを助けようとしてるんだろうが返って邪魔だ!ランサーに殺されかけたというのに、また死ににくつもりか!

「ちっ!」

舌打ちをしながら俺も走る。

「■■■■■■■■■■!」

バーサーカーの大きく振りかぶりでかい斧剣を上段から叩きつけようとする。

「うおおおー!」

「シロウ!?」

それから助けようと衛宮はセイバーを突き飛ばす。だが、
「やばっ。」

攻撃の射線上に残されてしまった。このままではあいつは死ぬ。
死んでしまう。また身近な人を失ってしまう。

そうなたらどうなる？

考えただけでも怖い。

怖い……!

こわ……

「はああああー!」

恐怖を持ちながらも、俺は剣の腹に向かって体当たりをし、
バーサーカーの攻撃を逸らした。

その剣は丁度セイバーと衛宮の間に落ちていき、俺は尻もちをついてしまう。しばらく沈黙が続き、ジアナを除いたここにいる全員が驚愕している。俺は体格が小柄な方だ。遠坂よりは身長が高いがそんなのは些細な事。そんなサーヴァントでもない俺がバーサーカーの重い一撃を受け止めてはいないものの、逸らした事は異常な事態だろう。

その秘密は魔術を使ったからだ。古崖家の魔術は力の扱いに関して右に出ないと自負している。

「……っ! バーサーカー、まずはその奴を殺すのよ!」

我に返ったのか、イリヤスフィールの声で戦闘が再開された。だが攻撃の対象が俺に変わり、さらにまずいことになってしまう。

「■■■■■■ー!」

まず一撃。先程と同じような上段からの攻撃を左に避ける。

「っ!!」

二撃目、右からの薙ぎ払いを跳んで躲す。だが、それが間違いだった。

「しまっ……!」

「■■■■■■ー!」

跳べば着地点を狙われるのは当然だ。飛べれば話は別なのだが。

そんな高等な事、俺にはできない。

すぐに切り換えされた斬撃が俺を殺そうとする。

「創太……!!」

衛宮が叫ぶ。しかし、そんなことでは現実が変わらない。

死が目前まで迫る。

ああ、死にたくない。それなのになんで庇ったんだっけな。

友達……だったからだろうな。

「剣をお借りします。」

「ジ、ジアナ!？」

そんなジアナとセイバーの声が聞こえる。

「はあっつっ!!」

斬れた。あのビクともしなかったバーサーカーの体が斬れた。厳密に言えば腕なのだが。

そのおかげで攻撃の軌道が逸れて、殺される事は免れた。

「怪我はありませんか、創太?」

「……あ、ああ。なんとか。助かった。」

ジアナはバーサーカーに向かってセイバーの見えない剣を構えている。

「ふーん。そこらへんの魔術師かと思ったけどやるじゃない。いいわ、今回はこれで引き上げてあげる。お楽しみは後に取っておくものだしね。」

そう言うといりヤスフィールはバーサーカーの肩に乗り大砲のごとくどこかへ跳び去っていった。

誰も止めようとはしなかった。当たり前だあんなものは早くどこか行つて欲しい。

そうしてすぐさま俺は倒れた。緊張の糸が切れたからだろうか。

「大丈夫か、創太!!」

ああ、大丈夫だ。そう言おうとしたのだが舌が上手く回らない。

「お………太!返事を……!」

眠いんだよ俺はそんな近くで叫ぶなよ。

「……、……!!」

ジアナも何か言っているが俺の意識は段々薄れていく。

眠い、ねか……せ……て……く……

戦いの後

――2月3日――

夢を見た。

「僕は正義の味方になりたかったんだ。」

それは切嗣^{爺さん}が死んだ日だった。

「だったら俺がなってやるよ。」

それは満月の夜だった。

「そうか、なら安心だな。」

それが最後の言葉だった。

朝の日差しで目が覚める。日が少し高い。どうやら寝過ぎたようだ。桜と藤ねえは学校の部活だろうから誰も起こす人がおらず、結果こうなったのだろう。

顔を洗おうと、洗面台に向かう。その途中に、体が少し気怠く感じた。寝過ぎたせいだろうか。

「昨日、何かあったか？」

少し思い出せない。そもそも寝過ぎすという事が珍しい。昨日の内にあつた事が関係ある筈なんだが。

「腹、減ったな。」

そんなことよりも体は栄養を求めている。居間に行けば何あるだろう。

顔を洗い居間へと歩く。どうやらまだ寝ぼけているらしい。だつて、遠坂の顔がそこに……

「おはよう、衛宮くん。」

……気のせいではなかったらしい。

「な、え……！」

なんで遠坂がここに!?!昨日なにか……

「何？まだ寝ぼけてるのかしら？」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

えつ、えつと確かセイバーのマスターになって、教会に行つて、その帰りにバーサーカーとかいう奴に襲われて、セイバーを庇おうとしてそれから……

「創太は？？」

そうだ。あいつも俺を庇ってなんとか生き残り、黒い大男を撃退したは良いものの、そのまま倒れて俺の家で看護しようという話になった筈だ。

「あいつなら、衛宮くんが寝てる間に出ていったわよ。家に色々取りに行つてるらしいわ。」

「えつ、だけど……!!」

「心配いらないわよ。昨日も言つてたでしょ。ただの魔力失調で、ドラナリクさんが補給すればなんとかなるって。」

「あ……」

そんな事も言っていたような気がする。ただ、儀式も何も無しに魔力補給はできないとかなんとか言つてたような気もする。遠坂が。

「なんとなく昨日の事は思い出してきた。本当に創太は無事なんだな？」

「ええ、ピンピンしてたわよ。」

「そうか、良かった。……他の三人は？」

三人というのはセイバー、ジアナさん、それにアーチャーの事だ。

「アーチャーとドラナリクさんは屋根の上で見張りをしてもらつてるわ。セイバーは道場にいるそうよ。」

え？ アーチャーとジアナさんは解るとして、なんでセイバーが道場に？

「衛宮くんの質問には答えだし、次は私からも質問をして良いかしら？」

「あ、ああ。」

まだ質問はあるがそれは本人に聞けば良い事だろう。

「率直に言うわ。衛宮くん、私と一緒に組まない？」

「はひ？」

何故か変な返事をしてしまった。

「だから、あのバーサーカーを倒す間協力しようっていう事。古崖くんに、その結論をあなたが出す前に話をさせろって言われたから、報告するのは彼の話を聞いてからでいいわ。」

「あ、うん。解った」

遠坂と戦わなくて済むのはこちらとしても嬉しいが、創太から話とは一体？

「それじゃあ、言いたい事は伝えたから私は帰るわね。昼食もまだ食べて無いし。」

「待った。なら、一緒に食べないか？」

「えっ？」

「俺が作るからさ。皆で食べていけよ。」

「皆ってまさか、アーチャーも？」

「おう。」

当然だ。皆っていうのはそういう事だろう。もちろん、セイバーとジアナさんもだ。

「……いいわよ、ただしアーチャーは抜き。あいつ呼んでも来ないと思うし。」

「なんでさ。」

「サーヴァントっていうのは元々食事が必要ないのよ。そもそも敵地で出される食事なんて普通は食べないの。」

そんなものか？……いや、そんなものか。よく分からないがアーチャーは食べないのか。

「じゃあ、他の人が食べるか聞いてくるよ。」

セイバーは分からないが、ジアナさんは食べると思う。

|||||

少し時間は遡り

「貴方は後悔しているのですか。」

ジアナとアーチャーの会話が屋根の上で行われていた。

「さあ、何のことかな。」

アーチャーははぐらかそうとしながら見張りを続ける。

「それは士郎君に関係しているのですか。」

「何故そう思う。」

彼の顔色は変わらない。

「貴方が士郎君に向ける敵意は他の人に向けるものとは格段に違いました。」

「それだけの事で判断したというのか？」

呆れた顔をするアーチャー。

「いいえ。」

ジアナは答える。

「貴方のその敵意には自己嫌悪が含まれていたからです。」

「……。」

少しアーチャーの顔色が変わったようにジアナは見えた。

「すみません。こんな事をいきなり尋ねてしまって。ただ、貴方の後悔を知りたかっただけで……。」

「ジアナさーん！」

話の途中で下から士郎から呼びかけられる。

「……はい！なんでしょうか！」

「昼食一緒に食べませんか！」

「はい！頂かせてもらいます！」

それは、食事の誘いであった。

「先程の話は無かった事にしてください。知られたくない過去は誰にでもありますから。」

そう言つて屋根から降りようとするジアナ。

「君はやり直したいと思つたことはあるかな。」

「えっ？」

アーチャーは呼び止める。

「……なに、ただの独り言だ。」

ジアナはアーチャーをじっと見る。言葉の意味を考えているからだ。しかし、いくら考えても判らないと思ひ屋根から降りた。

事実と真実1

「衛宮ー、ジアナー、いるかー?」

家に忘れてしまった物を取りに行き、真っ先に衛宮の家に来た俺は誰かいるかを確認する。

「よう、創太。昼食あるけど食べるか?」

「衛宮が作った飯か?」

「ああ、そうだ。」

「よっしゃ!衛宮の飯は美味いから楽しみだ!」

本当にこいつの飯はプロ並みに美味いと思っっている。その辺で飲食店とかで生活出来るかもしれないな。

「俺はさつき、遠坂やセイバー、それとジアナさんと一緒に食べたからお前一人で昼食を取るようになるけど……」

「全然構わねえよ。」

「なら、良かった。」

一緒に食いたかったが、先に食べちゃったなら仕方ないか。そう思いながら昼食の為に居間へ移動する。

「それじゃあ、全ての食材に感謝を込めていただきます!」

そんなどこかの四天王みたいな事を言っただけ目の前にある料理を食べる。今日の献立は白飯、油揚げとワカメの味噌汁、カボチャの煮込み、それから焼き鮭だ。

「んー!美味しい!」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。」

米や味噌一つとっても完璧だ。だが、本人からしてみればまだまだらしい。この上があるならそれこそ神を超えるぞそれは。

ちなみにここにいるのは俺と衛宮。それにジアナとセイバーだ。

「もぐもぐ、ごっくん。それで遠坂に俺から話があるっていうのは聞いたか?」

俺は食事中にそんな事を喋る。マナーが悪い?知ったこっちゃな

い。

「ああ、聞いたけど、どんな話なんだ？」

「色々あるが……まずはお前の父親、衛宮切嗣さんの話だ。」

衛宮切嗣という単語を持ち出した瞬間、衛宮の顔が真剣そのものになる。セイバーは少し嫌そうにしている。切嗣さんとの良い思い出はなかったようだ。

「それは前回の聖杯戦争の参加者だったという事か？」

「ああ、そうだが、言峰さんから聞いたのか？」

俺の質問に対し、衛宮は首を縦に振る

やはりか。あの時は寝てたから詳しいことは知らないがそこまで話していたとは。

「と言つても話すのは俺じゃなくてジアナだけだな。」

「なんでだ？」

「当事者の方が詳細に話せるだろ。というわけでジアナ頼んだ。」

厳密に言えば当事者では無いけどな。こつからはジアナに任せよう。正直言つて、俺はジアナから聞いた話をあまり覚えていないというのが本音だ。

「任されました。では話をさせてもらいます。まず結果から話します。冬木の大災害、あれはキリツグによって起こったです。」

「なっ……!!」

衛宮が驚く。無理もない。自分をあの災害から救った人がその原因だと知ってしまったえばな。

「ジアナさんそれはどういう……!」

「衛宮！気持ち解るが最後まで聴け。」

「……分かった。すみませんジアナさん取り乱してしまつて。」

「いえ、それを承知で喋ったようなものですから。話を続けますね。キリツグは聖杯戦争を勝ち残り聖杯を手に入れましたが、それは横取りされ世界を滅ぼせという願いをそれに託しました。仕方なく彼はここにいる彼女セイバーにその聖杯を壊させました。」

「えっ？セイバー、その話は本当か？いや、そもそも前回の戦いで切嗣と一緒にだったのか？」

衛宮はそう言ってセイバーに訊ねる。

「はい。前回私はキリツグに召喚されました。そしてジアナが話している事も事実です。あの状況では仕方ありませんでした。貴方が巻き込まれたと言う大災害がその結果だとしても。」

「……。」

衛宮にとつては複雑な気持ちだろう。だけど切嗣のさんに対する気持ちはこれからも変えないで欲しいと思う。あの人だって犠牲者なのだから。

「今の話は私が直接見たものではなく、後でキリツグから聞いたものです。」

「えっ、でもジアナさんも前回の聖杯戦争に関わってたって……」

それは気になる所ではある。けれど理由はちゃんとある。

「私はソウタの両親から、その大災害が起こる前にソウタのそばに居て欲しいと頼まれました。最初、私は断りました。しかし、その戦いは自分達にしか終わらせられないと説得されて家でソウタを守ることにしました。」

「そういうことだったのか。」

衛宮は納得する。

「大災害と切嗣がどういう関係性があつたのは判りました。だけど創太、一つ疑問に思ったことがある。」

「ん？なんだ？」

何故、俺に質問をしてくるんだ？今の話に俺への疑問があつたか？

「なんで切嗣の言つた言葉をお前が知ってたんだ？」

「え？……ああ、あれか俺も魔法使いだからとかつていうやつか」

「そうだ。」

そういえば、ランサーから庇つた時にそんな事を言ってたな。

「俺もその場にいたからだ。」

「えっ、創太もあそこに入院を……？」

「違う違う。ジアナに無理矢理連れて行かされてな。さっきの話もそこで聞いたんだよ。」

「へ、へえ。」

なんか同情された気がする。あれだろう、親を失った悲しみが拭いきれていないのに引きずり回されたのを気に掛けているんだろう。まあ、そのお陰で立ち直れたのはあるけど。

「ん？ちよつと待ってくれ。十年前にもジアナさんは聖杯戦争で戦ったと言ってたけどそんな幼いころから……」

「いや、衛宮。ジアナは不老なんだ。」

「……えっ!?」

うん。その反応は当たり前だ。俺も小さい頃からいたけどなんか老けないなあと度々思っていたが本当に不老だとは思わなかった。あれだな。お前人間じゃねえ(CV:うえだ○うじ) 第二弾だな。

「シロウ。彼女の体は人形なのです。」

「っ!?」

おいセイバー、合ってるけど間違ってるぞ。いや間違っているというよりも勘違いさせるぞそれは。

「え、え、えつとつまり？ジアナさんは不老不死で？それで遠隔操作で操られていて？」

おいおい、尾びれ背びれをつけるな。あと後半は、どこぞの砂忍者と勘違いしてないか？

「衛宮、ちよつともちつけ。」

「えつと、そうだな餅食ばなきやな。」

やべ、面白かったから冗談を言ったらさらにややこしくなった。

「いい加減にして下さい。」

「まそつぷ!」

遊んでたらジアナにチョップされた。それと同時に衛宮とハモつたから、多分こいつもチョップをくらわされたんだろう。

「ちゃんと説明しますね。私のこの体はある人形師が作ったもので魂が中に入ると元々その魂が入っていた肉体と同じ形になるというものです。」

といってもそれを目的として作ろうとしたら失敗作となってしまったのをソウタの両親がなんとか動くようにした物なんですけどね。その副作用か私は老いることが無くなったのです。でも、それ

は見た目だけで寿命はちゃんとありますし、死ぬ条件も普通の人間と同じです。」

さらっと言っているが、第三魔法、つまり魂の物質化をちやつかり成功したと暴露していることになる。さしずめ、ジアナは歩く第三魔法だ。

「へー……。でもなんでそんな事をしたんだ？普通に生きるならそんな事しなくてもいいだろう？」

衛宮よ、お前の普通は魔術師の普通に当てはまらないのだよ。いや、ホントまじで。魔術師は少し思考が外れてる。まあ、今回はそういう理由ではないんだけどな。

「……実を言うと十三年前、私はソウタの両親と出会った時、死にかけていました。いえ、死にかけていたのとは少し違いますね。私の本当の体はある呪いにかけられていました。時間が経つに連れて症状が悪化し、いずれ死に至るという物でした。

それを聞いた時、もうダメかと思いました。ですがあの人達は初めて会った私を助けてくれました。その時の私は魔術のまの字も解らない一般人でしたが、彼らはそれに関係ないと言わんばかりに力を惜しむ事無く魔術を使い私を死の淵から救ってくれました。その時に私は決めました。この人達に尽くすと、私が死ぬまで、例えその人達が死んで私が生き残ったとしても次の世代もその次の世代もずっと……」

衛宮はそれを聞くと納得した顔になるがセイバーはそうでは無いようだ。なぜだろう。

「すみません、理由だけをいうはずが私情まで話してしまつて。」

「いや、良いですよ。ジアナさんの創太の両親への気持ちは判りましたから。」

「さ、さて話を元に戻しましょうか。」

少しジアナは照れている。さっきの話は少し恥ずかしかつたのだろうか。しかし、だいたいが話が脱線してしまつたな。最近説明をするといつの間にか逸れてしまう事が多いな。

「次の話は昨日のイリヤスフィールについてだ。」

話はまだまだ続く。

真実と事実2

「イリヤスフィールってあの銀髪で小さい女の子のことか？」
「ああそうだ。」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、始まりの御三家と言われるうちの一つだ。ちなみに言うのと携帯獣の方では無いからな。俺が始めてやった時はトカゲとヒヨコとムツゴロウの中から草タイプを選んだのは完全なる余談である。

「なんでまたあの子が出てくるんだ？」

「これもジアナから聞いた方がいいかもな。」

「解りました。士郎君、また結論から言いますがあの子はキリツグの実子です。」

「……。」

おい衛宮、口が開いてるぞ。確かにあの十歳前後にしか見えない奴が、いきなり戸籍上ではあるとはいえ、親戚だと言われれば顎が外れるよな。どこのエロゲだよって言いたくなる。

「更に言えば彼女は貴方の姉です。」

ジアナさんや、まだ状況整理もできていない衛宮さんに、次の爆弾を投下してはいけませんぞ。いやマジで。さつき頭を整理できたというのに、また混乱させたら衛宮の頭が噴火するかもしれねえぞ。

「え、えつとシロウ？」

「……はっ、すまんセイバー。なんか起きたまま夢を見ていたみたいなんだ。昨日の銀髪の子が親戚だって言われて更にはあんな年下に見えるのに姉だったというカミングアウトを……」

「シロウ、それは事実ですよ」

「……まだ夢を見ていたのかな。ハハッ」

まずい。衛宮が夢の国へと旅立とうとしている。止めてくれこの世界の危機が掛かっているから止めてくれ。特に最後の部分。それは本当に危ない。

「衛宮、一旦お茶を飲もう。なっ？」

「あ、ああ。」

衛宮はそう言われてお茶に手を伸ばす。

「……よしっ、一先ずは落ち着いた。えーつと？遠坂と桜が親戚で姉妹だって言う話だっけ？」

「なんでや!？」

頭トゲトゲの人のセリフが出てしまった。全く落ち着いてないじゃねえか。遠坂と間桐（妹）の事は話してねえよ。どっからそれが出てきた。

「……。」

なにか、ジアナの様子がおかしい。驚いているという事は確かなのだが、関係の無い事を持ち出されてそうなるのは少し違うような？

「シロウ君。今話しているのはイリヤスフィールとキリツグについてですよ。」

「えっ、ああ、そうでしたね。」

俺が思考を張り巡らしていたら、ジアナが話を進めていく。

「この話をするにあたって、まず最初に聞いておかなくてはいけません。貴方は『昔』のキリツグを知っていますか？」

「『昔』の切嗣親父?」

「そうです。」

俺の予想だが、衛宮は『昔』の切嗣さんの事は知らないと思う。知っていたらやさぐれる……とまではいれないが今のように真っ直ぐに正義の味方が夢だなんて言うはずがないからだ。

「いや、知らない」

「やはりそうですか。」

ではお話ししましょう、私を知る限りで昔の彼の事を。」

ゴクリ、と生唾を飲む衛宮。

「彼は昔、魔術師殺しという異名を持っておりその名に恥じない行動を取っていました。」

衛宮の表情に驚きが混じる。いや、あれは怒りか？どちらにせよ嘘だと言いたい気持ちを抑えているようだ。さつき（前話）の教訓を学んでいるみたいだな。

「それはお金の為にというのもありましたが戦いを止める為でもあったそうです。」

そのジアナの言葉で衛宮の顔が和らぐ。

「ある日、その異名を聞いたアインツベルンはキリツグを雇い、第4次聖杯戦争のマスターとして参加させようとなりました。理由はもちろん魔術師であるマスターを簡単に倒せるからです。キリツグは当初、聖杯を使えば恒久的な平和が作れると思いいその話を了承しました。」

そして、アイリスフィールというホムンクルスに出会い恋に落ち、子供ができました。それが十八年前の出来事だそうです。」

「つまり、その子供は……」

「あのイリヤスフィールです。」

しかし、彼女は十八年前に、生殖細胞を組み合わせて人工でできたホムンクルスです。」

「いや、待ってくださいいどう見てもあんな子が18才には見えません。」

「そう思うのは無理ありません。ですが理由はちゃんとあります。それは彼女には人間としての欠点があるという事です。」

「欠点？」

「はい、それは二次性徴が無いというものです。その為、イリヤスフィールは十八という年齢にも関わらず幼い見た目をしていたので。」

少しの間沈黙が続く。衛宮にとっては驚きの連続だろう。もうそろそろ頭が本気で追いついていないんじゃないだろうか。知らなかった身の周りの事が次々と明かされているからな。

「衛宮、大丈夫か。なんなら話はまた今度にする事もできるが……」
「いや、心配しなくてもいい。驚くことばかりだけど、俺は切嗣親父の事もっと知りたい。だから大丈夫だ。」

心配は無用だったか。

「それでジアナさん、あの子が俺より年上だという事は解りました。でも、俺は十年前、あの子が八才の時は切嗣親父とは一緒にいませんでした。それはどういう事ですか。」

衛宮はきつと切嗣が何故イリヤスフィールと一緒にいなかったか、というよりはどうして幼い子が父と一緒にいないのかという疑問が湧いているのだろう。

「キリツグは娘をアインツベルンに置いて妻のアイリスフィールと共に聖杯戦争が行われるここ冬木市にきました。先程も言った通りキリツグはセイバーに聖杯を破壊させました。」

そして、それを良しとしなかったアインツベルンは自分達の領地にキリツグを入れさせませんでした。イリヤスフィールとキリツグが実の親娘だとしても。」

その話を聞いて衛宮の顔にまた怒りが浮かび上がっていた。さつきとは比べ物にはならない。親子なのに会わせないというのがムカついているんだろう。アインツベルンの当主がいたら一発ぶん殴られたらうな。

「衛宮。気持ちは解るがそれは元凶にぶつけるんだな。」
「分かってる。」

段々と落ち着いていく衛宮。それを見計らった様にジアナは話す。「これは私の推測ですが、イリヤスフィールはキリツグが戻らなかつたのではなく、戻ってこられなかったという事は知らないでしょう。その場合、イリヤスフィールはキリツグを恨んでいます。そして彼の養子である貴方もです。」

ただの思い過ごしかもしれませんが、これからイリヤスフィールに会う時は注意してください。」

最後の部分についてだが、衛宮の性格からしてイリヤスフィールと会ったら誤解を解こうとしたり、後ろ目たさから優しくしそうだからそれを言っても無駄だと思う。

「分かった」

その『分かった』は絶対『分かかってない』の意だ。

「けど、一つ質問です。」

「なんですか?」

「イリヤスフィールって子はホムンクルスだって言っていましたけど、なんでわざわざ子供を作るのに人工で作らなきゃいけないんですか

？」

それを聞いちまうか。まずい事ではないが場合によつちやとんでもない答えがでるかもしれないぞ。今回はそうじゃないが。

「えっと、子供を作る為に人の手を使った訳では無く、人工で作った結果がイリヤスフィールです。」

「?どういう事ですか?」

「つまり、簡単に説明すると彼女は聖杯の器なのです。母親であるアリスフィールもそうなのですがある欠点があります。それは聖杯戦争が進むにつれて人としての機能が聖杯のそれに変わり、体の自由が利かなくなり最後には意識さえも無くなるという物です。

それを改善するためにアインツベルンは人であるキリツグとアリスフィールの遺伝子を組み合わせ、その結果、欠点が無くなり完成されたイリヤスフィールの誕生というわけです。」

「なるほど」

聖杯の器としては確かに完成された。けれども

「けれども、私は先程彼女は人間として欠点があると言いました。その欠点がもう一つあり、短命だという点です。」

「つ……………」

自分がそういう運命を突きつけられたかのような表情をする衛宮。

「同情はするなよ。むしろこの聖杯戦争が終わつちまえばどつちにしてろあいつはこの世からいなくなる。それはイリヤスフィール自身、分かってる事だ。」

「だけど…………!!」

「そんなに気になるんならお前が勝ち残ってあいつの為に使えばいい。なんでも叶う聖杯なんだからよ。」

「…………あつ、そうか。」

納得しているようだが、親戚であるものの、関わりの無い奴に聖杯を使うなんてこいつはやっぱりおかしい。

まあ、俺が知ったかぶってイリヤスフィールの気持ちを勝手に予想してペラペラと喋っているのも大概だがな。

「以上が俺らが知っていて、お前が知らないお前の周りの人達につい

てだ。」

約一時間ほどだっただろうか、それぐらいの時間が経ったと思う。

「一応納得できない部分はあるけど、理解はできた。でも、なんでそれ今更言い出したんだ？」

「切嗣親父さんから黙つとくように言われたんだよ。」

「切嗣親父に？」

「ああ、衛宮にとってそれは知るべき事では無かったんだよ。でも俺たちは今は知るべき事だと判断してお前に話した。どう捉えるかは勝手だと思ってるが、それを踏まえてどうするべきかは考えて欲しいんだ。」

「解った。」

これは本当に『解った』という意で言ったな。

「それとありがとう。創太、ジアナさん。それを話してくれて」

「別に。いつかは知ることだから早めに話しておいたほうがいいと思っただけだ。」

知らないままだったら向こうから話すかもしれないしな。

「さて、最後に俺たちのことだ。」

事実と真実3

これまで衛宮の周りについて説明していたが次に話す事は「少し俺たちのことを話そう。」

と言ってもそれほど大した意味は持たない話だ。これはただ俺が言いたいだけだ。

「俺たちがこの聖杯戦争に参加者でも無いのに関わっている理由についてなんだが、お前と大体同じ理由で、聖杯戦争の被害を抑えるためだ。俺の両親もそんな理由で前回のやつに関わっていて、切嗣親父さんも共同戦線を張っていたらしい。」

「切嗣と？」

「ああ。」

さっきまでの話は、ジアナがその時に聞いたらしいし。

「俺はもう周りにいる誰かを失いたくない。ただそれだけの為に戦う。そして、できればお前が聖杯を勝ち取ってほしい。そうでなかったら、無理矢理にでも他の奴には聖杯は使わせない。そういう目的で聖杯戦争に関わっている。」

少しの沈黙。この言葉には嘘はない。純粹に思った事を伝えたりもりだ。しかし、俺はそれを全て否定するような事を言う。

「こんな話をした後にはちよつとどうかと思うが……」
「なんだ？もつたいぶつてないで早く言ったらどうだ？」

衛宮は急かす。少し悩んで俺は口を開く。

「俺が今言ったことが全て本当だとは限らないという事だ。」

同時に驚く三人。散々長つたらしい話しておいてこんな事を言うのはおかしいとは思うがそれでも言っておきたかった。

そして、肝心なのは真実か事実かではなく、嘘をついているかもしれないというところだ。

「衛宮、お前は人が言った事を信じすぎている。今ここで起こっているのは戦争。敵はどんな手を使つても勝ちに来る。力だけじゃなく口や頭をも使う。だから、お前はもう少し人を疑う事を覚えろ。じゃないと……死ぬぞ。」

少し辛辣かもしれないが、本当の事だ。だが、衛宮に言っても無駄かもしれない。

「でも、創太は態々そんな事を言ってくれた。自分が疑われる事を恐れずに。だから、俺はそんなお前が嘘をついているなんて思えない。」

ほら、衛宮士郎という奴はこういう男だ。

「あのな衛宮。今の話聞いてたか？敵はどんな事でもするって。遠坂だって普段は猫被ってて、今は違う一面を見たけど、もしかしたらもう一面あるかもしれないぞ。かなり黒い面が。」

「そんなやつには見えないけどな……」

かなり重症だ。こいつ本当に生き残れるのか？

「はあ。もういい、とにかく俺が言った事は忘れんなよ。」

「わ、解った」

嘘つけ。いや、意味が無いのは解っていた。けれど言わずにはいらなかった。俺は友人としての忠告がしたかったのだろう。

「そういえば、お前遠坂から同盟の話は聞いたか？」

「ああ、聞いた。」

「早めに返事はしておけよ。さつきはああ言ったが別に承諾しても構わない。むしろ、ありがたい話だと思っている。」

「なんでさ？」

「敵が少なくなるからだ。後から戦う相手になるとしてもな。そうすれば生き残れる可能性が高くなるだろ。」

「遠坂と戦う気は俺には無いんだが……」

衛宮が言った事は聞かなかったことにしよう。面倒くさいから。だが本人の前では言わないでくれよ。さらに面倒になるから。

「最後の話になるけど俺とジアナはしばらくの間、ここに泊まろうと思っただ。」

「なんでだ？」

「さつきも言った通り俺はお前が聖杯を取るのが最善だと思っているし、その為には一緒に戦う方がいい。なら、普段の生活もなるべく近くにいた方がいいだろ？」

「まあ、確かに。」

「それでどうだ？」

「いや、俺はいいと思うけど、セイバーはどう思う？」

「私も彼等が共に戦ってくれるのはありがたいです。」

「それじゃあ、決定だな。早速俺たちは荷物を取って来るぜ。ジアナ、いくぞ。」

「はい。それでは士郎君、セイバー、後ほどまたお会いします。」

そう言っただけで俺たちは立ち上がって帰ろうとする。

「じゃあな二人とも。また後で。」

「ああ、またな。」

「はい、気をつけて。」

衛宮邸の玄関を出てすぐジアナが話しかけてきた。

「すみません、創太。実は急な用事があった……」

「セイバーに呼び出されたんだろ？」

「えっ……」

凶星のようだな。

「大方、俺たちに聞かせたくない話だろ？別に訊いたりほしくないからさっさと行ってこい。」

「……はい、ありがとうございます。」

そう言っただけで、ジアナは扉を飛び越えていった。なんの話かはわからないが、おそらく前回の戦争についてだ。最後の最後で二人は顔を合わせていない。だから、お互い確認したい事があるのだろう。

「さて、先に帰るか。」

＝＝＝＝＝＝

「すみません、待ちましたか？」

「いえ、先程来たばかりです。そもそも、呼び出したのはこちらなのですから、待たされても文句は言いません。」

そんな、恋人が待ち合わせ場所で会話をするような私達は、衛宮家にある道場にいました。アイコンタクトでセイバーから話があると

聞いた（見た）のですが・・・

「それで話とは？」

「前回の聖杯戦争についてです。」

「やはりその事ですか。」

私が思っていた通りのことでした。

「まず、私は前回の最後に聖杯を壊して戦争が起こらないようにした筈です。それなのにどうしてまたこの地で戦争があるのですか？」

「私も判りません。というよりも私は本当に貴女が聖杯を壊したのが気になる場所なのですが……」

「それは間違いありません。確かにこの手で聖杯は破壊しました。」

彼女は嘘を言っているようには見えません。それなのに聖杯戦争は起こっています。これは一体……。そう悩んでいると一つの考えが思い浮かびました。

「セイバー、貴女の言った事は事実でしょう。ですが、今ここで聖杯戦争が行われているのも事実です。そこから考えられるのは聖杯の再構築です。」

「それならば大量の魔力が必要です。それをたった十年で集めるのは無理があります。」

やはり、そこを疑問に思いますか。聖杯とは霊脈から少しづつ魔力を採り、その魔力を使い英霊を召喚します。しかし、人の手で魔力を集めるなどと不可能ですが、

「そう考えるしかありません。もし間違いだったとしてもアインツベルンから直接聴きだせば締めればいいだけです。」

それで万事オツケーです。なにかセイバーが苦笑いをしています。が気のせいでしょう。

「そ、それはその方向でいきましょう。」

あれ、本当にしているようなの？

「もう一つ質問をしても？」

「ええ、構いませんよ。」

き、気のせいですよね!!多分……。

「創太に本当の事は話しているのですか。」

「何がですか？」

「感づいてはいますが一応シラを切ってみます。」

「惚けてないでください。貴女とソウタの両親が出会った話です。」

「無駄に終わってしまいましたか。」

「前にもその話を聞き、その後、問い詰めましたが貴女は詳しい事は話せないと言いました。それは私が部外者だからだと思いましたが、創太はそうではありません。」

「うーん、理由はあるのですが、それを話してしまえばセイバーは私の正体に気づいてしまうかもしれません。ですが嘘をついたところで彼女には見破られます。仕方ありませんが、それっぽい事を言っておきましょう。」

「私は今の私です。昔の私ではありません。ですから、昔の私を語ったところで意味はありません。」

「事実ではありますが真実ではないと言ったところででしょうか。そもそも、意味がないのならば語ってもいいということにもなりえます。」

「……分かりました。引つかる言い方ですが、貴女がそういうのであれば私は黙っておきます。」

「すんなり引き下がってくれるセイバー。私としてはありがたいことです。」

「他に質問はありませんか？」

「いえ、ありません。疑問は少しあります。例えば昨日の戦闘で私の聖剣を使った事とかですが。」

「うつ……。」

「バレましたか。あれだけ派手に使っておいてバレたも何も無いのですけれど。創太を助ける為とは言え、今回の失態でした。バレた所で問題は無いのですが。」

「しかし、あれも古崖家の魔術なのでしょう。」

「さすが、セイバー。大当たりです。」

「はい、貴女の言う通りです。しかし、あれは一度しか使えません。そもそも、あれは貴女の剣を騙して使っているに過ぎません。」

一度騙されれば次からは同じ事は出来ません。

「そうですか。しかし、貴女達の魔術は多様な事に応用が可能ですね。」

「器用貧乏なだけだと言っていましたけどね。」

ソウタの両親が言っていた事です。

「それともう一つ。マスターと話し合った結果、彼には真名を明かさなないことにしましたので、私の名はシロウに伝えないでください。」

「はい、解りました。」

おそらくですがシロウ君の対魔力では無いに等しく、格上の魔術師に脳内を容易く覗かれると判断したのでしよう。そうなれば秘匿も何もありません。

「話はそれだけです。」

「そうですか。では、私は一旦帰って荷造りをしてきますので。」

「はい、創太も待っている事でしょう。」

「ええそうですね、それでは。」

そう言つて私は道場から出ていき、古崖家へと帰ります。もしかしたらもう荷造りが終わっているかもしれませぬ。早く帰りましょう。

魔術

両手を魔法陣にかざすジアナ。その魔法陣は結界の基点でジアナはそれを解除まではいかないものの、魔力を取り除いている。

「どうだ、ジアナ？ いけそうか。」

「……はい、今終わりました。」

「よし、ならそれで終わりだからあいっらの所に行こうぜ。」

「ええ。」

俺達は現在、夜の学校にいる。怪談云々は前にもやったのでパス。何をしているかというところにある結界を調査アンド魔力撤去をしている。その結界とやらが神代のものらしく壊すのは不可能らしい。そこでその魔法陣に溜まっていく魔力を洗い流してしまえば良いとの事。そして、今、それを終えた所だ。

「おーい、衛宮ー、遠坂ー。」

「あら創太にジアナ。貴方達も終わったのかしら？」

「ああ、まあな。そっちも終わったみたいだな。」

「一通りはな。とりあえず、一旦帰ろうか。」

「そうね。」

「そうだな。」

さて、皆さんは違和感に気づいたでしょうか。そう、遠坂の事です。今日の昼に俺が衛宮に説明を一通り終えて、俺とジアナが帰った後、衛宮はセイバーと少し話し合い、遠坂と同盟を組むと決めたらしい。そしてすぐに電話をかけて、それを伝えた10分後に来たのだそう。行動がお二人共お速いこと。

俺とジアナが衛宮家に着いたときは驚いた。まさか、遠坂がいるとは思わないし、衛宮がすぐ決断したのは良いとしてそれを聞いて10分で来るとかお前ちよつと準備してただろ。

それからというものの早速作戦会議を始めて俺達がやる事を決める事になった。そして、実行されたのが学校にある結界の調査で今に至る訳である。

あと、それ以降遠坂が俺達の事を名前で呼んできた。少し違和感は

あったもののすぐに慣れたが、やっぱり、普段はネコ被ってたんだな。

「しかし、衛宮が意外な所で役に立つとはな。」

「むっ、意外ってなんだよ。」

「意外でしかないでしょ。その結界基点発見機能。」

「遠坂までそんな事言うなよ。」

「事実を言ったままでよ。」

衛宮の結界基点発見能力というのは最初にここへ来た時に衛宮がその名の通りの能力を発揮したモノだ。実際、ここに張られてある結界は存在自体は魔術師であれば誰でも感知できるものだが、その基点の魔法陣自体を見つけるのは困難だ。それは遠坂でも同じで学校中を探して見つけたのが屋上にある一個だけだ。

しかし、衛宮はそれをいとも簡単に見つけるという大拳を成し遂げた。それを見た遠坂は少し悔しそうな顔をしていたような。

ちなみに俺とジアナもできると言ったら更に悔しそうにした。

「やっど帰れた〜。」

寢床への到着と共に脱力する俺氏。帰れる家があるのは安心する

ね。人（衛宮）ん家だけどな!!

「さて、明日の予定を確認するわよ。」

居間に移動して遠坂を中心に少し会議をする。

「明日は各自普通通りの生活をしなさいよ。昼休みに屋上へ集合する事も忘れずに。それじゃあ解散。」

時刻は三時過ぎ。普通の人なら夜ふかしし過ぎなのだがそうは言ってられない。むしろ、深夜が決戦とか夜明けになるまで戦うとかこれから普通にあるのだ。多分。

「さて、寢床はっつ。」

寢床で思い出したが衛宮とセイバーがその事で揉めていたな。セイバーはマスターである衛宮を護るために同じ部屋で寝ると言っ

いるが、衛宮にしてみりやそれは精神的殺人行為だ。なんとか妥協して隣に移動してもらったみたいだが、そうなってしまえば衛宮が危険だ。まあ、普段寝られなくて、咄嗟の時に判断能力が鈍るのも危険だな。どっちもどっちだ。

「それでは、おやすみなさいソウタ。」

「おう、また明日。」

俺？俺はジアナと隣同士で寝てるぜ？別に恥ずかしくはねえよ。ジアナは俺の姉みたいなものだし興奮もしない。ただし姉であって母ではない！断固としてそれは無い!!

トイレ行きてえ。

なんか急にそんな事思った。寝ようとしてからは時間は経ってはいない筈で、ジアナも起きてはいるだろう。だからと言って子供みたいにジアナを起こして連れてってもらうとかはしない。そんな事したら一生の恥だ。それだけで死ぬ。年齢的にはまだ子供だけど。

「トイレどこだっけ？ここ無駄に広いからなあ。」

こっそり部屋から出てトイレを探している俺だが中々見つからない。前にも遊びに来て場所は案内してもらった筈なんだかな。全く、切嗣あの人さんは何の為にこんなでつかい屋敷買ったんだよ。

「ふう、やっと見つけた。」

トイレを探して三千里。うん、こんなタイトルじゃ視聴率零%だな。それは置いといて、俺はやっとの思いでトイレにつき花摘みができるようになった。判った事は縁側を通ればトイレに着くという事だ。まあ、それも置いといて、本題はその帰りだ。

行きは気づかなかったが土蔵の中に誰かがいる。その誰かは予想はつくが何をしているのかは分からない。興味に突き動かされた俺はその中へと入っていく。そこで見たのは……

「っ……！」

自殺をしようとしている衛宮だった。

いや、言い方に語弊があるなこれは。正しくは自殺紛いの魔術練習をしている衛宮だ。練習紛いの自殺の方が正しいか？待て待てそんなのはどうでもいい。大事なはこの状況をどうするかだ。下手に止めようと刺激すればかえって危険が増す。だからと言って見過ごすのは……

「士郎君！今すぐ止めてください！」

「っ！」

考え込んでいたらジアナかいつの間にか後ろにいて、叫んでいた。

「あがつーぐつー！」

拙い。衛宮が苦しんでいる。刺激してはいけないと思っていた次にこれだ。

「衛宮！大丈夫か!？」

「士郎君、手を！」

俺とジアナが駆け寄り、ジアナは衛宮の手を取る。

「少し我慢してください。」

そう言うとジアナと衛宮の手からぼんやりとした光が出て、やがて衛宮の体全体がそうなる。

「うっ……！」

待つこと数分。その光は消えて衛宮からは苦しみがいつの間にか無くなっていた。その代わりに少し汗をかいている。

「ふう、なんとかかなりましたね。」

ああ、なんとかしたな。自分の撒いた種を。

「シロウ君、大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか。」

「おいジアナ。」

「はい、なんですか？」

やべえ、こいつ自覚がねえよ。

「お前今自分が何したのか解ってんのか？」

「えっ？はあ。」

「あのな、さっきのは刺激を与えちゃいけないんだろうが。それをな
んで大声をあげるんだよ。」

「……あつ。」

あつじゃねえよ。

「い、いえいえ、さささ、さっきのはあえて刺激を与えて素早く止めて
もらい、魔術回路が暴走すれば私がコントロールするという算段だっ
たんですよ。」

「それ、古崖家の魔術が無かったらどうするんだ？」

「えっ、そっそれは……」

まったく、いい加減この天然を止めてほしい。力を操るといふ特有
の魔術が無けりや今頃衛宮は危なかったっていうのに。

「ああいう時は刺激を与えずにそつとやるもんだぞ。」

「はい……解りました……」

これでは、どちらが師匠兼保護者なのか分からなくなる。

「まあまあ、2人とも喧嘩はそこまでにして、なんでここにいるのかを
説明してもらえないか？」

喧嘩じゃなくて説教だ。そう言いたいのが抑えておこう。

「そりやお前がここにいたから、何やってんだろうなと思つて。」

「私もソウタと同意見です。」

ジアナもだったか。

「それで俺のやってた事を止めようとしてたけど。何をしていたか
判って止めようとしたのか？」

「ええ、判った上です。貴方が自殺紛いの事をしてしていると判つて。」

「なっ……」

最初は魔術の練習を邪魔した事に叱ろうとしていた衛宮だが、立場
を逆転されてしまった。

「どういう事ですか、ジアナさん。」

「言葉通りです。」

「……」

衛宮はジアナの答えにいまいち納得がいていないようだ。

「シロウ君、貴方のソレは普通の魔術師の鍛錬とは程遠いものです。」

今のままではその身を傷つけるだけで成果は何も得られません。」

「そんな訳が……!」

衛宮にとつて魔術は切嗣さんから教えてもらった数少ないモノ。その鍛錬方法を否定されるのは切嗣さんを否定されるのとほぼ同義なのだろう。

「落ち着いてよく聴いてください。キリツグは元々、貴方を魔術師にするつもりはありませんでした。しかし、貴方はどうしても魔術を習いたいと言い、彼は仕方なく間違った方法を貴方に教えました。こちらの世界に関わらせないために。」

この話を聞けばあの人もあの人なりに自分の息子の事を考えていたんだなと改めて思わせられるモノだ。そうなると切嗣さんとジアナには少し似通ったところがあるのかもな。

「そんな事が……」

衛宮からしてみれば驚愕の連続……これ前も同じようなこと言っただな。

「うん?」

土蔵を見渡してみると俺はあるモノを見つけた。

「なあ、衛宮。これって……。」

「それはただの失敗作だ。」

「失敗……作……?」

俺は妙な違和感を覚えた。

「小さい頃にやった投影魔術で作ったんだけど、中身が無いガラクタになっちゃったんだよ。」

中身が無いというのは確かだ。失敗作であるという事も。しかし、これにはそんな些細な事はどうでもいいと思ってしまう、ある性質モリがあつた。

「貴方は本当にアレを創り出したのですか?」

「はい、そうですけど。」

ならば衛宮は異常ということになる。下手をすれば封印指定になりかねない程の。

「士郎君、投影魔術というのは普通、制作されてから時間が経つと消え

てしまうものです。」

「えっ？でも、あれは消えてませんよ？」

「普通は、です。貴方の魔術は例外なのでしょう。理屈は判りませんが現にそうなっています。そして、それは他人には極力見せてはいけません。良いですか？」

「わ、解りました。」

少しジアナに気圧されている衛宮。真剣になるジアナの気持ちも解る。これが外へと漏れれば衛宮はその身を追われる事となる。少なくともあの神父さんには教えてはならないと本能が叫んだ。

「色々教えたい事はありますが、今日のところは一旦寝ましょう。明日に影響するのは良くありません。」

「それもそうだな。衛宮もそれでいいだろ？」

「でも、それだと今日の鍛錬が・・・」

「い・い・か・ら、寝・ま・し・よ・う」

「……はい。」

完全に負けたな衛宮。

「後それからもう一つ、あなたの属性、起源は共に『剣』です。」

「何故それが判るんですか？」

「それも明日話しますよ。では先におやすみなさい。」

そう言つてジアナは土蔵を出て行つた。

「なんか釈然としないなあ。」

そう言う衛宮の気持ちは解るが夜遅くまで起きてるのは良くない。けれども俺は

「衛宮、先に行つててくれ。俺はちよつと調べたい事があるから。」

考えと行動が一致しないのである。

「調べたい事って？」

「お前の投影品だよ。少ししたらちゃんと寝るしさ。」

「解つた。じゃあ先に寝てるからな。おやすみ。」

「おう、おやすみ。」

朝の騒動

今俺は、土蔵にいて衛宮が創り出したと言う投影品を調べている訳だが少し気になるころがあった。それは既視感があるという事。

こう、なんというかこの投影品と衛宮は繋がっているというか分身というか……。どこで見たんだっけな？

そんな事を考えていたがいつまで経っても判らないと判断した俺は自分の寢床へ帰る事にした。そして、求めていた答えの一つが目の前にいた。

「おいおい、仕事サボって良いのか？」

「どうせこの屋敷に攻め入る奴は誰もいないだろう。」

黒いボディアーマーに赤い外装を纏うアーチャーだ。そうか、衛宮の投影品はこいつの使う武器と同じなのか。

「そんな事言ったらまた昨日みたく敵を見過ぎすと思うが、そこんところどうなんだ？」

「お前の従者が人外過ぎるだけだろう。」

「ジアナは従者じゃねえよ。あとその後半部分、本人の前で絶対言うなよ。マジで傷つくから。」

それを言ったら、すっげー落ち込んだのは六年前の記憶だ。

「で、本題は何だ？」

「ふむ、では簡潔に言おう。古崖創太、ジアナ・ドラナリク、貴様等は一体何者だ。」

「はっ？」

何者と言われても知らねえとしか言いようがない。

「……何を覚えてそう思った？」

「さあ？私も身元が判らない他人に情報を明かすほど阿保ではないの
でね。」

くっそ、腹立つなこいつ！どういう意味で訊いてんのか判らねえから訊き返してんのに！

……落ち着け、よく考えろ。何故今出てきた？それは、俺と二人で話すためだ。いや、それならもつと他にタイミングがある筈だ。アー

チャーは俺が土蔵から出てくるのを待っていた。そして、その前の会話。そこから導き出されるのは

「衛宮の属性と起源が何故判ったのか、という事か。」

「……。」

ボソリと呟く。そうか、確かにそれはおかしな話だ。衛宮は投影魔術が向いてるといふのは土蔵にあるものを調べればわかる事。けれども属性と起源は判らない。なるほど、自分も同じだから気になるのか。

「俺達は『力』を見ることが出来る。そして人の才能も同じだ。ジアナはそれを使って衛宮の属性と起源を見抜いた。それがアーチャーのような特異なものであっても見抜ける。」

「……っ！」

すんません。嘘ツス。ブラフツス。俺はできないっす。できるのはせめて、あの人とあの人の力の感じが似てるなーとか、あの人、周りより力持つてるなーとか、あの魔術はああいふ事ができるなーぐらいだ。才能とかそういう詳細は見えません。ジアナは多分できるといふか出来たから、ああ言ってるんだろう。直接聞いた事はないけど。

「今度は俺から質問だ。お前は一体何者なんだ？」

「……さて？」

「さっきも言ったが俺は力の性質が判る。同じような奴はいても同一は無かった。けれども、お前と衛宮の力の性質はまったく一緒だ。」

「……長い歴史の中ならばそのような奴もいるだろう。」

「ああ、そうだな。でも、そこまで特異な能力を持っている奴はそうそういない。」

淡々と喋っているが、本当は心臓が張ちきれそうで、バックバックです。力の性質とか特異だとか言っているが、そもそも衛宮の投影品の異常性は一生消えないとかぐらいしか判ってないし。もう少し何かがあると思っっているが今は全く見当がつかない。

「本当にお前は誰なんだ？お前と衛宮が同じ道を辿ったが故の結果がそうさせたのか、お前が言っているようにただの偶然なのか、はたまた

たどちらかは先天的なものでもう片方は後天的だったのか、それとも……同一人物だとか？」

考え始めればキリがない。もしもは無限だ。けれども

「……悪い、今の話は聞かなかった事にしてくれ。」

これが一番であった。

「今は聖杯戦争。正体をバラされたくはないよな。それなのに正体を聞き出そうなんて、教える訳がないし。」

「ならば、最初から訊かないことだな。」

言うな。

「……さて、俺は寝るよ。サーヴァントおの体とは違って睡眠は必要だからな。」

そう言つて俺は今度こそ、寢床へと向かう。寝よう。こんな無駄話する暇があるなら寝よう。

「じゃあなアーチャー。また明日だ。」

「日付はとつくに過ぎてているぞ?」
言うなつて。

俺が今見ている夢。

それは昔の思い出だった。

数少ない父親との思い出。

小さな縁側に二人で座り、月を眺めていた時に、父さんは俺に色々なことを話してくれた。その中で、今回はある事が夢に出てくる。

「父ちゃんはな、昔、世界中旅をしてんたんだ!」

「えっ、本当!??どのくらい昔?」

「母さんと出会う前からだな!」

父親が語ってくれた昔話がそれだ。

「その途中で正義ヒの味方ロに出会つてな。」

「そうなの!?!?」

「ああ、本当だ! もう駄目かと思つた時に目の前現れてだな。」

「うんうん!」

何故今になって夢に出てきたのだろうか。

「確か、その人の特徴は……」

覚えているのはそこまでだった。

――2月4日――

「つて、下宿つてなによ、士郎――――!!?!?」

虎の叫び声が朝一番に聞こえるとは、最悪だ。その後にも吠え続け
ていてうるさいったらありやしない。

「うーん……ねみい。ジアナ……はもう起きてんのか。」

隣にはいないので先に居間に行ったのだろう。ん? 待てよ。まさ
かとは思うがさっきの音が聞こえた場所は……

「……考えんのは止めよう。それより現状把握だ。」

何故、動物園から虎が逃げだしたのかを知らなければ。いや、あの
人の場合は野生なのか。そんなふざけた事を考えながら居間に向
かった。

そうだ。虎と通い妻はほぼ毎日のようにここにくるのだった。

「朝からうるさ」士郎は私のものよ!! 誰にも渡さないんだから!!」
……」

襖を開けた瞬間から堂々とした私物宣言ありがとうございます。
じゃなくて、どうなってるんじやこりや。今、居間にいるのは(謎シヤ
レ)衛宮と遠坂と藤村先生と間桐(妹)とジアナだ。ジアナを除いた
四人は言い争っていて、残ったジアナは飯の用意をしている。

「創太か?!? 頼む、藤ねえをどうにかしてくれ!」

どうにかしてと言われても暴れてる虎を対処すんのは無理っす。

どちらかと言えば衛宮自身がどうにかできるんじゃないか？

「古崖くんもここで泊まってるの!??まさか、貴方も遠坂さんを襲おうとしてるんじゃないでしょうね!??」

「ちよつと何言ってるのかよく分かんない。」

サンドイツチ食いてえ。

「とりあえず、状況説明してくれ。」

「という訳なんだ。」

うん、説明ありがとう。衛宮。

今聞いた話を纏めると、藤村先生あんど間桐（妹）、遠坂発見。なんじゃー!!遠坂『ここに泊まる事になりました。』虎『男と女が同じ屋根の下なんて、けしからん!!』今ここ。

「うーん、そういう事ならしょうがないわねえ。」

「説得速っ!!」

いつの間にか遠坂が藤村先生を納得させていた。

「話は終わりましたか?なら朝御飯にしましょう。」

「あり?ジアナさんがなんでこんなところにな?」

おい藤村先生。今まで気づいてなかったんかい。

「どうも、藤村先生。ご無沙汰しております。実は家でガス漏れが発生してしまい、その時はなんとかなったのですが、また発生してしまうかもしれないと思いき業者に連絡をしました。」

しかし、最近この近くではよくガス漏れがあるというせいで他の依頼もあり、点検をするには日数が掛かると言われ途方に暮れていたところを士郎君に相談させていただきました。

そう結果、以前から彼に料理を学びたいと言っていたのも相まって、ここに泊まる事になったのです。」

「あら、そうなの?そっちも大変ねえ。」

ナイス、ジアナ。即興でよくそこまで言えた。

「ねえ、古崖くん。」

「なんだ、遠坂？」

「私のときよりスムーズに話が進んでない？」

確かに。ジアナも女性なのだからまた藤村先生がうるさくなるのが普通だと思うだろう。しかし、

「前に今と似たような事が起きてな、そんな時に納得はさせてあるんだよ。」

「ふーん……あ、なるほど。」

どうやら察したようだ。面倒なので簡潔にいうとジアナが三者面談に参加したとだけ言っておこう。あの時は凄まじい戦いだった。叔父にも実家から来てもらうというまでに話が大きくなったが、なんとか説得に成功した。

「ジアナさん、皿出し手伝いましょうか？」

「助かります。シロウ君。」

「あ、あの私もお手伝いさせてもらっても？」

「サクラもですか？ならよろしくお願いします。」

一件落着という事で朝飯を食う事になっていく。ただその中で間桐が不満そうだったのを俺は見逃さなかった。

「……………」

「遅い！」

「そんなに騒ぐなって。もう少し待とうぜ？ここで何をしても衛宮が早く来るとは限らねえしさ。」

「それはそうだけどー！」

俺達は今、昼休みを使った作戦会議を開こうとしていた。しかし、衛宮が遅刻というハプニングが起きていた。いや、下手をすればこれをすっぽかして何処かへ行っているかもしれない。

「朝にもちちゃんと集合するようになって言っておいたのに！」

「遠坂、落ち着け。」

「大体、創太がちゃんとすればこんな事にはならなかったのよ！」

「俺のせいかな？？」

何という理不尽。

「そうよ！同じクラスなのになんですぐ見失うのよ！」

「仕方ないだろ！授業終わってすぐに衛宮の席見たら、いなかったんだからよ！」

な……何を言っているのかわからねーと思うが（ry

まあ、何処へ行ったのかは大体検討はつく。朝にあんな事が起きて間桐（妹）は不満そうだし、衛宮もそれに気づいていた。なら、そこからの予測は簡単にできる。

「と・に・か・く！衛宮はここにいなーんだし、探しに行ってもその前に昼休みが終わるかもしれない。もし見つけても結局時間が無いというのがオチだ。なら、ここで別の事を話し合うっていうのが一番だ。」

「創太の意見はもつともだし、話し合うのはいいけれど、何を話すのかしら？」

「間桐桜についてだ。」

「……。」

一瞬、遠坂の顔が歪んだ気がした。

「はつきり言おう。あいつはマスターだと思う。」

「それは無いわ」

それは即答だった。

「何故それが言い切れるんだ？」

「今の間桐家は衰退し切ってる。それだけで理由は充分よ。」

間桐家。始まりの御三家、その一つ。力は年々衰えているとジアナからも聞いた。けれども、

「本当にそれだけで充分なのか？」

「ええ。そうじゃないとしても、慎二の方はどうなの？あいつは間桐の第一子、そっちの方がよっぽど可能性としては大きいわ。」

「確かに。だけど、俺は他に理由がある。」

「……その理由って？」

「間桐桜の中に何かがある。それが、あいつをマスターだと思う理由だ。」

「何かって何よ？」

「それは知らない。」

「知らないって……それだけじゃ彼女がマスターだっていう証拠にはならないじゃない。」

「そうかもな。でも、俺が見た所、魔術的なモノだというのは確かだ。なら、必然的に魔術には関わっている事になる。そして、マスターだという可能性もある。」

これが俺の考察だ。何かっていうのが魔術的なモノだと判っていてもその他は判明していないし、ただの憶測でしかない部分もある。だが、警戒しておくに越した事はない。

「この事は衛宮には話すなよ。あいつはそんな嘘を隠せるほど器用じゃねえし。」

「……解ったわ。」

遠坂は何か言いたげな表情だった。間桐桜がマスターではないと本気で思っているわけではないと思うが、少し心配だ。とか考えていると予鈴が鳴った。

「もう昼休みは終わりか。そろそろ教室に戻ろうぜ。」

「ええそうね。今度は士郎を見失わないようにね。」

「へいへい。」

魔術講座

「今から魔術講義を始めます。」

そう言ったのはジアナだ。

現在は土蔵にいて、今までに起こった事をなるべく簡潔に説明すると、

昼休み 衛宮 無断欠席 放課後 事情聴取 間桐（妹）に謝罪
遠坂納得&料理 中華 衛宮家 感激 セイバー紹介 間桐 藤村
先生 帰宅 遠坂 間桐 挑発 間桐 毎日きそう 衛宮 土蔵
呼び出し 魔術講義開始

やっぱ分かりにくい。

夜中の土蔵にいるのは衛宮とジアナ、そして俺だ。

「まず、士郎君の練習方法の矯正ですね。確認をしますが、シロウ君は今までどんな方法で魔術訓練をしてきましたか。」

「えっ、どんなんて別に普通だと思えますけど。」

「バーロー。」

見た目は子供。頭脳は（ry

「普通じゃないからこうやってわざわざ魔術講義をやってるんだ。いいから言うんだ。」

「……。」

相手は納得がいていないようだが、話す事はしてくれそうだ。

「えっと、まず魔術回路を作って……」

「はい、アウトです。」

衛宮のケツバットが確定した。

「え、いきなり何がアウトなんですか？」

「魔術回路を作る所以外に何がアウトなんですか？」

「でもそういうのが魔術を使う時の手順じゃ……」

「いいですか、シロウ君。そもそも魔術回路というのは作るのではなく、元々ある魔術回路を開くのが普通です。それを魔術行使の度に作るというのは効率が悪すぎます。」

ジアナの説明に驚く衛宮。何か言いたそうな顔をして少し間が空

き、そして、

「……昨日、切嗣^{親父}が俺を魔術師にさせたくないというのには聞きました。だから、切嗣^{親父}から教わった事が間違いないとは言いません。」

あんれまー。予想外だっぺ。また昨日みたいに関論しだすと思っただけだな。衛宮も学習しているという事だな。当たり前か。

「素直でよろしい。では、今までの特訓が間違いだったという事は分かりましたね。」

「はい。」

「それではシロウ君も納得した所で次のステップです。少し近寄りますね。」

「えっ、あ、は、ははは、はい。」

ジアナが近くに寄った瞬間に衛宮は動揺し始めた。そういえば、セイバーと一緒に部屋で寝るとか言い出したときも同じ様な感じになっていたな。

「今からシロウ君の魔術回路を開き、それと同時に固定化を行います。通常なら貴方自身がその状態を維持するか、秘薬などを飲んで強制的にするかの二択です。しかし、前者は時間がかかり、後者は痛みが伴い、どちらにせよデメリットがあります。」

しかし、今回はそれが無い特別な処置を施させていただきます。」

ジアナが淡々と説明しているが、それってまさかとは思うけど

「私自身行った事はほぼ無いのですが、失敗しても十分程激痛が走るだけで命に別状はありません。」

「えっ!?!?」

そのまさかだったよ。やった事がほぼ無いって、そりゃ俺にしかやった事ないし、失敗したらどうなるかも俺にやったから判った事だからな。しかも失敗したら激痛が走るというデメリットが結局あるんですけど。

「大丈夫です。死ななければ問題無しです!」

死んだ方がマシだと思うくらいキツイんですけどそれは。

「……何か嫌な予感しますが、それでお願います。」

それは予感じゃなくて確実に起こる事だと思うんだ。

「解りました。それでは、了承を得た所で少し手をお借りしますね。あと、少し違和感があると思いますが何もしないでくださいね。失敗しますから。」

最後の言葉に衛宮が少し反応した。

アーメン。無信者なのに言ってしまった。こうでもしないと衛宮がかつての俺みたいになってしまいそうで怖い。

ジアナは衛宮の手を持ち、目を閉じる。すると昨日の様に手がぼんやりと光りだして二人を包んでいく。一分、二分、三分と時間が過ぎていく。

五分が過ぎたあたりから衛宮の表情が歪み始めた。

「衛宮、気持ちはわかるがジアナを信じろ。気持ちを落ち着けて入ってくるモノを受け入れる様にするんだ。」

自分の中に異物が入ってくる感覚。それが今の衛宮が感じている事だろう。それに抵抗するのは自己防衛という本能が正常に働いているからこそ。だが、ここではそれを押し殺さなくてはならない。

俺が最初にされた時はそれができなくて悶え苦しんだ。だからこそ、今の助言が出来たというのは否定できない。

そこからまた五分経過し、計十分で魔術回路の矯正が終わった。

「ふう……これで終わりです。何か体に異常はありますか？」

「違和感がまだ残っているくらいで、後は何も。」

「それくらいなら大丈夫ですね。その違和感は私が魔力回路を開かせ続けている証拠です。痛みが出てきたなどとなればそれは失敗したという事になります。それが無いのなら安心です。」

「よかったな、衛宮。失敗してたら意識が吹っ飛ぶくらい、いや一瞬吹っ飛ぶけど、また痛みで戻ってくるっていうのが体感時間で一日は続くんだぜ。」

「え……創太、まさか。」

「そうだ。俺がジアナの魔術回路矯正の失敗例第一号だ。」

なんか嫌なモンがいつの間にかついてたんだな、と振り返ってみて思った。

「あん時は本当にひどかった。」

「それは貴方が抵抗しようとしたからでしょう。」

「その後、助ける事も何もせずに放置したのはどこの誰なんでしょうね。」

「抵抗しないでくださいという言葉が無視した罰としてそうしたままでです。」

「うわ、鬼畜。」

こいつの前世がスパルタとか前に言ってたけど、そんなモンじゃなかった。悪魔だ。絶対そうに違いない。

「お前らが戦う意思を見せなければ、俺はこの星を破壊し尽くすだけだ。であつたっけ？」

「おい、心を読むのとそのボケは止める。」

「ここに野菜人はいません。」

「あの一、すいませーん。」

「おっと、変なボケよりも本題の方だな。」

「そうですね。今、士郎君の魔術回路は私が一時的に開かせていますが、最終的には自分の力でやってください。まあ、それはおいおいやっていくとして、次は第三のステップです。シロウ君、強化魔術を使ってみてください。素材は……この短剣を。」

そう言ったジアナは前の槍と同じ様に、何も無い場所から短剣を取り出した。

「うおっ……え、えつと持ってもいいんですか？」

「はい、どうぞ。安心してください。別に変な呪いがついてるとかそういう事は一切ありませんから。」

衛宮が言ってるのはそういう事じゃないと思うんだがな。しかもそれを言うのと逆についてそうな感じがするんですよ。

「じゃ……じゃあ、お借りします。」

少し躊躇ったが、短剣に手を取る衛宮。そして、それに強化の魔術を施す。まだぎこちないが、昨日の特訓と比べればだいぶ質が上がっている。

大体、一分はかかっただろうか。衛宮の強化魔術はそれくらいかかっていた。

「成功した……のか……?」

半信半疑の衛宮。魔術を使った本人かそんなんでどうする。

「はい、ちゃんと強化はできていますよ。改善点はまだありますが今はこれで充分です。それでは今日最後のステップ、投影魔術の行使です。」

いよいよ、衛宮だけが持つ特有の才能を開花させる時がきた。いや、正確に言えばアーチャーも同じ事ができるんだけど。

「今度も同じ短剣を使います。それを投影してみてください。」

「……えつと、少し質問していいですか?」

「はい、なんででしょう。」

「投影って使えないモノですよ?なのに、どうしてそれを練習するんですか?」

確かに。そういえばそうだ。投影魔術で作る物は磨耗が激しく、手間がかかる。前者は衛宮が持つ特異性によってそうでは無くなっているが、投影は失われた道具を一時的に復元するモノで、実用性があるとは言い難い。それを鍛えるなんて何の意味があるのだろう。

「これは私の推測なのですが、シロウ君の投影魔術は戦闘で役立つかもしれません。」

「戦闘で?」

「はい。以前の聖杯戦争では無限とも思われる武器の数を保持し、それを敵に向かって放つというサーヴァントがいました。」

なにそれこわい。矢の雨ならぬ武器の雨とか想像したく無い。

「そのサーヴァントのようには言いませんが、遠距離からの援護ぐらいなら、この聖杯戦争中に習得できると思います。」

ああ、そうか。俺は一瞬だけそいつと同じ事が衛宮にもできるかもしれないと思っただけど一朝一夕で、そんなもんでできる筈がないか。いや、待てよ?」

「なあ、ジアナ。もし仮にそういう戦い方をするにしても衛宮にそんな魔力量があると思うのか?なんか、三本ぐらい投影したら限界だと思っただけど、そこんところどうなんだ?」

衛宮が不機嫌そうな顔をするが真実なので、何も言ってこない。

「その辺は大丈夫です。シロウ君の属性・起源が剣という事は昨日話しましたね。」

「ああ、言ってたな。」

「それにより、シロウ君は剣を投影する。剣を強化する。などと言った剣に関する魔術であれば魔力消費量が少なくなっている筈です。」

「そういうえば、さっきの短剣の強化も普段と比べて魔力が少なくて済んだな。」

「……ホントか？」

衛宮、それあれだろ。値段を見せずに水を飲ませて、後で高級な物でしたとか言って美味しかったと思わせるやつだろ。

「ああ、本当だ。違和感がまだ残ってるから確信は持てないけれど、使う魔力は少なかった。」

うーむ。衛宮は嘘を突く性格ではないし、勘違いで無ければジアナが言った言葉は真実という事になる。

「……まあ、いいや。合っているにしても間違っているにしてもやってみない事には分からないか。」

「それ、私を信用してないって意味ですか？」

「いやいや、そうじゃないって。ただ、ジアナはどっか抜けてるところがあるからな。」

あつ。今何かが切れたような音がした。

「……そんな事言う前に貴方自身がちゃんと力をつけましようね。」

その次の朝、遠坂からやつれた顔をした俺に心配くれたのはまた別の話。

過去の記憶

また、夢を見た。

昨日の夢から時が経ち、父さんと母さんは第四次聖杯戦争の最後の戦いへと向かおうとしていた。

「また……行っちゃうの?」

「悪いな、創太。でも、今日で最後だからな?ちゃんと留守番してくれよ。」

「大丈夫。お母さん達はちゃんと帰ってくるから。」

母さんは本当にそう思ってたんだろう。けれどその言葉は嘘になってしまった。

俺の隣にいるジアナは、不安げな表情で二人の顔を見つめる。

「どうした、ジアナ?」

黙っているジアナに話しかける父さん。

「やはり、私も行った方が……」

「昨日も言ったろ。あれはお前には止められないかもしれない。なら、俺達だけで行くしかない。たとえお前が、いや、えい y……りよーさんがたざく!」

父さんが何かを言おうとした時、母さんの右ストレートが、顔面にクリーンヒットした。体をほぼ使っていない腕だけのパンチだったっていうのにかなり吹っ飛んだ。そん頃の俺は見慣れていたのだから、ノーリアクションだったが、よくよく考えてみれば、あれは異常な光景だった。

「ふふっ、あんまり口を滑らせない事ね。」

「怖い!俺の妻が悪の幹部みたくなっている事が怖い!」

何、夫婦漫才やってんだ。

「ジアナ。確かに貴女をここに待機させておくのは戦力外というのも理由の一つよ。」

おい、母さん。それはストレート過ぎないか。腕だけじゃなくて言葉もそうなのかよ。ほら、ジアナも落ち込んでるぞ。体育座りまでしちゃったんですけど。

「でもね、一番の理由は私達の息子を、創太を護ってやってほしいの。私達も必ず帰るつもりでいる。けれども、今から行われるのは最も厳しい戦い。だから・・・わかるでしょう？」

子供の俺を気遣っているのか、最後まで言わない母さん。

「・・・はい。そういう事ならば、ソウタは必ず護ります。ですから、貴女達も・・・」

「ああ、必ずな。」

復活した父さんが何事も無かったように言うが、それによって逆になんか台無しになった気がする。だが、皆スルー。

「もうそろそろ時間だな。それじゃ、行ってくるよ。さあ、行こう。」

「ええ、それじゃあね。ジアナ、頼んだわよ。創太、行ってきます。」

「うん！お父さん、お母さん、行ってらっしゃい！」

「お二人とも、お気をつけて。」

それが、俺達親子が行う最後の挨拶となってしまった。

何時間かが経ち、俺はベットの上で寝ていた。夢から覚めた訳ではない。夢の中で寝ているという不思議な感覚に陥っていた。いや、厳密に言えば横になっていただけで、寝てはいなかった。その当時、何か胸騒ぎがして……

外から爆音が聞こえ、強い光が窓から差し込んだ。

すぐさま窓を開け、ベランダに飛び出し、外を見た。その光景は悲惨としか表現できない物だった。後に冬木の大災害と名付けられるその災害。

怖かった。

まさか、と思った。両親の事が頭に浮かぶ。

そして、走った。靴を履き忘れ、ドアを開けた。

ジアナが俺より先に外に出ていたが関係ない。俺を呼ぶ声を振り切り災害が起こった地へと向かう。

走る。走る。走る。走る。走る。

その小さな身体を動かす。

息は絶え絶え。

けれども、

休む事を忘れたかのように
走る。

どれくらい走ったかは分からない。いつの間にか周りには火の海に覆われていた。何かだった物の破片が足に食い込む。けれども、止まる事はしなかった。ただただ、両親を見つきたい。そんな一心で、身体は進んでいた。

しかし、何故だろう。俺は足を止めた。両親では無い誰かを見つけた瞬間に。その人は中年の男性で、頭がボサボサで、そして目が死んでいた。そして、俺は……

――2月5日――

「――、――きて――さ――。もう、朝――すよ。起きてください。」

うーん、眠い。まだ寝足りない。

「あと、五分……むにやむにや……」

「起きないとまた電撃を食らわせますよ。」

「起きます！起きてます！！起きてました！！」

ジアナのその言葉を聞いた瞬間、俺の中で本能が危険を察知した。やなかんじくになるのは御免だ。

「うん？まだ五時半じゃないか。なんでこんな時間に……」

「忘れましたか？今日は私達が当番ですよ。」

「え？……あー、そうだったな。そんな話があったような気がする。」

一昨日決めた事をすっかり忘れてた。飯の用意をローテーションで、一昨日は衛宮。昨日は遠坂。そして、今日は俺達だった。

けど、なんで五時半なんだよ。この朝食は早すぎんだよ。確かに、先生やら、朝練がある人とかいるから仕方ないけども。

ちなみに、何故、二人一緒かと言うと、単純に俺が高等な料理スキルを持っていないからだ。だからと言って一人だけ料理しないとい

う訳にはいかないのです、ジアナと共にやる事になった。

「まずは顔を洗いに行きましよう。貴方の髪もボサボサですし。」

「えっ?……ホントだ。」

ジアナの言葉に反応して、髪を触ってみる。この感触だと俺の髪の毛はすんごい逆立っている筈だ。クソソソの事かな?

「とりま、洗面所だな。」

「そーですね。」

笑って?。

「言いませんよ。」

いー〇もー

「自分でやって悲しくくないんですか?。」

酷い。

「普通。」

「アレよりかはマシですが、普通です。」

「普通だな。」

「普通……ですね。」

それが皆さんから頂いた朝食の感想である。ちなみに作ったのは和食だ。

「想像はしてましたがここまで全員の意見が揃うとは思いませんでしたね……」

「まあ、そこまで鍛えてる訳でも無いし。」

ハッキリ言おう。悔しくないもん。いや、マジで。

さつきも似たような事を言ったが、俺は別に料理が得意な訳ではない。それはジアナも同じような事だ。俺は二年、ジアナは四年前から料理を作り始めた。それに対して、衛宮は正確には判らないが十年前からは確実に毎日の食事を作っている。遠坂も多分、それぐらいからだろう。

年季だけが全てでは無い事も確かだが、俺達はそれに勝るほどの努力はしていない。食事を自分達で賄う。それだけの為に今までやってきたというのが大きい。

「マズクは無いですけど、やはり、先輩の料理を毎日食べてると……」

「だよな」

間桐のいう事は解る。衛宮の晩飯を食べてるとそりゃあねえ。

「私はてつきり、古崖君が作るって言うから激辛麻婆を作るかと……」
「いや、それはない。俺は確かに泰山の麻婆を食ってるが、人に食べさせるもんじゃないとも解ってる。なんせ、それを食べた次の朝はトイレを占拠しちまうぐらいだからな。」

へ、へえ。という言葉が部屋全体を包み込んだ。どうでもいいですよねそんな情報。というか、飯の最中にそんな事を言ってはならないんだよな、そもそも。

「まあ、普通だからこそ、私達は士郎君に料理を習いにきたのです。それこそ、彼の料理を普段から食べている桜の舌を唸らせるようならば、そうする意味はありません。」

そういや、衛宮の家に泊まる表面上の理由がそんなだったな。

ちなみに皆さんお気づきだろうか。感想を言ったのは四人で衛宮、遠坂、間桐だ。藤村先生は今日来ていない。残り一人はだれか。そう、本来、表沙汰にはいけないセイバーだ。昨日の出来事が関係しているが、説明は省かせてもらおう。

「まあ、今回は俺とジアナの実力を見てもらっただけだし、教えてもらうのは晩飯を用意する時に教えてもらう。」

「そういえばだけど桜、お前、そろそろ部活に行かなくてもいいのかわ？」

「あ、そういえばもうそんな時間でしたね。」

早く部外者を出すために、口実を作る。

「なら、俺が玄関まで送っていくよ。」

「ありがとうございます。」

衛宮は桜を見送る。言い方は悪いが、これで邪魔はいなくなった。

「私たちは、食器洗いをしましょう。」

「ああ、そうだな。」

戦争がこれからどうなるか、それを話し始めようではないか。

各々のマスター

三人で学校に登校し、何事も無く昼休みの時間帯になった。遠坂の提案で学校に張られてある結界の起点をもう一度、別々に行動して調べることになり、今はその途中なのだが……

衛宮の奴、間桐に逸早く気づかれてしまった。

ワカメは俺の存在には気づいてないらしく、衛宮以外に注意を向けずに話を持ちかけていた。

その話を聞く限りではワカメは聖杯戦争に嫌々参加させられたらしく、あまり乗り気ではないらしい。あくまでもあいつの言葉を鵜呑みにすればそういう事になる。だが、そんなモン信じられない。今行われているのは戦争だ。相手を騙すというのは上等な手段だ。

と考えていたりしていたら衛宮が拉致られた。別に拘束された訳でもないし、ついて来いとだけ言われただけだ。それにしても、衛宮、もう少し警戒しろよな。

ここで俺がついて行ってもいいが、それだと遠坂に何言われるか分かんないし、学校をサボる事になり色々面倒なので、ジアナに携帯で電話して衛宮の後を追いかけてさせよう。

しかしまあ、遠坂に何て話そうか……

|||||

私は今、間桐邸の前居ます。なにやら、ソウタが電話で「衛宮拉致られた。追跡よろ」という、本当はもう少し真剣な感じで言っていました。そんな連絡を受け土郎君の家をセイバーに任せ、言われた通り彼を探し出し、後を追いました。

その彼ともう一人の男、慎二君を追いかけていると、間桐邸に入っていくところを目撃しました。ならば、侵入するだけですが……嫌な感じがしますね。

前回の聖杯戦争でも思いましたが間桐に関しては嫌悪感しか覚えません。魔術にしてもそうですが、やはりあの男が一番……。

間桐家にはすんなりと入る事ができました。衰退しているとはいえ、ここまでとは思いませんでした。

しかし、懸念すべきではそこではなくあの男。間桐臓硯。間桐の實質的権力者。昔は平和主義者と聞きました。が今ではその面影すらありません。自分の周りにいる者は全て手駒、またはただの玩具としか見ていないような男。本来ならば間桐邸この何処かにいる筈ですが、その気配は見当たりにません。あの二人の話を盗み聞きするならば今がチャンスです。

窓が少なく、薄暗い廊下をくぐり抜けると、二人はリビングと思われる場所に入っていきます。しかし、その二人とは別に違う気配が感じ取れます。おそらく、サーヴァントでしょう。シンジ君がライダーだと言っていたので間違いありません。

そこから、自分の意思とは関係なく聖杯戦争に参加してしまった事。自分は学校の結界を張った犯人ではない事。戦う気はなくシロウ君とは協力関係を結びたいという事。リンだけは倒したいという事。シンジ君はそんな事を話していました。

しかし、私は変だと思っていました。戦いたくないのであればリンともそうせずにすればよいものを倒すと言ったところ。そもそも、戦う気がないのであれば辞退すれば済む話です。それを態々、参加権である令呪を持ち続けているのはおかしい話です。

ですが、士郎君と戦いたくないというのは、嘘ではないようですが……

「呵っ呵っ呵っ。なにやら客が来たと思えばお前さんもおったか。」
「っー」

色々と考え事をしていたら、今、一番会いたくない人に会ってしまいました。

「間桐……臓硯。」

「そう睨むな。儂はすでに隠居した身。何かしようとは思わん。」

「では、前回の聖杯戦争についてはどう説明するつもりですか。」

「あれは単なる自滅じゃよ。力を扱えきれなかっただけの事。」

嘘ですね。そうなるように仕掛けたのは貴方だというのに。

「それで、貴方は私に何をするつもりですか。」

「いや、単なる様子見よ。本来ならば孫が客を連れて来たのを見守る

つもりじゃったのだが……」

本当にそんな事を思っていたのでしょうか。

「ならば、私は見逃してくれると?」

「儂が当主ならばそんな事はさせんと言いたいところじゃが、良い見逃してやろう。」

「そう言ってくれるならば、去りましょう。」

色々と言いたいですが、ここは素直になりましょう。シロウ君達も話は終わったようですし。

「言つときますけど、シロウ君に何かしようものであれば……」

「心配にはおよばぬ。」

そうは言ってますが、実際の所どうでしょうか。しかし、ここは黙って身を引く事にします。

ただ、最後に見せた、あの薄汚い笑みが脳裏に焼き付いてしまったのが腹が立ちますが。

—————

「あれ、ジアナさん?」

「すみません、マスター。勝手ながら後を付けさせていただきますました。」

「えっ?・マス」

「シヤラップ。」

臓硯から離れた後、私は門前でシロウ君を待っていて、そして今、シロウ君が間桐邸から出て来ました。……ライダーと呼ばれた女性を連れて。

「……。」

「……。」

私はすぐさま、シロウ君とライダーの間に割って入り、彼女に殺意を込めながら睨みます。そして、しばらくの沈黙が続いてきます。「ま、待ってくださいジアナさん。そいつはただ俺を見送ってくれただけでジアナさんが考えている事は……。」

ですが、土郎君の発言によってソレは崩れました。

「ええ、分かっていますよ。彼女がまだ私達と戦う気は無い事は。」

彼は今にも戦闘を始めると危惧したのでしよう。しかし、その気は毛頭ありません。そうなってしまうえば私は確実に負けてしまします。

「貴女はライダーでしたね。マスターの見送りはもう結構です。ですから、主人の元へ帰ってください。」

ライダーに帰るように促します。多少、相手を騙すような言葉も入れてはみましたが、あの老人が慎二君に何も言わないとは限りません。臆現は私の諸事情を知っているはずですから。

「ええ、では私はここまでとさせていただきます。」

そう言って彼女は間桐邸の中へと戻って行きました。

「ジアナさん、ありがとうございます。」

「礼はソウタに言ってください。」

「でも、ジアナさんはここまで来てくれました。それにお礼を言うのは筋だと思えます。」

「当たり前のことをしたまでです。」

やはり、士郎君は良い人ですね。世界中の人が彼のようなならば聖杯戦争なんていう物も無くなるでしょう。……ただ、一つ欠点があります。

「では、私達も帰りましょうか。」

「はい。えつと……」

なにやら、戸惑っていますね。まあ、きっとこの事でしょう。

「私が何故ここまで来たか、ですよ。シロウ君が聞きたい事は。」

「はい、そうです。ジアナさんに気づかれる事、俺しましたか？」

「貴方が慎二君に連れていかれたと、ソウタから連絡が来まして、後を追うようにとも言われたからですよ。」

「ソウタが？」

「はい。なので私が気づいたのではなく、ソウタが目撃していたのです。」

「そうなんですか。ところで、ジアナさん。ここまで来たということはやっぱり、慎二との会話は……」

「はい。全部聞いてましたよ。」

「なら、あいつの言っていた事はどう思いますか。」

「ほとんど嘘をついているように思えました。あまり、信じない方がいいですね。」

「そう……ですか。」

少し落ち込んでますね。彼にとつて慎二君は友人です。それを信じてはいけない、と言われたのが原因でしょう。

「そろそろ、行きましょう。夕食の用意もしなくてはいけません。士郎君、アドバイスよろしくお願いします。」

「分かりました。」

〓〓〓〓〓〓

今日の授業が終わり、放課後になった。その後、遠坂に衛宮の事を聞かれ、素直に話した。最初は「なに、敵の本拠地に行かせてんのよ！」と言われたが、敵の情報を得る為だとか、ジアナに護衛を任せたとか、なんとか言って納得させた。

それからはジアナと夕飯の支度があるからと言って、遠坂と一旦別れて、目的地である商店街に向かった。

だが、その途中に見たのは公園にいる衛宮……とアインツベルンの奴だった。なんで公園なんか。確かジアナと一緒にいるはずでは……

とにかく、非常にまずい事態になってしまった。現状もつとも警戒していた奴が衛宮と接触するとはな。けれど、今あいつはサーヴァントを連れていないようだ。一瞬で衛宮が殺されるという事はなさそうだが、油断はできない。

二人の様子を見てみると、なにやら話をしているみたいだ。その内容は気になるが、これ以上近寄れば気づかれる可能性が高い。ならば、聴力を魔術で強化して、会話を盗み聞きしてみる。

「なあ、イリヤ。」

「なあに、お兄ちゃん?」

「お兄ちゃん、なんてやめてくれないか?」

「ええ、どうしてよ?」

「だって、イリヤは俺より年上なんだろ。」

「っ！なんでそれを話……」

「ジアナさんから聞いた。あの人は切嗣……」

「聖杯戦争で協力した人、でしょ。それくらい知ってるわ。」

「そうか。」

……全部聞いたよ。イリヤが切嗣親父の実娘だつて事も。イリヤに切嗣親父が必ず帰るつて約束したのも。それで結局帰つてこなくてイリヤが恨んでて、俺も恨まれてるかもしれないつてことも。」

「そう……。」

衛宮が俺の話した事を口にするのと、空気が重くなつていく。相手からすれば、目的をバラされたらな。

「実際どうなんだ。君は俺も親父も恨んでるのか。」

「ええ、そうよ。」

やはりそうか。俺も似たような経験をした。あの夜、帰つてくると言つて、両親に永遠に会えなくなつてしまった事がそうだ。俺の場合はジアナの支えがあつたが、イリヤにその様な存在はいたのだろうか。

「別に、俺は赦しを請うつもりは無い。恨まれ続けても構わない。けれども、親父は……イリヤに会おうとした。ある時期になると世界旅行と言つて一週間ぐらい何処かへ行くんだ。そして、帰つてきた時、何というか、その、生気が無くなつていた感じがしたんだ。多分、無茶したんだと思う。きつと」

「もういい、シロウが言いたい事はわかった。けれど、私は赦すなんて事はしない。」

「イリヤ……！」

説得失敗か。まあ、それは口だけじゃ難しい。解決するのであれば、気長にやるか、きつかけを作るかだが。

「今日はもう帰るわ。言つておくけど、まだシロウを私のサーヴァントにしてあげても良いつて思つてるから。」

そう言つてイリヤスフィールは帰つていった。何も起こらずに済んで良かった。令呪とかでバーサーカーを呼ばれてたらそれこそ何もできずに終わる。

まあ、そんな事考えるよりも、衛宮だ。あの後ずっと頭を抱えている。どうやったらいりやすファイルに納得してもらえるかとかで悩んでいるのだろう。仕方ない。俺がフォローしてやるか。

偽・VSセイバー

「よう、衛宮。」

衛宮とイリヤスフィールの会話が終わり、彼女が帰った後、俺は衛宮が悩んでいる様だったので、とりあえず、話しかけてみた。

「創太？どうしてここに。」

「それはこっちのセリフだ。お前、ジアナと一緒に夕飯の用意をしてたんじゃねえのかよ。」

放課後の時にジアナから連絡があつて、そんな内容のメールを受け取った筈だが、一緒にいないどころか、少女（十八歳）と遊んでいるとは聞いてないぞ。

「いや、それが途中までジアナさんは一緒にいたんだけど、一瞬、目を離したらいつの間にか姿が消えてて……」

「ああ……なら、しゃーない。そりゃあ日常茶飯事だし。」

衛宮が言ったように、ジアナは目を離すとあちらこちらに移動する。しかも、意図せずに。

お前は子供か。と言つて注意した事もあるが、未だに直る気配は無い。

「で、敵さんとまた不用意にお喋りしてた理由は？」

「またって……向こうから話しかけてきたんだけど、一人の人として話がしたいみたいだったし、何よりサーヴァントを連れていかなかった。なら、今回はマスターとして来た訳じゃないって判断したままだ。」

「甘い。ひっじょーに甘い。バナナチョコサンデーにハチミツと練乳をたっぷりかけたぐらい甘い。」

「は、はあ。」

うっわ。微妙な顔をされた。いや、俺自身もね、面白いと思つてやつてる訳じゃないよ。唐突なギャグが思い浮かんだんだよ。

「まあ、いいや。衛宮の甘さは今に始まった事じゃないし。それは置いとくとしてだ。俺が話したいのはその内容、イリヤスフィールと切嗣さんについてだよ。」

衛宮の身内である二人。それは戸籍上ではあるが、やはり衛宮にとつて知らないことだらけだ。

「さっきの話は途中からだ盗み聞きさせてもらった。……ジアナの予想が的中しちゃったな。」

「ああ。」

ジアナの予想。それはイリヤスフィールが切嗣^あさんを恨んでいて、それが衛宮にまで矛先が向いている事。というか、ほぼ確定してるよなもんだ。聖杯を壊した切嗣^あさんをアインツベルンは良く思う筈がないし、イリヤスフィールに良い様に教えるはずが無い。

「まあ、どうするかはお前次第だ。あいつを説得するんだったら別に構わない。少なくとも俺はお前の主張を疎かにはしないつもりだ。だけでも、必ず助けるとも限らない。悪いけどな。」

「いや、それだけで充分だよ。」

「そうか。なあ、イリヤスフィールが言った最後の言葉なんだけだよ。」

衛宮をサーヴァントにしてもいい。なんか勘違い……いや、確実にその方面でしか意味が捉えられないセリフ。けれども、それは違う意味に聞こえた。

「あれか……いや、アイツにとつては側に居てくれる人がサーヴァントだつて言つてた。だから、何故かは知らないけど、俺をそうしたいつていう意味だと思う。」

「ふーん。なるほどな。……まあ、多分だけど、イリヤスフィールはお前に懐いてるんじゃないか。衛宮は他人に世話を焼くしき。どうせ、なんか買つてあげたんだろ？」

「なんで、判つたんだ？」

なんでつて。まあ、それは自覚しづらいか。その質問の答えとして、俺は自身の口元を指す。

「……あつ。」

衛宮は自身の口についていたある物に気づく。

「餡子なんかつけやがって。」

商店街で売つてある大判焼きだろう。何故カスタードクリームに

しなかった。

「つまり、あの子はまだ説得の余地があるって事だ。悩む必要はそんな無いと思うぜ。」

「そう……だな。ありがとな。」

「いつも、助けて貰ってるんだ。少しは返そうと思ってるな。」

こいつは、いつも誰かに貸しを作っている。そして、それを返さなくてもいいと言う。それは俺も例外では無い。だから、こういう事で返さなくてはこっちの気が済まない。

「さて、そろそろ行くか。ジアナの奴、今頃お前を探しているはずだからな。」

「ああ。」

こうは言ったが、むしろ、今も一人だけだというか事すら気づいていないかもしれない。

—————

刀が打ち合う音。ただそれだけが聞こえている。だが、意識を耳に割く余裕は無い。ましてや、俺は押されている。勝つ為には状況を覆す術を考える事に集中するべきだ。

「守ってばかりでは勝てませんよー！」

声と同時に相手のスピードが上がる。その言葉には百も承知だと返したい所。しかし、無駄な思考は頭から捨て、最善の一手を打つべく脳をフル回転させる。

その撃ち合いの中で右からの水平斬りが迫ってくる。

重く、鋭い一撃。

そして、俺が待ち望んでいた一撃でもある。

姿勢を低くし、攻撃を回避する。

そして今、相手と打ち合ってから、俺の初めての攻撃が開始される。

「ふっ………」

まず、下段からの大振りな攻撃。もちろん、フェイクだ。途中でそれは相手の心臓を狙う突きへと変わり、相手は躲す。まだ、想定範囲内の出来事。

「はああっ！」

「っ！」

俺が繰り出した刺突は上段からの斬撃へと一瞬にして創り変えられた。これは相手にとつて、予想外の攻撃だろう。しかし、俺の最善の攻めは、ただの反射神経で防がれる。

やはり敵わない。そう、再確認させられる。

だが、初めての攻撃のチャンスを掴んだのだ。このまま、また防戦一方の状況には持つて行かれない。その一心で無理矢理刀を斬り返す。

「うおおー！」

下段からの大振りな一撃。相手はまたかと思うだろう。先程もフェイントとして使われた動きだ。

けれども、振り抜かれた。

そして、案の定防がれた。

ここで勝負が決まる。俺の刀には左手しか残っていない。では、右手はどこに行ったのか。答えは……

「はっ!!」

セイバーの腹へと吸い込まれていき、寸前で止まった。

「……参った。」

それは、俺が放った言葉。

肩には刀が触れていた。

「……」

「やっば、さすがだな。セイバーは。」

「いえ、ソウタも中々の物でした。最後の反撃は特に。」

「それでも届かなかった事には変わらないしな。」

「でも、俺よりかは持ち堪えてたじゃないか。」

「そうだけどさあ。」

俺は道場でセイバーと試合をしていた。衛宮も隣に居る。何故そ

うなつたのかと説明をすれば、まず、帰ってきてからの事だ。

俺、ジアナ、衛宮、セイバー、そして遠坂が居間に集合して、衛宮はワカメがマスターだという新事実を話した。セイバーと遠坂は敵の本拠地に一人で乗り込んだ事に対して呆れており、無事だったから良かったものの何かあつたら云々かんぬんという話に。

そこから、何故か衛宮とセイバーが自分が戦うと言い合いになり、どうした物かとなった。きっと衛宮は、バーサーカー戦の事を思い出しているのだろう。衛宮は他人本位な奴だ。それでも、あいつ自身が前線に出て戦うのはマズい。そこで俺が「だつたら、衛宮がセイバーより強かつたら戦ってもいいだろ?」と話を持ち掛けた。

これで、衛宮が完全に納得する筈がないが、それは最低条件だと思う。そもそも、弱かつたら戦えない。戦うべきでは無い。そんな事を俺は説得材料に使い、何とか衛宮を話に乗っからせる事ができた。決闘方法は剣道という事で道場に向かった。

そして今に戻る。現在、セイバーの連戦連勝で、衛宮はズタボロ。そろそろ体力が切れそうな所で俺が交代。先の結果になつたのである。

「二回も反則を使ったっていうのに一回も当てられないっていうのはなあ。」

「いえ、戦闘に反則も何もありません。それも立派な力です。」

「うん? 反則が二回つてどういう事だ?」

最後に手を使ったのは剣道としては反則だけど、それ以外に何かしたのか?」

確かに、剣道としての反則は一回だけだ。これは俺自身が反則だと勝手に思っているだけである。

「シロウはソウタが最後に行った反撃の中で何か違和感を覚えませんでしたか?」

「違和感……あ、そういうえば突いてからの斬り返しが速かった。でも、アレが反則?」

「俺としちゃあ反則だよ。剣道のルールは魔術を使う事は考慮してないからな。」

「えっ、魔術を使ってたのか!?!?」

「まあな。説明は……まあ、今夜の魔術講義の時にでも。」

と、先延ばしにしていく俺。

「なあ、セイバー。」

「はい。何でしようか。」

俺はある事を訊く為にセイバーに誘いを掛ける。今しなくても構わないのだが、やはり早めが良いものだ。

「ちよつと付いてきてくれないか。道場の外を出るぐらいでいいからさ。」

「創太、二人して何話すんだ?」

「まあ、ちよつとな。」

人に聞かれんのはちよつと恥ずかしい事だ。とは、思うだけで言わない。

「別に悪い事はしねえよ。」

納得してくれたのか、衛宮はそれ以上は何も聞いてこなかった。

「それで付いてきてくれるか、セイバー?」

「はい。良いですよ。」

「それで、ソウタ。私を何故呼び出したのです。」

「——訊きたい事があってな。」

「それは一体……」

「俺の両親のことだよ。」

これは、昨日の夢を見た時から考えていた事だ。

「俺は幼い頃しか両親を見ていない。だから、衛宮が切嗣さんの事をあまり知らなかった様に、父さんと母さんにも俺が知らない一面があるかもしれない。」

「それはジアナに訊けばいいのでは。」

「とつくに訊いたよ。別にそんなモンは無いと訊いたが、それはあい

つの意見だ。信じないとは言わないけど、気づいてない可能性がある。だから、他の奴の意見が聞きたかった。」

ただの印象だけだが、セイバーは人の本質を見抜くのが上手いはずだ。少なくともジアナよりは。」

「そうだったのですか。しかし、私から見てもあの二人は裏も何もありません。貴方の父親、古崖創助（そうすけ）は明るい性格で少し子供っぽいところがありません。良くいえば無邪気、悪くいえば落ち着きのない人でした。そして、仲間意識が人一倍強いのも印象的でした。」

その伴侶である古崖白無（シロナ）はソウスケとは対照的に静かでお淑やかな人で、時折見せる怒りが全てを圧巻させる様でした。」

「そう……か。ジアナから聞いた事とほぼ一致しているな。悪いな態々呼び出して。」

「いえ、別に私は構いません。……裏があるのはジアナの方ですが。」

「なんか言った?」

「別に構いませんと言っただけですが。」

「そう? まあいいや。」

これで、確信まではいかないが、少なくとも裏があるという可能性は低くなった。信じきれない自分が少し嫌になりそうだが。

「……。」

「……? 私の顔に何かついてますか。」

「いや、セイバーってき、遠坂にはまだ少し敵意があるけど俺にはそんな物ないような気がするなと思ってき。自惚れではなければ。」

「いえ、自惚れではありませんよ。貴方の両親には人として接して貰えましたから。……少なくともキリツグよりかは。」

「ん? ……ああ、そういうことか。」

あまり切嗣さんとは仲がよろしくなかったのだろう。ジアナからもそんな話を聞いたし。

大方、奴（サヴァント 奴 隷）隷はサヴァント（サヴァント 奴 隷）だとかそんな似たような考えて方をしていたんだろう。もしくはただ単にソリが合わなかったのか。

「もうそろそろ時間かな。俺はジアナと一緒に晩飯を用意するから、一旦抜ける。衛宮にもそう言っといてくれ。」

「解りました。」

「おう。まあ、あいつの事、宜しくな。ある意味大変だろうけどさ。」
「はい。」

その後、台所へと向かい、ジアナと夕飯の支度をしていたのだが、衛宮が途中で参加してきて、手取り足取り料理を教えて貰ったのは余談だ。

柳洞寺・魔女のいる神殿

「捕まっちゃった。」

今の現状を一言で表すならばこの言葉が一番だろう。

二時間前、セイバーと一戦だけ試合をしてから、衛宮の魔術講義もとい、俺の魔術特訓をして時間を潰してから、夜の探索時間となり、俺とジアナの二人は結界に何か変化が起きているかを調査する為に学校へ。衛宮とセイバー、遠坂、アーチャーは最近発生しているガス漏れの真相が魔術だと判断して、それが多く起こっている新都へと分かれた。

そして、俺達は効率を考えて、さらに二手へ分かれ探索を進めた。ここまでは良かった。

いつの間にか魔術に掛かってたんですよ。

体は言う事を聞かず、口すらも動かせない。唯一意識だけが何とか残ってるという状況。もう最悪だよ。

そこから、俺の体は勝手に進んでいき、学校から離れてしまった。体が進む方向を考えていると、これもしかして、柳洞寺に行くんじゃないかね？と予測を立てる。ジアナが間桐邸で盗み聞きをした時に柳洞寺にはマスターがいるとか何とか言ってたし。案の定そうだった。

そして、階段を上る時に衛宮と合流させられた。こいつも俺と同じように魔術に掛かったんだろう。階段を上った所で門番を発見した。こいつも多分、サーヴァントなのだろうか。

そして、現在門を潜り、キャスターと対面中です。

「お前が俺達をここまで連れてきたのか。」

衛宮が何とか喉を動かし、質問する。

「ええ。マスター達はみな小物だけど、坊や達二人は特に落ちぶれていましたから。」

さらっと侮辱された。けれど、俺はたった一年しか訓練をしておらず、衛宮は俺よりかは年数が長いが、練習方法が間違っていた。キャスターが言うことも当然っちゃ当然なんだが。

「何しろ街の人間達と変わらない対魔力ですもの。そんなマスターを

見つけたら、こうして話をしたくなるのは当然でしょう？唯一その坊やの侍女はサーヴァント並みの魔力を持っていましたけど。」

うわ、今の俺ってそんなに魔術への対抗が低い？この一年結構頑張ったつもりだけど、魔術師キャスターから見ればさほど変わらねえのか。

ていうかジアナが侍女つてやめてくんない？ないって、あれがメイドとかほんとないって。

「んで、どうする気だ。俺は別にマスターじゃないんだけど。」

次は俺が質問。

「そのその坊やからはセイバーを、貴方には実験材料として活用させて貰うつもりです。」

それってもしかしくなくとも、

「赤髪の坊やもそうだけれど、貴方も特有の力を持っている。それは魔術師として調べないわけにはいきませんもの。」

やっぱかよ!!前々から狙われる狙われるって叔父やらジアナやらに散々言われてたけど、過去の英霊からも狙われるとはね!!

……まあ、それはこの際どうでもいい。これから、キャスターが俺達に何をしようとしてくるかは判った。ならば次は、より情報を引き出すだけだ。

「そうかよ。全く、こんな事ならもっと早い時期から魔術を習い始めれば良かったぜ。キャスターさんよ。どうせ、俺達は殺されるんだろ？だったら、冥土の土産に話を聞かせてくれよ。」

「別に殺すつもりはないのだけれど。」

嘘つくな。さつきから殺気が（誰得シヤレ）漏れ出て、いや俺の身体に突き刺さってんだけど。

「街の人間から魔力を吸ってんのはお前だな？」

「そうよ。」

「キャスター……!やっぱり、お前がやってたのか!!」

キャスターの返答に怒りを覚える衛宮。間桐の言ってた事は真実だったか。

「使えるものは使う。当然の事でしょう？むしろ、貴方達が何故それをしないのが理解に苦しみますね。」

「無関係な人間を巻き込んでおきながら、何を言ってるんだ!!」

衛宮の主張はごもつともだが、そうやって相手を刺激するのは早死する原因にもなるからやめてくれ。俺達が今やるべきことは時間稼ぎと情報収集だ。ジアナやセイバーは俺たちがいない事に気づいている筈だし、捜してくれている事も確かだ。なら、それまでに相手との対話を長く続けなければならない。

「待て、衛宮。そんな事言っただって何の意味も無い。」

「創太……。」

「さて、キャスター。お前は俺達の力とセイバーを欲しがっているみたいだな。力の方は単なる興味本位だでしょう。だけど、何でセイバーを欲しがるんだ?」

「何故そのような質問をするのかしら。」

おい、質問を質問で返すな。

「いや、なに、お前に協力をするといえれば多少の自由が与えられると思っただけ。」

「なっ!?」

「あら、意外ですね。」

本当は嘘だけど。

「何考えてんだ、創太! そんなこと」

「うるさい!」

「っ……。」

俺を説得しようとする衛宮に一喝を入れる。

「それでどうなんだ。俺の問いに答えてくれるか?」

「いいでしょう。私がセイバーを欲しがる理由はバーサーカーを倒す為です。他のサーヴァントは問題なくとも、あのバーサーカーだけは例外。彼はかなり厄介な存在ですからね。」

やはりか。バーサーカーというのは狂化によって身体能力が上がり、代わりに理性が失われるクラス。それ故か、マスターがコントロールしきれず『冬木の』がつくこの聖杯戦争に関わらず、他のそれでもバーサーカーを召喚した際、すぐにマスターは殺されてしまうといったケースが多い。

その反面、手綱を握れた時の利点は大きい。そして、それは元の力が強い程。

そういった点で今回の聖杯戦争を勝ち残る為には、あのイリヤスフィールが従えるバーサーカーが一番の障害である。元の英霊が誰かは知らないが、あれほどの力を持つていれば倒すのが簡単じゃないとか、そんな甘っちょろいもんで無いです。

だから、キャスターは勝つ為に戦力を増強するべきであった。セイバーは今、マスターがマスターな為に力を存分に発揮できていないが、強い。そしてマスターはへつぽこだ。なら、セイバーを奪おうという考えに至ってもおかしくはない。

「ふーん、なるほど。だったらこうしないか。」

そして、俺はある提案をする。

「衛宮の令呪は俺が引き継ぐ。そして、お前と契約をして、従者にでもなろう。なんなら、自己強制証明セルフ・ギアス・スクロールをつかってもいいぜ。力のほうに関しては工房に魔術書とかがあるからそれを代用させてもらう。」

「なっ……!」

衛宮が驚いているが関係ない。どうせ嘘だ。相手が乗ってこようと無かろうと、ただの時間稼ぎなのだから。

「その話、私に何のメリットがあるのかしら。」

えっ？

「坊やが出した二つの提案。そのどちらともが私自身がすればいい話。貴方がするにしても同じ結果になると思うのだけれど。いえ、むしろ貴方がその契約の穴を突いて裏切る可能性があります。」

しまったああああ!!それまったく考えてませんでした!!なんという初歩的なミス!!そりゃあ、相手に俺を従者にする利点を見せなければ意味無いよね!!コンチクショウ!!

「あら、本当に考えていなかったのですね。」

そうだよ。これがその場で取り繕うとしてた結果だよ。

「では、交渉決裂ということだ。」

そう言うとキャスターは衛宮の令呪に手を伸ばし、聞き慣れない呪文を詠唱し始めた……!

まずい。このままではセイバーが相手の手に渡ってしまう！とにかく時間稼ぎだ。一瞬でいい。何かキャスターの気を引けるようなそんなものがあれば……！

ぶつつけ本番だがあれしかないな。

衛宮はキャスターと対話する前に、身体が動かないのは相手の魔力が自身の魔力に混じっていると予想し、自身の魔力で洗い流そうとした。

けれど、それは失敗に終わった。理由は魔力が混じっているのではなくそれが魔術であったからだ。魔術として確定している以上、魔力で洗い流そうとしてもそれ自体が異常であるために何をしても無駄だ。

だが、今から俺がやろうとするのは魔力を使わない魔術だ。お前は何言つてんだとか思うだろうが、俺も最初に聞いた時には『はっ?』となった。

簡単に説明すると、筋力で魔術を行使するというモノだ。相手は魔術で俺達を拘束する時に、魔術回路を重点的に縛る。魔術には魔術でしか対抗出来ないからだ。例外云々はここでは置いとくとして。

つまり、相手は魔力を使われると厄介だと思い、身体の方は少し疎かになっている。それでも強力なのは確かだし、力づくでは絶対に無理だ。けれども、口と喉だけは動いている。敵の唯一油断している点。その口と喉の筋力を使ってこの拘束を解く!!

「フォース性質、チェンジ変化。」

聞き慣れた呪文。俺がいつも魔術を使う時に呟くそれは親から受け継いでるモノだ。叔父は別の呪文を使っていたので先祖代々なのかどうかは知らん。

「うおおおお!!」

「なっ……!」

「創太!?!」

よし、大声をあげる事によって、気を引く作戦は成功だ。魔術の方は成功しても、そうでなくともどうでもいいが、やはり成功させたい所!! キャスターに邪魔される前にこの拘束を解く!!

筋力が魔力に似た何かに変える感覚。だが、筋力である事には変わらない矛盾。そしてそれは、キヤスターの魔術を破戒する!!

「はああああああ!!……あつやべつ。」

「っ!!……?」

「一体何が……。」

結果から言うと身体は自由になった。いや、それだと語弊があるか。正しくはキヤスターの魔術からは逃れられた。しかし、倒れた。力を上手く制御できずに体力を使いすぎてしまった。そんなもって、体中が痛い。筋力も使いすぎたらしい。その影響か筋肉痛のような症状がところどころに出ている。

ああ、キヤスターの笑い声が聞こえる。どうせ、俺を嘲笑っているのだろう。体が倒れ伏し、視界が固定されている中でも理解できた。結局、誰も来てくれなかったのか。ただそんな絶望に落ちる中、赤い外套を着た男、アーチャーが突然現れた。

救助・アーチャーVSキャスター

「んあ?」

目が覚めたというのに目の前は真っ暗。いや、これは真っ暗というより……

「!~~~~っ、ぺっぺっ!!」

体がうつ伏せになっていただけだったようだ。地面とにらめっこをしてたおかげで口の中が砂塗れ。後で水でゆすぎたい。

いや、それよりも、

「戦闘中か。」

先ほどから聞こえてくる爆音。というよりかは爆音で目が覚めたのだが。少し意識を失っていたらしい。隣には衛宮。前方には戦っているアーチャーとキャスター。そして、場所は柳洞寺。意識を失う前とほぼ変わらない場面。戦闘中ではなかったけど。

いや、というかキャスターが空飛んでるんですけど。あれ魔法じやなきやできないんじゃないですか。たしかにどつかの龍の球を七つ集める漫画では途中から標準装備だったけども。

……それは置いといて、衛宮から状況を聞こう。

「衛宮、大丈夫か?」

「創太!?!お前こそ無事なのか!!」

「まあな。といつてもこんな状態じゃ嘘が見え見えだな。」

こんな状態とは、体が思うように動かせず芋虫のように地面を這いずりまわっている事だ。心配するのも無理ない。まだ体痛いし。

「キャスターの魔術は解除されてるみたいだな。」

「あ、ああ。癩に触るけど、アーチャーが助けてくれて……、ってそうじゃない!!」

創太!!さっき言った事はどういう事なんだ!!」

「は?さっき?ああ、あれか。」

キャスターに寝返るような事を言ってたな。いやまあ、

「あれは嘘に決まってるんだろ。」

「嘘って!……えっ、嘘?」

鳩が豆鉄砲を食らったとはまさに今の衛宮の顔だろう。

「俺達がいなくなったのは最低でもセイバーやジアナが気づいているだろうから、何かされる前に会話を続けて見つけてくれるまで時間を稼いでたんだよ。」

「……悪い、創太。てつきり俺は」

「いいんだよ。」

むしろ、気づいてたら絶対に衛宮は隠しきれず、相手に勘付かれるというオチになる。

「で、一応聞いておくけど状況は？」

「アーチャーとキャスター、後ろの門の向こうではセイバーとアサシンがそれぞれ戦闘中だ。それでアーチャーには下手に動くなつて……」

アサシン、門の前にいた侍みたいな奴か？ジアナが言うには、全身真っ黒な奴が普通ならば召喚されるはずだとか。まあそれは今考えるべきでは無い事だ。

というか、セイバーが助けにきてなんでジアナが来てないんだ？それはそれでおかしいんだよな。アーチャーも来てるのに。……もしかしてジアナ、気づいてないんじゃないか？

「セイバーとアサシンが戦っている理由は？」

大方予想はつくけど。

「アサシンは門番としてキャスターに召喚されたらしい。だから、侵入してくるセイバーと対峙している。」

「はっ？キャスターがアサシンを？」

「ああ。だから、アサシンは真っ当な英霊ではないとかアーチャーが。」

「まさか、そんな事を思いつくとはな。」

これじゃキャスター最弱とは呼べないんじゃないか？援護が得意な者が多いキャスターが前線で戦える別のサーヴァントを呼ぶ。なにそれつよすぎ。アーチャーが真っ当な英霊ではないとか言ってるのは気になるところではあるが。

「なるほど。大体理解した。前門の虎、後門の狼といった状況か。」

マジで最悪な状況だ。前にも後ろにも行けないとは。いや、待てよ？もしかしたら塀を登って行きやあいいんじや？

「間抜け!!いつまでそこに立っている!!」

「へっ?・・・うわっ!!」

ちよちよちよ、ちよつと!?!考え事してたらアーチャーが俺を抱えて走り出した!?

「クソ、なんだってこんな手間を!!」

「ちよつ、降ろせばカ!!なに考えてんだおまえ!!」

アーチャーを挟んで反対側では衛宮も肩で抱えられていた。俺達を合わせれば決して軽くないはずの重さを持ちながら、その前とは走る速度がほぼ変わらないのは驚愕だ。

それと衛宮。降ろせとか言ってるけど、そんな事したら死ぬぞ?だって、目の前にレーザーみたいなモンが、ガンガン落ちてるからな!頼むアーチャー!体力持ってくれよ!

「いいから黙っている!お前に言われると自分の馬鹿さ加減に頭を痛めるわ、馬鹿が!」

「馬鹿!?おまえ、自分が馬鹿だって判ってるのに人の事を馬鹿呼ばわりするのかよ、このバカ!」

おまえら子供か!?!こんなときに喧嘩する余力があるなら、もっと敵に意識向けるよ!!

あと、もう少し丁寧に走ってくれないかな、アーチャーさん?揺れるたびに体が痛いんですよ。贅沢っていうのは解ってるんですけど……

「っ……………」

なんてふざけたことを考えてる場合じゃない!キャスターが次の魔術を放とうとしている!

あれは……なんだ?空間固定?なるほど動きを止めようとしているのか。ってそれ俺達も巻き添えになるじゃねえか!!アーチャー、気づいてくれ!!

「このっ——いいから離せ!」

「そうか、なら遠慮はいらんな。」

その瞬間、「ごはっ」という衛宮の声と共に吹っ飛ばされた音が聞こえた。そして次に、

「はっ?」

俺が投げ飛ばされた。

「うぐっ……!」

痛ってえええ!!と叫びたいがそうすると喉の筋肉に激痛が走るのは確定なので我慢するが、それでも痛い事には変わらない。

隣には衛宮がいる。先ほどの声は蹴り飛ばされたか、殴り飛ばされたかのどちらかだろう。まあ、蹴る方が楽なので大方そっちだろう。いや、どちらにしろ衛宮はかなり雑に扱われたな。俺も似たようなモンだが、こいつに比べれば投げられたのはまだマシだろう。

それよりも、アーチャーだ。先ほどの行動は俺を庇った物だ。となるとアーチャーは!

弓を構えていた。

「I 我が am 骨子 the は born 捻 of れ my 狂 sword.」

そして次に起きたのは

どこからともなく現れた槍がキャスターに向かっていく!

「なっ……!」

それは間一髪で避けられる。けれども、敵の体制は崩れた。その隙を逃さんと

「——偽・螺旋剣。」

アーチャーの弓から矢が放たれる!

大気をうねらせ、その周りに風が起こる。いや風なんていうちやっちいモンじゃない!あれは矢を中心とした竜巻だ……!

それが、キャスターだったモノを貫いた後、飛行機雲を作り、空へと消えていく。

まるで嵐が過ぎ去ったような静けさ。その中で唯一聞こえるキャスターの喘ぎ声。

「は——あ……!!」

空間転移でとつさに回避したのだろう。しかし、その空間さえもアレに捻じ曲げられていた。キャスターの身体能力は俺達と変わらない。むしろ、低い。余波であろうと掠ってしまえば致命傷になりかねない。

それにしてもあの槍、鉄製だったな。少なくともランサーの物ではないし、あれはもしかして……？

「今だ、走るぞ!!」

「はっ!?なに言っていた……!!」

そう言ってアーチャーは俺を抱きかかえ、走る。

「敵の本拠地にいつまでも居るつもりか!解ったならついてこい、戯け!」

「戯けって……!!」

アーチャーに続き、衛宮も走る。目的地は門だ。

「お前の方こそ、なんでわざと外したんだ!今のはキャスターを倒せるチャンスだっただろう!」

まだ罵り合うのか!……ん、わざと外した?

「その説明は後だ!」

「は、どういう……」

「今ジアナ・ドラナリクがアサシンを抑えている頃だ!その隙に横を突っ走るぞ!!」

ジアナがアサシンを?セイバーが戦っているのでは?そんな事を考えていると門まで着いた。

そして、横目で確認した風景にはジアナとアサシンがほぼせり合いをしていた。アーチャーが言った通りだ。階段の下では遠坂とセイバーが居る。

「セイバー、遠坂!」

「シロウ、ここは危険です。早く屋敷に！」

「アーチャー、創太は大丈夫なの!?!」

「ああ、ただ気を失っているだけのようだ。息もまだある。」

「いやー、意識はあるんですけどね。ほぼ体動かせないから、そういう風には見えるっちゃあ見える。」

その後は衛宮邸へと無事戻り、なんとかあの危機から逃れた。

夢・あの頃のグラウンドで

また、夢だ。

ここ最近、よく見るようになった。

内容は中学生の頃にあった出来事だ。場所は中学のグラウンド。周りは夕陽によって赤く染められている。そして、クッションに物が落ちる様な音が聞こえる。

「お疲れ、衛宮。」

「そうt・・・冷たっ!!」

そりやあそうだろう。キンキンに冷えて（やがるっ・・・!!）いる氷が入ったペットボトルを顔面にねじ込んでるのだから。

「つめt・・・、痛たたたたっ！痛い、痛いつて創太！ただでさえ冷たすぎて痛いのにグリグリ押しつけたらさらに痛いつて!!」

「うるせえ。休憩も無しに走り高跳びを延々とやってる体は冷やしておかないと体力が回復しねえんだよ。」

「そうだとしても、普通顔じゃなくて足とかそういう所を冷やすべきだよな!？」

「知らん。」

「やめr・・・痛いっ!」

ああ、懐かしい。こういう事もあったな。衛宮がガムシヤラに頑張っているのを見て、近くのコンビニで冷凍されたペットボトルを買ってやった思い出。

「ほら、溶けたらそのまま飲める。一石二鳥だろ?」

「いや、まあ確かにそうだけどさ。」

衛宮は納得がいかないという顔をしている。だが、俺は関係ないと言わんばかりに話を進める。

「まったく、諦めないのはいいけどもうちよっと考えてからやれよ。」

「だったら、創太はできるのか?」

「いいや、出来ないけど?」

「・・・。」

衛宮が呆れる。まあ、そうなるよな。

「俺が言いたいのは出来る出来ないじゃなくて、やり方を工夫しろって事だよ。助走の方法とか、跳ぶ角度とかさ。」

「もつと具体的に教えてくれないか？」

「いや、そんなモン知る訳ないだろ。」

「……。」

また、呆られた。

「別に今、跳べなくてもいいだろう？どっかで調べてからでも良いし、そもそもお前の体は疲れてる。一旦休んでまた、明日にでもやれば良い。じっくりとやりやあ良いんだよ。」

「……ああ、そうだな。」

俺の言いたい事は解ってもらえたようだ。

「なら、今日は帰ろうぜ。時間も遅いし、家で待ってる人も心配してるしな。」

家で待っている人。衛宮にとっては藤村先生、俺はジアナに当たる。

「だったらマットとかを片付けなと。」

「じゃあ、それは俺がやるよ。お前は休んどけ。」

「いや、やるよ。使ってたのは俺だけだし。」

出た。衛宮の変な頑固っぷり。

「……はあ。解った。けど、マットは俺が片付ける。お前はバーとか残りのモンをやっとけ。」

「けど……。」

「いいから早く持っていよ。置いてっちまうぞ。」

と強引に言っつてマットを引きずりながら走る。

そして、夢はそこで終わる。

11月2月6日

眩しい。朝の日差しが目に映り、目が覚める。ここ最近、本当によく夢を見る。ここ最近というよりかはここ三日といった方がいいだ

ろうか。

視線を横に移す。まだジアナは眠っている。珍しいモンだ、俺がジアナより早く起きるなんて。まあ、昨日は俺の方がかなり早くに寝てしまっていたから当然っちゃ当然だと思う。

「・・・昨日は迷惑かけたな。」

小声で放った独り言。昨日、俺と衛宮はキャスターに捕まり、アーチャーが来てくれたおかげで脱出することができた。だが、その裏にはジアナの作戦があった。

俺が行方不明になった後、ジアナは遠坂、セイバーと合流。そして、衛宮も行方不明だということを知った。俺達が連れ去られた場所も洞洞寺と判明して、そこからどう助け出すかとなった。

柳洞寺はサーヴァントにとって入りにくい場所らしく、正門からしか入れないらしい。

そこでジアナが作戦を提案した。それは、まずセイバーが門番であるアサシンと戦い、その隙にアーチャーが中へ。ジアナはサーヴァントではないので遠坂と一緒に塀を登って侵入。

アーチャーとキャスターが戦闘中にジアナが遠坂とタイミングを合わせて、アーチャーに念話を飛ばし、隙を作る。アーチャーがわざと矢を外したのはキャスターを本拠地で倒すのは不可能だから。キャスターは陣地作成を持っており、それにより籠城戦に長けていて、本拠地で倒すのはほぼ不可能。だから、アーチャーは矢を当てるよりも俺たちを門の外へ出す事を優先した為にわざと外した。

その後柳洞寺からは一旦出て、門でアサシンと戦っているセイバーと交代。そのまま、罅迫り合いに持っていき、俺達が衛宮の家まで帰還するまでの時間稼ぎをして、自身も隙を見て、その場から逃げ出すと言った物らしい。

「・・・はあ。ジアナにはいつも世話になってるな。」

いつもジアナには結構色々言ってるが、こいつの存在は俺の中で大きい。普段の生活でも助けられているし、魔術の方面でも色々教えてもらい、もしもの事も考えてくれてる。

生活費の事もそうだ。家のローンを払わなくて良いぶん、毎月の支

出は比較的少ないが親の遺産だけで二人の生活を死ぬまで賄えるかと言われれば、難しい。だから、ジアナは空いている時間を使い、バイトをして稼いでくれている。本来ならば頭が上がりない奴なんだがな。」

「いや、よく考えれば物心ついた時から一緒にいるんだし、上がらないとか関係ないよな。」

感謝する相手なのは変わらないが、遠慮するのもおかしい話だ。まあ、この戦争が終わったら何か一言ぐらい言おうかな。

「・・・やべえ、無意識にフラグ建てちゃった。ブチ壊せる方法って何だっけ。」

まあ、そんなモン漫画とか限定だし、大丈夫だろう。・・・またフラグ建ったな。

昨日は無事に衛宮邸に帰った後、俺は意識を失っている事になっていたので衛宮が状況説明をした所、改めて遠坂は俺たちの未熟っぷりに呆れていた。そして、ジアナが「もつと鍛えないといけませんね。」と不穏な事をいった気がする。さつき、この戦争が終わった後に感謝の言葉を言うのと決意っぽい事したが、その前に死んでしまうかもしれん。

時は戻り、現在。間桐は遠坂に交渉を出され、一週間ほど来ない事になった。朝食に顔を出したのは俺、衛宮、ジアナ、セイバー、遠坂に藤村先生だ。

「今日は学校を休むよ。」

みなで学校へ行こうとした時に衛宮はそんな事を言い出した。藤村先生は詳しい説明をされていないにも関わらず納得していた。衛宮を信頼しているからこそ、そう判断したのでだろう。藤村先生が先に学校へ向かった後、衛宮にちゃんとした理由を聞いた所、

「昨日起こった出来事を考えてたら、俺は実力不足なんだって改めて思ったんだ。創太だってさ、キャスターの魔術を破る実力があつた。だから、俺も鍛えなきゃってそう思ってた。」

セイバーにボロ負けして、さらに魔術師として凡骨だとキャスターにも格付けされた。そして、そのキャスターの魔術を破った俺に劣等感……いや、多分衛宮はそんな事は思っていないだろうが……。

とにかく衛宮は自身が強くならなければと思っっているのだ。だが、それを言ったら俺だって同じようなモンだ。あの時、俺はキャスターの魔術を破りはしたものの、その後には動けなくなったので、結局、破れなかったのと似たり寄ったりな結果だ。

「そうか、だったらジアナにも色々教えてもらえよ。魔術に関して……まあ、全部が全部じゃ無いとは思いますが、取り敢えず、遠慮せず頼れよ。」

「ああ、ありがとな。」

そんな会話をした後、遠坂と一緒に登校しながら、敵の事について話し合った。キャスターは街の人たちの魔力を吸収してはいるが、やはり、学校の結界に関しては別のマスターではないかという推測やら、今後の対策やらと。

そしたら、いつの間にか学校に着いたが、校門を跨いだ瞬間何か嫌な予感がした。おかしい。あの魔法陣からは魔力を撤去した筈だ。なら、別の何かか？それとも……

鮮血神殿

「どうですか？」

「んー、今までよりは良い出来です。」

「今までよりは……か。」

創太、遠坂、藤ねえの三人が学校へ行った後。現在、俺はジアナさんに土蔵で魔術を教えてもらい、直剣を投影していた。

「投影品としては破格ですが、やはり、戦闘で使うとなると壊れやすいのが問題ですね。」

「そう、ですか。」

口から落胆の言葉が漏れてしまう。

「そう落ち込まないでください。むしろ、一日でここまでできるのは凄い事ですよ。昨日はナイフで精一杯だったのが、直剣まで投影できるようになったのですから。」

まあ、目眩しぐらいにしかならないのは何とも言えませんが……。」
ジアナさんはフォローしてくれただけど、その後にキツイ言葉を言う。いわゆる、上げて落とすと言うやつだ。本人は本当のことしか言えないだけだろう。

「でも、この調子なら聖杯戦争中には、ソウタと同じように援護くらいできるようにはなりますよ。」

「そうなるよう、頑張ります。」

しかし、ジアナさんの言う通りこの戦争中に投影魔術が役に立つ物になっていくのだろうか。さつきも昨日の様にセイバーと何戦か試合をした。あくまでも戦う為ではなく、生き残る為だ。しかし、セイバーに一撃も与える事が出来ずに終わっている。と言うよりも一度も攻撃に転じる事が出来なかった。創太はその一歩手前までいった。

魔術でもあいつは俺よりもしつかりとしたモノが扱える。別に俺とあいつに差があるのは仕方ないと思う。けれども、短期間で創太に追いつけるのだろうか。

「……不安ですか？」

顔に出ていたのだろうか、ジアナさんに心を読まれてしまった。

「貴方の予想通りですよ。それで、どうなんですか？」

「この人は読心の魔術でも使ってるのか!?という言葉は押し殺し、俺は質問に答える。」

「……まあ、不安ですね。短期間で強くなれるなんて信じられないです。」

「それが普通です。けれども、貴方にはそれ程の潜在能力ポテンシャルが秘められています。もっと自信を持っていいんですよ。」

「はあ……。」

それがあるならもう少し早く開花して欲しかった。それならば、できることが増えていただろうに。

「……そろそろ、昼時かな。ジアナさん、お腹空いてませんか？」

「いえ、私はそんなに」

ジアナさんは遠慮しようとしたが、それを遮るようにお腹の虫が主張する。

「……頂きます。」

「あははっ。今から夕飯の用意と一緒に昼食の材料も買ってきますんで、少し待っててください。」

「それなら私も……」

「いいですよ。お腹空いてるんですよ？だったら留守番でもしてください。どうしても待てないなら台所にお菓子は多少あるので、それでも揃んでください。」

「はい……。なるべく早く帰ってきて下さいね。」

「分かりました。」

さて、他にも食いしん坊がいる事だし、早めに料理を作ろう。

—————

電話が鳴る音が聞こえた。買い物用の用意をし終えた瞬間に。一体誰から……。

「はい、衛宮ですが。」

「衛宮か？」

「慎二？ああ、俺だけど何か用か？」

電話の相手はライダーのマスター、慎二だった。

「今すぐ学校に来いよ。面白い物が見れるからさ。」

「面白い物? どういう……」

「いいから早く来い!! 言つとくけど、必ず誰にも言わず一人で来いよ。」

言い終わったやいなや、こちらの返答を聞かずにすぐ電話を切られてしまった。慎二は一体何を見せたいのか。見当もつかない。何か焦っていたみたいだが……。

今の時間帯だと、学校は昼休みに入っているはずだ。学校に向かうとしても、五時間目が始まるかどうかに着く。それに見るだけならすぐに終わるだろう。二人には悪いけど昼食の時間は少し遅らせよう。

|| || || || ||

あいつ馬鹿だろ。

あいつというのは間桐^{ワカメ}のことだ。昨日、衛宮に遠坂と手を組むのは止めて自分と組めとか言い出してたくせに、今度は遠坂に同じ話を持ちかけやがった。もちろん遠坂は断った。そして、殴った。あれ、鼻が沈んだんじゃないか? ざまあねえな。だが、他の奴に見られてたら遠坂のイメージが丸潰れどころか、保護者呼び出しモンになる。あいつにはもういないけど。

話を戻すが、昨日の事が遠坂に伝わっていない筈が無い。そうなれば間桐が話を持ちかけても、遠坂はこいつ何言ってるんだと思うだろう。そうでなかったとしても、衛宮は使えない奴だどうのこうのと云っていたが、いやお前も魔術使えんやろ。となるのがオチだ。それにしてはあいつ妙にしつこかったな。

ちなみに遠坂は「もう帰る。」との事。相当気が損ねたようだ。まだ、昼休みだというのに。

しかし、間桐は二人に俺との手を切れとは言わなかった。という事はあいつ、俺が二人と協力してる事に気付いていないんじゃないか? 俺も結構二人といるし、そもそもあいつ前に俺たちが一緒にいる所見てなかったっけ? 具体的に言えば間桐兄が妹に暴行を振るいそうに

なった時。

まあ、いいや。そろそろ五時間目も始まる頃だ。その教科は藤村^虎先生の英語。ぼーっとしていると、元剣道部の一撃を受けてしまう。色々と考えたい事はあるがあれの標的にはならないようしっかりと……

その瞬間、世界が変わった。

まずい。学校の結界が発動しちまったか……！発動するタイミングを延ばした筈なのに何故！みなが苦しみ始めて次々と倒れる。

どうすればいい……どうすればいい！！

いや、まだだ。まだ焦る場面ではない。結界の発動者は近くに居るはずだ。探せばきつと、きつと……

倒れているクラスメイトが目映る度、

「うっ……」

吐き気がする。

大丈夫、大丈夫だ。こういう結界への対策はジアナから聞いている。結界^外の中と体^内の中を隔離してしまえばいい。失敗すれば酸素が取り込まれないという事態に落ちるが大丈夫だ。

「^{フオースチエンジ}性質変化。」

呪文を口にするると共に自身の魔力を元の性質から隔離のそれへと創り変える。その工程はすぐ終わった。問題はその後だ。使い慣れていない魔術なので、時間はかかる。だが、確実にその効果は……

「はあっ……はあっ……うぐっ。」

出ている筈なのに何故……この気持ち悪さは止まらないんだ……。目眩がする。息が苦しい……。なんでこんな……とにかく、体の状態を調べないと……。

|| || || || ||

「は……あっ……!!」

校門に入りすぐ、周りの空気が変わった。

体が熱い……！

結界が発動したのか!?まさかとは思うが、慎二か言っていた見せた

いものつてこれのことか？偶然だとは思いたいけど、とにかくあいつなら自分の教室に居る筈だ。

呼吸もままならないが、この惨状を止めなくては！

二年C組の教室に辿り着いた。人はいる。だけど、誰も動いていない。全員が倒れている。

まるで、まるで……冬木の大災害あの出來事のような。

その中には……。

「創太!!」

あいつもいた。すぐに駆け寄ろうとするが、

「いよう、衛宮。どうだいこの結果は?」

それを邪魔をするかのように、

「……慎二。」

この元凶が姿を現した。

「なんだよ、あんまり驚いていないみたいだな。さすがの衛宮でも僕のアんな言葉は信じてなかったって事か?」

こっちとしては十分驚いているし、慎二が自身の家で言っていた事も信じ込んでいた。その結果がこれだ。

「面白い物つてこれの事か?」

「ん?いいや。確かにこれも面白いけど、そうじゃなくて衛宮が顔面蒼白になるその時、つまり今のお前の顔だよ。」

どうだ、お前の知り合いが、友達が、古崖が苦しんでる所を見てさ
どういう気分だ?」

その言葉で俺の中の何かが変わった。

「結果を止めろ、慎二。」

「はあ?嫌だね。お前の指図なんて聞く必要があると思うか?」

「そうか。だったら、」

怒りに身を任せ、

「力づくでも止める!!」

一気に走る!!

「はっ、馬鹿だね。」

三本の黒い刃が現れる。だけど関係ない。こんなセイバーの一撃に比べれば遅すぎる!!

「っ……。」

遅すぎるのだが、体が完全にはついてこれず少し掠ってしまった。けれども、それは問題ですら無い。

「慎二!!」

「ひっ……! やめろ、来るな!!」

俺は慎二へと一気に走り抜ける……!

あと三步で届く。しかし、自身の勘が死を感じ取る。

「っ……!!」

間一髪でそれは避けられた。直感が感じ取った物は

「い、いいぞライダー……!」

禍々しい黒い女性だった。

先ほどの刃より圧倒的な死の気配……! このままでは、

「あがつ……!?!」

蹴ら……れて……?

まずい、サーヴァントが出てしまったはこちらに勝ち目はない……!

!とにかく、体制を立て直さなくては!!

幸い、俺は蹴られた影響でライダーとの距離は空いている。その隙に……!

「うぐっ……!」

腕に杭が刺さった。その杭には鎖が繋がっており、ライダーの手元まで続いている。それが指し示すのはつまり、

俺の体は引っ張られ、

「うわっ!!」

追撃を、

「止まれライダー!!」

喰らう事はなかった。

「いっ!!」

けれども、俺の体は止まらず、慎二の前に来るまで地面に転がり続

けた。

さっきのライダーを制する声は慎二のものだった。一体何故そんな事を？けれども、その疑問はすぐに解決された。

「創太……？」

無自覚

くそ、体の調子がおかしい。なんか手足が震えてやがるし、まともに立ってられない。

さつき俺は隔離の魔術を使った。完璧とまではいかなくとも、結界の効果を緩和できているはずだ。実際に魔力や生命力が取られていく感覚は無い。それなのに身体に力が入らない。どういう事だ？

そんな考えが頭の中を駆け巡る内に教室の外では、いつの間にか衛宮と間桐が対峙していた。ということやはり、間桐がこの結界を張った犯人か。どうやって延長された結界の発動期間を短縮させたのかは後で聞くとしてだ。今はあいつを止めなくては。

「力づくでも止める！」

衛宮の奴何やってんだ！サーヴァントがいるかもしれないのに、敵に突っ込むなよ！

「慎一一」

確かにあいつの体のキレが昨日よりも多少なり良くなっている。けれどもそれまでだ。先ほどの三本爪の様な形をした物に掠った時点で、サーヴァントには対抗できないと証明される。爪の攻撃速度は今まで見てきたサーヴァントのソレよりも明らかに遅い。だから、

「あがつ……りっ？」

ライダーの攻撃をあっさり喰らうんだよ。

くそ、あのままでは殺される！

殺される？誰が。

死ぬのか、衛宮が？

嫌だ、嫌だ、いやだ……！！

そして、体の不調なんてどうでもよくなった。

ライダーが杭のような短剣を衛宮に投げるのが見える。

一歩目、体を起こすためモノ。

そして、衛宮の腕にその短剣が突き刺さる。

二歩目、それは間桐の真後ろに踏み出された。

「おい、間桐。今すぐライダーを止めろ。」

「ひっ……!!」

一瞬のうちに、俺は間桐の首を腕で固定し、もう片方の腕を銃に模した形で銃口にあたる部分を頭の横へと突き刺した。ふざけているように見えるが、魔術という引き金を引けば、魔力の塊が間桐の脳を貫通する。

「早く!」

「と、止まれライダー!」

その言葉通り、ライダーは衛宮に追撃を行おうとしていたのをピタリと止めた。

「創太?」

衛宮は間桐の前まで転がり落ちて来た後、間抜け声で話しかけて来た。

「よう、助けに来たぜ。……さて、間桐。早速だが、結界を解け。」

「ふ、古崖か?なんだよ僕をビビらせないでくれないか。」

「今の状況を分かって言ってるんだろうな?」

今の間桐は本物の銃を向けられているのと同じ状況だ。

「ああ、分かっているさ。どうせ、お前は僕を殺せやしない。いや、僕どころか誰も殺せないんだよ!」

「今、イライラしてんだよ。さっさと言うこと聞かねえと、」

「そう言う割には、手が震えてるぜ?だからさあ、その手を」

「チツ。」

舌打ちをした後、銃声に似た音が鳴り響く。

「うあああ!あ、足があああ!!」

それは間桐の足に穴が空いた時とほぼ同じ瞬間だった。

「うるせえ、さっきのを脳みそにくらいたくなかったら、結界を止めるろ。」

「わ、分かった!分かったよ!」

おいライダー、マスターの危機だぞ!さっさと結界を止めるんだ!

間桐が命令した後、ライダーは頷く。それと同時に周りを包む赤い空気は元に戻る。

「さて、次は令呪だ。それを寄越してもらおうか。」

「なんでお前なんかに！」

うるせえ。さつさと……まずい。吐き気が……どんどん……戻って……

「いいからはや……っ！」

やばい！力が抜けた瞬間、ライダーに間桐を救われてしまった！

「ああ、くそ……！」

せつかくの流れを相手に渡してしまうなんて……！

「シンジ、ここは一旦逃げますよ。」

「はっ!? 何言ってるんだよ、今こそチャンスだろ！古崖はふらついているし、衛宮も……」

「ですが、サーヴァントを呼ばれてしまえば厄介です。」

そう言っつて、ライダーは短剣を構え

「なっ!?？」

首に刺した!?？」

「衛宮、来るぞ！教室に飛び込め！」

直感がそう叫んだ。

正確には分からないが、あれは宝具だ。そんなモンをくらってしまえばタダでは済まない！

「そう言っつたって、創太は……！」

ああ、体は満足に動きやしない。けれど

「うるせえ！」

「うるっ!?？」

俺は残っている力を振り絞って衛宮を突き飛ばし、教室に無理矢理押し込んだ。だかしかし、俺の体は廊下、つまり攻撃の範囲内に残ってしまった。

ああ、死が目の前まで来てやがる。なんだ、あの光？羽が見えるけど、ライダーって羽が生える英霊だったのか。

今回も衛宮を庇っちまった。衛宮を庇うなんて何回目だ？だけど、

それも今回が最後かもしれないな。

そういえば、死ぬ間際に走馬灯を見るって嘘だな。俺何回も死にそうになったけど見たことねえもん。

そんなどうでもいい事が頭の中を駆け巡る。

「セイバーー！」

衛宮の声が聞こえる。という事は、俺はまだ死んでないのか。もう死んでるのかと思った。衛宮を突き飛ばしてから、かなり時間が経ったかのように感じる。

だが、いつの間にか校舎の外に出ていた。

「へっ?」

俺、誰かに抱かれてる? どーゆー事?

なんか、横から誰か来たと思ったら、窓ぶち壊して外に出たんですけど。

そして、俺を抱きかかえた誰かは地面に着地した。

「大丈夫ですか、ソウタ。」

「……セイバー?」

なんと、俺を抱きかかえていたのはセイバーさんでした。

「とりあえず、一刻も早い状況説明を。まだ全てを理解できていませんので。」

「……いや、戦闘自体はもう済んだ。セイバーが呼び出されたのは敵が逃げる時に繰り出した攻撃から衛宮が俺を助けるためだと思う。」

「そうでしたか。しかし、サーヴァントと戦闘をしたのですか?」

「衛宮がな。俺はそのマスターを捕まえて結界を解除させただけだ。」
「シロウが、ですか。あれほどサーヴァントと戦うなど言っておいた筈ですが……」

どうやら衛宮は後でセイバーからの説教を受けそうだ。まあ、そんな事はどうでもよくて。

「……。」

「どうかしましたか?」

「いや、どうかも何も」

今の状況を考えてくれればねえ?

「……そろそろ、お姫様抱っこから解放してくれないか？」

「あ、すみません。その……殿方がこれをされるのは不快な事でしたね。そこまで頭が回りませんでした。」

そう言いながら俺を丁寧に降ろしてくれるセイバー。

「いやいや、助けてくれたんだからそこまで贅沢言えねえし。むしろ、礼を言わなくちゃいけないんだから。とりあえず、ありがとな。」

「いえ、それはシロウに言ってください。彼が令呪を使って貴方を助けたのですから。私はそれに従って行動したまでに過ぎません。」

「そうだな。でも、礼は素直に受け取ってくれ。」

後であいつにも礼は言つとかないとな。

「……うっ。」

くそ、まだ吐き気がする。

「すまん、セイバー。結界の影響で少し吐き気がするから、ちよつと離れる。多分すぐ治るけど、ジアナがここに来ると思うから、俺は大丈夫だと伝えてくれ。」

ジアナなら、結界の発動にすぐ察知しそうだし。

「分かりました。しかし、本当に大丈夫ですか？何か顔色が優れてよ
うな……。」

「気にしなくていい。セイバーは衛宮の所に行ってくれ。場所は分かると思うけど、三階に居るから。ジアナが来たらよろしくな。」

そう言っただけ俺はその場を立ち去り、この喉から出てきそうな物を出しても大丈夫な便所へと向かった。

|||||

ソウタが吐き気がすると言って、何処かへ去った後、私はシロウがいるであろう学校の3階へと向かいました。

ソウタはおそらくですが、厠へと向かったのでしょう。敵の気配も無いですし、一人にさせておいても大丈夫でしょう。

問題はシロウです。あれほど、普通の魔術師メイガスでは英雄サーヴァントに太刀打ちできないと言っておいた筈です。しかし、無謀にも彼は英霊に戦いを挑んでしまった。ソウタを助ける為に令呪を使うならば、最初からソ

レを使えばそのような事にならずに済んだかもしれませんが。

言いたい事は山程ありますが、それは本人の目の前で言いましよう。

「セイバー!」

「どうやら、三階に着いたようです。」

「創太は、創太はどうなったんだ!」

「彼なら心配要りません。少し気分が悪いと言って一人になっていますが、すぐに治るとも言っていました。」

「そうか、良かった。」

彼はシロウにとっての友人。心配するのは仕方ありません。しかし、

「ところで、シロウ。貴方、サーヴァントと戦っていたようですね。」

自分の身の事も少しは気にしてほしいですね。

「うっ……。」

「うっではありません。今朝も言ったでしょう。サーヴァントとの戦闘は避けるべきであると。」

「いや、でも慎二一人だけだったし、それくらいなら俺でもいけると思っ……。」

「サーヴァントは常に霊体化してマスターと行動を共にしているのが、当たり前です。サーヴァントの姿が見えないからといって、安直に攻め込むのは……。」

「ソウタ、ソウター! 何処にいるのですかソウタ!!」

説教講義の途中ですが、彼女がやってきたようですね。

「ジアナ。」

「セイバーに……土郎君? 何故、正座なのですか?」

ジアナの言葉で気付きましたが、シロウはいつの間にか正座していたようです。私はただ説教講義をしていただけなのでシロウがそのようなになった理由は分かりませんが(すつとぼけ)。

「ジアナさん? 何でここに……いや、こんな大きい結界が張られれば」

「ええ、離れていても分かりますよ。それで、その正座の理由は……?」

「いえ実はセイバーにせつきよ……」

「ジアナ。ソウタを捜していたのではないですか？彼なら、気分が悪いと言って、一階の厠にいますよ。それと、敵はもう立ち去った後の様です。なので、警戒はあまりしなくても大丈夫です。」

「そうでしたか。」

そして、ジアナは周りを見渡してから、

「確かにこの惨状を見てしまっただけ……ソウタも……。」

何かを思い出す様な顔をしました。おそらくはソウタのトラウマの事を言っているのでしょうか。という事は彼は、ジアナを心配させない為にああ言ったのでしょうか。いえ、もしくは彼自身も気づいていないのでは？

「私はソウタの元へと向かいます。セイバーの言う通り、敵の気配も感じませんので、心配は要らないと思いますが、念の為です。」

「分かりました。私はまたシロウが無茶をしないように見張^一っておきます。また、後で会いましょう。」

「ええ、また後ですね。」

その後、ジアナはシロウの側まで移動し、

「士郎君、セイバーの説教は長いと思いますが自業自得です。これに懲りたら無茶しないようお願いしますよ。……もし何かあれば、ソウタも悲しみます。」

と言って階段を降りていきました。彼女はよほどソウタのことも心配しているようですね。

私の目的の為でもありますが、ジアナが懸念する事にならないようシロウにはしっかりとしてもらいましょう。

反論

「ただいま、遠坂。」

衛宮邸の玄関の扉を家主が開け挨拶をする。

「おかえり……待つて、なんでそんな大人数で帰ってきてるの？ここに來たら來たで誰もいないし、貴方達何してたのかしら？」

奥から遠坂が來て質問をした。玄関にいるのは、俺とジアナ、衛宮、セイバーの四人だ。

「実は……」

「学校の結界が発動されました。」

「っ!!」

衛宮が話そうとしたが、ジアナに邪魔をされる。

「とりあえず、話は私たちが上がってからにできませんか？寝かせたい人もいるので。」

ジアナが言っている寝かせたい人は俺の事だ。気分は少し治ってきてはいるのだが、まだ、頭がガンガンして、しっかりと立ってられない。

「……ええ、いいわ。ジアナは創太を寝かせて。説明は士郎とセイバーから聞くから。」

「分かりました。」

「……ちよつと……まっつけてくれ。」

まだ、寝るわけにはいかない。

「ソウタ、貴方は無理しなくても構いませんよ。」

「だったら知ってるのか？あいつらがどこへ行ったのかを。」

ジアナははつとして、衛宮とセイバーの方を見る。

「私は解りません。突然、呼び出されたもので……すみません。」

「俺もです。その時は創太に教室へ突き飛ばされたので詳細は見てません。」

二人とも同じ様な答えを返す。

「だったら、あいつらの行き先を知っているのは俺だけになるな。」

「それであれば、寝室に運んでから話を聞きます。」

ああ、そう来たか。だが、こつちとしても休む訳にはいかない。今夜にでも行動を起こさないかもしれないんだ。休んでる暇なんて無い。

「いや、俺も一緒に説明する。意地でもな。」

「ですが・・・解りました。それで貴方の気が済むのであれば。」

「サンキューな。皆、そういう訳だから俺も参加させてもらう。」

「創太、本当に大丈夫なのか？」

衛宮が心配しながら言う。大丈夫だ、もんだゲフンゲフン

「ああ。別に体を動かす訳でも無いんだ。さて、そろそろ居間に行つて状況説明と今後の行動について話し合おうじゃないか。」

「・・・そうだな。」

まだ納得がいかないようだが、こつちとしては関係ない。どちらにしても、今夜に行動しないといけない。さもなくばあいつがどう出てくるか分かったもんじゃねえ。

「・・・と言う訳なんだ。」

遠坂が学校を早退して出ていってから、間桐が撤退するまでの状況を話した衛宮。

「その後はジアナさんが来て、創太は結界の影響で気分が悪いって言って・・・」

「ああなってるって事ね。」

全員が一斉にこちらを向いた。

「うるせえ。」

確かに壁にもたれて、すっげえ顔がやつれてるけど。

「後始末の方は私が教会の方に連絡して置きました。学校の人達は倒れてはいましたが命に別状は無く栄養失調という事でしばらくは入院するそうです。」

「ふーん。となると、学校はその間休校になりそうね。今までの状況は分かったわ。で、創太が言った慎二の居場所だけ・・・」

「ここからが本題だ。」

「貴方、本当に分かってるんでしょよね。」

「大体だけだな。衛宮、ここら一帯が描かれた地図を持って来てくれないか?」

「ああ、分かった。」

衛宮が一旦部屋から出て、数分が経ち、地図を持って戻ってくる。

「これでいいか?」

「十分だ。」

そう言っつて、俺は衛宮から地図を手渡してもらい、机の上にそれを展げる。

「いいか、まずここがさつき間桐とライダーが居た学校だ。」

学校に指を置き、場所を再確認させる。

「そして、俺はあいつらが飛ぶ方向を見た。それが大体この方向だ。」

置いていた指をなぞり、新都に運ぶ。

「つまり、あいつらは新都の何処かにいるのね。」

「いや、もう少し限定できると思う。」

遠坂の発言に俺は少し訂正を加える。

「飛んで行った方向、その一直線上の辺りが一番可能性が高い。」

もちろん、途中で進路を変えた可能性もあるが、流石に反対にまではこないだろう。

まず、そこら辺を捜して、居なかったら範囲を広げていく。それが俺の考えだ。」

「成る程。創太の意見はもつともね。私もそれに賛成するわ。士郎はどう思う?」

「俺も異論は無い。」

「なら、今夜にでも行動をしよう。間桐がいつまでも待ってるわけが無いし、放っておくと何をしでかすか分からないからな。」

「待っててください。」

俺の主張にジアナが異を唱える。

「ソウタ、まさか貴方も行くつもりですか?」

「当然だ。人を搜索するのは人手は多い方がいい。」

「なりません……!!今、貴方の身の状況を理解しているのですか!？」

ジアナの叫びに全員が驚く。確かにこいつの言う事は解るこの体では、ほとんど何にもできないし、ただ身を危険に晒すだけだ。でも、「だからと言って、何もしないのは嫌なんだよ。頼む、ジアナ。俺に無茶させてくれ。」

「そんな事をして死んでしまえば、貴方の両親に何を言って顔合わせすれば良いのか解りません。ソウタ、貴方はとにかく休んでください。動くのは次からでも…」

「その次が無かったらどうするんだ？」

「っ…」

俺の言葉でジアナが口を止めた。

「お前も見ただろ？あの光景を。俺はあれを三度も見たくはない。」

一度目は冬木の大災害。二度目は学校の結界。どちらも人が多く倒れて居た。そんな光景はもう散々だ。

「覚悟は結構だけど、創太は休むべきよ。」

だが、遠坂が俺の決意を阻む。

「そんな体で何ができるって言うの？貴方が勝手にするのはいいけれど、こっちの足まで引つ張られるのはごめんよ。」

その遠坂の発言により俺は歯を食いしばる事となる。だが、俺は諦めきれずに、どう反論しようかと考えていた。その時、

「そんな事言わずに創太を行かせてくれないか？」

衛宮から助け舟が出された。

「何故ですか、シロウ君？ソウタの状態は貴方も分かっているでしょう。」

「だからこそです。俺も創太の気持ちはよく解ります。」

このまま、置いて行けばこいつは絶対に無茶して、跡をついて来ます。そうなれば、俺たちの見えない所で創太が危険な状況に置かれるかもれません。

だったらこのままついて来てもらって、目の届く範囲に創太を置いておけばこいつも安全だと思います。」

そいつは良い案だ。そう思ったが、

「私がここに残って創太を見張っておくという手もありますか？」

「うっ…。」

あ(ー)ちゃー、それがあつたか。薄々は感じていたけれども。こうなれば、俺はもう成す術無しだ。

衛宮はそれでも、反論しようと思ひながら考えている。

「……ふふっ。」

おい、ジアナ。人が一所懸命に頑張ってるのに笑うのはないだろ。

「いいですよ。貴方の案に乗ってあげましょう。」

「「はっ?」」

この場にいるセイバーを除いた三人が同じ声を上げた。

「ソウタを見張っていても隙をついて脱走しそうですし、それに心配なのはソウタだけではありませんから。」

「え、えっと…つまり?」

俺が無意識に尋ねる。

「貴方の夜の搜索を許可すると言ったのです。ただし、私の側を離れずに。それが条件です。」

まじか。本当に許してくれるとは思わなんだ。

「あ、えっと…ありがとな、ジアナ。」

「何がですか? 私はただ、貴方の安全確保と聖杯戦争の二次被害を抑える事を同時に行うにはそうするしかないと判断したまでです。」

いや、どこのツンデレだよ。なんて、口が裂けても言えない。ジアナだって、本当は俺を行かせたくない筈なんだから。

そういえばジアナは心配なのは俺だけでは無いと言ってたけど

……。うん、絶対あいつだな。ブラウニーだな。

「それで遠坂はさつき俺をここに残らせたかった様だけど?」

「…いいわ。さつきジアナが言った事を守ってくれさえすれば。けど、邪魔されるのだけは勘弁よ。」

「ああ、分かっている。それじゃあ話が途切れたけど、会議の続きだ。細かい事を決めていくけど……。」

その後は、捜す場所の振り分けやら、目標を発見した後の行動やらを決めていった。会議が終わった後、遠坂は

「私は一旦部屋に戻って、準備するわ。」

との事。そして、その遠坂が部屋から出た瞬間に、
誰かの腹の虫が鳴った。

「おい、誰だ？まだ晩飯の時間じゃない筈だが。」

「…悪い俺だ。」

衛宮が謝りながら白状する。

「いや、確かにお前の方からも聞こえたけど、それよりもデカい音が聞こえたんだよな。」

と言いながらジアナの方を見る。

「し、仕方ありませんよ。昼ご飯を食べ損ねたんですから。」

と顔を赤らめながら衛宮を睨む。

俺はふと横目でセイバーを見てみる。ジアナと衛宮が食べ損ねているからもしかしたらと思う。うわっ、予想通りかなり不機嫌そうだ。お前、サーヴァントだから飯食わなくてもいいだろ。

いや、確かにマスターがあれで、魔力が十分に提供されないから、食事で補うとかそういう事だったけども、今のセイバーの顔は絶対、食べ損なった事への不満から来てる物だ。

「す、すみません。」

と謝る衛宮。

俺はその後に提案を出してみる。

「今からでも軽く摘むか？」

「いえ、そもそも晩ご飯の材料すら無いと思います。」

「っ!!どういう事ですか、シロウ!!」

うおっ。セイバーが突然叫ぶから全員びつくりしたじゃねーか。

「…えっと、セイバー？」

「はっ。突然取り乱してしまい申し訳ありません、シロウ。」

「え、いや別に…構わないというか…」

うーむ。もしかしたらセイバーは生前、食いしん坊というキャラを持ち合わせていたのかもしれない。

「まあ、セイバーの奇行は一旦置いて…衛宮、ジアナが言った事は本当か？」

俺の質問に衛宮は頷く事で答える。

「一応、言い訳を聞こうか？」

「えーっと…：晩飯と昼飯の材料調達に行こうとしたところで慎二から電話が掛かってきて、それで……」

「それであんな事になって買いに行く暇が無かったと。」

「…はい。」

「冷蔵庫の中には？」

「あるにはあるけど、それだけで作ろうとしたら難しいし、あまり残ってない。」

「……はあ。」

思わず溜め息をついた。いや、それどうすんだよ。食材がないって一大事じゃねーか。

「どうする？」

「最善の方法はやはり、今から買いに行く事でしょうか。」
「まあ、そうなるよな。」

晩飯までの時間は、後二時間ほど。かなり厳しいが、それしか策はない。

「それじゃあ、早目に済ませる為に三人で行くしかないか。」

でないと、誰かさんが空腹で暴れ出しそうだ。

「いえ、食材調達は私とシロウ君の二人で行きます。」

「えっ、なんでさ。」

衛宮の口癖がうつった。

「夜の搜索は許可をしましたが、それ以外は許可しませんから。貴方は本来、身体を動かささない方が良いのですから。」

「ちえっ、仕方ねえな。分かったよ。元々無茶しちやいけない身体だからな。大人しくしてるよ。」

「ええ。そうしてください。では、シロウ君行きましょう。」

「はい。じゃあ、創太、セイバー行ってくるよ。」

「いつてらく」

「お気をつけて。」

時間は進み、深夜になる。そして、間桐を捜し出す時でもある。俺たちは今、玄関を出て門を潜ろうとしていた。

「作戦は分かってるよな?」

その言葉に全員が頷く。

「よし。それじゃあ、間桐を見つけてぶっ倒すぞ。」

そして、今回の作戦は開始された。

「くそ、なかなか見つからねえな。」

「ソウタの予想は外れていた事になりますね。私は貴方の予想通りになると踏んでいたのですが……。」

多少のズレはあっても逃げた方向辺りにくると思っていたんだけどな。

現在、俺とジアナは作戦で決めた三番目の搜索場所を搜索し終えたところだ。四番目の場所からは間桐とライダーが学校から逃げた方向とかなり差が始める頃だ。

あと、どうでもいいと思うが、晩飯は鍋だった。衛宮とジアナが手取り早い料理を考えているとそれになった。

そして、昼飯を食べられなかった腹いせをぶつけるかのようにジアナが胃の体積以上に食べてた気がする。

ジアナさん、あんたウチの食事の時、そんな事なかったじゃない。自分達の食費のことは考えるくせに、人の家では考えないのかい?

ちなみに、セイバーもそれと競い合うかのようにほぼ同じ量を食べていた。

「まったく、あいつらは何処に居やがるんだ。」

「そんな事言っていないでさっさと次の場所へ行きますよ。言っておきますけど、見つけても私達は手を出しませんよ。貴方の身に何かあったら……。」

「ああ、はいはい。分かっていますよ、ジアナさん。」

耳にタコができるほど言ってきたやがる。それほど、俺の事を心配し

てくれてるのだろうが、こちとらその気はねえんだよ。

そして、その時はやってきた。

「ソウタ、ポケットから……!」

「間桐を見つけたようだな。」

ポケットの中の物が反応している。これは他の二組のどちらかが目的の奴を発見した合図だ。それは青く光り、ある方向へと指し示している。そのある方向は見つけた奴の居場所だ。

「行きましょう、ソウタ。」

「ああ、行くか。」

間桐、俺はお前を一発ブン殴っておかねえと気が済まないからな
……!

決着・VSライダー

慎二を捜し始めてから一時間が経ったが、
「いつこうに見つかりませんね。」

影も姿も見つけられなかった。

「ああ。創太の予想は外れだったって事かな。」

「まだ最初の捜索場所からそこまで離れていません。決めつけるのは早いと思います。」

それに、彼も言っていたでしょう。多少の誤差もあると。」

「そうだな。」

「さあ、行きましよう。まだまだ捜す場所がありますよ。」

そう言つてセイバーは歩を進める。セイバーの言う通り、まだ捜す場所は残っている。こうして口を動かすよりは、体を動かした方が目的である慎二も見つかる。

けれども、俺は足を止める。

「どうしましたか、シロウ?」

「ちよつと待つててくれないか。」

俺が見ているのは新都で一番高いビル。それは今いる場所からはそれほど遠くは無い。たまたま目に映った。いや、偶然じゃない。ふと、俺は慎二が何処にいるのかを考えていた。そうしたらあのビルに
……

「……っ！セイバー。」

「ええ、あそこに敵がいるのですね。」

セイバーはこちらの意思を即座に汲み取ってくれた。

あのビルの屋上、そこにあいつはいる。見えてはいない。けれども、感じる。恐らくはライダーが発している殺気だろう。

慎二の性格からして周りを見渡せる場所にいると思つていたが、それは予想通りだった。

「セイバーは先に行つててくれ。俺は他の三人を呼ぶためにこれを使う。」

これというのは創太から貰った物で、他の二組も持っている。見た

目はただの青い石。

けれども、それは発信機のような役割がある。魔力を込めると共鳴を起こし、他の二つがこちらの場所に所有者を導いてくれるという物だ。

「解りました。シロウは後から来てください。」

「ああ。分かっていると思うけど……」

「目的は討伐ではなく時間稼ぎ。それくらい忘れてなどいません。」

今のはセイバーを馬鹿にした様な言い方になってしまった。セイバーも少し顔を歪める。ただこれはそういう意味で言ったのではなく

「悪い、セイバー。さっきのはただの確認で言ったつもりなんだ。セイバーを侮辱したかったんじゃない。」

「そうでしたか。では、最初の作戦通りに。」

セイバーは敵へと一直線に走っていく。そして、俺もその後を追うように慎二がいるあのビルへと向かっていく。

|| || || || ||

「着きましたね。」

新都で一番高いビル。俺たちの目の前にはそれが見える。共鳴発信装置こと青い石はここを指し示していた。

……いつも、思うがこのネーミングセンスはどうなんだろうと思う。これは、父さんが製作者であり名付けの親だ。前に使った魔力増幅回復装置もそうである。酷くはないが微妙だ。

「これはビルの上を指してる。つまり……」

「シンジ君はこの屋上にいると。」

「ああ。さっきからセイバーとライダーの戦っている姿も見えるし、それが見える場所となるとその可能性が高い。」

さらに言うとう衛宮もいるだろう。セイバーが戦ってるんだからな。」

「ええ、そうでしょうね。」

そうとなれば、このビルを登っていくしかない。

「ジアナ、俺を背負ってビルを登ってくれ。そうすれば速く……」

「それはなりません。」

「はあ!?!なんでだよ!?!」

「さつき言いましたよね?あくまでも手出しはしないと。」

「いや、そうだけどさあ……」

やはり、何もしないのはもどかしい。

「……はあ。ライダーのマスターであるシンジ君を捕えるだけなら、難しくはないかもしれませぬ。彼は魔術を使えませぬから。」

「え、つてことは?」

「早く行きますよ。ただしビルの中を通って、ですよ。気づかれてはいけませんからね。」

ジアナさん、あんた最高だぜ!!?

「ふざけてないで、彼女達の戦闘を終わらせますよ。」

「だから、心の中読むなって!!?!」

|| || || ||

「あはははつ!!?!衛宮、お前のサーヴァントは一向に攻められないみたいだな!!?」

ライダー、そのままセイバーを倒せ!!?!」

ビルの屋上に慎二はいた。しかし、正確な場所は分からない。さつきから声だけが聞こえる状態だ。

だが、先ほどの発言から予想するに慎二はセイバーがあくまでも他の二組が来るまでの時間稼ぎしている事には気付いていないようだ。ライダーが気付いているのかは知らない。おそらくはバレているだろう。

「……だけど、セイバーが少しずつ押され始めてる。」

作戦として、下手に手を出せない事が逆にセイバーにとって不利に働いている。援軍が来てくれればすぐに形勢が逆転できると思うのだが。

「トレース・オン
投影開始」

考えた結果、俺はライダーへの牽制を行う事にした。投影するのはジアナさんがいた時に使っていた直剣ではなく、アーチャーがキャス

ターを撃ち落とす時に使っていた弓だ。

直剣だと射出の精度が低い。弓ならば正確にライダーに矢を当てる事ができると判断した。

あいつの真似をするように癩だが、そんなことは言ってもらえない。

「……トレース・オフ
投影完了」

そう言い終えたと同時に魔術は完成される。投影に掛かった時間は二分ほど。弓と一緒に矢も投影させた。しかし、アーチャーの弓と比較すれば差異が幾らでも見つかる。だが、今ここで気にしても仕方ないことだ。

矢筈を弦に添え、そのまま引く。サーヴァントに対しての殺傷力がないというのはジアナさんに散々言われた。

「……けれども、目くらましぐらいにはなる。」

狙うはライダーの目。正直言つて、目隠しをしているのであまり意味はない。人の構造で最も弱い部分があるところだという理由で狙ったに過ぎない。

「おいおい、そんな物でどうする気だ？」

慎二の声は無視だ。今は集中するしかない。あの高速で動いているライダーを当てるにはそうまでしても難しいのだから。

かつて、弓道部に所属していた時のように、魔術を行使するように、工程を一つひとつ確認しながら踏んでいく。狙いをすまし、

矢を放つ。

一直線に、狙い通りに、頭で描いたように、ライダーの目へと向かっていく。

「っ……!!?」

当たった。当たったが、目隠しを外しただけだった。

そして、それは悪手だと気付いた。

ライダーは怯み、セイバーはその隙を使って反撃をした。そこまでは良かった。

一旦ライダーが引き、セイバーの攻撃の間合いから離れた瞬間、俺

と目が合った。いや、合わせたと言った方が正しいか。

その瞬間、身体が動かなくなる。キャスターの魔術に掛かったモノとはまた違った感覚。

そして、ライダーが迫ってくる……!

まずい。このままだと俺は確実に死ぬ!!? 学校でも喰らった蹴りが目前まで……!!?」

「マスター!!?」

けれども、それは割って入ったセイバーによって止められた。

敵は即座に引き、体制を立て直す。

「セイ……バー……」

先ほど、ライダーと目を合わせた影響か、舌まで回らなくなっている。

「怪我はありませんか?」

「あ、ああ。」

「それならば心配ないですね。しかし、先の射撃の腕は素晴らしいモノでしたが、判断は褒められたモノではありません。目眩ましを狙ったつもりでしょうが、目隠しを貫通できないのであれば無意味です。」
まさか、戦闘中に説教をくらうとは。この場に不相応な力しか持たない俺が悪いと言われればそれまでだが。

「ふふふ……先ほどから時間稼ぎを狙っているようですね、セイバー。」

ライダーが不気味な微笑みと共に言う。やはりあいつはこちらの意図を見抜いていたようだ。

「ですが、この状況ならば避けることはありませんね?」

この状況というのはまさか……!

「まさか、それを狙ってシロウに……!!?」

「さあ? どうでしょう。」

ライダー、セイバー、俺が一直線上に並ぶこの立ち位置。ここからライダーがデカイ攻撃を放てば、セイバーは動けない俺を守る為に迎え撃つしかない。

そして次の瞬間、ライダーは自身の首を短剣で突き刺した!

これは学校の時と同じ……！

「なっ……！」

彼女にとつては初見で奇怪な行動だ。それゆえ、驚くのも仕方ない。しかし、

「セイバー、宝具が来るぞ!!？」

狼狽している場合でも無い。

宝具、掘り下げて言えばその英雄が持つ固有の必殺技。あれをまともにくらえば、サーヴァントだろうと危険だ。

セイバーはこちらを横目で見ただ後、コクリと頷き剣を構える。自分に任せろ。そう言っているようだった。

「貴方がそうくるのなら私も手札を切るまでだ!!？」

直感する。これから始まるのは宝具のぶつかり合い。セイバーが押し負ければ俺たちは終わる。

しかし、それは相手も同じ。ならば何故ライダーはその状況に持っていきたかったのか。

答えは単純、援軍が来る前にセイバーを潰したかったのだ。セイバーに時間を使ってしまえば戦う相手が増えるだけ。だから、宝具の撃ち合いに持ち込みたかった。

さらに言えば、ライダーは自分の宝具に絶対の自信を持っている。そうでなければ、こんなリスクのある戦いはしないからだ。

「はああああああっ!!？」

そうこう考えている内に、両者がぶつかり合う用意はできていた。ライダーの宝具は馬……いや、あれはペガサスだった。翼が生えた馬。それは神々しく、ライダーの纏う雰囲気とは、正反対のものだった。

対して、セイバーの宝具は……

|| || || || ||

「っ………今のは!!？」

大きな揺れが起きて数秒後、ジアナが叫ぶ。

揺れたのは物理的なモノだけではなく、魔力までもが震えていた。つまりこれは、

「セイバーかライダーか、あるいは両方が宝具を使ったって事だな。」
「ええ、そうなりますね。」

「となると決着が着いてる可能性が高い。時間稼ぎしろって言ったが筈なんだかな……。」

「経緯は後から聞きましょう。私達が出来るとは戦いの場へ早く着くことです。」

「それもそうだな。」

そうして俺たちはまた走り出す。

ビルの中の階段をひたすら走り、感覚的にはあともう少しで屋上という所。

体力はまだ余っているが、未だ目的の場所へ着かない事に少しイラつき始めている。さらには、あと一階分登ると屋上に出られるといったところで、階段が別の場所にあるという事が、イラつきに拍車をかけていた。

そして、階段を探している途中に、驚くべきモノを見てしまった。

「っ!!?あれは!?!」

「バーサーカー!?!」

小声だが、二人ともその声には驚きが含まれている。

そうバーサーカー。他のサーヴァントと遭遇する可能性もあるとは思っていたが、まさかあいつの姿を再び見る事になるとは。

幸いこちらには気付いていない。狂化した事で察知能力低くなっているのか?

まあ、こちらの隠密能力が凄いつていうのがあるけど。なんだよ、周りの力に自分も合わせるって。そんなポンポン変えてんじやねえぞ。

「バーサーカーがいるという事はつまりだマスターが……隣にいやがった。」

マスター、つまりはイリヤスフィールの事だ。

隣のジアナは、別の場所に視点を合わせているようで、目に意識を集中させている。

「他に誰かいませんか?あれは……」

あれ？あれってまさか……

「っ………ジアナ。」

「ええ、分かっています。」

阿吽の呼吸で意思疎通をする俺たち。バーサーカーは誰かを狙っているようだった。そして、その誰かに大斧を振り下ろそうとする。

「ひっ………！」

誰かは恐れる。しかし、

「ふっ！」

ジアナが斧剣を逸らす。俺がかつて行ったように、剣の腹に力を入れて。しかも、俺のようにがむしやらではなく、技として成り立つような動きで。

「おい。」

「ふ………古崖？」

俺は殺されかけた誰か——間桐慎二に駆け寄り、声をかける。

「走るぐらいはできるな。」

「あ、ああ。」

確認をとった後、俺はこいつをどうするか考える。バーサーカーはジアナが抑えてくれている。

周りを見る。ライダーはもういないらしい。決着が着き、セイバーが勝ったのだろう。となればもう間桐は放置しても構わないだろう。ぶん殴りたいのは変わらないが。

「間桐、ジアナがあいつを抑えている間にここから逃げろ。」

「………！」

相手からすれば逃してくれる事に驚きだろう。俺だって正直言っ
て逃したくない。こいつのこと嫌いだし。けれども、死なれるのも困
る。

間桐は頷き、俺の言った事を行動に移してくれた。

「良いのですか、追わなくて。」

「別に構わないわ。あんな奴、すぐに見つけられるもの。それより貴
方達をどうするかだけど………」

その言葉で俺達に戦慄が走る。

「……いいわ。どうやらこの戦争の参加者ではないみたいだし、お爺さまに言われてたのは参加者を殺す事だけだもの。」

ああ、良かった。戦闘にならずに済みそうだ。

「それは好都合ですね。しかし、このまま引き下がって彼を殺しに行くのですか?」

「言ったでしょ、すぐに見つけられるって。今ここで追う必要も無いわ。」

「……解りました。その言葉は信じましょう。」

ジアナがイリヤスフィールの言葉を信用したようだが、

「おい、いいのかジアナ。」

「私達が優先すべきはシロウ君とセイバーの安否確認です。確かにシンジ君の事も気になりますが、あまり重要な事でもありません。」

おい、それ本気で

「……後で使い魔に追跡させますから。」

うん、サンキュージアナ。

その小声で言った一言がなければ、ジアナを殴ってたところだ。

「じゃあ、私達はここで失礼するわ。けれど、もし次に邪魔する事をするれば——容赦しないわ。」

背筋に寒気を覚えた。ちっちゃいくせに威圧してきやがって。

その後、敵は俺達の前からは消えた。

「何事もならなかったな。それじゃあ、やっと衛宮達のところだな。」

「ええ、一刻も早く行きましょう。」

魔力不足・嫌な再会

11月2月7日

「……朝か。」

体が少し重い。バーサーカーに襲われた次の日もこんな気分で見えた。けれども、その時と違う事は俺が前日の出来事をハッキリと覚えていてるところだろう。

「とにかく、居間に行こう。」

何か、途轍もなく嫌な事実を昨日知った気がするが、確認の為に一度話を聞かなければ。

「おはよう、遠坂。」

「……おはよう。」

居間の扉を開ければ遠坂がいた。

「創太とジアナさんは？」

「ジアナは家に色々取りに行ってる。創太の方は情報収集してるってどっか出掛けて行ったわ。」

どっちも出払っているのか。なるべく昨日と同じ人から同じ事を聞きたかったが仕方ない。

「遠坂。」

俺の口からでた声は自身でも驚くほど、とても重かった。

「ええ、分かっているわ。貴方の言いたい事は。」

その為か遠坂にも俺の気持ちやすんなりと伝わった。

「セイバーの事ね。」

「ああ、昨日創太とジアナさんから聞いた話じゃあ……」

「セイバーの魔力が無いのね。」

「……………」

やはり、記憶違いでは無かったか。うつすらと期待はしていたがそんなモノ、すぐに打ち砕かれた。

昨日、ライダーを倒すためにセイバーは宝具を使った。しかし、その直後にあいつは倒れてしまい、ピクリとも動かなくなってしまった。

そして、今も寝室で寝ているのだろう。

「前から魔力のパスが通ってないのは分かってたけど、まさかもうこんなことになるなんて。」

「……………士郎、こうなつたら決断するしかないわよ。」

決断、というのは魔力を集める。つまり、キャスターやライダーのように関係の無い人々から魂を喰らうという事だ。

俺はセイバーにそんな事をさせられない。だが、そうしなければセイバーはいなくなってしまう。あいつ自身もその方法は嫌っている。俺は一体どうすれば……………」

「悪い……………その決断は少し待っててくれないか？」

「私自身に悪影響がある訳でもないから、その質問をする意味はないと思うわよ。」

けど、決断は早くした方が良いわ。いつセイバーの魔力が無くなるか分からないんだから。」

「ああ……………そうだな……………」

そう言つて俺は立ち上がる。

「ちよつと出掛けてくる。色々考えたい。」

「ええ。創太たちにも帰ってきたらそう言っておくわ。」

「ああ、ありがとな。」

向かう先は公園。とにかく、自分の中にあるモノを整理しなくては。

「ここに来るのは久しぶりな気がするな。」

ここというのは、日本で、いいや世界で最も辛いであろう麻婆豆腐をだす店、泰山だ。

俺はある人物に会うためここに来た。現在、昼食の時間真つ只中。実は今朝にも一度来たのだが、目的の人はいなかった。まあ、いくら辛い物好きとはいえ、朝にまで食ってる人では無かったか。…ほぼ毎日食う人ではあるけど。

「さて、中に入るか。」

扉の取つてに手をかけ、そのまま扉を引く。

「いらつしやいませー……あ、古崖君じゃないか。例の人ならあそこに座ってるよ。」

「ありがとうございます。」

とこんな風に俺は店員に顔を覚えられている。それほどまでここに通っている証拠だ。まあ、今回は食事が目的ではないんですけど。

「……………」

食ってる。見事なまでの食いっぷりだ。顔と合わないその食いっぷりは違和感を覚える。すでに何皿か麻婆豆腐を完食しているようだ。

「言峰さん。」

「……………ん？なんだ、創太か。」

「どうも、こんにちは。」

「奇遇だな。ここに来る日が偶然にも重なるとは。」

何が奇遇だ。あんたはほぼ毎日来てんだろ。

「茶化さないでください。今日は言峰さんに話をする為にここへ足を運んだんですから。」

正直言つてこの人にはあまり近づきたくない。なんか企んでそうだし。だが、俺はこの人が何か情報を持っていると踏んで接触した。

「ほう。まあまずは一皿…」

「食べませんよ。言峰さんも知ってますよね。俺が腹弱いつて事は。」

「それは初耳だと思いが？」

嘘つけ。絶対に覚えてんだろ。だって、前にその話をした時、めっちゃニヤニヤしてたじゃねえか。

「とにかく、本題に入りますよ。」

「ふむ、してその話とは一体何かね？」

「今回の聖杯戦争が何かキナ臭いつて話です。」

あと、あんたも。

「例えば何がだ。」

「偽物の令呪であったり、名もなき英雄がいたりと色々ですよ。」

あと、あんたがバゼットさんの令呪を奪ったり。

偽物の令呪というのは間桐がもっていた令呪の事だ。偽臣の書と呼ばれるモノで令呪を代用していた。

「とにかく、言峰さんには情報を持ってないかと思って話を聴きにきたんですよ。」

「成る程。しかし、私は立場上情報を与える事は出来ない。残念だがね。」

何が立場上だよ。後ろからサクツと殺ったくせに。

「ですが、このままにして置けばこの聖杯戦争という形態が崩れてしまいかもしれないですよ。」

無駄だとは思いが粘ってみる。

「仮にそうなるとしても私自身、有益な情報を持っていないのだ。」

「……分かりましたよ。」

やはり、敵から直接情報を聞き出すのは難しいか。

「そんじや、俺は帰りますよ。」

「そうか。君がこの戦争を生き残る事を祈っておこう。」

「悪いですけど、祈る人は一人で充分ですよ。」

その一人とはジアナのことだ。

そして、俺は店を出て行った。

げっ、まずい。店を出たら面倒臭いやつに出会った気がする……。

「……………」

「……………坊主。」

「ひっ!!?」

うわ、ビックリしすぎて裏声が出てしまった。

「お、おいおい、そんな声出すなって。俺がなんか悪い事したか?」

そりゃあ殺されかけましたから。

「……………逆に聞きますけど、なんで俺のことを呼んだんですか?」

「どこかで殺した気がしたからよ。」

おい、なんか恐ろしい単語が混じってんぞ。

「さあ? 初対面だと思うんですけど。」

「いいや、確かに見た筈だ。例えば、この近くにある学校でな。」

完全に解ってんじやねえか。

「はあ。つたく、まさかこんなところで会うとはな、ランサー。」

「やっぱり覚えてんじやねえか。殺された反動とかで忘れてんのかと

思っただぜ。」

うるせえ。あんなの忘れたくても脳に焼きつくんだよ。

「で、どうすんだ。もう一回俺を殺してみるか?」

「はっ。こんな真昼間から殺し合いをおっぱじめる訳がねえだろ。」

「だろうな。」

むしろ、ここで始められたら俺が困る。

「……………バゼット・フラガ・マクレミッツ。」

「ああん?」

「一応、言つとくがあの人は生きてるからな。」

正直言つて、こいつはそんな事に興味なさそうだが。

「ふうん。」

やはり興味なさそうに返事をする。

「……………そいつに言つとけ。次は殺されるなよってな。」

驚いた。まさか、ランサーがそんな事を言うとは。

「なんだ? そんなに意外だったか。」

「まあな。とにかく、俺はここのいらで行かせてもらう。」

「おう。次会ったときやその心臓はもらうぜ。」

「俺は参加者じゃねえんだが？」

「倒し損ねたままってのは気持ちが悪いでな。」

なら、その前にジアナと戦うことになると思うけど。

「そんじゃあな。夜に出会わない事を願ってるよ。」

「へっ、言ってるな。」

そして、ランサーと別れ、数歩歩いた直後。ポケットの中にある物が震え出す。

「ん、電話?」

一体誰からだろう。まあ、番号を見れば一発でわかるのだが。

「ジアナからか。はい、もしもし。」

何の用事かと思い聞いてみると……

「はあ!?衛宮が誘拐された!」

潜入、アインツベルン城

「おい、衛宮が誘拐されたって本当か!? 身代金はいくらだ!!?」
「うるさいです。」

「ボゴオ!?」

慌てて衛宮邸に帰り、居間の扉を思いっ切り開け、大声でふざけた事を叫んだ結果、ジアナにアッパーで殴られた。

見えた! 星が見えたスター!

「ちよつと、ジアナ!? 創太が気絶したじゃないの!!?」

「大丈夫ですよリン。ギャグ補正がありますし、ソウタは倒れたフリをしているだけですよ。」

「あんだけ吹っ飛ばされて大丈夫な訳……!」

「あれは痛えよジアナ。」

遠坂の心情を裏切るかのように俺はムクリと起き上がる。

「えっ、でもあんた……」

「さつさと作戦会議するぞ。衛宮が連れ去られたんだろ?」

「凜。彼らのおふざけを気にしてはなりません。仲間になりたいのなら別ですが。」

「……ええ、そうね。」

おう、なんだセイバーも居たのか。寝たきりから復活したようだな。それでなんかひでえ事言われた気がするがまあ気のせいだろう。

「で、まず衛宮が攫われたって知ってるならその誘拐現場を誰かが見たって事か?」

「いいえ、私とシロウに繋がっているパスに異常が感じられました。そこから士郎に何かあったのだと思い、助けを求めたわけです。」

パスで相手がどうなったのかを感じ取ったのか。だが、衛宮とセイバーの繋がっているパスはあまりにも細い。セイバーが十分な魔力を補給できないほどに。

「なるほど。つまり、誰が衛宮を連れ去ったかは分からないと。」

「はい。しかし、場所ならば判明しています。」

「そこは何処なんだ?」

「確か、郊外の森の方だと思われれます。」

「郊外の森……つまりはあそこですか。」

ジアナの予測に対してセイバーは頷く。その予想は正解なのだろう。だが、あそことは一体？

「なあ、ジアナ。あそこって？」

「アインツベルン城です。」

「っ……！」

ああ、くそ。またバーサーカーとご対面しなきゃいけないのか。

「つまり、イリヤスフィールが犯人つてことね。まさか、城までもこっちに持ってきてるなんて……ねえ、セイバーとジアナつてその郊外の森に行ったことあるの？」

「はい。前回のマスターがそこを拠点にしていましたから。」

へえ、そうだったのか。前の聖杯戦争に関して、俺はジアナからそこまで詳しくは聞いていなかったから初耳だ。知っているのはその結果だけだ。

「ふうん。それで、士郎とのパスは？まだ繋がっているんでしょ。」

「ええ、異常を感知しただけで切れてはいません。」

「そう。だったら案外創太が言つてたことも間違いじゃないようね。」

「俺なんか言つたっけ？」

ワタシー、キオクガーアーマー。ユーギボー、げふんげふん。

「最初に言つたでしょ。身代金がどうのつて。あつちは何かしらの取引を要求してくるかもしれないわ。」

え、あれただ適当に言つただけなのに。

けれど、多分相手は単なる好意でやってる気がしなくもない。まあ、好意の結果が誘拐つてのはないね。

「なら、それに応じるか？」

「嫌よ、絶対にね。」

だろうな。短い時間だが、今までの遠坂を見る限りでは、性格上相手の思惑に乗るなんて事は絶対にしない。

「やる事は一つだけよ。」

「人質の救出だな。」

「ええ、そうよ。」

俺も最初^{ハナ}っから同じ事を考えてた。

「侵入経路とかはジアナとセイバーが内部構造に詳しいから任せるとしてだ、もしバーサーカーに会った時の対策は……」

数秒の沈黙。あれに対策とかねえよ。

「なあ、遠坂お前……」

「無いわ。私もあれに対抗できるなんて思えない。」

「ですよー。」

「せめて、誰かを犠牲にして逃げる方法しかないわ。例えば……」

遠坂は申し訳無きそうにジアナを見る。

「私は無理です。」

「ええ、分かってる。流石に生きてる人を犠牲にしない。そうするのは、せめてサーヴァントのアーチャーかセイバーを……」

「いいえ、私が言いたいのはそういう事ではありません。」

私ではサーヴァントに、ましてやあのバーサーカー相手では一分も保ちません。」

「え？だってアーチャーの視認範囲から二秒で走ってここまで来たんでしょ？その身体能力があれば多少は……」

「それは素の身体能力ではありません。」

「分かってるわよ。身体強化の魔術でも使ったんだと思うけど、それでも一分で効果が切れる訳でもないでしょ？」

まあ、普通はそう思うよな。

「遠坂、言つとくけど俺たちの魔術は特殊なんだ。納得はしなくてもいいから理解はしてくれ。」

「と言いなながらも詳細な説明はしない。遠坂には悪いけど、秘密がバレれば封印指定に一直線だからな。」

「……ええ、手の内はあまり見せたくないのね。」

まあ、そうとも言えるな。正確には違うが、最初に物質の魔力化を見せた時点で意味無い気がしなくもない。

「まあ、そう思ってくれ。さて、人質救出作戦を今からちゃんと決めていくわけだが……。」

「全員揃ってますね。」

玄関前で今回のメンバーを確認するジアナ。

「ああ。俺も遠坂もいるし、セイバーとアーチャーも同じだ。」

アーチャーの姿自体は見えないが、魔力を感じられるので霊体化しているだけでちゃんと遠坂の側にいるのだろう。

セイバーに関しては、実の所連れて行かないという案が出た。まだ魔力不足に関しては解決されていないし、まともに戦えないという事からその案が出たが、本人の強い希望と、俺と遠坂よりかは戦えるという事で連れて行くという結論に至った。

「さっさと行きましょう、あのバカを連れ戻しにね。」

「凜。」

「なによ、アーチャー。」

遠坂を止めるアーチャー。止められた方は止めた方を睨む。

「そう睨むな。私が言いたいのは余計な労力を使わなくてもいいのではないかという事だ。」

「どういう意味よ、それ。」

余計な労力……それってつまり、

「別にあの男を助けに行かなくてもいいのではないかという意味だ。」

ああいう奴は他人の心配など関係ないと言わんばかりに生き残る。だから……」

「却下。あいつとは同盟相手なんだし、もしもの事があつたら困るわ。ただでさえバーサーカーは強力な相手なんだし、戦力を減らすのは得策じゃない。」

マスターとサーヴァントの意見の食い違いか。戦争を進めていくにつれて起こるっちゃあ起こる事だ。俺個人としては遠坂の考えが通ってほしいが、

「どっちでもいいけど、どうするかは早く決めてくれ。これは時間の問題でもあるかもしれないんだ。」

「もちろん、行くわよ。」

「で、アーチャーは？」

「私はマスターの意向に従うまでだ。」

なら、助けに行かないという提案をするな。

「よし、全会一致だな。そういえばジアナ。あれは？」

「ああ、あれですか。それならばここに……」

「なら何個か俺に……」

「あんた達なにやってんの。まるでヤのつく職業みたいに。」

密輸みたいな事をやってたら、遠坂に突っ込まれた。あとはヤのつ

く職業は虎の実家だ。

「秘密兵器の準備だよ。」

「で、その秘密兵器ってのは？」

「後のお楽しみだ。ほら、さっさと行くぞ。」

――――

歩いて数時間。ようやく森の入り口へと到達した。タクシーとかを使っても良かったが、その運転手の安全を考えた末に徒歩の方が良いと判断した。

そして、ここからさらに数時間森を歩くらしい。精神的にしんどい。

「皆さん、少し待ってください。」

と、森の中に入ろうとした時、ジアナが前にでる。

「どうした？」

「結界です。と言ってもただの感知用で強力なものではありません。」

そう言って前方に手を掲げる。

「どう、解除できそう？」

「部分的であればいけます。」

待つ事数十秒。何も無いところからまるでワームホールの様な歪みが作られる。まるでここを通れと言わんばかりの物だ。

「ここから入れれば大丈夫です。この結界が敵の出入りを感知するだけの物で助かりました。もし、居場所まで知られてしまうタイプであったならば、かなり厄介ですから。」

そうだろうな。ジアナが言っている後者になれば結界を壊すか、相手のサーチが引つかからない様に全員に魔術を掛けなくてはならな

い。結界を壊す方法は相手に気づかれるし、魔術を掛けるのであれば効果が切れそうな度にそうしなくてはならないので、魔力の温存ができなくなる。

「サンキュー、ジアナ。みんな、敵の本拠地の侵入開始だ。」

本道と思われる道から少し外れた道を通り数時間。ジアナの先導（ほとんどセイバーに間違いを指摘されていた。）のお陰で、ついここまで来た、アインツベルン城。

やっと見える範囲まで近づけた。森の中は似た様などころを進むだけで同じところをぐるぐると回ってるんじゃないかと一時期思っていた。まあ、迷いの森ではなかったから本当に良かった。

ちなみに、途中でアーチャーが小屋を見つけ、そこは緊急時に使うということになった。

「っ！みんな伏せて！」

条件反射で遠坂の指示に従う。何が起こっているのかは分からないが、だからと言って従わないと死ぬかもしれない。

「どうしましたか、凜？」

小声でジアナが訊く。

「イリヤスフィールとバーサーカーよ。」

城の入り口を指差しながら重々しく言う。

「あいつら何処に行くつもりだ？」

「さあね。でもこれはチャンスよ。あの城からバーサーカーが居なくなるんだから。」

そうだな。もし誰かがまだ城の中に残っていたとしてもバーサーカーより強い奴ではないだろうし、楽に突破できる筈だ。

「それもそうですね。しかし、念のため私はイリヤスフィール達の後を追います。」

けれども、ジアナがもしも考えた提案を出す。

「ああ、わかった。頼んだぜ。」

「はい。もし戻って来たら連絡します。」

ジアナはそう言っていてイリヤスフィール達の後を追跡しに行った。しかし、その会話におかしな所でもあったのか、遠坂は首を傾げながら当たり前前の疑問を話す。

「連絡ってどうやって……」

「いや携帯に決まってるんだろ。」

幸いにも、ここは圏外ではないらしい。そのことで疑問に思っていたのかなと考えたがそれも一瞬で違うと判断し、そして結論に至る。「はっ?」

……しまった。普通の魔術師は機械音痴だって事忘れてた。

そして、遠坂がその例外に漏れないってことも今知った。

「……俺もジアナも携帯電話という物を持っていてだな、お前らみたいな魔術師と違ってちゃんと使えんだよ。」

「なんでそんな物騒な物を?」

「なんで物騒なんだよ!!?」

「だって爆発……」

「しねえよ! 一体どんな使い方すればそうなるんだよ!!」

どういう教育すればそんな発想すんだよ!!? そういえば、十年前に亡くなったんですね、お前の両親は! 不謹慎ですんませんねコノヤロー!!? 言峰神父め!!? コンチクシヨウ!!?

「……とにかく、何かあったらジアナから連絡が来るって事で。俺たちは衛宮を助けに行くぞ。」

「でもそのけいっ」

「い・く・ぞ。」

「……はい。」

魔術ばっか使っていないでもうちよつと文明の利器使えや。衛宮に關しては……微妙だな。魔術使って、文明の利器を直るだけだからな。文明の利器自体はあんまり使ってねえしな。いや、でもブル○レイを衛宮ん家でみたような……今、気にしても仕方ねえな。

「で、どうする。裏から回るのは決まってるけど、問題は何処から……」

「いいえ、真正面から行くわよ。」

「はっ?」

何言ってるのこの人。

「なんで真正面からという発想になったんだよ。」

「バーサーカーがいないあの城は戦力が残ってないような物よ。そんな所にわざわざ手間を取る方法で侵入する必要ないでしょ。」

「……せめて、俺が感知の魔術で安全を確認してからな。」

衛宮を一人にしておくと思つていたが、遠坂も大概かもな。

—————

誰もいねえじゃねえか!!?どーゆー事だよ!!?こんなデカイ城にイリヤスファイルしか住んでないっておかしくね!!?感知の魔術全く引つかからなかつたんですけど!!?

……まあ、取り乱すのはここまでにしよう。遠坂にも言っておいたが、俺の魔術は完璧ではないし、誤魔化される時もある。だから、誰かいる可能性もある。油断しないようにしよう。

「この扉の先にシロウが居るはずです。」

と思つていたら、衛宮が囚われている場所まであつさり来た。俺の懸念とは一体……

「ここがねえ。普通の部屋みたいだが?」

「間違いはありません。」

「ま、入ってみれば分かることよ。」

「それもそうだな。くれぐれも油断はするなよ?じゃあセイバー、開けてくれ。」

俺の言葉にセイバーが頷き、扉に手を掛ける。そして、開けた。

「いませんn……」

セイバーが絶句する。うん、一瞬目的の奴がいないと思つたらいるから驚くよなそりゃ。それもベッドの中に隠れてたらな。……いや、これ隠れられてないだろ。

「ちよつと待ってくれ。」

これは流石に腹が立つ。

「……性質変化」

フォース・チェンジ

詠唱に呆れが混ざりながらも唱える。それと共に近くにある机が浮かび上がり、天板と脚が分離する。

「これでも食らつとけ。」

そう言い放った直後に、机の脚が布団を固定するようにベッドの四隅へと突き刺さる。

「っ……………!?」

中の人には突き刺さってないので安心してほしい。

「さて、みんな。ここに馬鹿はいないから次に行くか。」

「ま、待ってくれ!」

「そうね。セイバー、本当にここにだったの?」

「ちよつと!?!」

「すいません、隣の部屋でした。」

「これ抜いてもらえません!」

うるせえな。まあ、これ以上やると誰かが来てしまうかもしれないので程々にしとくか。

「ったく。ほらよ。」

「ああ、その……………みんな、色々悪かった。」

「ええ、そうですね。あつさりと敵に捕まってしまったり、おふざけかは知りませんが明らかに見つかる場所に隠れていたり……………」

「はいはい、そこまで。説経会はあとよ。イリヤスフィールが戻ってくる前にさつさと出るわよ。」

「ああ、そうだな。」

モタモタしてる時間はあんまねえしな。

ちなみに、机は直してベッドもちゃんと元に戻しておいた。もちろん魔術でな。

—————

出口へと向かっている間、俺は衛宮の様子が少しおかしいと思った。魔術の影響がまだ残ってるのかと考えたが、それとは少しちがうな。となると……………

「おい、衛宮。」

「なんだ、創太？」

「お前、その状態でよくセイバーの心配できるな。」
「うっ……」

「どうせ、イリヤスフィールに受けた魔術がまだ残ってんだろ。セイバーの魔力不足も重大だが、お前が倒れりやセイバーも今以上に長くは持たない。ちつとは自分の心配しとけ。」

「……………」

何も答えない……か。まあいい。どうせ、衛宮士郎というやつはきつと変わらないんだろうな。今までもこれからも。

—————

「おい、ここって玄関じゃないのか!?!?」

「衛宮、言いたい事は分かるがその下りに入る前にやった。」

「なんで、二人とも他人ん家の玄関を通る事に抵抗があるのよ。」

違う、そうじゃない。とは口に出さない。

「ほら、さっさと降りるわよ。」

こいつ、ある意味大物になれるな。

ただ、次に起きた事が何か嫌な予感をさせた。

「……………ジアナ?」

「どうしたの、創太。」

「いや、ジアナからの念話だ。」

「携帯を使うんじゃないの?」

「その筈なんだが……………まさかな。」

階段を降りた直後のジアナから念話。携帯を使うって言った筈なのに、それで連絡するとは緊急を意味する。

「なんだジアナ……………はあ!?!?あれが偽物!?!?」

「何が偽物なんだ?」

「……………まさか。」

「そう、そのまさかだ、遠坂。」

「だからそのまさかかって……………」

「なあんだ、もう帰っちゃうの?」

ヤバい。次の瞬間に出てきた単語がそれだ。全員が後ろに視線を向ける。俺たちが居た場所には……

「イリヤ……スフィール——」

震える遠坂の声。

隣にはバーサーカーも居やがる。クソ、何処に隠れていやがったんだ。魔術には反応がなかったってのに。

あいつに出会わない前提の作戦だったが、こうなっちゃまえばオジヤンだ。

「こんばんは。あなたの方から来てくれて嬉しいわ、リン。結界の反応は無かったけれど。……ジアナはいないみたいね。」

「ああ、お前の作った偽物にまんまと掛かっちゃったよ。」

あえて、強気で返す。内心バツクバクだが、それを押し殺すように一歩前へ出る。

「あなたは……誰かしら?」

前にも一度会ったよね!??そんなに影が薄いかな、俺!!?

「俺の事なんざどうでもいいじゃねえか。それよりもジアナだ。あいつを騙せる魔術はそうそう無い。いや、魔術である限りは絶対に見破られる。」

「苦労したわ。彼女の目を欺くのは。どうやったかは教えないけど。」

「ああ、そうだろうな。」

冥土の土産とか言って教えてくれたら助かるが、そうもいかない。そして、沈黙が数秒。もう、誰も話す気にはならない。すると、バーサーカーが跳び降りてくる。

「お喋りはおしまい?それじゃ始めよつか、バーサーカー。」

余裕がある言葉。負ける事は絶対に無いと言いたいのだろうか。

イリヤスフィールは次の言葉を紡ぐ。まるで喜んでるかのようにな、まるで狂っているかのようにな、

「——誓うわ。今日は、一人も逃がさない」

勝利を宣言する。

「……アーチャー、聞こえる?」

いつの間にか実態化しているアーチャーに遠坂は問う。

「――」

そのアーチャーは答ええないが、遠坂にはその問いへの答えは伝わっているかのようで、次にこいつは……

「――少しでいいわ。一人であいつを止めて。」

死ね、と言った。

「馬鹿な……! 正気ですか凛、アーチャー一人ではバーサーカーには敵わない……!」

ああ、確かに敵わない。けれども、妥当な判断だ。

「私たちはその間に逃げる。アーチャーには時間を稼いでもらうわ。」

セイバーの主張は無視か。まあ、ここはできるかできないかではなく、やらなきゃやられるだけだ。判断は迅速にそして冷静に行わなければならぬ。

「賢明だ。凛たちが先に逃げてくれれば、私も逃げられる。」

単独行動は弓兵の得意分野だからな。」

一歩前が出る。

何すかしてんだ。今そんな事言ってる場合じゃねえだろ。いや、別にふざけてる訳では無いのだろう。あいつはただ平静を保っているだけだ。

「ところで凛。一つ確認していいかな。」

「……いいわ、なに。」

申し訳なさそうに遠坂はアーチャーを見る。しかし、次のアーチャーの言葉は俺たち全員を驚かせるものだった。

「ああ。時間を稼ぐのはいいが――」

別に倒しても構わんのだろう?」

こいつ、最後の最後に……

「アーチャー、アンタ——」。

ええ、いいわ。がつんと痛い目に合わせてやって。」

ああ、もういい。」

「行くわよ。外に出ればそれだけで私たちの勝ちなんだから。」

皆が遠坂の指示に従う。だが、俺はそんな言葉を無視する。

「おい創太！お前も早く——」

「衛宮、お前は先に行け。」

「は!?!」

アーチャーの右、その一歩後ろまで歩を進める。

「どうした、お前もさっさと逃げろ。まさか、ここでも命を顧みずに目立つ事を考えているのか?」

「んな訳ねえだろ。……アーチャー、

一緒に生き残るぞ。」

力の魔術・再びのバーサーカー戦

アーチャーと創太に時間稼ぎをしてもらっている間、俺とセイバー、遠坂の三人はジアナさんがいるという小屋へと走っている訳だが……

「どういう事なのよ、士郎！なんで、あいつを置いてきちやったの？！」

「この通りさつきから隣でずっと喚かれています。」

「アーチャーはまだ戦えるけど、創太はそうじゃないでしょ！ジアナでも一分保たないって言ってたのに！」

「ああ、もう煩いな！」

流石にここまで煩いと痺れを切らしてしまう。

「創太は大丈夫だ！あいつ自身もそう言ってたし、何も考えずにあのバーサーカーに挑む筈がない！」

「あいつはここに来る前に策が無いって言ってたのよ！？？それなのに考えも何も無いでしょ！」

「それでもあいつは生き残る！」

「なんでそんな事言い切れるのよ！」

「あいつはどんな奴が相手だったとしても互角に戦えるからだ！」

「そんな事ある訳ないでしょ！？？」

まあ、にわかには信じがたい事かもしれない。けれど、俺はあいつはの能力を知っている。それがとんでもないことも。

「凜。」

「何、セイバー。」

「私からもいいですか。」

「アンタも創太がバーサーカーに勝てるとでも言いたいのか？」

勝つとは言っていない気が……

「いいえ。ですが彼は確実にアーチャー共に私達の元へと帰って来ます。」

「なんでそんな言い切れるのよ。」

「先ず、彼はアーチャーの遠方からの援護をするつもりでしょう。そ

れだけならばバーサーカーに狙われる心配はありません。」

「それだけならね。でも、バーサーカーに並みの攻撃は効かない。最初に見た時もそうだったでしょ。効いたとしても、バーサーカーかイリヤスファイルがそれを黙ってない。アーチャーよりも圧倒的に倒しやすい創太を狙うでしょうね。」

「しかし、貴女もジアナの能力を知っているでしょう。彼はそれと同じ能力を持っている」

「けど……」

「遠坂、お前が何を言おうとあいつは大丈夫だ。」

少し口を挟む。

「なによ、他に理由でもあるの?」

「あるといえはある。けど、遠坂が納得できるような理由じゃないかもしれない。」

「……言ってみなさい。」

「まあ、単純な事だ。あいつは……」

俺の友達だからな。」

|||||

「アーチャー、一緒に生き残るぞ。」

アーチャーがキザなセリフを言った後、俺はそんな事を口走っていた。

「何言ってるんだ、創太!お前が敵う相手じゃないだろ!」

おいおい、それお前が言うか?

「衛宮、お前に言っておいただろ。俺達が使う魔術の事を。だからさっさと行け。」

「……………」

まだ心配なのか。まあ、確かに俺は無謀なのかもしれない。でも、俺はやらなくちゃならないんだ。

「シロウ、早く！創太なら大丈夫です！」

「でも、セイバー！」

「セイバー、小屋にジアナがいる。そこまで、二人を連れて行け。……いいいな？」

「はい。貴方も必ず生き残ってください。」

「はっ?!? 何言ってるんだ、セイバー！あいつを本当に置いて……」

「ちよつとは信頼しろよ。友達だろ？」

「っ!!? ……ああ、わかった。生きて帰ってこいよ。」

「もちろんだ。」

……もう行ったな。そう確認して、後ろに割いていた意識を前に向ける。

「逃げなくていいのか？今が最後のチャンスだ。」

「そんな事すれば、ただ恥ずかしいだけだろ。最後までちゃんと戦い抜いてやるさ。」

ただし、戦闘は早めに切り上げさせてもらおう。時間稼ぎが目的なら、戦う事はせずに別の方法をやるまでだ。

「ほう。なかなかの覚悟じゃないか。」

膝も震えているのは武者震いという奴か？」

「言ってる。」

皮肉が絶えない弓兵だこと。だが、実際に俺は恐れている。あの黒塗りの巨漢に。やる事はただの援護だが、敵がこちらに何もしないと限らない。

「アーチャー、好きに動け。それに合わせる。」

「まさか、本気で言っているのか？英^{サーヴァント}霊の戦いに合わせるなどと。相当な実力者だったようだな、お前は。」

「はいはい。後で感謝する事になるんだから、あんまり見下すと恥をかくのはお前の方かもしれないぜ？」

「そうなるように願っておこう。」

「その願いはすぐに叶えられるかもな。」

さて、お喋りはここまでだ。相手さんがそろそろ襲ってきてそうだ。

「■■■■ー!!」

声にもならない声。ただ意味もなく吠える。だが、その声だけでも俺にとつては一種の攻撃だ。足がガクガクと恐怖に震え、立ってられない。だからと言って、

何もしない訳にはいかない。

「そらよー」

先制攻撃。俺は三つある秘密兵器の内の一つを早速使う。所謂、開幕ブツパだ。

ただ石を投げただけのように見えるだろうが、その数秒後、目が痛むほどの光が放たれる。

「くっ……いー」

イリヤスフィールとバーサーカーの両者ともに目を守ろうとする。当然だ。それを喰らい続けられれば失明するほどの光があるのだから。

しかも、聴覚、嗅覚といった五感を一時的にシャットダウンする効果だけでなく、周りの魔力にノイズを発生させ、魔術による感知をいっさいがっさい無効にする効果を持っている。まさに相手の知覚から逃れる事に特化した魔術だ。

ちなみに光は前方にだけ浴びせて、こちら側には影響が無いという仕組み。

「偽・螺旋剣！」

そして、すぐさまアーチャーは前にも見せた矢でバーサーカーがいるであろう方向に攻撃をする。

カラドボルグというのは矢の名前だろう。弓の方には特殊な効果はない。あの捻り曲がった矢にはそれがあり、攻撃を確実に当てるという効果があるのだろう。

大気はうねり、一直線に凄まじいスピードで矢は走る。次に起こるは着弾。俺は確信した。

「当たったな。」

と。
確実にバーサーカーを貫いた。けれども、おさまらない恐怖。あれはそんなヤワな事で終わるはずが無いと俺の頭は理解していた。
「いきなりやってくれたわね。」

徐々に収まっていく認知阻害の輝き。それを放った前と違う光景は抉れた床だ。バーサーカーまで続いており、その床が普通の人間だった場合、直視できないほどの光景が広がっているだろう。

しかし、バーサーカーは生きていた。先ほど変わらぬ体勢を保ちながら。

「いいわ、まずその名も知れない貴方から……っ！いない!?!?」

あつたりまえだ。俺とアーチャーは既に別の場所へと移動している。あれだけの目眩ましをしておきながら、攻撃するだけなんてやる筈ないだろ。

まあ、実際はアーチャーが俺を抱えて移動したので、俺自身はそこまで考えてなかったりする。

「やつぱり、倒せなかったか。けど、アーチャーの矢は当たっていなかったのか?」

「よく見てみる。胸に穴が空いている。ダメージ自体は通っている筈だ。」

ホントだ。確かに身体を中心に反対側まで見えそうな穴が空いている。前回の戦いも踏まえると、どうやらバーサーカー^あは一定以下のダメージを無効化するようだ。

しかし、こうなると余計厄介だ。英霊といえど心臓を貫かれれば死ぬ筈なのに、あいつは生きている。どういう仕組みかは知らないが。

心臓が別の場所にあるのか?それとも心臓がなくても関係ないのか……いずれにしてもそういう英霊は限定されそうだ。

「まったく、私に合わせると言いながら、お前が先に仕掛けるとはな。隙を作るにしても、事前に言っしてほしいものだ。」

「最初だけだし、ちゃんと合わせてくれてんじゃねえか。」

それでアーチャー、次はどうする?正直言っつて、さっきの奴ぐらいの威力がないと、ダメージを与えられないと思うけど。同じか、それとも別の方法でいくか?」

「同じ方法でやらせてもらおう。なるべく、手の内は隠しておきたい主義でね。」

「分かった。けど、出し惜しみして死ぬなよ?」

「お前こそ、出し惜しみしなくても死ぬという事は勘弁だからな。」

こいつ本当にうざい。まあ、それはあまり考えないでおこう。

「それで方法のことだが、さっきのアレをもう一度やれ。アレならば二度目でも十分効果があるだろう。」

「無理だ。あれは俺自身が使った魔術じゃない。これの効果だ。」

アーチャーに秘密兵器を見せる。

「それは？」

「これは魔術を封じ込める石で、一回きりだが中に入っている魔術を使える。けれど、残りの二つはまた別の魔術だ。」

ちなみに父さんが作ったものだ。名前は魔術貯蓄装置だとか。魔力を消費せずに済むので誰でも使える。

「……残りの二つというが、その手に持っているのは三つではないのか？」

「手元まで戻ってくるのがこの石の効果なんだよ。」

便利なもんだ。これで回収し忘れが無くなるし、再利用ができる。エコだね。

「そこよ、バーサーカー！」

「やべ、気づかれた！アーチャー、今度こそお前に合わせるから迎撃してくれ！」

「私はお前のサーヴァントではないのだがね！」

そう言いながらも、アーチャーは何処からともなく取り出した白と黒の双剣で、バーサーカーに迎えうつ。

「さて、準備するか。」

アーチャー達から距離を取りながら呟く。あくまでも俺は援護する側だ。決して前で戦う側ではない。魔術を行使する準備に入る。

衛宮にも言っておいたが、俺の魔術は変換魔術というモノを行使する事が基本だ。

「フォース・チェンジ
性質変化。」

詠唱の開始され、魔力の性質が変化する。魔力の性質は元の力から土になる。

力、それは物体や身体を動かすモノ。その分類には魔力も含まれる

ため、魔力の性質をも変換させる事ができる。

地面に手を置き、魔力をそれに通す。まるで、あの時と同じような状況だ。衛宮がセイバーを召喚したあの日と。

アーチャーを援護するために同じ魔術を行使する。

「ふっ！」

そのアーチャーの方は防戦一方。巨大な大剣……斧？を双剣で受け流す。バーサーカーの身体は半端な攻撃を無効にするため、無駄に攻められない。

「■■■■アー！！」

範囲の広い薙ぎ払い。それがアーチャーへ襲いかかる。速さも十分であり、アーチャーは仕方なく大剣を受け止めながら後ろへと引く。

だが、バーサーカーは即座に次の攻撃へと転じる。地を蹴り敵へと向かおうとする。

「だけど、ここはもう俺のフィールドだ。」

巨漢の身体が一瞬ピタリと止められた後、前のめりに倒れようとする。相手からすればいつの間にか脚が地面に埋まっているように思えるだろう。

だが、それは俺の魔術で起こした現象。土の魔術でここら一体のフィールドは思うがままに動く。

バーサーカーは倒れる事は無かったものの、地面に手をついてしまう。そのまま、脚を引っこ抜こうとするが

「そんなのにのんびりしていても良いのか？」

アーチャーが再びさつきと同じ矢を放つ。

だが、弾かれた。しかもバーサーカーは何もしていないにも関わらず。

「なっ！」

驚愕の声が漏れてしまう。

一体何故だ？さつきは効いたのに、なんで今度は効かなくなってるんだ？

「無駄よ。ヘラクレスに同じ攻撃は効かない。」

「ヘラクレス……まさか!」

戦慄する。ヘラクレス、となれば十中八九、あいつはギリシャ神話に登場するあの英雄……

「なるほど、心臓を貫かれても動いている理由が解ったぜ。ヘラクレスは試練を十二回乗り越え、その数だけ命を与えられた半神半人か。」
「ええ、そうよ。そいつは十二回殺さないと死ねない身体を持っているの。最初の一回は殺されちゃったけど、貴方達はもうバーサーカーを殺す事なんて出来ないのよ。」

ペラペラと情報を喋りやがって。しかも、随分余裕そうに。俺らにはバーサーカーを殺す程の威力が高い攻撃はもうできないと踏んでいるのか。

まあ、関係無い。こちとら手数多きは天下一品……というかその気になれば無限なんだよ。バーサーカーに効くかは別として。

「ほう、そいつは良い事を聞いたな。」

どこが良いんだよ、その耳が聞いた事の中で。

「古崖創太!私に合わせてみせろ!」

「何か策があるんだろうな!」

「もちろんだ!」

アーチャーが疾風の如くバーサーカーに突っ込んでいく。以前に手数は多いと言っていたが、果たしてバーサーカーに対抗出来る手はいくつあるのだろうか。

手に持っているのは双剣。もちろんあれだけでどうにか出来るとは思わないが、何をするつもりなのだろうか。

「はあっ……!」

バーサーカーによる単純な力をアーチャーは洗練された技で逸らす。

それを見ていると、やはりサーヴァントの戦いというのは別次元だと思ってしまう。魔術によって目では追いかけられるが、自身の身をそれに投じる事が出来るかと言われれば無理だ。

この体は一般人より少し上ぐらいの身体能力を持つてるが、規格の外には出ない。魔術を使ったとしても耐えられるのだろうか?

「……いや、今はそんな事考えている場合じゃない。」

考える事はたられればではない。今、この場をどう振り切るかだ。

集中しろ。なるべく、アーチャーの負担を減らすんだ。

戦闘の余波でできた瓦礫が浮かぶ。それは誰が行った事でもない。俺がそうした事。バーサーカーの行動をバーサーカー自身が予期しない行動にさせる。

まず始めに敵の体制を崩す。その為にはバーサーカーの動きを読まなければならぬ。

剣筋を、技を、力を読み取る！それが親から受け継いだ能力！

「っ……そこだ！」

バーサーカーが一撃と一歩を出す瞬間、それが触れるであろう地面を沈ませる。体制は崩れていない。だが、それは予測していた。だから次の一手も既に用意してある。

猛スピードで瓦礫を飛ばす。狙うは剣の腹。以前、衛宮を助けた時のように、剣筋を逸らす。しかし、数個ぶつけたところでその大剣はアーチャーを十分に捉えられる。

「だけど、そこからなら……！」

次に使うのは力の魔術。元の性質であり、最も使いこなしている性質でもあるが、使う魔術自体は効率が悪い。しかも、対象に触れてない分さらに燃費が悪い。

「逸れる！」

俺の言葉通り、バーサーカーの剣は逸れてただ地面を斬っただけになる。しかし、魔力の減りが想像以上だ。三分の一ぐらい持つていかれてしまった。

だが、ここで終わらせてはいけない。すぐさまバーサーカーの剣を地面に埋もれさせ、足もそうする。すぐに抜け出されそうだが、一秒でも稼げれば御の字だ。そして、

「潰れる！」

秘密兵器の一つを使い、バーサーカーにかかる重力だけを強くさせる。あいつが持つ同じ攻撃は効かないという能力が拘束にも反映されるのであれば、土で足を固めるという手段は効かない事になる。そ

のため、保険として手札を切らせてもらった。

バーサーカーは少し沈み、周りの地面も沈んでいる。重力が重くなり動きづらくなっている筈だ。

アーチャーの方はいつの間にか離れており、腕をクロスさせている。ガードの体制ではないと思うが……

「鶴翼三連！」

そう言いながら、剣を左右に投げる。その意味は解らないが、やはり防御の構えではなかったか。けれども、次に目にする光景は驚きのものだった。

もう一度同じ双剣を投げた。

最初の物は未だ空中を舞っている。しかし、アーチャーは再び同じ物を取り出した。そして、更に同じ事をする。

どういう原理だ？今まであいつが使っていた武器は亜空間にでも仕舞っているのか、英霊が持つ能力だと思っていた。だが、同じ物を何本も取り出すのはどう考えてもおかしい。

まあ、今はどうでもいいことだ。バーサーカーの動きを抑える。それに集中しなければならぬのだから。

左右に広がる三組の双剣。その軌道は一気に変わり、まるで対となる物同士が引き寄せあっているかのように、同時にバーサーカーへと向かっている。

しかし、あれだけならばダメージは通らない。確かに同時ならば同じ攻撃は二度効かないという能力は関係ない。だが、一発の威力が低ければ意味がない。それなのに何故……

「壊れた幻想」

アーチャーの詠唱。それと同時に双剣が全て爆破。一瞬にしてバーサーカーの姿が見えなくなる。なるほど、あれならば強固なあいつの体を貫通する……っ！

「危ない！」

それを見た瞬間、俺の体は動いていた。俺がいる位置からバーサーカーを中心とした反対側へと走る。魔力をスピードに特化した身体能力に変換しながら。

階段を登り振り返る、そして、爆破によって飛んでくる瓦礫に手を掛け、霧散させる。

「な、なん……で？」

尻餅をついたイリヤスフィールは間拔けな声を出す。質問の答えを出すとするれば、瓦礫を霧散したのは魔術だ。手で触れた時に原子の結合とかをどうのこうのした。その結合にも力がある為、力が魔力の性質である俺にとって容易い事だ。ただし、遠隔での行使は難しい。

……いや、こいつが求めている答えはこれでは無いな。正しい答えをするならば

「俺は誰かが死ぬところを見たくないだけだ。既に死んでいるサーヴァントならまだしも、敵だとしてもお前を見殺しなんていう事はしたくなかった。」

「えっ？」

それに、衛宮も何かしら思うはずだ。完全な他人でもないし、あいつはお人好しだ。悲しむ顔はあまり見たくない。

相手方は驚いているようだが、何を想おうと俺にとっては関係ない。これはただのエゴだからな。

「さて、あつちはどうなってるかな。」

再び戦場へと目を向ける。未だ砂埃は舞っていて、敵の姿は見えない。しかし、あの爆破を同時に喰らえば、バーサーカーであろうと殺せる筈だ。そう考えると、あと十回あいつを殺さなければならぬ。

そう考えていると、砂埃からバーサーカーが跳び、アーチャーへと襲いかかる！

「くっ……！」

予測していなかったのか、そうでなければスピードに対応できていなかったのか、アーチャーは咄嗟に大剣を受け止めようとする。だが、あんな物受け切れる訳がない！

「はあっ！」

地面から二人の間に土の壁を生み出す。

「■■■■■■ー！！」

敵は吠えながら、土の壁を破壊しようとする。その壁はあいつに

とって紙同然だという事は承知しているが、壁を作った目的はアーチャーを守るためではない。

次に壁は破壊され、その向こう側の敵が見える。だが、バーサーカーの視界に入ったのはアーチャーではなく、懐へ入ろうとする俺だった。

「っ……い！」

体を捻りなんとか大剣を避ける。アーチャーよりも俺の方が体格が圧倒的に小さい。そのおかげで、あいつであれば確実に当たっていた攻撃は、的が小さい俺には避けられる。

一気に懐に入った俺は全魔力、いや持てる全ての力を右腕の筋力に変換し、

「はあああ!!」

そのままバーサーカーの体を貫く！

「う……。」

だが、立つ力を失ってしまい、俺の身体は崩れてしまう。

布石は打てたものの、それは生き延びなければ意味が無い。

バーサーカーはさっきの一撃で命を一つ失ったが、まだ九つも残っている。そして、動けない俺を襲ってくる！

「だから、逃げた方がいいと言っただろう。」

世界がブレる。

いや、アーチャーが横から走って来て、俺を抱え脱出する。

「何が逃げた方がいい、だ。不意を突かれたくせに。」

助けられたにも関わらず、俺は感謝の言葉を言わずに、さっきの事を掘り返す。

「そう見えるだけだ。まったく、まさか私を文字通りの足蹴にするとは。おかげで反撃できるものもできなくなってしまった。」

「どうだか。」

アーチャーの反論は説得力が無い。明らかに余裕がなかったって

いうのに。

「まあ、今は逃げてくれ。悪いが俺は魔力切れどころか、前みたいに動けないんだ。お前がそんな俺を戦場に置いて戦うような性格でなければ、そうしてくれるだろ？」

現に危ない所を助けてくれたんだから、無駄に考える必要は無いと思うが……」

「そうだな。私はどうやらお人好しのようだ。だから、お前の指示に従ってやろう。」

「逃げようとしたって無駄よ!!」

敵は俺たちを逃してはくれないようだ。となると、このまま、衛宮達の所に行けば全滅だ。だから、残り一つの秘密兵器をもう仕掛けさせてもらった。

「檻よ、現れろ!」

次の瞬間、バーサーカーの周りから光が現れ、囲んでいく。

巨漢はそれに捕まる前に効果範囲外へと逃れようとするが、そんな事をしても関係ない。魔術自体はすでに敵を捉えているのだから。

光は次第に檻へと形を変えて、バーサーカーを閉じ込める。

「■■■■バー!!」

そのバーサーカーは吠えながら、檻を破壊しようとするが、ビクともしない。

「秘密兵器をまだ持っていたとはな。バーサーカーを一回倒した時か、キャスターの空間転移を真似た時に、もう使い切ったと思っただ。」

「お前に抱えられる直後に仕掛けたんだよ。あれで数時間ぐらいは時間を稼げる筈だ。多分、イリヤスフィールでもあの魔術を解除するのは不可能だ。」

……というか、よく転移がキャスターのだと気付いたな。」

転移が何処で使われたかと言うと、アーチャーを助ける為に土の壁を作った直後だ。あの時、アーチャーの前に転移をしてそのアーチャーを蹴り、無理矢理後退させながらも、俺はバーサーカーの懐へと入っていった。

「魔術の構造があまりにも似ていたからな。誰でも気づく。

むしろ、何故それができるのか私が聞きたいぐらいだ。」

「別に説明してやっても構わないが、今は逃げるのが先決だ。」

「同感だ。」

話をしている内に城から抜け、それが遠くに見える。目的は果たした。ちゃんとあいつらは逃げているのだろうか。

多分だが……とにかくジアナに連絡するか。

力の魔術・真の詳細

創太とアーチャーを城に残し、脱出をした俺たち。途中、セイバーが走れなくなり俺が担いで運んだり、俺自身の体が保たなかったりという事が起きたが、なんとかジアナさんが待っている小屋まで辿り着いた。

「面目ありません……。私が偽物だと気づかないばかりに危険な目に合わせてしまい……」

「いいのよ、ジアナ。私だってそうだった。非があるのは貴女だけじゃないわ。」

偽物というのは、城に入る前に遠坂達が発見したイリヤとバーサーカーの姿だろう。

……今、一番危険な目に合っているのは前線で戦っている創太とアーチャーだ。

「遠坂、アーチャーは？」

アーチャーの無事は創太の無事を意味する。絶対では無いが、前衛より後衛が攻撃される事は少ない。それゆえに十中八九俺が考えている事が合っている筈だ。

「……まだ、大丈夫よ。」

遠坂は右腕を確認して、確信する。

良かった。信じたとは言ったものの内心では懸念を残してしまう。

「だからと言って、創太が無事であるとは限らない。もしかしたら……」

あまり考えたくない事を、遠坂ははつきり言う。

けれど間違っではない。絶対という言葉はあり得ないのだから。

「ええと……少しよろしいですか？」

話の腰を折るようにジアナさんが喋る。

「さっき……十五分程前に、創太から念話がありました。」

「なんて言っていましたか？」

「バーサーカーとの戦闘を終えてこちらに向かってくるそうです。もうそろそろ……」

「たっだいまー、足止めはしてきたぜ。」

|| || || ||

いやー、アーチャーの腕の中で揺られること十五分。ついに、ジアナ達と合流できた。

「創太、なんでアーチャーに運ばれてるんだ？」

「色々あつてな。」

「……訊きたい事は色々あるけど、まずは現状報告よ。」

「そうだな。アーチャー、降ろしてくれ。」

俺の言葉を聞いたアーチャーは丁寧にジアナの隣へと降ろしてくれた。

「サンキュー。」

「ありがとうございます、アーチャー。わざわざ、運んでいただき。」

俺がアーチャーに向けて礼を言うと、ジアナが続いて頭を下げる。

「……まったく、貴方は無茶すぎです。魔力切れまで起こして。」

と思つたら次に俺への説教か。

「いやー、あれは仕方ない事なんだって。」

「仕方なくありません。」

先のバーサーカー戦で何があつたのかはジアナに念話でもう伝えられている。

確かに魔力切れまでして、アーチャーを助ける義理は無かった。

「そういうえば、前回のバーサーカー戦の時も魔力切れを起こしましたね。次の特訓からはもつとハードに……」

うわ、また不穏な事言つてやがる。しかし、それと同時に俺の背中 hands を当てて、魔力補給もやってくれてるので、俺の為だということ は解る。だが、ハードにするのはやめてくれ。

「はいはい、その話は後にして。」

ナイス、遠坂。このままいくと永遠の説教モードに突入しそうだった。

と言うか、前回は散々しごかれた後の戦いなので、元を辿ればジアナが悪いことになる。キャスターに攫われた時?……勘の良いガキ

は嫌いだよ。

「さて……セイバーの魔力切れか。」

ベッドで横たわっているセイバーを横目で見る。

まだ意識はあるようだが、現界でできる時間は刻一刻と迫っている。すぐには無いだろうが、底はほとんど見えているようなものだ。

「ちよつと、アーチャー。前に立たないでくれる？何も見えないじゃない。」

と思っていたら、遠坂が怒鳴ったような声を放つ。見てみるとアーチャーは俺とジアナから遠坂を離すように、間に立っていた。しかも、俺たちに敵意を向けながら。何故なんだ？

「マスター、そいつらはキヤスターの使う魔法を一度見ただけで真似てしまう奴らだ。警戒しない方がおかしい。」

「え？アーチャー、それどういう事よ!?？」

「さあな、私も詳細は知らん。訊きたければ本人に訊く他ないだろう。」

あー、そりやそうなるな。あの転移は魔術ではなく魔法の域だ。現代の魔術師の中に使える奴はいない。もちろん絶対ではないだろうが、どちらにしろアーチャーが警戒するのも無理はない。

「ねえ創太、ジアナ、どういう事？魔法が使えるなんて聞いてないんだけど。ちゃんと説明して。」

時間稼ぎはしてあるんだから、話す猶予ぐらいはあるでしょ？」

「ああー……、ええつと……」

「あの檻は中々のものだったからな。バーサーカーが解放される事はほぼない。あつたとしても時間経過による魔力切れだけだ。そうだろう？古崖創太。」

まずい、完全に逃げ場を失ってしまった。

「……どうするジアナ？」

「話した方が良いでしょう。」

だよなあ。

「アーチャーの警戒が解けるわけではないですが、貴方がやろうとしている事の為にもそうした方がいいです。」

「全部お見通しって訳か。」

「当然です。何年貴方の側にいると思ってるんですか。」

いや、ジアナの場合、普通に読心の魔術を使ってきそうだ。

「じゃあ、お望み通り話そうか。俺たちの魔術についてな。」

俺たちは共闘を組む仲だ。本来ならば、事前に言ってお置かなければならなかった。そうしておけば、アーチャーが不審がる必要も無かった。

……よく考えれば、前もって話したとしても、結局危険だという事には変わらないと言って停戦条約がなくなる可能性があるので、意味は無い気がしなくもない。

「まず最初に、古崖家の魔術師の起源と属性は『力』だ。」

この話は衛宮にはもう話しているし、セイバーも知っている。だが、二人には我慢してもう一度聞いてもらいたい。

「力？聞いた事ないわね……」

「当たり前だ。俺達古崖家は公にならないように隠してきたんだからな。」

「ならなんで、今バラしたのよ。」

「一人ぐらい喋っても良いだろうと思っただけ。衛宮は協会と関わりは無いし、お前が何か言ったとしても、たった一人じゃ影響はない。」

遠坂家が名家とは言え、こつちもそこそこ名がある家系だ。遠坂がチクつても戯言ぐらいにしか思わないだろう。多分。

「話を戻すぞ。『力』ってのは魔力とか、筋力とか、色々な意味を含んでいる。」

他にも重力とか、火力とか、はたまた結合力とかっていう、物体を繋ぎ合せているような物も意味する。

「それで？アーチャーが言った魔法を使ったっていう事にどういう関係があるのかしら？」

「まあまあ、話は最後まで聞け。」

せっかちは嫌われるぜ。すばやさが上がってぼうぎよがゲフンゲフン。

「次に古崖家俺達は変換魔術という物を主に使っている。」

「変換魔術……ああ、あれね。置換魔術の上位互換って言われてる魔

術だったわね。」

話が早くて助かる。衛宮にこの話をした時は一から十まで喋らな
きやいけなかった。

さて、変換魔術。これは元の物質の性質を残しつつ、別の性質を他
の性質に換える魔術だ。

例を挙げるならば、ここに俺の腕がある。この腕の性質の中には
『常温であれば固体になる』と『自身の意思で自由に動かせる』がある。
そこに変換魔術で『常温であれば固体になる』という性質を『常温で
あれば液体になる』に変換させる。すると、腕が液体になりながらも
『自分の意思で自由に動かせる』という性質が残る。

要は解釈次第だ。ただし、ない性質をある性質にするなんていう都
合の良い事は出来ない。例えば、『成長しない』性質を『成長する』性
質に変える事はできないのだ。

あと、腕を水に変えられるなら脳もそうすれば良いと思って実行し
たら必ず死にます。斬られたり潰されたりすればその時点で神経が
繋がってないので、脳の機能が停止します。

それと、置換魔術の上位互換と呼ばれていたが、その理由は魔力の
運用効率と性質の保存だ。変換魔術は、元の性質をある程度そのまま
にしておける事で、魔力の消費量が抑えられる。

「この変換魔術で変化させるのは基本的に自分の『力』だ。魔力を筋力
に、筋力を敏捷力にと言った具合にな。これは、力の器も変換するか
ら限界以上の力を制御できる。」

他にも、五感に変換させて感知能力を上げたり、思考能力に変換さ
せて判断力を上げたりできる。

さらには、物体を魔力に変えて、自分の中に保存ができたりもする。
ジアナが度々使っているあれだ。

原理としては、俺達は物体には存在するために力を使っていると考
えている。便宜上、それを存在力と呼ぼう。その存在力を魔力に変
換、さらに自身に取り込んでいる。厳密には魔力ではないし、その魔
力を使って魔術を使う事はできない。元の物体に戻す事にしか使え
ないのだ。

「そして、肝心の魔法を使ったという事だが、あれは魔力の性質を変えたからなんだ。」

「えっと……つまり？」

「だから、こうだな。あー……。」

「まずい。言葉が見つからない。頭では想像できてはいるのだが、こう……説明ができない。」

「つまり、自身の魔力を魔法が使いやすいそれに変換しているのです。」

「すまない、ジアナ。あーだこーだと頭を捻くり回している俺を助けてくれて。」

「例えば、創太が使ったという転移ですが、あれは自身の属性が空間であると、他のそれと比べれば、扱いやすくなる魔術です。では、私達がその魔法を使うにはどうすれば良いか。」

「自身の魔力の属性を空間に変換する、ってこと？」

「結論に行き着いた遠坂が、正解を答える。」

「その通りです、凜。さらに言えば空間属性の中でも、転移をしやすい魔力に変換すれば、それに特化できます。これによって、私達は理論上全ての魔術・魔法を使えます。」

「なによそれ!?? そんなの卑怯じゃない!」

「遠坂が怒鳴る。そう思うのは当然だ。全ての魔法が使えるならば、チートもいいところだ。」

「まあ、落ち着け、遠坂。あくまでも理論上だ。俺らにだって欠点はある。」

「そう言つて、遠坂の怒りを治めようとする。」

「その欠点つてのは二つある。」

「一つ目は……まあ、欠点というか当たり前のことなんだが、魔術の構造を知らない、その魔術は使えないんだ。俺がキャスターの魔法を使ったのは実際に見たからであつて、それ以外に魔法が使えるのかといわれれば、現時点では使えない。」

「なるほど。キャスターに攫われた時に、転移の魔術を使つてたから、真似ただけつてことね……いや、それもそれでおかしい気が……」

遠坂が最後に小声でなんか言った気がするが気にしない。

「でも、なんで一目見ただけで、魔術の構造が判るのよ。」

一時納得したかのように見えたが、再び疑問が浮かび上がる、遠坂。「言ったろ？俺達の属性と起源は力で、その力には魔力も入ってるって。」

魔力の流れとかそういうのを読み取って、構造を解析できるんだ。」他にも体の力の流れも読み取る事ができるので、体術や剣術などの技も習得できる。

だからと言って、相手の次の手を予測しようとしても無意味だ。観るのに時間がかかるし、そこから実行するのにも同じ。つまりは予測する前にやられてしまう。

「どつちにしても相手の魔術を使えるんでしょ。戦うごとに手札が増えるなんて、敵になれば厄介な事になりやしないわ。」

「ところがどつこい、二つ目の欠点のせいで厄介ではなくなるんだな。」

これによって、相手と同じ事をして、消耗戦に持ち込むなんていう事は出来なくなる。

「その二つ目の欠点は魔力の消費が激しいという事だ。」

例え魔術の構造が判ったとしても、それを一度で完璧に模倣するのは難しい。大体の場合は何かしら劣っていて、魔力の効率が悪くなる。

完璧に模倣したとしても、魔術を行使する前に、一度自身の魔力を変換するという作業で必ず魔力を消費してしまうんだ。

結果として、魔術をコピーする時、相手よりも魔力を多く必要とされる。」

「確かに初見で厄介な事にはならないわね。でも、それは即興で模倣した場合よ。鍛錬を積み重ねれば、相手と同等の魔術になるわ。そうなればほぼ互角、いいえ他にも魔術を習得しているのだからそれ以上になる……いや、そうとも限らないわね。」

最後に自分の言った事を否定する。俺が訂正しようと思ったが、自分で間違いに気づいたらしいので黙っておこう。

「鍛錬しても、一朝一夕で完璧になる訳じゃない。さらに言えば実践経験もないから、それも考慮すると時間なんて幾らあっても足りないわね……。」

「そうだ。しかも、俺はたった一年間しか訓練してない。だから、できる事が多くても、実際に使える手札は多くない。」

ジアナの方は知らん。本気で戦ったところは見た事ないし。

「それすらも嘘だとしたら？」

アーチャーが俺の言葉を否定するような事を言う。

「本当に一年という期間だけしか訓練を受けていないのか？それにしては、先の戦いは慣れてたように思えたが。」

「師匠の教えが良かったとでも言っておこうかな。」

ジアナを一瞬、横目で見ながら言う。

「まあ、信じなくても構わない。今説明しているのは俺達の魔術についてだ。どちらにしても手の内は全て見せるつもりはない。」

だが、その上で相手の信用を勝ち取らなければならない。

「ふむ、それもそうか。」

納得してくれたようだ。まあ、信用どうのこうのと言ったが、遠坂がアーチャーからバーサーカーの宝具を聞けば、退却を選ばざるを得ないだろう。

「以上が今話せる俺達的能力についてだ。何か質問はあるか。」

「あるわ。貴方達、本当にそんなに多くの魔術を使えるのかしら？」

転移の魔術を真似したって言うけれど本当は元から使えて、貴方達の真の能力を隠してるんじゃないかって、思えてくるのよ。そこはどうなのかしら？」

やはり、それも疑われるか。

「なら、今から実践してやる。それぐらいすれば、お前も信じるだろう？」

周りにあつた瓦礫から手頃なサイズの物を一つ取る。

「まずは遠坂家お前もよく使っている転換魔術。」

やる事はいつもと同じ。最初に魔力を変換させる。属性は爆破。そして、転換魔術を使いやすいようにもする。

次に、瓦礫に魔力を込める。本来使う筈の宝石と比べれば魔力の伝導率が悪いが、今は見せるだけなのでまあいいだろう。

「ほら。ちゃんと魔力が込められてるだろ?」

数秒でできた突貫の品を見せる。

「微量だけど、確かに魔力はあるわね。」

「よし、ちゃんと見たな。なら……ほいっと。」

相手に確認させたところで、適当に空中へと投げ捨てる。もちろん誰もいない所に、だ。

そして、瓦礫は小さな爆発と共に粉々になっていった。

遠坂は驚く事なくその過程を目で追う。

「で、次にルーン魔術だ。」

先ほどと同じように手頃な瓦礫を取り、同時に魔力を変換させる。瓦礫に特殊な文字を書き、相手に見せる。

「ほら、この文字の意味が判ってるなら、次に起こることは予想できるだろ?……i s a」

呪文を詠唱し、瓦礫は次第に氷を纏っていく。

遠坂の顔には変化が出てきた。

「最後に魔眼だ。」

眼を閉じ、また魔力を変換させる。だが今度は眼も変換する。眼を魔力で覆い、そのまま一体化させるイメージ。変換先の属性は熱だ。

「……ふう。」

溜息が漏れる。普段はこんな事をしないので、体が慣れず、疲れが少し出てしまう。

「さて、あそこをよく見とけよ。」

指を指した方向に全員の意識を集中させる。そして、ゆっくりと眼を開け、魔力を制御する。気を抜けば、視界の全てが効果範囲内になっってしまう為、注意が必要だ。

俺の視線の先にある瓦礫が段々と赤く光る。その赤は、次第に白を含み、やがて太陽のように輝き始める。すると、瓦礫の形は崩れて、固体から液体になるかのように……いやなっていた。

「まさか、本当に……?」

遠坂の驚きは、ついに口から溢れた。

それを聞いた俺は眼を閉じ、魔眼から元の眼に戻す。

「これでわかっただろ？俺たちはあらゆる魔術を使える。さつきも言った通り、厳密に言えば違うがそう思ってもらっても構わない。そこから辺はお前たちの裁量だ。」

過小評価されても過大評価されても、俺たちには有利に働く。見誤ってくれたらラッキーぐらいの気持ちだ。

それと、先程使った魔術だが、それに特化している家系なら基礎中の基礎だ。魔眼は例外だが、基礎だからと言って赤の他人が簡単に使える物でもない。それを多数に、更に属性が別々ならば、相手も納得する筈だ。

「……分かった。貴方の言った事は多少信じるわ。それで、次の質問をしていいかしら？」

「おいおい、質問があるかと訊いたのは俺だが、そう何個も答ええないぜ。」

「ええ、それは分かってる。だから、次が最後。」

「何だ？言ってみろ。答えるかは別だけどな。」

最後ねえ。まあ、ここまで話しちまったら、次に来る質問は大体決まってるようなものだ。

「なんで欠点まで話したのかしら？」

やはりだ。やはりこの質問が来た。そりやそうだ。ベラベラと事細かに喋ったら怪しまれるに決まってる。

まあ、ここはまた敢えて話そうじゃないか。

「何故……か。その欠点が考えたら分かる物だからだ。」
「はあ？」

遠坂は訳の分からないという顔をしているが、これは裏の無い言葉の意味通りだ。

「先に話した二つの欠点は、どちらもよく考えれば、辿り着ける解答だろ？一つ目は当たり前のことだし、二つ目も二段階に置いての手間と、完全なコピーはできないってことだな。」

それを敢えて話す事で、俺たちは話相手に欠点なんて関係無い奥の

手を隠し持つてると、牽制できるわけだ。」

もし話さなかった場合、敵同士になり欠点を見抜かれて、無駄に攻撃されてしまい、かなり面倒な事になる。

「ふーん、成る程。つまり、ブラフって事ね。」

「さあ？ブラフだと思うんなら、後で試してみたらどうだ？」

こんな事言ってるけど、遠坂が言った事は半分合っている。奥の手があるにはあるのだが、まだ使った事がない。だから、その時になつて使えと言われれば、成功するかどうか分からない博打だ。

「……さて、こんぐらいでいいだろ、俺たちについての話は。」

そろそろ、あのデカブツをどうするかを考えようぜ。」

忘れてはいけない。あのバーサーカーは重ね掛けの蘇生魔術を持ち、一定以下の攻撃を無効化し、さらには、食らった攻撃は二度も通用しない事を。そんなあいつに勝つための手段を、俺たちは見出さなくてはならない。

戦闘準備

「士郎、セイバーを抱きなさい。」

「アホか!!?」

以上が対バーサーカー・作戦会議の内容を簡潔に纏めたものだ。嘘です。

ちゃんと説明をすると、まず遠坂に古崖家の魔術の説明をした後、バーサーカーの能力について話した。十二の命を持ち、同じ攻撃は二度目以降が通用せず、一定以上の攻撃力でないと効き目がないということも。

そこからはどうやってこの状況を乗り切るかを考えていた。このまま相手が来るのを待ち迎撃するか、それとも街へ逃げるか。

前者ならば、バーサーカーを倒すという事と同意義だ。あれを十二回……いや、三回ほど削ったから九回……けど、回復している可能性もあるし……とにかく、最少九回、最多で十二回倒さなければならぬ。

後者の場合は、セイバーと衛宮の体力が持たない。回復させるというのもあるが、それはそれで誰かが労力を使うことになるので、プラスマイナスゼロだ。遠坂が持つ宝石ならば魔力を使わなくて済むが、あいつが渡してくれるかどうか怪しい。

となると、前者の方がまだ可能性がまだあるという事で、セイバーを起点にバーサーカーを倒すという作戦にした。アーチャーでも良かったが、俺がバーサーカーを倒せる程の威力がある攻撃を他にあるのかと訊いたら『生憎、もうそんな手は使い果たした。火力が高いものはあれで全部だ。』と返してきた。なんか隠してる気がしてならないが、どうせそれ以上訊いても何も答ええないと思う。理由とかはない。ただの直感だ。

セイバーを起点にと言ったが、勿論このまま朝を迎えて決戦へとは行かない。そうすれば、本来の力を出せずに、ヤラレチャツタになるかもしれない。いや、なる。

そこで、繋がっているのかいないのかよく分からん衛宮とセイバー

のパスを強化する事にした。

遠坂に俺とジアナがよくやっているような儀式も準備も要らない魔力譲歩をセイバーにしたらどうだと言われたが、生憎あれは俺たちだからこそできる事だ。他人に魔力を渡すという事はその人に合った魔力へと変えなければならぬ。

その点、魔力属性が力である俺とジアナは、ほんの少し調整が必要なもの、変換魔術を習得していることもあり、スムーズに魔力の譲歩ができる。

あと、パスを強化する方法についてだが、遠坂もその提案をしたが、手法は肌を直接触れ合わせるといふような拡大解釈をすれば冒頭で言ったようなことにもなるので、その案は却下させてもらった。こんな状況下で誰がそんな行為に走るんだよ。

他にも作戦とかもあるが今は敢えて、その辺の話は控えさせておこう。

「二人とも準備はいいか？」

俺の顔は真剣な表情へ変わり、声も重みが増す。その質問に二人は同時に頷く。

ここにいるのは、俺とジアナ、衛宮、セイバーの四人。遠坂とアーチャーは外で見張りだ。今から行う事はあまり人に見せたくない物だからな。あの二人には出ていってもらった。

「よし、それじゃあやる事をもう一度確認するぞ。

衛宮とセイバーのパスを強化するために、俺とジアナがそれぞれの魔力を操作する。二人は出来るだけ抵抗をせずにリラックスしてくれ。」

二人は同時に頷く。

何故直接パスを強化しないで二人の魔力を操作するのか、と言われれば答えは簡単で、できないからだ。パス自体は視えるのだが、外から加工しようとしてもできない。そもそも、パスは外部からの干渉はされにくい作りになっている。その為、衛宮とセイバーのそれぞれを通して強化を行われなければならない。

あと俺はさつき、魔力を操作すると言った。俺とジアナの魔力で強

化するのではなく、わざわざ言わない衛宮とセイバーの魔力を使う理由は、俺たちの魔力では消耗されてしまうからだ。衛宮達に魔力を合わせたとしても、結局それは他人の物。徐々に拒絶反応を起こして、元に戻ってしまう。

分かりにくいのであれば人間の血液をイメージすれば理解しやすいだろう。白血球が異物を感知し、追い出してしまう。例として挙げるならばそんな感じだろう。

「それでは、始めましょう。二人はまず手を繋いでください。」

その言葉に衛宮が一瞬反応する。何か嫌な事でもあったのか。

手を繋ぐという動作をする事は、今初めて言った。しかし、それだけの行為に一体何を思っているのだろうか。

「はい、分かりました。シロウ。」

セイバーは返事をして、衛宮に手を差し出す。差し出された本人は何か納得していない様子で、それに答えるかどうかを悩んでいた。

「……う・どうかしましたか、シロウ。早く手を。」

「あ……ああ。」

なんだか動揺しているようだ。照れているようにも見える。……まさかとは思うが、女の子と手を繋ぐのが恥ずかしいとか、そういうもんじやねえだろうな？

「おい、衛宮。さっさと手を繋げ。そんな事でモタモタしてたら、あいつらが来ちまうぞ。」

だからと言っていつまでも待ってやるわけにはいかない。衛宮には悪いが急かさせてもらう。

だが、肝心の本人は

「あ、ああ……。」

と言いつつ、手は行き場を失ったように、弱々しく空虚を仰ぐ。

今ここで初心を出しても意味ねえんだよ!!？さっさとやれ!!？という言葉は口に出さないが、時間は有限なので早くしてほしい。

「すうー、はあー。」

衛宮が、一つ大きな深呼吸をしてから、手をゆつくりと前に出す。そのぐらいしなきゃいけないことか？女性経験どころか、接点が間

桐妹かジアナしかいないとは言え、そんなに恥ずかしがる事はないだろう。虎は知らん。

「手を繋ぎましたね。」

やっと第一段階が終了したようだ。こんなのは一秒で済ましてほしかった。

次は第二段階、メインであるパスの強化だ。俺の技量に少し不安が残るが、ジアナのサポートもあるから、それに頼りながらやるしかない。

「ソウタ、自信の力に懸念があるのは分かりますが大丈夫です。この一年間練習してきた事に自信を持ってください。」

ジアナが俺の気持ちを察して、不安を取り除くような言葉を掛けてくれる。

「……ああ、ありがとう。」

その効果は大きく、さつきよりはリラックスしてきた。だが、緊張はまだある。完全に無いよりかはマシだろうが、無駄なプレッシャーにならないよう祈ろう。

そう思い、俺は準備を始める。衛宮の後ろに回り、手を背中に乗せる。ジアナも同じようにセイバーの背中に手を乗せる。

「それじゃあ行くぞ、衛宮。」

「ああ、頼む。」

「セイバー、なるべく力まないようにしてください。」

「可能な範囲でやってみます。」

衛宮の魔力は俺が、セイバーのはジアナが操作する。

なぜこの組み合わせなのかと言われれば、単純に信頼の問題だ。信頼が高ければ、それだけ無意識に行ってしまう抵抗が小さい。その分、俺と衛宮は友達だし、ジアナとセイバーは同じ戦線を張った者同士だ。セイバーは俺に対して比較的友好で、ジアナと衛宮も仲は良い方だろうが、今の組み合わせの方が互いに信用できる。

「フォース・チェンジ性質変化。」

俺とジアナ、二人の声が重なる。その瞬間、無駄な思考は消え、集中力が極限まで上がる。ここからは本気モードだ。

「……？」

何か違和感を感じた。

それは、衛宮の魔力を操作し始めようとした時だ。といつても、何かがつつかかるような感覚ではない。その逆何もないのだ。

「ソウタ？」

「……なんでもない。続けよう。」

俺が少しもたついていたからか、ジアナは不安な表情になる。

人間の体というのは、外から刺激を加えられると何かしら反応がある。当然、この作業をするにあたって、自身の魔力を操作する事とは差異がある筈だ。しかし、その差異がほぼない。

……まさかな。

「はあー、疲れたー。」

俺は、自身の役割を一先ず終えて、脱力する。やれるべき事はやった。後は出たとこ勝負になるだろう。

「あら、パスの強化は終わったのかしら？」

「遠坂？お前まだここにいたのか。」

外の空気を吸おうと思ひ、扉を開けたら遠坂がいた。てつきりもう逃げたかと思つてた。

今の状況で、こいつがここに残るメリットはないはずだ。こちらの勝つ確率なんてのは非常に低く、撤退して次の作戦を立てた方がマシだ。その事はパスの強化をする前に行った作戦会議でも言った。

「ちゃんと質問に答えなさいよ。成功？それとも失敗したのかしら。」

「成功はした。衛宮達には寝てもらってる。やった事はパスの強化であつて魔力補給じゃないからな。無駄な行動は抑えさせてる。それよりもお前逃げなくていいのか？」

「それは……」

こいつにはアーチャーがまだいる。態勢を立て直す為に、一度戻った方が勝算は高い。そう考えると、あそこでアーチャーを助けられない方が良かったかもしれない。そうすれば、遠坂は俺たちと行動する可能性が高くなる。まあ、過ぎたことを考えても仕方ないかな。

「今ならまだ間に合う。こんな賭けの悪い勝負なんて降りた方が賢明だ。」

「……なら、なんで創太はその『賭けの悪い勝負』に乗ろうとしているのよ。」

「バカだから、だろうな。」

「はあ?」

予想外の答えに思わず間拔けな声を出す遠坂。それも当然か。俺もそんな答えを返されたら、同じような反応をするだろう。

「とにかく、よく考えてから選択しろよ。俺はそうして、この道歩んでるつもりだ。」

少し格好つけすぎた言い方だっただろうか。まあいい。これが本心であることに変わりはない。俺もジアナも覚悟して選んだ道だ。茨どころか、大量の剣が今にも自分の体突き刺そうとしているような道を、俺たちは選んでいる。その先が過程に見合わないような結果だったとしても。

三度目の

早朝、涼しい風が吹く。木々の間から木漏れ日が出ており、ここま
でならば気持ちの良い気分になれるだろう。

しかし、そこには異常があった。明らかに静か過ぎる事だ。嵐の前
の静けさ。まさにそれが今の状況を表している。いつ来るかは分か
らない。だが、それは確実に来る。

広場の真ん中に堂々と立っているのは、セイバーとそのマスターで
ある衛宮士郎。今から戦いに赴くその姿は、不安要素が多くあるもの
の、できる準備は全て行ったものだ。あとは、当たってどうなるかだ。

「……シロウ。」

「ああ、来たな。」

突然、二人の口が開く。先ほどまでの、永遠とも思われる沈黙を打
ち破る理由、それは目線の先にある一つの影にあった。

厳密に言えば、影は二つだ。だが片方の影は、もう片方のそれと比
べて十倍もの大きさがある。つまり、前者が途轍もない巨漢であり、
後者はそれに見合わないほど小さな体格を持っていた。

その影の正体は言わずもがな、イリヤスフィールとバーサーカー
だ。既にバーサーカーの真名はセイバーと衛宮に知られている。

ヘラクレス、半神半人の英霊。以前に明かされた能力について今回
は、説明を省こう。そのほかに、武術の全てを修めたとも言われるが、
狂化の為にそれを発揮する事はまずないだろう。

「ああ、残ったのは二人だけなのね。」

双方のサーヴァントが一瞬で間合いを詰められる位置にまで、影で
あった者は、足を止める。そして、白い妖精のような幼女、イリヤス
フィールが話しかけてくる。

「ああ、他の奴はみんな逃げた。今から追つても間に合わないぞ。」

衛宮は自分のできる最大限の演技で、淡々と、そして表情をなるべ
く変えずに、応える。

「そうみたいね。ジアナがいるなら、結界をすり抜けられる。感知で
きなくても、おかしくはないわ。」

どうやら、敵は衛宮の事を信じたみたいだ。前から思っていたが、イリヤスフィールは衛宮に対して好感を持っている。あいつがお人好みな性格だからだけど、あの少女自身にも何かあるからではないだろうか。

「……イリヤ、もう一度だけ訊くぞ。」

こんな戦い、辞めてくれないのか。」

似たような思考が頭にあっただのか、衛宮は敵に説得を試みる。

「できないよ、お爺さまの言いつけだもの。」

私は他のマスターを殺して、聖杯を持ち帰らなくちゃいけないんだから。

……それに、もう一度だけ訊くのはこっちだよ。

シロウが答え直すって言うんなら、ちゃんと聞いてあげなくもないんだよ……?。」

説得は失敗。それどころか同じような質問を返される。この前の事だろうか。あの公園での話、それを今になり、持ち出しているのだろうか。

「答えは変わらない。」

そして、同じ答えを出す。

同一の質問を出した二人の心境は似て非なる物だろう。好意である事には変わりないが、それには微妙な差がある。

「……そう。」

だが、今考えるべき事は別にある。イリヤスフィールが放った、ただの一言で、ここは戦場が変わる。

「なら本気で殺してあげる。」

その思い上がりと一緒に、粉々に砕いてあげるわシロウ！」

宣戦布告をしたと同時に、イリヤスフィールの全身が怪しく光る。あれは令呪だ。なんで体中に、とかつていう疑問は無しだ。何故ならその現象の後に行われる事は一つしかないからだ。

令呪が光る。つまり、それはサーヴァントへの命令、戦闘開始の合図だ。

「行け。近寄るモノはみんな殺しちゃえ、バーサーカー！」

「■■■■■■ー！！？」

自身が暴走する前触れを意味する叫び。バーサーカーはそれを行う。そして、クレーターでもできよう脚力で、地を蹴り、一気に距離を詰める……！！？

「……っ、セイバー！」

衛宮がサーヴァントの偽名名を呼び、セイバーはそれに応えるかのように、バーサーカーの最初の一撃を弾く。

そこからは、似たようなものだった。

力と力の応酬。

剣が打ち合う。

様子見は一切なし。

細かい技など無意味。

全力の攻撃と、攻撃に似た防御。

どちらが誰かは言わずとも理解できるだろう。

セイバーは今までより、本来の能力を取り戻している。けれども、それまで。『今までより』なので、全てではない。それゆえか、徐々に力負けしている。

ここまではまだ想定内だ。あくまでもセイバーの役目は、戦闘終了までバーサーカーと剣を交えて、足止めをして、チャンスを作るだけだ。

たがしかし、時間が経つと完全に押され負けてしまう事も確か。

「■■■■■■ー！！？」

爆音の唸りが鳴り響いたと同時に、セイバーが吹き飛ばされる。

「セイバー……！」

そのマスターは反応して叫ぶ。だが、まだ戦闘不能にはなっていない。バーサーカーの剣が触れたのはセイバーの剣のみ。ダメージは負っていない。

そして、バーサーカーは空いた距離を詰めようと、最短距離を突っ走る。

これは教会からの帰りに起きたバーサーカーとの初戦と同じ状況だ。

奇襲はまだ終わっていない。

俺は、バーサーカーから少し離れた地面から、トビウオのように飛び出て、接近する。真下から仕掛けたかったが、それは俺の技量では不可能だ。

奴の間合いからギリギリ届かない距離まで来たら、右腕を伸ばし人差し指だけを立てて相手に向ける。その先には、光の球がある。ここまですれば大体の人が、この後どうなるか予想できるだろう。

「レーザービーム貫け、光よー！」

光の球から熱線が発射され、敵の心臓目掛けて、飛んでいく！

「ちっ……！」

だが、現実には上手くいかないものだ。それに嫌気が差し、つい舌打ちをしてしまう。

バーサーカーは続け様に来た二度目の奇襲を、物ともせず弾いた。先ほどの剣を素早く切り返してだ。

まさか二回目すらも防いでしまうとは、少し予想外だった。これでは、後々が厳しくなりそうだ。

しかし、バーサーカーの命を一つ取るのは確定している事だ。

「はあああっー！」

先の俺と同じように、だが俺よりも速く、バーサーカーの真下から飛び出てきた人物、それはジアナだった。

俺と同様に、ジアナも地面の中にずっと待機していた。けれども、あいつの場合は、常にバーサーカーの下に待機できるように、魔術で土を掘り、そして、上に気づかれないように地表を固定していた。

ジアナは剣を構え、敵の心臓に狙いを定める！

タイミングはバーサーカーが斧剣を振ったと同時。それ故に、攻撃が弾かれる事はない。スピードは十分で、反応すらできてないだろう。威力も、敵の体を貫通するほどはある。これならば……！

「がはっ……！！？」

「なっ……！」

期待は碎かれる為にある。そんな言葉がでてしまうほど、あっさりと奇襲は終わってしまった。

バーサーカーは斧剣を持っていない腕で、ジアナを地面に叩きつけた。その衝撃で、地面が沈む。ジアナが土を掘っていたからか、周りとかかなり高低差ができてしまっている。

「ジアナ!!?」

俺は慌てて、あいつの生死を確認しようと、大声で呼びかけた。そんな余裕などないはずなのに。動揺しているのだろうか。

奇襲というのは一番楽にダメージを与えられる攻撃手段だ。相手がこちらに意識を全く向けていない状態からの攻撃というのは、確実に、傷をより深くつけさせることができる。

しかし、狂戦士は、バーサーカー狂化しているはずなのに、連続した三度の奇襲を冷静に無傷で対処し、しかも最後に至ってはカウンターというところでもない事をした。

セイバーがチャンスを作り、俺とジアナ、遠坂の三人が仕留めるという作戦だったが、奇襲が効かない以上、他もほぼ全て効かないだろう。

「■■■■■■ー!!?」

「まっず……!」

バーサーカーは咆哮と共に、次の獲物に狙いを付けていた。俺は間合いの外で、消去法でいけば遠坂だ。

本来はバーサーカーを倒した時に一瞬だけ怯む筈なので、その瞬間に遠坂は距離を取るつもりだった。だが、奇襲は失敗に終わり、タイミングを逃した為に、間合いの内に入ってしまったている。

「アーチャー!」

「ふっ!」

遠坂は身を守る為に、サーヴァントに攻撃を受けさせる。それでは作った。

アーチャーは一撃を受けただけで大きく後退した。衝撃を逃した為だろうが、それほどバーサーカーの一撃が重いということだ。

そして、俺は考えなくてはならなかった。バーサーカーが狙う次の獲物が誰か。

セイバーと衛宮は、奇襲に参加していない為に除かれる。アー

「■■■■■■ー！！」

それは何撃目だっただろうか。俺の脳は記憶する事すら惜しいと、剣筋を読みとる為だけに、全ての機能を集約して、意識が一瞬飛ぶ。

頭が働かなくなり、隙ができてしまった。

同時に、バーサーカーはチャンスと言わんばかりに、自身を鼓舞するような声を上げ、斧剣を振りかざす。

体より頭が先に根を上げるとは思わなかった。まあ、そうでなくとも差異はあまりないだろう。

「っ……………」

死がまた迫る。恐怖が俺を襲う。

俺はそれに耐えきれず、目を逸らしてしまう。

くそ、今度こそ終わりなのか。死ぬ……………のか。

……………嫌だ。こんなところで、終わりたくない。

こんなところで……………

死にたくない。

しにたくない。

シにたくない。

死ぬのは、怖い……………

「ソウタ!!?」

誰かが俺の名前を呼ぶ。とても親しみのある声だ。目は瞑っていて、周りで何が起きているかなんて分かりはしない。

そういえば、いつまで経っても痛みを感じない。この状況どっかで覚えがあるのだが、まさか……………

そう思い、目を開ける。すると、

「……………あ、あああ……………」

よく見知った顔が血に塗れていた。

「ソウ、タ……、けが……は、ありま……せん……か？」

俺なんかどうでもいい、ジアナの方が重態じゃないか！

それに似たような言葉を紡ごうとしたつもりだった。だが、俺の唇は震え、動かせなかった。

なんとか、返事をしようと思い、口にした事が

「あ、ああ……。」

先ほど出した言葉と似たようなものだった。

「それなら……良かった……。」

本当なら、心配されるのは相手の筈だ。なのに、その素振りすら出来ない自分が情けない。

「■■■■■■■■■■ー!!」

まずい。バーサーカーがこちらに向かってくる！幸い、先ほどジアナが抱きかかえて距離を離してくれたから、猶予はほんの僅かにある。

しかしなんとかして、ジアナを抱えて逃げなければならない。

だが、どうやって？

俺の手はボロボロで、そもそも足の力が入るかどうかも分からない。ましてや、ジアナを背負っていかなくはならない。

成す術なしか……。

「はああああっ！」

そう思った時、セイバーの大声と共に、強大な魔力を感じる。周りを見れば全員が、同じ場所を見ている。視線の先には、セイバーがいた。

空気が彼女を中心に渦巻き、その彼女は、文字通り光の剣を持っている。

確かにそれは強力な宝具だろう。しかし、しかしだ。同時に、セイバーの持つ魔力が急激に、剣へと吸い取られている。

果たして、その宝具が完成するまでに、セイバーの魔力が持つかどうか。

けれども、方法は全て出尽くしてしまったようなものだ。ならば、

捨て身の手段に移る他はない。

それしか、方法は……

「使うな、セイバー!!？」

だが、それは赤い光によって打ち消される。

黄金剣

遠坂、創太、そしてジアナさんが行った三度に渡る奇襲は失敗に終わった。

ジアナさん曰く、この奇襲が成功しなかった場合、勝率は急激に下がってしまうそうだ。

しかも、単に失敗しただけでなかった。ジアナさんは背中に大きな傷を負い、創太はバーサーカーの攻撃を腕で数発受け、どちらも立つ事すらままならない。

この状況は絶望的だった。

単純に戦う人数が減ってしまい、手札は数少ないものとなってしまった。

「はああああつ!!?」

その時、セイバーは構えた。

あの構えは宝具を放つ物だ。ライダー戦の時に見たそれと同じだった。あれならば、確かにバーサーカーの体を貫く事ができる。

……だが、それで本当に良いのだろうか？

今のセイバーは、魔力が少ない。宝具を使えるかどうかとも怪しいくらいに。撃てたとして、自身が消えかねない可能性もある。

つまりは、ほぼ捨て身の行為だ。

……あいつに消えて欲しくない。

ジアナさんはそれが最終手段だと言っていて、バーサーカーの最後の命を取るまでは、使う事を厳禁してほしいとも発言していた。

考えていると、やがて、セイバーを中心として、魔力の渦が出来ていた。それと同時に、あいつの魔力も減少していた。

このままでは、本当にセイバーが消えてしまうかもしれない。だが、俺にできる事はない……。

……あの夢で見た剣があれば。

ジアナさんにも、投影は今回無意味で、セイバーがピンチの時に令呪を使ってくれと、俺の役割はそれしかないと言われた。

……けれど、潜在能力があると言われた。

俺は役立たずなのか……

創太でさえ、バーサーカーと対峙したというのに。

……俺に、できないのか？

俺は……

「使うな、セイバー!!？」

左手の甲が赤く光る。

「な——どうして、もうこれしかないではないですか、シロウ……！」

いや、まだある。バーサーカーを倒す方法は残されている。

厳密に言えば、今は無い。これから創り出すのだから。

「っ……っ！」

剣を使っただけで、セイバーはふらつく。

その剣じゃ、今のお前には使えない。

だから、待ってる。俺が使える剣を用意してやる……！

「おおお!!？」

「イメージですか？」

ジアナさんに魔術を教わった時、俺は何がコツはないかと訊いた事がある。

その答えがイメージだった。

「はい。魔術に限った事ではありませんが、イメージというのは非常に重要なことです。

自身は何をするのかを頭の中で思い描き、それに沿って動いてみてください。ただぼんやりと考えるのではなく、確固とした想像を持つて。

貴方の場合は、剣ですね。構造をしつかりとイメージして、投影に挑みます。

まあ、私は、投影に限らず、身体強化以外の魔術は得意ではありませんので、あまり細かい事は教えられませんかね。」
最後は少し苦笑いをしながら、話していた。

イメージ……。

そうだ、イメージだ。

想像しろ。

幻想しろ。

自分が勝てるものを。

細部の一片まで、投影するんだ……！

「投影、開始。」

想像の理念を開始し、

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し、

制作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し、

あらゆる工程を凌駕し尽くし――

「く、あああああ!!?」

ここに、幻想を結び剣を成す――！

「■■■■■■――!!?」

黒い巨人は吠え、無数の斬撃を呼び起こす。

だが、俺は一撃もこぼすことなく防ぎきる。

いや、それをやりきったのは、俺じゃなく、

この手に握る黄金の剣だ。

先ほどもではなかったモノ。

しかし、今は質量をしつかりと持ち、現にバーサーカーの攻撃を弾いた。

まるで、自身の意思があるかのように。

「な——あの剣は、私の……!?」

呆然としたセイバーの声。

視線の先には、本来は存在しえない剣。

だが、俺はたった一度で、真に近い模造品を作り上げた。

今まで、そんな技量など無かったにも関わらずだ。

「っ……!」

だがそこまでだ。

黄金の剣は、俺に全てを託したかのように、敵の猛攻に弾かれる。

「は……あ……」

腕の感覚はぼぼ失い、手首が赤く膨れ上がる。

しかし、この手は剣を離していない。もう剣を振るうほどの力は

残っていないはずなのに。

創太は、魔術の強化があつたとはいえ、良く生身でこの攻撃を受け流したと思う。しかも、あいつは剣の補助なんてものは無かつた。

「■■■■■■——!!??」

バーサーカーは、動けない俺に、流星のごどき一撃を放つ。

お前は危険だ。自分を殺しえるほどに。

そんな目をしているかのようにだった。

「っ……」

動け、さもないと殺られる……!

バーサーカーを上回る剣は作れた。

なのに、この作る為だけの体では、黄金の剣を使いこなせない。

あともう一歩があれば……!

「シロウ、手を——!」

「え……?」

彼女の声が、最も近く聴こえる。

気づくとセイバーは、俺の手に自身の手を添えていた。俺の考えを汲み取ったかのように。

この黄金剣の持ち主は、俺を巻き込むように、身を返す。そして、敵の攻撃に対抗する、カウンターを放つ！

だが、そこには大きな問題が発生していた。

セイバーの動きに対して、俺の反応が遅れたという事だ。

よって俺たちの攻撃が届くよりも、バーサーカーのそれの方が速い事が、誰の目にも明らかだった。

俺のせいで負けるのか……

「そのまま、振り切れ！」

遠くにいる、誰かの声が聴こえる。それは馴染み深い声の一つだった。

答えは直ぐに判った。創太だ。

何故そんな事を言ったのか。

その答えも直ぐに解った。

目の前のバーサーカーが爆散したからだ。そのお陰で、敵の動きは一瞬硬直する。

「おおおおお!!??」

二つの声は一つになり、そこから黄金の一閃が産まれる!!??

光は、バーサーカーを飲み込み、体の奥深くまで食い込む。それは一時だけ。

やがて、黄金は消え、静寂が森を支配する。

巨影は動かない。まるで、命を亡くしたかのように。

いや、まだかもしれない。むしろ、まだ戦える可能性の方が高い。

セイバーも、まだ構えている。

緊張が、続く。

しかし、敵は全く動かない。もしかしたら……

「^{ナインライブズ}射殺す百頭!!？」

まだ、生きていた……！

俺もセイバーも反応できていなかった。

不動が、一瞬で神速に変わり連撃のような一撃が繰り出される。

俺たちには対抗する術はもうない。

反応すらできていなかったのだ。体を動かすのはもう遅い。

こんな状況でもはつきり解る。バーサーカーが放った攻撃は宝具だ。

生前に培った技術を駆使した宝具。狂化のせいで失われたと誰かが言っていたが、最後の最後に、使ってくるとは……！

先ほどの単なる力任せの連撃ではなく、洗練された一つ一つの斬撃が重なってできた技だ。

こんな物は、反応できたとしても、対処しきれない。

「くっ……！」

ダメだと解つていても、まだ方法はないかと模索し続ける。

体が動かないなら、他は無いか。

何か、何か……！

「……？」

来ると思っていた宝具はいつの間にか止まっていた。

何故だ、と理由を考えていると、ある一つの異変に気がついた。

バーサーカーの真ん中に一本の槍が刺さっていた。

巨人が握っていた大剣は、地面に落ち、重い音を鳴らす。

今度こそ……なのか？

「ここで終わりか……」

言葉と思えない声を上げていたバーサーカーが、口に出したのは敗北だった。

「それが貴様の剣か、セイバー。」

そして、己を倒した騎士も見据え、重い声でそう言った。

「これは勝利すべき黄金の剣……王を選定する岩の剣。永遠に失われた剣。」

「ですが——」

「今のは貴様の剣ではなからう。ソレはその男が作り上げた幻想に過ぎん。」

セイバーは静かに頷く。

「所詮はまがい物。二度とは存在せぬ剣だ。」

だが、しかし——」

バーサーカーの胸が開く。

「——その幻想も侮れぬ。よもやただの一撃で、この身を七度も滅ぼすとはな。」

「ですが、その一撃で斃し切れなかった事も事実。」

その通りだ。そもそも、創太の援護が無ければ当てることすらままならなかった。

「だとしても、貴様等は勝利した。」

弓兵が足止めし、あの男が我の隙を創り、貴様とその男が剣を振るい、背後にいる少女が最後の命を獲った。

それがこの戦いにおける事の顛末よ。」

最後の言葉を言い切り、狂戦士は大気に霧散していった。

|| || || ||

……終わった。戦いは終わった。

戦争自体はまだ続くが、峠は越えただろう。

最初から最後まで、冷や汗物だった。

足止めの時に、バーサーカーの体を貫通して、その中に魔術で布石を仕掛けといて本当に良かった。そうでなければ、動きを止めてバーサーカーの命をあの剣で七つ削れなかったからな。いやあ、バレるかなと思っただけで意外にバレないもんだな。

……オーバーキルした分の命が削れるとは予想外だったが。

あの剣といえば、セイバーは名前を『カリバーン』と呼んでいた。俺の知識としては、確か王を選ぶ一振り目の剣と言われているし、その王が持つ『エクスカリバー』という剣と同一の物だとも言われていた。史実は前者だったか。

だとすると、セイバーの真名は自ずと判る。

アーサー王。無敗の王と言われ、ブリテン島、現イギリスを統治していた人物。日本では誰もが知っている英雄だ。また、数多くの伝説も残している。

まあ、伝説が史実とは限らない。アーサー王って男の筈なのに、セイバーは女性だし。

話を戻そう。衛宮が投影した剣で斬りつけた後に、バーサーカーが狂化を解除して宝具を撃った時、心中では勝ったと確信していた。何故なら、ジアナが回復していたからだ。

そう、ジアナは背中に大怪我を負っていたのに、自力で治していた。あの状況では頭に血が回らなくなり、普通なら魔術を使えないが、あいつはそれをやってのけ、バーサーカーにトドメを刺した。

足止めの時に三回。俺の魔術で一回。あの黄金の剣で七回。ジアナのトドメで一回。計十二回か。

どうやら、イリヤスフィールは令呪とかで、命のストックを増やさ

なかったようだ。そうならなくて良かった。

「二人とも無事ですか。」

「私は平気です。それよりも、シロウが……」

ジアナはセイバーと衛宮の無事を確認する。セイバーは、ジアナが回復している事に疑問を全く抱かずに、衛宮の事を心配する。

衛宮は、力を使い果たしたのかセイバーに体を預けていた。

その手に黄金の剣はもう無い。

「シロウ君は大丈夫です。」

「ジアナ、何を見てその判断を……!」

「彼の体を見て判断しました。」

その事には疑っているセイバーは、衛宮の体を見直し

「これは……」

絶句した。

そりやそうだろう。傷があった場所は大量の刃によって塞がれていたのだから。

「後で説明します。それよりも……」

ジアナが振り向く。視線の先にあるのは一人の幼女。

「……」

「イリヤスフィール……!」

身構えるセイバー。

これから、何をするか。それがジアナの言いたい事だ。

本来ならば、令呪を再利用されない為に殺すべきだろう。だが……

舞い込む問題

これで何回目だろう。

また夢を見る。それは昔の記憶。

ちようど一年前、自宅でジアナと晩飯を食べていた時の事だ。

「なあ、ジアナ。」

「どうしました、ソウタ？」

俺は箸を止め、ジアナに話しかける。

「……九年前の聖杯戦争に似た物は、よく起こるのか？」

アレ、と口にした瞬間にジアナの眉間に皺が寄る。こいつもあの事は良く思っていないからだ。

だが、俺は訊かなくてはならない。そう思っていると、ジアナからも質問を出される。

「似た物とは、どこまでの範囲ですか？」

本来なら、質問を質問で返すなど言いたいところだが、そこは明確にしなければならぬ所なので、今回は言わない。

どこまで、か。結構難しい質問だ。その範囲つてのがどの部類を意味しているのかも、分からない。

「範囲じゃないが、魔術に関係した一般人の死という点でだ。」

だから、共通点を示す。

ジアナは少し考え込み、それならば、という言葉の後には説明を連ねる。

「聖杯戦争には多くの種類があります。その全てが、一般市民を巻き込む訳でもありません。」

しかし、貴方の言う共通点の事を考えると、この世界には、一般市民を実験材料にする魔術師もいます。そうでなくても、実験が失敗したり、力に溺れたりして、被害を及ぼす場合があります。」

「それ、おおよけになったりしないのか？」

「抑止力があるので心配はありません。ですが、被害がある事には変わりません。」

以上の事を考えて、貴方の質問の答えを出すならば、大なり小なり、

毎日起こっている事になります。」

「そう……なのか。」

毎日というのはかなりの頻度だ。平均して、という意味も含まれているのだろうが、一日一人以上というのはかなり多い。

「では、私からも質問を。」

ジアナから？

いや、驚く事でもないか。こんな質問を突発的にすれば、ほぼ確実に相手はある事を疑問に持つ。

「何故そのような質問をしたのですか？」

やはり、としか言いようが無い。

「あー、今日の放課後の時にな。衛宮と一緒に帰ってる時に、昔の話になつてさ。」

あいつが書いた作文で、将来の夢は正義の味方って事をいじってたんだけど、その後に、今はどうなんだって訊いてみたんだよ。

そしたら、あいつなんて言ったと思う？」

「昔と変わらないままだと思います。」

「おいこら、先に答えを言うなよ。」

こういう時は、問題を出した人に言わせるモンだぞ。

「はあ、ったく。」

無意識に溜め息が漏れる。だが、このまま文句を言っても、話が進まなくなるので、ここはグツと我慢しよう。

「あいつは、正義の味方っていう単語を使いしなかったけど、それに似た事が自分の夢だと言って言ったんだ。」

俺、そんな時思ってたんだよ。こんなに真っ直ぐ、自分のなりたい事を言えるなんて、凄いなって。

なんとというか……心に響いたんだ。」

衛宮は、あの大災害の被害者だ。誰かを救いたいという気持ちは人一倍強い。

俺もそうだが、今一步踏み出せないでいた。

「ですが、それは歪んだ物です。貴方も判っている事でしょう。」
「それでもだ。俺には曲がっているように、とても見えなかった。」

だからさ、

俺もそんな奴になつてみたいとも、思つたんだ。」

――2月9日――

目を開き、和風の天井が見える。見慣れてきた風景だ。

それよりも、気になる事がある。夢の事だ。

あの日は、魔術を教わる最初の日でもあつた。

何故夢に出てきたのかは分からない。けれども、それによつて、考えさせられる事があつた。

あれから一年、俺は何が変わつたのだろうか。

強くなつた？確かにそうかもしれない。けれども、足りない、俺の目指す物には到底だ。

更に、今この地で起こっている物は、下手をすれば十年前のような事になる。強くなる時間なんて物はもう無い。

昨日のバーサーカーとの戦いで、俺は何ができたのだろうか。何回か攻撃を入れたかもしれないが、ほとんど捨て身だ。アーチャーがいなければ、死んでいた。

俺ができる事は一体……。

「ソウタ、起きていますか？」

声がある方を見てみると、ジアナが襖を開ける姿があつた。

その後、正座をして、俺の顔をマジマジと見てくる。まるで何か異変でもあつたかのように。

「……ジアナ？」

「何か悪い事でもありましたか？」

まるで、では無かつた。こいつは気づいたんだ、俺の心境に。

「ねえよ、そんなモン。」

そして、反射的に嘘をつく。ただこの戦いから外される事を恐れた一心から。

ジアナは怪しみながらも、仕方無しという顔を浮かべる。

「そうですか。なら、構いません。」

今から朝食の用意をします。昨日は何も食べなかつたので、今日は、多めに作ります。シロウ君には、あまり負担を掛けられませんので私が料理します。貴方も手伝ってください。」

「俺も頑張ったぞ。なのに、負担を掛けるのか？」

「シロウ君の方が功績は上です。」

「ひでえ。」

これが実力主義ってやつか。(違う)

「飯か、そういえば食って無いな。」

昨日は、帰ってきた時間が午後で、その後ほぼ全員が寝てしまった。疲労が溜まっていたのだろう。だから、飯を食う暇なんて物はなかった。

なんて事を考え出すと、腹の虫がうるさくなり始めてきた。さつさと飯の用意をして、腹ごしらえをしよう。

と思っていたら、材料が足りませんでしたよチクショーめ。

衛宮も同じ時間に起きていて、冷蔵庫の中身を見たら買ってこようかと聞いていた。だが俺が断り、代わりに行ってくると言っておいた。

そして現在、商店街で買い物を終えたところだ。後は、荷物を家に届けるだけ。

「……あれ、間桐？」

「古崖先輩？」

と思っていたら、意外な人物に出会った。

「こんな所で、会うなんて奇遇だな。大丈夫なのか、お前。学校ではあんな事があつたのに。」

「兄さんに学校へは行くなと散々言われたので。そうしたら、皆さんが倒れたという事を聞きました。」

ワカメが？

いやまあ、許されざる事をしたとは言え、流石に身内を見捨てるほ

ど堕ちた訳ではなかったのか。

「古崖先輩は、どうして無事だったんですか？」

「あー、俺はあれだよ。その時は早退してたんだよ。体調が悪くてよ。」

咄嗟に嘘をつく。間桐は、学校に居なかったみたいだし、何を言っても突き通せるだろう。

「……そういえば、お前の兄貴は？」

ふと思った。あいつの行方がどうなったのかを。

バーサーカーから救いはしたものの、その後のワカメは判らない。

「休校の日から、家に帰らなくなりました。音沙汰も全くです。」

「そうか。」

という事は、教会に行ったのか？あそこは一応、脱落者保護施設だ。あいつもそれを知ってる筈だし、逃げ込むとしたらそこだろう。

「心配だな。こここの所、本当に物騒だし。」

「はい、古崖先輩も気をつけ……て……」

「っ！おい、間桐！」

それは急な出来事だった。目の前で喋っていた間桐が倒れる。

「大丈夫か!?？」

驚いた俺は安否の確認すべく、呼びかける。

「は、はい。最近よく目眩がするだけです……」

「それは大丈夫じゃねえだろ！」

無意識に魔術を使い、間桐の身体を調べる。すると、心臓のあたりに、別の生命体がいる事が分かった。以前、遠坂に言っていた物だ。それはまるで、寄生虫のように間桐の体に巢食っている。

しかし、様子がおかしい。間桐が倒れた原因はその生命体で間違いなのだが、生命体は間桐を蝕んでいる訳でもなく、むしろ、苦しんでいるように見えた。

更には見覚えがある物まであったような。

「……で考えても仕方ないか。間桐、ちよつと我慢しろよ。」

「えっ……っ？」

そんな間の抜けた返事を無視しながらも、間桐を背負う。

俺一人では答えが出てこないと判断し、こいつを連れて帰ることにした。

「ちよ、ちよつと待つてくだ……」

「揺れるから、出来るだけ掴まっててくれよ。」

反論も聞かずに走り出す。

背中に柔らかい物があるが気にしない。俺はこれ以上の物を毎日見せられたりしてるから、動揺してたまるか。動揺して……いや、考えないでおこう。

とにかく、衛宮の家だ。さっさと帰ろう。

「おい、誰か！」

衛宮邸に着いたいなや、玄関の扉を勢いよく開け増援を呼ぶ。

すると、その声に反応した人物が走ってくる。その人物とは……

「どうしましたか！」

ジアナだった。掛かった時間は一秒も無いだろう。

「実は、こいつが急に倒れたんだ。」

「……桜？」

「ああ、だから先ずは」

寝かせないと。

そう言おうとした時、複数の足音が聞こえ始め、徐々に大きくなっていく。

多分、残りの三人だろう。

「どうしたんだ、創太！」

「問題でもありましたか！」

「何が……！」

衛宮とセイバーが叫んだあと、遠坂は目を見開きながら俺が背負っている人物を凝視する。前にも思ったが、こいつは間桐に何か言いたい事でもあるのだろうか。

「話は後です。今はこいつの寝場所を確保させてくれ。」

俺が言った通り、今は行動が先だ。遠坂の意見は後で聞こう。

衛宮に空き部屋がどこにあるかを聞き、間桐をそこへ運ぶ。ジアナ

にもついてきてもらっている。間桐の症状を調べる為だ。

「ソウタ、一体何があったのか説明くらい……」

「まずは、こいつの身体を調べてくれ。頼む。」

間桐をベッドに寝かせたながら、ジアナにこいつを検査する事を催促する。

俺ができれば良かったのだが、あいにくこういうのは俺よりもジアナが優れている。例え、本人が身体強化系の魔術だけが、得意だと自負していても。

「……分かりました。桜の状態を調べれば良いのですね。」

「悪い。けどジアナしか頼めないんだ。」

「良いんですよ。誰かを助けるのは嫌いではありません。」

本当に助かる。

何も言わずでは無いが、なんだかんだ言って一番頼れる存在だ。

と心の中でジアナを褒めていたら、その本人はもう準備をし始めたようだ。

フォース・チェンジ
「性質変化。」

そして、俺自身が唱え慣れた呪文を口にする。ジアナは相当集中しているのか、それ以降一切喋らなくなった。

待つ事数分。ようやくジアナ医師は言葉を発する。

「これは……」

どうやらあれを見つけたようだ。と言ってもあれは二つあるので、どちらを見つけたのかは判らないが、聞いてみる他ないだろう。

「見たか？」

「ええ。彼女の心臓に取りつく寄生虫と、それに書かれてある魔術式を。」

答えはどちらもなかったか。まあ、俺が発見できたのだから、ジアナに発見できない訳がない。

「それで、一番の問題は寄生虫なんだが……個人的に気になるのは魔術式の方だ。なんか見覚えがある気がしてならない。」

ジアナ、なにかは判るか？」

「これは古崖家の魔術本に記載されている物と似ていますね。貴方の

既視感は、そこからくるものでしょう。」

そうか、あれは古崖家の物だったか。通りで見た事ある筈だ。

「なんで、それが寄生虫に？」

「分かりません。ただ、術式の効果ならなんとか。」

「聞かせてもらえるか？」

「ええ。これは何かしらを強制的に発動させる効果と一時的に遅らせる効果です。」

「その何かしらってのはなんだ。」

「私にも、そこまでは……」

ジアナは首を横に振る。解析は無理だという意だろう。

「なら仕方ない。」

でもよ。それは古崖家のモンなんだろう？ だったら、身内の誰かが施したっていうことになるが。」

「真似たという可能性も無くはありません。ですが、あのお二方が一番に容疑者として考えられます。」

あのお二方、それは俺の両親のことであろう。身内でこの冬木市に来たのは両親と叔父ぐらいだし、滞在期間に関しては両親のほうが長い。だとしたら、何故そんな事をしたのだろうか。

「しかし、最も重要視すべき問題は、寄生虫の方ではないかと。」

「あー……まあそうだな。」

俺の疑問は解決しないまま、次へと話が進む。

確かにジアナの言う事は、間違いない。しかし、何かが俺の中で引っかかる。何か……

いや、考えても仕方ないか。俺一人が思いつくことなんてたかが知れている。

「寄生虫の方、だったな。それは、多分あれだろうな。」

「ええ、間桐の魔術でしょうね。」

間桐の魔術、それは虫による支配だ。これだけだと、少し語弊がある言い方だが、平たくすれば大体そんな感じだ。

「まさかあいつの言っていた事が全部嘘だったとはな。」

「あいつとは、慎二のことですね。」

ジアナの言葉に、ああという相槌を打つ。

「とにかく原因は判明しました。正直なところ、今は手を尽くせません。幸いにもまだ事が悪化する事はありませんので、対策すると共に一度彼らに報告しましょう。」

それに、何も説明しなかった謝罪をしないといけません。」

最後の言葉を口にすると同時に、半目で睨んでくる。

「うっ……」

いやまあ、悪かったよ、ほんとに。何の連絡も相談も無しに問題を
持ち込んだ事は。

「すみませんでした。」

「その謝罪は彼らにしてください。」

はい。全くのその通りです。

協定の期限

ひとまず間桐を介抱し、検査を行った俺とジアナは、その結果を報告しようとして、居間に向かい襖を開ければ、そこはカオスだった。

「……こつちもこつちで問題発生か。」

問題、それはイリヤスフィールの存在だった。彼女の目が覚めた事で、事態が加速したようだ。さらには衛宮に抱きついたり、ホールドネットクをしたりしたらしいが、それは別の話。

昨日、無理矢理家に連れて来たのだが、この後どうするかについて揉めているようだ。

片や遠坂とセイバーはさっさと、教会なり、自分の城なり、とにかくここには無いところへ追い出した方がいいと言っている。元々敵だし、戦争の参加証である令呪も持っているからだろう。

片や衛宮は、教会も城も危険だから家で匿いたい、と言っている。親戚だと知ってしまった以上、他人とは思えないものもあるだろうが、それとは関係なく、衛宮自身の性格からそう言っているのだろう。

「シロウ、彼女は敵です。今はサーヴァントを持っていませんが、いずれ引き連れてくるかもしれません！」

「セイバーの言う通りよ。それに、家に居させたら寝首をかかれるかもしれないのよ。」

「そんなこと言ったってイリヤはまだ子供だ。放って置くなんてそんなことできない。」

と、こんな風に互いが平行線を辿っている。このままでは、日が沈んでさらに夜が明けるまで続きそうな雰囲気だ。

意味は無いが、一応本人の希望を訊いてみると

「私はシロウと一緒に良い。」

との事。

やはり大判焼きで餌付けられたようだ。あれだけではないだろうが、最初の切っ掛けではあるだろう。

さて、こんな時にどうすればいいのか。一番良いのは二人とも納得させる、つまり妥協点を提案する事だ。

しかし、一方は家に居させる事、一方は外に出す事の一点張りだ。その中間となると一体なんだ？家に居させる時間を決めて、それ以外は外に出させるのか？なんか違う気がするな。

「彼女をどうするかを決める前に一つ良いですか？」

と、考えていたらジアナが話の腰を折るような発言をする。

その言葉によって、全員の視線が集まる。

「本当ならば、もっと早く言って置くべきでしたが……凜。」

集まった視線は遠坂に移る。

「貴女はいつまでここに居るつもりですか。」

「っ……。」

殺気が込められた言い方。つまりは敵なんだから出て行けと言いたいのだろう。

遠坂は、向けられた殺気に一瞬怯んだかのように見えた。

「ジ、ジアナさん？なんでそんな……」

「そうでしたね。凜、休戦期間はとつくに切れている筈ですが？」

周りは一触即発の空気が変わる。

期間というのは、確かバーサーカーを倒すまでと言っていた。であれば、もう協力する必要はもうない。

つまりは自陣に敵が攻め込んでいるようなものだ。むしろ、よく遠坂は今まで居座り続けたと思う。寝首をかかれる事は無いと踏んだのか、あるいはそれをこちらにしようとしたのか。どちらにしても、こいつには出て行ってもらわなくては困る。

「……分かったわ。今すぐにここから出て行く。」

けど、戦闘をする気はないから後ろから奇襲なんて真似はしないでちょうだい。」

すんなりと承諾した遠坂は、玄関からアーチャーと部屋の物を引き連れて去っていき、その姿を全員が見送るように確認した。

その後は中へと戻っていったのだが、衛宮だけは、まだ戦いたくないと思っっているのか、納得しきれないような顔付きで遠坂の背中

を門前でずっと見ていた。

「で、何の話だったけ？」

だが、議題を解決しなければならぬ。衛宮の覚悟が足りないの何のは関係ない。

居間は、再び口論が飛び交う場所となる。

「イリヤスフィールを教会に保護させる話です。」

「それは、セイバーの意見じゃねえか。」

まあ、そのお陰で何が問題だったのかは思い出した。

「イリヤスフィールをどうするか、だったな。」

「私を忘れるなんて、いい度胸ね。」

その場にいる全員が、問題の起因に注目する。

「はいはい悪うございました。」

「ちよつと、それ全然謝ってないでしょ。」

幼女が頬を膨らませて、カワイイ。じゃなくてもどうでもいい。

「……で、ここに居させる事と追い出す事以外に何か意見は無いのか？」

問いを投げかけるが、答えはない。つまりは他には無いのだろう。

「じゃあ、一旦多数決を取るか。別に今多い方で決まる訳じゃないし、誰がどっちの意見かっていうのを確認するだけだから。」

イリヤスフィールを追い出す事に賛成の奴は挙手。」

俺の問いにセイバー一人だけが手を挙げる。という事は、俺を含めての三人の意見が同一だと決定された。

「……一応聞いとく。居させる事に賛成の奴は？」

今度はセイバー以外の三人が手を挙げる。

「な……！何故ですか、ジアナ！貴女だけは理解していると思っただのに！」

セイバーは机に手を叩きつけそうな勢いで、ジアナに反論する。

「たしかに彼女をここに置いておくのは危険かもしれませんが、です。目の届かない所へ放っておく事の方が返って危険です。」

それに、彼女は聖杯です。他人が使えば、一般人に危険が及ぶ可能性があります。」

「それならば、教会に保護させるべきです。いくらあの神父の性格が悪いとしても、役割は果たすでしょう。」

「悪い、のではなく歪んでいるのです。」

「歪んでいる……?」

「今まで凜がいたので言いませんでしたが、あの神父は前回の聖杯戦争でかなり悪質な事をしてきました。」

遠坂がいたら何故言えなかったのか、それは信用の問題だ。

俺たちが言峰に関して何かしらを言ったとしても、遠坂からしてみれば場を引つ掻き回そうとしてるようにはしか見えない。例え言峰の普段の行いがどうであろうとだ。

「詳細は省きますが、とにかくあの神父に預けるのは反対です。」

更に、イリヤスフィールは聖杯であり、それが他人に渡れば悪用される可能性があります。」

「ですが……」

と、まだ反論しようとするセイバーに、ジアナが手招きをして、耳を貸せという手振りをする。

なにか、大きな声で言えない何かを言うつもりだらうが、俺はジアナの隣なので丸わかりである。

「あの子はアイリスフィールの娘ですよ。同じ態度を、とは言いませんが、それでも冷遇にするのは良くないでしょう。」

あー、これは聞かれても構わないと言えば構わないが、困るものだ、色々と。

それを聞かされたセイバーはうーんと頭を抱え込んだあと、

「良いでしょう。」

と、了承。これで満場一致になったわけだ。

「やったー！これでお兄ちゃんと一緒に寝られるよ！」

「うわ！ちよ、イリヤ!?」

「な……、それとこれとは話が別です！」

だが、問題は更に増えそう。

「一度落ち着いたな？」

衛宮を取り合う騒動は一旦沈黙化した。そろそろ間桐の事を話さなくてはならない。

「なら、次はこっちの問題だ。」

と言った後に、俺は何があつたのかを順に説明をした。商店街で間桐に出会い、そして、つい先ほどのジアナの検査の結果までの全てをだ。

「そんな事が……。」

ジアナさん、桜は大丈夫なんですか。」

「今はまだ、としか言いようがありません。解決法もまだ分かりませんので、下手に手出しすると悪化する恐れもあります。」

「誰がやったのかは分かってるんだろ。だったら……！」

「その誰かは、今間桐の中にいるんだ。けど、すでにあいつの心臓と一体化してるような物だ。それを潰してみろ、あいつを殺す事になるぞ。」

俺の反論によつて、衛宮は喉に何か詰まったように、それ以上はなにも言つてこなかった。

その誰か、つまり臓硯を殺すには間桐の心臓と一緒に潰さなくてはならない。間桐を救いたいと思う衛宮には悪いけど、思いつく手段は何も無い。

「一つ、方法はありません。」

「……えっ？」

「聖杯を使う事です。それならば、サクラを助けられるでしょう。」

確かに。ジアナの言っている方法ならば、可能だろう。

しかし、しかしだ。衛宮はイリヤスフィールを見つめていた。俺が以前に、聖杯をこいつに使えば助けられると言つてしまったのを思い出しているのだろう。

「もしそうしたとして……他の願いを聞き入れる余裕はあるんですか。」

「はつきりとは分かりません。」

聖杯がどれだけの力を持っているかは、この場の誰も知らない。少

なくとも、街一つを焼き尽くすほどの力を持つことは確かだ。

「しかし、貴方が何を願うのかは尋ねませんが、どちらを優先させるかぐらいは決めておいてください。」

叶えられる願いには、上限がありますので。」

「……はい。」

衛宮は何か悲しそうな顔で返事をする。

「次の話に移っていいか？現状あいつには何もしてやれないし、どちらにしろ、お前はこの戦争を勝ち抜かなくちゃならないんだ。」

厳しいと思うだろうが、聖杯を悪用されてしまえば、それで全て終わりだ。だから衛宮には、戦いに集中してほしい。衛宮自身のためにも。

「理解したな？なら、それぞれの戦力確認をしよう。まずは、俺たちのところからだ。」

その後は、セイバーがアーサー王だった事を知ったり、アーチャーが衛宮と同じ投影魔術を使うという情報を共有したりと、色々話し合った。

しかし、そこまではあくまでも再確認のようなものだ。大体は、互いに察しがついている。ここからは、新たなに動いた戦況について話すつもりだ。

「次は兄間桐の事だが、妹から聞いた話だと行方不明なんだと。衛宮達がライダーを倒した日から、そうらしい。」

「教会に行ったんじゃないか？慎二もあそこがマスター保護施設だった事は知ってる筈だ。」

「その可能性が一番高い。けど、ヤバイ事になるかもしれないぞ。」

「どういう意味だ？」

「あいつは前からムカつく奴だったが、この聖杯戦争が始まってから何かと暴走気味だ。そしてジアナも言った通り、あそこには悪徳神父がいる。」

そんな二人が出会ったら、どんな事になるか。更に間桐はお前に恨みを持っている筈だ。

つまりはお前に復讐、もとい逆ギレをするかもしれない。あいつが

行動を起こすかどうかは不確定だが、もしそうなら、さっき言った事をいの一番に実行するだろう。」

ただの推測にしか過ぎないだろうが、どうなるか予測がつくのは難しい。

「だから、今いる敵はまだ四組いると思え。それ以上も可能性としては無くはないが、正体が判明しているのは四組だ。」

「ああ、分かった。」

一応補足しておく、四組というのは、アーチャー組とランサー組とキャスター組とワカメ組の事だ。

「ねえ。それよりも、お腹空いちやっつた。早く朝食にしましょう?」

と、我慢できなくなった幼女が食事の提案をいだした。

確かにとは思ったものの、俺はある事を思い出す。

「えっと、俺が運んできた食料は?」

「もう冷蔵庫の中に入れてある。」

「そうか、悪いな。」

なんだ、もう移動させてたのか。

あの時は、ドタバタしていてここに持つてくるまではした。しかし、その後は放棄して、妹間桐の事を優先してしまったから、食料がどうなっているのかは分からなかった。

「……おい、衛宮。なんで台所に行こうとしてんだ?」

「え?」

「え、じゃないんだよ。さっさと戻れ。食事は俺とジアナで用意するから。」

「けど——」

「けども何もない。昨日の功労者は休むべきだ。な?」

「……分かったよ。」

納得したか。正直言つて、こう簡単にはいかないと思っていたが、案外素直に従ってくれた。毎回こうだといいいのだが。

「ふっ!」

「はああ……！」

場所と時間は打って変わり、全員の食事が終わった後の道場だ。いやー。しっかし、セイバーとジアナはよく食べてたな。セイバーはいいとして、ジアナはここ最近、普段の三倍ぐらい食べている気がする。体力を使っているからだろうが、それにしても食べ過ぎだ。

……太るとか、そういう言葉は言わない方が良いのだろうか。まあ、それはどうでもよくて、今の状況を説明しよう。

今は道場内に竹刀の乾いた音が、連続して響き渡る。セイバーと衛宮の修行が行われているからだ。

セイバーとしては、バーサーカーを倒したのだからやる意味は無いのでは、と言った。しかし、衛宮は、日課でもあるし何より未熟であるから、と続けるようにした。

それを始める前に色々と揉めていたようだが、まあそれは良いのだ。だが、俺はある事がどうしても気になってしまう。

横でプルプルと震えている幼女の事が。

「うう……寒い。」

そりやそうだよな。こんな道場の中でずっと座ってるだけなんて、地獄に近いようなものだ。

俺？俺は逆立ち腕立てやってるから寒いとか関係ないし。

しかし、流石に防寒具の一つも無しに震えているのは、少し可哀想だ。こいつが、前に着ていたコートもないし。ならば、あれの出番だろう。

「ほらよ。」

「……う？なにこれ。」

俺は筋トレをやめてポケットから出したあるものをイリヤスフィールに渡す。

「カイロだ。もうちよつと待てば、温かくなるはずだ。」

「……あ、本当だ。」

実家から送られてきた即効性のカイロだ。実験の副産物ではあるが、あくまでも魔術の類ではないらしい。あそこは何やってんだろう。

「けど、手だけしか温められないよ。」

欲張りな奴め。けれど、確かにそれは思う。一点にしか効果がないのは欠点だ。

「仕方ないな。ちよつとそれ貸してくれ。」

ならば、熱を全体に広げればいい。その分効果が薄くなるが、熱の発生量を上れば問題ない。

フォース・チェンジ
「性質変化。……これでいいだろう。」

再び、イリヤスフィールにカイロを渡す。

「すごい……さつきよりも温かい。一体どうやって？そんな魔術見たことない。」

「企業秘密だ。」

やった事自体は単純だがな。カイロを中心として、ある一定の範囲内に、熱を均等化させているだけだ。代償として、カイロが熱を発生させる時間が通常よりもかなり短くなっている。多分、二時間ぐらいしか保たないだろう。

「貴方……ソウタだったかしら？」

「やつとこさ名前を覚えておいてくれたか。」

「貴方の情報なんて一切無かったのよ。そんな器用な事ができるのにな。」

それはジアナさんのお陰じゃな。ありがたやーありがたやー。

「はあっ……はあっ……。」

「シロウ、そろそろ休憩を挟みましょう。」

イリヤスフィールと会話をしていたら、衛宮の体力が尽きたようだ。

「向こうは一休みするみたいだな。イリヤスフィール、その話は後でだ。」

「どうするのかしら？」

「選手交代するだけだ。セイバー、一戦だけ頼めるか？」

「ええ、良いでしょう。」

衛宮は試合場から出て、代わりに俺がセイバーと対峙する。

「前はほとんど素の身体能力で戦ったが、今回は力を全開にして戦う

つもりだからな。」

「なんだよそれ。前は本気じゃなかったのか？」

「いいや、とは言いがたいが、前とは違う戦法を試すだけだ。あれは、俺の読みを試したかっただけだ。」

セイバー以外の二人は、不思議そうな顔をしている。

無理もないだろう。だがやる事は、ジアナが普段してる事と変わりはない。二人にとって初見ではないのだ。

「何秒でしょうか？」

理解しているセイバーは、俺が言おうとしていた事の先を読み取る。

「俺としては、体力を残したいから、五秒だ。本当ならもう少し伸ばせるが……すまないな。」

「いいえ、構いません。むしろ、その方が良いでしょう。敵と戦う余力はいつも残しておいてください。」

にしては、衛宮に対して馬鹿みたいにシゴいてるような……やめておこう。

俺の力は信用されている。そう解釈しよう。本当は弱いのに。

「それじゃあ、始めるか。五秒だからな。それ以上は勘弁だ。」

そう言つて、無駄な感覚を全て切り捨てる。

切り捨てた物は必要な部分に創り変える。魔力は身体能力に。耐久力や体力と言った物も、筋力や瞬発力に変える。

防御的な意味を持つ力や持久力を、全て攻撃的な力に創り変える。

そうする事によつて、俺の身体は

フォース・チェンジ
「性質変化。」

一時的に、英霊以上の物に創られる。

奪取と後退

道場での特訓から時間は進み、すでに日が沈んだ後になる。晩飯を済ませた俺達は、今夜どう動くかを議論していた。遠坂は朝に出て行ったので、いるのは俺とジアナ、衛宮、セイバー、イリヤスフィールの五人だ。

内容としては、最初にイリヤスフィールが、あくまでも戦う気はないように、戦力としては考えないように、と言っていた。

それ自体に誰も文句を言わなかった。しかし、何処に行くかが問題だった。

「やはり、キャスターのマスターを探すべきではないでしょうか。彼女が、柳洞寺に拠点を置いている事は明確です。」

「俺もジアナの言う通りだと思う。ランサーのマスターは分かっているんだ。となると後は、その情報を集めるのが得策だ。」

ランサーのマスターが言峰という事は、すでに衛宮達には伝えてある。となると、不明のマスターはキャスターのソレだけだ。

「そうするべきなんだろうけど、目星はついてるのか?」

「こんなの誰でもつくだろう。あいつは柳洞寺に巣食ってる。しかも、マスターからはあまり離れられないから、あそこに必ず居るはずなんだ。」

あれ程の魔力を持つキャスターならば、マスターを洗脳するなんて事、造作も無い。

けれども、依り代という存在は必要だ。それゆえに、マスターを目的の行き届く範囲に置いておくという事はしてあるはず。となれば、捜索範囲は自然と狭まる。

「だから、今夜はあの寺を探るべきだ。」

「私もその意見には賛成です。シロウ、貴方はどうします?」

セイバーが、衛宮に意見を聞くと、全員の視線が集まる。その本人はうーん、と唸りながら悩んだ後に結論を出す。

「分かった、それでいこう。」

「よし、じゃあ次はどう入るかだが……」

と、次の議題に移ろうとした時、照明が消えた。

「……！来ます、サーヴァントです！」

セイバーの声と共に、全員が臨戦態勢に入る。その次の瞬間には、外側の障子と窓ガラスが破られ、大勢の骸骨が侵入してくる。

いや、骸骨にしてはおかしい。頭の部分が口だけだからだ。そんなのは些細な違いかもしれないが、その違和感がどうしても頭に残ってしまった。

「シロウ君は下がってください！この程度ならセイバーだけでも対応できます！」

ジアナの指示に、衛宮はコクリと頷き、その通りに部屋の奥へと移動する。

セイバーは、骸骨を難なく薙ぎ払っていく。これならば、俺達の援護は必要ないな。

だが変だ。こんな事をしてきた犯人はすでに分かっている。先ほどまで議題に挙がっていたキャスターだ。これほどの骸骨を動かすには、魔術の技術が相当ないと無理だ。

しかし何故、セイバーが簡単に倒せる雑魚を使つて襲撃を掛けてきたのか。あいつは間違つてもバカな事はしない奴だとは思うのだが。「ここで、応戦していてもキリがありません。元を叩かなければ、消耗するだけ。ですから、私は外へ出ます。倒し損ねた敵は、ジアナに任せます。」

「ええ、分かりました。」

その会話の後に、セイバーはマスターの意見を聞かないまま、外へと飛び出していく。残ったジアナは、俺達に指示を出す。

「ソウタ、凍結魔術で足止めを。敵を確実に倒しながら進みます。シロウ君も、投影魔術で援護してください。ただし、昨日のような剣は使わないように。」

俺達二人は、それぞれ了解の意を込めて返事をして、指示通りのことをこなす。

ジアナが俺に凍結魔術で、と言ったのは床が畳で、土を使う事が出来ないからだ。

さらに、氷魔術とあえて言わなかった理由は、厳密には違うからだ。あくまでも、氷を作るのではなく、温度を低下させて、気体を固体にする魔術が、俺が今から使う魔術だ。

次に、衛宮に対して言った剣というのは、『カリバーン』の事だろう。あれを作るにはかなりの魔力を使う筈だ。本人は、そんな事もないと言っていたが、それにしてもあの剣は、衛宮には身の丈の合わないもの。それ故、多用するのは危険だ。

「……嫌な予感がする。」

ふと、衛宮が俺にしか聞こえないような小声で何かを言い出した。

「おい、衛宮?」

「セイバーが危ない!」

「士郎くん!?!? 待ってください!」

ジアナの制止を無視して、セイバーの後を追う衛宮。

一体、何の勘が働いたんだ? 令呪を通してセイバーの危機を察知した訳でもないのに、あんな鬼の形相で飛び出すなんて、意味がわからない。

「ソウタ、今すぐ彼を追いかけますよ!」

「俺はいいが、イリヤスフィールはどうするんだ?」

「その心配はありません。何故かは分かりませんが、セイバーが出て行った時から、敵は中に入ってきていません。」

そう言えば、敵の骸骨はもう姿を現さなくなった。衛宮はこの事から勘付いたのか?

「分かった。なら、早く行こう。」

俺が了解すると、ジアナは後を着いてくるようにと言い、外へと出る。俺も指示通りに動き、そして、状況を把握すると、大量にいる骸骨の奥で、すでにセイバーがキャスターにトドメの一撃を放とうとしていた。

いや、トドメの一撃というのは語弊がある言い方だ。なぜなら、キャスターの体には傷の一つも無く、セイバーのその攻撃は一度目だからだ。

しかし、それでもセイバーの一閃はキャスターが反応できないもの

だ。

けれども、何故だ？何故拭い切れない不安感が生まれてくるんだ？何故キヤスターはあんなにも不敵に笑っていられるんだ？

その訳が、今やつと理解できた。キヤスターの懐にある何かの所為だ。

その何かは、明確に判明はできない。しかし、それをセイバーが受けてはならないという事だけは判明している。

「っ……セイ……っ！」

俺と同じように危機を察した衛宮は、令呪を使おうとして、叫ぶ。しかし、その声は途切れてしまった。

そりやそうだろう。俺も驚きで声が出ない。なぜなら、

俺より少し後に出て行つたジアナが、すでにセイバーの横にいるのだから。

「はあああっ！」

「っ……っ！」

ジアナの蹴りにより、セイバーの体は流れ、結果キヤスターが描く策の通りにはならなかった。

「ひとまずは……っ！」

ひとまずは、安心だ。そう言おうとした瞬間に、また新たな一難が降りかかる。

セイバーの吹っ飛ばされた先にいる骸骨が、何かを突き刺そうしている！

その何かは、奇妙な形をした短剣だ。恐らくだが、先程までキヤスターが持っていたものだろう。複数あるものなのか、特殊な方法で骸骨に持たせたのかは分からないが、放っておくのは危険だ。

セイバーの体制は崩れている。立て直しかけてはいるが、あれでは間に合わない！

ジアナには任せられない。あんな事をした後に、すぐに次の行動へと移れるはずがない。

衛宮に令呪を使わせるか？駄目だ。そんな事をしてたら、時間がすぐに経つ。衛宮自身もまだ何も気づいていないのだから、なおさら

だ。

ならば、俺自身がやるしかない！

フォース・チェンジ
「性質変化。」

その言葉とともに、自身の中にある魔力に似た何か、体の外で形どる。

衛宮の投影魔術に似ているように見えるだろうが、やっている事は全く違う。事前に物体を魔力に似た何かへと変換した物を、自分の内から取り出しているに過ぎない。

取り出す物は、ただの直剣だ。術式を仕込んだものでもなく、本当になんの変哲もない剣だ。色々と特殊効果がある物は、俺の許容値キャパシティを超えてしまう。

剣を取り出すのに一秒。自己最速記録ではあるが、ガッツポーズは後だ。手の平に剣が浮かび、切っ先は標的に向いている。

「間に合ってくれよ。射出！シュート」

俺の声と共に、剣は寸分の狂いもなく骸骨へと突き刺さろうとする。しかし、敵の攻撃の前に俺の剣が届くかは、判断がつかない。頼む、頼むから……！

「っ……。」

結果から言えば、俺の攻撃は敵の体をバラバラにした。けれども、けれどもだ。

セイバーの背中には、あの奇妙な短剣が刺さっていた。

そして、あの短剣の正体がやっとわかった。あれは、魔術を無効にする物だ。殺傷力は無いもの、魔術には絶大な効果を発揮する。

「おい、衛宮。令呪はどうなってる。」

「……。」

恐る恐ると、衛宮は左手の甲を見る。本人も何が起こっているのか、理解しているのだろうか。

俺たち二人の視線には、かすかに残っている令呪があった。かつての血のような赤色はなく、マスターの資格はあっても、サーヴァントを持たない事を意味していた。

「ふっふっふっ、あっはっはっはっ！

まんまと引つかかりましたね。その彼女のせいで、一回目は必ず避けられると踏んでおいて正解でした。」

隙を生じぬ二段構えってか。うるせえんだよ。

セイバーの方へ振り返り、状況を確認する。予感が正しければ、正しければ、だ。

「逃げ……。」

「っ！」

ジアナがセイバーの攻撃を避ける。セイバーは懇願するように逃げてと言った。あいつはもうすでにキャスターの支配下だ。

「ソウタ、士郎君！今すぐここから逃げてください！」

「けど、セイバーが……！」

「馬鹿！今はそんな事言ってる場合じゃねえだろ！」

いいか、この状況からセイバーを確実に取り返す方法なんてものはない。一旦引いて我慢するしかねえんだ。

分かったら、さっさとイリヤスフィールも連れて逃げるぞ！」

早口で衛宮の意見を押し返したあと、イリヤスフィールを回収すべく、家の中へと戻る。

「おい、イリヤスフィール！逃げるぞ！」

「え？いきな……。」

「理由は後だ！衛宮、こいつを運んでくれ。」

「あ……ああ、分かった。」

イリヤ、ちよつとだけ我慢してくれ。な？」

衛宮はイリヤスフィールをお姫様抱っこで持ち上げる。それをされている幼女の方を見ると、少し恥ずかしそうだ。

「とりあえず、俺の家に来るんだ。場所はわかってるな？」

俺の質問に、衛宮が頷いた事を確認して、居間から玄関へと走り、勢いよく外へ飛び出す。

その際に、横目でジアナとセイバーを見る。ジアナは完全に防戦一方で、セイバーはぎこちない動きながらも猛攻を繰り返している。

ジアナには悪いが、今は時間稼ぎをしてもらおう。あいつには後で連絡もできる。だから、俺たちがやるべき事はこの場を離れること

だ。目的の場所を、俺の家とは言ったものの、本当はどこでも良かった。

「……っ！創太！」

衛宮が叫ぶと同時に、俺に危険が迫っていることに気がつく。

目を前にやれば、骸骨が俺に襲いかかる姿がはつきりと確認できる。すんなりと逃げられるわけでも無かったか。

「どけー！」

だが、俺も黙ってやられる訳にはいかない。敵の攻撃を紙一重で避け、反撃のボディブローを入れた。そして、骸骨は四散する。

だが、周りにはまだ十数体の敵が存在している。これを全て相手にするのは、少し無茶かもしれない。

「ふふっ。」

そう簡単に逃がすと思っていたのですか？」

少し視線を上によれば、ほくそ笑むキャスターが、宙に浮かんでいた。

サーヴァントがいるならば、戦うなんていうのは、やめた方が良さそうだ。

「そうなってくれば、ありがたい話だったな。」

精一杯の皮肉を言ってみたが、客観的に見ればただの希望的観測にしかならない言葉だった。

さて、どうする。走って逃げるにしても、幼女を抱えてとなると難しい選択だ。ラーニングした転移を使えばいいが、三人揃っては俺の魔力が保たない。戦うというのは、さっきも言った通り論外だ。

どれも現実的じゃない。

「創太。」

「なんだ？」

逃げる為の策を練っていると、小声で衛宮に呼ばれた。

まさかだとは思うが、匣を買って出るなんて事はしないよな？

「俺が引きつける。だから、その間に……」

「合図出すから、それまでな。」

俺が許可を出すとは思わなかったのか、衛宮は目を見開いてこちら

を凝視する。

本当はさせたくなかった。けれども、口論できるほどの時間はない。ならば、相手に合わせるしかないんだ。

「ありがとな。」

衛宮はお礼の言葉を言った後、敵を見据え、戦闘態勢に入る。

「トリース・オン
投影開始！」

前へ出た魔法使いは空虚を握り、そして構える。すると、魔力が空虚へと入り込み、形と成し、剣へと姿を変えていく。

それは、白と黒の双剣で、アーチャーも使っていたものだ。

「どうやら、赤毛の坊やが囷になるそうね。」

キヤスターの勝ち誇った顔が、妙にムカつく。その吠え面をかかせてやりたいが、今は我慢だ。

「うおおお!!」

周りから次々と襲ってくる敵を、適切に対処していく衛宮。

その間にこちらは、逃げる準備を進める。

「フォース・チェンジ
性質変化。」

様々な身体能力を魔力に練り変えて、高ランクの魔術を使える為の燃料を補給する。最速で、効率など考えずに。ここで、時間をかけてはいけない。

そして、十分に魔力が溜まった時、俺は合図を送る。

「衛宮！」

行使する魔術は、以前のバーサーカー戦に使った感覚にノイズを生させる光を生み出すものだ。正直言って、今回は俺の魔力を直接消費するために、あまり使いたくはなかった。今の状況からしたら仕方がなく、使うしかない。

「……………」

周りが、一瞬昼になったかのように明るくなり、敵は咄嗟に目を隠す。それと同時に、大きな隙もできた。

「よし、逃げるぞー！」

「ああー！」

作戦は見事に成功した。なんとかこの場から抜け出し、危機を脱す

る事ができた。だが、問題は山積みだ。戦力が大幅に減少し、相手が強くなってしまった。

けれども、まだ生きている。それならば、まだ可能性はある。だから、今は逃げる。

この暗い闇の中へと姿を隠すように、俺たちは突き進んでいく。

逃走、その後

11月2月10日

セイバーがキャスターの手に渡ってしまった夜は明けて、朝の時刻になる。目覚めの場所は俺の家、つまり古崖家だ。

あの後、尾行とかもされておらず、無事に辿り着き、全員が揃ったところで寢床を決めて、あとは交代で見張りをやっていた。

ジアナはなんとかあの場からは逃げさせたようで、俺達が目的の場所である俺の家についた時に、念話を使い連絡をくれた。

更には間桐妹も連れて脱出したらしく、それを聞いた俺と衛宮はとてつもない脱力感が生まれた。ただ、イリヤスフィールだけは不満そうで、その理由を聞いても、

「なんとなくよ。」

と、釈然としない返答しかなかった。

現在は俺と衛宮、ジアナ、イリヤスフィール、間桐妹の五人が合流している。朝食はジアナが作り、もう食べ終わった後だ。

しかし、気がかりなのは衛宮だ。あいつはセイバーを失ってしまったからか、口数が減りどことなく顔色が悪いままだ。理由は、単純に相棒を失ったからではなく、昨日のギクシヤクした関係からだろう。

あまり触れなかったが、昨日は二人ともよそよそしいというか、何か遠慮しあっているというか、とにかく変だった。

次に何をするにしても、あいつの心境は少し気になる。一度話し合ってみよう。衛宮はうちの庭にある小さな縁側に座っている。あいつの家とは比べものにならないが、それでも似た雰囲気を感じたのだろうか。

俺はその隣に座って話しかける。

「どうした、衛宮。」

「……………」

返事なしか。心ここにあらず、という言葉が今の状況に当てはまりそうだ。

「おい、衛宮。」

「……あ、創太。いつの間に座ってたんだ？」

二回目の呼びかけで、気づいてくれた。そうでなかったら、グループでも入れてやろうかなとも考えてたんだがな。

「ほんの十数秒前だよ。」

で、お前大丈夫か？なんかボーっとしてたけど。」

「……いや、何でもない。」

「嘘をつくな。どんだけお前の友達やってると思ってるんだ？」

友達の嘘なんて一瞬でわかる。

……いや、今回は衛宮がわかりやすいだけだが、それでも小学生の頃からの付き合いだ。なんとなくでも察する事はできる。

俺に嘘を指摘された衛宮は、少し間を置いて、そうだったなどと、嘘を突き通すことを諦めたかのように言い放ち、自分に何があったかを話し始める。

「最近、夢を見るんだ。」

「夢？寝ている時に見ているあれの方か？」

「ああ。そっちの方だ。」

俺も最近、夢を見続けているが、だからといって何に関係してるんだ？

「内容は、多分セイバーの過去の事だと思う。」

バーサーカーと戦った時に、黄金の剣を投影しただろ。あれも夢で見たんだ。その直前の夜に。」

なるほど、いつの間にあんな剣を見たのかと思っていただけ、夢で見たのか。しかも、セイバーの過去を通じて。

マスターとサーヴァントは、互いの過去を見る事ができると聞いたが、衛宮の言っている事はおそらくそれだろう。

「セイバーは王様になった時、皆んなを守りたいとは思っていた。」

けど、大勢を助けるために少数を犠牲にしたんだ。それを何度も繰り返して、最後にその国は滅びてしまった。そして、セイバーはそれを悔やんでた。

だから多分、多分だけど、あいつの願いはきつと……」

つまりはあれか。大を生かすために小を切り捨てる、ってやつか。

どっかの誰かさんもそんな感じの事してた気がするな。まあ、衛宮も全てを見たわけでもないだろうし、正確に把握はしていないだろう。けれども、そんなのは大して重要じゃない。セイバーの願いがやり直しだろうが、なんだろうがどうでもいい。

「で、お前は どうしたいんだ？」

「えっ……？」

「戦いを続けるのか、やめちゃうのか。そんでもって、セイバーに何か言いたいのか。何にしろ、衛宮が思ったことをするべきだ。

それが間違ってたなら、誰かが止めるだろうよ。例えば俺とかな。」

「俺は……」

自分が何をしたいのかがはっきりしていないのか、また下を向いてしまう。

「今すぐに、とは言わない。じっくり考えればいい。けど、モタモタしていると全部終わっちゃうからな。」

最大限の笑顔を作りながら、ジョークを言ったつもりだった。しかし、衛宮は、ありがとな、と感謝した後、また考え込んでしまった。

もう少し明るくさせたかったが、失敗に終わったか。いや、でも心なしか、衛宮の取り巻く空気が、さつきより軽くなった気がする。気のせいにはなって欲しくはない。

どちらにせよ、俺が衛宮を手伝える事はそんなに無い。むしろ、そうしなくても、衛宮なら立ち直るだろう。だから、俺の心配も杞憂になるだろう。

なら、ここでできる事はない。次は地下室の工房でも言ってみよう。なにやらそこで、ジアナが新魔術の開発中らしい。術式だけでも覚えとけば何かの応用になるかもしれないし、行ってみよう。

……何かに応用できた事なんてないけど。

階段を降り、地下室のドアをノックする。いつも思うが、日本に地下室がある家なんてかなり珍しいと思う。湿気とかで、色々面倒くさい事が起こるし。

「ジアナ、いるか？」

ドアを開け、目的の人がいるかを確認する。部屋中を目配せし、改めて不気味なもとい個性的な物が揃っていると認識させられた。

この部屋にある物のほとんどは、父さんが旅をしていた時に集めた物だ。トカゲの蒲焼きやカエルの目玉といった魔術の古典的な物から、パソコンに入ってそうなハード類などの最先端技術を用いた物まで。はたまた、暗黒物質としか表現しようがない謎の物もある。

父さんは収集癖でもあるのかと突っ込みたくなるが、今は関係ない。あくまでも、目的はその中心にいる人なのだから。

「ソウタ？何の用ですか。」

「新魔術ができたかな、と思ってき。そうじゃなきゃ、手伝おうかなとも。」

「そうでしたか。ならば、手伝ってください。」

「って言う事は、まだ完成してないのか。」

「りょーかい。で、なに作ってんだ？それを聞かなきゃ何するかも分かんないけど。」

「端的に言えば、どこにいたとしてもここにある物を自身の手元に喚び寄せる魔術の開発です。」

「そりやまた凄い魔術だな。けど、どちらかと言えば魔法なんじゃないか？」

「当然です。元となる物も魔法なんですから。」

「は？そりやあ、どういう事だ？」

「……分かっていないようなので、一から説明します。」

「はい、よろしく願います。」

俺が理解していない、という事をいちやく察知するジアナさん。いやあ、こういうのは本当に助かる。ありがたい事です。

「この魔術は、貴方の父が残した魔道書に載ってある物です。」

「魔道書って、あれか？何十もある……」

「そのあれです。」

「あれだったか。」

あれ、つまり魔道書というのは、父さんが遺した物の一つ、いや五十四冊だ。

その中に書いてある魔術の半分は、本人が生前に使っていたのだが、残りの半分は完成されていない魔術だった。中には案を書いただけでその後は一切触れられてない、なんてものもある。

それが本毎に分かれていればまだマシだったが、ごちゃごちゃに混ぜられているので、実際に行使するまで使えるかどうか判断できない、という事になっている。

「で、なんでそんな魔術を開発しようとしたんだ？」

「以前ソウタが、キャスターの転移魔術を模倣しましたよね？」

あれを応用すれば、今開発している魔術も使えるのではないかと思ひまして。」

ああ、元となる物も魔法っていうのはそういうことか。

「しかし、まあ、あれだ。よく大量の魔道書からそんな事を思い出したな。」

「最も古く書かれた本の三つ目の魔術が、それでしたから。」

「……ああ、つまりはそういうことか。」

思わず口から呆れが漏れる。

何故そうなるかという点、その最も古くに書かれた本は、レーザーを撃つ魔術が書かれていたからだ。他にも腕を剣と一体化させたり、隕石を降らせたり、更には自分の身をドラゴンにさせたりと、無茶苦茶な魔術が考案されている。

つまりそれは、父さんのロマンが詰まった本とも言えよう。

……何書いてんだ、あの人は。

「ちなみに、こんなコメントが書かれてましたよ。」

この魔術が完成したら、超でっかい剣を召喚させる！

……どう思います？」

「すぐく……子供っぽいです……。」

夢見過ぎなんだよ。

「それはともかくだ。その魔術は、転移魔術を応用すれば完成できるんだな？」

「はい。もしそうなれば、必要な物を逐一取りに帰らなくても良いようになります。」

そりゃあ便利なこった。パンナコツ（殴

「……しかし、私一人では開発しようがありません。元からある魔術であれば、習得するのは何とかありませんが。」

そういえば、そうだったな。ジアナは身体能力系の魔術は得意だが、他の系統はあまり得意ではない。だから今回のような、身体に關係しない魔術はジアナの専門ではない。だからと言って、俺の方が得意な魔術があると言われれば、はつきり言っただけ無いです。

「だったら手伝うよ。どうすればいいんだ？」

「ありがとうございます。であれば、空間の動かし方を……」

「それは確か……」

何だかんだと話し合いをしつつ、その後は俺が魔術の感覚を伝え、それをジアナが形にする。互いがアドバイスを出し合い、完成に近づけていく作業が行われていく。

本にある情報も適当ではなく、土台としての部分は書いてある。これならば、今日中に出来上がりそうだな。

しかしその途中、ジアナはある質問をする。

「……セイバーの過去は、聞きましたね。」

「ああ。大体だけど、なんで分かったんだ？」

「貴方の性格から、真っ先にシロウ君へ話をしに行くと思ったので。」
バレバレだったか。しかし、なんでまたそんな事を聞いたんだろう？

「それで、どう思いましたか？」

「どうって……どうとも思わなかったな。」

俺は他人の人生を評価するほど偉くないから否定できない。

けど、強いて言うならば、見殺しにするような真似は、いくら国の為だとしても共感できないな。」

「そう……ですか。」

俺の返答を聞いた途端、ジアナさ落ち込んだような顔になる。

なんだ？何か嫌なことでも思い出したのか？

うーん、よくわからん。まあ、無理して聞き出す必要もないし、あまり触れないでおこう。

その後は、衛宮の昼食の合図まで作業が続き、昼食の後も同じ事をしていたので、俺たち二人はほぼ半日は地下室に籠りっぱなしの状態だった。

棄権の合図

晩飯を済ませ、夜の探索時間が始まる。俺とジアナは、すでに門の外へと出ている。いつもより人数が少なく感じるが、イリヤスフィールは協力的じゃないし、衛宮はどうするか分からないから、自然と俺たち二人が探索へ行く事になる。

衛宮は、飯を食ってる時にほとんど喋らなかつたし、結局何の意思も出さずに、時間が過ぎてしまった。

まあ最初の頃は、二人で探索していたのだから、少なくなったというより、元の人数に戻つたと言つた方がしつくり来る。多い事に越した事はないのだが。

「大丈夫ですか？ソウタ。」

ジアナが、遠足に行く前の母親みたいな事を言う。もうそんな歳じゃねえぞ、俺。

「ああ。言つても持ち物なんてそんなにないなからな。」

「そういう事ではなくて……」

それは、何か歯切れの悪い言い方だった。

「じゃあ、他に何かあるんだ？」

「いえ、その……ソウタの心境はどうなのかと——」

「はあ、心境ってどういう意味で言ってるんだ？」

「……率直に言おうと、今まで戦ってきて怖くなかつたのですか？」

なんだそれ。一体どういう意図に基づいて質問しているんだ？

朝の時も思っていたが、ジアナの様子が少しおかしい。昨日は、あまり感じなかつた。しかし、今日になってからそわそわしているというか、オドオドしているというか。

キャスターが攻めてきた夜に何かあつたのか？けど、セイバーの過去をとりわけ気にしてたし……。

駄目だ、分からん。まあ、とりあえず質問には答えておくか。

「それは、もちろん怖いに決まってるんだろ。」

バーサーカーと対峙した時も、ライダーの宝具を目の当たりにした時も、ランサーの槍に刺された時も、全部怖かつた。

けど、逃げたりしたら、後から何倍にもなって返ってくる。だから、今は我慢して、戦っているだけだ。」

ちよつとだけ、クサかったかな。けど、素直に自分の思いを言えたとは思う。今戦う事から背を向ければ、十年前のような事になってしまふかもしれない。正直言つて衛宮は頼りないし、遠坂は信用しきれないし。俺の実力では、言えた事ではないけど。

「ソウタ……」

お、なんだ。褒めてくれそうな雰囲気だな。恥ずかしいやい、そんなの。俺はただ……その、あれだよ。ほらそれは言わせんなよ。

「ランサーの槍に刺された、とは？」

あ……。これ、そつちちゃうわ。違うパターンやわ。

「無茶しないでください、とあれほど言ったでしょう!!？」

「痛エー!!？」

ゲンコツ、という効果音が鳴りそうなジアナの鉄拳落としが俺の頭頂部に入り、そのあと、一分ぐらいうずくまっていた。

オラ、チョコ○ビ食いたいゾ。

そしてその一分後、セイバーが召喚される前に何があつたかを、正座をしながら根掘り葉掘り聞かれました。脚が痺れそうです。

「うー、まだ痛む。」

「次からは、慎重に行動してください。」

「はい……善処します。」

流石に、みさ○並みのゲンコツは、二度も喰らいたくありません。いやもしかしたら、次は○さえグリグリかもしれない。

「ならば、良いでしょう。」

さあ、時間を無駄にしてしまった分を、今から取り戻しに行きますよ。」

「それは、この前のスパルタ特訓をやるという意味でございませうか？」

「貴方が望むならば、いつでもやりますよ。」

「やめてください、しんでしまいます。」

やるならせめて、この戦争が終わった後にしてください。

「さて、漫才はこの辺にして、気を引き締めていくか。」

「はい。まずは、何処に行きましようか？私としては……」

と、真剣に気持ちを切り替えて、探索場所をジアナが提案しようとしたその瞬間だった。

「待ってくれ！」

後ろから、ストップの声がかかったのは。

「衛宮？」

「俺も……俺も一緒に行かせてくれ。」

俺へ真っ直ぐ伸びた視線は、迷いがあるものの、覚悟を決めたそれだった。

「もちろん、良いぜ。」

むしろ、その言葉が聞きたかった。衛宮士郎という人物は、自分を突き進めていく者なのだから。

「ジアナも良いよな？」

「はい、私も構いません。」

ジアナに了承も取ったという訳で、衛宮が戦うメンバーに継続して入る事になる。

こうして、戦いに参加するメンバーが、直前に決まった。セイバーはおらず、遠坂との休戦も終わった今の現状で、今いるこのメンバーが、最善だと俺は思う。

「結局何も見つからなかったな。」

「すみません、何かあると思ったのですが……」

「いいって。もしもの話だ、ってジアナ自身も言ってたじゃないか。」
探索を開始した俺たちは、ジアナの提案で衛宮邸に行くことにした。理由としては、キャスターが何か痕跡を残しているかもしれないからだ。

落とし物でも良かったが、どちらにしろそこからキャスターについての情報が見つけれられるかもしれないのだ。しかし、結果はスカ。キャスターが操っていた骸骨の破片さえも見つからなかった。

「ほらジアナさん、気を取り直して次に行きましよう。あそこなら、キャスターについて何か分かるかもしれない。」

「そう……ですよね！次の場所なら、確実にキャスターの情報を得ることができるとは！」

気持ちを前向きにしようとしたのか、ジアナは衛宮の言った事を力強く繰り返す。

衛宮が言っているあのことは、柳洞寺だ。本来ならば、昨日の内に調べる予定だったが、キャスターの奇襲によって台無しになってしまった。

そういえばだが、キャスターの正体についてあまり深く考えた事がない。昨日、セイバーに使った短剣から推測すると、裏切りと関係ある英霊なのではないだろうか。そこから先はまだ分からないが、裏切りとなると反英霊ではないだろうか。しかし、そこから絞るには、情報……

「着きましたよ、ソウタ。」

と、一人で悩んでいたら、いつの間にか柳洞寺の階段前まで来ていたようだ。

「ここからは、林の中を進みますよ。門番であるアサシンに見つかる、危険です。」

「ああ、分かっている。」

「分かりました。」

俺と衛宮の返事を聞いたジアナは、俺たちを先導するように、道もない林の中を進んで行く。ただ、柳洞寺に行く為には、薄暗い所ですらに、斜面を登らなければならない。それでいて、木々の根が所々で盛り上がっており、この中を進むのは、骨が折れそうである。

「俺が先に行く。後ろは任せたからな。」

しかし、弱音は吐いていられないと思い、衛宮よりも前へ行く事を決意した。

それに対して、衛宮は反対せずに、そのまま俺が行くことになった。ジアナの背中を追うように、一歩ずつ、足場を確認する。

「二人とも大丈夫ですか？」

俺たちが付いて来ている事を確認するかのように、ジアナは後ろを振り向く。

「当たり前だ。」

「はい、大丈夫です。」

その二人は、まだ大丈夫だ。

そしてまた、ジアナは進んで行く。あくまでも、俺たちのペースに合わせ、だ。彼女は、本気を出せば俺たちを置き去りにしてしまう実力を持っているが、そうはしない。理由はもちろん、俺たちの事を気遣ってくれているからだ。いつか、そうならないような実力差には、なりたいたいものだが、今はまだ夢のまた夢なのだろう。

「着きました。ここが裏の扉です。」

「ここを越えれば敵の本陣だな。」

本来ならば、サーヴァントは扉を越えられないらしいのだが、今は、セイバーもアーチャーもない。従って正面突破をする必要は無く、裏からコソコソできる。

「では、私が先に行きます。危険が無ければ、合図として壁を叩くので、それまで待機してください。」

そう言ったあと、ジアナはあくまでも慎重に扉を登っていく。頭だけを扉の上へとやり、目視で敵の存在を確認し、次に体も持ち上げて乗り越える。

数秒後、コンコンと壁を叩く音が聞こえる。ジアナからの合図だ。

「大丈夫みたいだな。衛宮、俺が足場になるから、先に行ってくれ。」
「分かった。」

この扉は二メートル半程もあり、俺たちのような一メートル六十五センチぐらいの低身長では、よほどの身体能力がない限り一番上まで手は届かない。ただし、ジアナは俺より低いにも関わらず、元々の身体能力が高いので、先程のように軽々と登っていきける。

魔術で強化をして、扉を上がってもいいのだが、それだと魔力で相手に気づかれてしまうかもしれない。素の身体能力で、乗り越える必要がある。まあ、どちらにしろキャスターに気づかれている可能性もなくはないが。

衛宮は助走をつける為に数歩下がり、俺は手を組み足を置く場所を作る。

「準備はいいか？」

「ああ、いつでも来い。」

俺の確認を取った衛宮は思いつき走り、俺の手の平を足場に塀の上へと跳ぼうとする。俺もそれに合わせて、衛宮の足を力の限り、持ち上げる。結果、衛宮は余裕で塀の上へと登ることができた。

「衛宮、ちゃんと登れたな？」

「ああ。だから、次は創太だ。」

俺の番か。次は、さつきよりも簡単だ。俺が跳んで衛宮の手を掴み、あいつが、引き上げるだけだ。

「よし、いくぞ。」

三人とも無事に敵地への侵入は成功した。だが……

「変ですね。」

そう。ジアナの言う通りどこか変だ。それには、三人とも気づいている。

「誰もいないな。」

サーヴァントどころか、人気の一つもしない。さらには、静かすぎる。人がいないだけで、こんなにも静かなのだろうか。冬の夜だからと言つても、動物の鳴き声とかもう少し聞こえてもいいんじゃないやなからうか。

「もしかすると、拠点地を変えたとか。」

「だとしたら、一体何があつたんだ？」

衛宮の推測に対して、俺は疑問を抱く。罠の可能性もあるかもしれないが、どこか違和感を覚える。どこかなんてのは分からない。けれども、用心しなくてはならない。

「……っ！」

そして、気づいた。やっと、やっとこの違和感の正体に気がついた。

三人の視線が、一気に寺の屋根の上へと集まる。そこには、月明かりに照らされた影が腕を組み、仁王立ちをし、まるでこの世界の支配者は自分だと、そう言っているかのように、いやあれはそう言ってい

る姿そのものだ。

「ほう。我の宝を^{オレ}迎え入れてやろうと思ったが、とんだ道化がいるらしいな。」

「なっ……アーチャー!?？」

黄金の鎧を身に包んだ誰かは、傲慢に、そして蔑むように、俺たちを見下す。

ジアナが何か言っているけれども、俺には関係ない。いや、俺にとって処理しきれない情報だった、と言った方が正しい。

あいつは、ヤバイ。

脳内がそれで埋め尽くされたからだ。

本能が叫ぶ、危険だと。あれは、バーサーカーよりもずっと凶悪で、どんな策を練ろうとも、軽く一蹴してしまう奴だ……!

「ふん、ちょうど良い。雑種らにも用が無いわけでもない。貴様ならば、余興としては楽しませてくれよう。」

「まさか……ここで戦う気ですか?」

おい、やめろ。やめてくれ!

そいつとは戦わないでくれ、ジアナ!

「安心しろ。所詮貴様は、女子供。五体満足になるまでには、手加減やろう。」

嘘だ、お前は殺してくる!

殺す? 殺すということは、死ぬのか?

「……こうなつては、猶予はありませんね。」

創太、士郎君。ここから逃げてください。」

「ジアナさん!?? でも……!」

「いいから、早く! 言い争う時間はありません!」

それでも、衛宮は何か言いたそうだったが、聞く耳も持っていない。かかったジアナは、もうすでにあの黄金のアーチャーに距離を詰めて、攻撃を仕掛けていた。

「衛宮! ジアナの言う通りにさっさと逃げるぞ!」

「まさかあの人を置いていくつもりなのか!?!」

あいつは、危険だ。俺たちが援護を……」

「だからこそだ!!？」

俺の大声で、衛宮の目が見開く。

「……だからこそ、俺たちではどうにもできない。援護なんてすれば、ジアナの邪魔になるだけだ。」

それに、それに……

そんな言い争いをしている途中で、俺と衛宮の間にある地面に、剣と槍の破片が刺さる。これは、ジアナのものだ。

戦っている二人を見る。ジアナの手には、折れた剣と槍がある。対して黄金のアーチャーは、宝具と思われる剣を持っている。得物だけでも、天と地ほどの差がある。勝敗は明らかだ。

「何をしているのですかー！逃げてください！奴は危険です！」

一度体勢を立て直す為に、体を引いたジアナは、俺たちに怒号する。俺としても、早くこの場から逃げ出したい。

「ほう、貴様はその雑種を逃す為の囹役ということか。実に、道化らしい。」

「黙りなさい！」

右手の平で魔力を込めた彼女は、そのまま右腕を敵に向ける。遠距離戦に持ち込むつもりだろう。

「この我を撃ち合いに持ち込むとは、愚かな。」

そう言った敵の背に、何かが見える。黄金の歪みのような何かが生み出される。強いて例えるならば、波動だろうか。それが空中に数個、浮かぶ。

「騎士は従手にて死せず。」

ジアナが、何か呟く。魔術の名前だろう。

そして、見えた。黄金の歪みから、何か射出された。数は三。それと同時に、ジアナは右手に集めた魔力を捨てる。次に、打ち出された得物のうち、二つを掴み、残りの一つを叩き落とす。

魔力は、敵を誘導する為の偽装だったか。

「狂犬の猿真似をしよう。だが、三本目を所有権を奪わなかったところを見ると、二本までが限界のようだな。」

狂犬が誰かは分からないが、元々の技の持ち主だろう。

「二本もあれば十分です。」

形状も在り方も全く違う武器を持つジアナは、その二本を構える。右手に持つそれは柄が異様に長い斧槍。一方左手には持ち手にも刺さりそうなくらい刃が多数ある剣を持っている。まさに諸刃の剣だ。

だがおかしい。その二本、さらに三本目である矛先が両端にある槍も含め、同じ時代に作られたとは思えないのだ。風格……というのだろうか。

そもそも、複数の宝具を持つあいつの存在自体がおかしいのだ。

「しかし、何故旗を使わん。貴様の本領はそれではなからう。」

「それは……」

ジアナの本領？それは、身体能力の高さではないのか？しかも、旗というのは……。

「……読めたぞ。貴様、その雑種に」

「黙りなさい！」

アーチャーと呼ばれたあいつの口を止めようと、諸刃の剣を瞬時に投げる。だが、黄金の歪みによってそれは、吸い込まれる。

「オレ我の^{はなし}嘯を邪魔するか。ならばその罪、まずは貴様の正体を露見する事で償え！」

その言葉と同時に、黄金の歪みが一気に増える。やがて数十という数になった時、そこからさまざまな武器が、垣間見えてくる。

直感した。してしまった。あれは災厄だと。

あいつの気分しだいで、俺たちのような木っ端な存在は、一瞬にして死んでしまう！

……災厄？死ぬ？それは、それはまさか

脳にノイズが走る。

あれみたいじゃないか。

治ったと思っていた、いや記憶の奥底に捨てていたトラウマが

……あれ？あれって一体……

俺の頭を

火の海……誰かの死……

体を

いやだ、いやだ……

蝕んで

あんナのオモいだシタクナ

「我が神は^{リュミノジテ・エテルネツレ}ここにありて！」

そして目の前にいる血まみれの姿が、

「……ああ、あああ!!」

俺を戦場から引きずり下ろしてしまった。

反発する心体

「は……あ……。うっ……！」

目の前には、血だらけの誰かが立っていた。何処から持ってきたのか分からない旗を、支えとして。

その旗はボロボロで、けれども何かを奮い立たせるような、戦わなければ、と思うような……

「あ、ああ……」

それなのに、俺は何もできない。

だってこわい

だってしにたくない

だってしんだらなものこらない

もういやだいやだ

あんなことみたくない

なりたくない

だってだってだって

「おい、創太！」

「……ああ……えみ、や？」

えみや？なんでここに。

「大丈夫か！」

「……うあ」

こえがうまくだせない

なんで

からだもたたない

なんで

「クッククッ……はっはっはっはっはっ！」

ただの雑種かと思いきや、中々の傑作であつたとはな！道化の正体を露呈することなど、どうでもよいことだった！

しかし、あの魔術師の子がとんでもない臆病とは、想像の域を遥かに超えたものであつた。道化、贗作者、臆病者、まさに滑稽劇を催すには、うってつけの役者が揃っておるではないか。」

だれかがわらう

まるでほんとうにおもしろいものをみたかのように

あれはきけんだ

あれはみてはいけないものだ

みられてもいけないものだ

かかわってはいけないものだ

にげられないものだ

ころされる

しんじやう

しんじやう

しんじやう

もう……おわりだ

「はあっ……はあっ……。 土郎君。」

「っ！ ジアナさん！」

「創太を連れて、逃げてください。」

「こんな体でも、囚役ぐらいできます。」

「それじゃあ、アンタが……！」

「私はいいんです。それに、彼の助けになるのは、少なくとも私の存在ではありません。」

「……駄目だ。」

えみやがだれかのまえにたつ

「……えっ？ し、土郎君！」

「俺は誰かを見捨てるなんてできない！」

助けるなら、二人とも助ける！」

やめろ……やめてくれ……

そんなことしたら

そんな事をすれば、死んでしまう！」

「ほう。この我を前オレにして、身の丈以上の宣言をするとは、愚かな。」

ああ……

またさいやくがおそつてくる

こんどこそおわりだ

こんどこそ……

しにたくない

しにたくない

しにたくないよ……

「トレリス・オン 投影、開始。」

いくな

いかないでくれ

いつてしまえばさっきのだからかみたいになってしま

「この我にオレ楯突く事を、死をもつて後悔させてくれる！」

あめがふる

あたればしんでしまうあめが

ひとつでもじゆうぶんなのに

たくさんたくさん

いやだ、いやだ！

ころされるのはもうたくさんだ……

「フォース・チェンジ 性質変化。」

まただれかのこえがきこえる

「うぐっ……は……あっ……」

やはり、魔力は足りませんね。けれど、霊脈が使えれば……賭けで

すね、これは。

士郎君、下がってください。」

「嫌です。意地でも動きませんから。」

「……それなら、良いでしょう。動かないのであれば、十分です。」

ああ

そらがおうごんのゆがみでうめつくされる

死がおちてくる

「トレリス・オフ 投影、完了。」

えみやがそれとおなじかずでおなじかたちのものをつくった

でもそれはまけていた

ほんものとぶつかりあうたびにこわれていく

「くそ……」

ああ、しんでしまう

だれか……だれかたすけて……

「与えられた役割のために、私の呼びかけに応え、今ここへ遣えよ。

インビジブル・シルク！」

ひかりがつつむ

まわりがみえなくなる

ちかくにいただれかもえみやも

ずとずとひとり

だれかだれか

さびしいよ

ひとりはさびしい

ねえ

だれかいないの

ひとりぼっちなんていやだ

またひとり……

「こ、こころは？」

「かはっ、はあ……はあ……。な、なんとか成功したようですね。」

「おれの、家だ。」

かえってきたのか？なんだか、かんかくがはつきりしてくる。

周りを見渡すと、不気味な物が多くある。見慣れているもので多

分、地下室だろう。

ああ、逃げさせたのか。

そう安心したからか、さつきまで感じていた恐怖から少し解放され

た気がする。

けれども、まだ怖いと、そう思ってしまう。でも、なんで怖いなん

て思ったんだっけ。確か、確か……たしか……

しんでしまう。

……思い出せない。そうだ、助けてくれた誰かに礼をしないとな。

その為に、そいつがいるであろう方向に顔を向けると

「っ……っ！」

こんどは、かんぜんにおもいだしてしまった。

助けてくれた誰かは、血だらけで、五体満足な事が不思議なぐらいにボロボロで、皮一枚で繋がっているのではないかという所もある。あのできごとが、おれをのみこむ。じゅうねんまえのあれが。

胴体も削られており、致命傷が無い事は不幸中の幸いか。けれど、これだけ出血していたら、致命傷も何もない。

ひのうみ、がれきのこうや、しかばねのおか。

唯一無事なのが、顔の部分だろうか。小さな切り傷があるだけで、変形も欠けてもない。

「とにかく止血だ。創太、包帯か何かないのか。」

衛宮はあくまでも冷静に対処する。無理をしているわけでもない。内心、動揺しすぎて発狂しそうな俺とは違って、慣れているのだろうか、

「……俺が応急処置をする。衛宮は一階のリビングに上がって、柵から適当なもん持ってきてくれ。」

「大丈夫……なのか？ さっきから、息が荒いし、こういうのを見続けるのは……」

「早くしてくれ！」

せめてそうでもしないと、さっきの失態を帳消しにすらできない。強引な説得に驚く衛宮は、それでも俺への同情からか、ああと言って、部屋を出ていく。

血を見るのは辛い、治療をするという他に選択肢はない。あつたとしても選びたくはない。

傷口に手を当てて、回復魔術を施す。血だけでも止めれば、後から再生でもなんでもできる。古崖家の魔術は、万能だ。ばんのう……

ほんとうにそうであつてほしかった

「……申し訳ありません。」

喋るのも辛いのに、口をゆっくりと動かし、謝罪する。

「なんで、謝るんだ？ お前は、俺たちを助けてくれた。それだけで十分だ。むしろ、お前は感謝される立場だ。

だから、素直に看護を受けて……」

「そうではありません！」

誰かが大声を上げ、俺はそれに驚く。

その体で大声を出すなど言いたいが、何かがそれを拒んでしまう。話を聞かなければと、でも聞いてもならないと。複雑な感情だ。

「私が……謝罪したいのは……正体を隠して……いたことです。」

さきほどとは声の質が変わり、息は絶えだえで、喋ることすら苦しそうだった。大声を上げた事は、彼女の体力を奪う行動だったのだろう。

ここまで苦しいのなら、喋るなど言いたいが、正体というのはどういう事だ？

そういえば、目の前にいる誰かの着ている服が、いつの間か変わっている。神に仕えるシスターのような、戦場を駆ける戦士のような、とにかく現代人は着ないような服装だ。

……誰か？誰かってだれだ？正体も何も、元々こいつの名前すら……

「私の正体……私の真名名は……」

「言わなくていい。」

その声は、とても重かった。

周りの空気を変えてしまうほど。

「無理に明かす必要も無い。隠していたのは、理由があるんだろ。ならせめて、その理由がなくなったときに話してくれ。」

なんでそんな事を、思ってもいない事を俺は言ったんだ？

「……はい。」

やめろ、そんな優しい顔をしないでくれ。

俺はお前の偽名すら憶えていないんだ。だから、無理に笑わないでくれ。

「本当に申し訳ありません。」

今の俺に、そんな謝罪を受ける権利は無い。

だから、やめてくれ。

――2月11日――

朝日が目に差し込む。そこに眠気など無かった。いや、本当はあった。けれども寝られなかった。体は睡眠を欲しているのに、心はそう

ではなかった。あの死に物狂いで逃げた夜から一睡もせず、新都の夜景を屋根の上から、ただ眺めていた。

昨日、重症を負った誰かは、なんとか助けた。……いや、助けたというのはどうだろう。俺の方が完全に助けられた側であるのに、助けたというのはおこがましい言い方だ。

一命を取り留めた。それだけは間違いはない。

あと、どうやって逃げだしたかという事だが、誰かが魔術を使ったからだ。

逃げる直前に、インビシブル・シルクと言っていたが、あれは魔術と全く関係ない。どちらかと言えば、関係があるのは詠唱の方だろう。昼間に開発していた転移を応用する魔術、その一つだ。

地下室にあらかじめ仕掛けてある道具と、場所交換するという魔術。そして、その道具はインビシブル・シルク、つまりは透明になれる布だろう。

けどそれは、どうでもいい。今最も重要な問題は、

「戦えるか、どうか……」

昨日の夜、十年前のトラウマが蘇った。あの災害のような男を目の前にして、戦う意志が失われてしまった。こんな事を自分で言うのもどうかと思うけれど、次に戦うとき、同じ事にならないとは限らない。むしろ、同じ事になる可能性のほうが高い。

それに、そもそも俺は戦う気がない。そんな奴が戦場に赴いてしまえば死ぬだけだ。

けど、戦わなければ死ぬ。また、十年前のようになるのは確かだ。衛宮がなんとかしてくれるなんていうのは、楽観的すぎる。誰かもサーヴァントに匹敵する力を持っていても、倒すほどではない。

「でも、俺に何ができるっていうんだ。俺は、俺は……」

……どちらにしろ、こんな状態では、戦場に立つても足を引つ張るだけだ。もうそろそろ、二人が起きてくる時間でもある。俺の気持ちをはっきりと伝えておかなければ。

「おはよう、創太。」

「……おはよう。」

リビングに入ると、台所からいつもと変わらない調子で衛宮が朝の挨拶をする。この台所は、衛宮の家のように対面式で、台所にいてもリビングの様子がわかる。

ただ、衛宮の顔はどこか無理をしている気がする。どこか調子でも悪いのだろうか。

「もうすぐ朝食ができるから椅子に掛けてくれ。」

「ああ、悪いな。」

「謝る必要はないと思うぞ。ジアナさんは休まないといけないし、お前も……」

衛宮が親^知しみ^らのある名前を言った時、俺は胸が痛くなった。

なんでだ。なんで、お前はその名前を口にできる？俺は、それすらも怖いのに、今会ってしまえば……

「おはようございます。ソウタ、シロウ君。」

その声に、俺はなぜか反応して、肩が一瞬あがる。

振り返れば目に入るいつもと同じ^{初め}姿^てに、違和感を感じた。昨日とは違い、現代の服装を身に纏う誰かに。

体中傷だらけであったというのに、今はその後が一切ない。本当にこの人は一体誰なんだ？

「おはようございます、ジアナさん。」

「……。」

衛宮は挨拶を返すが、俺は黙ったままだった。

ただ、挨拶を返すだけ。日常でやっている事なのに、俺はできなかった。

「もうすぐ、朝食ができるので、椅子に掛けていてください。」

誰かは、その事を気にしていなかったのか、何も言わずに、机を挟んで俺の正面に座る。確かに、いつもはこんな風に向かい合って座る。だが、今だけはやめてほしかった。

俺と誰かは、互いに目を合わそうとしない。誰かの理由は、分かる。けれども、俺はなんでそうしたんだ？隠していた負い目は向こうにあるとしても、俺に隠されていた怒りなどは無い。他の人であった場合

は知らないが、俺には、少なくともないはずだ。ない……はずだ……
「ふわあく、おはよう……」

そんな重い空気をブチ壊しにきているのか、と思わせるほど大きなあくびをしながら部屋に入ってきたのは、イリヤスフィールだった。しかし、そんな思惑があるにしろ、ないにしろ、重い空気は以前と残ったままだ。

衛宮は俺とジアナに言った同じようなセリフを、イリヤスフィールにも言い、ジアナは無理をしてなるべく普段通りに挨拶を返した。けれども、俺は無愛想に「……おはよう。」としか言えなかった。こんな調子では、周りの士気を低くしてしまう。やはり、言った方が良いのだろう。

朝食は誰も言葉が発することなく、沈黙のまま終わってしまった。俺と誰かの間にある暗い雰囲気を読み取ってか、それとも、俺が聞いていなかったのか、とにかくそのせいで味というものが感じ取れない朝食だった。

皿洗いも衛宮がやってくれている。俺たちの心情を考えているのか。心配しているのか。

リビングには誰かとイリヤスフィールもいる。衛宮の皿洗いが終わったタイミングで俺は、話を始める。

「なあ、二人とも。ちょっと、話を聞いてくれないか。」

衛宮と誰かの意識を俺へと向けさせる。二人の様子を見てみると、悲しい表情で、多分俺の言いたい事が分かっているのだろう。

「今後の事なんだが……もう俺は、この戦争を降りるつもりだ。」

これが、俺の出した結論だ。

「二晩中、考えてたんだ。今のままで、俺はこの先戦えるのかって。昨日の事もあるしさ……。そして、思ったんだ。きつと役立たずになるって。」

それだけじゃない。俺自身も戦いたくないって、そう思ってる。戦うのは怖い。死ぬのは……。もつと怖い。

だから……戦いから降りさせてもらう。」

俺はなんて恥さらしなんだろう。けれど、もうどうとでも言うがよい。意気地なしでも、根性なしでも、あの黄金のアーチャーが言った臆病者でも。実際に全て事実なのだから。そして、事実を言われたって痛くもかゆくもない。

「……貴方が限界だと言うのであれば、仕方ありません。戦う事が怖いというのは、恥じる事ではありません。むしろ、それが普通の人の考えです。

ですから、後は、私達に任せてください。」

ああ。ありがとう。こんな弱虫に、優しい言葉をかけてくれて。

「そうだな。怖いのなら、仕方ないと思う。」

戦いの事は俺たちに任せて、創太は……」

「おい、待て。」

衛宮が「戦う」と同意義の言葉を言った瞬間。思いもしない言葉が口に出る。

「お前、あれだけ打ちのめされて、まだ戦うとか言っているのか？」

何を言ってるんだ、俺は！

「あいつに挑んで、全く歯が立たなかったくせに。」

やめろ、やめてくれ。それは、俺が言うべき言葉なんかじゃない！

「俺と戦え！この戦争に残るって言うなら、せめて俺より強いって証明してからしろ！」

俺は、なんでこんな事を……。

中身のない意地

何故だ。何故俺は、衛宮に勝負を仕掛けているんだ。そんな理由は、ないはずなのに、体が、口が、勝手に動いてしまった。

俺は、戦いから逃げる身だ。なのに何故、戦いに向かう奴の邪魔をするんだ？

……ふと、下に向けていた視線を上げる。目の前には、衛宮邸がある。決闘場所は、ここだ。

人目が無い場所を選びたかったが、どこも移動するのに時間がかかる。郊外の森なんてもつてのほかだ。というよりも、そもそもこんな昼間に、人目の無い場所なんていうものは皆無だ。

ここ衛宮邸なら、広い庭があり、多少の結界が張つてある。それを利用して、外から中の様子を確認できない結界を誰かに張つてもらふことになっている。

「着いたな。なあ……早めに……」

「分かりました。二人は、準備してください。」

作り笑いをしながら、誰かは結界を張る用意をする。

……悪いな。名前、覚えてなくて。

俺と衛宮は、その様子を見た後に、庭へと歩く。

「なあ、創太。本気で戦うつもりか？」

「本気だ。」

「そうか……。」

悲しい声が聞こえる。本当は俺だつてしたくない。むしろ、何故しなくちやいけないんだ。

庭の真ん中、そこから四メートル離れた場所に、それぞれ俺と衛宮は向かい合うように立つ。あくまでも、家は傷つけないように、後ろには塀しかないように立つ。

そこから、五分。戦いの場ができた事を告げに、誰かがやってくる。

「人避けと視聴妨害の結界を張っておきました。これで一般人が立ち入ることも、中の様子を確認することもありません。」

「……悪いな。」

あくまでも、誰かを見ないように俺は言う。

顔なんて合わせられない。名前なんて忘れた奴がそんなことできるはずない。

「衛宮、分かっているとと思うけど、本気で殺しに来い。じゃないと、俺は納得しないからな。」

むしろ殺されても構わないと、俺は思う。こんな足手纏いは、いな
いほうが……

シヌのはコワイ

……いや、やっぱりやめよう。

「ああ、全力でやらせてもらう。」

相手は当然のように言う。

この戦いは、互いに本意ではないのにも関わらず行われようとしている。そして、誰も止める人がいない。遠坂ぐらいなら、止めようとしてくれたのだろうか。でも、もう一人、絶対に止めてくれる人がいたはず……

ウソダ

……もう、いい。今は、戦いに集中するんだ。何故かは、分からないけれど、俺は、そうするべきだと思ってしまう。

「いいか、もう一度確認するぞ。この戦いに、お前が勝てば戦争を続けるなり、なんなりすれば良い。けど、俺が勝てばお前は今後一切戦うな。」

「それで、お前が良いならな。」

この戦いに勝とうが負けようが、俺には一切のリスクがない。逆に言えば、衛宮にとってはメリットがない。こんな俺だけ有利な条件を、何故衛宮が飲んでくれるのかが不思議だ。断ってもいいはずなのに。

「そろそろ始めよう。俺は、いつでもいいぞ。」

「俺も同じだ。」

だったら、この戦いは今すぐにでも始められる。

フォース・チェンジ
「性質、変化。」

トレイス・オン
「投影、開始。」

互いが、それぞれ唱え慣れた言葉を同時に使う。

俺はそれと同時に解析の目で、衛宮の投影する物を読み取る。その物は、アーチャーが使っていた一对の夫婦剣。互いが互いを引き合う性質を持つ。衛宮が投影したものは、あれよりも劣化しているけど、性質は変わらない。

ならば俺も武器を持つ。周りにある地面を腕に纏わせ、手甲のように形を変える。腕が少し重くなるが、筋力を強化すれば何の問題も無い。

「ふーっ……、はあっ!!？」

俺は息を吐いた後、地面を蹴り、一気に相手との距離を詰める。衛宮はそれに反応して、両方の夫婦剣を俺に投げる。

その攻撃は英霊の物に比べれば、遅く単調だ。俺ですら避ける事は簡単だ。しかし、避けることによりほんの僅かな猶予があいつに生まれてしまい、新たに武器を投影されてしまう。

だからこそ、

「ふっ……い！」

土の手甲を盾代わりにして突っ込む！

これにより衛宮の双剣は、それぞれの俺の両腕に刺さっている。あくまでも、刺さっている部分は浅く土だけで、腕自体には刺さっていない。

そして、俺の射程圏内に、時間の無駄はなく相手を入れることができた。

「はあああっ！」

俺はそのまま、右腕を大きく振りかぶり、土を纏った重い一撃を放つ。しかし、すでに衛宮の手には、先程見た双剣があった。

今から、殴る場所を変えても、反応されて合わされるだけだ。ならばいつそ、思いつき振り抜く！

死ぬかもしれないが、そんなこと知ったことでは……

シナナイデクレ

「っ……い！」

俺はそのまま拳を振り抜いた。しかし、それは貫通することなく、

衝撃を後ろに流されただけだ。

そして、気づいた時には腕に刺さっていた双剣が無くなっていた。正面を見ると、衛宮が両腕を交差させており、それを勢いよく広げ、夫婦剣を左右に投げる。

しかし、投げたはずの夫婦剣は、正面から衛宮に向かっていている。いや、あの夫婦剣は、俺の腕に突き刺さっていたものだ。

「これは……まさか!」

一瞬、脳に浮かびあがる直感が、左右に投げられた双剣に注意を向かせる。それは、大きくUターンをしながら俺に向かってきていた。そして正面からは、衛宮が手元に引き寄せた双剣を手に取り、距離を詰める。

引き合う性質を使った三方向の同時攻撃か。となると、躲すのは難しい。唯一上が空いているが、以前にも言った通り、跳んでしまえばいい標的になるだけだ。

色々考えた結果、俺は退路を作ることを選んだ。全てを一度に対処するのは、無理だ。だから、まず後ろの二本をなんとかする。

「はあっ!」

俺は衛宮に背を向けて、両腕を使い、飛んでくる双剣を叩き落とす。しかし、そのままでは衛宮の攻撃が当たってしまう。それをどうするか。答えは簡単。退路に逃げるまでだ。

「瞬間加速……!」

俺は脚に魔力を込めて、一瞬で体を最高速まで持っていく。そのおかげで、なんとか衛宮の攻撃から逃れることができた。

そして再度、体を相手に向ける。相手の姿を確認するために。しかし、俺は驚いてしまう。

「っ……!」

衛宮はすでに黒塗りの弓を構えていたからだ。

さっきの双剣といい、今の弓といい、投影する速度が前よりも段違いに速い。短剣ですらやっとだったあいつが、いつの間にか成長しやがってる……!」

「偽・螺旋剣!」

その弓から放たれた矢は、いつか見た、空間ごと巻き込む剣。それを避けるなど、もつてのほか。キヤスターと同じかそれ以上の傷を負うことになる。逸らす事も無理だ。あれは、近くにいるだけでも吹っ飛ばされる。

ならば、防ぐしかない。

フォース・チェンジ シールド
「性質、変化……盾！」

両手を前に出し、腕に纏った土と地面の土の両方を使い、目の前に大きな盾を作る。あいつの投影したものが、アーチャーのそれよりも劣化しているとはいえ、こんな即興で作ったもので防げるのだろうか。

……いや、防げなきゃ俺が負けて、あいつを死地に行かせることになる。だから、防ぐしかない。

次の瞬間、重い音が鳴り響き、魔力、そして腕から土の盾にあの螺旋剣がぶつかる衝撃が伝わる。

「くっ……だああああ!!？」

盾の強度を上げるため、魔力を一段と込める。貫通されてしまえば致命傷はなくとも、大きな隙を生むことになる。

足が地面を擦り、跡を残す。けれども、螺旋剣の威力は徐々に弱まっていく。これならば塞ぎ切れる。

そしてその数秒後、螺旋剣は土の盾を壊したと同時に、完全に動きが止まった。

しかし、しかしだ。

「っ！あいつは!!？」

相手の姿を見失ってしまった。

落ち着け。こういう場合は、魔力を使って探すんだ。周りの魔力を読み取って……

「っ！」

後ろ。あいつがいる場所は、そこだと把握できた。けれども、一歩遅かった。

「……俺の勝ちでいいな？」

その前に衛宮は、ただの短剣の刃先で、俺の喉元を触れていたから

だ。

「ああ、約束通りお前の好きにしろ。」

俺は宣言を素直に認めてしまう。

この戦いは、予想よりも早く終わってしまった。衛宮が尋常じゃない成長をしたのも要因の一つだが、やはりあれが……

衛宮は自身の勝ちを確認した後、短剣の投影を解除する。それと同時に、俺は膝から崩れ落ちる。

ああ、分かっていたよ。最初っからこうなる事ぐらいは。全部分かっていた。戦いの結果も、俺が何故衛宮を止めようとしたのかも。そして、あいつが俺のわがままを聞いてくれたのかも。

俺は衛宮を死なせたくなかった。たったそれだけの理由で勝負を挑んだ。止めないと、父さんと母さんみたいに戻ってこないんじゃないかって……。

でも、俺みたいな臆病者が、覚悟ができている奴に勝てるわけなかったんだ。

「行きましょう、ジアナさん。」

「え、ですが……」

「今は、あいつを一人にさせてやりましょう。」

声のする方向に振り向く。衛宮は、すでに外へ出ようとしている。そして、誰かと目が合う。

「ソウタ。」

「……悪い。本当なら、お前を一番止めたかった。」

また嘘をつくのか。俺は誰かに嘘しかついていない。それは、自覚している。けれども、やめる気すらない。

「けど、お前は俺なんかじゃ引き止められない。」

違う。本当の理由はそんなのじゃない。

「行ってくれ。今は俺なんかよりも、あいつの方がお前を必要としている。」

その言葉は、唯一の本当の物だった。

誰かは、俺の言葉を聞いた後、何も言わずに立ち去る。

本当は、覚えているのに。誰かの顔も、名前も、一緒に過ごした思

い出も。俺は忘れたフリをしちまってる。

だけど、あの本当の姿を見た時、俺は裏切られたんだと思った。今までの物、全て偽物だと。そう思った。そんな事はない、と自分を納得させようとしても、心の底では拭いきれない不信感が、住みついてしまう。

「ああ、俺はなんてクソみたいな人間なんだろうな。」

誰もいない広い庭の真ん中で、そうポツリと呟いた。

平行と交差の道

士郎と創太の戦いが終わり、士郎とジアナは創太を置いて、古崖の家に帰ろうとしていた。その途中、住宅街の一角で、ジアナは士郎に声をかける。

「あの……士郎君。」

「何ですか？」

「申し訳ありませんでした。」

「え、え!?!?」

突然の謝罪に驚いてしまう衛宮。当然の反応だろう。急に謝られてしまえば誰でも驚く。

「な、何の話ですか？」

「創太のわがままの事です。彼に変わって謝罪をしようと思いましたが、そして、私自身としてはそれを止めなかつた事もあります。」

「いえ、構わないですよ。ジアナさん。」

謝罪は必要ないと士郎が言い、ジアナはありがとうございますと返す。だが彼女には、まだ罪悪感が残っていた。

そして、次にジアナは自身の疑問を尋ねる。

「……何故、ソウタとの勝負を受けたのですか？」

その質問は、創太が行った無意味な戦いから来るものだった。

士郎は、別にあの勝負を受けなくても良かった。創太の話は穴だらけで、論破する事も容易いはずだった。そして、それはどちらも承知の事実だ。

「逃げることは、したくなかつたですから。」

「え……?」

それは、ジアナにとって意味を理解できないものだった。

「創太が言っていることは、無茶苦茶だったかもしれません。けれど、だからと言ってそれから逃げれば、あいつは立ち直れないかもしれません。」

あいつは、今、何かから逃げている。なのに、逃げる姿を見せてしまえば、それが正しい事だと言っているようなものです。」

確かに、とジアナは思った。そして同時に、その言葉は、自分へと向けられているような気もしてしまった。逃げてるのは、創太だけではなく、ジアナもだった。

「それに……」

士郎は、もう一つ理由を付け加える。

「それに？」

「俺自身も戦えるんだって証明したかったんです。あいつも言っていましたよ。自分より強い事を証明しろって。」

俺は、あいつに助けられてばかりいました。だから、俺も助けられるだけじゃなくて、戦える事を証明したかった。」

これが、衛宮士郎が戦いを受けた、その訳だった。ただし、創太からしてみれば、士郎に助けられてばかりだと考えているので、お互い様だったりする。

そして、ジアナは、士郎の考えを理解する。だからこそ今度は、自身の内にある物を明かす番だ。

「お話いただき、ありがとうございます、士郎くん。」

そして、再び謝罪します。申し訳ありません。」

「い、いやだから、ジアナさんが謝ることじゃ……」

「いいえ、私が謝罪したのは、別の事です。」

私の正体……名を隠蔽真名していた事です。創太には、断られました。貴方にだけでも伝えたいのです。」

ジアナの本当の名。それは、士郎にとって分かりきった事だった。十中八九それしかないと、もう判明していた。

宝具の名からは、想定できないものの、あの夜に見せた中世の騎士と僧侶の姿を混ぜ合わせたような服装、そして何よりも、宝具を行使した時に見たあの旗から、答えにもう辿り着いていた。

だが、敢えて彼は本人の口から正体を聞く事にした。彼女は正体を明かす事に関して苦しそうであったが、それ以上に誰かに話しておきたいという気持ちが強い様に思えたからだ。

「私の真名、それはジャンヌ・ダルクです。」

ジャンヌ・ダルク。聖人やオルレアンの乙女と呼ばれるフランスの

英雄。その名は、日本でも知名度が高い英雄である。士郎もちろん、彼女の名も活躍も知っている。

しかし今は、その詳細を伏せておこう。

「偽名であるジアナ・ドラナリクは、真名のもじりになっているんです。」

なるほど、と士郎は思う。確かに響きはそれっぽく、似たような気もする。

「第四次の時は、ただ単純な理由で、私の力を明かさないために偽名を名乗っていました。しかし、大災害が起き、その光景を見た彼はとてつもない恐怖を感じていました。」

……あの死の荒野を、目の当たりにして。」

士郎は、彼女の声があいつのまにかくぐもっている事に気がつく。

「私は国のためと思い、戦い、殺し、そして最後には処刑されました。もちろんそれに後悔などしていません。私は、私の信じる道を選んだのですから。」

その目は真つ直ぐで、しかし、何かが溢れ出ようとしていた。

「ですが、そんな事をした……こんな私の……本当の姿を彼に見せてしまえば……！」

涙声が強くなる。

「こんな……血だらけの手を見せてしまえば……！」

そして、ついに

「死を怖がっているソウタに、私のような殺人鬼がいて良いのかと……」

頬に涙がこぼれる。

「……ジアナさん、あいつはそんな事で嫌ったりしませんよ。だって自分で言ったじゃないですか。国の為、つまりは誰かの為にやった事だって。だったら、あいつも気にしませんよ。」

士郎は、慰めの言葉をかける。

この言葉は、予想であり、自分を創太に置き換えて考えた事からくる物だった。

「……すみません。取り乱して、心配をおかけしていました。親身に

なつて聴いていただき、ありがとうございます。」

彼女は、自身に溜まつていた物を吐き出した事で、心に纏わりついている重い感情が、少し落ちていく感覚があつた。だが、ほんの僅かであり、全てではない。

やはり、本人に直接言わなければ、その返答がどうであれ、それが全て解放されないと、彼女自身も理解していた。

ジャンヌ・ダルクは、瞳に溜めていた涙に気づき、指でそれを拭き取る。

「さあ、行きましょう。彼が戦わなくても良いように、早くこの戦争を終わらせましょう。」

彼女は、あえて元気そうに振る舞う。暗くなつてしまつた空気を少しでも明るくするために。しかし、その奥底では、恐怖が潜んでいる。

|| || || ||

日が傾き、夕方になる頃、俺はコンビニ弁当を手にとりながら、帰路を歩く。

衛宮と戦い終わった後、三十分前まで、ただ何を考えるわけでもなく、縁側で座つていた。生きる気力を無くしたかのように。ただし、空腹は感じるようだった。

昼は、そんな事はなかつたのに、急に腹が減つたと思つてしまった。無気力のくせに、欲望だけは働きやがる。そんな自分に嫌気が指す。

晩飯に、衛宮の家にある食材を使おうかと思つたが、やめておいた。いつの間にか居間に、冷蔵庫の中身使え、という書き置きがあつてもやめておいた。

人様の、ましてや、俺のわがままな戦いに付き合つてくれた衛宮の物を使えるわけがない。俺が一人になるために、家をわざわざ貸してくれている状態でもあるのに。

あいつは、本当に訳のわからないところがある。

「……………ん？」

そして、衛宮の家が見える距離まで来た時に、その前で立っている奴が見えた。いや、感じたと言つた方がいいだろうか。

「衛宮ならいねえよ、アーチャー。」

「ほう、敵城視察を命令されたので来たものの、目的の奴はいないか。」
霊体化をしていたアーチャーは、姿を現わす。

命令というのは、きつと遠坂に与えられたんだろう。まあ、俺にはもう関係ない。この戦争に参加していかないのだから。

「ならば、貴様は何故ここにいる？」

「別にいいだろ。そもそも、俺は部外者だ。そんな奴の事なんか知っても、何の得にもならない。」

「その様子だと、戦う事をやめたようだな。」

「っ……………」

何故わかった？そんな素振りを見せた覚えはないぞ。

「どうやら、凶星か。」

まさか、カマかけやがったのか。

…………いや、バレた所でどうだというのだ。さきほど俺自身も言ったはずだ。部外者の事を知っても何の意味もないと。

「だから？お前には、どうでもいいことだろ。」

「ああ、そうだな。…………だが、少しだけ言わせてもらおう。」

アーチャーが俺に？何だろうか。諦めるなどかそんなんを言い出すのか？なんだかんだ皮肉を言いながらも、こいつは英霊だ。

けれど、何を言おうとも、俺の心に響く事はない。こいつは、あくまでも、他人なのだから。他人…………？

「もう二度と戦うな。」

その言葉に、俺は呆気にとられた。

「お前は、衛宮士郎よりも利口そうだから、警告を無視する事もないだろう。」

「…………何故？」

疑問に思うよりも、ほぼ反射で問う。

「何故…………か。俺は、お前のような奴を見た事があるからだ。半端な覚悟で夢を追い、そして絶望した奴をな。」

だが、お前はまだ間に合う。全て半端でも、せめて身に合う事をすれば、後悔はしないだろう。」

…………意外だ。裏に何があるにしても、説教じみたことをする奴には

思えなかった。

「話はそれだけだ。私は戻る。偵察の筈が、敵に見つかってしまったのだからな。」

そう言つて、アーチャーは霊体化し、姿を消した。マスターである遠坂の下へと歸つていったのだろう。

しかし……なんであんな事を。遠坂がさせたにしても、考えにくいし、やはりあいつ自身が？

「……考えても無駄か。」

俺は、もう戦わないんだ。せめて、敵に捕らわれないようにするしかない。あいつらの迷惑にならないように。

|| || || || ||

アーチャーと創太が、別れた直後の事。

「ちよつとアーチャー、どこ行つてたのよ。」

「ここら一体の地形把握をな。」

住宅街の一角で、遠坂とアーチャーがいた。

「それは、初日にやつたんじゃないの。しかも、この近く……」

衛宮士郎の家がある。そう言いかけて、止めた。アーチャーの事を考えると、それはあまり持ち出さないほうが良いからだ。

「まったく。士郎と創太が仲間割れした事は、さつき使い魔で分かった事でしょ。」

この二人は、すでに仲間割れの事を知っていた。セイバーがキャスターの手に渡った事も、創太と士郎が別々の行動をしていた事も。

なのに、アーチャーは創太に対して、その事を知らないフリをしていた。そして、敵である衛宮士郎がいないと分かっている、あの家を監視していた。一体何故なのか。

「……良いわ。とにかく家に戻るわよ。」

遠坂は、呆れたように言う。マスターが背を向けて帰ろうとした時、アーチャーは

「お前は、間違うなよ。創太。」

誰にも聞こえないような小声で、そう呟いた。

解決すべき要因

11月2日12日

アーチャーから警告を受けてから一日が経ち、現在は夕暮れ時だ。アレから誰とも会わず、縁側に座り、ただ庭を眺めていた。寝るときは勝手に布団を使わせてもらい、飯は昨日の様にコンビニで買った。たまたまポケットに財布があつて良かったと思う。

けれども、何もしていない訳でもなく、色々俺自身の気持ちも整理していた。死への考えや、誰かの事。それを今一度考え直してみたが、結局、俺の気持ちが変わる事はなかった。

知人が死なれるのは怖いし、けれどもそれ以上に自身が死ぬことが怖い。誰かに関しては、どう考えても裏切られたとしか思えない。一番助けてもらった存在だと言うのに……

「シロウの言う通り、ここにいたのね。」

思いを巡らせていた途中、声を掛けられる。誰だと思い、振り向くと、そいつは

「……イリヤスフィール。」

白い妖精だった。

「何故ここに？まさか、俺が目当てだとは言うなよ。」

「ええ、そのまさかよ。」

「お前衛宮一筋じゃなかったのか。」

「もちろんシロウは大好きよ。けれど、命の恩人をないがしろにしないわ。」

命の恩人……？俺がいつどこでイリヤスフィールを救ったんだ？見当がつかない。

「その顔は忘れたって顔ね。」

幼女は呆れ返ったように言う。まったく、レディに恥をかかせないでよ、とかなんとか言っているが忘れた物は忘れたんだ。

「悪いな。お前が救われたっていうのは、多分俺のわがままが生んだ結果だ。」

そして、今も俺のわがまままで戦わないという選択をしている。ただ

死にたくないという理由で。

「……いいわ、一応言つといてあげる。」

そう言った彼女は、突然上品な振る舞いをしだし、言葉も綺麗になる。

「礼を申し上げます、古崖の魔術師。戦いの嵐から敵である我が身を守り、我が言葉を受け入れてくれた事、心より感謝いたします。」

戦いの嵐……ああ、あれか。俺とアーチャーが囿役になって、バーサーカーと戦った時に、余波で吹っ飛ばされた瓦礫から守った時か。

そして、受け入れたつてのは教会に送らずに、そのまま一緒に住ませてやった事だな。

それにしても、疑問に思うことがある。

「それをわざわざ言うためにここまで来たのか？」

「違うわよ。それはついでのような物。でも、言っておかなきゃ私の気が済まなかったの。」

意外に律儀な奴だ。いや、意外というのは失礼だろうか。彼女は、貴族みたいな生まれで、礼儀を教わっているはずだ。ならば、それは意外ではなく、当然なのだろう。

「それで、本当は何の用事なんだ？」

「シロウから聞いたわよ、ソウタが戦わなくなったって。」

「……。」

イリヤスフィールは話をしながら、俺の隣から少し間を取って座る。

その事で来たのか。しかし、先ほどの通り何を言われても、それは他人の言葉だ。俺にとって何の意味も持たない。

「私は無理に戦えなんて言わない。正直に言つて、それはどうでもいいわ。」

またか。戦え、つて言わないけど、何かしらを言ってくる。それは昨日、アーチャーが同じような事されてんだよ。

「けど、恩返しぐらいはさせてちょうだい。悩みぐらいなら聞いてあげられるかもしれないわ。」

……前言撤回。同じじゃなかった。むしろ、反対だった。なにかを

言うのではなく、俺の話を聞くのか。

「……七年前だったな。」

そう言われてしまうと、つい話してしまう。俺の何かが解決するという根拠はないにも関わらず。

「ちようど、ここである人とある事について話していた。」

相手は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。だからか、俺は彼女に関する話を無意識に選ぶ。

関する、とは言ったけど、どちらかという関係なくもない話だ。

彼女は、ある人については予想が付いているようだ。

「切嗣さんに、正義の味方について訊いていた。」

当時、その人の事を俺は、両親を知っている数少ない人、だと思つて話を聞こうとしていた。けれども途中で、正義の味方って何だと思ふのか、という質問を投げかけてみたんだ。」

……さて。どうして俺は、この話をしているんだ？イリヤスフィールはあくまでも、悩みを聞いてくれる、と言っただけで、思い出を語ってくれ、とは頼んでいない。

けれどもそんな疑問は無視して、俺の口は語り続ける。

「それに対して、切嗣さんはこう答えたんだ。」

本当の正義の味方というのは、ただの理想でこの世には存在しない。あつたとしても、それは偽物。目指そうとしても、結局は何かを選択して、選択しなかった方を捨てる。そして、選択しなかった方からすれば、悪になる。」

切嗣さんはいつもそうしてきたらしい。大を生かすために小を切り捨てる。結局、そうしないと全て失うとも言っていた。

「けど、だからと言って諦めるべきでもない。いつか本当の正義の味方がなれる人がいると思う。」

とな。」

正義の味方になれる人。切嗣さんにとって、それは、衛宮士郎を指していた。その時は理解できなかったが、今思えばきつとそうなのだろう。

……だから？こんなのが俺の悩みなのか？違う。そんなはずない。

俺の悩みは、死にたくないという感情のせいで、何かから逃げてしま
うことのはずだ。

「……もう一つ、聞いてくれ。」

それでも俺は、昔話を止めない。

「あれはいつだったか。十二、三年前ぐらいに、父さんから話を聞いた
んだ。父さんは、結婚するまでは旅をしてたんだ。」

これは、最近見た夢にもあった。あの時は、途中で目を覚ましてし
まったけれど、本当はもつと話してもらった。

「そんな時に、たまたま魔術関連の大きな事件に遭って、死にかけたら
しいんだ。」

事件の内容は、あえて省く。そこまで重要ではないし、話を長くす
るのは、聞いてくれてる彼女に申し訳ないと、思った。

「でもその直前、誰かに救われたんだとか。」

その人の容姿も、正確に教えてもらったはずなんだが、記憶があや
ふやであり覚えていない。

「けれどもその人は非難された。何故なら、結果がどうあれ大量殺戮
をしたからだ。

だけど、少なくとも父さんは救われたと思っていた。その人は、
英雄だと。しかし、正義の味方ではない。

その話の後、父さんはこうも言った。英雄にも、正義の味方にもな
ろうとするな。お前は、思うがままに生きろと。

……これで、話は終わりだ。」

話を全て聴いてくれたイリヤスフィールは数秒だけ考え、答えを出
す。

「貴方……夢がないのね。」

「夢?」

一体どう言う事だ?夢がないって……

「ああ、そういうことか。」

今、俺はやっと理解した。自身の真の愚かさに。

「そういうことよ。太郎は夢を託されたけど、貴方にはない。きっと
父親の言葉が裏目に出た結果でしょうね。」

父さんの言葉が裏目に、か。思うがままという言葉が俺の恐怖と入り混じり、結果としてただ立ち止まっている俺という存在が生まれた。

俺は持っていないなかったんだ。衛宮のような自身からこぼれでいてない夢すらも。

衛宮は持っていないなかったんだ。俺のような自身からこぼれでた感情が。

恐怖なんてものは、人間誰しもある。けれども、何かに行動を移せるのは、その感情以上のものがあるからだ。

そして、死にたくないという感情は前へと進む要因にもなり得るし、立ち止まる要因にもなり得る。そして、確実に前者となりえるものが、俺にはない。

つまりは、俺が立ち止まっている原因は死にたくないという感情にあれど、解決する部分はそこではなかった。

前へと進む理由にしかならない動機を持っていなかったことが、決すべき原因だった。

「ありが……」

「礼は必要ないわ。これは借りを返しただけよ。と言っても、まだ根本的な解決になってない。自覚させただけで、戦いたくないという気持ちは変わっていない。そして、変える必要もない。」

だって、貴方自身もそう思っているんでしょ？」

そうだった。結局の所、何も変化していない。俺は戦いたくない。それだけは、心底から思っている。

けれど、けれども……

「よう、古崖。」

また意識の外から声をかけられる。振り向くとそこには

「間桐。」

ライダーの元マスターがいた。その立ち振る舞いは、最後に見た怯えた姿とはうってかわり、何故か堂々とこちらを見下しているようだった。

俺は、その違和感からかすぐさま立ち上がり、イリヤスフィールを

背に隠すようにする。

「一体何の用だ？」

相手が喋る前に、俺は警戒の念を含めて、先に仕掛ける。

「なにいきり立ってるんだ。僕はね、お礼をしに来ただけだよ。」

「お礼？」

悪いがとてもそんな様子には見えなかった。どちらかといえば、それは復讐をしに来たかのような雰囲気だ。

「俺はもうこの戦争から降りた。だから、俺に構うのは時間の無駄だと思っけど？」

「だから、早まるなって。」

……まあいいさ。どっちにしたって、後ろのやつには用があるんだ。」

後ろ？まさか、聖杯を直接……!!？」

「そうそう。ちよつと遅れたけど、僕の新しいサーヴァントを紹介しておくよ。」

間桐がそういうとその背後から、見覚えのある忘れもしない奴が現れる。

そいつは髪を下ろし、前には着ていなかったライダースーツを身に纏っているが、間違いない。アレは俺のトラウマ恐怖だ。

「古崖はもう会ったかもしれないな。こいつの名前はギルガメッシュ。第四次の時に勝ち残ったサーヴァントだ。」

「貴様がシンジの言っていた奴か。」

また直感が叫ぶ。今度こそ死ぬと。

逃げられる要素はない。助けなどない。生き残る可能性もない。

「……イ、イリヤスフィール。下がってくれ。」

それなのに俺は強がる。声が震え、恐怖をあらわにしているのに。「じゃあ、僕のお礼を受け取ってくれよ。」

やれ、ギルガメッシュ！」

間桐の言葉と共に、ギルガメッシュと呼ばれたサーヴァントの後ろから、多数の門が開かれる。蹂躞、その二文字が俺の脳裏によぎる。つまりはそれが行われるという事。

ああ、シニタクナイ。

命懸けの抵抗

ギルガメッシュが打ち出す宝具。最初は一つだった。

ただの一直線で速いだけ。避けるのは簡単だ。しかし、後ろには人がいて、避ければそいつに当たってしまう。ならばと思い防ごうとするのは間違いだ。それは一級品以上の物。防ぐには相当な力が要る。だから、俺はそれを逸らす。素手で触れても傷を負わない部分へと、拳を加える。

次は二つだった。

数が増えたがこちらの腕も二本。だから、先程と同じ方法で両腕を使い対処する。

今度は四つだった。

これをどうにかするととなると、さっきまでの方法では厳しくなる。それならば、魔術を使うしかなかった。腕を強化しスピードを上げて、体には当たらないようにする。

一つ、二つ、四つと倍々に増えていったのだから、次は四の倍で八が来ると予想していたが、その上の十だった。

ここまで数が増えると、単純にスピードを上げるだけでは間に合わない。だから、別の魔術を使う。俺が扱う主な属性、力を。

手順としては、直接武器に手を触れて、魔術で横からの力を加える。たったそれだけだ。これにより、拳で殴るよりも動きが少なくて済む。ただ、触れていないと消費魔力が、格段に上がってしまう。

「はあっ……はあっ……。」

しかし俺にとっては、触れていなくても相当な魔力を使う。

「どうだい、僕のサーヴァントは？」

この圧倒的な力！これで僕の力を証明できるだろう？」

間桐が何か言っているが、ほとんどが耳に入ってこなかった。それよりもその前の脅威をなんとかしなくてはならない。

ただ死にたくない、生存本能ではない何かが叫ぶ。心臓は破裂しそうなくらい大きな鼓動を打ち、顎は細かく動きガチガチと鳴らす。膝も震え、全身が恐怖を露わにする。

誰も助けてはくれない。一人で戦わなくてはならない。前のようにただ見ているだけなら、即座に死ぬ。それぐらいは理解していた。「怖くて、声も出ないのか?」

ああ、そうだ。死ぬのが怖くて、怖くて、たまらない。

「そうだよな! 怖いよな! けど、それは当然の報いだ。いつも僕を見下しているからこうなるんだよ!」

間桐は、徐々に怒りを見せてくる。しかし、俺からすれば何を言っているのか全く理解できない。

「お前も内心バカにしてたんだろ! 落ちこぼれだとか、魔術も使えなただの一般人だとか!

その証拠に、後ろのそいつから僕を救うフリをして、見逃した。こいつなら、放っておいても何もできないと思って!」

ああ、あの時か。こいつはセイバーがライダーに勝った後のことを言っているのだろう。

俺としては、そんなつもりは無かった。けれども、弁明する気はない。したところで、どうなるのか。あいつは、半狂乱になっている。何を言っても無駄だ。

「けど、お前は偽善だろうと、僕を救った。だから、もしその庇っているそいつをこっちに渡してくれば、同じように見逃してやらないこともないけど?」

「イリヤスフィールを?」

何故急にそんなことを言い出したのか、分からない。

「言っただろ、僕はお礼をしに来たんだ。お前がいなければ、最強のサーヴァントを手に入れられなかった。だから、今回だけは許してやろうってことさ。」

「……お前の言いたい事は分かった。」

「ということは、そいつを渡すんだよな?」

「えっ……。」

イリヤスフィールは、不安げな表情を浮かべながら声を漏らす。

渡したい。死なないのであれば、俺だって渡したい。けれど、やっぱり

「無理だ。」

それは、力も度胸も勇気も覚悟もない人間が放った一言であった。「はあ？何言ってるんだ。死にたくないんだろ？それとも……」

「俺は死にたくない。けど、こいつを見殺しにもできない。だから」「もういい。だったら、許しを請うまでやってやるよ！

ギル、やれ！」

「良かろう、シンジ。余興に付き合っただけでやろうではないか。雑種、少しは愉しませるのだな。」

別の提案をするつもりだったが、聞く耳持たず。

黄金の門から、さきほどの倍、二十もの宝具が覗き込む。この調子で数が増えていけば、ただのジリ貧になる。そうなれば、死は免れない。

「……いやだ。」

誰の耳に届くかもわからないほどの小声で、反抗をする。

だが、その言葉は無意味だと言わんばかりに、数多の武具が俺の体突き刺そうとする。

「つ……い！」

そして、また俺は魔術で横に逸らす。弾かれた二十もの宝具は、俺の周りを囲むように、地面に突き刺さる。これでは、まるで自ら刃の檻を作っているようだった。

「よくぞ無傷で凌ぎ切った。」

だがしかし、これはどうだ？」

ギルガメッシュが薄笑いを浮かべた瞬間、さつきとは比べ物にならない数の門が展開される。軽く五十は超えるだろうか。

理解する。これでは、俺の魔力が尽きると。

勝てない。ならば、逃げるしかない。足を使つては無理だ。背中を見せた時点で、殺される。いや、逃げ切れたとしても聖杯を求めて必ずまた追ってくる。そしていずれ見つかると。だったら、一体どうすれば……

「さあ、命を賭けて踊ってみせろ！」

考えている間にも、敵は攻撃を仕掛けてくる。

飛んでくる宝具を一つ一つ確実に対処し、横にずらす。一斉ではなく、一つずつ撃ち出された事が不幸中の幸いか。しかし、対処する度に魔力は減っていく。けれども、後ろにはイリヤスフィールがいる。彼女を死なせるわけにはいかない。

逸らした数が四十になった頃だろうか。魔力が尽きそうな事に気がつく。これでは、後の宝具を拳で弾くしかない。そう感じながらも魔術を使い続け、残りが五つほどになった時、ゼロになる。

落ち着け。なくなつたからと言って、できない事はない。最初と同じ、ただ刃のない部分に拳を入れるだけ。

右腕が聖剣を弾き、続けて左腕が魔槍を弾き、振りかぶった右腕を戻して鬼斧を弾き、左腕も同じようにして妖刀を弾く。

しかし、最後の一本を弾こうと、右腕を切り返そうとするも、すでにそれは俺の体を突き刺す直前だった。避ける事は不可能。

あと一本、最後それだけを防ぎ切れれば……！

「あがつー！」

しかし、その一本を防ぎ切れなかった。

左肩に深く刺さり、反対側まで貫通している。そのせいか、肩からは、感覚がほとんど無くなり、指一本動かす事ができない。

そして、痛み能耐え切れず、片膝をつき、頭がうなだれる。それは、まるで王を崇めるかのような姿だ。

「少しは、と期待した次にこれか。あやつらの子と思っていたが、しょせん雑種は雑種。我を人の身で超える事はできん。」

敵が何か、引つかかるような言い方をする。しかし、頭に血が回らず、めまいがする。

くそ……何も考えられやしない。

「ここからは蹂躪の時間だ。せめて華美な悲鳴をあげてみる！」

また黄金の門から、宝具の数々が姿を見せる。けれども、それは怖くはなかった。痛みなど、もはやどうでもいい。拷問が永遠に続いたとしても、恐怖などない。

最後の時が近づくと、ただそれだけが怖い。

怖い

こわい

「……騎士は従手にて死せず！」

だからか、俺の体はまだあがき続ける。

魔力がないからなんだ。

周りにはあるのは宝具。つまり力の貯蔵庫。

そこからいくらでも吸収できる。例えそれが強力で、人の手には負えないものでも、死から逃げられるのであれば、使うしかない。

肩に刺さった剣に手を掛け、抜く。そして、同時に所有権を奪う。

「貴様も猿真似か。さらに我の財を奪うとは、愚か者めが！」

自身の物を盗られたギルガメッシュは怒りを見せ、門から瞬時に大量の武器を射出する。さつきよりも速く、俺が持つ全ての力を敏捷力に変えても、全部の対処はできない。

だから、俺は猿真似をする。あの大英雄の猿真似を。この剣が放つ本当の技ではないだろうが、関係ない。

「射殺す百頭！」

全てを極めた武人、ヘラクレス。その技をこの身で再現するというのは無謀かもしれない。しかも、見たのは一回のみで、さらにそれは不発。技を出す直前までしか見れていない。

けれど、これこそが現状を打破する最善の一手だ。

状況や持つている武器によって、様々な形態を変える洗練された武技。

宝具を、今から俺が、降ろす！

「うおおおー！」

この手に持つ剣を力の限り振り抜く。ただの考えなしではなく、最も効率よく、攻撃を叩き落とせるように。

もつと強く。

もつと速く。

もつと、もつと！

マスター彼女を守るために！

高速の九連撃を放つ！

「っ……っ……っ！」

全て弾かれると思っていなかったのか。ギルガメッシュは、一瞬驚きの表情を見せる。

しかし、こちらはもう体が持たない。剣を地面につき、支え代わりとして立っているのがやっとだ。身に合わない無茶をしすぎた。

「……気が変わった。貴様は、今すぐ殺す。」

今すぐ？何を言ってるんだ。どちらにしても俺は動けない。じつくり鬨るも、今すぐ殺すも変わらない。

「は？何言ってるんだよ。」

「気が変わったと言った。あいつをいつまでも生かしておけば、化けてしまうかもしれん。だから、今すぐ殺す。」

敵は言い合いをしているらしい。これならば、魔力を多少集められる。今のうちに、逃げる為の準備をしなければ。

「イリヤスフィール。できるだけ抵抗しないでくれ。」

「ちよっ……」

そう言って、彼女の体を引き寄せる。一人ならまだしも、二人に使うのならば、この魔術はかなり難しい。しかし、やらなきゃ殺される。

「シンジ！今回は、貴様の命令に従ってられん！」

まずい。向こう側の痺れが切れたようだ。こちらへと一気に殺意を向けてくる……！

「魔術師の子よ！貴様は我によって即座に殺されてもらう！」

また黄金の門から武器が見える。しかも、今までより、一層数が多い。確実に俺を仕留めるつもりなのだろう。

しかし、関係ない。俺がやるのは迎撃ではなく、逃走だ。成功すれば生き延び、失敗すれば死ぬ。相手がどれだけ本気を出そうと、それは変わらない。

俺は周りにある宝具から魔力を集め、自身の物にする。この魔術は使った事があるものの、一人だけの時に成功しただけだ。二人となるとどれだけ魔力を使うのか、そもそも成功するのかもわからない。

「私の前に立ち塞がった事、後悔しながら死に絶えろ！」

来る！

一撃でも当たれば死、さらには何百という数で俺を襲う！

全力を出すんだ。動けなくなってもいい。成功すれば後の事なんて考えなくていい。だから……！

「フォース・チェンジ
性質、変化！」

瞬間、景色が変わる。周りに塀のような物はなく、黒のライダースーツを着た男もおらず、嫌味な男もいない。あるのは、木のみ。

つまりは、転移の魔術が成功したのだ。

本当ならば、あの城を目的としてしたのだが、ズレてしまった。まあ、土の中に埋まってないだけマシか。

「二体、何が……。」

イリヤスフィールはこの状況を飲み込めていないようだ。

終わった。そう思った途端に、体の力が抜ける。誰かが何かを言っているが、頭に入ってこない。魔力だけではなく、体力すらもカラだ。

転移とともに、他の魔術を行使したのだから、それも当然の事。

それにしても、すこし……ねむ……

|| || || ||

「おいおい、何逃しちやってんの？」

創太とイリヤスフィールの逃走が成功した後、衛宮邸では慎二がギルガメツシュに文句ばかりを言っていた。

ギルガメツシュ自身は、どこ吹く風で創太達がいた場所へと歩き出す。

「ちよつと聞いてんの？」

「第一の目標であった聖杯は手に入れた。それだけで、十分だろう。」

彼は、地面に落ちていた光る球を拾う。

「それ、何だよ。」

「聖杯と言った。それ以上でもそれ以下でもない。」

光る玉。それは聖杯だった。ギルガメツシュは見抜いていた。これは、創太がイリヤスフィールから抜き取った物だと。彼女自身が聖杯であるはずなのに、そこから力だけを抜き取り、球として置いていった。

これにより、英雄王が創太達を追う理由が一つ減った。

「へえ、それが聖杯ね。まあいいや。それが手に入ったんなら、あいつ

なんてどうでもいい。」

間桐自身としても、創太達は敵ではないとみなした。つまり、追う理由はない。

しかし、英雄王は違った。彼は一瞬だけだが、見えたのだ。あのヘラクレスをその身に降ろした姿を。

それだけではない。さきほど聖杯の力を取り出したと言ったが、これは異常なのだ。聖杯を意のままに操り、イリヤスフィールを傷つけることなく取り出した。それだけでも魔法のようなものだ。

最後に使った転移の魔術でさえも、一人だけではなく、同時に他人にも使っていた。他人に影響を与える魔術というのは、自身に影響を与えるそれよりも難しい。しかも、相手が魔術師であればなおさら。であるはずなのに、転移という魔法の域に近い物を他人に使ったという事は、その人はもう魔術師といっても過言でない。

そして、彼が手に取った剣。あれは『クラウ・ソラス』と呼ばれるアイルランドの剣だ。そして、その能力は持ち主の感情の強さによって力が変わる物だ。創太が手に持った時、あの剣はギルガメッシュがもつ一級品の宝具と変わらない力を纏っていた。つまり、彼の感情がそれほとまでに強いという事。だからと言って、感情の強さが勝敗に直接関係あるとは、限らない。

どちらにしろ、創太の存在はギルガメッシュを脅威だと思わせた。慢心の塊だと自覚しているギルガメッシュを、だ。

「次は、無いと思えよ。」

必ず殺す。慢心を捨ててでも。そう彼は無意識に古崖の姓を持つ魔術を恐れる。

覚悟の覚醒

黒い空で、俺は宙を漂う。

周りに物はなく、感覚もない。

体は動かせず、ただ時間が過ぎる事だけを待つ。

そこには、何の理由もない。

意思も、行動も、存在すらも。

まるで、死後の世界のように。

死、その言葉だけで、俺は恐怖する。

嫌だ、嫌だと抵抗しようとするが、何も起きない。

この死から逃げたい。孤独から逃げたい。

何かを掴もうと必死で、腕だけでも動かそうとする。

それすらも意味がないのに、逃げようと俺は……俺は……

そうしていると、突如として光が現れる。

とても暖かく、優しく、何かを与えてくれるような、そんな気がするような……

その光に包まれていると、うつすらと目を開ける感覚を脳が読み取る。まだ視界がボヤけているけれども、少なくとも俺が知っているような場所ではない。体が仰向けになっており、天井しか見えないけど、それだけでも貴族の家、という雰囲気を感じられる。いやでも、見た事あるかもしれない。

やがて、視界もはつきりしてきて、体を起こそうとする。

「……っ！」

しかし、肩から伝わる強烈な痛みので、動けなかった。

「あまり無茶しない方が良いわ。傷は一つしかないとは言え、かなり大きい。しばらくは、安静にするのが賢明ね。」

横から声が聞こえる。そちらの方向を見れば、やはりイリヤスフィールドであった。

「……ああ、そうか。逃げ切れたんだな、俺たち。」

「ええ、何とかね。あいつらが、追ってくる可能性は無いとは言えないけど、今すぐではないでしょうね。」

まさか、二度もあのサーヴァントから撒けるとは、思わなかった。一度目はまだしも、二度目は本当に無理だと諦めていたところもあった。けれど、命からがらなんとか……

ふと、体の様子を確認する。俺は、確か大きな怪我を負っていた筈だ。なのに血まみれではない。しかも、怪我をした部分には、丁寧に包帯が巻かれてある。

「これ、お前がやったのか？」

「……大変だったのよ。貴方を引きずりながらも、この城に連れてきて、看病までして。レディにあんな事させるなんて貴方、男として失格よ。」

「ああ、ありがとな。」

イリヤスフィールがなにか文句を言っているが、ここは素直に感謝しておこう。助けられたのは俺で、助けたのは彼女。それは、変わらないのだから。

「何がありがとうなのよ。私は貴方のせいで聖杯の力を失った。つまり、聖杯完成というアインツベルンの悲願を、貴方のわがままのせいで……」

「けど、ああするしかなかった。」

あのサーヴァントから逃げる際に、俺は転移魔術以外にも別の魔術を使っていた。イリヤスフィールの中にある聖杯を物質化するという魔術だ。そして、その聖杯を相手に明け渡した。

よって、俺たちが追われる理由が減った。しかし、ロクでもない事をする可能性は、高まる。間桐が何をするかは分からない。

けれども、やはり……

「俺は死にたくないし、死なせたくないかった。」

死地に向かう二人を止められなかった奴が言うセリフではないが、結局はそれしか理由を言えない。

死というものは感じたくも、見たくもないものだ。例え、その命が短いものであっても、先延ばしぐらいはしたい。

俺がそう言うと、彼女は呆れたのか、同情したのか、これ以上の文句を続ける様子は無かった。

「……なあ、ここはどこなんだ？」

「アインツベルン城よ。」

そうか、あの城なのか。通りで、既視感があるはずだ。

「俺が眠ってからどれくらい時間だった？」

「えっと、今が九時ぐらいだから、大体三時間つてところかしら。」

三時間か、案外短い時間だ。俺の体感だと、半日は寝ていた気がする。

そんな風に、俺が質問をしていると、途中でイリヤスフィールは、あの事を思い出す。

「そういえばだけど、ポケットの中で何か鳴っていたわよ。」

「ポケット？」

その中に、何が入っていたのだろうか。確か財布ぐらいしか……いや、他にもあった。

右手をふともも辺りに動かし、ポケットの中身を調べる。すると、何か硬いものが手に当たる。それを取り出して、見てみる。

「やつぱり。」

「それ、ケータイっていうものだったかしら。」

「ああ。」

俺が手に持ったのは、二つ折りの携帯だ。肩にかけるでかいものでも、画面が電卓みたいなものでもない。ましてや、タッチ操作などできない普通の携帯だ。

その携帯を開くと、画面に一件の不在着信が映し出される。誰かと思えば、叔父さんからだった。

なんだってあの人から来るんだ？今は聖杯戦争で忙しいのは知っているはずだ。……いや、まさかな。

そう思いながら、電話を掛けてみる。こんな森の奥だというのに圏外ではない事が不思議ではあるが。二回のコールが鳴った後、聞き覚えのある声が、スピーカーから出てくる。

「はい、こちら古崖創次のオフィスです。」

「叔父さん、それプライベートの携帯だろ？」

「あ、バレた？」

相も変わらず、おちやらけた事を言うのは、やはり、俺の父さんの弟である創次叔父さんだった。

この人は古崖の当主であるというのに、あまりそれらしくない人だ。ちなみに、一子相伝である魔術師のはずが、何故兄弟そろって魔術師となつているのかといえ、異常であつたからとしか言いようがない。いや人としては普通なのかもしれないけれど、とにかく古崖家の人は人間みみたいな魔術師なのだ。

「それ前にも言つてたし。」

「まあまあ、別に良いじゃないか。」

良くない。

「さて、おふぎはここまですて……ジアナちゃんから聞いたよ。戦いをやめたつて。」

「……。」

その話題が持ち出された瞬間、俺は黙つてしまう。

まさかと思つていたことが、的中する。そうか、彼女が……。

「それで、何か言いたいことでも？」

「いや。僕からはないよ。ただ、聞かせたい物がある。」

「聞かせたい物？」

一体、何を聞かせるつもりなのだろうか。

「今から再生するから、ちよつと待つててね。」

再生、つまりそれは録音された音声なのだろうか。……いや、ちよつと待てよ。もし俺が予想したことであればだが、あの人達が出てくるのではないのか？

「待つてくれ！ちよつとだけ時間を……。」

「創太。」

俺が心の準備をしようとする前に、声の流れ始める。頼もしくて、懐かしくて、遠くて、そして俺にとって大きな存在である、父さんの声だ。

それを聞いた瞬間、頬に何かがつたう。

「もしものためにこの遺言を残しておく。」

父さんは第四次の時に、自分が死ぬのではないのかと直感していた

のだろう。そうでなければ、こんな物を遺しておく必要がない。

「まず、言っておく。これをジアナではなく、お前の叔父である創次に渡した訳は、彼女に心配を掛けたくなかつたからだ。」

心配を掛けたくない、か。

あの大災害が起こる前に、彼女を家に居させる為だろう。そうでないと、彼女が付いていくと意地を張ってしまう。

「さて、本題に入ろう。」

お前がこの遺言を聞いているという事は、ある壁にぶち当たってしまった時だろう。そして、その壁は死に関連する事なのだろう。

父さんだけがそうなってしまったのか、あるいは母さんもなのかは分からない。けれども、もし死ぬことが怖くなって、前に進めないのであれば、父さんからある一つの言葉を送らせてもらおう。

活きろ、と。

生きる、じゃないぞ。活きろ、だ。死ぬ事は怖いかもしれない。けど、だからと言って何もしなかつたら、それこそ死んでいるのと同じだ。

的外れな事を言っていたならば、すまん。だが、父さんにはそれぐらいしか思い浮かばなかつたんだ。だから……」

「創助さん、それは？」

「ちよつ……シロナ！今、かつこいい事言つてんだから、邪魔しないでくれよ。」

「質問にぐらい答えてくれたっていいじゃない。」

「はあ。これはな、テープレコーダーって言つてな、声を録音したり、再生したり……」

「そうなの？こんな小さいのに、そんなのができるなんて、まるで魔法みたい。」

「いやそこは、魔法じゃなくて魔術だし、しかもただの機械だし。」

じゃなくて、今な、創太にメッセージを送ってるんだよ。だからな……」

「あら、創太なら二階にいるわよ？」

「違う、違う。未来の創太にだな……」

「そうなの？未来の創太！、元気してるー？母さんは、元気してるー？
ジアナちゃんはどうかしらー？あの子ね、真面目だけど、抜けてる
所あるから、創太が支えてあげてね。」

「いや、だから……とにかく、一旦部屋の外に出てくれ。後で説明する
から。な？！」

「分かったわ。あ、あと、今日の晩御飯は、カレーよ。楽しみにしてて
ね。」

「ああ、楽しみにしておくよ。」

……ふう、行つたか。まあ、なんだ。父さんの言いたい事は、だな。
創太にとつて大切な物を死ぬ気で守らなきゃ、生きている事にはな
らないって事だ。

父さんの話は、ここまでだ。こんな当てずっぽうな説教で、創太の
考えが変わるかどうかは分からないけど、これだけは言える。

我が息子、創太。あい……」

「愛してるわよ、創太！」

「さ、最後の最後に良いところを！」

……音声は、ここまでのようで、後は何も聞こえなくなった。

「以上で遺言は終わりだ。確かに伝えたよ。」

あと、僕からは何も無いからね。蛇足っぽくなるし。今度話をする
時は、戦争が終わった後にね。それじゃあ、切るよ。」

「ああ、また。」

叔父さんとの電話もそこで終わり、携帯からはツーツーという音し
か聞こえなくなる。

全く、二人とも俺の記憶の中の二人と変わらない。なんていうか締
まらないというか、カツコつけというか、マイペースというか。

「……覚悟は、できたのね。」

イリヤスフィールは、電話の内容を敢えて聞かず、別の質問をする。
「ああ。」

その質問に対し、肯定を俺は返す。

いつの間にか、俺の頬にあった涙は無くなっていった。それは、当た
り前だ。泣く暇なんてない。俺は生きなければならぬ。生きるの

ではなく。

「……服は？」

「その机の上に置いてあるわ。」

答えを聞いてすぐに立ち上がり、丁寧に畳んである服を着る。

「怪我は大丈夫なの？」

「少しは痛む。けど、行かなきゃならないからな。これぐらいは我慢だ。」

それに、傷を治す魔術も覚えている。伊達に、あいつからいつもシゴかれてるわけじゃない。

「ありがとな、色々。二人にもそう伝えてくれ。」

「えっ……？」

彼女は、鳩が豆鉄砲を食らってような顔をする。そりゃあ、隠していたのに、相手にバレていたら驚くだろうが、隣で聞き耳立ててる事ぐらい分かるんだよ。

「俺は行くぞ。お前はここに居た方が良い。んじやあなー！」

俺は返事を聞く間もなく、部屋をすぐさま飛び出て、廊下を走る。すれ違い様に誰かが見えた気もするけど、今は後回しだ。

時間は九時頃。森を抜けて街に着くまで、走って約一時間半。まだ戦いには、間に合うだろう。

走って走って、俺は走る。十年前のように。

あの時は、ただ願っていただけだった。けど、今は違う。

今の俺は守るために走るんだ。

願望ではない。行動のために走る。

あの二人が行く場所、それはもうわかりきっている。教会だ。キヤスターも多分そこだ。

ギルガメツシュが寺に居るなら、必然的にキヤスターは、別の拠点に移っているはず。その拠点は教会で、セイバーを取り戻すためにあの二人はそこに行っている、予想を立てる。

走り続けて、一時間半。教会につく。

あれほど走ったが、まだ魔力には余裕がある。不思議なもんだ。城にいた時でさえ、あまり魔力は残っていなかったというのに。

着いてすぐに周りを見てみると、

「いた。」

あの二人と遠坂が一緒にいて、それに対峙するかのようランサーが足止めをしているところを、発見する。

「悪いが、ここを通すなつて命令でな。」

「……士郎君、凜、下がっててください。ここは、私が。」

互いは槍を構える。しかし、それには天と地ほどの差がある。一方は魔槍で、もう一方は普通の槍。得物だけで言えば、明らかにランサーの方に利がある。

「ええ、分かったわ。ランサーに対抗できるのは、貴女しかない。士郎、行く……」

「待つてくれ。」

しかし、何も持たない俺が三人の前に出る。

「創太!?!?」

「創……太……?」

驚きを隠せない三人。

「ちよつと、創太。いきなり出てきてどういうつもり? 言いたい事はほかにもあるけど、まず英霊であるランサーに戦いを挑むなんて、一体どういう秘策を持ってきたのかしら。」

「例によつて極秘だ。」

「それ答えになつてないわよ。」

なんとでも言え。悪いが、これは他の人から受け継いだものなんだ。おいそれと他人に見せられない。

「さて、俺は状況が分からない。敵である遠坂が、衛宮達となんているのかとかな。」

大方の予想はつく。アーチャーが側にいない事から、キャスターに盗られたのだろう。そして、仕方なくサーヴァントが不在同士の衛宮達と組んだ。

「けど、それは別にどうでもいい。重要なのは、俺にあいつを任せて、お前らは先に行つてほしいつて事だけだ。」

「お前、本気か?」

「本気だ。」

衛宮の問いに、俺は力強く返す。

「それに、これは俺がやらなくちゃならない戦いなんだ。」

「……ジアナさん、遠坂、行こう。」

衛宮は、俺の意見に従ってくれるようだ。

「勝てるのね？」

「過信じゃない限りな。」

「なら、任せたわよ。」

遠坂もしかりだった。

「創太。」

そして、残りの一人は、不安や様々な感情を混じえながら、俺を見る。俺にとつても、彼女にとつても、二人の再開は気まずいものがある。罪悪感やら、不信感やら。けれどもだ。

「お互いに言いたい事はあるけど、また後だ。今は進むだけ。」

そうだろ、ジアナ？

しかし、俺はそれを全て吹き飛ばすような言葉を言い放つ。

そしえ彼女は、泣きそうな顔を我慢しながら

「……はい。」

と答え、ランサーを横切り衛宮達と共に教会へと入っていく。

「坊主、面構えが変わったんじゃないやねえのか？」

三人も素通りさせたランサーは、悪気もなく平然と話をする。

「いいや、そんな事ないと思うけど。」

それより良いのか？見逃しても。」

「お前と戦ってた事を口実にすりゃあ良い。」

坊主こそ、俺と戦う覚悟は出来てんだろうな。」

「とつくにな。」

出来たから、ここに来ている。

俺は恐怖している。戦いの先に待つ死を。だが、それを乗り越えなければならぬ。だから、ランサーに戦いに挑んだ。

正直に言えば、戦う相手は誰でも良かった。けれども、彼が相手ならば文句は無い。

「英霊相手はキツイが、こちとら勝算があるからな。」

俺は構える。それは何の形にも当てはまらない、独自の構え。

「ほう、準備万端ってところか。」

ならば、その取り損ねた心臓、今度こそ貫き受ける！」

そして、ランサーも槍を構える。右腕を引き、左手を切つ先よりも少し手前側に添える。

「俺は死ぬ気で戦い、そして活きる！」

ここに勝つためではなく、活き抜くための戦いが始まる。

復帰戦・VSランサー

英霊と人が戦う場合、どのような戦況になり得るのだろうか。そもそも、そんな例など今までにあったのだろうか。数えるのに片手すら要らない可能性もある。

まあ、あるかないかなんてのは、正直どちらでもいい。重要なのは、「はあっー!」

「くっ……!」

俺が英霊を押ししているという、絶対にありえない光景なのだから。せめて、互角に持っていければとは思っていたが、ここまで有利な形になるのは、俺としても予想外だ。

ランサーが反撃できていないわけではない。しかし、俺はそれを紙一重でかわし、時には魔術によつて硬化した腕で弾く。そして、魔力をほぼ全て使った身体能力の強化魔術で、怒涛の攻撃を仕掛ける。

耐久力、防御力、体力などを、全て俊敏力と筋力に変え、一発も当たらないように、攻撃する。

攻撃の数だけで言えば、俺の方が圧倒的に多い。もちろん、相手は槍で、こちらは素手なのだから、得物によつて攻撃の数は変わる。しかし、槍の弱点である懐に入ってしまったら、相手の反撃も必然的にほぼ脚を使ったものになり、結果、肉弾戦に近い形になる。

だからといって、ランサーにダメージを負わせられるとは限らない。い。

「おらっー!」

ランサーはついに槍から左手を放し、殴りに掛かる。それは予想外の攻撃であり、俺は食らってしまう。だが、そこまで痛くはない。何故ならば、それは距離を離すためのものであったから。

相手は十メートル離れたところで、止まる。互いに、傷はほとんどない。俺の攻撃は、全て避けられたのだ。

「はあっ、はあっ……!」

更に、俺の方がスタミナの減りが大きい。肩で息をするほど、体が酸素を求め。当たり前前だ。ここに来るまでも、休まずに走ってきた

のだから。

だが、ここで止まれない。

「ふっー！」

相手との距離を一気に詰める。槍が俺を狙おうとするが、関係ない。その切っ先をギリギリで避ける。皮膚にかすり、血がうつすらと出ようが、前に出る。

避けた場所に蹴りを入れようとも、腕で受け止める。どんなに衝撃が強かろうと、耐えきる。その場に留まり続ける。

そして、

「っだああああ！」

右手で渾身の一撃をぶちかます！

もちろん、それは避けられる。単調な一発で当てられるとはおもっていない。だから、次に体を回転させて、回し蹴りを行う。そして、またかわされる。

それでも、攻撃を次々と展開していく。何故、ここまでランサーと渡り合えているのか、よく分からない。しかし、今は死ぬギリギリを見極めて、相手が切り札を出す前に倒す。そして、そして！

……いや、そうか。心が吹っ切れたからか。俺は今まで、どこか諦めていたところがあつた。死にたくないと思いつつながら、同時に助からないと。

けれど、今はそうじゃない。活きたいと、自分から願ひ、そして掴み取ろうとしている。だから、英霊の身であるランサーと互角以上の戦いができている。

それだけではなく、規格外な古崖の魔術のおかげでもある。しかし、スタミナも一気に使っているので、長期戦なってしまうばこちらの終わり。早いところケリをつけてしまいたいが……！

「うぐっ……！」

しかし、俺は蹴りの一発を受け、またもや相手との距離が開かれる。すぐに走って近づこうとするが、体が言うことを聞かない。スタミナ切れだ。少し休めば、また動けるだろうが、短期決着という作戦は失敗に終わったようなものだ。

歴戦の強者相手に計画通りとはいかない。それは、予想していた。「短時間だが、ここまで食いつくとはな。思ってもみなかつたぜ。だが、そろそろ体力の限界みたいだな。」

凶星の事を言ってくれる。しかし、このままではやられる前に倒す作戦は、無理だ。

「はあっ、はあっ……そんなこと言っていないで、お前からも仕掛ければどうだ。防戦一方なんて、英雄の名折れだ。」

俺は息を切らしながらも、あえて挑発をする。ランサーの性格を全て知っているわけではないが、予想から、自分を殺し得る相手に、慢心や出し惜しみはしないはずだ。

スタミナをフルに使い、押し切るといふ第一の作戦は失敗。だから、第二の作戦を実行する。だがこれをやるには、相手が奥の手を出さなければならぬ。だから、俺は煽った。

「何を企んでんのかは知らねえが、お望み通り使わせてもらうぜ。」
来た。こっちの思惑は透け透けだったけど、それに乗ってくれた。

ランサーは最初に構えた時と同じように、槍を構える。少し違うところは、左手がしっかりと槍を掴んでいる事だ。

「この槍が穿つ物は、全員俺が認めた戦士だけだった。そんなもって、お前もその中に入ることになる。」

つまり、ランサーは俺を認めた、そういう訳か。

「ありがたいけど、同時に迷惑だ。どうせ聖杯戦争が終わったら消える死人お前に認定されても嬉しくない。」

それにな、俺は絶対に生き残るんだ。じゃなきや、戦場ここに戻って来た意味がない！」

死の恐怖を乗り越え、そして、先に進まなければならぬんだ。

「けっ、そうかよ。」

ランサーの魔槍に異様な量の魔力が集まる。それは、宝具の発動を意味する。

あれは因果関係を逆転させ、発動した瞬間に心臓を穿つ結果を作り出す。つまり、もうすでに俺の死は決定されたという事になる。

怖い。

死ぬのは、こわい。

コワイ、コワイ。

「……だから、なんだ。」

人間はいつか死ぬ。そんなのをいつまでも怖がってられない。大切なのは、今を生きる事だ。

「その心臓、貰い受ける——！」

ランサーは堂々と宣言をしてくる。お前の負けだと。

落ち着け。あの宝具に対抗できる手段はある。それを実行するだけだ。

俺はつま先だけが地面に着くように、全身をバネのようにして、ジャンプを絶え間なくし続ける。腕は八の字で、即座にガードもパンチもできる。まるで、ボクシングでもするかのような体制だ。

跳躍を十回ほど行った後、それをやめて、相手に対して半身になり、大きく足を広げ、右腕も大きく引き、拳を天に向ける。

「召喚——」

その呪文と共に、俺はある道具を手元に呼び出す。自宅の地下室にあらかじめ仕込んであった物で、数少ない魔力を消費したがそれ以上の価値がある。以前にもジアナがこの魔術を使っていたが、その時は本来の使用法でなかった。しかし、これが本当の使い方だ。

それは黒い球で、見た目だけでは素材がなんなのか分からない物。

「っ……まさか、それは——」

相手はこの黒い球を見た瞬間に驚く。いや、この構えも含めてなのだろう。どちらにしてもランサーは、見たことがあるようだ。

それもそのはず。これらは全て、ランサーの元マスターが使っていた物。そして同時に、ランサーの死も確定した。

「……いいぜ、だったら尚更全力でいかせてもらおう！」

魔槍は更なる朱みあかを帯びて、禍々しくなる。

黒い球はそれに呼応するかのようになり、俺の右手の上で魔力の剣を形取る。

本来であれば、俺にこんなでいきすぎた宝具は使えない。けれども、俺の魔力をあの人に似せる事によって、この宝具を、いわば騙して使

えるようにしているのだ。

そして、互いに手札を切る準備はできた。

「刺し穿つ……！」

「後より出て先に断つ物……！」

後は、真名解放のみ……！！

「死棘の槍！」

相手の方が、発動が少し早かった。朱色の魔槍が、俺の心臓を穿とうと、狙ってくる。しかし、

「斬り抉る戦神の剣！」

鉛色の球を殴り、相手へと撃つ。真つ直ぐと、光弾に化して。まるで、相手が攻撃する前にこちらが攻撃したかのように。

だが、ランサーも黙ってやられる訳がない。光弾の軌道を読み、避ける。けれども、

「曲がれーっ！」

その光弾はランサーの横を通過しようとした瞬間に、直角へと曲げられる。

そして、

「がはっ！」

ランサーの心臓を貫く。

これで本来ならば、相手が宝具を発動する前に、こちらが先に攻撃を当てたという事象が主張され、魔槍は動きを止める筈だ。

だがそれは、主の手から離れようとも呪いにより、まだ俺の心臓を狙い続ける。こうなる事は予測していた。心臓を穿つという結果と、先に攻撃したという結果の両方を実現するには、相打ちしか方法は無い。

「性質、変化……！」

いや、まだ他に方法はある。この呪いから生き残る術はある。

心臓を穿つという結果を回避するのは、難しい。それこそ因果をさらに変化させなければならぬ。しかし、そのまま受ければ治癒阻害の呪いで、回復は不可能になる。

だから俺は、その槍を心臓に受けながら、即座に回復させる。

「この死は意味を成さず！」

胸に手を当てて、詠唱する。

「っ……い！」

突如として、痛みを感じる。血が流れだし、体の中に空気が入っていくのが、感じられる。

死が迫る。

自分から向かっていく。

死へと。

嫌だ。

いやだ。

イヤダ

けれど、そんな恐怖は振り払う。

直後、呪いの朱槍は俺の心臓を穿った。同時に、それが纏っていた魔力は霧散する。まるで、因果関係は成立されたのだと意味するかのように。

ここだ。早く槍を抜いてしまわなければならない。そうでないと、作戦が無意味になる。

胸に刺さった槍に手を取り、一気に引き抜く。

「うぐっ！」

痛みが胴体を蝕む。それでも、俺は堪えて続ける。

「ぐっ……がっ……はあっ、はあっ。」

そして、槍は最後に、ひととき大きな痛みを一瞬だけ置いて、体から離れる。

「これで……失敗してたとかは……笑えない冗談だな……。」

そんなかすかな不安を裏切り、胴体に空いた穴は光りだす。これは、成功した証だ。

傷はみるみる内に塞がり、槍に穿たれる前の状態に戻る。

「躲せないなら、受けた後の事を考えりやいってか。」

膝をついたランサーは、心臓を失いながらもまだ生きていた。この様子だと、俺が仕組んだカラクリを全て見抜いたようだ。

「最初から最後まで、全部賭けみたいな物だったけどな。」

「だが、どつちにしろ俺は死ぬしかない。

バゼットのアレを見せられた時は驚いたが、その後の魔術もとんだ規格外だな。確かこの国の化け物だろ？」

「ああ。」

ランサーの言う『カマイタチ』という魔術は、平たく言えば対象を絶対に傷つける代わりに、絶対に癒すというものだ。魔術の基本である等価交換を突き詰めてできた魔術で、その気になれば生と死を交換することもできる。ただし、その魔術で死んだ人が生き返るだけのことだ。

これを俺は、殺傷と回復の効果を時間差を大きくして発動させた。心臓に穴を空け、その後には槍を受ける。そうすれば槍が心臓を穿つ結果を生み出し、かつ傷つけてはいないので、回復阻害の呪いは受けない。後は、回復の邪魔にならないように、槍を撤去すればいい。

それはまるで、カマイタチのようだ。名付け親は母さんらしい。名前をフェニックスにしない辺り、センスの良さが感じられる。

「完敗だ。お前は、紛れもなく素晴らしい戦士だ。」

ランサーの体が光の泡になっていく。

……何故だろう。何故、納得がいかないと感じてしまうのだろう。「そうか。なら、敗者は勝者の言うことを聞くっていうルールは知ってるか？」

そんな事を思ったからかランサーに話を持ちかける。

「なんだ、突然？」

「知らなくても、構わない。」

ランサー……俺のサーヴァントになるか？」

「悪いが断る。主変えはもうこりごりなんでね。」

「じゃあ、しょうがない。無理強いはできないな。」

ランサーにもランサーなりの、ルールがあるのだろう。強制させるのは、性に合わない。

ランサーを包む光が強くなる。そろそろ、限界なんだろう。

「今までの戦いは散々だったが、最後の戦いは、まだマシだったぜ。」
そう言い残して、ケルトの大英雄は消えていく。

「……先に進もう。」

あいつ、良い奴だったのかもな、とか思っている暇はない。俺には、まだやるべきことがある。少なくとも、この戦争が終わるまで余計な事は考えてられない。

俺が活きるために、俺は戦う。

そう決心して、教会の中へと一歩踏み出す。

本当の正解

教会の中へと入り、魔力が集まっている場所を探すと、地下への階段を発見した。この先に、きつとジアナ達はある。そして、アーチャーも。だが、キャスターは多分いない。そいつの魔力だけが感じ取れないのだ。

何故かは、分からない。しかし、この階段を降りなければ、この疑問の答えは見つけられない。

俺は慎重に、一步、また一步と足を運ぶ。奥にまだいるであろう敵の存在に、気をつけながら。自身の存在を悟られないように、魔力を、気配を消す。

やがて、階段の終わり近づく。それと同時に俺は、更なる注意を払って、その先を少しずつ覗く。

「——やめろ。もう決着はついた、これ以上は」

耳からは制止掛ける衛宮の声。そして、目からはアーチャーが白い中華剣が振り下ろそうとする光景。それが脳に伝わった瞬間、俺は前へと出ていた。

今までの蓄積された疲労なんて無かったかのように、全速力でアーチャーの前に出る。そして、強化も硬化もしていない手の平で、斬撃を掴む。

「……何故、止めた？」

自身の行動を止められたアーチャーは、俺の行動を問う。

部屋の中にいる俺とアーチャー以外の全員は、俺の手に注目する。そこからは血が流れ出て、剣を赤く染めようとしていた。しかし、対峙している二人は気にしてなどいない。痛みなどどうでも良かった。死に行く姿を見るよりは。

「状況は分かっているのか？ そいつは、キャスターのマスターだ。キャスターがいなくなったとは言え、敵は倒さなくてはならない。」

アーチャーが何か驚くべき事実を言っている気がするけれど、関係ない。後ろにいる葛木先生が何者かなんて、そんな事はどうだっていい。

「だからって殺すのか？」

「ああ、殺す。お前が殺さないという、偽善に塗れた提案を出してもな。」

「じゃあ、なんで殺す必要があるんだ？」

怒りがふつふつと湧き上がる。

殺す、なんて簡単に言うアーチャーが許せない。

「そいつが邪魔をするからだ。」

「だったら……っ！」

背後から微かな空気の流れを感じる。しかし、殺気も敵意も無かったが故に反応が遅れ、寸前のところでそれを躲す。

「……葛木先生。」

後ろを振り向くと、仏頂面な顔が俺を見ていた。

「古崖、そこをどけ。」

「嫌です。」

俺が否定した途端、葛木先生は独特な構えをする。それは相手を巻き取るかのような蛇だ。

「そうか、ならば……っ！」

突如、葛木先生は倒れる。その後ろにいたのは、ジアナであった。

「気を失ってもらっただけです。命に別状はありません。」

「悪い、助かった。」

感謝の言葉を述べて、アーチャーに再び向き直す。

「殺す以外に方法はあったらだろ？」

「だが、次も邪魔をする可能性がある。」

「なら次もあすれば良い。」

殺すって事は、その人を終わらせるという事だ。説得も改正もせず、その人は施しようのないと思つて、人を殺すのは諦めてるだけだ！

俺は強く、強く説得する。

死を見たくない。俺がこんな行動をとつた理由はそれだろう。しかし、他にも理由はある気がする。

何故だ？何故こんな事を……

「分かった。」

「なら、殺さないでくれるな。」

「いいや。分かったと言ったのは、お前を説き伏せるのは無理だと理解したからだ。だからと言って、その男を殺すのはいささか困難だ。もう、殺す意味すらもなくなりそうだからな。」

だから……」

アーチャーは、別の方向を向く。

まさか！

「ぐっ……！」

アーチャーは今までも見た白黒の双剣で、衛宮の首を刎ねようとする。しかし、衛宮も同じ双剣を投影し、それを防ぐ。

「やはり、この世界の衛宮士郎は少々手強いようだな。」

「何の事だ……！」

この世界の……？

いや、今はアーチャーを止める方が先だ。

「オレも全力を出さなければ、お前を殺せない。」

十数の剣が突如して宙に出現し、衛宮を襲う。

部屋にいる誰もがあいつを助けようと、駆け寄る。

「ふっ！」

衛宮の横から、青い何かが体当たりをする。その正体は、あいつのサーヴァントであるセイバーだった。おかげで、衛宮は串刺しにならずに済んだ。

しかし、問題はその体当たりが全力であった事だ。全力でただ体を飛ばすだけならば、規格外であるはずの英霊としての力はあまり残されていない事になる。

「アーチャー、何のつもり!? もう芝居は終わったでしょう！」

激怒する遠坂。

「何のつもりか、だって？ 見ればわかるだろう。」

「見ればって……まさか！」

何を感じていたか、遠坂はまたもや衛宮にいち早く駆け寄ろうとする。だがしかし、それは上から降る剣の檻によって叶わなかった。

「ここまで来て邪魔などさせせん。契約が切れた今、お前にかげられた令呪の縛りも存在しない。」

「なんでよ、アーチャー！アンタ、まだ士郎を殺す気なの!?？」

衛宮を殺す……?？」

「そうだ。アレと契約し、ただ摩耗するだけの時間を過ごしたオレが、唯一つ望んだ最後の願望。」

「やはり、貴方はそのような存在でしたか。」

「ジアナは全てを理解したかのように、振る舞う。」

俺も所々ならわかる。しかし、その理由だけはまだ理解し得ない。

「ジャンヌ・ダルクだったな。キミも理解しているだろう。アレと契約すれば、どんな物が与えられるかを。」

「ええ。確かに貴方にとつては、過酷ではあるでしょう。」

意味の分からない会話だけが、続くその時。

「——告げる！」

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら——」

遠坂が詠唱を始める。檻から手を伸ばし、その先にはセイバーがいる。

「——我に従え！ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」

つまり、これは再契約。セイバーが魔力を供給するためには、マスターが必要。

「セイバーの名に懸け誓いを受ける……！」

貴方を我が主として認めよう、凛——！」

そのマスターは遠坂だ。

そこに立つのは、もはや今までのセイバーではない。魔力は格段に上がり、嵐すらも巻き起こるかのよう。

衛宮と契約していた時とは大違い。それに俺は見入ってしまった。

「ちっ、元より凛と契約させるつもりだったが、手順が変わったか……！」

こうなってしまうえば、セイバーとアーチャーの力の差は歴然だ。方や遠坂凛という優秀なマスターがおり、方やマスターなんてのはいな

い。そして、数でも有利だ。どれだけ消費しているかは知らないが、ジアナもいるし、俺も微力ながら協力できる。

「アーチャー、貴方が何もせずには退けば、そのまま逃がしてあげましょう。」

「そうだな、キミの言う通り一旦退くでしょう。」

一旦？という事は、まさか……。

「まさか！」

「待ってくれ、ジアナ。」

アーチャーの行動を感じたジアナだったが、俺が制止させる。そして、その予測通りアーチャーは、檻に閉じ込められていた遠坂を担ぎ、首筋に手を当て、意識を刈り取る。

「どこに行く気です、アーチャー！」

「邪魔が入らないところだ。ここまで数の不利があるのだから、退くしかないだろう。」

衛宮士郎、お前一人で来い。さも無くばこいつの命は保証せんで。

場所は……

「待てよ、アーチャー。」

アーチャーが言い切つて逃げる前に、俺は提案を持ちかける。

「遠坂は置いていけ。」

「何？」

「代わりに俺が人質になろう。魔力は……」

手のひらにありつただけの魔力を込めて、誰もいない壁へと放つ。轟音が鳴り響き、土埃が舞う。それが晴れた時、壁には人が五人ほど入りそうな大穴が空いていた。

「これで……はあつはあつ……全部だ。」

俺はアーチャーに対抗する手段がない事を証明した。後は、相手の出方次第。

だんだんと頭がふらふらしてくる。全ての力を使い果たしたのだから、本能的に睡眠を取ろうとするのは、間違いではない。しかし、今はまだ持ち堪えなければならぬ。

「良いだろう。凜の代わりに、貴様を人質にとってやる。」

アーチャーは提案に乗ってくる。

色々と違和感はあるけれど、一つの仮定で全て解決する。しかし、答え合わせはまだだ。

「……郊外の森に行ってくれ。あそこなら、誰の目にも入らない。イリヤスフィールは居るけど、俺が説得する。」

「ほう、あそこか。こんな手狭な場所では、全力を出せんからな。」

思惑通りに事は進む。後は……

「衛宮、体力が回復したらすぐ来い。アーチャーの魔力切れなんてのは狙わないでくれ。」

アーチャーのスキルで単独行動という物がある。魔力の供給無しでも、ある程度の時間は現界できる。しかし、そう何日も持たないはずだ。

「そろそろ良いな？」

意識を失う前に聞いた最後の言葉は、確認であってそうではないアーチャーの一言だった。

＝＝＝＝＝

「貴女が……ジャンヌ・ダルク!?？」

アーチャーが創太を連れ去り、教会に残された四人は一度衛宮邸に帰り、互いに状況を説明し合っていた。葛木に関してはジアナが記憶を操り、聖杯戦争に関しての物を消していた。

ジアナの正体、キャスターが遠坂からアーチャーを奪った事、そして、創太が一時戦いを降りた事を。

「私も聞かされた時は驚いたわ。けど、英霊の座のバックアップは受けてないから、能力や情報なんかは最初に無かったそうよ。」

「凜の言う通り、本来ならばルーラーとして召喚される筈ですが、聖杯を通してではなく、英霊の座から直接喚び出されたために、この現代や他の英霊の情報、そして私自身の力も保持してはいませんでした。」

しかし、この人形の体には成長という機能が施されていきました。おかげで、現代の知識、技術、さらには魔術までも会得できるようになったのです。」

同時に、ジアナが以前に話した昔話は嘘であったことになる。それ

は士郎と凜も承知ではあり、セイバーも元から気づいていた。

「まさか、サーヴァントではない英霊とは。であれば、第四次のキャスターに、何故あんな矛盾した態度を取っていたのかが分かります。」

「彼には……そうですね。申し訳ない事をしてしまいました。」

苦笑をしながら、彼女はあの姿を思い出す。あれはジアナにとって、目を塞ぎたい出来事でもあった。

「ちよつと、第四次つて何の話よ。」

蚊帳の外にされた遠坂は、二人に突つかかかって行く。

「それは……いえ、今は今後の話をすべきです。」

しかし、ジアナに話を逸らされてしまう。遠坂にとって奥歯の隙間に何かが詰まっているような感覚だったが、彼女が言った事も確かに大事だと考え、渋々従う。

「今の時間は午前零時。体力を回復する為に、六時間。アインツベルン城への道を考えて、六時間。午後零時、つまり十二時間後に、アーチャーと戦闘というのが今後の予定です。」

「十二時間後？そんなの短すぎるわ。アーチャーも言ってたでしょ。一日は待つって。その言葉通りにするべきよ。」

ジアナの提案を遠坂は、否定する。

遠坂のいう通り、アーチャーは一日以内が期限だ。それをギリギリ待っていた方がアーチャーの魔力は消費され、衛宮の体力は回復する。しかし、そうしないのには訳がある。

「これはソウタの提案です。」

「創太が？いつの間になんか事、言っていたのよ。」

「今さつきです。念話の魔術で彼と話をしていました。その時間に来てくれと、ソウタからの伝言です。彼自身も何かアーチャーに言うことがあるのでしょうか。」

そして、私達が時間通りに来なければ、ソウタが死んでしまう恐れもあります。」

創太が死ぬ。その言葉だけで、全員は衝撃を受ける。

「それどういう事よ。」

「言葉通りです。彼はアーチャーと話をして、場合によっては戦い、そ

して、アーチャーの魔力を消費させます。そうなれば、アーチャーが痺れを切らし、彼を殺すかもしれません。

彼は体力を回復する為に、十二時間と言ったのでしよう。それを過ぎれば、むしろ消耗するだけです。」

「……俺は創太の提案に乗ります。」

「ちよつと、衛宮君？」

「遠坂、あいつがお前の身代わりになったのは、多分そのためじゃないのか。俺よりも先に、アーチャーと一対一になるにはそれしか方法がなかった。」

俺たちに来てくれて言うのは、助けてほしいだけじゃなくて何か別の意味があるんだと思う。だからさ遠坂、創太の提案に」

「分かった、乗るわよ。あいつに借りを作っちゃったんだから、乗るしかないじゃない。」

衛宮の説得に負けた遠坂は、またもや渋々と言った感じで答える。

「セイバーも良いよな。」

「はい。私はマスターに従うのみです。」

「皆さんありがとうございます。最後にもう一言、彼からの伝言です。わがままに付き合ってくれて申し訳ないと。」

「……最初から、素直に頼めば良いのに。」

遠坂は、誰にも聞こえない声で、そうぼやく。

過去と恩人と友と

また、夢を見る。

前にも見た夢。父さんの昔話を聞かされる。

「父さんはな、昔正義の味方に会った事があるんだ！」

一字一句、喋っている事は何も変わらない。

何故またこの夢を見るのだろう。

正義の味方、それは衛宮士郎が目指しているもの。

ただの偶然だろうか。はたまた……

「それで、そいつの格好はな……」

――2月13日――

「……そろそろだな。」

睡眠から目を覚まし、俺がジアナ達に提示した十二時間が、経とうとしていた。周りを見ると、物が大量に置かれてある。自宅の地下室ほどではないが、色々な物がある。しかし、ここは屋根裏ではある為、換気はあそこほど悪くはないだろう。

だが、そればかりを気にしてられない。拘束されている状態から、脱出しなくてはならないからだ。後ろで両腕を縛っている縄を周りに燃え移らないように、火の魔術で焼く。こうなれば、俺は人質ではなく、脱走犯に早変わりだ。

「起きろ、イリヤスフィール。時間だ。」

隣にいる幼女の体を揺らす。

この主である彼女は、俺がアーチャーに連れられ、ここアインツベルン城に来た時、明け渡してくれと頼み、了承したまでは良いものの、彼女はその後どうするかを考え、逃げるか残って人質になるか、という選択から自分で後者を選んだ。

十二時間という短い時間を提案したのも、実はこいつが理由でもある。別に俺は何時間でも待っていられるが、彼女がいつまで保っていられるか分からない。

「……ん〜。あと五分。」

かわいい……じゃなくて。

「ほら、衛宮がもうすぐ来るんだから、そのままだと逃げ遅れるぞ。」
「シロウが?……あ、そうよ!シロウが来るのね!」

衛宮の話を持ち出すと途端に食いつく。どんだけブラコンなんだよ。

「起きたか?ならさっさと逃げるから、後ろで両腕を縛っている縄を見させてくれ。」

イリヤスフィールの後ろに回り込み、さつきと同じように炎で縄を焼く。ただ、今度はより慎重に、イリヤスフィールの肌には触れないように、一部だけを焼き切る。そこからは、手作業で縄を解いていく。縄だけを燃やすなんて器用なことは、俺にできないからだ。

「これでよし。痛い所とかはないか?」

「縄で縛られた所以外ないわ。」

「本当か?硬いところに座ってたんだから……いや、なんでも」

「っ!バカ!」

「ふぐっ!?!?」

強烈な平手打ちが、俺のほおに直撃する。

「……途中で止めたんだから、引っ叩かなくても良いんじゃないか?」

「そこまで言ったら、もうアウトよ!」

連想させてしまえば、アウトなのかよ。

「レデイに対する扱いが本当になってないわね。」

うるせえロリツ娘(十八)。

「……なあ、イリヤスフィール。」

「なによ。」

「なんで、ここに残ったんだ?」

俺は今さつき疑問に思った事を問う。

「それは……主人として、この屋敷を離れる訳にはいかなかったからよ。それに森を歩くのに時間が掛かるわ。だったら、シロウを待てばおんぶをしてもらえるかもしれないじゃない。」

「本当にそれだけか?」

「本当よ。」

変な間があったから怪しいし、彼女が言った事は理由として弱い。

一つ目は、今までの事を考えるとよく屋敷を離れていたから納得がいかないし、二つ目も従者がいるから、彼女らに連れて行ってもらえばいい。でも、まあ

「そうか。だったらこの話は終わりだ。」

追求するのも馬鹿らしい。

「さあ行くぞ。お前は城から出たら右から本道と並行になるように森の中を行け。そうすれば、あいつらと合流できる。俺は真つ正面からアーチャーと向かい合う。」

「ええ、分かったわ。」

階段の手すりに手を掛け、イリヤスフィールを誘導する。今は、彼女の真意を探るより、こっちの方が大事だ。

「……貴方が心配だったって、言える訳ないじゃない。」

「なあ、イリヤスフィール。こんな噂聞いたことあるか？」

難聴は衛宮の特権スキルだって。」

「へっ?。」

彼女は突拍子もない会話を出され、裏返った声をだす。俺からすれば噴き出しそうだから、その声は止めてほしい。

「ほら、グズグズしてないで脱出するぞ。」

「ちよつと……士郎の特権スキルってなんなのよー!。」

—————

城の玄関から真つ直ぐ歩き、森の中を歩く。太陽の日差しが眩しい。時間はもう朝といったところか。

イリヤスフィールとは既に別れて、今は単独行動を取っている。目的の地は城から少し離れたところ。バーサーカーと戦った場所だ。

彼女からは場所は屋敷を壊さなければどこでも良いと言われ、アーチャーが決めた場所はそこだった。

「脱走犯が真つ向から向かってくるとは、一体どんな勇氣ある者かな?。」

出会って早々皮肉か。

「看守がすっかりしないから、手応えを感じなくてな。だから、敢えて堂々としてみたんだ。どうせ見張りがすかすかだからな。戦っても

弱いだけだろ。」

負けじと反論をする。

「そう言うことか。しかし、残念ながらこの先にはもう進めんど。」
「どうせ用があるのはお前だ。お前も分かっただろ。」

アーチャーと話をしながらも、周りの魔力を探る。すると右奥の方で隠れてはいるが、覚えのある魔力を感じる。ジアナ達だ。しっかりと時間通りに来てくれたようだ。

これで、アーチャーについての正体を聞く準備は整った。

「早速だが本題だ。アーチャー、お前は一体何者だ？」

「衛宮士郎と、お前も分かっているはずだが？」

こいつ、敢えて言いやがった。質問の意味を理解しているくせに。けど、こいつのペースには乗らない。落ち着いて、ゆつくりと俺の求める答えを引き出す。

「悪い、言い方を間違えた。だから、質問を変えよう。」

お前は何の成れの果てなんだ？衛宮士郎。」

その瞬間、アーチャーの顔が緊迫したその物になる。

「良いだろう、古崖創太。そんなにオレの正体が気になるなら、教えてやる。お前の親友が、どれだけ愚かな存在かということを。」

衛宮が愚か、か。それをいえば、俺も愚かな奴の一人だ。死を怯え、未だに曖昧な目標一つすらないただの愚か者だ。

しかし、今は言うべきではない。アーチャーの話に耳を傾け、あいつがいかなる存在かを見極める時だ。

「オレは最初、人々を救うためと称し、世界中を奔走していた。争いがあれば解決し、絶望した人がいれば救ったさ。それこそ、正義の味方になるために。だが、実際のところは違った。

殺して、殺して、殺して、殺し尽くした。

己の理想を貫く為に多くの人間を殺して、無関係な人間などどうでもよくなるくらい殺して、殺した人間の数千倍の人々は救ったさ。」

それは、後悔だった。救いたかった筈の人間を、無理だからという理由で、殺してしまう後悔。

「それでも、オレは戦った。何度も何度も。」

——けど、きりがなかった。戦いを何度終わらせようとも、何人もの人を救おうとも、新しい戦いは起きてしまう。

そんなものがある限り、正義の味方っていうのは有り続けるしかない。

だから、殺した。

せめて手が届く範囲は救おうと、何十人もの人を殺した。今度こそ終わりだ。今度こそ誰も悲しまないだろうと。

——だが、終わる事はなかった。

一人を救えば二人。二人を救えば十人。十人の次は百人。さて、その続きはいくつだったか。そこで悟ってしまった。衛宮士郎が抱いていたものは、都合の良い理想論だったと。」

正義の味方という理想を抱く限り、こいつは終わりのない無限ループに陥ってしまった。

「席は限られている。幸福という椅子は、常に全体の数の少な目しか用意されていない。

その場にいる全員を救う事などできないから、結構は誰かが犠牲になる。」

多くの人間を救う為に、一人の人間を絶望に落とした。

そうやって走り続け、そして、何度も欺かれてもきた。救った筈の男に裏切られたこともある。死ぬ思いで争いを治めて、その張本人だと押し付けられ、斬首刑だ。

それでオレの罪も償われたさ。だから、それだけならばまだ良かった。」

「けど、そうじゃなかった。」

アーチャーの顔が皮肉れた笑顔で歪む。

「ああ。オレは、それよりも以前、世界に死後を預け、守護者になる事を契約した。その代わりに、力を貰い、生前で出来る限りの事を尽くした。」

守護者、ジアナにも聞かされたことがある。それこそ、魔術師になつたあの日にも。

「人間の滅亡が来るとき、それを食い止めるのが守護者、だっけか？」

「良く言えば、な。だが、実際にはそんな都合の良いものでは無かった。それは、生前の時も理解していたが、良いように使われるための者だった。」

当時のオレは、それでも人々のためになるなら、今度こそ理想を守れるなら、そう考えて契約した。

それが、実態はどうだ。ただの掃除屋でしかない。既に起こってしまった事を、その力をもってして無にするだけの存在。絶望を嘆く人々を救うのではなく、絶望と無関係に生を謳歌する部外者を救う為に、絶望する人々を排除するだけの殺戮者。

——馬鹿げた話だ。それが、今まで自分の何が違う。」

……そうか。こいつは、守護者になり、そして

「自身の抱いた理想に、裏切られたって訳か。」

「しかも幾度となく、な。それも慣れてしまった。」

そして、何度も見てきた。

意味の無い殺戮も、意味の無い平等も、意味無い幸福も……！

オレ自身が拒んでも見せられた。オレが望んだのはそんな事では無かった。そんなモノの為に、守護者になったのではない……!!？」

英霊エミヤは、人間の生き方ではなく、多分だが自分自身に怒りを覚えている。人の醜い部分だけを見せつけられる、理想と乖離してしまふ人生を選んでしまった自分に。

「それが、衛宮を殺そうとする理由か。守護者になれば、自分の意思で行動をする事はできない。だから、この聖杯戦争に参加し、遠坂との契約を切れるように仕向け、自由に行動できるようにする。」

そうすれば、この時代の衛宮を殺すことができ、矛盾点が生まれ、世界から外れる。けどそれは」

「可能性があまりにも低い、そんな事は百も承知している。これは、罪を償い過去を無かった事にするなんて、高尚な物ではないさ。オレがやっているのは、ただの八つ当たりだ。過去の自分へのな。」

それがアーチャーの全てか。ここまで聞ければ十分だ。

「だったら」

「お前の質問に答えたんだ。今度は、私の質問に答えろ。」

古崖創太、貴様は一体何者だ？」

「は？」

それは、以前にも一度訊かれた質問だった。

「生前、オレの友人の中に古崖創太という名前などいなかった。力の魔術を持った奴も、聖女を連れだした奴もな。更に、私はサーヴァントとして、冬木の第五次聖杯戦争を何度も経験してきた。衛宮士郎を殺そうとし、そして失敗に終わった。それでも、古崖創太に出会った事はない。

それを聞かせたお前にもう一度問おう。貴様は、誰だ？」

生前にはいない？何度もこの戦争を経験した？

—— 出会ったことはない。

「……そうか。そういうことだったのか。」

アーチャーの話、そして、俺の過去を照らし合わせた時、俺の中で全てが繋がった。

「ふっ……くく、あーっはっはっはっ！」

俺は突如として、狂ったように笑い出す。

「気が触れたか。」

「ははっ。いやいや、そうじゃないさ。」

俺は今、嬉しいんだよ。知らず知らずの内に、命の恩人と出会えた事にな。」

「何？」

さっき全てが繋がったと言ったが、それは大げさだ。しかし、謎が解けた事は確かだ。あの人の正体が分かったんだから。

「お前の質問に答える前に、少し昔話をさせてくれ。と言っても、それは俺のではなく、俺の父さんのことだ。」

父さんは、母さんと出会うずっと前に、世界中を旅していた。」

最近の夢にも出てきて、イリヤスフィールにも語ったあの話。

今度は詳細に話す。例えば、アーチャーがそのことを覚えていても、いなくても。

「けど、お前みたいに誰かを助けたいなんていう目的じゃなく、単なる興味で、だ。その旅の途中で、ある事件に巻き込まれた。村に呪いが

蔓延するという事件に。その病は進行が進むに連れてとてつもない力を得る代わりに、自我を失い凶暴化してしまう物だ。更に恐ろしいのは驚異的な感染力だ。

後で分かった事だが、その原因は魔術師が実験を失敗したからだとか。

とにかく、そのまま放置すれば、人類が滅亡する。そう考えた父さんは、なんとか病気をなんとかしようと、せめて進行しきっていない患者を治そうと、努力した。魔術を惜しみなく使って。

結果から言えば、治療は成功した。だけど、凶暴化した人間を抑えるのは難しいし、そもそもその解呪自体も時間がかかるものだった。人手が足りず、その場に解呪できる人間は偶然居合わせた俺の父親のみ。しかも、父親すらも病にかかる寸前だった。

他から援軍を呼ぼうとも、そのまま治療に専念しようとも、時間が足りず、もう手詰まりだった。

けれども、そこに守護者が現れた。

そしてそいつは、病に囚われた全ての人間を殺した。病気の進行状況に関わらず。」

当事者である守護者は、後悔と罪悪感からか、目線を逸らす。

「その守護者の外見も、父さんから聞いています。」

俺ははつきりと思いつく。今の今まで忘れていた、父さんが言っていた言葉を、一字一句間違いない。

「褐色の肌、黒いボディースーツを身に纏い、その上から赤い外装を羽織っていた。色素の抜けた白髪は逆立っていて、中華風の双剣と黒塗りの洋弓を携えていた、と。」

それは、今のアーチャーそのものだ。つまりは、父さんが昔会っていた守護者というのは、目の前にいる衛宮士郎だった。

「運良く父さんは助かった。まだ病には掛かっていなかったからかな。」

けれど、守護者は周りに批判されていた。殺人鬼だとか、せつかく救えた命を、とか。

でも、俺の父さんは違った意見を持っていた。目の前に現れた守護

者は、正義の味方だと。

誰もできない選択を、一步踏み越えてやってのけた。その行動自体は、人ならざる物だとしても、そうしなければ自分は生きていかなかったと。

……昔話はここまでだ。」

ここにいる全員がもう感じている。俺の存在がどんな物なのかと。しかし、それでも俺は自分で口にする。

「さて、話は終わったんだから、質問に答えよう。

俺はお前に救われた不確定要素イレギュラーの一人だ。」

不確定要素、つまりはアーチャーに殺されたか殺されなかったか。抑止力が作用するタイミングが早かったか、遅かったか。それだけで、命の有無が決められていた者だ。

守護者というのはそれが存在する体で、歴史が作られている。つまり、アーチャーは守護者にならざるを得ない人生を送らされてきた。途中で死ぬことは許されず、生まれる前から確定された物だった。

しかし、俺は違う。厳密に言えば父さんの方だが、結果だけ見れば変わらない。父さんがいなければ俺という存在はない。

あいつは並行世界並行世界を体験し、衛宮士郎を何度も見てきた。しかし、俺は違う。それだけで、俺が世界イレにとってどうでもいい者ラーなのだと分かる。

「全く、命の恩人がまさかお前だとはな。

……だから、気が変わった。本当は、戦わないつもりでいたんだけどな。」

「何?」

本来ならばアーチャーは俺ではなく、衛宮と戦うべきだ。あいつにとつて、俺は他人なのだから。

「俺はもう、見ていられなくなつた。英霊おエミヤが衛宮士郎あを殺すなんていう、自殺紛いな事を。」

俺があいつの友達だからじゃない。お前が俺の友達で、そして恩人だからだ。」

一方的と、自己満足と思われても構わない。だってこいつも、そう

生きてきたのだから。

「ならば、どうする気だ？」

「当たり前な事を聞いてんじゃねえよ、衛宮。」

説得なんて無意味だ。どれだけ言葉を並べようとも、他人の言葉だ。

「理想に裏切られた？ 罪を償った？ 自分なんかいなければ良かった？ ふざけんじゃねえぞ。俺はそんなお前に救われた。救われた人々がいた。それなのに、自分が間違いだって言い続けるのか。」

「なんと言おうともな。」

だったら、話は簡単だ。

救われた人々のために、父さんのために、そして、俺の何の意味もない意地のために！

「アーチャー、俺はその曇り切った目を覚まさせるために、スカした顔を一発ブン殴ってやる！」

固有結界

アーチャーとの一対一、それはランサーの時と似たような状況になっていた。俺が立て続けに攻め、アーチャーは反撃をしながらも守りに入ってしまったている。

俺自身の総合力はアーチャーのソレに及ばない。しかし、ランサーの時と同じように一点に能力を特化すれば、敵わない相手ではない。腕も強化して、剣で斬られても防げるようにしている。

けれども、ランサーと違う点が一つある。それは相手が遠距離攻撃を持っている事だ。だから距離を離されてしまえば、詰める事が難しくなる。

例えば、今みたいに。

「赤原を行け、緋の獵犬！」

「くっー！」

アーチャーの黒弓から剣^矢が放たれ、俺の胴体の横ギリギリを通る。なんとか避けられたもののあれは宝具だ。当たればかなりのダメージを負う。気をつけなければ……

嫌な予感がする。あれが放たれた時、俺は余裕を持ってかわした筈だ。なのに紙一重だった。という事は。

答えを出す前に後ろを振り返る。目前に赤い矢が見える。獵犬は、まだ俺を追っていたんだ。

「あがつ……い！」

咄嗟に右腕で頭をかばう。よって矢は頭を貫通せずに右腕に突き刺さる。その痛みはまるで犬が噛み付いたようだった。腕を硬化させているというのになんつう威力だ。

何故距離を離されてしまったのかというと、アーチャーの顔を執拗に狙っていたからだ。俺が宣言にこだわりすぎたが故に、あいつは俺の単純な攻撃をいなし、体制が崩れたところで長剣による攻撃を入れ、俺がなんとか避けながらも後退し、そしてさっきの様になったという訳だ。

「っ……がー！」

腕に突き刺さった矢を抜き、放り投げる。

大丈夫だ。まだ腕は動く。指先までの感覚はある。

「わざわざ宣言通りにしようとするか。意地の為に不利になる必要はないとは思うが。」

「うるさい。」

腹立つが、アーチャーの言っている事は正論だ。しかし、こっちはそうしなきゃ気がすまないのだ。どうせどちらも自己満足の為に戦っている。だったら意地の一つや二つ、通したって良いだろう。

「うおおおっ！」

ただ真っ直ぐ、アーチャーへと全力で駆ける。魔術も駆使し、より速く走る。

「ふっ！」

アーチャーはそれに迎撃をしようと、前にも見た白黒の双剣を投擲する。足止めか目くらましのもりだろうが、そんなのは効かない。硬化した腕で難なく弾く。

そのまま敵との距離を詰めようとした時、アーチャーは先ほど投げた一对の中華剣を握っており、それを左右に投げた。

そして、まだあいつの手元には干将・莫耶が残っている。俺が弾いた一对とあいつが投げた一对、それらは俺を囲うように展開され、敵を討とうと襲いかかる。

「鶴翼三連！」

そして正面からはアーチャーが向かってくる。これはまさに鶴翼の陣。六つの同時攻撃に逃げ場は無し。迎え撃とうにも、同時に対処する事はほぼ不可能だ。だがしかし、

「その技は二度目だ！風翼！」ウイング

魔力の属性を風に変化させ、それで魔術を使う。全ての双剣は瞬間に風圧に叩き落とされ、地面に落ちる。

「くっ、はあっ！」

けれども、アーチャーの持っていた双剣だけは耐えて、攻撃をまだ続けていた。上段から振り下ろされた双剣は、俺の頭をかち割ろうとする。

対して俺は両腕を硬化しクロスさせ、攻撃から守ろうとするが

「掛かったな！」

それはフェイク。こいつの攻撃は俺の腕には当たらずに、下へと移動する。つまり、狙いは頭ではなく胴体だった。

「もう一度、ウイング風翼！」

二つの刺突が俺の肌に触れる瞬間、その間から押し込められていた空気が一気に流れ出す。その風圧は双剣をも逸らす勢いだった。結果、俺の胴体に新たな傷はできなかった。

そして、アーチャーに大きな隙ができる。

「もらった！」

チャンスだ。そう思い、顔めがけて拳を入れようとする。しかし、さすがは英霊と言ったところか。新たに投影された干将により、俺の攻撃は防がれる。隙ができたとしても、ただの人間の一撃は入れさせてくれない、か。

ならばもつとだ。もつと速く！

「うおおっ！」

拳を加速させていく。アーチャーがどれだけの確な反撃を、防御をしても、それを超えてみせる。無限の剣をいくら出そうとも、この腕が削られる事はない。

アーチャーの剣を弾き、そして攻撃に移り、躲される。そんな攻防がいくら行われた後だろうか。俺はこのジリ貧を打開しようとする。

相手は、莫耶を使い俺へと攻撃しようとする。それを俺は右腕で防御しようとし、

「ぐっ……」

「何っ！」

硬化を解除した。よって、アーチャーの剣は俺の腕に沈む。こいつの驚きはそれが原因だ。

もちろん骨までは届かないようにしてある。後は

「再硬化！ロックスそして、フリーズ凍結！」

腕に固定する！

周りにある空気も魔術で温度を下げ、固体化させた。これにより、

アーチャーの剣は俺の腕に突き刺さったままになる。そして、腕を思いつきり引けば！

「うおっ!?」

アーチャーの体制が崩れた！このまま、殴つ……

「がはっ！」

突然、大きく後退させられる。理由は分かっている。あいつがカウンターの蹴りを入れてきたからだ。

十数メートル飛ばされた宙を舞い、地面に落ちたと同時に体制を立て直す。

また一発入れ損ねた。困難だとは思っていたものの、不可能ではないのかと思いついてきた。いや、それが普通なのだ。普通の魔術師が英霊を一度ならず二度までも倒そうなんてのは、調子の良い話だ。

しかし、まだ可能性はある。そう確信が持てたのは、さつき殴ろうとした指の爪先に理由があった。

「……かすったか。」

「けど、まだだ。」

あの時、ほんの僅かだが、爪があいつのほおを触れた。つまりは後一步なのだ。

「おい、アーチャー。出し惜しみしてたら、無駄に消費するだけだぞ。」

確信を持った俺は、奥の手を出せと煽る。

「それに噛み付いてくるのは犬だけだ。」

ランサーのことか。ここにいない奴の悪口かよ。

「どうせ衛宮に出すんだろ。だったら、今ここで出した方が発動が楽になるぜ。俺はその邪魔はしないからな。」

これはアーチャーの宝具が何かを見据えた上で言ったつもりだ。推測が正しければ、アーチャーも衛宮も、今までそれしか使っていないはずなんだ。

そして、俺が脅威足り得る存在だという事は証明したはずだ。後はアーチャーの出方次第。

何故俺はランサーの時と同じように、宝具を出すよう煽ったか。確かに對抗策があるのも一つの理由だ。しかし、これも意地なんだ。あ

いつの心を創り変えられるという証明をするための。

「……考えてみれば、お前の言う通りだ。私の宝具は衛宮士郎に当然バレている。ならば、言葉に甘えさせてもらおう。」

また敵が思惑通りになる。やはり自身の宝具というものには絶対の自信を持つている。それを出すには、多少無理でも火種をつけなければいいのだ。その逆の方法は知らないが。

アーチャーは胸に手を当て始め、詠唱を口にする。

それと同時に、俺は体に鞭を打つ。

無理だろうと知らない。

記憶しろと、観察しろと、体感しろと。

「I am the born of my sword.
体は剣で出来ている。」

あいつの仕草を詠唱を、真似るように。なぞるように。

胸に手を当て、独自の詠唱を唱え始める。

「I remember the changing of my force.
体は創変させるものだった。」

その言葉はここにいる全員を驚愕させた。言葉だけではない。仕草も魔力の動かし方すらも要因だ。

今まで無かったはずのアーチャーの殺意が一層強く、俺の体を突き刺す。当然だ。唯一の取り柄である模倣を模倣される。それは挑発されたも同然だ。

「……フツ。」

「……? あいつ、一瞬笑わなかったか?」

「Steel is my body, and fire is my blood.
血潮は鉄で、心は硝子」

いや、今は真似る事に集中しなくては。あいつの使う魔術は模倣の寄せ集めだとしても、一流の物。更にそれは、あいつにしか持ち得ない魔術。

生半可な気持ちでは会得できない。

「War is not my blood, and cold is n't my heart.
戦いの血は無く、冷静な心もない」

真似るだけではダメだ。あの魔術はアーチャー固有の物。それを俺が使うには一工夫しなければならぬ。

鏡のように映し出すのではなく、あいつと対比するように。

「I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を超えて不敗」

「I have changed power is no more.」
一度の戦場も経ず不敗。」

アーチャーの詠唱が進むにつれて、周りが変貌していく。

「Unknown to Death.」
「ただの一度も敗北はなく、」

「Unknown to Battle.」
「ただの一度も傷はなく、」

対して、俺の起こす変化はない。

まだ何かが足りない。

「Nor know to Life.」
「ただの一度も理解されない。」

「Nor know to Otherr.」
「他を理解しようとしなかった。」

世界はあいつの色に変化する。

「Have withstood pain to create many weapons.」
「彼の者は常に独り。剣の丘で勝利に酔う。」

「Inspire one to escape and advance by fear.」
「孤独を恐れた彼は死の海で恐怖に動かされる。」

互いの詠唱は、自分自身を語っているにすぎない。

「Yet, those hands will never hold anything.」
「故に、生涯に意味はなく。」

「Yet, held thing will never see.」
「故に、生涯など考える間もなく。」

そして、

「So as I pray, unlimited blade works.」
「その体は、きつと剣で出来ていた。」

世界は火に焼かれ、完全に塗り替えられる。

「……」がお前の心象世界か。」

アーチャーの心象世界。赤い荒野が広がり、焼けたような夕暮れの空と、それを埋め尽くすかのような多数の歯車。そして、その隙間から覗く光がちらほら。最も特徴的なのが、地面に突き刺さる無数の剣。今まで見たものや、まだ知らないものもある。

「ああ。オレの心そのもの。そして、同時に固有結界でもある。」

見れば判る。この世界がどんなものであるか。魔術を読み取るこの目ならば。

剣を見れば自身に偽物が貯蔵され、そして自由に取り出せる。それがアーチャー特有の固有結界。

それにしても、あいつの心象世界か。

「寂れてるな。」

そんな感想しか抱けない。殺戮を実行する機械は、殺戮するだけと
いうことか。

「けど、創り変えてやるさ。」

固有結界がどういうものかは分かった。そして、俺にそんな物は作れない。現実世界を心象で変えるなんてのは、それを専門に十年使い続けないと無理だ。

「But I hope.けれども、俺は。」

だが、詠唱は終わっていない。

「まだ続けるつもりか。だがもう遅い!」

剣が俺を囲み、一気に射出される。しかし、それは当たる直前で、泡となり消える。

「つ……! 貴様!」

アーチャーが感づいたようだが、もう遅い。

「Survive is moved his in war,戦う訳が恐怖以外にもあり、」

心象世界にある剣では無理だと判断し、アーチャーは素手で殴りかかろうとする。

「I see this minimum luminous.何かが、確かなものが掴めた。」

しかし、この世界はすでに創り変えられつつある。その証拠に、俺の後ろから、大きな波が来ている。

「Because, now, today,だから、今、ただそのために、」

アーチャーの拳が俺に届く、その瞬間、

「draw of spirit.この心は戦い始める!」

それは、波に飲み込まれる。

「つ……!」

飲み込まれた時間はそう長くはなく、アーチャーの足が地にしつかりとついたのはすぐだった。しかし、あいつは俺を見失ったようだ。

仕方がない。ここは、荒れた剣の大地から、太陽の光が届かぬ海の底へと早変わりした。目の前すらも真っ暗で、どこを振り向いても何も見えない。

「これが、お前の心象世界だというのか?」

「残念ながらそうみたいだな。深く、暗く、誰も来られないような場所。光は無く、恐怖の海が広がるだけだった。」

光は存在しない。そういったはずなのに、互いの姿が見え始める。

何か、輝く物体が海底に沈んでいたからだ。

「けど、今は違う。何かは分からない。だけど、しっかりとそこには希望^光があるんだ！」

海の底で、光は強くなる。

しかし、俺の魔力は限界ギリギリだ。この固有結界は、相手の固有結界を基盤として作られている。相手の世界を俺の世界で塗りつぶす。つまりは創り変えているのだ。

だから、相手の結果の効果を打ち消しつつ、より少ない魔力で維持できる、対固有結界用固有結界だ。しかし、そもそも俺の技量が足りないからか、魔力は常に全力で消費している。

くそ、もう立っているのも精一杯だ。

次……次で決める！

「うおおおっ！」

声を荒げながら、走る。真っ直ぐ、ただ真っ直ぐに。これまでのような速さは一切ない。

けれども、アーチャーには攻撃手段である剣はもうない。投影したところで、この海に掻き消されるだけだ。

右腕を振り上げて全力で殴る。アーチャーの顔を目掛けて。

強化に回す魔力はない。だから、俺の拳は、一般人より少し速いぐらいだ。そんな物、当然のごとくアーチャーに軽々掴まれる。

しかし、フェイクにはなる。

「本命はこっちだー！」

拳が止められた瞬間、左脚の蹴りを即座に実行する。

俺の右手を止めているのは、アーチャーの左手。ならば、左脚を止めるのは、

「何度フェイントを入れたところで！」

アーチャーの右腕だ。

ここまでは予想通り、全て想定内の範囲内。

だから、次の一手も考えてある。この戦いの最後の一手。

「っあああー！」

俺が力を込めたのは、未だアーチャーに掴まれている右腕だった。

偽物フェイクであつたはずのそれは、本物の攻撃へと変わる。しかし、掴まれているのだから動くはずもない。

「解除リリース。」

だが、その言葉によつて、俺の右腕はアーチャーの手を振りほどく。こいつの右腕は俺の脚を受け止めていて、左手は振りほどかれたばかり。つまり、防御する手はない。

そしてそのまま、あいつのふざけた顔を……！！

「これが、最初で最後だ！」

ブン殴る！

「っ……！！」

俺の右腕は振り抜かれ、アーチャーは頬を殴られる。

そこから動きはない。

互いにもう戦う気は無かつた。いや、戦う理由が無くなつたと言つた方が正しいか。

どちらにしろ俺の宣言通りにはなつた。ただそれだけのことなのに、もう決着はついたような状況だ。

周りは、いつの間にかあの寂れた剣の荒野に戻っている。俺が作つた海はすでに、どこにもない。

強化をしていない俺の拳が、なぜ英霊の握力を振りほどいたのか。それは強化し直したからだ。結界を解いてそれに回していた魔力をそのまま腕の強化に使い、結果、アーチャーに一発を浴びせることができた。

「これで気は変わったか？」

「いいや、全くだな。」

やはり、アーチャーの考えは変わらなかつたか。最初から分かっていたことだ。

「結局無駄かよ。」

残念な事でもない。この後に衛宮が戦うんだ。あいつが何とかしてくれるだろう。やはりここは、自分自身と戦うしか無いのだから。

もう戦える力はない。意識が少しずつ遠のいていく。

「だが、案外無駄ではないかもしれんぞ。」

「はっ」

まずい。頭がおかしくなって、幻聴でも聞こえたのか？

「考えは、変わってないさ。」

……むしろ固まった。」

俺にしか聞こえない声で、訳の分からない事を呟く。

そして、歯車の隙間から溢れる光は強くなる。

「ああ、そういうことか。」

その言葉で俺は理解した。であれば、それこそ俺はただのしゃばり
りで、やってきた事は全て無駄じゃないか。

まあでも、意識が薄れて行く中、アーチャーが最後に残した言葉を
聞けただけでも良しとしよう。

約束は守るからな……。

相違点

アーチャーと創太の勝負に決着がつき、創太は地面に倒れこむ。その体には、ほとんど力が残っておらず、意識もない。だが、かすかに行なっている呼吸が、生きている証拠だ。

「おい。」

剣の合間から見える士郎に、アーチャーは呼びかける。

「そこにいるのは分かっている。さっさと出てこい。」

それは、士郎に向けられた言葉。士郎自身も、それが誰に向かつて言ったのか分かっており、アーチャーの前に立つつもりだった。

「シロウ。」

しかし、後ろからセイバーが引き止める。

「……すみません。こんな事を言うのは、もっと早くにすべきでしたが、アーチャーを、彼を」

「分かっている、セイバー。」

彼女の言いたい事は理解しているつもりだった。これは二人の戦い。創太のように割って入ることはできない。だから代わりに、と言う事だ。

士郎は、セイバーを安心させる言葉を言い、前に進む。

二人は対峙し殺気立たせる。お前を認めるわけにはいかない。互いが思っている事はそれだ。

「アーチャー!」

「衛宮士郎、オレの事は隠れて聞いていたのだろう。言いたい事があるなら聞いてやらなくもない。」

だがその前に……ジャンヌ・ダルク!」

真名を呼ばれ、ジアナは肩をピクリと上げる。

「そこにいる奴を持っていけ。私としてはどうでも良いが、戦いに巻き込まれて死んでしまったとなれば後味が悪いだろう?」

その言葉は創太への気遣いなのか、それともアーチャー自身がそう思っているのか。どういう意味かは彼女に理解できなかった。しかし、それに甘えて創太に駆け寄り、彼を担ぐ。

「……ありがとうございます。」

「そう思うのなら、さっさと戦いの邪魔にならないような場所に連れて行く事だな。」

彼の捻くれた言葉からは意図が読めない。ならば、創太をこの場から離す方が重要だ。そう思ったジアナは凜やセイバー、途中から合流したイリヤスフィールの元へ創太を運んだ。

「これで互いに気兼ねはなくなった。」

説得でも、正論でも、何でも言え。」

アーチャーは、創太に言われた事を士郎にも似たような事を言われると思っていた。ここにいるの全員も同じ考えだ。

「そんな事は言わない。」

しかし、士郎はそれを裏切る。

「俺は、創太みたいにお前を矯正させるなんて事はしない。だって、お前は何も間違えていないんだから。」

今までアーチャーを否定してきた士郎が、ここに来て肯定する。

「誰かを救おうとする事が間違いなんかじゃない。それは失敗しただけだ！だから、それすらもお前が否定するなら、俺は死力を尽くしてお前という自分を打ち負かす！」

そうでなければ、彼と同じだと証明されてしまうと、士郎自身が一番理解していた。

「ならば、言葉など不要か。」

戦いが始まる。そう、誰もが直感した。

「^{トレス}投影、^{オン}開始。」

その詠唱は衛宮士郎だけが、彼らだからこそ使える物。衛宮士郎が衛宮士郎足らしめる物。互いに行う事は同じ。

アーチャーは今まで見てきた英霊の武器を固有結界この世界からその手に召喚する。

衛宮士郎は彼の手にある投影品を投影する。

故に、これは明らかに士郎が不利な戦いであった。投影を使い慣れているアーチャーと、覚醒してから日が経っていない士郎。であれば、軍配があがるのはアーチャーだ。更には、アーチャーは固有結界

を展開しており、投影のスピードが通常よりも速い。

「うおおー！」

しかし、蓋を開けてみれば戦況は互角だった。

最初は遠距離から投影品を射出するという、投影の出来を競うものであった。二人が投影し、撃ち合い、その中央で相殺する。ただそれだけが続いていた。

アーチャーは痺れを切らし、近接戦闘に持ちかけた。投影の出来だけではなく、技さえも要求される勝負。それならば勝てると思っていたが、意思とは反し、二人の戦いは互角であった。士郎の投影も、技も、まだまだ荒削りであるにも関わらず。

その理由は衛宮士郎がアーチャー^彼を模倣^{自身}していたからに過ぎない。剣を交わす度に、贋作がぶつかり合う度に、アーチャーの技術を、経験^彼を、取り込んでいた。士郎にとって、それは意図的ではなかった。けれども、事実としてそうになっていた。まるで共鳴するかのよう。「うぐっ！」

だが、前借りをしたようなその力は、士郎の体を蝕む。ゆつくりと着実に。それも仕方のない事。まだ未熟であるその体に、相応しくない力が使えるだけでも、奇跡のような物だ。

しかしそれとは別に、次第に、士郎の頭の中には、数々の光景がよぎっていく。

守護者となったのに、誰も救えなかった事。

世界を駆け、人を救ったのに裏切られた事。

まだ理想を諦めていなかった若い頃の事。

戦争を勝ち抜き、聖杯を壊した事。

無意識に召喚したサーヴァントの事。

平穏に暮らしていた日々の事。

やがて士郎は、周りが霧に包まれていることに気がつく。アーチャーやセイバー達は居ない。ここには自分一人のみ。

足元が安定しない。そう思って、下を見れば瓦礫があった。それに気づいてしまえば、自身がどこにいるかが、嫌でも理解してしまう。そうでなくても、周りの霧は突然晴れて、代わりに火の荒野に包まれ

ている。

「ここは、あの時の……」

士郎はその荒野の中で歩いている人を見つける。見た目は中年の男性で、髪はボサボサ、髭は綺麗に剃られていないという、間違っても綺麗には見えない中年の男性だった。

その男性には生気がなく、ゾンビに近い歩き方をしており、それでも何かを探しているように歩く。

その内、男性は何かに気づく。左右に首を振り、何かを発見する。そして、瓦礫を掘り返す。

「おい。」

無意識の内に動かしていた足を、誰かが呼び止める。

士郎の後ろに、その誰かがいる。彼には振り向かなくても分かった。アーチャーだ。

「その先は地獄だぞ。」

「これがお前の忘れた物か。」

士郎に流れ込む映像記憶は、全てアーチャーの物だった。そして、彼らが今見ている物は衛宮士郎が生まれた時だ。

「確かに、始まりにあったのは憧れだった。

けど、根底にあったのは願いなんだよ。

この地獄を覆ってほしいという願い。誰かの力になりたかったのに、結局、何もかもを取りこぼした、果たされなかった男の願いだ。」
瓦礫を掘り返していた男性は、手を止める。そして、頬に涙を流した。

次の瞬間、目の前が光に塗りつぶされる。強くも優しい光。衛宮士郎にもその光があった。彼自身もそれに気づく。

士郎はまた歩を進めようとする。しかし、それは一步目で終わった。まだ映像記憶は続いていたので。

「……違う。」

どこから現れたのか、寝巻きの姿の少年がフラフラと中年の男性へ歩いていく。いや、そもそもその少年は、どこを指しているわけでもなかった。

どちらかと言えば、当てもないのにこの地獄を歩き、中年の男のように何かを探しているようだった。

「これは、お前の物とは違う。」

何かを探す二人は、衛宮切嗣と古崖創太は出会う。

「この記憶は、俺のものだ。」

アーチャーの生前に創太はいなかったからこそ、確信を持てる言葉。

士郎はまた歩を進める。今度は止まらなかった。一步、また一步と、前に、前に、再び剣の荒野と化した景色を目に焼き付けながら。

「だからどうした。あいつの存在で、衛宮士郎の何が変わる？」

「変わるさ。」

丘の上、そこに突き刺さった剣を前に、士郎は止まる。

「だって、あいつは衛宮士郎にとって始めての友達だったから。」

彼はその剣を抜く。熱く燃えたぎる剣を。それと同時に、世界は塗り替えられる。アーチャーのそれではなく、士郎の物へと。

彼らの意識は徐々に現実へと戻っていく。無意識に身体が行なっていた戦いに引き戻されていく。

そして、アーチャーは干将・莫耶を手に、士郎へ攻撃を仕掛ける。それは今までのどの攻撃よりも鋭く殺気に塗れた一撃。

「I am the……」

しかし、

「born of my sword。」

士郎は、アーチャーの攻撃を砕く。

「ばかな——！」

「お前には負けられない！」

アーチャーが予期しなかった出来事。衛宮士郎がアーチャーを超えてしまうという、不測の事態。先ほどまで、剣製も、技術も、心も、アーチャーが上手であるはずだった。

しかし、同じ物を投影しながら、アーチャーのそれが砕かれるという事はつまり、士郎の剣製が上だという証拠だ。

「くっ！」

破れかぶれに、アーチャーは次なる剣を投影する。

士郎は今持っている双剣では防げないと判断する。耐久力が先の一撃で減りすぎた。だから、またアーチャーの剣を投影する。

刃渡りが二メートルもある長剣。それが二つ、罅迫り合いに持ち込まれる。だが、すぐに士郎の剣が、アーチャーの剣を絡めとり、手から弾かせる。

士郎の技術が勝った瞬間だった。

「だあああっ！」

アーチャーに隙ができ、すぐさま士郎は一步踏み込み、彼の懐へ入ろうとする。しかし、それは罨だった。

剣が、アーチャーの横から射出される。彼は得物を弾かれた瞬間に、すでに他の剣を喚び出していた。それは士郎の右腕を斬り、剣を弾かせる。

「っ……い……じゃない。」

それでも、彼は攻撃をやめない。左腕は何も持っていないのに、まるで短剣を持っているかのような手つきで、アーチャーの胸を突き刺そうとする。いや正確には、今から短剣を投影するのだ。

「間違いなんかじゃない！」

「……！」

彼の手に一本の短剣が現れる。何の力も持たない、ただ斬れ味が良だけの短剣。だからこそ、即座に投影する事ができる。

意識をせず、息をするように、士郎はそれを投影し、

英霊エミヤ^{アーチャー}を突き刺した。

後は、静寂だけがこの場を包み込む。アーチャーの反撃は無い。彼にはまだ力が残っているはずだ。しかし、何もしない。ならば、答えは一つだ。

「俺の勝ちだ、アーチャー。」

この結果を噛み締めるように、士郎は宣言する。

「ああ。そして、私の負けだ。」

誰でもない、己自身に言い聞かせるように、アーチャーは呟く。

もう、剣の荒野は無い。すでに周りは森に戻っている。

「くあつ……！」

士郎は緊張を解いたせいとか、体の反動を自覚する。今まで本来は得ない筈の技術を前借りしてしまったのだから、当然といえば当然の現象だ。

「シロウー！」

真つ先に飛び出したのは、セイバーだった。体を支え、なんとか士郎を立てさせようとする。他にも意識を失っている創太を除いて、ジアナや遠坂、イリヤスフィールも、士郎に駆け寄る。

「今すぐ回復魔術を施します。セイバーは、彼を」

誰もが、士郎に意識を向いたその時だった。数十もの宝具が、彼らに降り注ぐ。

「っ！我が神は……！」

ジアナは、宝具の真名解放を行おうとする。しかし、それよりも早く、アーチャーが庇った。

「アーチャーー！」

それは、誰が放った言葉だろうか。とにかく、何十もの剣が突き刺さったアーチャーの体に、皆が視線を集める。

「とんだ下らない茶番だったな。」

最初から結末が見えている劇など、面白も何もない。」

道の真ん中で堂々と立っている人物、それはギルガメッシュだった。

皆の視線は、次にそのギルガメッシュへと移る。

「貴様、アーチャー!?？」

今度は明確に分かる。その声はセイバーの物だった。

「十年ぶりだなセイバー。お前とはもう少し早く顔合わせをする気であつたが、予想外のことばかりだな。」

黒のライダースーツを着た金髪の男は、セイバーだけしか見ていなかった。他は、まるでそこらに転がっている石などと、同じような扱いで。

セイバー達にとって、ギルガメッシュは最悪のタイミングで出てきた。アーチャーは魔力切れ寸前、士郎と創太も力は残されていない。

戦える者は三人だとしても、サーヴァントではない士郎と創太を守らなくてはならない。

そして、あのサーヴァントは、誰かを気にして戦える相手ではない。「さて、理解したか？それが本物の重みというものだ。いかに形を似せようが、本物の輝きには及ばない。」

衛宮士郎を、衛宮士郎の全てを否定するかのような言葉。いや、それそのものだった。

「他人の真似事だけで出来上がった偽物は、疾くゴミになるがいい。」その数、三十。宝具の雨が士郎達に向かった降り注ぐ。誰がどうあっても避けられない。

「動は消滅せん！」

しかし、止める事は出来た。銃弾のごときスピードで降り注いでいた宝具は動きを止め、後は重力だけが働き、地面に落とされていく。誰がそんな事を行ったか。

「貴様ら……！」

「また会ったな、ギルガメツシュ。」

それは、ジアナと気を失っていた筈の創太だった。

「相も変わらず臆病だけが取り柄の雑種が、わざわざ私の怒りを買うつもりか？ならば、その道化と共に」

「凜！」

彼が言い切る前に、ジアナは指示を飛ばす。

「オーケー！宝石使うんだから、確実にやってよね！」

凜がばらまく宝石の数は、三つ。そこから爆発が起こる。もちろん、ギルガメツシュには傷一つ付いていない。

土埃が舞い、視界は良好ではなくなる。これでは、互いに状況を把握できない。双方とも動く様子はなく、埃が晴れるまで、変化はなかった。

「逃げたか……」

視界がはつきりした時、もうすでに創太達の姿は無かった。

「おい、何やってんだよグズが！」

草むらからかき分けて出てきたのは、間桐慎二であった。その表情

には、怒りしかなく、その矛先をギルガメッシュに向けていた。

「せっかく遠坂がここに来るって情報を掴んだのに、なんで逃がしちまうのさー！」

「どちらにせよ今宵にまた会う事になる。」

聖杯の力を手に乗せながら彼は、答える。ニヤリと不気味な笑顔を浮かばせながら。

この男ならば、不完全な聖杯が作れる。そういった愉悦を楽しみながら。

決戦に向けて

森でギルガメツシユからの襲撃を受けた俺たちは、なんとか逃れられ衛宮の家までたどり着いた。周りは夕焼けに染まり、カラスの鳴く声が聞こえる。もう夕方時なのだろう。

アーチャーはいつの間にかいなくなっていた。体を現界させる魔力がもう無いのだから、どちらにしてもあの状況から再契約は無理だ。

さて、散々捕らえられていたのだから、そろそろ俺が思っている事を言おう。

「腹あ……減った……食いもんを……。」

腹の虫を鳴らしながら、痩せ細った顔で懇願する。

「アンタ、急に気を緩める事を言うわね。」

遠坂は呆れながら言う

「仕方ないだろ。十二時間何も食ってない後に、力を全て使い果たしたんだぞ。」

「そのくせ、すぐに起き上がってなかった？」

「……慣れだ。」

それは、本当に慣れとしか言いようがない。あの地獄の特訓を受ければ、嫌でもそうなる。

「うーむ、そうだな。晩飯の時間も近いし、みんなの分も一緒に作るか。そうになると、冷蔵庫に何があったか……。」

「あ、士郎くん。私、お手伝いさせてもらいます。」

「すみません、ジアナさん。じゃあ、今日の晩御飯は……。」

「それなら副菜は……。」

二人が晩飯の献立について意見を出し合う。

これは晩飯が楽しみだ。

というのが、二時間前の出来事。

「ぶはあー！食った食った！」

「普段の二倍は食べてましたね。」

皿に盛られた料理は今や全て無くなっていった。

ちなみにジアナが普段の二倍と言っていたが、割合でいうと出された料理の一割しか食べていない。更には俺の三倍の量を食べていた奴がいたのだ。

それは、誰かといえば……

「……？創太、私の顔に何かついていませんか？」

「なんもないけど、セイバー。」

大食い騎士王さんである。

まあ、もう一人いるけど。

「そこ、静粛に！」

ビシツとこの場を仕切ろうとする、遠坂。

晩飯の後は、早速作戦会議らしい。

というか、いつの間にこいつは一緒に戦う前提になつてんだ？まあ、いいか。

「次の戦いは最終決戦よ。ここで勝たなきゃ今までやってきた事は無意味になるわ。だから、気を引き締めて。」

最終決戦。その言葉だけでも、空気が緊張の糸で張り詰められる。もちろんイリヤスフィール以外は全員参加だ。そんな事言うまでもない。

「今回の議題は、あの金ピカよ。」

金ピカ？

「金ピカ……って、遠坂。まさか、ギルガメッシュの事か？」

「……？ええ、それ以外に誰がいるのよ？」

「いや、いないけどさ。あいつが金ピカになったところって、遠坂見たことあったか？」

そう、そうなのだ。

衛宮の言う通り遠坂は、ギルガメッシュがライダースーツを着ているところ以外見たことないはずなのだ。なのに、何故そんな金ピカなんていうあだ名をつけられるのか。

「ないわ。ただ、そんな風に思っただけ。」

その言葉を聞いた瞬間、この場にいる遠坂以外の全員がこう思っただろう。

それだけで、金ピカって言えるのかよ！

この遠坂凜と言う人間は、直感スキルでも持っているのであろうか。

「話を戻すわ。あいつは柳洞寺にいる。今回の聖杯の降霊場所はあそこしかないって前から睨んでた。そこに飛ばしてた使い魔もついでさつき潰されたし、十中八九そこにいるでしょうね。」

「場所を先に確保すれば、聖杯の器であるイリヤスフィールはそこに向かわざるを得ない、と言う事でしようか。」

遠坂の説明に、ジアナが付け加える。

「ええ、そうね。でも逆に言えば、時はこつちが選べる。今すぐは、士郎も創太も疲れているだろうから、無理だし。あつちから出向かない限りは、明日までには……。」

「残念だが、時間は残されてない。」

俺は遠坂が提示した選択肢をバツサリ切り捨てる。

「実はな、一度この家にギルガメツシュが来たんだ。運が悪いことに、イリヤスフィールが居る時にな。いや、それを狙って来たんだろうか……。」

とにかく、その時に逃げるために聖杯の力を置いていった。そうすれば、追ってくる理由も少なくなると思ってたな。」

「つまり、聖杯はもう敵の手にある、と?。」

セイバーの問いに、俺は深く頷く。

「仕様がなかった、とは言わない。もっと他に方法があったかもしれない。だから、ここで謝らせてくれ。」

聖杯を明け渡した事、本当にすまなかった。」

深々と頭を床に擦り付けるまで下げる。

「謝るのはまだ早いわよ。そんなの、負けてから言うことよ。今は顔を上げて良い案を出してちょうだい。」

「……ああ、分かった。」

そうだ。遠坂の言う通り、こんな罪悪感を拭う行動をするよりは、現状を改善するべきだった。我ながらなんて無駄な事をしていたのだろうか。

……ただ、遠坂が聖杯の力を置いて行くなんでどうのこうのと言っている気掛かりなんだが、ま、いいか。

「話を逸らして、悪かったな。遠坂、ギルガメッシュの事については？」

「全ての宝具の原典を所持していて、それをいつでも自由に取り出せる倉庫も持ち歩いている。だから、どんなサーヴァントであれ勝つことは不可能。今分かっているのは、こんな所。

で良かったかしら、ジアナ？」

「はい。更には、こちらがどんな策を持ち込もうと、彼はそれ以上の千里眼と力でねじ伏せます。

凜のバックアップを受けたセイバーならば、あるいは。ですが确实ではありません。」

遠坂と契約したセイバーでも勝てないのか。

「他に方法はあるのか？」

ダメ元ではあるが、ジアナに対抗策があるか訊いてみる。

「あるにはあります。しかし、それ単体であれば対抗はできません。」

「単体は無理……セイバー、お前の宝具はあと何回打てそうだ？」

マスターがポンコツの衛宮から優秀な遠坂に移ったんだ。流石に一回があるかないか、ではないだろう。

「二回はなんとか。しかし、二回目を打てば、私は魔力切れで消えてしまいます。」

二回目は本当の最終手段か。ジアナの言う対抗策と組み合わせるには心もとない。

「今の手札では、流石に厳しいか。」

「なら、ギルガメッシュにはまずセイバーが相手をしてもらう。勝つんじゃないくて、時間稼ぎなら大丈夫のはずよ。」

「他の四人は聖杯を担当か。」

それもそれで不安が少し残る。

「なあ、ギルガメッシュはそれで良いとして、聖杯自体はどうなるんだ？あれって確か、器がないといけないんじゃないか？」

衛宮は思いついたように問いを投げかける。

「本来ならイリヤスフィールが器だけれど、聖杯の力は取り出されている。けど器自体は、魔術師なら誰でも良いはずよ。」

この街に魔術師はそう多くはない。ましてや、そのほとんどがここに集結している。残っているのは……

「まさか、あいつが。」

「そのままかよ。慎二の他にはいないわ。」

「けど、慎二は魔術師じゃないだろ。間桐の血筋は衰えていったって。」

たしかにあいつは魔術を使えない。けれどもだ、衛宮。

「でも、魔術回路はある。閉じていても聖杯を入れられれば、無理矢理にでも開かれだろうな。そうなれば、不完全だとしても聖杯は完成され、どんなものになるかは想像もつかない。」

果たして、そんなことをされて慎二の体は持つんだろうか。いや、生きたまま地獄を味合わされるのだろうか。想像しただけでも、身震いがする。

「それに、あれはこの世^{アンリマユ}全ての悪よ。ただでさえ聖杯は歪んでいるのに、更に歪んでしまえばどうなるのかしらね。」

「イリヤスフィール、今何がどういものだって——！」

今まで一言も喋らなかつたイリヤスフィールが、衝撃の真実を明かす。

「だから、聖杯は歪んでいるって言ったのよ。この世^{アンリマユ}全ての悪によつてね。」

「ゾロアスター教の悪魔がなんで聖杯に関わってるのよ。」

「アンリマユは名前だけよ。正体はただの一般人。けど、それによつて聖杯が別の物に染められたのは確かよ。」

そこからは、イリヤスフィールの説明が続いた。あれが殺戮しか生み出さない物に化したとか、所有者の願望を捻じ曲げて捉えてしまうとか。

とにかく、ヤバイものらしい。

「つまり、誰が何を願っても人を殺す以外は何もしないと?」

「ええ。十年前の大災害もそれが原因ね。」

こうなってくると、今回の聖杯がどんなものになるのか、想像すらできなくなってきた。不完全で悪に歪んだ聖杯か。

「となると、慎二を助けながらも聖杯を破壊するのは、相当な労力がいるわね。セイバーはギルガメッシュと戦ってもらわなきゃだし。」

皆が頭を抱え込む。

あのワカメを助けるのは、決定事項なのか。まあ、反対はしない。そもそも俺も助ける気だったし。

「じゃあセイバーは正門からしか入れないからそうしてもらおうとして、残りの私たちは横から扉を越えて、直接聖杯に行くしかないわね。」

「しかし、聖杯はどうするのですか？慎二君を助け出せたとしても、聖杯を破壊しなくては意味がありませんし、私たちだけでなんとか出来るようなものでもないでしょう。」

呪いの願望機を破壊するなんてのは、対城宝具を使わないと無理だろう。それには魔力が必要だ。遠坂はセイバーの分を持ってもらわないといけない。衛宮は心細いし、俺とジアナを合わせても……

「なあ、一つ言っただいいいか。」

八方塞がりになりそうな所に、衛宮が意見を出す。

「これはあくまでも勘だが、セイバーじゃギルガメッシュを倒せないと思うんだ。」

それが事実ならば、俺たちを絶望の底に落としかねない言葉だ。

セイバーは何も言わず、ただジツと衛宮の話を聞く。彼女も薄々気づいていたのだろうか。

「あいつの力は”個”としてじゃなくて、”数”として強いんだ。兵士ではなく、軍隊としての強さ。更には、宝具の原典となるものを全て保持している。だから、ギルガメッシュにはサーヴァントである限り勝てない。」

はつきりと、セイバーをギルガメッシュと戦わせるのは無謀だと言いつ切る

「……それで？他に良い案はあるのか。」

だからと言って、作戦を変える理由にはならない。勝てなくとも、

時間稼ぎにはなる。その間に聖杯を壊せば勝ちだ。

衛宮は俺の質問に対して、どの答えを出すかを迷い、そして決めた。

「俺がやる。」

出た。またこれだ。

いつも、いつも自身を顧みずに無責任なことを言い出す。

「アーチャーの使った魔術を使えば、俺でもギルガメッシュと対抗できる。いや、その魔術だからこそあいつに有効なんだ。」

けど、今回は違った。

しつかりとした理由があり、自分を知り、相手を把握し、相性を考えた作戦だった。

「でも、あんな魔術使えるの？ 士郎の魔力量じゃ無理よ。そこの二人みたいに、簡単に魔力譲歩をできるっていうなら、別の話だけど。」

「それならば、以前に士郎君とセイバーに施した魔術回路マクスの補強魔術を応用すれば大丈夫です。凜はセイバーの魔力補給をしなくてはならないので、私が」

「いいや、ダメだ。」

俺は、ジアナの提案を却下する。

「お前の負担が多すぎる。わざわざお前の魔力を衛宮に魔力に合わせ変換しなきゃならない。それをずつとはさせられない。」

それに、ジアナには他の事をやってもらおう。」

「なら、創太が士郎の魔力タンクになるっていうの？」

「いいや。それよりもっと良い方法がある。それはだな……」

—————

場所は変わって、衛宮の自室。豊と障子に囲まれ、俺の現代風な部屋とは全く別物だ。特に変わった物があるわけではなく、強いて言えば机があるくらい。

この部屋には今、衛宮と俺の二人しかいない。

「創太、一体何をするつもりだ？」

「だから、さっき言ったろ。お前の体をちよいと弄るだけだ。」

言っておくが、ナニをドウするなんていう展開には絶対にならない。そんな腐った事になってしまえば、俺は自殺するね。いち早く、

即座に、その様子を見たやつらも巻き添えにして。

「それだけじゃ、分かるわけないだろ。」

「はいはい。だったら、一から説明してやる。」

まず、今のお前には魔力も技術も足りない。そんな奴があんな固有境界を使えるはずがない。」

俺は使えたけど、あれは例外だ。基盤は相手に任せているだけで、自分はちよつと手を加えたただけだ。

「もし魔力だけ与えても、俺にそこまで魔力量があるわけでもないから、すぐにそれは尽きる。」

そこでだ。古崖の十八番である力の魔術をお前に伝授する。」

「今からか？そんな急に新しい魔術を覚えろって言われても。」

伝授するのは語弊がある言い方だったかな。少し格好つけすぎたかもしれない。

「悪い悪い。埋め込むって言った方が良かったかもしれないな。古崖の魔術ってのは、力をより効率良く扱うってのも入ってる。その魔術陣を俺の魔力を使ってお前の体に埋め込む。」

「けど、それって上手く行くのか？セイバーの時は、他人の魔力を取り込む事は通常では無理とか言って、俺自身の魔力を動かした筈だよな？」

「そうだ。けどお前ならば、いや俺とお前ならば、上手くできる。」

衛宮は首をかしげる。俺の言った意味がよく分からないという様子だ。

「俺とジアナが、お前とセイバーとのパスを繋げる時があっただろ？あの時に違和感を感じたんだ。まるで、自分の魔力を扱っているような違和感を、な。」

「そうだったのか。」

……となると、俺の体はキャスターの言う通り、魔術に対して全く抵抗が無いことになるのか。」

俺の言葉に対して肩を落としてしまう。どうやら、自身の未熟さに対して、落ち込んでいるのだろう。

だが、それに関しては訂正させてもらおう。

「いや、俺が言っているのは衛宮は俺に対して心から信頼しているということだ。」

普通はどんなに親しい相手に身を任せようとしても、どこか疑っている部分がある。だから、他人に魔術を使われる時は抵抗してしまうんだ。けれども、お前に対してはそれが無い。」

俺とジアナを例にすれば、魔力補給ならまだしも、他の魔術は若干の隔たりが感じられる。

これは、普通の人ならば正常な事。外部からの侵入に対して、どうしても抵抗するのは人間の本能だ。

「言つとくけど、お前が俺に強化をしようとしてもそんな風にはならないからな。お前が異例なんだ。」

とにかく、それを利用して、俺の魔力を衛宮の体に送り込み、魔術陣を作る。」

話を少し強引に進め、戦いの準備をしようとする。

衛宮が何故異例になったのか、なんてのを説明している暇はないし、そもそも俺が考えているのは推測だ。その推測というのは、十年前だ。あれが原因だと俺は予想している。

俺に対してだと、同じ現象が起きない理由はそもそも俺とこいつでは境遇が似ているようで違う。全てを失った者と、一部を失った者。何も残っていないあいつと、少しは残されているけれど、亡くなった人が浮き彫りに出る俺とでは、心境が違いすぎる。

「……分かった。なら、俺は何をすれば良いんだ？」

「背中をこっちに向けてくれ。後は以前のように抵抗せず、リラックスしてくれ。」

衛宮は俺の言う通りに背中を向ける。

「これでいいか？」

「ああ、十分だ。」

背に手の平を当て、集中する。

前と似ているようで、全く違う状況。ジアナのサポートはないし、やる事は違う。衛宮の魔力を外から動かすのではなく、俺の魔力を送り、遠隔操作で陣を作る。

以前のように、衛宮の魔力を使えば良かったのだが、あいにく俺の力の魔力でしかこの陣は書けない。他の、ましてや衛宮の剣に特化した魔力では相性が悪すぎる。

「行くぞ……性質フォース・チェンジ、変化。」

その一言で世界が変わる。

感覚が外ではなく、内に向けられる。

腕を伝い、衛宮の中に入っていく。

一つ一つ、丁寧に。

魔力という媒介を使い、体の中に創り上げていく。

効率良く魔力を創り上げ、効率良く世界剣を創り上げ、効率良く技を創り上げる、そういう体に創り変える。

その途中、ノイズが走る。見たことがあるような光景が目に移る。

誰かの声が聞こえる。

生きる、生きろと。

それは懇願ではなく、脅迫に近かった。

自分は死んだのだから、お前は生きなければならない、と。

一分か、十分か、それとも一時間か。

一瞬なのか、永遠なのか。

時間の感覚が分からない。

けれども、俺はいつのまにか目を開けていた。

儀式は……完了した。

「……ふう、終わった。気分はどうだ？」

緊張の糸が解かれる。

儀式の最中に何か覗き見た気がする。それは全く見た事がない光景だった。やはり、俺が見た物とは違う。

「んー、変わらない……いや、少し体が軽くなった気がする。」

「だったら成功だ。次第に馴染んでいくと思うから、ギルガメッシュと戦う時はかなり体の調子が良くなっている筈だ。」

今はまだ、陣が衛宮の魔力に合わせようとしている段階だ。本調子になれば、固有結界だって発動できる……と思う。

「本来なら二時間しか効果が続かないが、お前の場合一日は保つたら

う。もしかしたら三日かもしれないけれど、それ以上は流石に無理だ
と思ってくれ。」

「いいや、あいつと戦う時だけで十分だ。」

「まあ、そうだな。」

「そうそう、お前に渡しておく物がある。」

右のポケットに手をつ突っ込み、あるものを取り出す。それは赤い宝
石だった。

「それ、遠坂のじゃないか。」

「ああ。それも一番デカイらしいぞ。」

「なんでも親の形見だとか。」

譲ってくれと頼んだ時は拒否されたが、二週間前ぐらいにアー
チャーがセイバーに襲われた時、俺が助けてやった事を理由に譲って
もらった。

今更だとは思っていたけど、案外すんなりと通った。

「なんでそんな物を。」

「これ、アーチャーも持ってたんだ。」

「アーチャーも？けど、あいつ……そうか。」

察したか。

「どうやら、これが媒介で呼び出されたみたいだ。だからじゃないけ
ど、これはお前が持ってた方がいい。」

遠坂もアーチャーが同じ物を持っていた事を知っていたようだ。

さつき、あいつは拒否したと言ったが、それは衛宮がアーチャーと
同じ道を辿るのではないかと危惧もしたらしい。けど、俺が助けて
やった事を言った後に、もしそうだったとしても今回みたいに答えは
得られるだろうと説得したのだ。

「最終手段ぐらいは持ってた方が良いだろ？」

「……ああ、ありがたく受け取るよ。」

俺から宝石を受け取った衛宮は、それをポケットに入れる。

さあ、準備は整った。あとは乗り込むだけだ。

前哨戦

深夜零時。柳洞寺での最終決戦を前に、俺とジアナは二人きりで自宅の前に立っていた。

衛宮が桜の顔を一度見ておきたいということで、看病場所である俺の家へと向かい、遠坂は辿り着くや否や喉が渴いたといいだし、冷蔵庫にある麦茶を勧めておいた。セイバーは遠坂の護衛をしている。

電灯と少し欠けた月明かりが照らす中、ジアナが声を掛ける。

「少し良いですか？」

ほんの数日であったが突然疎遠になった二人には、この時間は重要であった。

「なんだ？」

「言いたい事があります。」

言いたい事……正体を隠している理由とかか？そうだとしたら、俺にとつてどうでもいい。昔がどうのなんて言うつもりはない。大事ななのは今だ。

それとも逆に、俺がジアナを突き放した理由でも訊いてくるのか？それならば、俺は話す義理がある。

そう覚悟し、話の続きを聞いていると

「私はこの時代のこの場所に召喚されて、本当に良かったと思っています。」

それは俺の予想とは全く違う物だった。

驚きを隠せないとはまさにこの事だ。俺の口はきつと馬鹿みたいに開きっぱなしだろう。

「生前にも家族がいて、貧しくも暖かい生活は送ってはいました。その人生の結末が、裏切りと罠に嵌められた事であっても、それで良かったのだと思っています。」

後悔無き過去を振り返り語るジアナはどこか遠くを見つめる。

……止める。止めてくれ。

「ですが、もしここに生きている人たちと貴方の両親と、そして貴方と過ごした人生を今ここで終わってしまうならば……」

それ以上、言わないでくれ。

そんなの遺言みたいじゃないか。

「……いいえ。今でなくとも、私は未練を残してしまうでしょう。」

それくらい、貴方達には感謝しています。

ですから、必ず、必ずや生きて、そしてこの場所に帰り、またいつもの生活を送りましょう。」

……ああ、そうか。だったら、生きて帰ろうじゃないか。

この世界にフラグなんて物があるのか分からない。けれども、あつたとしても、踏みにじってやろうじゃないか。こんな惚れてしまいそうな笑顔を見せられてしまえば、そうするしかない。

「絶対にな。」

必ず生きて帰る。強く、強く、俺は決心する。

「あくら。結構アツアツじゃない。お二人さんは。」

「り、凜!?？」

「てんめえ空気読みやがれ。」

そんな良い雰囲気を、遠坂は躊躇する事なく、ニヤニヤしながら横槍を入れてきやがった。

「良いじゃない。別に二人の間を悪くしようとしてるんじゃないし。」

誰もそんな事は言っただけだよ。

「はあ、ったく。これで負けたら遠坂のせいだからな。」

「どこがどうなったら私のせいになるのかしら？」

しらばっくれるか、こいつ。

「まずはな」

「悪い、遅くなった。」

遠坂に説教をしようと思えば、タイミング悪く衛宮が帰ってくる。

「……うっどうした、俺の顔に何かついてるか？」

「いいや、別に。」

話を中断され不機嫌になった俺は、八つ当たりのように衛宮を睨みつけていたが、間抜け顔見せられたおかげで、そんな気はどこかに吹っ飛んでしまった。

「どこかの誰かさんは何かにお怒りのようだけれど、士郎も戻って来

たんだし、そろそろ戦いに集中しなきゃね。」

どこかの誰かさんって。

……まあいい。遠坂の言う通り、決戦までの時間は残り少ない。話を逸らされたような気もするが、余計な事を考えてはならない事も事実だ。

けれども遠坂、覚えてろよ。

「全く……仕方ねえ。」

皆んな、準備は良いな？」

おれが最後の確認を取ると、その場にいる全員が肯定で答える。

「そんじゃあ、今日で終わらせようじゃないか。勝者なんぞいないこの戦争をな。」

約二週間。いや、それは本格的に始まってからだから、情報収集の時間も入れればそれよりも前。違う。この戦いは十年も前から始まっていた。

両親が戦い始め、そして俺も戦い、この夜で終わろうとしている。ここで決着をつけようではないか。

柳洞寺、そこで敵は待つ。

|| || || ||

静かな夜に木々のざわめきが聞こえてくる。しかし、それ以外には何も無かった。動物や虫の鳴き声、人の気配すらも。そこは、危険なのだと本能で悟ったのか。

そんな中で、彼女達二人は見上げる。林の中に続く階段と、その先にある寺の門を。その先からは、異様な魔力が垂れ流れおり、彼女らの足を包む。まるで、ドライアイスの煙のように。

「やはり、この先に聖杯があるのですね。」

鎧を纏い、完全な戦闘態勢に入っているセイバー。

「はい。この様な不快ながらも強大な魔力を生み出す物は、聖杯ではないでしょう。」

こちらもしスターのような衣と鎧を纏い、そして自身の宝具である旗を掲げているジアナは、セイバーに応える。

「しかし、本当に大丈夫なのでしょうか。」

「私なら心配に及びません。英霊としての力が弱まっていたとしても、あのサーヴァントには勝てます。」

ジアナは自信満々といった様子だ。しかし、

「いえ、そちらは信用しています。私が危惧しているのは士郎の方です。」

それは思い違いであった。

「それこそ心配は無用です。彼が持つ力を十全に発揮できれば、まず負ける事はありません。」

「しかし……」

「それに、保険もあります。ですから、貴女は貴女の役割を果たしてください。」

「……はい。」

セイバーは不安を残しながらも、元マスターである士郎に信頼し、この現世における最期の責務を果たそうと心の中に誓う。

「そろそろ時間です。私たちも行きましょう。」

「承知しました。」

皆と別行動を取ってから十分後、それが彼女達の動く時間であった。

セイバーはサーヴァントであるが故に、正門からでしか境内に入れない。寺はその性質上、人間あるいは正規の方法で入る霊以外は拒むのだ。

しかし、英霊でありながらも生身の身体を持つジャンヌ・ダルクとジアナは正門から入る必要は無い。だが彼女には、セイバーと行動する理由がこの階段の上にあった。

二人は階段を一段進むごとに、警戒を強める。林の中からの奇襲は、敵の性格から考えて限りなくゼロに近い。しかし、それでも不測の事態は無くしていかなければならない。慎重に寺の門に近づく。

そして、階段の途中にある踊り場に着いた時、二人は足を止める。

「ほう、セイバーだけが来ると思いきや、聖女までもが付き添っているとは。私の存在は忘れられてはいなかったようだ。」

「アサシン……い！」

階段の頂上、そこで待ち受けていたのは、身の丈以上の刀を持つ侍だった。

「やはり居ましたね。門を依主としている貴方であれば、キャスターがないいくとも現世に残り続けていると予想していました。」

「その様子では、聖女が相手になるという事で良いな？」

「貴方には悪いですが、そういう事になります。」

ジアナは作戦を決める際にアサシンの存在をみなに伝えていた。そしてその事を踏まえ、自分がその相手をするという事も。

「貴方としては名実共に兼ね備えたセイバーと剣を交えたいのではありません。しかし、こちらとしてはそうもいきません。」

「そこまで見抜かれているか。であれば、私の正体も把握済みなのだな？」

アサシンの正体。そう言われて彼女らは疑問を持った。確かに彼の正体は理解しているつもりだ。だからこそ、そのアサシンの言葉に引っかかってしまう。

「貴方の真名は佐々木小次郎の筈です。それは貴方自身も明かしていたでしょう。」

以前に彼女達とアサシンが戦闘を行った時、彼は自身の宝具燕返しを放っていた。佐々木小次郎が使っていたと言われる剣技を。

だから、彼の真名は佐々木小次郎だと勘違いしていた。

「……ほう。どうやら思い過ごしのようなうだ。だが、どちらにしても結果は変わらぬ、か。」

ならば教えてしんぜよう。私の真名は佐々木小次郎では無い事を。」

「何？」

アサシンが偽物だという事実は、さして彼女らには問題では無い。しかし、偽物であるならば、彼の正体は一体何なのか。

「佐々木小次郎ではないのであれば、一体何者なのですか？」

「どこから話すべきか。そもそも佐々木小次郎というのは、宮本武蔵の好敵手として語られた都合の良い架空の人物に過ぎん。私はその人物の秘技を披露できるという一点で、あの女狐に召喚されただけの

農民だ。」

「農民が……伝説にもなる秘技を？」

「ただの暇つぶしだった筈なのだがな。それは宙を舞う燕を斬ろうという物だ。一太刀を入れればその風圧に乘られて避けられ、どれだけ素早く二太刀入れようとも届かなかった。そして、それ以上数を増やそうとも無意味だという事に気がついた。」

ならば、と思い三太刀を同時に放つという前人未到の修行をしていれば、その領域に辿り着いてしまった。」

ジアナは思った。その理屈はおかしい。

そもそも、同時に放つという発想がおかしかった。そんな人外じみた事を何故やろうとしたのか。更には、魔術も何もなしにその身一つで魔法紛いの事をやってのけた事は、呆れを通り越して賞賛に値する事だとも、彼女は思っていた。

決して、宝具を模倣できるのも大概だ、と言ってはならない。

「貴方がどういう存在であるかは分かりました。しかし、倒すべき存在である事は変わりません。そして、貴方の相手が剣士として無名である事も。」

ジアナの言葉は、謙虚したものでも、自身を卑下したものでもない。れっきとした事実だ。ジャンヌ・ダルクは兵の士気を上げる事に長けていても、戦い自体に優れているわけではない。

「そう謙遜するな。確かに生前のそなたは技術を持っていなかったのだろう。しかし、今は違う。その力は誇るべきだ物だ。」

「確かにこの力そのものは誇るべきモノでしょう。ですが、これは私のモノではありません。恩人から授かった力を自身の力だと勘違いし、驕りたくはありません。」

……時間をもう無駄にはしたくはありません。私達は早くその門を超えなくてはなりませんから。」

ジアナは剣を構える。彼女自身の力ではなく、彼女の持つ全ての力に合わせた構えを。

「では始めよう。」

私とて無名の者。その最期が誰であろうと、強き者であれば文句な

ぞ言わぬさ——！」

階段の頂上から一気に降り、駆け寄るアサシン。

無名同士の戦いは、幕を開ける。

|| || || ||

同時刻。柳洞寺の横にある林の中。

月明かりはほとんど届かず、視界はかなり悪い。更には茂みを地面が覆い、足元は全く見えない。一步でも間違えれば怪我を負い、戦闘に支障をきたす。そのため、木々の中を進む少年と少女は一步一步に細心の注意を払っていく。

そして、目的の場所にたどり着こうとした時、ある人物に出会う。

「どっちに来るかと思えば俺たちの方に来るとはな、言峰。」

「私個人としては、衛宮士郎と対面したかったがな。」

言峰綺礼、衛宮士郎とは違った意味で歪みを持つ存在。

「綺礼、アンタ性格悪いとは思ってたけど、そっち側に加担するとはね。」

「加担する？凜、君は少し勘違いをしていないか。」

凜の勘違い、それは綺礼が元々敵対する勢力ではないという事だ。

「どういう事よ。」

「遠坂、そもそもあいつは人の不幸を楽しむ奴だ。」

「人聞きの悪い事を。私は人々に救いを与えているだけだ。例えば、そう。凜、君の父親に与えたように。」

綺礼は薄気味悪い笑顔を浮かべる。

「アンタ、まさか……！つ、絶対に許さない！」

「待て遠坂。仇を取りたいのは山々だろうが、こいつは俺がやる。お前は色々と温存しなきゃいけないからな。」

「……ええ、分かったわ。」

凜の怒りは創太の制止によって抑えられる。

「創太、君の両親から散々やられたよ。まるで雑魚だと扱われるようにな。」

「邪魔をするなら、同じ結果になるぜ。だから、今の内に道を開けた方が良いんじゃないか。」

「できない相談を持ちかけられても困る。例え無駄だとしても、私はすべき事をするまでだ。」

綺礼は中国拳法の構えを取る。それは強者の構え。英霊程ではないが、普通の人ならば一捻りできるであろう力を持つ。

「なら、俺もするべき事があるからな。そこをどいてもらおう。」

創太は腰を極限まで低くし、利き腕である右腕を大きく引く。そこから強烈な一撃を放つ、まるでそう言っているかのように、この一撃は分かっているも避けられない物だと宣言しているかのように、構える。

「悪いが一撃だ。一撃でお前は沈む。」

秘剣返し

その戦いは宣言通りの結果に終わった。

一撃。

たった一撃で、綺礼は壁に沈む。

当然と言えば当然であった。英霊を相手に短時間だけだとしても圧倒するその力を持つてすれば、どれだけ強くとも人の身の領域を超えていない者が相手であるなら、一瞬で勝負は着く。

「息は……まだある、か。」

創太は神父の手首に指を当て、生死の確認をする。息はあると言ったものの、意識は無い。本来ならば死んでいてもおかしくない一撃を喰らっておきながら、その程度で済んだのは幸か不幸か。

「そいつに甘さを残さない方が良いわ。死んでも死に切れない奴だから。」

自身の師を殺せ。淡白とした声で凜ははつきりと言う。いや、もう既に彼女にとつては殺すべき敵なのだろう。

「どうせ、こいつは聖杯が無くなったら死ぬ。放っておいても、結果は変わらない。」

「どういう意味よ。」

「俺もさつき知った。言峰の体を調べたら聖杯と繋がっていた。どつちにしろ、俺は殺す気はない。」

創太の注意は完全に綺礼から無くなっていた。その目に映るは聖杯のみ。

「さつきと行くぞ。聖杯を壊せば全て終わりだ。」

「ええ。そうね……」

凜は綺礼を気にしながらも、創太の後をついて行く。

「あ、そうそう。ちよいと手を貸せ。」

「……？何かしら急に。」

疑問に思いながらも彼女は創太の言葉に従い、手の平を見せるように差し出す。

「ほいこれ。宝石の分はこれで返したからな。」

創太が凜に渡した物、それは刻印の入った石だった。

「ちよつと、訳の分からないモノを渡さないでよ。」

「前にも俺が使ってただろ？魔力要らずで、いつでも魔術を発動できる道具だ。それには転移の魔術が入っている。事前に場所を登録しておけば、そこへ瞬間移動できる。対象は二人がギリギリだ。」

あとは……分かるな？」

その石は保険であった。凜が慎二を助け出す時にどうしても魔力が足りなくなつた時の為の物。また、ほんの僅かな可能性だが、失敗した時の為でもある。

「ええ、ありがとう。できれば、使わずに済んでほしいけどね。」

「それが一番良い。」

さ、行くぞ。いつあれが起動するか分からないんだからな。」

二人は扉を登り、それぞれの場所に着く。最後の戦いを始めるために。

|| || || ||

創太と綺礼の戦いに対して、こちらは一筋縄ではいかなかった。

門前でのアサシンとジアナの戦いは、ほぼ互角だった。数ではジアナが上ではあるものの、アサシンの技によって防がれる。何百という読み合いを続けながらも、戦いは衰えを知らなかった。

「なんともまあ激しい聖女だ。神に仕える身にしては、少し茶目つ気がありすぎではないか？」

「意味のない挑発はしない方が良いですよ……！」

アサシンの余裕のある喋りは、撃ち合いの中で幾度となく行われる。

下から攻める彼女にとって、段上のアサシンを相手にするのは不利であった。強度を重点としたその剣を多少力任せながらも、相手の剣撃の比較的弱い部分を的確に入れてはいるものの、斬る事に特化した刀を巧く使い力をいなすその技と、高低差の有利を得ているアサシンには今一歩届かない。

これでは同じことの繰り返し。であれば、打開策は必須。

「たああっ！」

ジアナは自身の剣をアサシンの刀に当て、逸らされる前に押し込む。

「むっー！」

もちろんそれだけでは、身を翻されて受け流される。さらには、背中にカウンターを貰うというオマケまでついてくるだろう。そうなる前に、彼女はアサシンの動きを読み、重心が動く方向を見極め、刀に当てていた剣をその方向に力を入れ、吹っ飛ばす。

「条件が五分になりましたね。」

よって、二人は並ぶ。

道を塞いでいたアサシンを横に移動させれば、ジアナは上へと登れる。しかし、彼女はあくまでも彼より高い位置に陣取らなかつた。下手に登れば、アサシンがセイバーに襲うかもしれないからだ。セイバーに無駄な消費はされられない。

「確かに。だが、それだけで勝てるだけでも。」

「もちろん思ってますよ。」

互いに睨み合い、牽制し合う。アサシンはゆっくりと階段を下り、ジアナもそれに続く。踊り場まで下りた時、二人は止まる。足場が平らで安定した場所。

必殺技を出すには丁度良い場所だ。

「しかし先程の戦いは、私が地の利を僅かながら得ていたにも関わらず互角であった。その差を無くせばそなたが勝つやもしれん。」

侍は背を向けながらも、相手を捉えるような構えを見せる。刀の柄を頭の横まで引き、刃を天に向ける。

それは、佐々木小次郎の秘技を名乗った技。アサシンは宝具を放とうとしている。

「これが無ければの話だな。」

言葉に絶対の自信を混ぜながら、確信の笑みを浮かべる。

「あまりそれに固執しすぎると、痛い目にあいますよ。」

「忠告はありがたいが、なにぶんこれしか無いものでな。」

ジアナは剣を中段に構え、アサシンの必殺に対抗しえる物を準備する。

「……性質変化。」

魔力を変化させる特異な魔術。変化先の性質は時間。ありとあらゆる物に影響し、変化をもたらせる物。思いのままに操ればとつもない強さを得られるが、その分修得する難易度も極めて高い。

「行くぞ……！」

アサシンが一步踏み込むと、周りの空間が歪み出す。刃先が三つにブレて、次第にそれは大きくなる。

多重次元屈折現象、今起きている事はそれに近い。

三人のアサシンが別々の方向から斬りかかる。回避は不可能。防御するにしても三つ同時などできるはずもなかった。

「秘剣・燕返し！」

まさに必殺。これを出されればタダでは済まない。相手が普通の人間であればの話だが。

「固有時制御・二倍速！」

ジアナの動きが一段と疾くなる。単にスピードを上げたのではない。自身の時間を速くしているのだ。

本来、その魔術は衛宮の性を持つ者が到達した魔術。衛宮切嗣も使っていたそれを、ジアナは見よう見真似で魔術を行使する。

「ふっ！」

周りの時間を置き去りにするような動きで、まずは一つ目の剣撃を落とし、神速の如き切り返しで、二つ目の剣撃を落とす。

連撃であるはずのその攻撃は、ほぼ同時に近い。アサシンの魔剣に負けずも劣らない。一見そう思われるが、違った。

残り一つの斬撃。それはジアナにとって遠いものだった。二連続ならまだしも、三つ目はどうあがいても防げない。ほぼ同時とは言え、切り返しには僅かに時間が掛かる。仮に叩き落としても、必殺を防いだけ。相手を倒せる訳でもない。ゼロの時間で同時の斬撃と、一つの斬撃に一の時間を使う連撃では大きく差がありすぎる。そんなのは彼女も理解していた。

だからこそ、最初から三つ目は避ける事になっていた。

「っ……！」

アサシンは驚きながらも見惚れてしまう。空を舞うその蝶を。

彼の斬撃は二つを叩き落とされ、残り一つになっていた。であれば避ける合間は生まれる。その隙間を彼女は通っただけ。

簡単に聞こえるが、実際は攻撃から回避に素早く移る事は簡単ではない。体にかかる力を無駄無く動かすのは相当な技術が必要だ。

「これで——斬る！」

遅れて出てきた三つ目の斬撃。それはアサシンの体を容易く斬る。

本来ならば、時間操作という事を行えば抑止力により身体に負担が掛かる。しかし、彼女には問題なかった。彼女自身が抑止力の一端なのだから。

「……行け。」

体を斬られようと彼は立つ。直立不動で余計な声など出さずに。しかし、負けを認める。

「はい。」

彼女達も余計な事は言わずにただ階段を上がる。まだ目的は果たされていない。聖杯の破壊という、すべき事はまだ残っている。

「同じ三度の撃ち合いだというのに負けるとはな。」

ついには誰もいなくなった門前で、彼は月を眺めながらぼやく。

「聖女……いや、ジアナ・ドラナリク。貴殿は無名などではなく、現代を生きる立派な戦士よ。」

侍は光と泡となり消えて行く。魂を聖杯の中身へとそそぐ為に。

VSギルガメツシュ・前編

「何よ……これ……」

それが聖杯を見た凜の感想だ。

柳洞寺に入り込んだ凜は境内の先にある池へ着き、肉塊が蠢く光景を目撃した。見るだけでも悪寒する姿であるのに、周りを包む魔力さえも彼女の体を蝕む。

ソレは呪いそのもの。視認しただけで死ねと強要する。

「あれもヤバイけど、池の水さえも汚染されてるわね。」

周りを囲む池でさえも、一步足を踏み込んだだけで常人ならば死に絶えるほどの呪いが蔓延している。

この先に、あの中に間桐慎二がいる筈だ。凜はそう思い、目で探している、

「……いた。」

呪いの頂上、そこに人影が見えた。おそらくは慎二だろう。肉塊の中で磔にされており、無数の手によって囚われている。

生きているか、と問われれば疑問だが、ジアナ曰く死んでいれば聖杯として成り立たないらしい。だから、彼は生きている筈だ。

「ここに来たのは女一人か。」

後ろからの声。恐る恐る彼女が振り返ってみれば、どんなサーヴァントであっても勝てない存在、またの名を英雄王が堂々とした立ち振る舞いを見せる。

今回は、黄金の鎧を見に纏った姿ではなく、黒のライダースーツを着ている。戦闘に向かないその格好は、戦っても傷一つつかないという意思の表れか。

「劇団三人衆もこぞってここに向かっていていると思案していたが、それはハズレだったか。」

「お生憎様。あの三人はもうとつくに逃げてるわよ。」

「なら、門で見た聖女は偽物、ということか。」

嘲笑うかのような表情は、凜の思惑を全て見透かしているかのようだった。

「まあ、それはどちらでも良い。セイバーがおらぬのであれば殺すだけだが、今回は特別だ。」

アレを見る。シンジの行く末を最期まで見届けるのであれば、その生にも意味がある。」

「大人しくしとけば、何もしないっていうの？ふざけないでよね。」

凜は呪いに足を踏み入れる。

その瞬間、体が死に侵食される。頭を強く撃たれているような、喉の奥から何か得体の知れない物が出てくるような、気持ちの悪い感覚が彼女を襲う。

それでも凜は魔術を使い、呪いに抵抗する。

「く——はは、ははははは!!？」

その姿を見たギルガメッシュは見下すように、口汚く笑う。

「なんだその滑稽さは、我を笑い死にさせるつもりか貴様！」

ならば、好きにするが良い。

——もつとも。我は、そんな真似は許さんがな。」

殺すと、そう英雄王が決めた瞬間に剣が翔ぶ。その一本は、凜の背中を突き刺そうとするが、

「投影、完了………」

横から瞬間的に飛んで来た同じ形状をした剣によって、それは破壊される。

「おい待てよ。」

「……贗作者。」

その方向にいたのは、衛宮士郎だった。つまり先程の剣は、彼が投影した物だ。

「お前の相手は俺だ。」

彼は一歩前が出る。

それと同時に、ギルガメッシュの殺気はより強くなる。

「貴様、何を思い上がっている。この我に敵うとでも？」

まあ良い。ほんの余興ぐらいにはなるだろう。」

指を鳴らし、宝具の群が現れる。その一つ一つが、士郎にとって十分すぎる程の凶器だ。

「薄汚い贋作者。その身をもって真偽の違いを味わうがいい！」
自らの財産を惜しげもなく使う。

十数の宝具から一つずつ。まるで試しているかのように撃ち出される。

「トレース・オン
投影、開始。」

その瞬間、士郎はその全ての宝具を解析し、創造の理念を、基本となる骨子を、構成された材質を、制作に及ぶ技術を、成長に至る経験を、蓄積された年月を、把握する。

そして、それを

「トレース・オフ
——投影、完了。」

複製してみせた。

それら偽物を本物に射出し、ぶつかり合い、互いに消滅していく。

「今までよりも……楽だ。」

驚きに満ちた声をこぼしたのは、士郎だった。

自身の投影が想像以上のスムーズさで行われていた。アーチャーと戦った時のような、無理矢理力を引き出されているのではなく、魔力が最も効率良く動くような感覚。

それだけではない。解析や投影といった魔術にも、変化があった。解析は剣そのものだけでなく、それに宿る力を読み取り、剣の構造把握を補助している。

投影もどこにどう魔力を使えば良いのかが、一瞬で理解できる。全ては創太が士郎に施した魔術陣のおかげだ。

「だからと言って、簡単に勝てそうもないな……！」

あくまでも彼に起きている事は手間の短縮化や消費の減少のみ。それによって火力が多少上がったたり、投影できる数が増えている事は確かだが、革新的な事は起こっていない。

あと一步。ギルガメッシュをあと一步追い詰める為の物は、まだ士郎に持ちえていなかった。

「硝子細工にしては精密にできておるな。複製の速度もそこそこの物。しかし、それだけならばただ退転するだけだぞ？」

そして、それはギルガメッシュにも見抜かれていた。

「我を打ち破るといふ愚の極みを行うならば、」

その手に、剣が握られようとする。

「これぐらいの手は持つておく事だな。」

剣は石柱のような形をしており、英雄王が持つ他の宝具とは比べ物にならないほどの威圧感を放っていた。それはまさにギルガメッシュの宝具。彼しか持ち得ない最強の武器。

士郎の数々の宝具を解析した眼でも、一片の把握すら不可能だった。

ギルガメッシュがそれを手で触れようとした瞬間、

「神秘を無に帰す陣！」

彼を中心とした魔法陣が地面に描かれる。左右にはいつのまにかジアナと創太が挟んでいた。その三人を繋ぐ線を直径とした円状に魔方陣は展開され、ジアナと創太が基点となり完成する。

それと同時に黄金の門は瞬く間に閉ざされ、ギルガメッシュが取り出そうとした剣は門の中に戻っていった。

これが、彼らの対抗策。相手がどんな宝具を出そうと、魔方陣によって全て無力化されてしまう。

「悪いが、それは出させたく無いんでな！」

「……同じ技を親子共々使ってくるとは、芸の無い雑種よのう。」

ギルガメッシュが指を鳴らす。再び門が開かれる。しかも、それは百を超えている。

「っ……！ソウター！」

「分かってる！こんなモン、読み取るまでも無い！さつきと同じなんだからな！」

だがしかし、二人も負けじも門を潰していく。黄金が現れ、消えていく。その連続であった。

「魔術の構成はそつちか。」

開門のスピードがより一段速くなる。

更には、創太の方向に門は多くなる。二人はそれを対処しようとするが、無限に増え続けられれば対処しきれなくなる。であれば、結果は明白だ。

ジリジリと黄金の歪みから宝具が垣間見え出す。

「やはり限界はあるようだな。」

そしてついに、その宝具が創太を襲う。

「ちっ……：ジアナ！」

「分かりました！陣はそのまま、貴方はそれを受け流す事に集中してください！」

創太は以前と同じように宝具を逸らす。後ろに誰もいないのに、その場から動かないように。

門はやがて、ある一定から増えなくなった。どうやら、ギルガメツシユの限界がそこなのだろう。もしくは、王者の余裕という物だろうか。

この魔方阵は、キャスターが使っていた霊脈を基にしている。その中を通る魔力は、源流にある聖杯に吸収されてはいるが、路はまだ残っている。彼女らはそれを利用し、魔方阵を一瞬で展開した。あとは、二人がそれを維持している。

そして、ジアナが魔術を読み取り、それを逆算して有効な魔術を己の知識から取り出し創太に伝え、その創太が魔術を行使する。魔術だけではなく、体術や神術などにも有効である。

一見、士郎の投影のようだが、本質は違う。これは相手を不利などころか、行動全てを無意味にしてしまう。まさに無に帰す陣。

「魔力が保ちそうにありませんね……。」

しかし、弱点もある。強力が故に魔力の消費が激しく、発動時間が短い。そして、今のよう二人のどちらかが攻撃されてしまえば、他方に負担が更に激増してしまう。そして、どちらかでも動けば陣は崩壊してしまう。

もう一つ付け加えるならば、本来ジアナは魔術を使わない者。知識は、時間を積み重ねているだけあって、創太よりも多い。しかし、魔術を使うのであれば、力の変換という適正がある創太の方が、未熟ながらも比較的良いのだ。

だから、ジアナがこの魔方阵を一人で維持するという事は、解析してから逆算までは良いが、魔術発動に関して遅れてしまうという事

だ。

「私が助けに行ければ良いのですが、いかんせん動いてしまえば時間稼ぎの意味が無くなりますからね。」

その一方で、

「I am the bone of my sword.
体は剣でできている。」

士郎はある準備をしていた。

「Steel is my body, and fire is my blood.
血潮は鉄で、心は硝子。」

アーチャーと全く同じ詠唱を唱える。

「I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を越えて不敗」

それは固有結界を発動させる物。

「……ただの一度も敗北はなく。」

しかし、アーチャーや創太のように、周りに変化を及ぼしていなかった。彼の中でも疑問が浮かんでいた。

「このまま続けて結界が完成するのか、と。」

「ただの一度も……理解……」

いいや。これでは絶対に完成しない。ただアーチャーの詠唱をなぞらえるだけでは無理だ。

そう悟った士郎は、詠唱を無意識に中断する。彼にはまだ何かが必要だった。

「時間稼ぎが目的のようだが、肝心の贋作者がその気にならんかったな！」

貴様もそろそろ、終わりの頃合いが近づいているのだろうか？」

慢心しきったギルガメッシュは、創太の残魔力を手取るように読み取る。

実際に、創太は限界を迎えつつあった。いくら以前の彼と比べて、心構えが変わったからといって、力を有効的に使えるだけ。ギルガメッシュには到底届かない。

「くっ……い！」

捌き切れなかった道具が創太の眼前を通る。つまりは、彼が落ちるまでそう時間はかからないという事。

「っ！」

だから、ジアナは動く。敵の行動を制限している陣を捨ててまでも、創太を助けに行こうとする。

狙いはギルガメツシュの心臓。勝負を取る気で仕掛ける。本当ならば敵がトドメを刺す瞬間に行くべきなのだろう。しかし、彼がその時に隙を見せたとして、それを突こうものならばむしろ反撃が待っているだけだ。相手はそれほど千里眼を持っている。

ならば、まだ創太の体力が残っている今ならば挟み撃ちにできるかもしれない。

彼女はそう判断し、たった一度地面を蹴っただけで、最高速まで体を動かす。

だがしかし、

「良い決断だ。我には無意味だがな。」

既に彼女の前には十数本の宝具が展開されていた。もう魔方陣の効果は無く、黄金の開門を邪魔することはない。

読まれていた。そんな事に彼女は動じない。むしろ、そう読んでいた。

だから、対抗策もあつた。それは

「詠唱省略、心を形に……ただ塗り潰すのみ！」

創太の固有結界だ。

元々固有結界に乗せる結界であるため、単体で使うとなると範囲はかなり狭くなる。だが、標的を絞れば問題はない。

さきほど陣を捨てたと言ったが、陣自体はまだ残っている。

二人はそれを再度発動し、創太の結界と併用する。そうすれば、黄金の門だけに、世界を塗り潰す海が展開される。

となれば、一度発射されそうな宝具は門の中に戻って行く。

この時、チャンスが生まれた。

ギルガメツシュを倒せるチャンスが。

敵は完全に無防備。ジアナはスピードを一切落とさずに、接近している。迎撃しようとしていた宝具は無い。となれば、後は彼女の攻撃が当たれば、勝利へと近づける。

「……っ！ジアナ、止まれ！」

ギルガメツシユの宝具さえ無ければ。

彼がある剣を振りかざした時、そこにある空間そのものが斬り裂かれていく。

嵐のように周りを巻き込み、最も接近していたジアナはおろか、創太や士郎にまでも襲いかかる。創太が展開していた海も、魔方阵も、全てを壊す。

時にして一瞬、しかし、災厄のような攻撃が放たれた。

それが治まった時、戦場の光景は酷かった。地面はひっくり返され、寺も半壊しており、血まみれだった。その血が誰の物であるかは言うまでもない。

このような男に一体誰が勝てるというのだろうか。

VSギルガメツシュ・後編

月明かりが照らす血塗れの境内。その中には死体のような何かと、仁王立ちしたギルガメツシュ。災厄が去ったその場所は瓦礫が積まれ、勝者だけが残っているかのように見えた。しかし、その他に戦う意思を持つ者が二人いた。

「我の一撃を防ぐ愚者が誰かと思えば貴様か、セイバー！」

全てを薙ぎ払うような災厄を起こした英雄王は嬉々とした表情で、自身の宝具を受け止めた人物を見据える。

その人物、セイバーは士郎の前で聖剣を振り下ろしている。つまり、残り二回しか出せない宝具を使用したという事。士郎を守るためにだけに。

「雑種では物足りんと思っていたところだ。加減したとは言え、私の宝具を受け、そして耐えた。

やはり貴様の方がよっぽど楽しめる。そこにくだばっている奴らよりはな。」

敵はセイバーだけを見続ける。

死体には、創太とジアナにはもう興味がない。今は目の前にいる女だけが重要だと、そう言いたげな顔で。

「っ……！」

その言動に怒りを爆発させようとする士郎。しかし、

「待ってください、シロウ。」

セイバーが静止を掛ける。

「彼らはまだ生きています。無闇に動いて二人を巻き込んではいけません。」

「……ああ、分かっている。悪い、少し動揺しすぎた。」

自身の冷静さを欠いた行動を自覚した士郎は、一つ大きく深呼吸をする。

「セイバー、行ってくれ。」

「なっ……！シロウ！」

——いいえ。元からそう決めていましたね。」

セイバーの役割、それは聖杯の破壊以外にもう一つあった。一度だけ士郎を死の淵から救う事だ。だから、今の今まで彼女は姿を現さずにいた。

けれども、ギルガメッシュと戦う事は彼女の役割に含まれていない。

「ああ、あいつは俺が相手する。」

セイバーは己が元主の覚悟を確認した後、

「武運を。」

と一言添え、英雄王の横を通りすぎる。

「正気か貴様？ただ一つの勝機を逃すとはな。」

英雄王は再び門を開く。

「さっさと終わらせてやろう、雑種。」

「構成材質、解明——」

そして、士郎もギルガメッシュが繰り出す宝具を解析し始める。しかし、それだけではやはり敵を倒しきれない事は理解していた。どれだけ全力を出そうと、効率良く剣を複製しようと、彼の無数にある財宝には届かない。

せめて、せめてアーチャーのような固有結界が作れば。

そんなただの理想論を、彼は思い描いてしまう。

「トレイス・オフ
投影、完了。」

それでも、死なない程度には武器を用意する事は出来る。

「——憑依経験、共感完了。」

だから、今は出来る事だけをするのみ。

「ロールアウト
工程完了。全投影、待機。」

時間稼ぎくらいは、

「——フリーズアウト
停止解凍、全投影連続層写！」

そんな幻想は、

「なっ！」

打ち砕かれてしまう。

士郎の作る投影品は、次々と真作に打ち破られていく。互いに触れ、そしてオリジナルだけが残る。彼にさえ理由は分からなかった。

しかし、それだけでは止まらず、死の雨は彼に襲う。

投影に全神経を集中していた士郎に避ける余裕などなく、故に死を待つのみ。かつて創太が幾度となく味わった時間、それを彼は共有してしまう。

まだだ、まだだ。けれども、足りない。

何かを掴もうとするが、今のままでは決して掴めないと自覚する。士郎の中で二つの思考が渦巻いていく。

もう、彼の命は終わるにも関わらず。

「——心を……形に……！」

ある一人の男がいなければの話だが。

d r o w o f s p i r i t
「ただ塗り潰すのみ！」

詠唱が唱えられたと同時に、士郎を守るように藍色の液体が現れ、ギルガメツシュの宝具を次々と飲み込んでいく。よって彼の死は免れる。

一体誰がそんなことをしたのか。その答えは簡単だった。

「創太……！」

士郎の視線の先には、血塗れながらも手を伸ばした創太がいた。そう、士郎を助けたのは彼だ。

魔力を振り絞り、魔方陣も、上塗りする固有結界も無いはずであるのに限定的な固有結界を発動したのだ。

「……………いな。」

聞こえるか聞こえないか分からないほどのかすかな声を、創太は口からこぼす。当然、士郎にもギルガメツシュにも声はほとんど聞こえない。

「とう………(……)……わる………」

「え——？」

今度は僅かにだが、その声が衛宮の耳に届いた。それでも言葉は明確に伝わってはいなかった。

「つ………投影に、こたわるな………！」

次ははつきりと、ここにいる誰もが、創太の怒声のような声を聞いた。

しかし、内容は分からなかった。士郎は自身の本領が投影だと、それしかない思っている。けれども、創太の言うその本領にこだわるなという事には理解できなかった。

「耳につく煩い魔術師だ。」

「っ……！」

ギルガメツシュがうっとおしいハエを見るかのような目で創太を睨みつけると、門から朱い槍が翔ぶ。ランサーが使っていたあの『ゲイボルク』。しかし、狙いは創太ではなく、未だに意識を失っているジアナであった。

それに気づいたと同時に、創太は走る。ボロボロになり、傷も少なくなく、魔力も底を尽きた体であったとしても。彼女を助けるために。そして、

「あがつ……！」

間に合った。ジアナの体に呪いの朱槍が突き刺さる事は無かった。だが、代わりに創太の背中へとそれが突き刺さる。治癒など効かない呪いの傷を刻まれてしまう。

「ふん。道化なぞ庇わなければ、痛手を負うことはなかったらうに。親子共々、つくづくその阿保具合には呆れるわ。」

「てめえ——！」

そう仕向けたのはギルガメツシュ自身だ。であるのに、薄笑いを浮かべながら見下すようなその顔は、ただ愉悦を感じているだけだ。

士郎は親友を馬鹿にするような言動に怒りを覚える。けれども、心のどこかでは落ち着けと気持ちを抑えようとする。

しかし、体は怒りの激流によつて動いていく。あいつを倒せ、あいつを斃せ、と。

その体を唯一止めるものがあつた。

「衛宮！」

背中に槍が刺さろうとも、まだ大声で叫ぶ創太だ。

「アーチャーみたいな……固有結界を作るな！」

お前の剣は……心は……お前の中に……あ……る。」

それでも、彼の意識はギリギリであつたのか、言いたいだけの事を

言って、気を失ってしまおう。

「心は……俺の中に……。そうか、そうだよな。」

しかし、彼の考えは士郎に伝わった。

先ほどの怒りはどこかへと忘れ去られ、士郎の心は冷静になっていく。

「何を勘違いしてたんだ。俺の本領は剣を作ることじゃない。」

ようやく彼は気付く。自身の真の才能に。

「そんな複雑な事、俺には出来ない。」

俺に出来る事、それは

心を形にする事だったんだ。」

最初に彼は、アーチャーが使う固有結界を作ろうとしていた。しかし、そんな事は不可能。なぜなら士郎とアーチャーは別人だからだ。

固有結界とはつまり心象世界、始めから自分の中にある物。創太もそうであった。今思えば、彼は心を形にと何度も言っていた。それに何故気づかなかったのかと、自分自身に呆れる。

「I will be the bone of my sword。」

以前目にしたアーチャーのように手を胸に添え、詠唱していく。しかし、それとは違っていた。士郎の口にした言葉には彼のように悲壮感はなく、どこか前向きな雰囲気があった。

「ただで好き勝手できると思うなよ、雑種！」

けれども、英雄王の数十数百という宝具によって、結界の展開が邪魔されようとしている。

「Steelismy body, and fire is my blood。」
血潮は火中の鉄で、心は熱灯さ
対して士郎は、詠唱しながらもその宝具の投影品を作り出す。しかも、今までよりも速く、一瞬で、まるで敵が財の中から取り出したと同時にと思われるほど。

「っ……い・小癩なー！」

射出した武器を全て撃ち落とされたギルガメッシュは、ある二本の宝具を取り出す。数ある財から厳選されたそれは、『蜻蛉切』と『ヴァ

ジユランダ』。エクスカリバーのような神造兵器ではないものの、数ある一級品である事は間違いない。

『蜻蛉切』は、とんぼがその刃に触れただけで真つ二つになり、その切れ味の良さから付けられた槍。そして、『ヴァジユランダ』は別名雷の牙とも呼ばれ、その一振りで雷を起こし、さらには神をも殺した剣だ。その二本が士郎へと翔ぶ。士郎にとってそれは構造を把握し、投影するまでの時間がかかりすぎる一流の物。出来たとしても、やつとこのことでそんな無駄な魔力を使えなかった。

「I am creating over a only blade.」
だからこそ、その二本は『干渉・莫耶』で十分であった。

士郎は双剣を手に持ち、飛んでくる宝具をいなす。

例えどれだけの逸話があり、恐ろしい能力を持つ宝具だとしても、担い手がいなければ、何の変哲もない武器には変わりない。

「Unaware of losses.
Not aware of gain.」

「おのれーッ!!?」

ギルガメツシュの怒りは次第に大きくなっていく。次々と自分の真作が模造品に敗れていくことが気に食わなかった。

だから、今度は厳選した宝具を何十にも展開する。敵を倒すべく。その一方で周りにも変化があつた。正確に言えば士郎の周りだ。地面に火が燃え上がり、士郎を囲む。これはアーチャーが固有結界を発動する前兆と全く同じだ。

「Withstood pain to create weapons.
Waiting for one's arrival.」

今までとは段違いの質を持った宝具が翔ぶ。

「I have no regrets. This is the only path
しかし、士郎は花びらの盾で防ぐ。熾天覆う七つの円環と呼ばれる宝具で。それが削られながらも詠唱は続ける。

「My whole life was」

詠唱は最後の詰めに入る。

彼の心象世界の真名。

それが今、解放される——！

「“unlimited blade works”」

世界が豹変する。

炎が走り、地面は焼け、空も焼かれ、剣が無数に存在する世界が広がる。

アーチャーと似て非なるそれは、まだ機械的なものでは無い。暁の中で生まれたそれは始まりを意味するかのよう。

同時に、彼の中にある魔術回路が全て開かれる。限界だと思っていた筈の壁が取り除かれ、全ての力が解放される。

「固有結界……それが貴様の能力か！」

「驚く事はない。これは全て偽物だ。」

お前の言う取るに足らない存在だ。」

この世界の担い手が片腕を広げる。すると、呼応するかのようにならぬ数の剣は抜かれ、宙に浮く。

「だがな、偽物が本当に敵わない、なんて道理はない。」

お前が本物ならば、俺は悉く凌駕して、その存在を叩き落とそう。」

一步、前に出る。

彼に眼に移るは、千の財を保持しサーヴァント。

「行くぞ、英雄王——武器の貯蔵は十分か。」

それに対抗しうる奥の手が、今ここに現界する。

「は——思い上がったな、雑種！」

敵は門を開き、無数の宝具を展開する。

士郎は駆ける。その手に、贗作を手繰り寄せながら。

二つの剣群がぶつかる。力は互角。互いに同一の武器を射出し、破壊しあう。そして、二人の縮まったその時、

「——っ！」

戦いは遠距離の撃ち合いから、近距離の斬り合いになる。

するとどうだろう。衛宮士郎が、ギルガメッシュを圧倒する構図が出来上がる。

これは、創太のように身体能力を極限にまで上昇させたからではなく、相性からくる結果だ。

ギルガメツシュの王の財宝は、近接戦の場合、門を開き、剣を取り出すと言う二工程が必要だ。しかし、士郎の無限の剣製は、そもそも武器をすでに展開しているために、それを引き寄せるだけで手に行うことができる。

さらに、士郎は宝具の持ち主の技術までも模倣している。戦士としての経験がないギルガメツシュならば、身体能力の差を埋めるどころか超えてしまっている。

これならば士郎が勝つ、そう思われるだろうが、

「――調子に……」

英雄王はそう甘くはない。

彼には見えていた。ギルガメツシュが何かを取り出そうとしていた事を。

直感する。

それを出させてはいけない。

だから、腕を斬り落とそうとする。

疾く、捷く。

しかし、一步遅かった。

「乗るな！」

「っ――！」

ギルガメツシュは躊躇いなく、ある剣を引き抜く。

先程も使った彼の宝具。全てを圧倒的に潰す、あの災害。

同時に、士郎はその余波に飛ばされる。体制は即座に立て直すのが、迂闊には近づけなくなってしまう。あの剣に、殺されてしまうかもしれないからだ。

「贗作者（ゴウサクシャ）のときに、これを出さずに得ないということか。

先は興が乗った故に見せてやったが、本来ならば、貴様のような雑魚に真名まで晒すなどセイバーに顔向けできんからな。」

来る。セイバーが持つ聖剣以上の一撃が、士郎を襲おうとしている。

「冥土の土産だ。こいつの名を教えてやろう。本来、こいつは無銘なのだが……強いて言うならば、乖離剣エア、それが貴様を死に晒してくれる剣の名だ。」

敵は、大きく腕を引き、石柱のような剣に魔力を集める。剣は空を斬り裂きながら、回る。さらには、固有結界までも巻き込んで行く。

「っ——！」

士郎は、乖離剣の構造を読み取ろうとするが、結果はさつきと同じ。他の剣を集めて対抗しようにも、盾にすらならない。それ程までに、あれは別格だった。

もう手段は……

「……まだあるんだな。」

一つ残されていた。

地面に描かれた魔方阵。それを使えば、あの宝具の力を読み取ることもができるかもしれない。そうすれば、自ずとあの剣の構造も分かるはずだ。

だとしても、魔力が足りない。いくら古崖の魔術で魔力の消費量が減ったとしても、士郎自身の魔力量が増えたわけではない。更には固有結界に魔力を割かれすぎた。今の彼が持つ残魔力では、ギルガメツシユの宝具を投影する事は不可能だ。

だから、彼はある物を手にする。創太が渡してくれた凜の赤い宝石。それには多大な魔力が詰まっており、無茶な投影でも一回だけ可能にしてくれる量がある。

出来るかは分からない。けれども、やる価値はある。

「トレイス・オン投影、開始。」

宝石を持った手を大きく引き、宝具が持つ力を解析する。地面に展開された陣と、創太から受け取った陣を同調させ、相手の全てを読み取る。

すると、彼を手助けするかのように、地面の魔方阵は光り出す。

「ぐっ……！」

だが、身の丈に合わない事だったのか、彼の魔力回路はすでにオーバヒート状態寸前であった。

体中の傷から血が吹き出し、それを塞ごうと暴走した刃が傷から飛び出してくる。そして、ゆつくりと、士郎の体は異形の物と化していく。

けれども着実に、彼の手にはギルガメツシュの宝具らしき物が現れてくる。

「つ……はあつ……はあつ……投影、完了……」

そして、彼は投影しきった。

「貴様……そこまでして私の逆鱗に触れたいか！」

英雄王は自身を模倣され、宝具を似せた粗悪品を見せられ、激怒する。

「良いだろうー！ならば、望み通り互いの宝具を撃ち合おうではないか。結果は見えているがな！」

彼のいう通り、それらがぶつかる時、真作が勝つ事は決まっていた。士郎が創った模造品は明らかにツギハギだらけのもので、オリジナルには程遠い。だと言うのに、真作と交えるのであれば、一瞬にして破壊されてしまう。

「死してなお拜せよ！」

ギルガメツシュは宝具のを放つ準備を終えて、真名解放を行おうとする。

世界を斬り裂くその剣は、どんな災害よりも恐ろしい魔力の嵐を創造し、すでに士郎の固有結界を無き物にしていた。

「天地乖離す——」

真名の一文字一文字を口する度に、宝具が纏う災厄は大きくなる。何がどうあっても、それには絶対に勝てない。そう思わせるものであった。

そして、

「——開闢の剣！」

ギルガメツシュが突き出した宝具は更に肥大化した魔力を纏い、敵をこの世から消し去ろうとする。

「つ……！」

だが、彼は驚いていた。士郎のその姿に。

士郎は英雄王が宝具を放ったように、その手に持った剣の切っ先を真っ直ぐ、敵に向けていた。だがしかし、士郎は真名解放もしておらず、投影したエアに一欠片の魔力も込めていなかった。

故に、彼は攻撃などしていない。これからその準備をするのだから。

「……ドレイン吸収。」

慣れない詠唱をした士郎は、英雄王の宝具を投影した剣で受け止める。

「っ！」

しかし、先も言った通り、それはツギハギだらけの物。本物を受けて、ただで済むはずがない。

何の策もなければだが。

「……貴様……っ！」

英雄王は二度目と驚愕と共に、怒号を見せる。

何故なら、士郎が腕を引きながら、ギルガメッシュが放った魔力の嵐を鷹作に吸収したからだ。それは彼にとって自分の物が奪われたも同然の事。あくまでも、その投影品は災厄の受け皿でしかなかった。

そして、今度は士郎の攻撃であった。まるでギルガメッシュを映すかのように、彼は宝具を構え、石柱を回転させ、それを制御化に置く。まるで、真の担い手のように。

「ふっ……っ！」

士郎は翔ける。ギルガメッシュへと一直線に。

「許さんぞーっ！雑種ーっ！」

怒り狂った英雄王は門を展開し、いくつもの宝具を出すも、全て避けられる。

もう士郎にとってそれは、驚異ですらなかった。

「返すぞ——！」

「っ……っ！」

宝具の雨を駆け抜け、一瞬にしてギルガメッシュの懐に入った士郎。そうなれば、もう相手に為すすべはない。

「天地乖離す……開闢の剣！」

石柱を下から一気に撃ち上げ、台風を引き起こす。

敵の体を四散という表現が生温いほど斬り裂き、欠けら一つ残そうとしなかった。

これまで、士郎を襲おうとした災害が、今度は敵を斃す武器となった瞬間だった。

ギルガメツシュがどれほどの姿に変形しようとも、その嵐は治らない。

しかし、徐々に、徐々にだが、士郎の腕にもダメージが蓄積される。贗作とは言え、力自体は真作と同じだ。その反動は大きい。

そして、彼の腕が限界を迎えようとした瞬間、嵐は去る。

もう敵の姿は無い。

戦いは決着を迎え、士郎の勝利が証明されるだ。

「ぐっ……い！」

けれども、その本人はボロボロであった。ふらふらとおぼつかない足で立とうも、行ったり来たりを繰り返して今にも倒れそうであった。

そして、バランスを崩し、倒れようとしていたが、

「よっと。」

誰かに体を支えられる。

「……創太？」

それは、意識を失っていたはずの創太だった。

「おっす、衛宮。そんなもってお疲れ。最後のは凄かったな。アイツの剣を投影しちまうとはな。」

「ああ、創太こそ。お前の支援が無かったら今頃死んでたよ。」

緊張が一気に解けた二人は、互いに健闘し合う。

「そんな事ねえよ。俺なんか時間稼ぎぐらいにしかならなかった。」

「けど、最後の投影とトドメだけは、俺一人じゃどうにもならなかった。創太とジアナさんが魔方陣を通じて、俺に力と情報を分け与えてくれたおかげだよ。」

実のところ、士郎の最後の投影からのトドメまでは全て、創太が考え出した策だった。投影品を受け皿とし、本物の攻撃を受け止め、そ

して、放つ。更に、本来構造まで把握できないエアを投影できたのは、ひとえに創太とジアナのおかげであった。

気を失っていたように見せかけて、二人は陣を再構成させ、念話により、士郎に策を伝えていた。

そんな事を士郎一人でやろうとすれば、もちろん許容範囲キャパシティオーバー外だ。

「だってよ、もう一人の立役者さん。」

そして、創太の後ろからある人物が現れる。それはジアナだ。

「そんな事はありません。あの陣は敵に知られており、無意味な物でしたから。」

「ジアナさん、謙虚にならなくて良いんです。ここにいる全員がいなければ、あいつには勝てませんでしたから。」

「本当にそうだったのかな……」

士郎の最後の言葉に、何か思うところがあるような言い方をする創太。しかし、そんな事を悟らせないように、話を逸らす。

「……さて、見てみる。どうやらあちらさんも終わったようだぞ。」

創太の指差す場所、そこには慎二に肩を貸しながら歩くボロボロの凜と、さらにそれを支えるセイバーがいた。

「無事か、遠坂、慎二……」

士郎は立ち上がろうとするも、すぐにバランスを崩してしまう。

「私達は大丈夫よ。怪我はないし、聖杯は破壊した。おまけに慎二も無事引き摺り出した。……こっちとしては、アンタの方が心配よ。」

「安心しな、遠坂。こいつは人の心配できるくらいは無事だ。」

ちよつとは自分の心配しろ。それが士郎を除いた全員の気持ちだった。

「あと、はいこれ。」

「これ……転移魔術の……」

「そつ、最後に助けられたわ。借りを作るの嫌いだけど、ありがとう。」

「おう。ならその貸し、今返してもらおうかな。ジアナ、ちよつと変わってくれ。」

創太はジアナに衛宮の体を預けた後、慎二の前に立つ。

「ちよつとそいつの頬をこっちに向けてくれ。」

「……………」

「そうそう、そんなもって首が折れないように支えて……………」

意識のない事を良いことに、慎二の体を好き勝手にする二人。

「こんな感じかしら？」

「良いぞ。……………」

準備ができた創太は一呼吸を置き、構える。そして、

「このクソ馬鹿野郎！」

思いつきり、慎二の顔を殴る。

「前から嫌いだ嫌いだと思つてたけど！こんな事をするぐらい落ちぶれてんじゃねえよ！」

勝手に暴走して！殺すなんて平気で使いやがつて！前はこんなじゃなかっただろうよ！

少なくとも、もつと真っ直ぐで！筋が通つてて！人を見下そうとも！嫌味を言いやがろうとも！

他人のことをしっかりと見極められていた奴で！ちゃんと人の事を思つてやれる奴だっただろうが！」

創太は言いたいだけ言つた後、また一呼吸を置き、落ち着く。

「これだけかな。よし、スッキリした！かえ……………」

そして、彼もバランスを崩し、

「おっと……………大丈夫ですか？」

ジアナに支えられた。

「……………悪いジアナ。やること全部やりきつたから、少し気が抜けちまった。」

衛宮は？」

「彼ならセイバーに任せています。だからもう帰りましょう。」

「そうだな。」

そうして、皆帰ろうとする。しかし、ここに残ろうとする者が一人。

「セイバー？」

「シロウ、私は帰れません。」

サーヴァントであるセイバーだった。

「私はサーヴァント。この戦争限りの仮初めの命。ですから、もう私はここに居る理由も、役目もありません。」

「セイバー……」

セイバーの手を取ろうとする士郎。しかし、
「衛宮。」

創太がそれを止める。

「……そうだな。セイバーが決めた事だもんな。」

士郎はセイバーからゆつくりと離れ、向き合う。

「シロウ、貴方の剣となり戦えた事、誇りに思う。」

「ああ。俺もセイバーと一緒に戦えた事、嬉しかったよ。」

別れの挨拶を済ませ、士郎は背を向ける。

「……別れの挨拶は済んだな。そんじゃあ、帰るぞ。」

全員が門へ歩く、帰路につき、戦いの場から去ろうとする。

こうして、第五次聖杯戦争は終幕を迎える

「っ！みんな、後ろ！」

筈だった。

士郎たちが後ろを振り向けば、突き飛ばされているジアナと、

「ぐっ……っごはっ！」

背中から黒い何かを突き刺された創太がいた。

ここにいる全員が戦慄する。

決戦など、始まってすらいなかったのだ。

喪失

創太の体を貫く黒い影、それは何かに似ていた。いや、似ていたというより、先ほどまでであった不完全な聖杯、あれとほとんど同じだった。

しかし、あんな暴走した不完全さはなく、明確に誰かを、この世にいる全員を殺すという完全な呪いが、そこには存在していた。

「がはっ……」

彼の口から溢れ出る血、それは人が流す赤い物ではなく、影に染め上げられたかのような、どこまでも暗い黒。

貫かれた腹からは、すでに影の侵食が始まっていた。

「あ——ああ……！」

言葉にならぬ声を上げながらジアナは、ただ全てに絶望したかのような目で見るとは思えなかった。それが夢であってほしいと、幻覚であってほしいと、願いながら。

だが、現実には非情だ。

「ああああ……ああ？」

身体を貫いた影は、さらに手を伸ばし、ジアナの体までも喰らう。彼女を庇った創太の意思など、御構い無しに。

黒が蝕み、彼女の体を染め上げる。そんな状況では彼女はもう、狂ったように笑うしかなかった。

「創太！ジアナさん！」

「待ちなさい、士郎！」

その二人を救おうと真っ先に出ようとする士郎の腕を、凜は慎二の身体を支えながらも掴む。

「離せ、遠坂！このままだと二人とも……！」

「もう手遅れなのよ！あんなに速く侵食されちゃ、いくらあの黒い奴から二人を切り離したって、そのままお陀仏よ！」

それに、あいつがそう簡単に獲物を手放すわけじゃないじゃない！」

「けど……！」

「けども何もない！あんな魔力も無いのに何言ってるのよ！無駄死し

たら、二人に合わせる顔が無いわよ！」

「それでも俺は……！」

凜は幾度となく制止をするが、士郎は一切聞く耳を持たない。彼と手段がない事は分かっている。しかし見捨てる事は、彼の性に反する事だった。

「シロウ。」

そして、それを見かねた第二の説得者が加わる。

「貴方の言いたい事は分かります。しかし、彼女らはそれを望んではいません。」

シロウが為すべきはアレの正体を突き止め、斃す事。そしてそれは、彼女らの願望でもありません。」

「それはあいつらを切り捨てるっていう事か！セイ……バー……！」

かつての騎士王の失敗を繰り返すような発言を聞いた士郎は、それを叱咤しようとするが、彼女の今にも涙が溢れそうで、それでも目を真っ直ぐ向けた顔を見てしまえば、それ以上は何も言えなかった。

「まずい、来るわよアレ！」

遠坂の指が指す先には、影に体の大半を飲み込まれた二人の姿と、次の捕食対象を狙うように蠢く影があった。

「二人とも逃げるわよ！」

セイバーと遠坂はここから離れようと門に向かうが、士郎は説得されようがまだ見捨てる気は無かった。

「ちよつと、士郎！」

「悪い、けどやっぱ置いていけない。」

士郎の見る先、影から伸びる人の腕が二本。どちらも右手なので、一人が出しているわけではない。

それを見た彼は、両方助けられると、まだ諦めきれなかった。

「無茶よ！あんなのに少しでも当たったら、あんたも……！」

「なら、当たらなきゃいい。」

彼は一歩、踏み出す。

もうすでに、彼の心は決まっていた。

二つの手を掴む。

助けを求めるかのような、あの手を。

「……っ！」

だが、それを拒むかのように、影に飲まれた片方の手から魔力弾が放たれ、士郎の頭に当たる。

しかし、彼に怪我はない。その魔力弾は殺傷性のないものだった。ならば、他に何の意味があったのか。

それは士郎の頭に響く声にある。

——逃げろ。

彼には確かに聞こえた。創太の声ではつきりと。

二人が望んでいたのはセイバーの言う通り、助けではなかった。この場から逃げ延び、敵を斃す事。

「……遠坂、セイバー、お前達の言う通りだ。」

その意思を汲み取り、士郎は再び決心する。今はこの場から生き延びる。影に侵食されながらも、拳を作るその手を見ながら。

「なら、ここからさっさと逃げるわよ。」

セイバー、後ろ任せた！

「了解です、凜。」

凜が先行しながら出口である門へと向かい、それに士郎が続き、セイバーが影の触手を切り落とし、前の二人を守る。

セイバーは残り少ない魔力ながらも、触手を二人に近づける事はなかった。影がいくら無限に腕を伸ばそうとも、全て騎士王に斬り捨てられてしまう。

しかし、それも一時の物。

「はあっ……はあっ……い！」

先程も言ったが、彼女の残魔力は少ない。つまり、限度はもうそこまで来ている。二人を安全な場所まで護衛しきる事は無理だ。

だから、

「っ……い！」

誰かは見ていられなかった。

降り注ぐ赤き矢群。それは幾度となく見てきたものだ。剣を矢と化して放つそれは、

「アーチャー……?」

赤い外装を纏う彼の技だ。

「今回ばかりは出番が無くなったと思っていたのだが、少々予想外の出来事が起きてしまったか。」

「アーチャー!?!?」

何故彼がまだこの現世に存在するのか。その理由は彼が持ち得るスキル、単独行動にあった。それはマスターの魔力供給が無くとも、数日は生き残れる能力であり、弓兵には欠かせない物だ。

「話は後だ。」

私もそのセイバー同様、魔力が底を突きかけている。だから、さっさと逃げる事だな。

もつとも、あの胃袋の中に入りたければ別の話だ。」

皮肉を忘れないアーチャーだが、やはりお人好しには変わりはない。

「ありがとう、アーチャー。」

「感謝します。」

凜とセイバーは素直に礼を述べるが、衛宮はあくまでも何も言わなかった。彼の中で、未だにアーチャーを嫌悪している部分があるからだろうか。

「衛宮士郎。」

けれども、アーチャーはそんな事を気にせず、背中を見せたまま彼を呼び止める。

「なんだよ。」

未だにアーチャーを嫌悪する彼だが、言い分ぐらいいは聞いてやろうと、立ち止まる。

「そう邪険にするな。貴様に助言してやろうと言っている。」

あいつを裏切るような真似はするな。」

「それだけか。」

士郎は当然のように、冷静な声で返す。

「何、言っておきたかっただけだ。」

貴様がどのような決断をするかは知らんが、目的を見間違え事だけ

はするなよ。」

自身が失敗したからこそ、彼は衛宮士郎に道を違えてはいけないと、彼は念を押す。

「行け、貴様にはやって貰わねばならん事が山ほどある！」

「……癩だけど感謝するよ、アーチャー。」

士郎は振り返り、その場から逃げる。その様子を確認したアーチャーは双剣を構える。

「……後は、あいつらだな。」

彼が見据えるは影……ではなく、それに隠れてしまった二人。

今から行う事は創太とジアナの救出。しかし、それは無駄であると彼自身も分かっていた。けれども、やはり

「オレはお前の友達……か。」

見捨てられずにはいられなかった。

ただ、これを衛宮士郎に見せてしまえば、彼は確実にアーチャーの後を追いかけることになるだろう。こんな可能性の低い事は生きている士郎にさせられなかった。

どうせこの身はすぐに消えてしまう。ならば、せめて無茶な事ぐらいはしようではないか、とアーチャーは決心していた。

命ある者にこんな事はさせられない。

「一度でもかすれば終わり。触れるのは最後のみ。」

触手が動く、その時、

「だが……！」

アーチャーも同時に地を蹴る。

触手の合間を縫い、紙一重で全てをかわす。けれども、相手は同じ事を何度もやるわけでもない。

影は壁を作り、アーチャーの接近を防ぐと共に、その壁を使ってシールドバツシュ、不可避の攻撃を行う。

「はああっ！」

だが、彼は難なく双剣で斬り裂く。

それでも一歩、また一歩と進むたびに、触手の密度が高くなる。これでは二人に触れる事すら不可能。

だから、アーチャーはすでに三組の双剣を展開していた。

「鶴翼三連！」

彼の全魔力を使った投影は、影を囲む。そして、

「……オーバーエッジ！」

その刃は巨大化し、触手を全て切り刻む。

しかし、まだ中の二人には届かない。

「最大火力……壊れた幻想！」

ブローケン・ラアンタズム

あともう一步、それを宝具の爆破で届かせる。しかも、アーチャー自身が手に持っていた双剣すらも、爆発させて。

それ故に、影の大半は削れるが、まだ人の体は見当たらない。そして、自爆したアーチャーも死に体目前で、影に手を入れてしまえば一瞬にして霊体であるその身は溶かされてしまう。

「届いてくれ……！」

けれども、アーチャーはその一瞬に賭ける。

せめて、一人。

できれば、創太を。

願わくば、二人を。

両腕を影に入れ、救出を試す。

なりふりなど構ってられない。体を乗り出し、手探りで二人を探す。

ほんの僅かな時間を無駄にしてはならない。

探せ、探せ！

彼の中で誰かが叫ぶ。

救わせてくれ、救わせてくれと。

過去の地獄で見たあの人のように！

「っ……！」

そして、手は何かを掴む。しかも、両方ともだった。

おそらくは誰かの腕だろう。二人なのか、一人の両腕を掴んでいるだけなのか。

ともかく、アーチャーはそれを引きずり出す。自身の魔力が少ないからだろうか、影の中だからだろうか。それはとても重く感じられ、

まるで水の抵抗を受けているかのようだった。

それでも、アーチャーは一瞬にして、それを外に出す。

両方か、あるいは片方のみなのか。どちらにせよもう彼には判断も、ましてや残った片方を助ける事すらもできない。その身体はほぼ溶けてしまっているのだ。

「……ふっ。どの道、私一人では助ける事は出来ない、か。」

引きずり出した者が生きているかも分からない。けれども、彼に後悔はない。可能な限りの事はやり遂げた。ならば、これ以上の事は望まなかった。

「だが、どうせならば、せめて衛宮士郎の友人とやらを、この戦争が終わるまで見届けたかった物だな。」

最後に高望みをしながら、アーチャーは影へと溶かされていく。

この世界線での役目は終えた。次にいつか会う時は味方同士でありたいと、意識が薄れゆく中、弓兵は夢を見る。

「……」

「シロウ！」

「イリヤ!?」

境内から脱出し、階段を降りる士郎と凜、セイバー。そして、その二人を待っていたのは、衛宮邸に居るはずのイリヤスフィールだった。

「お前、どうしてここに……!」

「何か……嫌な予感がしたの……。聖杯に異変が起きたんじゃないかって。」

今は、彼女の中に聖杯の力は無い。けれども器ではあったからか、イリヤスフィールは危機を察知し、ここまで駆けつけて来た。

「話は後よ！後ろから追っ手が来るかもしれないんだから、今は逃げる事を優先するべきよ!」

「なら、創太の家に向かってちようだい。あそこにいるあいつの様子が、何か気になるの。」

「確かに、桜の事は心配だ……遠坂。」

士郎としては桜が居るはずの創太の家に向かいたい。けれども、や

はり味方である彼女の意見は聞くべきだと思い、凜に視線を移す。

「私も賛成よ。むしろ、そつちに向かった方が良いと思うわ。セイバーも良いわね。」

「はい。」

全員の意見が一致したところで、一行は創太の家へと向かう。しかし、その途中では違和感が感じられる部分が多くあった。

人氣が無く、いくらなんでも静か過ぎだった。まるで、何者かが攫っていったような……全てを食べ尽くしたかのような雰囲気だった。

彼らはそれを怪しみながらも、目的地に走り、そして着いた。だが、彼らの目には、異常な光景が映っていた。

「扉が……破壊されてる……？」

創太の家の玄関、そこには元は扉であっただろう木の破片が散らかっており、誰もが入りができる状態になっていた。

しかも、それ以外にも不可解な点はある。例えば……

「これ、中から壊したわね。」

「え？」

「だって、破片は中にほとんどなくて、外側だけにしかない。こんな壊し方、中からじゃないと無理よ。」

つまりは桜がこのドアを壊した。彼女はそう確信していた。

理由は分からない。しかし、侵入した痕跡はどこにもなく、消去法でそう判断するしかない。

「桜……い」

しかし、士郎はそんな疑いすらも持たずに中へと入り、後輩の姿を探す。彼女は創太の両親の物であった部屋に寝かされていた。だから、彼はそこを探す。

その扉はすでに開いており、誰かが出入りした後が伺える。部屋へと入り、ベッドの上をすぐさま見るが

「誰も……いない……。」

結果はもぬけの殻だ。

押し入れや机の下など、隠れられそうな場所は全て探すも、桜の姿

はない。

「士郎、桜は！」

遅れてやって来た凜だが、質問の返答に士郎は首を横に振るしかない。

「もう誰かに連れ去られたんだ。」

「誰か……ね。そうであってほしいものだけど。」

彼女は期待に似た小さな声をこぼしたが、士郎の耳には届かなかつたようだ。

「士郎、ここにいるのは危険よ。桜の事が気になるのは分かるけど、態勢を立て直した方が賢明よ。」

「……分かってる。」

桜を一刻も助けだしたい、しかし今の身体では探し出すことすらもできない。そう理解していた士郎は凜の言葉に従い、創太の家を出る。

「三人とも、ご無事でしたか。」

家を出た三人を迎えたのは、外を警備していたセイバーだった。

「何にもなかったわ。何にもね。」

「という事は、桜も？」

「ええ。」

とにかく、ここは危険よ。扉は無いし、誰かが入ってきたかもしれないし、士郎の家に向かった方が……」

凜が喋る途中で、セイバーは直感に訴えかけられる。何かがマスターの首を狙っていると。

そして、それを感じたと同時に彼女は動く。マスターを狙う何かから凜を守るために、それを不可視の剣で弾く。

「っ……敵!?？」

「気をつけてください！相手は気配を消しています！」

誰とも知れない敵からの攻撃、それは全員を警戒態勢に入らせる。しかし、一人だけは別に意識を向けていた。

「……短剣？」

士郎はセイバーが弾いた物を解析していた。それは何の変哲も無

いが、人を密かに殺すには適正な物。そして、誰かが言っていた事を思い出す。柳洞寺のアサシンは正規の英霊では無いと。

正規では無い、つまりは正規のアサシンがいる……という事は。

「セイバー！そいつはアサシンだ！」

「アサシン!?？しかし、彼はすでにジアナによって倒された筈です！」

「そいつとは違うやつだ！」

「……なるほど。そういう事なのね、ハサン・サツバーハさん？」

凜に正体を明かされた敵は彼らの視界に現す。

全身が黒い布と黒い肌で覆われており、右手には黒い包帯で巻かれている。唯一、黒ではない部分は顔を覆っている白い骸骨の仮面のみだった。

「たった一度の奇襲で私の真名まで明かすとは、敵ながら流石だ。」

「この聖杯戦争では、本来アサシンはハサンが召喚されるはずなのよ。怪しいとは思ってたけど、別にアサシンがいるなんてね。」

アサシンの正体は見破られた。しかし、凜たちの状況が悪いのは一向に変わらない。なにしろ、全力を尽くした後だ。魔力がほとんど切れかかっており、セイバーが何故まだ現界しているかも不思議なくらいだ。

「土郎、凜、イリヤスフィール。ここは私に任せて、貴方達は逃げてください。」

私はもう限界です。これ以上魔力を使えば、凜が危険だ。ならば、せめてアサシンを道連れにします。」

「……頼んだわよ、セイバー。」

凜は慎二に肩を貸しながら逃げる。しかし、土郎は少し躊躇った。彼女を残してはおけない。けれども、セイバーの気持ちを無下にすることもできない。

彼女は戦争が終われば、この世から去る身。だから、どちらにしろ一緒に生き残る事はできない。ならばせめて、最後まで彼らのサーヴァントとして在りたかった。

土郎には、それが理解できていた。

「悪い、セイバー。」

だから、逃げると言う判断を下した。

「貴方が謝る事はありません。強いて言うならば、この戦争を貴方達の勝利で終えてください。」

「ああ。」

士郎はイリヤを連れて逃げる。

その姿を見る事なく、視線を真つ直ぐと敵に向けるセイバーは、次に踏み込み、そしてアサシンを斬ろうとする。

「ふっ！」

しかし、それは簡単に躲かれてしまう。

「言葉も交わさず、いきなりとは。騎士王としての誇りはどこへ行ったのか。」

「私には時間が残されていない。だから、最初から手加減は無しだ。」

「そうか、それは残念だ。」

セイバーはまた一步踏み込もうとする。しかし、足が動かない。何故だと思いい下を見ていけば、先ほどの黒い影だった。

幾度と脱出を試みようとも、足は抜けるどころか沈んでいく。

「手加減無しのが見れず、残念だ。」

アサシンはこれを狙っていた。そもそも姿を現したのはセイバー以外を逃げさせるためだ。ほかの者がいけば、セイバーを助け出されてしまうかもしれない。

あとは、宝具によりセイバーを抹殺するのみ。影に飲まれればサーヴァントは抜け出す事が不可能。

「苦悶を零せ。」

黒い包帯から、橙色の腕が現れる。それは異様に長く、アウトレンジ攻撃範囲外からセイバーの体にも触れられる物だった。

「妄想心音——。」

その手はセイバーの心臓を取ろうと、伸ばされる。

直感が再びセイバーに告げる。あれに触れてはならないと。しかし、彼女は動けず、躲すなど不可能。ならば、

「くっ……はああああ！」

セイバーは動かす。重い一步を。影を引きずりながらも前へ。躲

反転化

「はあっ……はあっ……」

月明かりから照らされた道を逃げ続けた三人は、肩で息をしながらも衛宮邸へと辿り着くことができた。しかし、無事とは言い難く、アーチャーや創太、ジアナ、そしてセイバーまでも失ってしまった。残った者で戦う事ができるのか。少なくとも、アサシンと戦う場合の勝算はない。

更には敵の全貌も、手がかりすらも分からない。

「何とか……逃げ切ったわね……」

「ああ。けど……」

多くを犠牲にしてしまった。否が応でも、士郎はそう思ってしまった。

「過ぎた事を気にしても仕方ないわ。アーチャー達は自ら身を張ったのよ。」

とにかく、士郎は休みなさい。私は周りを警戒するわ。あいつがまた襲ってくるかもしれないから。」

あくまでも凜は、次を見据えた事を考える。それが、犠牲になった彼らの為であり、これ以上犠牲を出さない為の策であった。

しかし、彼女は無理もしている。身体的だけではなく、精神的にもそれは仕方ない。次々と仲間を失ってしまったのだ。

そして、士郎も凜の心の内を分かっていた。あんな歯を食いしばったような表情を見せられれば、嫌でも分かってしまう。

「遠坂こそ休んでろ。お前の方が疲れてるんじゃないか。」

だから、士郎は自分の身よりも、凜の心配をする。

「あんたの方が優先よ。」

しかし、凜は拒否する。それには理由があった。

士郎と凜、二人の疲労は同程度のものだ。けれども、凜よりも士郎の方が英霊と戦える力がある。つまり、彼は前線で戦う身。その前線が崩れてしまえば、たちまち後方である凜も倒されてしまう。

だから、士郎にはなるべく疲れを取ってほしかった。

「いいや。俺が見張りをやる。遠坂が休んでくれ。」

襲撃されたとしても、俺ならまだなんとか戦える。」

だが、やはり衛宮士郎といったところか。他人の心配ばかりをしてしまう。

「だからこそよ。この戦いを勝つ為には、あんたがいなきや話にならないわ。敵が来て倒されたなんて事はあつてはならないのよ。」

「でも、お前の力も必要だ。俺一人じゃ、正しい判断なんてできない。」

互いが互いを思うからこそ、二人はすれ違ふ。このままでは、どちらとも休息を取ることができない。かと思われたが、

「なら、私がやるわ。」

今の今まで、協力的な様子を見せなかつたイリヤスフィールが見張りの番を名乗り出た。

「力の大部分はもうないけれど、疲れている士郎達よりは一晩見張ることぐらいできるわ。英霊相手に時間稼ぎは無理かもしれないけど、最悪の場合でも、使い魔を通してすぐに士郎達へ伝達できる。」

「確かに、アンタがやれば一番良いでしょうね。けど、前は協力しないって言ったのに、何故急に手の平を返したのかしら?」

こうは言ったが、凜は少し疑いながらも、その言葉は信用してもいいと思っていた。何故なら、寝込みを襲うなどという裏切りの行為は、今までもできる機会があつたが、それが実行されてはいないからだ。

更に、現状でそれを実行されても彼女にはメリットがないと、凜は予想している。

しかし、疑問はある。一体どういう心境で、何が彼女を変えたのか。理解できないことだらけだ。

「……私は活きる事を選択した。例えこの命がすぐ終わるものであつたとしても。たつたそれだけよ。」

「意味が分からないんだけど。」

「それでも良いわ。とにかく、見張りは私がやる。その間に貴方達は休んで。」

そう言ったイリヤスフィールは髪を二本抜き、魔力を込める。

すると、髪の毛は自ら鳥となり、翼を広げる。

「寝る時は、この二体の使い魔を側に置いて。」

それじゃあ、私は外に出るわ。」

彼女はくるりと身を返し、障子を開け、外に出る。

「ほんと、よく分からないわね。」

「けど、助かるよ。あのままじゃ、言い合いになって終わってただろうし。」

それとも、まだイリヤの事を疑ってるのか？」

「少しは……でも、信じられないっていうのも嘘になる。だって生きるなんて、あんな真っ直ぐに言われてしまえばね。」

凜は戸惑っているが、知る由も無いだろう。イリヤスフィールが創太とその叔父の会話を盗み聞きしていた事を。そして、その内容が彼女の何かを変えた事も。

「さて、私達はお言葉に甘えてさっさと寝ちやいましてよ。」

「その前に少し良いか。お前の令呪……どうなってる。」

士郎は凜が無意識に考えていないようにしていた事を、気づかせてしまう。

「それは……」

気まずそうにセイバーのマスターは……いや、元マスターは令呪が刻まれていた場所である右腕に目を移す。そこには、消しゴムで消されたかのような跡があるだけだ。

「セイバーは多分、もう……」

「いや、聞いた俺が悪かった。」

彼らを纏う空気が重くなる。

貴重な戦力を失ってしまったのはもちろんだが、立て続けに仲間を失った事が、彼らにとって非常に大きい精神的な痛手だった。

「もう休もう。今はそれが先決だ。」

「そう……しましょう。」

そうと決まってしまうえば、それぞれの寢床に行くだけだ。もちろん、イリヤスフィールの使い魔を連れて。

「慎二はどうするの？」

「俺の部屋の隣に寝かせる。裸のままは……流石にまずいな。なんとかするか。」

士郎は慎二に肩を貸し、彼の体を支える。

「とにかく、俺がやるから、遠坂はそのまま寝室に行ってくれ。」

彼は凜と廊下で別れて、自分の部屋に入る。押し入れからは布団を二枚と服を取り出す。後は、慎二に服を着させ、寝かせる。そして自分も毛布の中に入って寝るだけだ。

部屋の電気を消し、寝る体勢になった士郎は目を閉じる。すると、彼は視覚に集中していた意識が体の内に向く。

「……変だな。」

だからか、違和感を感じてしまう。

といつても不調ではない。ましてや、固有結界という過度な力を扱ったからなどではなく、どちらかと言えば絶好調が続いている感覚だ。あれだけ実力以上の戦いをしたのにも関わらず、疲れという物を感じなかった。

もちろん、体には確実に疲労が蓄積されている。しかし、それでも以前よりも戦える力が彼にはあった。

理由としては、あれが原因なのだろうか。

「いや、考えているよりも寝たほうが良いな。」

士郎は思考を打ち切り、寝返りをうつ。

イリヤスフィールが見張りをやってくれろと言っているのだ。その証拠に、目線の先には使い魔の鳥が彼を見守っている。

ならば、今は深い睡眠へと体を預けてしまおう。と思いつながら、彼はイリヤスフィールに全幅の信頼を寄せ、目を閉じる。

――2月14日――

障子の隙間から差し込む朝日が、士郎の目を覚まさせようとする。彼はゆっくりと体を起こそうとして、気持ちの良い朝を迎えようとする。

「ん……朝——っ！」

しかし、一転して彼は気持ちを和らげてはいけないと直感する。い

や、直感というよりも体の内から警報が鳴ったと言った方が正しいか。

極々僅かではあるが、何者かの殺気が感じ取れる。かなり上手く、というか普段の彼では、全く気付かないぐらい達人の域に達しているこの気配は、衛宮邸の敷地内に潜んでいる。

誰なのか、その疑問はすぐに解消される。昨夜のアサシンだ。こんな事をできるのは暗殺者以外の何者でもない。

では、一体何をするつもりなのだろうか。

もちろん誰かを殺すためだろう。では、その誰かは誰なのか。気配はまだ家の外で、そこにいるのは一人しかない。

「まさか……！」

考えが至った瞬間、士郎は走り出す。その動きに一切の無駄など無かった。ドアがあろうと、障子があろうと、窓ガラスがあろうと、彼は突き破っていく。後のことなど、考えていられなかった。

そうして家の中を走り、外へ飛び出すと、真っ先にイリヤスフィールの姿を探す。

「シロ……！」

彼女が彼を見つけたと同時に、その彼女は驚きと心配が混ざったような表情で士郎を見る。

「危ない！」

しかし、彼はイリヤスフィールの言葉を聞く前に、彼女を抱きかかえるように飛び込む。

だから、横から飛んできた短剣がイリヤスフィールの背中に突き刺さることなく、地面に刺さる。

「どうしたのよ、シロウ……っ！まさか、敵!?？」

敵に狙われたという状況を、彼女は短剣から察知する。

「多分、昨日のアサシンだ。」

「分かった。凜には使い魔を通じて伝えておくわ。」

敵の襲撃と分かった途端に、二人は背中合わせに戦闘態勢へと入る。

しかし、士郎はそれとは別に何かを感じていた。

昨夜の違和感と同じ、自身の内部にあるもの。けれども、それは彼を蝕んでなどおらず、むしろ助けとなっている。

内と外、両方の世界がはつきりと把握でき、全てのものが解析できるようになっていた。

「……そっ—」

だから、気配を消し切ったアサシンの姿を把握し、的確に剣を投影、射出する事ができた。

「っ……い—」

屋根の上に立っていたアサシンは内心驚きながらも、それを難なく避ける。

「私の気配遮断が効かないか。よほどの者だな。」

「あいにく、今は気配に敏感なんぞな。」

士郎はこうは言っているものの、実際にアサシンの気配を読み取ったわけではない。読み取ったのはその周りにある違和感だった。

瓦の微妙なズレや、空気の僅かな揺らぎ。アサシンが存在することによって周りに及ぼす影響を、感知したことによって場所を把握したのだ。

「これでは再び気配を消すことは不可能、ならば……」

何か来る！

そう士郎が判断した瞬間に、アサシンの体は横にずれ、次には姿を消してしまった。いや厳密に言えば、目にも止まらぬ速さで動いているのだ。

暗殺者の本領はその名の通り暗殺か、もしくは奇襲であり、真つ向勝負などは不得意である。例え敵が弱くとも、正面から叩くという事はしない。

士郎もそれは理解していた。

「ふっ—」

だから、気をつけるべきは横や背後からの攻撃であり、彼は横からのナイフ投擲にも反応し、それを即座に投影した干将で叩き落とす。

目では見えなくとも、力を読み取る事はできる。相手がどこから攻撃を仕掛けようとも、反応できる。

しかし、背中にはイリヤスフィールがいる。彼女がいくら魔術を扱えようとも、英霊の速さに反応はできない。現に先のナイフも彼女は反応できていなかった。

「シロウ、私は大丈夫だから。」

そんな言葉は気休めにもならない。あくまでもそれは彼女が自身に向けて言ったものであり、自分がしつかりしなければ足手まといになるという決起であった。

彼女は自分の髪を二本抜き、昨夜と同じ使い魔をそこから作り出す。英霊相手に通用するかも不安ではあるが、盾ぐらいにはなるはずだ。

「……来るぞー！」

士郎の警告通り、次の瞬間にはナイフがイリヤスフィールの使い魔二体に突き刺さっていた。

「っ……………」

その一緒の出来事に、彼女は反応できず、士郎だけが反応してしまった。使い魔が潰されたという事は、次に狙われるのは彼女である。と、士郎はイリヤスフィールを庇おうとするが、

「しまっ……………」

意識を背後に向けてしまったせいで一瞬出来た死角から、ナイフが飛び出る。

だが、対応はできる。そう判断した士郎は右手の莫耶で落とす。これでそのナイフが彼に傷つける事はないが、まだ敵の攻撃が終わった訳ではない。

「今度はそつちかー！」

再び投擲されたナイフが狙っているのは、イリヤスフィールの首であった。士郎は左手の干渉でそれを防ぐも、両腕を同時に使い、次の行動へと即座に移せない状態になってしまう。

それを敵が見逃すはがなかった。

「意外と早く隙が生まれたな。」

士郎の背中から、アサシンの声が聞こえる。つまり、それは詰みであった。

アサシンはナイフを持ち、士郎のうなじを狙い、突き刺そうとする。イリヤスフィールは元より敵を把握できず、士郎は動けない。いつのまにかガンダの準備をしていた凜がいたものの、士郎を挟んだ立ち位置で、敵を撃ち抜く事は不可能だった。いや、アサシンがそうした方がいいか。

どちらにせよ手立てはなく、相手にトドメを刺されるだけになるはずだった。

「っ！」

けれどもそれは、どこからか飛んできた直剣により阻止され、アサシンはすぐさま距離を取る。

「随分と隙だらけですね？アサシン。」

その声は士郎達にとつて聞き覚えのある物。しかし、彼らの記憶ではもつと穏やかで優しいはずであるのに、聞こえてきたそれは、冷たく、蔑むような声だった。

「貴様、死んだはずでは!?？」

「何を言っているのですか。私はすでに死んだ身よ。」

アサシンの視線にある先、扉の上に立つその人物は、黒い衣装を着ており、色素の抜けてしまった銀髪を揺らし、光のない金色の目を持ち、焼け焦げた跡のある旗を掲げたジャンヌ・ダルクであった。

「ジ、ジア……」

「その名で呼ばないでちょうだい。」

かつての偽名を士郎は口にしようとしたが、威圧するような声で止められてしまう。その場全てを震撼させるほどの威圧で。

「さて、色々と話をしたいところですけど、先に邪魔なゴミを掃除しましょうか。」

「私も舐められたものだ。いくらその魂が英霊であろうとも、人形の体では……」

「あら、お気遣いどうも。けれど、自分の身を心配した方が良いのではないかしら?？」

ジアナの言葉に疑問を持つアサシンだったが、それが何を指しているかは即座に理解させられた。

自身の左腕、それが黒い炎によって燃えていたのだ。

「なっ！きさ……ぐがっ！」

「先ほどの剣にかすらなければ、そんな事にはならなかったでしょうね。」

冷酷に、見下すように、本来の彼女が持っていた慈悲など面影もなく、ただ言い放つ。

「く……い……な、何故消えない！」

アサシンは炎に包まれた腕をもう片方の腕で掻き消そうとするも、それが消える気配は一向にない。

「当然でしょう？それは復讐の炎。私の心が生み出した憎悪を火種に燃え続ける。」

つまり、相手に対する私の怒りや憎しみが強いほど、それは貴方を苦しめる。」

炎は蝕むように、アサシンの体を徐々に飲み込んでいく。その光景は士郎にとって見覚えのあるものだった。

昨夜のアレ、柳洞寺で見たあの影に似ていた。

「貴方の言う人形の体、彼らが私にくれたこの体を蔑視しなければ、さっさと殺してあげたわ。」

「っ……かあっ！」

苦し紛れに、アサシンは右腕に巻いた包帯をほどき、宝具を解放する。セイバーをも倒したあの奇妙な腕。

「妄想心音！」

絶対防衛不可であるはずのその腕はジャンヌの心臓を狙い、伸ばそうとするが、

「何？このちんけな手は。」

当然のように、彼女に掴まれる。

「なっ……い！」

「やはり、気が変わったわ。今すぐ死ぬ。」

彼女が殺すと言った瞬間に、炎は肥大化する。朝であるというのに、黒が天まで包むというその光景は異様で、それを簡単に行う彼女は恐怖の存在であった。

やがて、アサシンの霊体が完全に燃え尽きた時、炎は消え、空はただの青空に戻る。

「掃除は終わりましたね。」

ジャンヌ・ダルクは敵の残骸が残されていないことを確認すると、士郎達へと振り向く。

「今度は話し合いといたしましょうか。」

黒き者

いつもの居間、いつものテーブル、いつもの座布団、彼を囲う物は何一つ変わらない。だというのにそれらを纏う空気は異常なものだった。自身のテリトリー^{住まう場所}であるはずなのに、くつろぐ事も落ち着く事さえもできない状況で、士郎と凜はジャンヌ・ダルクに今までの経緯を説明していた。

アーチャーの生存と犠牲、間桐桜の行方不明、真のアサシンであるハサンからの襲撃、そして、それによるセイバーの脱落、一字一句を気をつけ、あくまでも客観的に話す。そうしなければならぬと、士郎の中の何かが警告していた。

「そして、体を休めていた時に再度の襲撃があったと。」

「はい、そのあとはジア……ジャンヌさんの知っている通りです。」

「こっぴどくやられて、何にもできなかった訳ですか。」

ジャンヌは横目で凜を見る。お前は特にそうだったと言いたげに。

「……ええ、そうよ。特に私はね。」

「自覚はあるみたいですね。」

ですが、こんな事ならば助けた意味はないかもしれませぬ。」

呆れたように、彼女は無駄足だったと言い放つ。

「それ、どういう意味かしら？」

「言葉のままです。貴女は元々話になりませんが、彼ならば英霊と戦えると思っていましたけど、先の戦闘から私の思い違いだったようです。」

まあ、身代わりくらいにはなるでしょう。」

辛辣な発言ではあるが、事実でもある。故に、凜と士郎は何も言い返せなかった。

「次は私の番ですね。」

あの影飲み込まれてからどうなったのか、その説明をさせてもらいます。」

あの後、彼女に一体何があったのか。どうやって生き返り、この場に戻ってきたのか。それは士郎達にとって大きな疑問だ。

その理由が明らかになる。

「あの影、聖杯に飲み込まれてから、私とソウタは影に侵食されつつありました。抵抗はしていたものの、それも時間の問題でした。

もうどうにもならないという状況でしたけど、ある二つの出来事が私に機会を与えました。

一つはソウタが私の体を押し、影の外へと出そうとしたこと。もう一つは影の外からアーチャーが私の体を引きずり出したこと。

これらにより、私は影から脱出し、生を得ました。」

その話から、二人の犠牲の上に彼女が生きているという事実があった。

「つまり、創太はもう……」

アーチャーはそもそもどう転んでも、現代には残る事はない。しかし、創太は今を生きていた人。

その創太が、友人が死を迎えてしまった事は、士郎にとって大きな衝撃だった。

「貴方の想像通りよ。」

ジャンヌははつきりと、冷酷に、けれども、どこか悲しげに肯定する。

「……それから私は、まともに歩けなかった体を休める為に身を隠しながら、一目の少ない場所を確保し、一晩を過ごしました。

その後はここへ向かい、先の通りになります。」

「なるほど……アンタがどうやってここまで来たかは分かった。けれども、一つ質問。

アンタ、あの影のことを聖杯って呼んだわよね。それ、本当なの？ 聖杯はセイバーが破壊したはずよ。」

凜は冷静に、解決すべき疑問の答えを聞き出す。しかし、その内にあるものは仲間の死に対する動揺だった。

彼女とて鬼では無い。けれども、あの状態からでは助からないと元々覚悟していた。だから死んだという情報は、凜にとってそれほど絶望的なものではない。

「ええ、本当です。あれは紛れもなく聖杯そのもの。しかし器自体は

他に移り変わっていますね。」

「器が他に……それが何かは？」

「見当はついていません。しかし、ここからは取引です。タダで塩を送るなんて馬鹿はしませんから。」

今は協力関係ではない。むしろ敵同士であると、彼女は告げる。

「その取引ってというのは？」

「私は情報を渡す。代わりに貴方達はこちらに指示に従う。といっても目的自体は一緒ですから、今までと大差ないかもしれませんね。」

「目的ってというのは、聖杯の破壊っていう事ね？」

「その通りです。」

確かに、凜達にとっても聖杯の破壊はやるべき事の一つだ。ジャン又にとっても、家族を奪った聖杯は憎むべき物。

しかし、凜は彼女の言葉には妙に引つかかるところがあつた。それが何かは、まだ分からない。

「どうですか？ 貴女達にとっても、悪い条件ではないでしょう。指示も、私が常に後ろで見るだけにはならないようにするつもりです。」

「……情報っていうのは、どこまで渡してくれるのかしら？」

「敵が誰かと、その戦力です。あとは拠点ぐらいですね。」

もし彼女の言葉を全て鵜呑みにするのであれば、妥当と言えるだろう。むしろ、本当に今まで通りだ。

ただ、怪しい部分はある。一つ一つ挙げるならばキリがないが、強いて一つ言えば彼女自身だ。

態度、言動、雰囲気、あらゆる点において、かつての彼女の面影が全く見当たらない。そんな彼女を信頼して良いのだろうか。

「私からも質問を一つ。良いかしら？」

だが、その結論を出す前に、今まで黙っていたイリヤスフィールが口を開く。

「驚きました。てつきり貴女は傍観を決め込んでいると思っていました。」

「そういうのは要らないわ。私が求めているのは、質問に答えてくれるかどうかよ。」

元聖杯の少女は強気で、危険人物に立ち向かう。周りの二人からすれば、背筋が凍るどころではない。

「……そうでしたね。貴女の話、聞いてあげても良いでしょう。」

しかしそれは、杞憂に過ぎなかった。

「なら訊くわ。」

貴女の目的がシロウ達と一緒だと言ったけど、完全に一致しているわけでもないですよ。別に真の目的がある。そうよね？」

けれども、イリヤスフィールはまた二人の冷や汗を流させるような発言をする。

「だとしたら？」

「あるかないか、それだけを答えなさい。内容までを説明しろとは言わないわ。」

彼女はこんな質問をしているが、この場にいる全員はその回答を理解している。

ジャンヌ・ダルクが聖杯の破壊以外に何かしらの目的を持っていることは明らかだ。そして、イリヤスフィールはその内容すらも予想が付いている。

凜もそう考えていたが、いつもの強気な姿勢を、威圧感を放つジャンヌに見せることはできなかった。

「……この世全てを殺す事よ。私の真の目的はね。」

彼女の答え、それは生きとし生ける者全てを敵に回しかねない物だった。

「だってそうじゃない！世界は彼を殺した！全ての物はそうなるようにした！どいつもこいつも！不確定要素どうでもいい奴だからって理由で！

だから私は全てを壊す！神であろうが、悪魔であろうが、英雄であろうがね！

もちろん、貴女達も例外じゃないわ。彼を見捨てたんですからね。聖杯を破壊した後、真っ先に殺してあげるわ。」

彼女の発言はとても狂気染みており、殺意を持った物だ。全てを殺すそうとする意思はまるで、あの聖杯のようだった。そのはずなのに、どこか悲壮感や後悔があった。

いずれにせよ、どの選択をとろうが、彼女は敵になる身。彼女の本音を聞いてしまえば、協力も何もないだろう。

実際に、遠坂は完全に警戒している。

今ここで殺される。そう直感していた。

「さて、そろそろ訊きましよう。」

こんな私に協力する気はありますか？」

ない。それが当然の答えの筈だ。

「……俺はある。」

だが、当然を幾度となく拒む者は、協力を承諾する。

「ちよっ……：士郎！」

「悪い、遠坂。けど、今ここで断れば、何もできずに終わると思うから。」

馬鹿げた回答ではある。けれどもジャンヌ・ダルクにとって軽視はできない。衛宮士郎という男は、理にかなっていない事をしながらも、最終的に良い結果を残している。

今回もそうなるのであれば、彼女にとって脅威だ。

いや、本当の目的のためなら、そちらの方が良いのだろうか。

「……そうですか。ならば二人はどうしますか？」

呆れた物言い、他の者にも答えを訊く。

「だったら、私も一緒に行ってやるわ。」

「私は敵地に乗り込む気は無い。けど、それ以外の協力ならさせてもらうわ。」

凜は前衛的に、イリヤスフィールはあくまでも後衛として協力する意思を見せる。

「契約成立、ですね。なら、私も情報を開示しましょう。まずは、この状況を作り出した犯人からです。」

結論から言うの間桐臓現、それが元凶の人物。」

その名を聞いた瞬間、士郎とイリヤスフィールが反応する。特に士郎は怒りを持ち始める。

「それって、まさか……」

「ええ。貴方には以前にも話しましたね。桜に潜んでいるあいつと同

じです。」

「嘘、あの子に……!?」

桜という名前が出された時に、今度は凜が動揺してまう。

「凜、貴女と彼女に何の関係があるかは知りませんが、要件だけを伝えておきます。」

しかし、それを無視するかのように話は続く。

「犯人の本拠地はおそらく、間桐家です。戦力としてはアサシンがいたのですが、先程斃したので除外します。後は、寺で見た影にも注意してください。あれはゾオルケンの支配下に置かれているはずです。

他にはいないでしょうが、警戒するに越した事はありません。

以上でこちらの情報は全てです。」

淡々とした説明はこれで終わる。

「さて、次は私の指示に従ってもらいます。今夜の十二時に敵地へと向かいます。それまでにこここの正門へ集まってください。では、話は終わりです。」

もう用は済んだ。

そう言ったかのように、言いたい事だけを言って立ち上がり、部屋から出ようとする。

「待ってくれ。」

しかし、土郎のその一言で彼女は止まる。

「本当にアンタは、復讐のためだけに動くのか?」

「……私にはそれしかありませんから。」

再び彼女は外に出ようとし、そして、扉を閉める。

それだけの事で、部屋に張られていた緊張の糸は一気に解ける。

「はああ……」

安堵からか、凜の口からは溜息が漏れる。

「土郎。」

だが、その彼女からは文句あるようで、議論はまだ続くようだ。

「なんだよ遠坂。あれ以外にもう方法はないだろ。」

「確かにそうよ。私たちだけじゃ何もできない。だから、ジャンヌ・ダルクと協力するしかなかった。」

けど、あんな即答するなんてどういう事？あいつは今までのあいつじゃない。士郎の考えている事はできないわよ。」

凜は嫌というほど士郎の事を見てきた。自身よりも他人を救おうというその姿勢を。

だからこそ、彼の思考を見透かしていた。あのジャンヌ・ダルクを、ジアナ・ドラナリクを救おうとするその考えを。

「できる保証が無いのは理解してる。あの人は俺が何を言っても無駄だ。」

でも、協力の件を抜きにしても、彼女は放ってはおけない。「それが衛宮士郎という人なのだ。」

「……勝手にしなさい。何をしても無駄だとは思うけどね。」

「ああ。そうさせてもらう。」

凜との話が終わると、士郎はすぐに立ち上がる。早速、ジャンヌの説得に行くつもりなのだろうか。

「待って、シロウ。」

しかし、イリヤスフィールがその足を止めようとする。

「彼女を説得するなら、一番最初にこの言葉を言っておいて。」

ソウタは活きる事を選んだ。だから、貴女もせめて、人を殺すような事はしないで、とね。」

「あ、ああ。分かった。」

伝言を預かった士郎であったが、その返答はどこかぎこちない物だった。なぜかと言えば、

「でも、まずは朝食にしないか？」

全員がまだ何も食べていない事を気にしていたからだ。

「……そうね。昨日の夜から何にも食べてないし、腹を膨らませた方が良さそうね。」

「私もお腹が空いたわ。」

「分かった、用意してくる。」

全員の意見を聞いた後、士郎は朝食のためにキッチンへと歩く。

「あ、私も手伝うわ。」

「ありがとう、遠坂。けど……」

「いいの、いいの。お世話になりっぱなしは流石にね。」

その言葉は、普段の生活からもあるが、真の理由は戦闘面においてだった。士郎にあまり負担はかけられないということから、手伝いを申し出た。

「そうか？」

「そうなの。さ、早く用意しましょ。」

士郎は戸惑いながらも、彼女と共に調理をしていく。といっても簡単な作業なので、すぐに終わる。

しかし、凜はある事に疑問を持つ。

「ねえ。なんで四人分用意してるのよ。」

凜が考えていたのは、士郎、自分、イリヤスフィールの三人での朝食だ。しかし、四人目がいるというのは、明らかにジャンヌのこと。

それを用意したのは、もちろん士郎しかいない。

「これが終わったら、説得しに行こうと思ってる。少なくとも、朝食ぐらい、一緒にな。」

「……さつきあんな事言っただし、何も言う気はないわ。けど、もしそうなった場合、気まづくならないようにしてよね。」

「う、善処します……。」

—————

どこまでも、どこまでも澄み渡る青き空。雲は太陽の光を邪魔しない程度に揺らぎ、冬というはずなのにどこか暖かい空気があった。

しかし、それに似合わない者が一人。黒を纏った服装と色素が抜けた銀髪、人形のように生気がない白い肌、そして、光が灯らず、どこまでも深く、吸い込まれてしまいそうな金眼を持ち合わせていた。

ジャンヌ・ダルク。かつて聖女とまで言われた彼女は、ドス黒い感情を胸に押し込めて、屋根の上に立ち、この冬木の街を眺めていた。

「ジャンヌ。」

自身の真名を呼ばれて、目線だけを向ける。そこには、次に懸念すべきである対象、衛宮士郎が立っていた。

確認をしただけで、またすぐ目線を街に戻す。今はまだ、気にする必要のない者だからだ。

「なあ、一緒に飯を食べないか？」

——また突拍子も無いことを。

それは彼女がある程度予想していた範囲内のことだった。彼がまだ仲間意識を持っている甘ちゃんであるならば、彼女にとって有利に働くことかもしれない。だが、気に食わないというのはある。

だから、無視を突き通そうとする。

「……分かっている、仲間じゃないって言いたいんだろ。利害が一致しただけの敵同士。」

——分かっているわけがない。間違っても敵と同じ屋根の下で食事は言わない。

口では言わないが、ジャンヌは彼に様々な悪態をついていた。しかし、言うだけ無駄なので心の中だけである。

けれども、だからと言って黙っているだけで彼は説得を止めるのだろうか。このまま延々としゃべり続けるのだろうか。それでは彼女にとって、色々と不都合だ。

ならば、と思い口を開けようとした瞬間、

「そういえば、伝言がある。」

引つかかる事を言われる。

伝言というのがどういう内容なのか。いや、そもそも誰の伝言なのか。彼女にとって、理解出来ない物だ。

「イリヤからだ。」

その名前は予想外だった。

何がきっかけでそういう心境になったかすらも分からない。確かに、創太との関係は多少良くも見える。だが、結局は創太だ。元従者のようなジャンヌに、何かしらの感情を持つているとは思えない。

様々な考えを巡らせるが、その答えを出す前に先に士郎が喋り出す。

「あいつは、創太は生きる事を選んだ。だからアンタも、できる限り人殺しのような道は選ぶな。」

何か、違和感が拭い切れない言葉だ。

士郎がイリヤスフィールの伝言を勘違いしているのか、それとも彼

女自身が間違っているのか。いや、間違っているならそもそもそんな言葉は使わない筈。

「俺はこの言葉を全て分かっているわけじゃない。けれど、半分は分かる。」

創太が、アンタの行動をどう思うかだ。」

——ああ、やはり彼は勘違いをしている。

「あいつはアンタが意味のない殺戮をして欲しくないと思っている。死に際なのに、それでも生きていて欲しいと思った理由はそんな物じゃない筈だ。だから、」

「貴方。」

これ以上は我慢できなかった。

彼女の耳に、知ったふりをするような発言を入れたくないがため、ついに士郎の話を遮る。

「何か勘違いをしているようだから言うておくけど、私は私が行うべき事だと心の底から思うから行っているだけ。」

だからそれが人殺しだろうと、正義に反しようと貫き続ける。」

「けど……！」

「もう貴方の言葉を聞く気はありません。もしそれでも続けるというのであれば……ここで協定を断ち切ります。」

士郎の体中を突き刺す邪悪とも呼べる殺気が、ジャンヌから出される。

それだけで彼は動くことは愚か、口を動かす事すらままならない。

「私としては構いませんよ。ただ、私を撃退したとしても、桜がどうなるか。」

間桐桜。彼にとってとても親しい後輩。その名前を出されると、彼は表情を一変させた。

目の前の彼女を助けたいが、大事な後輩も助けたい。しかし、黒い気の中てられながらも、即答した。

「わかり………ました。今回は、引きます。」

「今回？」

「はい。けれど、まだ諦めたわけじゃない。」

確固とした表情でそう言って屋根を降り、家の中へと戻る。

今回は、と言うことは次回もあると言いたいのだろうか。何度言われても彼女自身は無駄だと思ってしまう。

「……彼がいないのに、一体どうしたらいいのよ。もう死んだっていいのに、思うも何もないじゃない。」

誰もいなくなった屋根上で、彼女は空にぼやく。とても悲哀に、誰かに懇願するように。

変化の時期

誰もが、夢の中にいるはずの深夜。ある邸宅の門前で二人の魔術師と一人の黒い聖処女がいた。窓が壊れたまま以外は特徴がない間桐邸の前で。

「ここが間桐臓現、真の名をマキリ・ゾオルケンが住まう場所です。」
「本当にここが……」

「貴方は何度も訪れているようですが、知らない部分もあります。これまでと同じような心構えで入らないように。」

士郎は友人として何度もこの中に入ったことがある。しかし、その中を詳細に知っているかと言われれば、知らないことの方が多い。入ったことのない部屋もある。

今回はそういった所に入り込む。だから、彼の持つ情報はほとんど無意味なのだ。

「それで、犯人はどこにいるの?」
「地下室です。魔術で索敵してみれば、下に魔力を感知しましたので。」

地下室、一般の魔術師が工房にする場所。地面の中である方が地上より霊脈が近いという理由で地下室に作られていたりする工房。

その工房を砦として入り込むというのは、魔術師として当然だ。つまり、彼女らがやろうとしていることは砦崩し。難儀なことである。

「では、入りましょう。いいですか、あくまでも手分けをせずに纏まって行動します。急いでいるわけでもありませんから。」

「そうですね……リン、貴方が先に行きなさい。」
「なんで私なのよ。」

「前方からの奇襲はまずないからです。後ろは私が対処しますし、横からも同様です。万が一前から来ても、反応が遅れることはないでしょう。」

「畏があっても貴女なら見抜けるはずですよ。」

それは正しい判断であり、凜も納得できるものだった。これならばまだ、凜が懸念する捨て駒のような扱いにはならなさそうだ。

「了解したわ。けど、地下室がどこから通じているのかは、分かってるのかしら?」

「ええ、もちろんです。誘導しますので、凜はトラップだけに注意してください。」

士郎はいつでも英霊と戦える準備を。あくまで時間稼ぎを目的に、固有結界は発動しないように。」

「分かった。」

それぞれの役割を確認し、三人は敵陣へと侵入する。

正面ドアから入り、その目に映り込んだのはまず暗闇だった。目の前一メートルが見えるかどうか、それだけ暗く、慎重に進まざるを得なかった。

先頭にいる凜は魔術で罫を警戒しながら、ジャンヌの指示通りに中を進んでいく。たまに、中の構造をある程度知っている士郎の助言を聞きながら。

そうしているうちに、地下室への扉へと到着する。

しかし、何か妙だった。いや、全てが妙だと言われれば妙なのだが、何より罫がないのが妙だ。

普通、魔術師であれば工房または拠点とする場所に、防衛のための障壁や罫が設置されているはずだが、その類が一切ない。

「慎重に扉を開けてください。何があっても大丈夫な様に。」

だから、彼女らはより一層警戒する。扉を触れる、ドアノブを回す、ドアを押す。それらの行為にも、意識を集中する。周りの変化を見逃さず、侵入していく。

けれども、何も起こらない。地下室への階段を降りても、降りきっても。何故なのか、相手にはそれほどの自身があるのか。それとも、ここには何もないのか。

だが、本当に何も無いわけではない。地下室の床、そこには「つ……これは、ちよつとキツイわね。」

それを覆い尽くすかのような、大量の虫が蠢いていた。人の悪感というものを、無条件で引き出すかのような姿で。

「私が焼却します。貴方達はそのままで。」

二人が歪んだ表情を見せているのに対し、顔色を変えないジャンヌは、それでも邪魔であるのか、指を鳴らすと同時に、今朝のアサシンを焼き尽くした黒い炎を、カーペットのように床に敷き詰める。

それにより虫は苦痛の声を上げながら、死に絶えていく。しかし、「つ……………避けなさい！」

突如として、ジャンヌの警告が部屋に響きわたる。

次の瞬間、炎の中から突き進む黒い弾丸が飛び出る。それは三人へと踏み込み、手に持つ剣で斬り裂こうとするが、前もった警告のお陰で全員避けることができた。

だが、その奇襲を仕掛けてきた人影をはつきりと目視できるようになった時、士郎と凜は驚愕してしまう。何故ならば、

「セイ……………バー……………」

彼らの元サーヴァントであつたからだ。

しかし、姿に変化があつた。青を基調とした服は無く、代わりに黒を纏い、禍々しい鎧を着て、かつての凜とした姿はなく、周りに圧力をかけるような変貌を遂げてしまった。

さらにはサンバイザーのような物で顔を隠していたが、それでもセイバー以外の何者でも無かつた。

「彼女までも配下に置いていたとは予想外でした。マキリ・ゾオルケン。」

ジャンヌの視線の先、黒いセイバーが現れた場所に、頭が歪な形になつている老人、間桐臓現がいた。

「呵っ呵っ呵っ。よくぞまあ、儂の仕業じゃと分かつたもんだ。」

「こんな事をする化け物は貴方ぐらいしかいませんから。」

「ほう。じゃが、そやつが儂の配下というのはちと誤解じゃ。そやつマスターは……………」

臓現の言葉に続き暗闇から出てきた人物、それは士郎と凜を驚愕させた。何故なら、

「桜!?!?」

セイバーと同じく、黒の服を纏つた後輩だったからだ。

「なるほど、やはりそういうカラクリになつていましたか。」

士郎、セイバーは任せました。凜、貴女は彼の援護を。私はあの二人を相手します。」

「ええ。時間稼ぎくらいはできるわ。」

「分かった。けど、アンタ」

「今は桜を殺しません。それだけはご安心を。」

「……その言葉、信じるぞ。」

士郎は不安を残しながらも、セイバーと対峙する。

しかし、彼女に対しても複雑な気持ちであった。昨日まで仲間であつたはずなのに、今は完全な敵同士。

彼女の相手になるのかではなく、彼女と敵であらねばならないのか。そんな感情が彼の心を締め付ける。だが、相手はすでに殺気を撒き散らしており、味方を見るような目では無かつた。

だから、彼も理解した。せざるを得なかつた。けれども、やはり納得はできない。それでも、彼らは戦いを始めてしまう。

その脇で、ジャンヌは臓現と桜に向き合う。

「お久しぶりですね、この虫野郎。」

「お主、随分と口が悪くなつたものよ。この前までは誰であろうと礼儀正しくあろうとしたものを。」

「溜まっていた鬱憤が表に出ただけよ。それに、アンタみたいな外道に礼儀もクソもないわ。」

それよりも彼女。……聖杯と言つたところかしら。」

全てを見抜いたかのようなその言葉は、臓現を驚かせる。

「何故それが？」

「以前、彼女の体を調べていましたから。貴方もそれは把握していません。」

「あれだけでか。儂は桜の体を調べられても、何も分からぬようにしていたつもりだった。」

いやはや、お主らの魔術はやはり興味深い。」

「おそらく、ソウスケ達によって強制的に聖杯の機能を発動され、燃料である力を求めた結果、寺でセイバーが壊そうとした聖杯を横から掠め取り、現在に至るといふことでしょう。」

創助、つまり創太の両親の事だ。前に桜が倒れたときに見つけた魔術式から、彼女は予想していた。

「そこまで、理解していたか。」

「ですが、それが何かなんて些細な事。私はあくまでも、貴方に用があるのですから。」

今一步、ジャンヌ・ダルクは前に出る。憎悪を燃やし、臍現の体を殺気で貫く。

それほどもでに彼女は憤りを感じていた。怒りを纏っていた。

「貴方を殺す。それが私の第一の優先事項よ。」

「待ってください。ジャンヌさん。」

しかし、今まで一言も口を開かなかった桜がそれを止める。

「貴女の真の目的は世界を殺すことなんですよね。」

妖美で、かつおどろおどろしい喋り方は、ジャンヌの激しい物とはまた違った恐怖を他人に味あわせる。

「知ってますよ、私の中でそう望んだこと。ならば、私と同じです。だから、私と手を組めば、確実に目的が達成されます。」

「……話は終わり?」

「はい?」

質問の答えを聞かぬまま、ジャンヌはゆっくり手を上げ、桜に向ける。と同時に、その手の平から作り出された黒炎が桜の頭を潰した。「その願いにはこの手でっていうのと、アンタも含まれるっていうのが付くのよ。」

「誘いは断ると?」

破壊されたはずの桜の頭はすぐさま回復し、口を動かす。

「ええ。」

「そう、でしたら死んでください。」

言葉に鋭い殺気を乗せ、寺で見た触手でジャンヌを襲おうとするが、

「あら。」

しかしそれは瞬く間に彼女の剣で斬られ、

「貴重な魔力、ありがとね。」

吸収されていく。

「けど、貴女はまだここでは殺さない。

私が殺すのはその老人よ。」

「まあ待て。お主、古崖の小僧が死んだのは儂のせいじゃと、思っておるのだろうか。」

「そうよ。それ以外に何かあるのかしら？」

「考えようによつてはな。まず、思い出してみろ。確かに儂が動いて、彼奴は死んだ。じゃが、桜という聖杯が動いた今、儂は動かざるを得なかった。」

その原因を作ったのは誰か、小僧の両親じゃ。」

その事実には、ジャンヌは黙り込んでしまう。まるで、それが正論だと受け入れるかのように。

「だから、儂を恨むまえにそいつらを、その一族を恨んだほうが良からう。」

何も言わない。何も言えない。彼女にとってもその事実は正しいからだ。

「しかし、古崖は相当な実力者揃い。じゃが、儂の手助けが」

「勘違いしているようね。」

だが、言われっぱなしではなかった。

「まずどうして、彼らがそうしたのか。アンタみたいな下衆野郎がいたからよ。」

だから、そうした。アンタが表に出てくるように仕向けた。慎重な奴をあぶり出すには、他に方法がありませんから。

ですから、私が彼らを恨む理由には成り得ません。むしろ、恨む気など毛頭ありません。彼らは恩人ですから。それに」

話の途中で彼女は踏み込み、一瞬にして桜の前まで距離を詰め、手を胸に貫通させる。

「まさか、貴様！」

「貴方を殺すのは確定した事よ。」

その手の中には小さな蟲が掴まれていた。それは臓現の本体、老人はただの触覚であった。

「や、やめ」

臓現の懇願も虚しく、蟲は彼女の親指と人差し指の先で押しつぶされる。

そして同時に、老人の体も灰となり、風に吹かれ消えていく。

「そんな事をしなくても、私が殺して差し上げましたのに。」

心臓を抜き取られたはずの桜は、未だに活動を続けていた。

「言っただけでしょう。この手で全てを殺すと。」

それより、やはり死にませんでしたね。聖杯の影響でしょうか。」

「ええ。私は聖杯がある限り、何度でも生き返ります。」

「そのセイバーも、アサシンに殺されたと聞きましたが、大方貴方が取り込み、そして、セイバーの内にある非道な一面を表面化したと言ったところでしょう。」

「ふふ、貴女はどこまで勘がいいお方なのでしょう。」

二人の会話、それは殺意がこれまでにないほどこもっていた。しかし両者は口以外は全く動かさない。少し手を前に出せば、互いに心臓をもぎ取れるぐらいの近さであるはずなのに。

「ですが、ここは退かせてもらいます。貴女は私を殺す手立てを持つていそうですから。」

「賢明ね。」

桜は冷静に撤退を実行する。今はまだ殺せない。しかし、大聖杯の元であれば、あるいは。

「セイバー。」

剣士は主人に名を呼ばれると同時に、戦闘をやめ、彼女の元へ戻る。ボロボロになっている士郎と凜は何が何やらわからない様子だ。

「私は大聖杯の元へ居ます。ですから皆さん、待つてていますね。」

満面の笑みを残し、桜はセイバーを引き連れて影へと消え去っていく。もうそこには、誰もいなくなる。

「……さて、ここでの目的は達成しました。一旦帰り」

「おい待てよ。」

話を中断させるように、ドスの効いた声で問い詰める。

「何？」

「アンタ、どうしてあんな事をした。」

それは何故臆現を殺したかではなく、何故当然の如く殺せたか。誰がというのは問題ではなく、どうしてそんな行為ができるのか。その様な意が彼の重い声に含まれていた。

桜やセイバーが敵に回ってしまった事実も受け入れがたいものであるが、それでもジアナの変わりように怒りが爆発しそうであった。

「私の指示に従いなさい。」

「どうしてって言うてんだ！」

「従いなさいよという声が聞こえ」

「そんな人間じゃなかったろ！アンタは誰かを思いやって！困っている人を救って！」

なのに、なんで人をあんな簡単に殺すんだよ！あいつに、あいつに胸張って顔を合わせられるのかよ！」

「……あいつ？」

あいつ、ここにはもういない創太。彼女の家族のような存在で、人生を共にした人。

それを聞いたジャンヌは苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

「またその話なの？彼はもういない。だから、彼はもう関係ない。そもそも何？人殺しを止めたら彼が帰ってくるの？私がどう振る舞おうと、彼が死んだという事実は変わらない。」

だから、私が義理や義務のある行動を取らなくても良い。どうあるうとも、勝手よ。」

「てめえ！」

「待つて、士郎。」

ついには手をあげそうな士郎を、凜は止める。

「貴方が殴るのはいいけれど、その前にはつきりさせておきたい事があるの。」

ジャンヌ・ダルク、貴女さつき言ったわよね。セイバーがあんな姿になったのは、自身にある別の一面が表面化したからだって。

ならその理屈で行くと、貴女の中にもその一面があるわけね。それって、ジャンヌ・ダルクから持っていたのか、もしくは

ジアナ・ドラナリク
現世での人生からなのか、答えてちょうだい。」

「それに答える必要はありません。」

「あるわ。一時的でも相手のことはある程度知っておかなきゃ、信用できないのよ。」

彼女が考えるに、現世からなのであればまだ信用できる範囲だった。もし、生前から今のような憎しみや怒りを持っていたとすれば、それはジアナ・ドラナリクであった時の行動は裏に何かを持っているかもしれないからだ。

「……生前にこんな感情は持ち合わせていませんでした。殺人は犯してきましたが、殺意を持つてはおらず、むしろ、罪悪感までありました。憎悪や憤怒といったものとも無縁で、負の感情はせめて悲しみぐらいでしょう。」

だから、憎む人も殺したい人もいない。ただ彼女は最後まで聖女の心を持ちながら亡き者になった。

「ですが、現世で体験した事により、ジャンヌ・ダルクは変わっていった。いえ、厳密には十年前、あの災害から変わった。」

何故ああまでして世界を良い方向に変えようとした人が死ぬのか。何故無関係な人間まで死んでしまうのか。何故人はあんな惨状になる事を気づけずにいるのか。疑問ばかりが浮かんだわ。」

それは人が人である条件の一つ。競争が無ければ墮落していくだけ。彼女も理解してはいた。しかし、納得する気は無かった。

「それら解決されずに時が過ぎた時、私は物事の受け取り方が変化した。メディアから伝わる紛争やテロ、子供の些細な喧嘩までも。もちろん、慈悲という心はありました。けれども同時に、何かドス黒い物も生まれていた。それまで感じたことない感情。私の中に渦巻き、追いついて出そうとしても留まる。」

そして、あの影に呑まれた時理解したわ。それが怒りだと、憎しみなのだ。この感情は今に始まったわけじゃない。あの聖杯によって作り出されたものじゃない。

この黒い感情は真に私の物です。」

凜は理解した。それは悲哀の叫びなのだ。

ここまで事細かに自身の気持ちを明かしたのは、救いを求めているからだ。でなければ、こんな事をしゃべるはずかない。

しかし、その救いは誰にもできない。凜や士郎が何を言おうと、彼女には届かない。

「けどそれじゃあ……!」

「士郎、ちよつと待って。」

「邪魔をするな、遠坂。」

「いいから。」

彼女は士郎を引き寄せ、小声で話をするよう仕草をする。

「今は黙って協力するしかないわ。彼女をなんとかしてやりたいのは分かるけど、聖杯が最優先よ。」

幸いあいつは、聖杯を壊すまでは何もしてこない。それに、アンタも桜が心配でしょ。」

「それは……分かった。」

「話は終わりましたか? さっさと帰還して、体を休めてください。明日には決戦が待っているのだから。」

士郎は嫌々ながらも、凜の言葉に従う。けれども、それだけではジャンヌ・ダルクは救えない。

彼がいればという理想論を描きながらも、彼らは進む。

――2月15日――

丸一日が過ぎ、彼らは柳洞寺、ではなくその奥に進んだ先にある切り立った崖の下にいた。

この一日に何があったでもない、ただ険悪な雰囲気は彼らを包んでいるだけだった。

「ここです。魔術で隠蔽されていますが、注意すれば僅かに見えるはずです。」

「本当だ……。ここに洞窟があるだなんて。」

「この先に霊脈の大源、そして聖杯がいるはずですよ。」

満月が照らす夜に彼らは聖杯への道に立つ。しかし、今日はやけに月が不気味に見えた。白い光を放っているはずなのに、異常な光景に

感じさせる。

「アサシンはもういませんが、奇襲には十分注意を。」

先頭は昨日のように凜だ。しかし、彼女にはある秘策を持っていた。『宝石剣ゼルレツチ』平行世界の魔力を用いる剣。その次に士郎、そしてジャンヌが最後尾で二人を見守り、洞窟の中を進む。

光もなく、目の前すらも見えづらく、足元を気をつけなければなんて事ない石につまづいてしまうほど暗い。

やがて、広い空間に出る。そこは最奥地ではないらしいが、敵がいた。そこには、騎士王が佇んでいる。

「ここで通行止めですか。二人共、手筈通りに。」

二人が戦闘態勢に入ろうとするが、その前にセイバーが口を動かす。

「その女、お前は通せと言われている。」

通せと言われた人物、それは

「私の事？」

遠坂凜だった。

「……どうする？」

「先に行きなさい。」

「分かった。」

指名を受けた凜は、セイバーの横を素通りする。聖杯と桜が待つ最深部へと。

「それで、作戦は？」

「私が先行します。貴方はここで待つてください。」

凜が完全に奥へと歩いた事を確認した後、ジャンヌは走り出す。腰に携えた剣に手をかけ、そしてセイバーを間合いに入れた瞬間、

二人の剣は交差し、火花を散らす。

純粹な力のぶつかり合いかと思われたが、ジャンヌの重心はズレて、セイバーを中心として回り、身を翻してセイバーの背中を蹴り、後ろへと回る。

「っ……っ！」

「まんまと、通してくれましたね。その彼は通さないようにして下

さいね。」

「アンター！それどういう事だ！」

「セイバーの相手は貴方一人ですて下さい。その間に、私は全てを終わらせておきます。」

嵌められた。そのことによろやく彼は気づく。そもそも、彼女はセイバーを士郎と凛に任せるつもりであり、聖杯を壊す気であった。予定が狂おうとも、それは変わらない。

「おい、待てー！」

奥へと進むジャンヌの後を追おうとも、セイバーによって邪魔される。

こうなってしまうえば、戦う他はない。ギルガメッシュをも倒したのだが、セイバーとは訳は違う。彼女の強さは純粋な白兵戦、遠距離からの攻撃だけでは距離を詰められる。

だから、今回は剣製だけではなく、自身の剣術が試される。ただ作るのではなく、それを扱う力が必要だ。

「けど、行ける。」

しかし、彼には勝算があった。体に残る魔術陣、創太が残した物。三日前は一日保つと言われていたが、奇跡的に今まで効果を發揮していた。これならば、あるいは。

「……行くぞ、セイバー。」

覚悟は決まった。例えかつての仲間であったとしても、彼は斃す。

白黒の双剣を構え、セイバーと対峙する。

「悪いけど、そこを退いてもらう。」

Hell end この世全ての破壊く epileo
gue

セイバーの一撃、それは重く疾い。故に士郎にとつては必殺を意味する。手に持つ双剣で衝撃を受け流そうとも、流しきれない。

更には、何度も干将・莫耶をその黒の聖剣で弾き飛ばされ、その度に投影していく。このままでは士郎が魔力切れか、それともその前に一撃が入るか、不利でしかない状況だ。

だがしかし、それは彼が思い描いていた構図。彼女の周りを翔ぶ無数の双剣。それは激化する戦いに比例して増加されていく。

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

互いに引き合い、彼女を襲い、幾度と弾かれようとも力は衰えることを知らずに、彼の斬撃と合わさる。

「心技、泰山ニ至リ」

むしろ、数が徐々に増えていき、スピードも上がっていく。それ故に、セイバーは対応しきれなくなる。

「心技、黄河ヲ渡ル」

士郎の持ち得る全ての力を出し切る、彼の力さえも利用して。それでも、彼女に届くかどうか。

「唯名、別天ニ納メ」

かつての未来が出した技、『鶴翼三連』。今、ここで展開されている物はそれに近く、しかし全く異なる。

三対の双剣という枠を超えて無限にまで増加する連撃。それが全方位からなのであれば、厄介どころではない。

「両雄、共ニ命ヲ別ツ……！」

そして、干将・莫耶が文字通りセイバーの周りを全て埋めつくした時、技は完成される。

魔法でも使わなければ、回避など不可能。防御などすれば、たちまち餌食にされてしまう。

——だが、まだ荒かった。これならば、彼女は全てを破壊する。

「風王……」

元々は知名度が高すぎるその剣を不可視にするためだったが、この状況を対処するのであれば、範囲、威力共に十分。

「結果!!」

嵐の名を口にした瞬間、体を捻り回転斬りを繰り出す。風と剣、二つの刃は全ての干将・莫耶を破壊する。しかし、彼の攻撃はまだ終わっていない。その夫婦剣の中に、士郎が握っていたものなど一つもなく、すでに彼は距離を開けていた。

「その心臓……貫い受ける!」

本来ならば、その真名解放は槍を構えながら行う。しかし、士郎は朱槍を矢に変えて、弓の弦につがえていた。

その矛先を真っ直ぐに、セイバーへと向けて。

「偽・刺し穿つ死翔の槍!」

矢から指を離れた途端、それは神速の勢いでセイバーに翔ぶ。かつて傷を負わせ、呪いにより蝕んだその槍は偽物ながらも、真に近い風格を持っていた。

彼女が避けようと弾き返そうと、槍は結果に進み続ける。それでも、どちらかの行動を取らなければならない。

「っ……!」

セイバーが取ったのは回避。以前と同じ選択ではあるが、結果は異なり脇腹を掠っただけとなった。朱槍の軌道は、本家のような不自然はなく、緩やかに曲がっただけだった。投影できたとはいえ、完全ではなかったのか。

しかし、油断してはならない。その性質上、槍は心臓を穿つまで進む事をやめない。だから、

「はあっ!」

方向を変え、なおも進み続ける後ろからの朱槍を叩き落とす。投影品が型落ちしているのであれば、一度勢いを失えば止まるのではないか、という予測を立てていたが、

槍は再び動き続ける。

地面に落ちようともそれは翔び、セイバーの頬を薄く斬り、またも

向きを変えて心臓を狙う。

この槍をどうするか、それはもう一つしかない。バラバラになるまで砕く。

だが、忘れてはならない。彼自身も攻撃してくる事を。

「投影、完了。」

士郎の手にあるは、かつても投影した『カリバーン』。騎士王が正道ではない戦いをした事で、失われてしまった剣。しかし、彼女の持つ『エクスカリバー』には絶対に届かないもの。

今それを投影したのは、かつての自分を取り戻して欲しいという表れか。

朱槍と共に、士郎は動き出す。同時攻撃を行うために、例えどちらも防がれようとも、次には槍は動き鋭い一閃を放つ。それに剣を当てるのは至難ではある。

「全充填、範囲指定。」

更に、彼は何かをしようとする。

周りが少しずつ焼け、炎が走る。

「結界、限定化。」

その現象はまるであの心象世界を作り出すかのよう。しかし、走るまでの間に展開するにはあまりにも短い。

たった四の言で、大規模な結界が発動するはずがない。けれども、すでに彼は互いの間合いに入った。その瞬間、

「展開！」

二十七の宝具がセイバーを取り囲む。彼の魔術回路と同じ数のそれは、まともに当たればセイバーであろうとも一撃で致命傷を負うほどの威力。

先ほどのような、干将・莫耶のように剣を振るうだけで飛ばされるほどヤワではない。

だから、今度は圧倒的なまでの力で粉碎する。

「はあああっ!!」

彼女の咆哮と共に、全身から黒く、そして純粋な魔力が噴出される。魔術や宝具などという手間のかかることはせず、大量の魔力量に物を

言わせた力技で、全てを吹き飛ばす。

「くっ……まだ……だ！」

けれども、士郎の持つ選定の剣と朱槍は動く。

魔力放出により、僅かながらもセイバーの隙はできた。このチャンスを逃すわけにはいかない。

槍による一閃が先行し、後に剣の一撃がでる。二段構えによる連続攻撃ならば、今のセイバーに届くか。

しかし、

「っ……い！」

一閃は体を横にズラす事で避けられた。しかし、それは無理やりで彼女の体制がほぼ崩れかかっており、しかもまだ一撃が残っている。

これならば、

「なっ……い！」

だが、腕を掴まれてしまう。隙など無視して、ただ一歩、力強く踏み込んだだけで。

ここで士郎は、完全なる無防備になってしまう。セイバーは片方の手を残し、聖剣を構えている。

それを振り切られてしまえば、いやもう、振り切ろうとしていた。士郎を真つ二つにしようとする。

「……ここに結果を示せ！」

だが、ここで事前に打っておいた布石が効力を発揮する。今まで何度もセイバーの心臓を狙っていた朱槍が、ついに本気を出す。

「うぐっ！」

一時的に、朱槍が真作と同等となる。

それにより、突如として槍は不自然な軌道で直角に曲がり、セイバーの手から聖剣を弾き、更には心臓を穿つ。

これまで槍は性能を強制的に下げられていた。すぐに、心臓を狙おうとすると、以前のように急所を外されてしまうからだ。だから、タイミングを見計らい、ここぞというところまで性能を隠し持っていた。いや、そうせざるを得なかった。

「あがつ……い！」

それでも、セイバーは動く。爪のように尖った手甲で士郎の腹を貫いた。

士郎は何故だと思ひ、彼は槍の刺さった場所を見た。それは急所を外していた。どうあろうとも、彼女は運命を捻じ曲げるらしい。

ならば、最後の手段を使うしかない。本当の意味で最後の捨て身の一手。

「はあっはあっ……トレース投影……オン開始。」

口を曲げて、風前のともし火になろうとも、投影品を作り上げる。彼の知りうる最高の火力を持ったあれを。

無銘であるのに、『エア』と呼ばれる原初の宝具を。掴まれた腕が手にする。

投影されたと同時に、石柱は回り出す。以前はツギハギだらけで自身で宝具を発動できなかったはずなのに、それは自らで世界を切り裂く。

それに気づいたセイバーは離れようとするが、士郎のもう片方が腹に刺さった彼女の腕を掴む。

『エア』は嵐を起こし、洞窟ごと崩壊させるような勢いだった。しかし、何故急にそんな事ができたのか。そもそも、士郎の技量では例え彼の力を借りたとしても、『ゲイ・ボルク』の投影は不可能だ。

——止まるな。

それを一瞬とはいえ、真にまで近づいたのは何かがおかしい。

——止まるな。止まるな。

この荒れ狂う災害を彼が引き起こしていることも。

——止まるな、とまるな、止まるな。

もし、推測するならば、それは

——とまるな、とまるな、トマルナ！トマルナ！

限界を超えてしまったとしか言いようがない。

「ブロックン・ファンタズム壊れた幻想。」

解放した瞬間、洞窟内を昼間以上に照らす光が包む。轟音と熱が二

人を襲い、とてつもない爆発が起こる。

これを受ければ、相手が誰であろうとも生き残る事はない。そう断定できるほどの超高威力だった。

それなのに煙の中で立つ影が一つ、衛宮士郎がいた。

触れれば倒れそうなほど、傷とダメージを負い、それでも二本の足で立っていた。

熾天覆う七つの円環、それが最後に彼を守った盾の名前。あの爆発の威力を減衰させ、生き残る事を可能にさせた。

セイバーはもういない。真の意味で魔力に霧散してしまった。

これで、邪魔者はいなくなった。

「く……がつ……！」

けれども、前に進む力もない。体中の至る所から剣が生え、人間とは思えない化け物となってしまふ。これが限界を超えてしまった代償だろうか。

どちらにせよ、目の前にある影に吞まれてしまうのだから、もう意味は無い。

—————

洞窟の最奥地、二つの死体が転がり、ジャンヌ・ダルクがそこに佇んでいた。

結果から言って聖杯の破壊はできなかった。いや、しなかった。彼女にある魔が差したからだ。

「聖杯を壊す前に、聖杯に世界を壊してもらおうだなんて、ほんと馬鹿げているわね。」

この手で、とか言っておいて他人まかせだなんて。」

周りは既に聖杯の泥、いや激流の黒き川に成れ果てており、世界を滅ぼそうと外へと流れ込んでいた。聖女ジャンヌはそれを望んでしまった。

しかし、彼女には後悔などなかった。むしろこれで良かったなどと言え、思っていた。

誰もいなくなれば、それこそ自身が何者であろうと関係ない。胸の内にある感情も無意味になる。例え、正義の味方がいようとも聖人君

子がいようとも、無に帰してしまえば、悪という概念もなくなる。
何も悩まなくていい。何も考えなくていい。それが、一番良い選
択。

「けど、やはりアンタはこの手で壊す。地上が吞まれつくされた時、私
はここに戻る。」

だが、彼女の憎悪という名の炎が燃え尽きる事はない。時間が心を
擦り切りようとも、摩耗させようとも。

影に吞まれて、流されようとも。彼女の物語は終わることはない。
憤怒の対^杯象がある限り。

|| || || || ||

ああ、あれから幾らの時間が経っただろうか。

一日か、一ヶ月か、一年か、十年か、あるいはそれ以上か。

寿命が尽きる事はなく、願望すらも持たなくなった。

ただあるのは欲望のみ。殺したいという一点、ただそれだけが頭を
支配しようとする。

抵抗なんてバカバカしくて、してられない。もう無意味なのだか
ら。

最初はここから出たいという事も思っていた。でも、その理由すら
も、何が大事だったかも、誰とどこで何をしたかも覚えていない。

ただただ、泥の中を漂う。もう慣れてしまった。

けれども、今でも何かを思い出そうとする。思い出さなければいけ
ないと、俺の中で躍起になる。

それでも、やっぱり、もうどうでもいい。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手！」

そんな中で誰かが俺を呼ぶ。

こんなハズレ英雄を引くとは、運のない奴だ。そもそも俺は英雄で
すらない。何の伝説も持たないのに。

……伝説？なんで持ってないって分かるんだ？

まあいいか。呼ばれたからには応じるしかないだろう。それぐら
いはできる。

どうせ、聖杯戦争なんか呼ばれたんだろう。聖杯なんて俺はどう

でもいいけど、やる事はやるぞ。

……聖杯、戦争。懐かしいような、怖いような。

いや、今はいいか。

召喚には応えるだけ応えてやろう。

そう思った瞬間、泥の中を急激な速度で体が進む。それを抜け切った時、俺は外へ出たのだと確認する。

さて、建前上言っておくか。

「サーヴァント、アヴェンジャ復讐者。召喚には応じて、来てやった。

一応聞こう、お前が運のつきたマスターか？」

なんであろうとも、もういい。俺は諦めた。サーヴァントになろうとも、抑止力になろうとも、この身が死んでも構わない。

だから、さつさと縁を切ってほしいものだ。全てを絶望した俺に付き合わせるわけにはいかないのだから。

Normal end 救われた現実の中で
e q
i l o g u e

セイバーとの対一、士郎にとってこれ以上複雑な状況はないだろう。かつて信頼しあった仲であるのに、今は敵として本気で殺し合わなければならぬ。

しかし、覚悟はできている。そして勝算もある。魔術回路と魔術陣を全てフル稼働させ、この身がギリギリまで壊れるぐらいならば、セイバーにも勝てる。

リミットブレイク
「限界突破。」

その瞬間、彼の魔術回路が暴れ出す。内にある魔力が体を駆け巡る。

自身が剣になる感覚、一歩間違えばそれは諸刃のごとく体を貫く。けれども、やるしかない。そうでなければ救えない。我が身を犠牲にし、誰であろうと斬りふせる。

もう二度とあんな事は起こらないように……

「待て！」

しかし、突然誰かから止められる。

その声は聞き覚えのある声だ。多少荒れてはいるが、間違えることのない声が後ろから聞こえる。

「まさか……！」

そう思い、振り向く。考えが正しければそれはきつと、彼の親友。

「創……太……？」

しかし、その姿に疑問を持つてしまう。顔はやつれており顔色が悪いが、創太には間違いない。だが、体はどうであろうか。

人の形を保ってはいるが所々変形しており、更には無形物のように常に形を変え、地面に滴る部分もあった。

まるで化け物と、例える他ない。

「悪いな、百年も待たせちゃって。いや、二日というべきか。」

士郎は彼から出てくる言葉を理解できない。しかし、それよりも心

配せざるを得ない所があった。

「お前、その体……」

「それで、また謝らせてくれ。何か言っているのは分かるが、俺の感覚はほとんど無くなっている。五感は無いし、魔力を感じ取る程度しかない。悪い。」

その事実は彼を驚愕させる。

五感がないという事は、生活に支障をきたすというレベルではない。魔力を感じ取れるとはいえ、周りの状況を把握できないという事だ、正に真つ暗な世界が彼を包んでいるに等しい。

「なんで……そんな事に。」

「そんなに驚くな。最初は少し不便だったが、今じゃお前のその口の動きさえ正確に読み取れる。」

まあ、読唇術を覚えてないからあまり意味はない。」

ヒトの感覚をほぼ全て失った状況であるはずだが、それは他人事であるかのように冷静に自身の状態を説明した後、創太は敵を見据える。

「さて、再会を喜ぶのは後だ。」

状況を読み込めないが……アイツは殺していいのか？」

それは重く、冷酷で、一切の躊躇いもなく、覚悟は既に決したかのような言葉。

一瞬、士郎は脳裏によぎる。果たして彼は本当に創太なのか。あんなに死を恐れていたにも関わらず、今はその死を当たり前のように入えようとしている。

その差異に、動揺を隠しきれはるかかない。

「いや、俺が——」

「手遅れになるぞ。」

友人を信じきれなかった士郎は自身で戦う事を選択しようとしたが、止められてしまう。五感がないと言ったはずであるのに、士郎のその意図を読み取る。

「……分かった。後は頼む。」

頷いたという動きを読み取り、創太は不恰好な体を器用に動かした

がらも前に進む。

「セイバー、警告しておくぞ。」

そこを退け。さもなくば俺は喰らう。」

殺意を飛ばすと共に、彼の体は変形を繰り返して肥大化していく。それは威嚇か、はたまたハツタリか。

どちらにせよ、騎士王は微動だにしない。

「そうか、なら遠慮は要らないか。」

突如、彼の体が換わる。形ではない、体そのものが別の何かに置き換わる。それまで隠れていた本質が表に？きだす。それは死という名の魔法。

ランクが落ちたものの、未だ高い性能を持つセイバーの直感が警告する。

あれは、今までのどの化け物よりも恐ろしいと。

影に吞まれてから感情を見せなかった騎士王の背筋が凍る。それほどまでに、彼の体は見た者に恐怖を植え付ける。

「神さへ喰らう神狼よ、眼前の敵を贄と化せ。」

体はやがて影となり、一つの獣を生み出す。

本気を出さねばならない。

彼女はそう戦慄し、聖剣を構える。今までとは逆、斬り上げるような構えで、魔力を集める。

「約束されし……！」

聖剣をも反転されたが故に、騎士王が持つは魔剣のような黒い輝き。大聖杯から直接魔力を補給されている為、それは極大になっていく。

そして、それが洞窟全てを破壊できそうなほどになった時、

「勝利の剣——！！」

反転された極光を、地面に這わせるように剣を抉らせる。

凄まじい破壊力を持った黒い光は、人を一人殺すにはあまりにも過剰。食らってしまったら、それこそ跡形も無くなってしまおうだろう。

「贄を持って我は進化する。崇めよ、神秘を強奪せし獣の名を！」

だが、それ以上に彼の影は巨大化する。狼のような牙を持ち、血の

ような赤い目で敵を捉える。

いや、敵とは見なしてはいない。

ただの獲物、食欲を満たす為に食われるだけの存在。

獣は大きく口を開き、極光を噛み砕く。造作もなく、本当に喰らうだけ。闇の光がとめどなく溢れ出ようとも、ただ喰らう。

やがて、聖剣から放たれる黒が打ち止めとなった時、獣は口に頬張った物を一気に飲み込む。と同時に、体がまたもや肥大化する。

「……次はお前だ。」

その言葉だけでセイバーは退いてしまう。

たった一步であったが、それは戦意喪失とほとんど同じ。怯え、気圧され、勝てるわけがないと、勝負を投げ捨ててしまった。

「残念だ。お前が心底守りたいという物と実際に守っている物が一緒であれば、まだ勝てたかもしれないな。」

落胆をしながらも、手を前に出し、腕を触手のように伸ばす。

——もうすでに、彼は人間ではないのだろうか。

セイバーはそれを斬り落とそうとするが、空振りに終わる。

狙いが外れたわけではない。むしろ、正確に斬った。しかし、彼の腕はそれを通り抜け、真の心臓を掴む。

「妄想心音、あのアサシンから奪った物だ。あいつみたいに偽物を作り出せないが、本物の心臓だけを掴むことはできる。どうせ逃げられないと思うが、念の為だ。」

ついには動けなくなった彼女は恐怖に吞まれる。

目の前の化け物がゆつくりと、しかし確実に。

一步、また一步と近づいてくる。

何もできない。

何をしようとも思わない。

ただの餌としか認識していない。

それを受け入れるしかない。

獣は美味しそうだと言わんばかりに、口を大きく開け、そこに立つ獲物に顔を近づける。

そこにいる者がなんでであろうと、何を思うとも構わない。

ただ食すだけ。

そしてソレは、彼女を丸呑みにする。

あつさりど、そこにはもう何も無かったかのように。

次に、獣は創太の体へと戻っていく。

そして、彼の体に変化があった。先程までは無かった鎧が、体の一部を纏っている。彼女を取り込んだためか。

「いく……ぞ。もう時間はない。」

苦しげな声で、それでも前に進もうとする。

時間がないのは聖杯の事を指しているのか、はたまた彼自身の事か。

だが、士郎にとって問題はそこではない。果たして目の前の影は、本当に創太^彼であるのか。どうしても、その疑問が頭から離れなかった。

けれども、彼らは進む。大聖杯が起動しようとしている奥地へと。嫌な魔力が漂い、どんどん濃くなっていく。

二人は足並みを揃えてとは言えず、士郎は彼の五歩ほど遅れて歩いていた。

そして、ついに見える。大空洞と呼ばれる大きな空間に、洞窟の柱とともに見れるほど縦に魔力を放出した聖杯の大元。

確かにそれは目を惹かざるを得ない目立つ物。二日前に見た寺の物よりもよっぽど凶悪で、より強大だった。

しかし、それよりも彼らを驚愕させた光景があった。

「遠坂！桜！！」

すでに死に体である凜と桜、そして、それに手を掛けたジャンヌ・ダルクだった。

「あら、案外早く終わり……」

彼女は士郎だけしか来ていないと思い、振り返って皮肉の一つでもかけてやろうと思えば、彼の存在に棒立ちになり目を開く。

ある意味、彼女を今に至らしめた原因がここにいるという事は、殺戮という行動が全て無意味になった事になる。

「そう……」

「後にしてくれ。今はあれを壊すのが先だ。」

感動の再会、そうなるても良かったはずなのに、獣は彼女を横切る。それよりも優先すべき事がある。死んだ仲間よりも、それこそ聖女の心を解放することよりも。

「あ……」

何か、喉を振り絞り、ジャンヌは言葉を出そうとする。しかし、何を言えばいいのか。彼女が聖女であれば、マトモな言葉を掛けたのだろう。しかし今、ジャンヌは復讐者だ。復讐の目的を先程の一瞬で失ったとしても本質は変わらない。

「やっとお前を壊せる。手間かけさせやがって。」

だが、創太は聖杯と対面する。まるで悲願が叶うかのように。

彼が纏う影と歪んだ聖杯が生み出す影。それらは互いに殺しあう物であるのに、全く同一だった。

「これで全部終いだ。」

右手に影を集め、狼とは別の物を創る。

それは剣。先ほどのセイバーが持っていた反転の聖剣。士郎が投影するような偽物ではない。先ほども言った二つの影が同一であるように、それもまた真作の『エクスカリバー』以外何物でもない。

「約束されし」

闇と光、二つの存在が共合する。相反する性質を持った聖剣は凄まじい魔力を作り出す。

目の前の人間が、自身を破壊しようとしている。その事実を否定したいと願っているのか、大聖杯は吠え、蠢き暴れ出す。

だが、それ自身は自分の意思で動くことはできない。ただの無意味な抵抗でしかない。

「勝利の剣。」

そしてついに、剣から溢れ出る魔力が解放される。振り下ろすのではなく、振り上げるでもない。真横の斬撃、つまり水平斬りによる攻撃。

それはレーザーのように突き進み、大聖杯を抉り、その中で爆破する。巨大な怪物が悲鳴をあげながら、四散する。その身を焦がされ、

光と闇の間に潰される。

例え破片が残ろうとも、それすらも焼かれる。彼の聖剣は今までのどの聖剣よりも恐ろしい物だった。

「っ……」

やがて、大聖杯が完全に焼かれると、創太の足は体を支えきれなくなったのか、崩れ落ちてしまう。

「創太！」

それにいち早く駆けつけたのはジャンヌ・ダルクだった。

上半身を起こし、彼の安否を確認すべく何度も名前を呼ぶ。

「創太！大丈夫ですか！創太！」

「……う……あ、ああ、やっただ。」

意識はあるものの受け応えは危うく、生死をさまよっているようだった。

「何がやっとなんですか！」

貴方はいつも心配をかけて……！それで、私は……」

「やっとお前の顔をこの目で見る事ができた。」

その言葉に彼女はハツとする。

彼は願っていたのだ。ずっと近くにいたのに、会えなかった悲しみを胸に潜めて。

「この呪いのせいで目が見えなかったけど、あれを全部出したおかげで光を取り戻せた。」

……けど、俺はこの時代には生きられない。後にしてくれ、とか言つてたくせに、まともな話をすらできないな。」

「何を言つて……！」

支離滅裂な彼の話を、ジャンヌは全く理解できない。

けれども、彼が死んでしまう。それだけを理解してしまう。

「死なないでください！また、そんな事になれば、私……私！」

「大丈夫だ。お前を支えるのは俺じゃないけど、あの中にはいる。」

彼がフラフラとした手つきで指差す場所、聖杯があったそれは光に包まれていた。

「正直、今ならアーチャーの気持ち分かる。あいつをぶつ殺した

いってな。けど、もうそんな事もできない。」

「創太、お前……」

「衛宮、俺はお前の友人であれて良かった。最後の最後まで、お前を助けられて、誇りに思う。」

そして、今度は彼女に向かって言葉かける

「すまないな。お前には心配かけてばっかだったな。そんなになるまで待たせちまって……あいつはそれ以上だったのかも……」

「やめて下さい！もう……何も……言わないで……。」

涙声で懇願し、目から溢れ出る熱いものは彼の胸に何滴も落ちていく。

「最後に言わせてくれ。」

創太の体は光と成り、足から実体を消滅させられる。

もう彼に残された時間はない。

「こんな俺と……家族でいてくれて、ありがとう。」

感謝の言葉を言い切り、彼は霧散し消えていく。まるでサーヴァントのように。

まだ、彼女の頬には輝く物が滴る。

しかし、聖杯があつた場所からは一人の影を映し出す。その人物は理解しがたい者だった。

先ほど死んだはずの創太だからだ。

しかし、体はしっかりと人型であり、欠けている部分はどこにもない。偽物なのか、さっきの人物がそうなのか。

いずれにせよ、彼は弱っている。だから助けるべく、衛宮はそれに駆け寄り、体を支える。

「創太……なのか？ そうだとしたら、さっきのやつは一体……いや、まじはこいつを運ばないと。」

「ジャンヌ！手を貸してくれ！」

「あ……は、はい！」

名を呼ばれた聖女は、今まで呆然とした意識から戻り、士郎を手伝う。

だが、彼女には疑問が多く残されていた。創太と名乗った謎の人

物、彼の言葉、そして、何故彼を助けなかったのか。

実を言うと、彼を助けようと思えば助けられた。方法はどれであれ、彼女にはそれをする手立てがあつた。しかし、何故かその素振りすらしなかつた。

彼が創太だ、と言うことは一目見た時から彼女の中で確信があつた。もちろん、今、肩を貸している彼も創太である事に間違いはない。なのに、救おうとはしなかつた。

「彼が彼女よりも聖杯を優先したから？」

「彼が死ぬ事を望んでいたから？」

「彼が現在の人間ではないから？」

「彼が最後まで名を呼ばなかつたから？」

理由を考えようとするが、そのどれもが答えではなかつた。動機が何であつたのか理解できない。自分自身を把握できない。

それだけで、彼女は恐怖した。

まだ、己の内に何かが眠っているのではないのかと、ジャンヌ・ダルクは危惧してしまう。

— epilogue —

戦争が終わつてから、二週間が経つた。

俺が目覚めたのは戦争終結の翌日らしく、衛宮の家で看護されていた。聖杯の泥に二日間漬けられていたが、特に体の変化はなかつた。あの時は聖杯に体の感覚をほとんど奪われていたというのに、今はそれらが全て無かつたかのように感覚が戻つた。

その二日ぐらいの戦況は衛宮から聞いた。ジアナの反転化、間桐桜の聖杯化、そして、その彼女と遠坂の死亡。大まかな内容として、そんな事が起こつてしまつたようだ。

後はセイバーが敵になつてしまつた事だろうか。それは中々複雑な事だ。俺もそうだが、かなり信頼していた衛宮の方が心配だ。しかし、俺を名乗る人物がいたというのは少し気になる。だがすでにいたため、真実は闇に葬られてしまつた。

過去のことはこのぐらいかな。現状を整理すると、しばらく休校だった学校はもうすでに再開しており、生徒と教師共に死亡者はおらず、後遺症もないようだ。ただ、魔術に関係した者を除いて。

聖杯戦争の後始末は、言峰の代わりに新しく教会から派遣された人と、俺の叔父がやってくれた。色々と報告が必要な部分は俺たちが説明したけど、その後の作業は任せてくれと全て済ませてくれた。

しかし、俺と衛宮は戦争に生き残ったとして、今後動きにくくなるかもしれない。片や固有結界持ちで、片や封印指定ギリギリの魔術師だから特にだ。

そして一つ、大きく変わった点があった。ジアナが行方不明になった事だ。戦争終結から数日後にいなくなり、どこに行ったかも分からない状況だった。残したのは綺麗な字で書かれた置き手紙だけで、内容は以下の通りだ。

『突然の事ですが、私は貴方から距離を置こうと思います。嫌いだから、憎んでいるからではありません。』

こうなったのは、自分の気持ちが分からないからです。

士郎君から聞いたとは思いますが、私は聖杯によつて反転させられました。その時の気持ちはまだはつきりと理解していません。殺気と敵意を振り撒き、眼に映るもの全てを憎悪しました。

しかし、貴方を名乗る人物に出会った時、私の感情は複雑な物になりました。ただの慈愛でもなく、憤怒でもない。全てが混ざりあつたようでした。

ですから、それが貴方への殺意となつてしまった時のために、私はこの家を出て行きます。

大変我が儘な事で謝罪の言葉もありません。

けれども、私の事は決して探さないよう、お願いいたします。』

——正直訳が分からない。複雑な感情とか、聖杯に反転させられたとか。俺が戻ってからの数日間、直接は話をしなかったものの、性格や考え方が劇的に変わったとは思えなかった。どちらかと言えば、俺が戦意喪失した時にできた気まずさに似ていた。

叔父にその事を話したところコネを使って探してみるという事で、

俺は普段通りの生活をしてろという事だった。俺も探しに行きたいが、何の役に立つのかも分からないのに下手に動けなかった。けれども、本当は探しに行くべきだったのでは……

「おはよう、創太。」

という事を朝の登校中に考えていたら、衛宮と出会った。

「……おはよう、衛宮。」

「なあ、前から言ってるけど、お前、暗くなってるぞ。」

「そんなことは」

「ある。だって、ずっと考え込んでるじゃないか。」

その言葉に、俺は目を見開いてしまう。

この二週間、俺はいつも通りを貫いていたつもりだった。しかし、他人からみれば、悩みまくっていた事がバレバレだったようだ。

けれどもな、衛宮、

「お前もそうなんだろ。柳洞が言ってたぞ、生徒会での仕事があまりできてないってな。今も無理してるって事が見え見えだ。」

「っ……。」

二人とも、周りから見れば丸わかりなのだろう。何が何でも引きずりすぎだ。

「……あの、三人の事か？」

「分からない。確かにセイバーは俺のサーヴァントとして戦ってくれた仲間だし、遠坂もそうだ。桜は俺の生活を手伝ってくれた。

けれども、何かが違う。

もっと根本的な物だ。誰かじゃなくて、行動自体に何かがあったんだと思う。」

「それは……。」

それは救えなかったからではないか。

そう言おうとして、途中で切ってしまった。衛宮の何かの線に触れるのではないかと、恐れてしまったから。

「なあ、もしやり直せるなら……。」

「それだけはやめろ。」

過去に戻って、なんていう言葉を聞いた瞬間、俺は即答していた。

「……そう、だよな。何言ってるんだろうな、俺。」

話はここで途切れる。

互いに心が不安定な状態だ。これ以上話し合っても悪循環に陥るだけだろう。ならば、黙っておく方がまだマシだ。

だが、そんな甘い考えを後で後悔する事になった。

「藤村先生！」

翌日の朝、ホームルームの直後、俺は衛宮の保護者である藤村先生を、職員室へと向かう前に呼び止めていた。

「どうしたの、古崖くん？」

「衛宮は……本当は衛宮は何処にいるんですか！」

「や、やだなあ、急に。衛宮くんは今日、風邪をひいて欠席だって……」

藤村先生は必死に隠そうとしていたが、逆にそれが仇となり、嘘をついているようにしか見えなかった。

先程のホームルームで、衛宮が欠席したという知らせがあった。しかもここ何日か休むという事らしいが、不審な点がありすぎる。そのいくつかを使って彼女を問い詰める。

「昨日、あいつと話しましたが風邪をひいている様子なんてありませんでした。何か思い悩んでいたし、それが原因じゃないんですか？」

「いやでも、急に熱が出たして……」

「襟元。」

「え……？」

「藤村さん、いつもそこに調味料の跡がついてるんですよ。あまり目立ってはいませんが。でも今はついていない。つまり、朝食は食べなかった。そして、衛宮は熱を出そうとも無理して藤村さんが来る前に食事を作っている。」

ここから予測するに、衛宮に何かがあったという風にしか考えられない。

少し無茶を押ししているかもしれないが、概ね筋は通っているはずだ。

藤村先生は少し考えた後に観念したかのような顔で、

「ここじゃ他の子に聞かれるかもしれないから、ちよつと職員室まで

移動しましょうか。」

「と言いつつ俺を職員室まで誘導する。」

他の人には聞かせたくない事なのだろうか。そうしなければ話は聞けないと判断して、彼女の後についていく。

「そうね、どこから話そうかしら。」

職員室の中に入り、藤村先生の席まで移動し、彼女は椅子に座り、俺は立ちながら話を聞いていた。

「そんなに複雑なんですか。」

「起こった事は単純よ。しろ……衛宮くんが家出した。」

それはジアナが行方不明になった事と同じくらい衝撃的だった。

「え、ど……どういう……」

「私も分からない。朝、家に行ったら何も残さずに何処かへ行ってしまったの。一応、警察には連絡したわ。」

多分、色んな事が一度に起こったからだと思う。セイバーちゃんは帰っちゃったし、遠坂さんも留学しちゃったし、桜ちゃんも行方不明になった。」

今は亡き三人は、周りの人にはそういう事になっていた。

しかし、だからと言って急にいなくなるのは卑怯だ。

「学校の皆さんも倒れちゃったし、葛木先生も様子がおかしいし、また何か起こらないと言いつつ……」

「……大丈夫ですよ。もう何も起こらないと思います。」

それは確実だ。しかし、もうどうにもならないという意味も含んでしまったのではないか。

「そう？それなら良いわね……」

さて、そんな暗い顔しないで！きつとすぐ戻ってくるわよ。士郎も、もちろんジアナさんも！」

先生は暗い雰囲気から取り戻すかのように明るい声で、励ます。しかし、それでも俺の中にある重い感情はどうともならなかった。

「はい………すみません。」

「そんな謝ることしてないでしょ。ほら、次の時間は私の英語なんだから、行った行つた！授業中にそんな顔してたら竹刀で叩いちゃうわ

よ！」

「分かりました。失礼します。」

衛宮の失踪という事実から立ち直れる訳もなく、俺は俯きながらも教室へ戻ろうとする。

「……そういえば、先生。」

だが、ある事にふっと気がつき、それを伝えようと振り返る。

「うん？まだ何かあるの？」

「その顔、教室来る前に何とかしておいた方が良いでしょう。時間がかかるなら、俺が言っておきますんで。」

先生は俺の言葉から豆鉄砲を食らったようにハツとする。自身でも気づいていなかったのか、頬を流れる物に気づいた時、観念してついに声を上げてしまう。

それを俺は見ることにすらできず、立ち去ってしまった。現実から目を背けるように。

何もかも分からない。ジアナも、衛宮も、俺を名乗る謎の人物も。そして、俺に何ができていたかも。

全ては闇の中。どうあっても探す事は出来ない。その中に飛び込まない限りは。だから俺はイリヤスフィールに会いに行く事にした。

彼女は未だアインツベルン城に住み続けているらしい。俺も今そこにいた。

「なあ、イリヤスフィール。真の聖杯というのは何でも願いを叶えるんだよな？」

「会って挨拶もなし？礼儀知らずね。」

俺自身もそう思うが、こっちは切迫詰まってるんだ。

「いいから、答えてくれ。」

「……限界はあるわ。それこそ、無限の力なんていうのは無理よ。聖杯そのものに限界があるんだから。それに過程をはつきりとさせないといけないわ。」

「なら」

何故そんな事を質問したのか。それが俺の最大の謎だった。しかし、これだけは分かる。

「人を生き返らせる事はできるのか？」
それが、泥沼闇の中へ足を踏み入れた音なのだ。

この暗い泥の中、俺は息もできず、死ぬ事もできず、ただ埋めつくされているだけだった。まるであの恐怖に溺れた夢のよう。

けれども、今度は誰が助けしてくれる訳もない。むしろ、俺をそうしてくれるたつた一人を外に出してしまった。だから、俺を助けられる奴なんていない。こんな泥沼の中に足を踏み入れる事はできない。俺だって指一本動かす事さえ無理だ。神経という神経が死んで、僅かに心臓が動く程度だ。それでも酸素は無く、肺に入るのは泥のみ。

だが、俺は生きている。死という恐怖が包み込む中で、死すらも許されない。生き地獄もいとこだ。

けれど、抵抗する。何時間か、何日か、何年か。終わる事なき無意味な抵抗を。諦めてしまえば、俺が俺でなくなるから、ただそれだけの理由で。

そんな中、ある変化が起こる。俺の後ろから声が聞こえる。耳なんていう機能は完全に死んでいるにも関わらず。

——また会えました。

残念だが、お前は俺の姿を見えているんだろうが、こっちから見えないんだ。だから、お前が誰かすらも分からない。

——それでも良いのです。

何だよそれ、ただの自己満足か。そんな理由で影こんなものに飛び込むなんて、まるで衛宮みたいだな。

けれども、そいつが自己満足だけの為にここへ来た訳でもなさそうだった。だって誰かに似ていたような気がしていたから。

やがて、その誰かは俺の背中に手を乗せて何かを呟く。呪文なのか、ただの小言なのか。

しかし、その中で確かに聞こえたものがあつた。

——貴方を救えて良かった。だから、今度は私彼女を助けてください。

おい、待て。どういう意味だ。

そう訊こうとしたが、彼女はすでに俺の背中を押し、この地獄から脱出させようとしていた。と同時に、俺の脳内にある記憶が流れ込んで

くる。それはおそらく彼女のものだ。

けど、救われたって……そんな風には見えない。だってお前は死んでしまう。辛い人生を生きていた筈だ。なのに何故……やつと再開できたと思っていたら、相手はお前のことを認識すらできなくて、それでやつと互いに理解したっていうのに！

何でお前は俺を救おうとするんだ！何故お前は、そこからやり直せた筈なのに……！

……いや、違うのか。もうすでにお前は救われていたのか。

だったら、とやかく言うのは野暮だよな。だけど、

お前も助けたかった。

|| || || ||

大聖杯が目覚めようとしている大洞窟の最深部、そこでは三つ巴の戦いが起きていた。

凜と桜、そしてジャンヌの三人は他の二人を均等に注意を割きながら、戦っている。どちらか一方に集中してしまえば、もう片方にやられる。だから、相手を倒すというよりは自身が生き残る戦いになってしまう、通常の戦闘より長引いてしまう。

しかしそれは、あまりにも長引いていた。

「憤怒の炎よ！」

周り全体を炎の海に染め上げてしまうジャンヌ。二人への同時攻撃と移動の制限、更には目眩しの効果も兼ねていた。

二人はそれを防ぐものの、押し切る事は出来ていなかった。その間に、彼女は走る。行先は聖杯の力を持った桜、後に残してしまえば聖杯による無限の魔力が厄介となる。ジャンヌとてその魔力量は多いものの、無限ではない。

「そろそろ、最初の脱落者を決めましようか！」

剣による一撃。ただの力押しではなく、疾く鋭く、相手を殺す事に特化した剣。それを防ごうと、桜は触手による防御を行おうとするが、

「甘……」

瞬く間に、黒い炎で焼き尽くされる。しかも、桜自身にも遅い掛か

ろうとするが、

「Eins, zwei, Verschnitten!」

魔力の刃が横槍を入れる事によって、炎もジャンヌの攻撃も桜には届かなかった。

「悪いけど、その子は殺させないわ。」

凜が持つ宝石剣、平行世界から魔力を運用する事に特化した魔法を扱うそれは、幾度となくこの戦いを長引かせていた。

何故ならば、それもほぼ無限であるからだ。無数の世界から無数の魔力を運ぶ。まさに、魔法だ。

「流石にこう何度も邪魔されると、鬱陶しくなりますね。」

隠していたその剣といい、謎の回避方法だったり。」

「ええ、同感です。」

二人の殺意が凜に集まる。

「これはちよつと、嫌な予感がするわね……。」

「少しばかり協力しませんか？彼女を残しておけば、現状を打破できません。」

「私もそう思っていました。ただ、貴女も一緒に殺してしまっても恨まない事ですね。」

「その言葉、そのままお返しします。」

ジャンヌと桜は凜を殺すために、同時攻撃を行う。

どちらも人外のスピードで、さらにはかすただけでも致命傷になりかねない。

「まっず……!」

苦し紛れながらも、彼女は剣から二つの衝撃波を生み出す。それぞれに一つずつ、高密度の魔力であり、まともに当たれば致命傷。だが、二人は難なくそれを弾く。

「もう一度!」

「遅い!」

凜の目の前には、すでに影の触手と黒の斬撃が迫っていた。しかし、彼女にとってそんなものは関係ない。どういうものであっても、一瞬でも反応できれば回避は可能だ。だが、その方法は敵にとって謎

であつた方が時間を稼げる。

だから、凜はその宝石剣を地面に突き刺し、爆破させる。こうする事により地面を巻き上げ、相手の目を眩し、さらには衝撃波も発生させ、触手の群を吹き飛ばす。

「っ……っこんなもの！」

しかし、ジャンヌの剣は、衝撃に耐えて完全に凜を捉えていた。スピードは彼女を殺すに充分。身体能力から考えても、至近距離であるにも関わらず、回避行動を取らなかつた時点で避け切る事はないと確信していた。

だが、それを振り切つた時、ジャンヌは全く手応えを感じなかつた。いや、すでに凜はそこにいなかった。

剣の風圧により土煙は晴れ、視界は良好だが、どこにも彼女の姿は存在しない。

「……後ろ！」

突然、彼女は後ろへ振り向き、剣を横にして防御の構えを取る。そして、火花が一瞬飛び散る。それは二つの剣が交差した証。

つまりは、瞬間的に回り込んだ凜とジャンヌが鏝迫り合いを行なつていた。

「ちっ！直感もないのによく反応できるわね！」

「戦闘中であろうと精密な索敵魔術が可能ですから。」

貴女こそ、私たちの目を掻い潜って認識の外へと移動する方法をやつてのけていますではありませんか。その方法、是非教えてもらいたいものですね。」

「そ、それは……っ！Es ^解last ^放frei！」

彼女の詠唱とともに宝石剣から爆破が起き、その風圧によつて二人は吹っ飛ばされる。

その次の瞬間、下から二人を捕食するかのように触手が爆発を喰らつていた。その触手はもちろん桜のもので、あわよくばどちらとも倒してしようと考えていたようだ。

「あらあら、もう少しだったのに。」

残念そうな顔は微塵にも見えぬ表情で、黒の少女はあざ笑う。

「協力なんて言葉、微塵も感じられないわね……。」

「当然です。姉さんを優先して殺すだけで、機会があればその聖女もまとめて殺るだけなので。」

「否定はしないけど、私はサーヴァントじゃないからセイバーのようにはいかないわよ。」

凜以外の二人は互いに挑発し合うが、依然として目標は凜のまま。どうかにかしななければ、いくら魔法を使おうと彼女が落ちるのは時間の問題だ。

「さて、貴女のそのマジックのネタ、明かさなければ面倒ですね。」

「そんなつもりはさらさら無いわ。」

「そうですね。けれども姉さん、後ろには気をつけた方が良いでしょう。」

その言葉を聞いた時、凜は背後からの殺気に気づく。振り向けば五体の巨人。バーサーカー程の影の巨体が、彼女に襲おうとしていた。「いくらだって相手して……!」

だが、それは囿。しかし、彼女がその正解に至った時にはもう遅かった。

「取った!」

「っ!」

すでに、後ろからジャンヌの剣が襲おうとしている。今から動こうとも無意味。だから、この手を出すしかなかった。

「詠唱代替、術式始動、transition 転 移!」

発動した瞬間、凜の体が消え、結果として斬撃は素振りになる。桜もジャンヌでさえも、彼女がどこへ行ったのかは視認できなかった。あの状態から二人の目が追えないほどのスピードまで加速したとも思えない。魔術程度のもので彼女の体を動かせるわけもない。

ならば、今起こった現象は何か。その答えにジャンヌはある仮定を立てる。

「……魔法、しかも行使する時間はほぼゼロ。どういう理屈であるかは不明ですが、そう考えるのが妥当ですね。」

「痛っ……!」

ジャンヌが自身の考えを口で纏めていると、十数メートルほどのその後方で凜が尻餅をつく。

「どうやら、空中から落ちたようだった。」

「どうやら転移先は無作為にしているようですね。」

「流石に……いたたつ……あれだけ目の前でやればバレるわね。」

凜は強く打った尻をさすりながら立ち上がる。

「おそらく、その魔術石が魔法を使える正体でしょう。寺で使ったアレでしょうね。」

「どれだけ観察力が良いのよ。おかげで余計に狙われるわね。」

困ったように言っているが、彼女としては二人の対象が自身になることは構わなかった。

どちらかと言えば、今まで死の淵から生き残らせた切り札の正体を見破られてしまった事が痛かった。

創太から貰ったもしもの為の魔術石。本来ならば一度きりであるはずのそれは、無限の魔力を運用できる宝石剣からの補給で再使用できるようになっていた。しかも、中身はキヤスターが使っていた転移。おかげで連続は無理であるが、緊急回避には使えるようになっていた。

「本当はそんな単純な事ではないのだが。」

「ジャンヌさん。ならば、あの石を狙うのはどうでしょう？ 貴女が発動を誘導して、私は全体を影で埋め尽くし、転移先がどこであろうと潰します。」

「良い考えですね。では、その通りに。そうそう、言っておきますけど先のように私を狙おうとしても無駄ですよ。サーヴァントと同じように一瞬で融ける事はありませんから。」

「それは、それは。既に持っている情報をわざわざ言ったださるなんて。」

「お褒めを頂きどうも。それだけ口を動かしてらっしゃるのなら、タイミングはいつでも良いという事で……さっさと、終わらせませすよ！」

ジャンヌが一步踏み込む。それだけで、凜が目で追えないほどの加

速をつけて前へと進み、桜はその進路上をカーペットへも変貌させるようにそれ以外を宝具級の攻撃力を持つ影の巨人で覆う。

これで、凜がどこへ逃げようとも死は免れない状況になる。しかし、彼女の目は諦めてはいない。まだ突破口はある、いや作る。

「あの二人が来るまでに、なんとかしなきゃならない。」

確固とした意思で、凜は自ら前へと進む。

勝つためではない。

自身のためでもない。

強いて言うならば目の前の二人の為。

活路がなければ、この手で開く。そうでなければ、死ぬ気で生き返った彼に申し訳が立たない。自身を二人相手に善戦できるほどの力をくれた彼に。

だから、凜は死ぬ気で戦う。ただの時間稼ぎのために。

|| || || ||

俺の周りはおぼろげな世界に変わってしまった。

視界はぼやけ、至近距離で物を見てもはつきりとは見えない。

聴覚もほぼ全ての音が同じように聞こえ、多分だが人の声すらもそうなのだろう。

けれども、一つだけ明細に認識できる。

俺が今進んでいる方向、そこには友人と仲間と敵と、そして愛すべき人がいる。

彼女に助けてもらい、柳洞寺で影から産み落とされるように吐き出された時から、それだけはずっと理解していた。

何故かは知らない。けれども、確信している。

進むべき場所はそのなのだ。

俺の中で何かが蝕む。

—— 殺す、殺す！ 殺す！！

俺の中で何かが叫ぶ。

—— 殺せ、殺せ！ 殺せ！！

心にも思っていない衝動を抑える為、必死でそれを押し殺す。体中を喰い散らかし、更には支配権まで奪おうとするこの世全ての悪を制

御する。

怪我も傷すらもないけれど、内側は影に抵抗しようとして全てを酷使している。死に体寸前ではあるが、まだ活きなければならぬ。そうでもしなければ、あそこには辿り着けない。助けてくれた彼女に報いる事が出来ない。

だから前へと、俺は前へと進む。

この先、龍洞の入り口から真つ直ぐ進んだ最深部。そこで全てが解決する。

だが、門番を倒さなくてはならないらしい。

「ふっ……！」

真後ろ、そこから少し上方からのナイフの奇襲に、俺は所有者へと左手で弾き返す。しかし、的はそれを簡単に避ける。始めから当たるとは思ってもない。

「感覚が鈍くなっておるかと思えば、その逆。さらにはそれを的確に反射させる技量まで持っておるとは。」

「生憎と、殺す対象だけははつきりと認識できるんでな。」

敵の正体はアサシン、しかも小次郎ではなく本来のアサシンであるハサン・サツバーハ。ただ対面するだけなら他のサーヴァントより脅威ではない。

しかし、相手は木の上、身を隠そうと思えばいつでもできる。そうなれば戦いが長引く可能性があるし、こちらの敗北というものも十分に得る。あまり無駄な戦いはできないが、倒さなければ道を通る事は不可能だろう。

「貴様には恨みも何もないが、ここで死んでもらう。」

アサシンの体が横にズレる。

まずい！この木々を使って姿を眩ますつもりか！

ここで時間は食ってられねえのに！

「ライダーー！」

だが、俺の意思が伝わったかのように、飛翔した鎖のついた杭がアサシンを阻害する。残念ながら当たりはしなかったものの、敵の行動は失敗に終わった。

「何故貴様がここに！」

それは俺とて同じだ。彼女がいる事は本来あり得ない。セイバーが宝具を以ってして倒したはずだからだ。

「僕だってそう思ったさ。けど、あのバカでお節介な桜が寄越してきたんだよ！」

そして、聞き覚えのある嫌味な言い方をする奴もう一人。

「まさか……間桐？」

聖杯の器となり、体を酷使されて動けない筈の間桐慎二だった。

まさか、助けに来たのか？

「酷い有様だな、古崖。いつもの態度はどうしたんだ。」

前言撤回、こいつは腐ってるからそんな事しない。

「はあっ……はあっ……うるせえ。お前も似たようなことになってただろ。柳洞寺の時とか、衛宮に負けた時とか。」

苦し紛れながらも反論するが、肩で息をしているせいとか、間桐はどこ吹く風といったように聞き流す。

「……お前、どうしてここに。」

「だから、桜だよ。あいつ、ライダーに伝言を頼んで、逃げてとか言い出して。ムカつくから文句の一つでも言いに行つて、尻拭いしてやろうって訳さ。」

心底気に食わなさそうに、理由を説明する。

「素直ではありませんが、彼は純粋にサクラや貴方達を助けようとして……」

「ら、ライダー！余計な事を言うな！」

……再び前言撤回、ツンデレキモツ。

助けてくれるのはいいが、その属性は要らないと思います。

「とにかくここは僕に任せて、お前はさっさと奥へ行つて全員を連れて帰つてこい！」

いいか？一人でも欠けたら、その顔に前の殴られたお返しをしてやるからな！」

「あれは当然の事をしたまでだ。」

「うるさい！さっさと行つてこい！」

けども、ありがたいことだ。改心……と言うのは微妙だけど、以前と比べても幾分かマシにはなっている。

しかも助けてくれると来た。ならば、信用してここを任せる他は無
い。

「負けるんじゃないぞ。」

「お前こそ、ただで返ってくるなよ。」

互いに目を合わせないまま俺は奥へ、間桐はアサシンと対峙する。力の差が云々はこの際無しだ。間桐は割と頭が良いから、これまでのように暴走しなければ、まず負ける事はない。上手くライダーを扱えるだろう。

そう信じて、俺は暗い洞窟の中を進む。光はないが、先も言った通り方向ぐらいは分かる。そして、その先に何があるかもはつきりと感知できる。

「ツ……ゴハツ……！」

しかし、俺の中にある影は依然として暴れまわり、防衛反応からかそれを吐き出す。体を削りに削っているはずだが、そこに血は一切ない。すでに、血液までも侵食しているのだろうか。

なら、ある意味都合だ。俺の一部になっているのであれば、利用しやすい事この上ない。呪いの影響で体の寿命が縮んでいる事がなければな。

だから、急がなくてはならない。

そう思いながらも、吐き出した影すらも貴重な力とみなし、再びそれを吸収する。

「……二つか。」

やがてある程度進んだ時、この先で近づいてきた魔力の数を数える。

一つは衛宮だ。俺の施した魔術陣も感じ取れるし、おそらくはそうだろう。

そしてもう一つ、魔力の質や量が変わり過ぎているが、これはセイバーだ。英霊であるからか、俺以上に聖杯の泥に侵食されているけれど、本質の部分はそのままのようだから間違いない。

マスターとサーヴァントという信頼し合える相方の関係であった二人だが、今は完全に敵同士の態勢を取っている。どちらが勝つかなどという推測は今ほしめない。結果が如何になろうとも、最低一人は死ぬ。そんな物は納得できない。

考えながら走る事、十数秒。俺は少し開けた場所に到着する。大聖杯はもう少し先だが、ここはここで為すべき事がある。

リミットブレイク
「限界突破」

ある一人が詠唱する。諸刃の刃をその身に宿すそれは使えば最後、剣狂いとなるまで止まる事を知らない。そう意味するかのような覚悟があった。

いや、するかのようなではない。あいつはそうなってしまふ。誰かが止めなければ、突き進んでしまふ。

だから、

「止まれ！」

俺が踏みとどまらせる。

ボロボロの体が出したとは思えないほどの、空間全てを震わせる大声は二人の注意を引き寄せる。

大聖杯に続く道を塞いでいる黒の騎士王は全く表情を変えず、ただ冷たい顔で俺に殺意を向けるだけだが、手前にいるあいつは違う。目を見開かせ、疑うかのようにまじまじと俺の顔を見る。

「お前、創太……っ？」

耳にはつきりと衛宮の声が聞こえる。目は未だ霞んたままだが、耳はそうではないらしい。

「ゲホッ……ああ、真正正銘のな。」

ちよつと顔色が悪いかもしれないけど、そこは我慢してくれ。戦うぐらいはできる。」

「どうやって……っ？」

「まあ、色々とな。」

衛宮の問いに含んだような答えを出す。今は急いでいるからな、許してくれ。

「それよりもだ。」

改めて、今立ち塞がっている脅威を再確認する。聖杯によって反転させられた騎士王。俺たち二人がかりでも難しいかもしれない。しかし、問題はそこではない。

「……どうする?」

「やるしかない。覚悟はもう決めた。」

「そうじゃないって。お前の理想はどうなのかって聞いてんだよ。」

「は……?」

俺の問いに対して哑然とした表情で応える衛宮。

「どうするべきか、じゃない。どうしたいか、だ。」

あいつを倒す事がお前の望みなのか?」

数秒、考えているのか驚いているのか微妙な顔で間を置いた後、衛宮はある一言を俺に伝える。

それは安心と、そして当然という言葉を俺の中で生み出した。俺もそうしたいと願っていたからな。

「そうでなきやな。ならば手始めにその双剣を俺に預けてくれ。」

先程から衛宮が手に持っている干将・莫耶、それを使えばセイバーを倒せると踏み、俺に譲る事を促す。

「できるんだな?」

「できないなら、言わない。けど、いつでも準備しておけよ。」

「ああ、分かった。」

信頼したという証か、衛宮は双剣を回し柄を俺に向け、渡す。

こんな俺に託してくれるんだ。期待には応えねえとな。

「さて、問題は……」

敵に視線を送り、先程までと一切変わらぬ立ち位置で道を塞いでいる事を確認する。今まで攻撃してこなかったというのは、どうやら俺たちを倒すというよりは侵入を許さないだけのようだ。

どちらにせよ打ち負かすべきなのは変わらない。

だが、踏み込む以外に反応しないのであれば、充分な下準備をさせてもらおう。

フォース チェンジ
「性質、変化。」

この一年間、最も多く唱えてきた詠唱。

親から引き継いだ遺産の詠唱。

そして、俺という者が戦う為に基盤となる詠唱でもある。

ここから全てが始まり、今存在する一を別の一に変えてしまう。魔術の基礎であり極み。

衛宮から譲り受けた夫婦剣、その雌雄一対である互いに引き合う性質に少し手を加える。あくまでも、かつて使っていた『ナイト・オブ・オーダー』のように所有権を強引に奪うのではなく、衛宮の物でありながらも俺の魔力によって変化させる。

それとともに、刃の部分が植物のように伸び、すでに元よりも倍になる。

「ぐっ……ゲホッ、ゲホッ！」

だが、荒れ狂う泥により邪魔が入る。

普段なら当然のようにできるが、やはり今は違うか。

身体そのものを支配しようとする泥が、魔術回路までも侵食しようとしている。息は荒く、体の感覚が飲み込まれ、悪感が身にまとう。お陰で今にも誰かを殺したい気分だ。少しでも気を緩めれば隣にいる衛宮を殺しかねない。

——シネ。

けども自身に言い聞かせろ。影だろうと抑えてみせると。

——シネ、シネ！

信頼しろ。俺はそんな物に負けるほど弱くないと。

——シネ、シネ、シネ！シネ!!シネシネシネシネシネシネシネ!!!

……驕ってみせろ。聖杯の泥すらも利用できる者であると。

「すー……ふうー……」

剣の変質が終わった後、一つ深呼吸を置く。

完成した、あいつを倒しうる道を作る剣が。刃は俺の身長と変わらぬものとなり、双剣としては扱いづらくほとんど太刀のような物になっている。しかし、手順自体はもう一つを踏まなければならない。

その為に夫婦剣のうち一つ、莫耶を構える。斬撃ではなく投擲を行

うものだ。

これを投げれば、あいつに勝つまで絶え間無く動き、集中を途切らせる事なく、一瞬の隙も与えてはならない連撃を続けなければならぬ。

以前に一度だけ行つた模擬戦ではない。生死を賭けた紙一重すらも結果を左右させる闘い。一つ一つが意味を持ち、失敗が死に直結する。

そして、今までは相手が出す必殺技を逆手に取りカウンターを決めてきたが、今回はできない。セイバーの宝具のような真つ正面から全てを潰すような物に、搦め手は効かないし、そもそもこんな体では無理だ。

避けようはあるものの、衛宮がそれを対処できない。

不安要素は他にも多くある。万全であつたとしても勝てないのではないか。そもそも、この泥を暴走させずに戦えるのか。挙げればキリがない。

大丈夫だ。俺には信じてくれる友がいる。それに応える。

立ち止まる理由なんかない。今は前に進むだけだ。

「……行くぞ。」

それと同時に戦闘は開始され、莫耶を矢のように一直線に飛翔させ、セイバーを狙う。

しかし、そんな単調な一発ではセイバーの一撃により弾かれる。しかし、それが狙いだ。

「一撃目！」

俺は莫耶の後ろを追い、彼女が剣を振りきつた瞬間を狙って、本来片手で持つ干将を両手で持ち、セイバーの隙を突く。いや、そんなものは彼女にとって隙ですらない。その証拠に、すぐさま切り返しが行われる。

それは予想の範囲内。むしろ、こんな事で驚いてはならない。俺はこれまで何度も英霊と戦ってきた。これで終わるとは思っていない。

だから冷静に、莫耶が弾かれた方向とは反対方向に飛ばされた。

結果、干将・莫耶はセイバーを挟むように展開される。

そして、この変質した夫婦剣の本領を發揮すべく、体制を立て直し手に持った刀を構える。

本来であれば互いに引き合うそれは、未だにセイバーへ再度の攻撃は行っておらず、その場に留まっている。

「二刀は二対、同一であり個体。違いであり同じ。」

詠唱と共に体を再加速させ、セイバーに攻撃する。一步遅れて対になるように、反対側の莫耶も同じ動きをする。

しかし、彼女は俺の攻撃を弾き、さらには一瞬にして背後のそれも弾き返す。手に持たれている干将は飛ばされなかったものの、莫耶は再び宙を舞う。

「刀は共鳴し、互いに高め合う。その極地である剣技、今ここに。」

それでも、俺は何度も斬撃を繋げてセイバーの手を休ませない。彼女にとって、この程度ならばなんて事ないのだろう。その証拠に俺の攻撃の合間を縫い、反撃を行っている。もちろん俺はそれを受け流したり、防御する。

そして、攻撃を五度程防いだ時、突然振り返り背後から迫ってくる莫耶を叩き落とし、それは地面に深く突き刺さる。

やはり、読まれていたか。いや直感によるものか。どちらにせよ、反撃を行わなかったのは莫耶を警戒していたからだろう。

「担い手は一人、斬撃は常に二つ。三連を超えた重き連撃を求めん。」しかし、今度は即座に莫耶はセイバーを襲う。しかもただ飛んできたわけではない。的確に、彼女の隙を作り出すかのように。

それでも幾度となく防がれるが、莫耶が繰り返す攻撃の感覚は短く、そして速く、更には鋭くなる。

俺の斬撃と合わさり、真似し、同調していく。

鏡合わせではなく、セイバーを中心として対照になるような連撃。

「双つの剣は重なり、鍛え上げられし力を倍加する！」

最後まで詠唱が紡がれた時、この双剣が本領を表す。

ただ俺が干将を一度振れば、それと全く同じ事を莫耶も行う。彼女を挟み、弾かれようとも次には二の撃が襲う。

単純に攻撃の数が倍になっただけではない。それぞれ逆の方向な

ので、佐々木小次郎のような同じ方向からの攻撃ではなく、別々からなので、より対処しにくい。

けれども、今は互角。俺自身の身体能力は英霊ほどの力には届かない。事前の強化ができれば良かったのだが、泥のせいで体の感覚が曖昧なためにできなかつた。

その分、泥が俺に殺すという感覚を覚えさせ、目の前の敵をどうすれば殺せるかを教え、力を授ける。

——コロセ。

ああ、相手の攻撃を相殺するさ。

——テキヲコロセ！

ああ、お前の元になる聖杯を殺すさ。

——メノマエノテキヲ……！！

……ああ、うるせえな。

少しは黙りやがれ！

「だあああっ！」

拮抗していた戦いを進める為、俺は体にまとまわりついた影を刀に集め、重い一撃を放つ。

フェイクも何もない単純な攻撃であるはずのそれは、影により大きくそしてさらには疾き斬撃。当たれば影の触手が対象を搦めとるという性質まである。

それを直感で感じ取ったのか、セイバーは今まで全て聖剣で防御していたのに、それは身を翻し、避けようとする。

しかし、まだ後ろからの攻撃が残っている。垂直か水平の斬撃でない限り二つの攻撃は交差する。つまり、俺が持つ干将を避けたからといって反対の莫耶は未だ敵を捉えたままという事だ。

だが、その莫耶は今までと同じ、聖剣で防ぐという方法で対処される。

干将に影を纏わせても、莫耶にはそうしていないから当然だ。

そして、戦いは次の攻防へと移行されるのだが、それは改めてセイバーがどれだけの戦士かを思い知ることになる。

続く俺の攻撃、未だ影を纏い、防御を無意味にするそれをセイバー

は背中を向けたまま避けた。

「っ……い！」

その事実には驚愕しながらも、冷静に攻撃を連続させる。

何故セイバーがそれをできたのか。莫耶と俺が持つ干将は全く同じ動きをしているからだ。

違う動きをさせれば良かったのだが、そうせざるを得なかった。けれども、たればなんていう言葉は戦いにおいて邪魔でしかない。今ある手札で戦うしかないのだから。

幸いにも全ての攻撃を避けているわけではなく、莫耶の方は聖剣で受けている。

しかし、現状どちらも傷は負っていない。いや、そうでなければならぬ。相手は聖杯からの補給で多少の傷は即座に回復するため、一撃で勝負をつけなければならぬ。一方、俺はセイバーの一撃を食らえば、一たまりもない。

お互い別々の理由で一撃で勝負が決まるそれは、変化が出てくる。

「っ……い！」

「はあっ！」

俺の干将を避けるセイバーの動きが、徐々に余裕を失くしているからだ。

同時の防御で直角であるのだから、どちらかでも避ければ動きが大きくなり、押され始めるのは当然か。しかし、ここで押し切っているのだろうか？何か誘われているような……

「……いや、ここで決める！」

迷いを断ち切り、一步踏み込む。

リスクなんて冒して上等。相手が何かをしてくる上で勝ち取らなければ、負けるまでだ。

上段からの一撃。それを繰り返す。セイバーは莫耶からそれを読み取り、体をずらし、そして莫耶による一撃を防ごうとする。それまでと同じ、そう

それがフェイクでなければ。

夫婦剣は互いに軌道を変え、俺の持つ干将はセイバーを狙

い、莫耶は空を斬ることになる。

防御封じの攻撃を再度避けることになるセイバーは、莫耶の動きを頼りに紙一重で避けようとする、全て思惑通りに。

未だ背中を向けたままの彼女に、俺は莫耶だけでは読みきれないある一撃を出す。

「単純なただ真つ直ぐに突き出される拳。

これまで無闇にそれを出さず、今出した理由としては何度も出してしまえば読まれやすいからだ。さらには、そもそも剣をフェイクとして使わなければ、殴る力が入りにくい。つまり、斬撃での攻撃は捨てることになり、避けてくれなければ簡単に止められただけだ。

——取った。

同格の相手ならば、誰しものがこう思うだろう。しかし、セイバーという敵は一流の英雄。ここで終わるはずがない。

「ふっ……い」

直感なのか読みきっていたのか、当然俺の攻撃に脇腹への斬撃を入れてくる。反射では間に合わない充分な間合いに入ってしまった、カウンターを仕掛けられてしまった。

そもそもセイバーの動きにはおかしな所が多くあった。反撃をほぼしてこなかったり、格下であろうとも敵である俺に背中を向けた。全ては俺を最大限までに引き込んで、反応不能のカウンターを入れるためであったのではないだろうか。

「バレバレだ。」

だからこそ、俺はそれを予測していた。

突き出した腕を戻し、膝と肘で剣を挟み込む。いわば、特殊な白刃取り。しかも、体から生み出される触手により聖剣は絡め取られる。それでも表情を変えないセイバーだったが、最大の得物を封じられてしまったのは相当な痛手のはず。

「これで……い」

先はフェイクとして使った干将・莫耶、今度は相手を仕留めるためだけに振り下ろす。

聖剣が使えないセイバーは攻撃という手段はなく、防御か回避の

み。しかし、ここまで至近距離で前後からの同時であれば、どちらも不可能だ。これで、決まる……！

「っ……い！」

はずはなかった。

動かぬ聖剣へと集まる魔力に、俺は身の危険を感じる。何が行われるかは分からない。けれども、その場に留まるのは確実にまずい。

かと言って、馬鹿正直に引いては駄目だ。彼女に余裕を与えてしまえば振り出しに戻る、どころか俺が単に消耗しただけになる。相手は聖杯から一定ではあるが、無限の魔力を補給されている。さらには考える間を与えさせることにもなる。ここでは止まらない。

「盾シールドよー！」

俺はすぐさま触手を、身長ほどの大きさになる盾に変形させ、攻撃に備える。

その次の瞬間、盾越しに体全てへと衝撃が伝わる。セイバーの能力の一つ、魔力放出による攻撃。技術など一切無くただの力押しではあるが、先のように剣が動かない状態でも行使でき、まともに受ければ死は免れない。

しかし、防ぎきった。相手は僅かな隙を見せ、攻撃のチャンスとなる。

「はあっ！」

今まで両手で振るってきた干将を、次は肩腕だけで斬りあげる。もう片方の腕に影を集中させているので、防御無視なんてものはなく威力は多少落ちるが、スピードは何ら変わらずセイバーを倒すには充分だと思っていた。

隙を見せたかと思っていたのにも関わらず、彼女はそれをこれまでと変わらず聖剣で弾く。

的確で最速の判断をしたかと思っていた。しかし、敵にとっては平然と反応できるものでしかなかった。

何をしても、この騎士王には勝てないのか……。

いや、

「まだ……！」

俺の動きに合わせて動く莫耶を斬ろうと、セイバーは振り返り聖剣を切り返そうとするが、

「捕らえよ。」

足に絡みつく影が、そうはさせなかった。俺の腕から触手が伸び、地中を伝い、セイバーの足を捕捉していた。

これで避けるのはほぼ不可能。

セイバーの力であれば無理やり引き抜くことも可能だが、これまでに以上に大きな隙を生むことになる。

しかし、それだけでは無理だ。あと一步、彼女を超える何かがあれば！

「なっ………！」

突如、顔色を変えなかったセイバーがここで驚きの表情を見せる。

俺が魔術を使った。たったそれだけのことで。

今まで影に覆われてから、戦闘中に魔術は使っておらず、最初に剣を変質させた一回のみだ。しかも、その時はかなり苦しげにしていたので、激しい動きの中で魔術を使うなんて事は不可能だと思っていたのだろう。

俺もそうだと思っていた。しかし願い、そして叶ってしまった。

地面から突き出す二本の土柱。それぞれが狙うのはセイバーの霊核。俺自身も予想外の攻撃ではあったが、彼女は体をありえないぐらの角度で体を反らすことにより、土柱を避ける。足が影により固定されているのを利用したからだ。

だが、これでは莫耶の攻撃を防御も回避も不能。しかし、まだ何か足りない。これである騎士王を倒せるとは思わない。先程の事もあるし、実際に彼女はそれを弾こうとしている。

足を止める触手を引きちぎり、莫耶を弾く斬撃を出そうとする。

——掛かった！

それが俺の心境だ。その莫耶は斬撃ではなく、刺突による攻撃をしていた。だから、今のセイバーが繰り出そうとする斬撃では、それに触れる事はない。

俺がそうした。けれども、それもセイバーは反応し、叩き落とそう

とする。まだ足りない。俺一人では無理だ。これ以上の連続した攻撃はできない。だから、莫耶を基点とした転移を行う。しかし、俺ではなく

「衛宮ー」

今まで待たせていた友人だ。

まさかとは思いつ、前に衛宮に施した陣を対象に転移をさせてみれば、他人一人分ならできるようだ。元々衛宮と協力するつもりではないが、この結果は予想外だ。

「っ……い」

衛宮はセイバーの斬撃を紙一重で躲し、突きの一手を出そうとする。

「はあっ！」

「くっ！」

しかし、セイバーの再びの魔力放出により作り出された高密度で形成された魔力の霧により防がれる。

それを破るにはもつと力が……！

「……性質よ……昇華せよ！」

その一言で夫婦剣はより強く引き合う。俺の持つ干将、衛宮の持つ莫耶。互いが共鳴しあい、霧を突き破り、

「だああああっ!!」

セイバーを打ち破る！

干将・莫耶は深く突き刺さり、霊核を完全に捉える。

いや、少しズレた。受ける瞬間に彼女は体をずらしたんだ。敵として本気を出されれば末恐ろしいものだ。

「速く、トドメをー」

仕留めきれなかったからか、焦り出す衛宮。

「待て。お前は言ったんだろ。セイバーも救いたいって。なら、俺の詠唱を復唱しろ。」

「え……っ？」

セイバーの体を起こし、衛宮に向ける。

そしてすぐさま、あの言葉を紡ぐ。

「――告げる。」

「そうか……告げる!」

再契約の詠唱。未だ令呪を持つ衛宮はマスターである。ならば、それを使ってセイバーを救う。

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に。」

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に!」

だが、それはセイバーの契約が切れていることが前提だ。俺はその両方をやるために、彼女の影を吸収する。

「グッ……はあつはあつ……聖杯のよるべに従い……この意……この理に従うのなら……」

徐々にまた大きくなる殺意。影の支配。

それを押し切り、逆に制御下へと置く。

「聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら――」

――オイオイ、そんな頑張らなくても良いんじゃないのか？

……うるせえって……言ってるんだろ!

俺はやることやらなきやならねえんだ!

「――我に従え。ならばこの命運、汝が剣に預けよう。」

「――我に従え!ならばこの命運、汝が剣に預けよう!!」

「セイバーの名に懸け誓いを受ける……」

貴方を我が主として認めよう、シロウ――!」

その時、真の姿を取り戻した騎士王が復活する。覇気はなく、威厳あるものではないが、青のドレスを纏ったセイバーは凜として、カリスマのある王そのものだった。

「……ああ、感謝します。私を敵ではなく、貴方達の味方として、この現世の最後を迎えられるようにしてくれた事を。」

「いや、俺は何もしてない。感謝は創太だけにしてくれ。」

「後味が悪くなるからな。俺としては殺したくなかっただけだ。」

友人の頼みを聞いたからもあるが、そうでなくてもただセイバーを倒す、なんてのはしたくなかった。例え心が擦り切れようとも、そんな判断をしては、ここまできた意味がない。

「うっ……ゲホッゲホッ……!」

「……創太、さっきも思ったが大丈夫か？さっきの戦いで無茶したし、万全じゃないんだ。お前はここで休んで……」

「いや……ゲホツ……最低でもあいつに直接会うまでは休めない。セイバー、立てるか？」

「はい、なんとかか。しかし、貴方は……」

「俺も……立てる。無理したとはいえ、まだ倒れるわけにはいかないんだ。」

再び立ち上がり、俺は奥へと進む。

セイバーはもうすでに自身の力で立ち上げられるようだから、大丈夫だろう。

泥が体を蝕む部分が先程までよりも一段と大きくなる、意識が朦朧としてきて、何がなんだかもわからなくなる。

しかし、ふらふらと臍げで、風が吹けば倒れそうな足取りだという事は分かる。

それでも、進まなければならぬ。

あいつに……会うために……。

True end 後編 戦争終結

体中を伝う痛覚、しかしそれはすでに影へと侵食されていた。頭や腕やら足やらが痛みしか感じていなかったはずなのに、今は感覚すらも認識できない。

だというのに、脳に響く声は未だ大きくなり続ける。シネ、シネと。暗闇の中をただ進み続ける。

——体が異形に変わる。

体力が底を突こうと。

——心が人ではなくなる。

影に支配されてはならない。

——思考がただ殺意しかなくなる。

俺は……変わっては……俺は……一体誰だ？

「っ……っ！」

ただ真っ直ぐ、洞窟の最深部まで走り続けていた俺は、ついに目的の場所まで到着した。後ろからは衛宮とセイバーもついてきている。

同時に、聖杯の泥によって侵されかけていた意識が目の前の光景によって戻される。

それは聖杯の姿、ではない。もうアレが何であろうと、もうどうだっていい。けれども、彼女があんな姿になってしまったのは衝撃的だった。

あいつが人を殺そうとする姿なんて……。

「だああっ！」

「うおおっ！」

衛宮と俺、二人の声が合わさり、同じ場所へと駆ける。

ある人物、遠坂を助けるために。そしてもう一人、それぞれが救うために。

衛宮は干将・莫耶を使い間桐桜を、俺は素手だけで彼女を、遠坂にトドメを刺そうとしているのを止める。

「っ……っ！」

動揺する彼女ら二人。

今まで慕っていた先輩と、絶対にここにいないはずの人。驚くのも無理はない。

「……全く、二人とも遅いじゃない。」

遠坂はそれを尻目に、呆れたと言った感じで立ち上がる。間に割って入らなきや今頃どうなってたかっていうのに。

「二人……？って事は……」

衛宮は、遠坂が俺も来ることを分かっていたことに気がつく。

「ええ、私には事前にこれで連絡を取ってたの。」

彼女が手に持つそれは、以前に渡した魔術石だった。

「これを媒介に創太と念話で話して、更にはある一工夫を教えるもらったの。」

ある一工夫、それは宝石剣ゼルレッチを使った無限の魔力をそのまま石に補給するものだ。それにより、最後に使った転移の魔術を無限に使える。

「まあ説明は後だ。……衛宮、そっちは頼んだ。」

「ああ、わかった。」

俺たち二人は互いに攻撃を止めた相手、衛宮は間桐桜を、俺は彼女に振り向く。

「そう……た……。」

「すまん、遠坂には俺の事を黙っておいてくれて頼んだんだ。直接会わないと信じてもらえないって思ってた。」

一歩、近づく。

身なりや風貌、性格まで変わり果てた彼女。けれども、俺には分かる。その根源は全く変わっていない。

「……て……」

目を逸らしながら小声で何か言っているようだが、俺には関係ない。その言葉がどんなものであるかと伝えなきやならない事がある。「何があったのか、お前がどう変わってしまったのか。俺という存在がお前にとってどういうものか。それは分からない。」

また、一歩進む。

彼女は誰かのために血に塗れた道を自ら進もうとしている。自身

の心情も理由にあるだろう。けれども、その心情すらも他人が関わっている。

「……めて……さい……」

拒むように、拒まなければならぬように、俺が近づく事を否定する。

「けど、俺はお前を特別だと思っている。ここまで育ててくれた母親代わりなんかじゃない。」

彼女との距離を詰め、いよいよ目の前に立つ。

不安、恐怖、そして悲哀。それを胸に押し殺し、ただ憤怒と憎悪に身を任せた彼女を許せるか、なんてのは問題外だ。

「一人の……女性として……」

だから、もしお前が許してくれるなら……」

手を前に出し、握手を求め、そして、

「やめて……」

無理をしながら、それでも心の底からの笑顔を作ってみせ、

「またいつも通りの生活に戻ろう。」

「ジアナ。」

彼女の名を呼ぶ。

目の前にいる黒の聖女は頬に熱い何かを流しながら、震えるような声で、それでも迷いなく、俺の差し伸べた手を握……らず、俺の背中に手を回し、抱きしめ、

「はい……」

ジアナ・ドラナリクに姿を変えた。

これで俺は彼女を救えたのだろうか。いや、これからのだろう。あんな擦り切れた彼女を見るのは散々だ。

だから、同じ結末を迎えてはならない。絶望の道へと歩かぬよう、この手で切り開く。

「そつちも終わったんだな。」

そう考えていれば、間桐桜を抱えた衛宮が声をかける。腕の中の彼

女はもう黒化した姿ではなく、いつもの衛宮の後輩に戻っていた。「いや終わったというか、ここから始めなければならぬというか……」

「何を言っているんですか、ソウタ。終わりでも、始まりでもありません。元あった事を続けていってください。」

「少しだけ変えて。」

「ああ……ああ、そうだな。続くんだな。」

「続くという言葉を噛み締めながら、俺は彼女の言った事を繰り返す。」

「だったら、あれは終わりにしないとな。」

「そう言った瞬間に全員の視線が大聖杯に集まる。」

「ついには誰も守る者がいなくなつたそれは、この世とは思えない音で吼える。」

「終わりたくはない。」

「まだ、破壊されたくはない。」

「皮肉な事に、願いを叶える聖杯は誰かに縋り付くように懇願する。」

「……っ！あそこ、誰かいる！」

「しかし、それが叶ってしまったのか遠坂が指差す場所、洞窟まで伸びる聖杯の根元に二つの影が見える。」

「見覚えのある影。」

「よもやここまで聖杯は酷使させるつもりか。」

「フン、あの魔術師を叩き潰せるのなら、我はなんでも構わん。」

「言峰綺礼とギルガメッシュ、かつて目の前を立ち塞がった敵がまたもや、倒さなければならぬ相手となる。」

「これが、最後の戦闘となる。」

「……ジアナ、ここで待っていてくれ。」

「遠坂、桜を頼む。」

「現状でまともに戦える二人、俺と衛宮が前に出る。」

「待ってください！貴方達が戦うよりも私が……っ！」

「戦闘に加わろうとしたセイバーだったが、先の傷が治っていないのか、膝をついてしまう。」

「セイバー、今は彼らに任せる他ありません。魔力なき今、私達ができる事はありません。」

ジアナも戦いたい気持ちもあるのだろうが、ここは堪えてセイバーを説得する。そのセイバーも理解したのかそれ以上は何も言っていない。

「私も任せるわ。これ以上はちよつとね。」

「ああ、しばらくそこで待つとけ。」

飄々とした感じで遠坂は軽く言うが、体がぼろぼろでこれ以上無茶はできないものだ。心配させまいと思っっているのだろうか。いや、ただの強がりか。

「衛宮、言峰を頼む。俺はギルガメツシユをなんとかかしてみろ。」

「あまり無茶するなよ。お前だつてその体なんだ。」

「分かつてる。」

大まかに作戦を決めた後、二人は詠唱を始める。最も使い慣れたそれぞれが身に覚えさせた魔術を。

「……トレイス投影、オン開始」

「——フォーリス性質、チェンジ変化」

衛宮は夫婦剣を手に握り、俺は自身を蝕む影を動かす。

たしかにこれは『シネ』俺にとっては害悪かもしれな『シネ』い。

感覚を『コロセ』鈍らせ、何もかもを抹殺『コロセ』対象とさせる

『コロセ』のかもしれない。

俺を喰らい、生き地獄『死』を味あわせ、殺戮『死死』者と化す呪い『死死死死』かもしれない。

『死死死死死死』

けど、俺は全てを変えられる。この変革する魔術によって、死を別の活路として創り変える………！

「行くぞ!!衛宮!」

「ああ、任せたぞ!」

「覚悟はどうに決まっておるようだな!」

安心しろ、此度は慢心などせん!最初から全身全霊を以つて、貴様らを潰してやろう!」

衛宮と言峰が同時に走り出し、戦いの幕が切って落とされる。

「はあっ！」

「ふっ……！」

洞窟の真ん中、そこで二人は剣と拳をぶつけ合う。

一撃、二撃、三撃と。戦術は言峰の方が上なのか、衛宮は押され気味だ。

そして、

ゲート・オブ・バビロン
「王の財宝！」

英雄王の背後から無数の門が開かれていく。慢心を捨てたのは本当らしく、瞬く間に洞窟を埋め尽くすほどの黄金が出来上がった。

ここから無限の宝具が出てくればどうなるかなど、もう語る必要もない。

「ゆけ……！」

だから、門から宝具が出てくる前にそれを全て奪う。

影を伸ばし、無数にある門の一つに突っ込む。何百もの宝具、手応えだけでざつとそれぐらいの数が分かる。ならば、底はどれほどあるのか。

俺はそれを影へと取り込む。魔力という名の餌を食うように。

「ほう、妙案だが貴様自身はどうするか？」

その言葉の後に指を鳴らし、今度は俺の周りに門を展開してくる……！

開ける場所はいいつの背後だけじゃないのか！このままでは動けない的になるだけ……！

けど、

コントロール
「瞬間切除、オートロック遠隔操作！」

影を切り離し、その場から即座に脱出する。影は門の中へ消えていき、俺の体とは分離され、

だが、次の瞬間、

「っ……！」

ギルガメッシュの背後にある門から影が翔ぶ。しかし、狙いは俺ではなく、門の所有者であるはずのギルガメッシュ。

だが、それは別の門から出てきた巨大な盾にも見える斧により、切り落とされる。

「^{オレ}私の宝庫を迂闊に出させんようにするつもりか……！」

敵の予測、それは俺の作戦通りだった。

俺は影をただ切り離れたわけではなく、遠隔操作により門の中から攻撃を仕掛けた。それを警戒して全ての門を閉じれば、御自慢の財宝は使えなくなる。

あとは、戦士としての力を持たないあいつに近距離戦に持ち込むだけだ。

「瞬加速！」
フラッシュ

体にまだ残っている影を脚に集中させバネのように収縮、そして解放させることにより、体を最速まで飛ばし、敵との距離を詰める。

「そこまでして取り返したいか？ならば、くれてやろう。」

俺の頭上、そこに殺気を感じた。顔を上げれば黄金の門から、俺が切り離れた影が鎖に拘束され、隕石の如く襲おうとしていた……！

「っ……！」

間一髪で後ろに飛び退いてそれを避ける。しかし、まだ油断はできない。何故なら、

「不用意に跳んだな！」

背後からも門が開かれ、そこから俺の心臓を串刺しにしようと『ゲイボルク』が跳んだ軌道上に設置されている！

しかし、俺は何もしなかった。何をしても無駄で、何もできないと悟ったように。全てを諦めて、その先に待つ結果を受け止めるかのよう。

「グッ……ガハッ……！」

そして、その結果が実現された。人間の構造上、なくてはならない臓器の一つ、心臓が朱槍によって潰された。

血が、どこまでも黒く、深い血が俺の口から吐き出される。もう、俺の体は人ですらないということか……。

「……ほう、どうやら文字通り、真の死に体という事か。」

貴様、なかなか興味深い体になりおったな。」

「チツ……バレてたか。」

だが、ギルガメツシュの言う通り、俺は既に死んでいる身。心臓を潰されようとも、活動は続く。影は俺を動かそうとする。苦しみを与え続けながら。

「しかし頭はどうなるか、試してみんとな？」

「そこまで気づいていたか。けどな、」

体を突き刺す魔槍を一層深く、体にねじ込む。いや、その根元、門へと近づいていく。

「つ……貴様！」

「喋りが過ぎるんだよ！」

それを見たギルガメツシュは門を閉じようとするが、もう遅い。

その淵に手と足を掛け強制的に固定させ、体を入れる。

次に眼前に広がる光景、それは目が痛くなるほどの黄金だった。周りはそれに埋め尽くされ、下を見れば限りない宝具が浮かんでいた。

しかし、それに見惚れている時間はない。速く次の行動へと移さねば……

「……！」

突然、目の前に出口が開かれる。衛宮と言峰の戦っている姿が上から見えるのでどうやら洞窟の天井のようだが、問題はそこじゃない。

多数の宝具によってできた地面を埋め尽くすかのような剣山が、俺を狙っている……！

「チツ……ここ開ける！」

だが、その手前でドアを開けるかのように両腕を動かす。

いや、実際にそうした。別の出口を強制的に開け、無理矢理違う場所へと繋げる。

そこはギルガメツシュの真後ろ。完全な死角で、しかも移動時間は実質ゼロ。ここから、一撃を食らわせられれば……！

だが、全てを観ることのできるその英雄王の瞳は俺を見ていた。

「その程度で^{オレ}私の裏をかいたとでも？」

ああ、分かっていたさ。こんな程度でお前を倒すことはできない。むしろ、どんな最弱英雄だって無理だ。

だから、全方位から俺を蜂の巣にしようとする宝具が飛んで来ようとも驚きはしない。その対策だって考えてある……！

「……始動！」
リリース

呪文とともにある物を動かす。それは今まで鎖に捕らえられていた影。そのままでは動くこともままならない状態から、液体に姿を変えて鎖の合間から脱出し、瞬時にその鎖を使つて衛宮と戦っている言峰の体を縛らせ、

「ぬっ……！」

ギルガメツシユへと投げる！

「くっ！」

だが、それが当たることはなかった。しかし、俺の周りにある門は閉ざされ、危機は回避された。

それと同時に俺は聖杯とギルガメツシユを遠ざけるように、一瞬にして下がる。

「赤原を行け、緋の猟犬！」

さらには、衛宮が投影した宝具が、黒塗りの弓から放たれた緋の矢が言峰へと翔んでいく。

獲物に当たるまで走り続けるそれは、俺も体を持つて実感している。縛られている言峰は自身で動く事は不可能だ。だから、

「っ……！」

抵抗できずに、助けられることもなく、頭を撃ち抜かれた。

「薄情だな。」

「戯け、あれとは利害が一致していただだけの事。助ける義理などないわ。」

それよりもだ、慢心を捨てると言ったな。あれは虚偽ではないぞ？
こちらは一人、そつちは二人、ならばこれを出さねば私の勝機はないと判断できよう。」

俺たちを認めたかのように、悟ったかのようにギルガメツシユは今までからは想像もつかないような言葉を口にする。

そして、ここにいる誰もが戦慄する。門から出そうとするそれは乖

離剣エアだと。

「させるか！」

衛宮が黒塗りの弓で何本という矢でそれを止めようとするが、全て敵が展開する盾の宝具により防がれる。

そしてついに、あの剣とも石柱とも言い難いギルガメッシュの宝具が引き抜かれる。

「これで、貴様らの最後だ！」

片腕を大きく引き、世界を切り裂く嵐が形成されようとしていく。躲す事は可能だが、後ろにいる奴らが危ない。なら、迎え撃つしかない。

「創太、あれを作る。手を貸して……」

「駄目だ。」

あれとは、ツギハギだらけの投影された乖離剣だ。あの時のように力を吸収しようと考えているのだろうか、

「あんな物で、目の前にある災厄を受け止めようたって無理だ。前よりも遥かに力が強大すぎる。」

あれを超える力なんて一体何があるってんだ。

受け止める？ いや、駄目だ。防戦一方になれば、相手を倒せないし、押し切られる。あいつには聖杯による無限の供給があるのだから。

どうすれば……？

「セイバー！」

あいつに勝つために思考を巡らせている間、衛宮は別の行動を取る。

「は、はい！」

「その剣を俺に預からせてくれ！」

それは何を考えているのか分からない、突拍子もない行動だった。疑問は三つある。その一つがそもそも聖剣を扱えるか、だ。

使い手を選ぶというのもそうであるし、その力を扱えるかどうかも怪しい。

更には、セイバーが衛宮の言う通りにしてくれるのだろうか。

過去の誓いがあるとは言え、それはセイバー自身を剣と比喻したも

のだ。本当に聖剣を預けるかどうかは別だ。

「……分かりました。今一度、改めて貴方に剣を預けましょう。」
しかし、二つ目の疑問は解消される。

聖剣の柄を衛宮に向けたセイバーは、再びあの夜のように誓った。

「ありがとう、セイバー。」

札を述べながらその聖剣を手に取ろうとするが、問題はここからだ。

それは選定の剣ではないとは言え、聖剣だ。持ち主に相応しくないと判断されれば拒否されるのみ。

「っ……っ！」

その証拠に触れようとした瞬間、弾かれる。

「——頼む、聖剣よ。」

けれども、衛宮は諦めない。

「たった、たった一振りだけで良い。その身を俺に扱わせてくれ。

自分の為じゃない。あいつを倒す為じゃない。

世界を救う為に、ここにいる人を守る為に。」

信念を伝えた後、再び衛宮は聖剣に触れようとする。

彼の正義を認めたのか、それは拒もうとはせず、身を任せるように衛宮の手に収まる。

こいつはやってのけやがった。俺やジアナが何度かやっていた持ち主の魔力を真似て騙すなどという方法ではない。聖剣と向き合い、そして認めさせた。

それは体の中にアレが埋め込まれているからなのだろうか。

あるいは、衛宮自身の力なのだろうか。

「創太！」

いや、それよりもギルガメッシュだ。もうすぐ宝具が解放されようとしている！

「どうするつもりだ？あまり時間はないぞ！」

「この剣に俺の心象世界を投影する。」

「はあ……！」

そりゃ一体どう言う事だ!?

「聖剣を基盤に心象世界を剣として展開させる。そのサポートを頼む！」

言っている意味が理解できそうのでできない。しかし、もう時間はない。ならば、

「できる限りの事をしてやる。お前はそれに集中しろ！」

「ああ！」

やるだけやってみるしかない。友人を信頼するしかない。

衛宮は仁王立ちとなり、剣を両手で持つて顔の前で構える。それから、天に突き刺すように聖剣をゆつくりと持ち上げる。

まるで、セイバーの影を写すかのよう。

「投影、開始。」

そして、その聖剣に魔力が集まる。今までの魔力とは全く違う。光ではなく剣に特化した魔力。

ここで初めて理解した。衛宮のやろうとしている事が。ならば、俺はこうするしかない。

「方陣展開！魔力全開放！」

魔法陣を作り出し、衛宮の体を作り上げる。

こいつの中にある陣と共鳴させ、共に剣を現界させる！
「どう足掻こうとも、これには勝てん！」

光栄に思え！全てを出し尽くした我と戦った事を！

我も貴様らを一流の戦士として、認めてやろうではないか！
まっず……！完全に溜め切りやがった！

膨大な魔力が世界どころか、万物を斬り裂こうと暴れてやがる！

「天地乖離す……！」

こっちはまだ準備できてないのに、真名解放してなんてされたら間に合わない！

「ソウター！」

「ジアナ……!?!」

だが、俺たちを守ろうとしてか彼女が前に出る。

「主の御業をここに！」

我が旗よ、我が同胞を守りたまえ……！」

それは以前にも見た彼女の宝具。旗を掲げることにより、全ての攻撃を旗に集中させることができる。

「……！」

「クツ……！」

もう彼女にはそれを使う魔力が残されていない。

戦いの中で魔力を消費してしまっているのに、無茶しやがって！

「魔力、譲受！」

「え……？」

ならば、俺が補充する！

体にまとわりつく影を純粋な魔力に変換し、彼女に渡す！

「行けーシアナー！」

俺の鼓舞を受け取った彼女は自身に満ちた笑みで頷き、再び前を向く。

「開闢の剣！」

ギルガメツシュの宝具が開放されると同時に

「我が神はここにありて！」

俺たちの前に旗を中心とした盾が展開され、災厄を受け止める！

「っ……！」

だがそれでも、英霊としての力が足りないのか徐々に押し続けられている……！このままでは、衛宮の投影が終わる前にやられる！

しかし、ここで俺の中に新たな策が生まれる。

「セイバー、前に出ろ！」

そして、即座にそれを実行しようと騎士王を呼ぶ。

「何を……！」

「いいから！」

衛宮、集中を切らすなよ！」

「わかってる！」

有無を言わずに俺は衛宮の中にあるアレを確認した後、ゆっくりと取り出す。剣を傷つけないための鞘、衛宮切嗣が衛宮士郎を救った際に埋め込んだ鞘、理想郷の名を冠したアレを。

「まさか、それは……！」

「受け取れ！」

完全に姿を現したそれは、元々は彼女の所有物。であれば、自ずと何をするべきかを分かってくれるはずだ。

「頼むぞー！」

「はい！」

セイバーはそれを受け取った後ジアナに駆けつけ、そして真名解放を行う！

「アァ全て遠き理想郷！」

黄金の輝きを持つ鞘が盾となり、セイバーではなくジアナの旗を災厄から守る。どんな攻撃であろうと、八次元からの干渉であろうとも鞘が対象としたものに傷一つつけることはない。

しかし、一人限定ではあるのだが、それが全て攻撃を集約させる旗に展開すれば、みなを守る無敵の盾となりうる！

「創太、完成した！いつでも行ける！」

それが十数秒の均衡を保ちながらも衝撃で周りの岩肌を削り、外まで貫通しそうになった時、衛宮の世界を収束させた剣が完成される。

人が、魔が、神が作り出した剣を一つに纏めたそれは様々な力を持ち合わせながらも、一端に極められたものであった。

けれど、ここでセイバーとジアナにあの盾を解除させてしまえば、彼女ら二人が災厄の餌食となる。一瞬でも抑えられれば、脱出する猶予はできる。

けど、俺は衛宮の剣の維持とジアナの魔力補給で動くことは無理だ。他の三人もどうこうできない。なら、

「二人とも、タイミング合わせてよね！」

それ以外の遠坂がやるしかない！

「E s t l a s t f r e i解放！」

寶石剣ゼルレッチを振り下ろし、並行世界から遠坂の持てる最大許容量を使い、魔力の斬撃を繰り出す。大きく、そして鋭いそれはギルガメッシュの宝具を一瞬、押し戻す。

と同時に、衛宮の前に立っていた人は全て射線を開けるように後ろへ退く。

「やれ！衛宮！！」

「うおおおおお！！」

衛宮の前に敵しかいなくなった時、その聖剣は肥大化し、眩いばかりの光を爆発させようと、全てを斬らんとする意志を見せる。

そして、真名解放をしようと衛宮が口を開こうとした時、天井の岩が崩れ、何かの光が差し込む。

その光は神秘的で、まるで聖剣をさらに大きく、強く、美しくしているかのよう。

本当は真名解放の所為なのだろうが、誰もがそう思わざるを得なかった。

だからか、それはこう呼ばれる。

「月夜に照らされし極致の剣！！！」

ギルガメッシュの宝具よりは小さく、しかし魔力の密度を極限まで高められた聖剣は振り下ろされ、災厄を押し潰すというよりは斬るように放たれる。

「何?！」

触れる物を真っ二つにしながら、ギルガメッシュへとそれは進む。

剣という性質を最大限にまで顕著した光は、魔であろうと、竜であろうと、神であろうと、はたまた剣であろうと斬る。剣という物は元来そういうものである。

だから、聖剣は災厄を斬る。どんな物であろうとも。

「はああああああ！！！」

衛宮が魔力を全て聖剣に注ぎ込んだ時、光は一瞬にして聖杯の横を抉り、そして洞窟の壁までも斬る。

ギルガメッシュが居た場所にはもう光が通り過ぎた後であった。

誰しもが勝負はついたと思うなか、俺はほつりと眩く。

「……やっぱいな。」

一点に、ただ一点に、真の意味での全力を変換させる。
それでようやく英霊に勝てる物が生まれる。

他で負けてもいい。

その代わり敵より優れた部分を使い、全てを出し切り

勝利を掴みとる………！

「だあああああああ
!!!!!!」

右腕を振り切り、拳大の魔力弾が飛ぶ。

俺の全てを注ぎ込んだ魔力弾。

小さく、とても小さく。

しかし、心臓を貫けば死に至らしめるほどの大きさ。

それがもうすでに、

ギルガメツシュの胸に穴を開けていた。

宝具の壁を貫通し、標的へ瞬時に翔び、敵を貫き、俺に勝利をもたらした。

ギルガメツシュは抵抗なく地面に落ち、宝具の壁も光となり消えていく。

「……終わったか。」

戦闘の終了と共に前へと進む。この戦争の根源である聖杯をぶつ壊すために。

「待て。」

俺が仰向けになったギルガメツシュを横切ろうとした時、彼は声をかける。

「まだ猶予はあろう。お前に労いの言葉をくれてやろう。」

どこまでも見下したような言い方だ。しかし、俺は何故か歩を止めていた。

「……お前、本当は慢心してたんじゃないのか？」

「戯け。本気で戦っていたわ。お前の行動も全て読んでいた。」

だが、アレを超えてくるとは予想外であった。お前達が受け継いできた魔術、それが勝因よ。」

傲慢の塊だと思っていた英雄王、そいつが誰かを認めるとはそれだけで驚きだ。

「俺一人の力じゃない。」

「だが、満身創痍の体で私の体に届いた。万全の状態であれば、言うまでもあるまい。」

光栄に思え。お前は我が認めた魔術師……いや違うな。根源を指さぬ者にこれは相応しくない。……ならばこう呼ぼう。

『魔導者』よ！我から授けた名を光栄に受け取るが良い！」

最後まで傲慢を貫き通したギルガメッシュは遂には魔力となり、霧散していく。

「……あれをコワす。」

何を聞いていたんだ、俺は？

何を立ち止まっていたんだ、俺は？

確か誰かに話しかけられたような……段々と……全てが……混ぜ……

「コロス。」

……聖杯よ。憎い聖杯よ。今ここで貴様を殺す。

「——！！」

そう耳がつんぎくような声で叫ぶな。どうせ、お前は死ぬ。お前自身の手力によつてな。

俺にはもう力はこのこされてない。だから、聖杯に左手をかざし、魔力を吸収する。

「これで、本当に最後だ……！！」

そして、即座に右手で魔力を爆発させ、聖杯を破壊する！

「うおおおおおっ!!」

轟音、そして光が全てを包む。伝説を再現するかのような、けれども後世に残ることはない、光が。何秒も何十秒も。はたまた何分か何時間か何日か、永遠か。もう全てがあやふやだ。けども、これだけは確実だ。

聖杯は破壊された。

戦争が終結され、誰かが殺される事はない。もう、悲しい思いをす
る事はなくなる。

「あがつ……！グホツ……！ゲホツゲホツ!!」

ああ、けれども……体がもたない……あまりにも……ボロボロすぎる……もう死んでいる……から……当たり……前……

いしきが……おれは……そうか……

なぜ……なぜなんだ？

おれは死ぬと……おもっていた。だが、いしきはまだある。いや、意識が引き戻されていく。俺の体にはつきりとした感覚が戻る。

その感覚を頼りに、未だ生きている理由を探そうとすると、俺の唇に柔らかい何かがあった。

正体を知るために、閉じていた瞼を開き、目視すれば、

そこにはジアナが、愛する人がいた。

状況が掴めない、というか混乱寸前だ。ええと、さつきまで俺は何

をしていたんだ？いや、何でこうなった？

色々な考えを脳に巡らしていると、今度は体が前に持つていかれる。

そこにはジアナの体があるはずなのに、それを擦り抜けるかのよう

に。
——いや、擦り抜けているんだ。俺の魂が彼女の体へと移動し、そして憑依していく。

気づけば俺は、俺の体の前にいた。聖杯の呪いによって崩れていく俺の体が。あと少し遅ければこの体と一緒に俺も死んでいたかもしれない。

けれども、俺を救ってくれたであろう彼女がどこにもいない。この体に残っているわけでもない。

……ならばと思い、後ろを振り返れば

「……あ。」

聖女の身が消えかかっていた。

「すみません。貴方を救うにはこれしかありませんでした。」

申し訳なさそうに言わないでくれ。これは俺が招いた失敗だ。

だから、死ぬのは俺でいいはずなのに。

「貴方と貴方の両親には感謝しています。第二の人生を送らせてもらって。」

感謝するのはこっちだ。だから、だから……！

「そんなに悲しい顔をしないでください。こつちまで、悲しくなるじゃないですか。」

そんなに優しい笑顔をしないでくれ。余計に涙が出てくる……！

「大丈夫です。私がいなくても貴方は強く生きるでしょう。」

大丈夫なんかじゃない……お前がいなけりや、俺は……俺は……！

「……ですが、私と会いたいのであればこれを、この旗を掲げれば、私はそれに応えましょう。」

そんな、そんなの……

「……しようがないですね。では、無信仰である貴方に一言だけ。」

True end epilogue 正義の味方
と

朝の日差しが窓から差し込み、俺のまぶたをくすぐらせる。

眠気を残しながらも目を開けて、鳥のさえずり以外は聞こえない家の中で起床する。時間は……いつもより三十分早いかな。

かつて、毎日挨拶を交わしていた彼女はおらず、家に住むのは俺のみだ。

「……朝飯作るか。」

まずは空腹を満たすために朝食を作ってしまうか。

そう思い、ベッドから出て二階の自室から一階へと降り、キッチンへ向かう。

「確か、昨日買ったのが……」

食パンをトーストに入れながら、冷蔵庫にあるソーセージと卵を取り出し、卵はスクランブルエッグに、ソーセージは普通に焼くためにフライパンに火をかける。

「ええと、今日は何があつたっけなー。」

朝食を作りながらも今日の予定を思い出し、そして完成したらそれを食べながら、新聞とテレビのニュースを見る。

後は学校の用意をして出かける。

それがここ最近の俺の日常であった。

「ううー、今日は一段と寒いなー。」

学生服に着替え外に出れば、冷たい風が俺を襲う。

夏が終わり、空気が澄んで冷たくなる秋。葉が色づき、紅葉の季節真っ最中の現在。

——しかし、真っ先に思い出すのはいつもあの聖杯戦争のことばかりだ。

あの戦争が終わった後、事後処理は教会から派遣された人と、叔父からの使いがほとんど全て行った。何故、叔父は戦争後に動き出して戦争中は動かなかつたかというと、あまり派手に動けば自ずとあの封印

指定能力がバレてしまうからだ。

学校で起きた昏睡事件による死亡者はおらず、皆揃って生きている。とりわけ藤村大河という教師は誰よりも早く復活していた。

もちろん休校はあり、戦争終結の一週間ぐらいまでが期間だった。その後からは段々と以前のようないままでの期間だった。

しかし、俺にとっては少しだけ差異があった。その一つが、

「あらおはよう、ソウタ。」

何故かイリヤスフィールが冬木市に居座っている点だ。

「おはよう、イリヤ。……ってことは衛宮はもう学校へ行ったのか。」
「ええ、一足遅かったわね。」

彼女は戦争後に衛宮の家に住むと言い出し、藤村先生が大暴れ。なんだかんだで藤村組に移り住んでいた。その後は朝夕を虎と一緒に衛宮の家に突撃している。主に飯のために。そして、今は虎と一緒にいないという事はもう虎は学校へ行き、すでに彼女は朝食を済ませた帰りのようだ。

城に置いていかれたメイドはどう思っている事やら。

因みに言っていなかったが、俺の通学路の近くに衛宮の家があるので今日のように早起きをしてしまった時は一緒に登校している。

「ま、しゃあないか。今から走って追いつくのもアレだし。どうせ遠坂がいるから邪魔しないでおう。」

「私としては邪魔してほしいけどね。」

「うっせえ。」

俺は人の恋路を邪魔したくはねえんだよ。

「……。」

「お、おい。どうしたんだ?」

突然まじまじと顔を眺めてくる彼女。それに対し、俺は困惑するしかない。

「別に。」

「別について……まあいいか。」

「お前は帰るんだろ?俺はこのまま、あいつの家に行って朝稽古をやる。」

「彼女と？うーん……仕方ないなあ。私も一緒に行つてあげるわ。」
「仕方ないつて、頼んだ覚えはないし、お前そもそもあいつと喧嘩する
だろ。」

「良いじゃない。私がしたいつて言うんだから、ソウタは気にしなく
ても。」

「あのなあ……あんまり邪魔するなよ。」

観念したように、イリヤの説得を諦める。

これ以上時間をかけても無駄だと判断したからだ。それに、朝稽古
する時間もなくなるし。

「それじゃ行くか。」

「ええ。」

イリヤを横に歩き始めること数分、衛宮がどうだったとか、虎と雷
画さんがどうだったとか。色々なことを彼女と喋っていると、衛宮邸
に着く。

「ええと、あいつのいる場所は決まって……」

門を抜けた俺たちは玄関には向かわず、横を通り抜けて道場へと向
かう。彼女の居場所は大体あそこしかないからだ。

「おはよう、セイバー。」

「おはようございます、創太と……また来ましたか、イリヤスフィー
ル。」

「ええ、また来たわよ。」

道場のドアを開け、セイバーが真ん中で正座をしている事を確認し
て挨拶をする。と同時に、彼女も挨拶を返し、近寄りながらイリヤを
視認した瞬間、予想通り険悪になる。

「貴女、藤村組に帰ったのでは？」

「ソウタがいたから、一緒に来たのよ。」

「俺は一応、断つただけだな。」

イリヤがいると知った瞬間不機嫌になるセイバーだったが、仕方な
しと言った感じで、話を進める。

「それで、創太は何の用です？」

「稽古に付き合ってもらおうと思つてな。最近やってなかつただろ

？」

藤村先生でも十分ではあるが、真の全力を出せるという意味でもセイバーほどの相手というのは他にいない為、稽古は度々彼女に頼んでいる。

「はい、ならば早速やりましょう。あまり時間はないのでしよう？」

「ああ。と言っても、そもそも全力を出せる時間があまりないけどな。」

「なら私は横で見ているわ。」

イリヤは道場の端にちょこんと座り、俺とセイバーは竹刀を構えて、道場の真ん中で向かい合う。

そこから十分後、完敗した。

「はあっ……はあっ……。」

「やっぱ、セイバーは強いな。」

「いえ、貴方も良い読みでした。剣という縛りがなければ、互角となっていたでしょう。」

「たられば、なんていらぬ。負けは負けだ。」

確かに俺は剣を扱うことに慣れていないが、それでも言い訳はしたくない。けど、こうやって戦っていると潔い気持ちにはなる。なんとというか、スツキリした感じだ。

「なんであの時は互角以上の戦いができたんだろうな？」

「状況が状況でしたので。」

あの時、それは最終決戦間際におけるセイバーを救った戦い。俺は呪いにより弱体化していたはずが、むしろ有利な状況に立っていた。呪いによる殺す力を変換させたのが理由だとは思うのだが、それ自体をどうやったからよく覚えていない。

そういえばだが、聖杯戦争が終わっているのにセイバーがいる理由を流していたな。実は衛宮と再契約した時、どうやら俺の呪文も影響したようで、戦争後もこうやって現世に残っていられるようになったとか。

「……。」

床に寝転がったままになっていると、セイバーは先のイリヤのよう

にまじまじと俺の顔を見てくる。

「何だ？イリヤもそうだったけど、俺の顔を見てきて。なんかついてるか？」

出かける前に鏡を見たがとくに変わった様子は無かったと思うが……。

「いえ、その……あそこからよく立ち直ったと思ひまして。」

——なるほど、そういう事か。

「まあな、あん時は迷惑かけたな。」

あん時、それは戦争終結直後の事だ。彼女がいなくなった事で俺は絶望の淵へと落ちていた。それはもう、誰が見ても分かるぐらいに。

遠坂からは何回背中に蹴りを入れられたか。

「そうよ。あの時は何を言っても無駄って感じで、自殺するんじゃないかっていう雰囲気だったもの。」

「イリヤスフィール。それを本人の前で口にするのは失礼ではないだろうか。」

「まあまあ、セイバー。確かにあん時は何も聞きたくないし、考えたくもないって思った。けど、自殺しようなんて思わなかった。」

彼女から貰った命だから、簡単に死んではならない、そんなことは許してはならないってな。」

彼女がいなくなった悲しみは十年前の両親が亡くなってしまった時と同等だった。心の中にまた穴が空き、そしてそれはもう一生埋まらない傷となる筈だった。

けど、立ち止まる訳にもいかなかった。ただ俺は俺自身に何故か怒りを覚えていた。またあの時と同じように、進む事を恐れて過去に縛られるだけになるのかと。

それにあの時よりは少しだけ、苦しくはなかった。あの時と同じ恐怖はある。けど、希望はある。本当に彼女と会えなくなったわけでもないし、俺には目標がある。

だからか、学校が再開する前になんとか立ち直り、そして周りから心配されながらも今日まで至る。

「でもね、私思うの。だからこそ、貴方は誰よりも人らしいって。」

「は？俺は人の子だ。それ以外の何者でもねえよ。」

「それはそれで……今伝える事じゃないわね。」

ほら、そろそろ時間じゃないの？さっさとガツコウとやらに行つて来なさい。」

「お、おい。ちよ、ちよつとま……！」

意味深な事を言いながらも、強引に俺を押しして学校へ行かせるイリヤ。何か引つかかるが、遅れたくもないので言う通りにするか。

けどな、

「押すのはやめてくれ！」

バランス崩しそうになるんだよ！

「はいはい、それじゃあいつてらっしやい。」

なんか誤魔化された気がする。

「……行つてくるよ。」

「行つてらっしやい、創太。」

外国人二人に見送られるという、普通の日本人なら滅多にない事をされながら、俺は再び通学路を歩く。そうでなくともこの家主ではないのだから、変ではある。

一体イリヤは何を言いたかつたんだろうな。

と考えながら二十分ほど歩くと、穂村原学園に到着する。そこである虎、もといある教師と会う。

「藤村先生、おはようございます。」

「おはよう、古崖くん！」

朝っぱらから元気だななあ。この藤村大河という人は。

「朝から弓道部の指導ですか？」

「そうなのよー。最近一年生の成績が良くて、それに桜ちゃんも……」
と、一話しかけたら十返つてくるというなんともめんど……失礼、

教師らしくない人だ。言い直しても失礼だった。

「……貴方も、もうすっかり立ち直ったしね。」

「先生もその事を言うんですか。」

「そんなの当然よ。あんなに落ち込んだのに。」

それはもう勘弁してくれ。

「慎二くんもね、あの頃から何かこうトゲトゲしい感じがなくなつたというか、性格は変わってないんだけど、根本が変わつたというか。」
「意外ですよ。あいつが変わるなんてあまり思いませんでしたよ。」
間桐慎二という奴はどうあつても、嫌味な奴でしかないと思つていただけ、最近柔らかくなつたのが驚きだ。

「そうよねえ。あ、そうだ。古崖くん、ちよつとお願いがあるんだけど……。」

「はい、何ですか？」

「衛宮くんは早く進路先を決めてつて言ってるんだけど、あの子中々決めなくてね。貴方からも何か言ってくれないかな？」

あいつなあ、まだ進路の紙を出してないのか。夢がアレだからつていうのもあるんだろうが。しゃあない、少し紹介してやっか。

「あら、もうこんな時間。それじゃあね、古崖くん。私は準備があるから先に行くわね。遅刻したら許さないわよ。」

嵐のような人だ。

そんな感想を残しながらも、俺もそろそろ上がるかと思ひ、校舎へ入る。まだ余裕はあるけど、無くなつてからじゃ遅いし、教室へと向かおう。

玄関で上履きに履き替え、階段を登り教室へ入る。少し時間が経ち、ホームルームの時間となり、そのまま授業を受ける。

四時限の授業を受けた後は昼食の時間となり、俺は三年から別のクラスになった衛宮に会うため、隣の教室へ行くが、映画に影響されやすい後藤くんがいるだけだった。

どうせ、生徒会室にでも行っているのだろう。しょうがない。放課後にでもまだ出向くとするか。

そう思ひながら、俺は屋上へ登り待ち合わせの人と会う。その待ち合わせの人とは

「よう、遠坂。」

「こんにちは、古崖くん。」

魔術師仲間である遠坂だった。

決して恋人同士という関係ではなく、ここ最近ではたまたま屋上で魔

術の相談をしあっている。向こうから連絡があつたり、こちらから連絡したりと。今回は俺からの相談で来てもらった。

「今日はなんだ？」

「購買の焼きそばパン。」

「へえ、それいつも完売しててなかなか買えないんだよなあ。」

「たまたま売れ残っててね。運良く買えたのよ。貴方は？」

「弁当。」

「いつも通りね。しかも、冷凍。そこから魔術で温めてるのもワンセットなんでしょ。」

さつすが、大当たり。というか、遠坂の言う通りこれがいつも通りの昼食なのだ。

「お前の焼きそばパンもあつたためやろうか？」

「ええ、よろしく。」

ラップに包まれた焼きそばパンを手渡され、弁当と一緒に魔術で温める。

「そういう多彩な魔術が使えるところ、本当に羨ましいわね。私が火の魔術でやっても、燃やしちゃうし。」

「火じゃなくて、熱でやってるんだよ。ほら、理科とかでやってんだろ？」

「ああ、試した事なかったわね。今度試してみようかしら。」

遠坂は魔術のセンスはあるが、一般教養を魔術に応用するとかっていうことはしないようだ。

「それで俺の体だけどさ。」

他愛のない話の後、俺は本題に入ろうとする。

「彼女から譲り受けた体ね。」

俺の体、それは戦争終結直後に死にかけて、今は亡き聖女^{彼女}が依り代とし、延命処置として俺に譲渡した人形だ。

ただ、彼女の場合は英霊であつたため歳は取らなかつたが、俺の魂はそうでないため、成長という機能に引っ張られ、普通に歳を取ってしまう。

「なんか、変な夢を見たり、誰とも知らない顔を思い出したり、覚えの

ない知識があつたりするんだ。」

「それ、彼女の物なんじゃないの？」

彼女？……ああ、そうか。

「十年間も依り代にしてたんだから、その名残だと思っわ。」

帰つたらアレを持ってみたり、魔術で何かしらいじれば、また出てくるんじゃない？」

遠坂の言うアレとは、この体以外に彼女が残した物、いわゆる聖遺物で彼女の最大の象徴、旗だ。

最後の最後、彼女は旗を残しこの世を去っていった。恐らくは父さんと母さんが彼女を喚ぶ為に用いた現世の物だからだろう。

「そう……かもな。いじるのは無しにしても、一度見てみるよ。」

「ええ、そうしなさい。また何か分かつたら報告する事。」

「りよーかい。」

にしても、彼女であつた名残か。嬉しいような、けどもどうにも言葉では表せない気持ちもあるような。

「……。」

「貴様は次にゲフンゲフン。どうせ、あの頃から立ち直つたなどかつて言うのか？」

「あら、良く分かつたわね。今朝にも誰か同じこと言われたかしら？」

「二回な、なんで今日に限って。」

「さあ？少なくとも口裏を合せてはないわよ。」

そりやそうだろう。こんな事でドツキリをするなんて、考えられないな。

「何にせよ、アンタが立ち直つてくれてよかつたわ。本当は一日で立ち直らせるつもりだったけど。」

「どうもお世話になりましたよ、まったく。」

ほら、温め終わったぞ。」

骨折するぐらい蹴りを入れられたのは今でも根に持ってたからな。

「ありがと。」

焼きそばパンを受け取つた遠坂はラップを外し、一口食べる。

俺もそれに続き、弁当を食べる。

「けど、そのおかげで貴方の事が少し分かったわ。」

「何だそれ。何を分かったつもりだ？」

「創太の事というよりは、創太と士郎の事。」

貴方達、似ていると思っただけど、全くの正反対なのよ。生い立ちが同じように見えるけど、感じたものは全く違う。

士郎は他人優先で、貴方は自分優先。その結果として生まれた目的が似ているってだけなのよね。」

「当たり前だ。あいつは被害者本人で、俺は被害者の関係者って言うだけで違う。」

そんなのは今更だ。

「確かにそうよね。だからか、貴方の方が人間らしいわよ。」

「それ、今朝イリヤにも言われた。そりや人の子なんだから当たり前だとか言ったら、誤魔化されてさ。」

「貴方が言ってるのはよく分からないけど、私の人間らしいっていうのは多分イリヤが言ったのと同じ意味よ。」

「聞かせてもらっても？」

「ええ。貴方、あの時顔がぐちゃぐちゃになるぐらいに泣いてたでしょ？けど、私や士郎だったらああいう事にはならないなって。」

事実、私はお父様が亡くなったとき、落ち込んだりはしたけど、アタミみたいに泣きじゃくったりはしなかったし、士郎も昔の話を聞いてたら、そんな事にはならなかったみたいだし。」

凄く不服な事を言われてる気がするんですけど。

「けど、だからこそ人間らしいのよ。そうやって感情を出し切る所が。」

「——人間らしい、か。あんまり自覚ないけど。」

遠坂の結論の後、昼休みが終わる予鈴が鳴る。いつの間にか弁当の中身は空で、遠坂ももう食べ終わっている。

「もう時間？仕方ない、行きましようか。」

「ああ、遅れたら大変だな。」

二人とも立ち上がって、屋上を後にする。

あとは午後の授業を受け、放課後になったと同時に衛宮がいる隣のクラスへと突撃する。見失ったとあれば、探す手間が増えるので、すぐさま捕まえなければならぬ。

「よう衛宮。」

だが、目的の人物はすぐに見つかった。

「創太、今日初めてだったか？」

「ああ。朝に会うつもりだったんだが、一歩遅れてな。」

「そりゃあ、悪いことしたな。」

「別に。そんでちよつと伝言があつてな。藤村先生から、進路先を早く決めろつてさ。」

この話を聞いた瞬間に、またかと耳にタコができるかのように、衛宮はうんざりする。

「お前なあ、ちゃんと進路は決めとけよ。あんな大層な夢をお持ちだから、何処へ行くかも悩むのは当然だけどさ。」

「そうなんだよなあ。」

正義の味方なんていう子供のようで、それでいて衛宮にとっては本気である夢は、そう簡単に将来設計図を書かせてはくれない。

「……。」

しかしながら、衛宮はそっちのけで俺の顔を眺める。

「待った、お前が思ってることは今日三回も言われた。」

「そうなのか？」

「ああ、そうだよ。何で今日に限って口を揃えて……」

理由が分からないという俺であったが、衛宮は思い出したかのようにある日付を口にする。

「……十月十二日。」

「は？確かに今日はその日だけど、何か関係あるか？」

「お前の誕生日でもある。」

え？……ああ、完全に頭から抜け落ちてた。

「そう言えばそうだったな。すっかり忘れて……いや、だから？」

「これは単なる推測なんだけどさ。誕生日だからその分成長した風に見えたんじゃないか？」

「たったそれだけ？」

「ああ、たったそれだけだ。」

なんか失礼かもしれないが、スツゲエ馬鹿馬鹿しい理由だ。

「……スツキリしない推測だな。」

「それぐらいしか理由が思いつかないんだから、仕方ないだろ。」

「はあー……。まあ、理由なんてどうでもいいんだけどよ。」

それよりもだ。進路先の事なだけどさ。」

他愛もない話をして、教室に誰もいなくなった頃合いを見計らい、俺は本題の方を進めようとする。

「まだ、その続きがあるのか？」

「まあな。それで少し提案なだけけど、俺の進路先に叔父が経営している貿易商の会社がある。」

魔術師が経営しているっていうわけだから、もちろん訳ありなだけどさ。」

「それを俺に紹介してくれるのか？けど、その貿易の知識なんてほとんどないし、そもそも正義の味方なんていうのに何が関係あるんだ？」

「話はここからなんだよ。」

いいか？訳ありというのは色々あつてな、紛争地域に飛び込んだり、麻薬組織を壊滅させたりと、お前の言う正義の味方らしい事をやっている。」

「本当か、それ！」

正義の味方という単語を聞いた瞬間、子供が新しいものに興味津々といったような目で俺の話に飛びつく。

「ああ、本当だ。」

「……それはありがたい話だけど、創太も行くのか？さっきそこが進路先って言ってたけど、お前は正義の味方を目指しているわけじゃないだろ。」

いやあ、それを言われると少し痛いなあ。でも、それ以外に理由はちゃんとある。

「衛宮、確かに俺は正義の味方になりたいわけじゃなかった。けどな、

ある奴からお前を任せられんだよ。」

目を閉じて瞼の裏にあいつを思い浮かべる。ふざけた事ばつか言いやがって、皮肉な奴で、それでも俺の親友で、お人好しで、正義の味方を目指していたあいつを。

「そいつ誰なんだ？」

「誰でもいいじゃないか。そんな訳だから、俺はお前がバカな事しないように見張る。それにな、」

やっぱり、正義の味方ってカッコいいよな。」

イタズラが成功した子供ののように、満面の笑みを浮かべてみせる。

ただ格好良いから、ただ自分もなりたいたいから。夢なんてそんな単純な事で決まる。だから、俺も正義の味方なんていうものになってみたくなった。

「だから、俺は俺自身が誰かを救いたいから救う。俺自身がそう思ったからな。」

まだまだ未熟なこの身だが、いつか誰もが笑っていられる世界を作れるように。

もし彼女と巡り会えた時、胸張って俺は活きているんだって言えるように。

「……分かった。それなら文句ない。」

俺たちは進み始める。果てしなく続く、理想を求めるこの道を。

設定・資料集

・登場人物

・古崖創太

今回の主人公。

身長162、体重52

誕生日は10月12日

人物

いわゆる普通の人間で、感情の起伏は人並み程度。

魔術師としての側面はなく、人情的で助けられるなら助けようとするが、死の恐怖に過敏で、それが勝ってしまった場合は動けなくなる。

少しオタク気味で、しばしばその知識が出ることも。

人を思いやって動くが、気に食わない人には従わない。主に慎二。自身の気持ちが一番優先であるため、納得できなければ突っかかるが、それ以外は関心を持たない。

士郎との差異はあくまでも他人のためではなく、根本は自分の為であるという事。

振り回す役にも振り回される役にもなる。

将来の夢がない。

実は腹が弱いくせに激辛の食べ物が好きで、それを食べた次の日に腹を壊す。

経歴

冬木生まれ、冬木育ちの魔術師の子。ただし、魔術刻印は受け継がれず、魔術師として育ててはいない。

七歳のときに両親を失い、それ以来死が関連するだけでトラウマが蘇ってしまう。

その後、九年間は魔術を教えられずにジアナ・ドラナリクと二人暮らし。あるきっかけと共に、魔術の指導を彼女に仰ぎ、聖杯戦争までの一年間を訓練に費やす。バイトで日々の生活費を稼いでいる。

能力

属性は力。ただし根源は不明。

主に変換魔術を使う。後述でも説明するが、変換魔術は物の性質を変えることができ、それを使い身体能力を一点に極限まで高めたり、魔力の属性を変換して様々な魔術を扱い、短時間ではあるものの英霊とも互角の戦いを行える。

それ故に人のお株を奪う。凜とか凜とか遠坂とか凜とか、あとキャスター。

しかし、元の魔力は凜に及ばず、士郎と同じぐらいで、さらには経験不足のため、魔術効率や戦術理解が低い。

にも関わらず聖杯の泥を制御化に置いたり、それと同時に魔術を使ったり、複数人の助力を受けた戦いであるとは言え最後はギルガメッシュを真正面から打ち破ったりと、土壇場で規格外の能力を発揮する。

魔術回路は四十二本。頭の回転が速く、力押しよりは読み合いを得意とする。というかそうしないと戦えないし、死ぬ。というか実際に死にかけて。主に聖女のせいだ。

戦術よりも戦略を好む。

使用した魔術

フォース
チェンジ
『性質、変化』

ただの詠唱。魔術を使うときの口癖。士郎のトレース・オンと対になっている。

創太の父親も使っていたが、叔父はそうではない。ジアナもたまに使うが発音が少し違う。

『魔力増幅回復装置』

魔術というより道具。

魔力を少し込めるだけで膨大な魔力に変換するというトンデモ道具。ただし、不安定なために一度使うと壊れてしまうが、死んでいない限り、どんな傷でも一瞬で癒やす。

『魔術貯蓄装置』

魔術というより道具、第二弾。

強大な魔術を連発するとすぐに創太の魔力が尽きてしまうため、その補助。使用者の意思で使用可能なので、魔力が無くとも発動でき

る。

今作では以下の魔術を使った。

逃走用目眩し魔術。いわゆる魔術版スタングレネード。

光の檻、拘束用。

重力強化。

転移魔術。

『この死は意味を成さず』

効果としては単純で対象を傷つけ、元に戻す、たったそれだけ。時間差を作ることでもできるが、この魔術でできた傷のみを回復する。

突き詰めれば生と死の等価交換も可能。

彼の使っている魔術や道具のほとんどが彼の父親が考案、作成されたものであるが、これの発案者は彼の母親である。

これでゲイボルクの因果関係をうやむやにできるかは、正直怪しい。

『深海に眠る改心の兆し』

対固有結界用固有結界。

自身の力のみで心象世界を展開できないが為に、相手の固有結界を利用して現界させる固有結界。

効果としては相手の固有結界の効果を消し去るといふもの。それ以外には全く影響は及ぼさない。なので、他の手段が使われてしまえばこの魔術だけでは対処できなくなる。

言ってしまうえば固有結界だけを使う士郎、アーチャー用で汎用性はない。更に相手が固有結界を解除してしまえば、この魔術の基盤が失われるので、強制的に解除されてしまう。

ギルガメッシュ戦でも同名の魔術を使っていたが、厳密に言えば同一ではなく、あくまでも士郎に自身の能力のヒントを与える為に同名を使っただけ。

『全てを無に帰す陣』

その名の通り、魔術を全て消し去る。宝具も例外ではなく、ギルガメッシュの『ゲートオブバビロン』をも消した。

ただし限界もあり、それは使用者に依存する。さらに発動するには

二人以上が必要。理論上は一人でも可能だが、この魔術の特性として、対象の魔術の解析、解析から基づく有効な手段への逆算、手段の実行という手順が必要であり、相手の攻撃が発動者に届く前にその工程を一瞬にして行わなければならないので、二人が最低人数。

そして、この魔術を扱うためには膨大な魔術の知識と、それらを全て行使できなければならぬ。なので、変換魔術を使う古崖家以外に扱える者はほとんどいない。

今作では、知識が豊富であるジアナが解析と逆算、魔術に比較的適性がある創太が実行の役割を担った。

余談だが、古崖の家にある魔術書にも載っており、元は『万物を死に至らしめる者』という名前だった。

それ以外の名無し魔術

担い手を選ぶ武器の偽装による使用

ランサー戦で、フラガ家しか使えないはずのフラガラックを使えた要因。使用者の魔力に似せることにより、フラガラックを騙して使用可能にする。

ジアナもこの原理でセイバーの聖剣を使用した。

関連人物

ジアナ・ドラナリク

同居人であり保護者、魔術の師匠でもある。

仲はかなり良好で、互いに信頼し合えるほど。そして互いに叱られる合う。

彼の大きな支えでもあり、両親が亡くなった時も助けられている。

衛宮士郎

友人の一人。

小学生からの仲で、よく一緒に遊んでいる。魔術師であるかもしれないとは思っていたが、あえて口にはしなかった。

一種の憧れを持つ。

セイバー

共に戦った仲間。

信頼はされている。ジアナの知り合いであるため、敵意は抱いてい

ない。

遠坂凜

仲間その二。

信用はされているものの、魔術能力に嫉妬される。彼に役割をとられた人。

アーチャー

複雑な関係。

正体が正体な為に悪くはないが良くもない。創太からは友好的だが、彼からしてみれば何とも言えない。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

何かと好かれる。

あまり敵としては見ていないからか、友好的である。その他にも理由はあるようだが……？

今作では明かされない。

間桐桜

友人の通い妻。

直接喋った事はほとんどない。

間桐慎二

うざい奴。

あまり気に食わない。

ギルガメツシュ

ある意味天敵。

臆病者と称されるが最後に魔導者と認められる。

古崖創助、白無シロナ

両親。

かなり仲が良く、それ故に失った絶望も大きい。

作者コメント

士郎と対象的に行動させるつもりが、あまり違いが無くなってしまった。聖女に育てられたのだから、その設定を活かせなかったのが

反省点

・ジアナ・ドラナリク

今作のヒロイン

身長 159センチ

体重 44キロ

真名 ジャンヌ・ダルク

人物

基本は原作と同じだが、スバル^敵タかったり、天然だったり、創太への想いが強すぎて憎しみを覚えたりと差異がいくつかある。良く言えば人間らしく、悪く言えば聖女らしからぬ性格となった。

その為、一緒に住んでいる創太が無信仰のまま育つ。

原因は大体、創太の両親。彼らには色々な意味で敵わないらしい。経歴

第四次聖杯戦争が始まる一年前に創太の両親に呼び出された。そこから現代の事を学びながら、創太の世話もすることになる。

戦争後は創太と共に生活していく。

能力

聖杯を介さず英霊の座から直接、それも無理矢理喚びだされた為に、元々は英霊やルーラーとしての情報と能力を持たなかった。彼女は自身は意志を持って応えたつもりだが、結果としてそうなった。

代わりに体が人形であり、成長という機能を施されている。さらには、それは元々とある人形師が作った不良品だったらしいが、創太の両親が手直しをして、彼女を現界させるための憑代となっている。

その為普通に生活を送る分には問題は無く、戦闘に関しても訓練によつて補っていたり、さらには人形に力の魔力が使われているせいか、古崖家特有の魔術も扱える。ただ、彼女の性格ゆえか基本は肉体で戦う。

また、擬似的ではあるが自身の宝具も使える。

しかし、成長という機能があるにも関わらず、その人形は魂の姿が見た目にそのまま反映されるので、英霊であるジャンヌは歳をとらず、いつまでも若々しい姿になる。

使用した魔術

彼女が使用する魔術のほとんどが模倣であるため、ここでは補足する魔術だけを特筆する。

『固有時制御』

衛宮切嗣が使用していたのを模倣、もといパクったもの。本来であれば、使用後に反動で抑止力による体の負担がかかってしまうが、彼女自身が英霊であり、抑止力の一端であるためにその反動を受けることなく使える。

『我が神はリユミノジテ・エネルネツレここにありて』

今作で発動したものはあくまでも擬似的な物で、彼女の宝具ではない。

そのため、性能が下がっていたりする。

反転化

聖杯に飲み込まれたことにより起きた現象。

彼女の場合、体は生身であったため聖杯による侵食はサーヴァントより遅いが、それでも魂は英霊であるため反転化してしまう。本来ならば、元は聖女であるため反転化することはないのだが、ある理由によつてそうなる。

関連人物

古崖創太

同居人で、息子や弟に近い感覚を持つ。ただし、あくまでも自身は母親ではないという一線を作っている。

共に暮らしていく内に恋人へ。

衛宮士郎

近所の子供。

創太と同じように幼い頃からの姿を見ているので、少し子供として接している部分がある。なので君付け。

遠坂凜

ジアナに役割を取られた人。

創太と同じ理由で嫉妬される。

衛宮切嗣

戦線をとみに張った仲間。

英霊であるとは知られていないため、無視はされない。むしろ、他人を救うという目的が一緒であるので共感している。ただ、過程が違うため、ぶつかる事も。

戦争後は互いに不干渉となる。

言峰綺礼

ソリの合わない聖職者。

同じ神を信仰しているが、在り方はあまり肯定できないと思っっている。その反面、慈悲もある。

ギルガメツシュ

天敵。

こちらの世界線でも道化と言われる。

藤村大河

昔からの知り合い。

士郎の保護者代わりとして、一応は顔見知り。大河が初めてジアナを見たときは年上だと思い、それ以降は先生としてじゃなくても敬語。本編開始時は若いままのジアナに嫉妬してる。

・古崖創助

創太の父親。

古崖家の長男であるが、何故か当主ではない。才能がないわけでもなく、むしろ希有なまでの才能の持ち主。

子供っぽくて明るく、アホみたいな事ばかりを考えつく。しかし、真面目な場面は真面目で、妙案も思いつくことも。

・古崖白無

創太の母親。

元は古崖家ではないが、あるきっかけから嫁入りする。天然で朗らか。いつも落ち着いており、他人に優しく、物腰も柔らかい人物。しかし、怒ると天災レベルとなり、誰も手がつけられなくなる。

世間を知らない部分があり、箱入り娘っぽい所がある。

能力はかなり高く、しかし秘密も多い。古崖の魔術というには納得がいかない部分もある。

・衛宮士郎

原作主人公

性格はほとんど変わらず、しかし能力としては投影の部分を強化された。

『カリバーン』をたった一度試しただけで完成させたり、原作では不可能とされていた『ゲイボルク』の投影を創太のサポートがあるとは言え可能にしたり、果ては乖離剣をつぎはぎながらも作り出したりと、様々なことが可能になったりしている。

ただし、これはセイバーとの特訓を削って、彼の能力を理解していたジアナの魔術講義を受けていたからであり、そのせいで身体能力が原作よりもやや低下している。

オリジナル投影品

『月夜に照らされし極致の剣』

セイバーのエクスカリバーを基盤とし、士郎の心象世界にある剣を全て集約させ投影した物。正式名称は『エクスカリバー・リミテッド／ゼロオーバー』。

この名前に関しましては、本作が連載される前からラストのシーンは考えており、士郎とオリ主が協力して固有結界を剣にして創り上げ、ギルガメッシュを打ち破る。という原案があったのですが、すでに公式で似たような設定があったのでそちらを使わせていただきました。

当時は公式にはないオリジナルだと思っていたのに……！

エクスカリバーを基盤にしたのは、士郎自身が投影だけではこの投影品を作ることとは不可能だと判断したため。

能力は、対象を斬るという剣が持つ性質を極限まで高めることにより、万物を斬るといふ物。やろうと思えばどっかの最果ての槍のように、周りには一切の被害を及ぼさず、対象だけを斬ることも可能。

・セイバー

微妙に救われないヒロイン。

今作では味方としても敵としても活躍した彼女。しかし、願いとか信念とかには全くと言っていいほど触れなかったので、精神的に救われない人。

本編終了後も現世に居座り続けるという結果なので、いつしかは自身身の納得できる答えを見つけるとは思う。

・遠坂凜

役割取られウーマン一号。

多彩な魔術を使う創太やジアナによって存在感が薄くなつてしまった人。というか、彼女が使う魔術を大体二人が使い、更にはそれ以上に種類が豊富。それを書いた後に気づく作者はクソ。

正直一番扱いに困ったキャラで、ぞんざいに扱ってしまったのは反省してます。

しかし、所々である程度活躍しているのでまだマシな方。

・アーチャー

ある意味重要人物。

士郎の未来の姿という事だが、彼の生前の世界では創太達がいなかった。なので、記憶にない創太やジアナの事を警戒していた。

途中からは善意で行動している人物だと気づく。それによりある行動を取った。というか同じ行動を取った。

真意は次回作の番外編にて。

・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン
サブヒロイン。

前半では冷酷な面を押し出す、後半はブラコンだったり、創太を気遣ったり、協力したり、ブラコンだったり、人らしい一面を見せる。

創太とは割と気が合うようで、一緒にいる場面が多い。

書いてて目覚めそうになった（震え声）。

・バーサーカー

最初の強敵。

最期の最後で覚醒し、ナインライブズを放つ。

間桐慎二

雑魚で三下でかませ犬。

原作通りに雑魚っぽい道化振りを見せるが、最後の最後は改心し、ちよつと活躍する。

ライダー

セイバーに倒されて、アサシン倒した人。

言峰綺礼

それっぽい雰囲気醸し出す人。

ランサー

創太が覚醒した後に壁として立ちはだかる敵。

葛木宗一郎

誰だっけこいつ。

キャスター

役取られウーマン二号。

転移の魔術を取られただけで済んだ人。もっと見られていたら、さらにエゲツないことをあの二人はする。

アサシン

劣化版九頭龍閃（個人的意見）。

思ったけど、どっちが強いんでしょうね、アレ。

間桐臓現

虫おじいちゃん。

ほぼほぼ出番なし。

真アサシン

何度も生き返った人。

用語集

古崖家

創太の実家。

場所は北海道で、貿易商を営んでいる。魔術師としては知名度が低く、知られていたとしても代によつて使える魔術が異なり、その為魔術刻印が受け継がれていない、という偽の情報を探まされている。

その嘘は魔術協会からの目を逃れるためであり、真実は理論上全ての魔術を行使できる能力を持っている家系である。

先祖代々古崖家の人々は必然的に魔力の属性が力となり、それを使つて魔術を行使する。

彼らは魔術師としての側面はあるものの、冷酷さは一切ない。むしろ、人間っぽく情で動くこともしばしば。

封印指定ギリギリの力を持っているが、一子相伝ではない為、執行者が来る事はまずない。しかし、それでも巨大な力を有しているので、あまり目立たないようにはしている。

変換魔術

置換魔術の上位互換と呼ばれており、その理由は魔術効率によるもの。

置換魔術は物の全てを別の物に変えるが、変換魔術は元の性質を残しつつ別の性質に変換することができ、更に一部分だけの変化なので魔力の消費を抑えられる。

本作では魔力を別の属性に変えることで、その属性に適した魔術を行使し、更に効率よく魔力を運用することができる。

他にも持久力、耐久力と言ったものを筋力、敏捷力に変えて身体能

力を底上げしている。ただし、その場合には打たれ弱くなっているの
で、一発も受けない、短期決戦で決める、などの戦略を取らなければ
ならない。しかし、場面に合わせてピーキーな能力に変える事が可能
なので、元の身体能力が低くても格上と互角に渡り合える。

属性『力』

古崖家が持つ属性。

筋力や敏捷力と言った人間が持つ身体能力はもちろんのこと、重力
や浮力と言った自然現象による力、魔力や神力といった物も含まれて
いる。さらには物が存在するための力、といった概念における力もそ
の類である。

ただし、知力やそれに関する部分は含まれておらず、頭のキレが良
くなるといった事はできない。

付け加えて、力のベクトルとかをコントロールする事は可能だが、
どっかの一方通行さんのように何でもかんでもは不可能。できたと
しても一瞬のみ。

各場面の補足

オリ主の顔面殴り

オリ主は作品を通して二回、人の顔面を殴っている。アーチャーに
一回、慎二に一回。

前者は友人として目を覚まさせるためであり、友情からの行動であ
る。後者は腹が立ってとか、気に食わないからとか、そういう風に勘
違いされやすいが、実は前者と同じ理由だったりする。

偽・VSセイバー

後の真・VSセイバーの伏線。偽があるなら真もあるよねというだ
け。